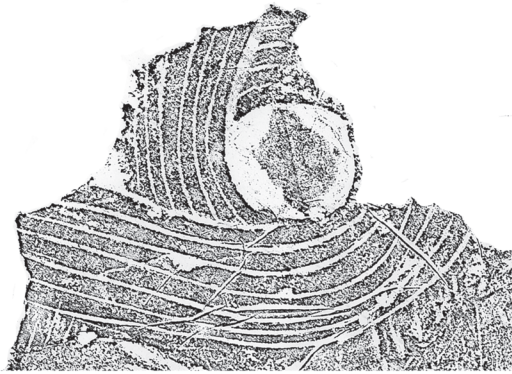


楯築墳丘墓

2021

岡山大学文明動態学研究所
岡山大学考古学研究室

楯築墳丘墓



2021

岡山大学文明動態学研究所
岡山大学考古学研究室

序 文

倉敷市楯築墳丘墓は弥生時代最大の墳墓として知られ、古墳成立過程の研究、ひいては日本列島における国家成立過程の研究で重要な役割を果たしてきたことは言うまでもありません。1976年から1989年にかけて、本学教授であった近藤義郎を中心に7回の調査が行われました。そこでは埋葬施設・立石・墳丘構造等の解明が行われただけでなく、最古級の特殊器台をはじめとする弥生時代における墳丘上祭祀の実態を明らかにしました。発掘調査成果は、弥生時代墳丘墓研究を強力に活性化し、牽引してきました。1970年代から1980年代の弥生墳丘墓研究は楯築墳丘墓を中心に推進されたと言っても過言ではありません。

楯築墳丘墓の発掘調査報告書としては、すでに近藤義郎編著『楯築弥生墳丘墓の研究』楯築刊行会が1992年に発行されています。しかしながら、同書には掲載されていない遺構と遺物も残されており、総合的な報告書の刊行が望まれていました。2015年に、本学卒業生で第4次調査の調査担当でもあった宇垣匡雅氏から、楯築墳丘墓発掘調査の再整理とその報告書発行の打診がありました。調査資料を保管する岡山大学として、より充実した報告書の発行は願ってもないことであり、宇垣氏の再整理調査に協力いたしました。出土資料の再調査から古い図面の整理まで、膨大な作業をほとんど一人で担われた宇垣氏の長年の努力が実って、本書を発行することができました。宇垣氏の献身的な努力に敬意を表するとともに、心よりお礼を申し上げます。

岡山大学は、2021年4月に文明動態学研究所を設立しました。文明動態学研究所は、現代社会が抱える様々な問題を人類の文明の消長という大きな枠組みのなかで見つめ直し、過去の探求と地域への着目から得られた新たな知で、持続可能な社会の構築に貢献することを目指しています。楯築墳丘墓は、日本列島における社会の階層化を考えるうえで鍵となる遺跡であり、この報告書は文明形成過程の研究および地域史研究に大きく寄与するものです。本研究所は、岡山大学における人文社会科学のさらなる発展を目指して設立されましたが、岡山大学考古学の先学が築き上げた実績が重要な礎となっています。そうした経緯をもつ本研究所の設立初年度に本書を発行できることは、望外の喜びとするところです。本書が、広く長く考古学および関連諸分野の研究の発展に寄与することを願ってやみません。






2021年12月1日 岡山大学文明動態学研究所
所長 松本直子

例 言

- 1 本書は、岡山大学考古学研究室が実施した楯築墳丘墓発掘調査の報告書である。
楯築墳丘墓の発掘調査報告書として近藤義郎著・編『楯築弥生墳丘墓の研究』1992年があるが、遺構・遺物を補完する必要があるため、あらためて報告書を作成した。
- 2 楯築墳丘墓は倉敷市矢部字向山826他に所在する。調査の後、史跡に指定されており、重要文化財旋帯文石が所在する。
発掘調査は1976年度から1989年度にわたって実施し、調査面積は573㎡である。調査の区割り、調査参加者等は第1章第2節に示した。
- 3 本書の作成、執筆は宇垣匡雅が行った。
第5章第4節木槨は、秋山浩三が執筆した原稿を宇垣が加筆修正したものである。また、玉類及び土製玉類は長瀬治義、サヌカイトは吉留秀敏の原稿をもとに記載した。
- 4 第5次・第6次調査は、文化庁の昭和60年度及び61年度国宝重要文化財等保存整備費補助金を受けて実施した。
- 5 遺跡・遺構の写真撮影は近藤義郎、小野昭、宇垣匡雅、新納泉が行った。遺物写真は大部分を寿福滋氏が、一部を近藤、宇垣が撮影した。
- 6 調査及び報告書作成に際して、第1章第2節に示す多くの方々、機関から助力、支援をいただいた。
- 7 本報告書に関わる出土遺物及び図面、写真等は岡山大学考古学研究室に収蔵保管している。
- 8 本報告書の刊行は、岡山大学文明動態学研究所・岡山大学考古学研究室が行った。

凡 例

- 1 本報告書に用いた高度値は標高である。調査では日本測地系を用いており、平面直角座標第V系である。平面図に用いた方位は座標北である。ただし、抄録の数値は世界測地系である。
- 2 掲載遺構及び遺物の縮尺は以下のとおりであるが、それぞれ一部に例外がある。
遺構 平面・断面：1/60 詳細平面・部分断面：1/30、1/40
遺物 土器：1/3、1/4 石製品・石器：1/3、1/4 土製品：1/2 鉄器：1/2、1/3 玉類：1/2 瓦：1/3
- 3 調査区平面図中の土坑、柱穴は、それぞれ土、Pと表記した。
本文ではB断面12層をB12層とするなど、断面を略して表記した。また、土層注記ではブロック土をBと略記した。
複数の断面を接続して表示する場合があるが、平面図には断面位置をB1、B2等と数字を付して示した。
- 4 遺構断面図のトーンは以下を示す。

 地山	 旧表土	 盛土	 石・礫	 地表
--	---	--	---	--
- 5 遺物は、土器・土製品・瓦、鉄器、玉、石製品・石器をそれぞれ通し番号とした。ただし、弧帯

文石には番号を付していない。

- 6 土器は小片からの実測のため、復元径に若干の誤差が見込まれるものが多い。
壺の頸部から外側に向かってほぼ水平に広がる部位は、器台の場合の名称に準じて受け部と呼ぶ。
また、そこから上方に伸びる部分は口縁拡張部と呼ぶ。
- 7 図5は国土地理院数値地図1/25,000、図6は1/5,000国土基本図V-OC 98 昭和38年をそれぞれ複製、加筆したものである。
- 8 中心主体詳細図中の数値は木槨縦断軸（A断面）と中央横断軸（B断面）の交点からの距離（cm）を示している。

目次

序文

例言・凡例

第1章 調査の経緯

1	調査の目的	1
2	調査の経過	1
	a 発掘調査	1
	b 整理作業	9
	c 関連調査・測量等	9
3	史跡指定等	10
4	座標	10

第2章 遺跡の位置と環境・研究の歴史

1	地理的環境	11
2	歴史的環境	13
3	遺跡の史料と以前の研究	18
4	遺跡・調査の文献	20

第3章 墳丘の構造と出土遺物

1	墳丘の現状	21
2	北斜面	23
	a 調査区と調査経過	23
	b 検出遺構	23
	c 出土遺物	31
3	北西斜面	37
	a 検出遺構	37
	b 出土遺物	41
4	西斜面	42
	a 調査区の状況と検出遺構	42
	b 出土遺物	45
5	南東斜面	46
	a 調査区の状況	46
	b 検出遺構	48
	c 出土遺物	49
6	東斜面	54
	a 調査区の状況	54
	b 出土遺物	56
7	北東突出部	57
	a 調査区の状況	57
	b 検出遺構	57
	c 遺物の出土状況	62
	d 出土遺物	62
8	南くびれ部	68
9	西くびれ部	73
	a 調査区の状況	73
	b 斜面施設	74
	c 集石	80
	d 排水溝	83
	e 出土遺物	85

10	南西突出部西側面	91
11	南西突出部東側面	93
12	南西突出部前面	93
	a 調査の経過と旧地形	93
	b 検出遺構	94
	c 出土遺物	108
13	円丘部の石材	118
	a 墳丘斜面	118
	b 墳頂平坦面	118
	c 祠使用石材	119
	d 石材の構成	122

第4章 墳頂部の施設と出土遺物

1	墳頂平坦面の遺構	123
	a 調査の経過	123
	b 円礫敷と築成	123
	c 建物1	127
	d 立石2	129
	e 立石3	129
	f 立石5	131
	g その他の立石	132
	h 大柱遺構	134
2	墳頂平坦面の遺物	136
	a 立石3周辺	136
	b 立石1北側	137
	c 立石2周辺	139
	d 土器の構成	139

第5章 埋葬施設

1	中心主体上の遺構	143
	a 円礫面	143
	b 特殊器台溜まり	143
	c 円礫堆	145
	d 円礫堆遺物の出土状況	147
	e 木柱2	150
	f 木柱3	151
2	円礫堆出土遺物	152
	a 特殊器台	152
	b 円礫堆出土土器	154
	c 人形土製品	162
	d 土製玉類	165
	e 鉄器	165
	f 弧帯文石	168
	g 種子・朱	176
	h 円礫堆出土遺物の区分	176
3	墓壇と墓壇埋土	181
	a 墓壇	181
	b 墓壇埋土	182
4	木槨	183
	a 構造と規模	183
	b 検出の過程	184
	c 木槨各部の形状	186
	d 木棺	194
5	木槨の構築	195
6	副葬品	198
	a 副葬品の出土状況	198
	b 副葬品	200
7	排水溝	202
8	第2主体	206
	a 円礫面	206
	c 出土土器	210

b 墓壙と木棺	208	d サヌカイト片	210
---------	-----	----------	-----

第6章 遺構に伴わない遺物と古墳時代以降の資料

1 表面採集遺物	215
2 楯築神社弧帯文石	216
a 形状	217
b 顔	217
c 上面	220
d 左側面	220
e 右側面	221
f 後方側面	221
g 下面	221
3 古墳時代以降の遺構と遺物	224
a 墳頂部の遺構と遺物	224
b 墳丘斜面の遺物	228
c 瓦	229

第7章 考察

1 墳形と墳丘の諸要素	231
a 墳形・墳丘の総括	231
b 墳形・墳丘の系譜と特徴	236
2 後期後葉の木槨	241
a 研究の現状	241
b 後期後葉の諸例	241
3 大柱遺構と木柱・立石	245
a 北部九州の大柱遺構	245
b 楯築墳丘墓の大柱遺構	248
c 木柱を配する埋葬	248
d 吉備内外への伝播	252
e 楯築墳丘墓の墳頂施設	252
4 使用石材の採取と搬入	255
a 遺跡周辺の地形と地質	255
b 墳丘墓の石材	255
c 使用石材	257
d 石材の選択と搬入	260
5 特殊器台の様相と製作集団	262
a 楯築墳丘墓の特殊器台	262
b 各群の関係と製作地	266
c 特殊器台の製作と搬入	269
d 楯築以降のB・D類	269
6 出土土器の様相	271
a 出土土器の型式	271
b 各器種の特徴	271
7 祭祀の過程と土器の配置	274
a 葬送儀礼の過程	274
b 墳丘上の土器	276
c 土器の構成と配置	277
8 出土弧帯文石と神社弧帯文石	281
a 諸要素の対比	281
b 諸説の検討	281
c 両者の相違	283
d 弧帯文石の性格	284
e 石材の入手	286
9 楯築墳丘墓築造の歴史的意義	287
a 墳丘墓の諸元	287
b 祭祀の形成と伝播	287

註 文献一覧 図出典	291
------------	-----

図版目次

図版1

楯築墳丘墓全景（東から1972年10月）

図版2 遠景

- 1 遺跡遠景（西から）
- 2 遺跡遠景（北西から）
- 3 楯築墳丘墓全景（上空から 上が北）

図版3 墳頂

- 1 墳頂（南西から）
- 2 墳頂の立石（南から）
- 3 立石2（北西から）

図版4 北斜面

- 1 第1列石と円礫敷（東から）
- 2 第1列石と円礫敷（北から）

図版5 北斜面

- 1 斜面立石4（西から）
- 2 土器・円礫出土状態 Aトレンチ（南から）
1次
- 3 円礫の堆積状況 Bトレンチ拡張区（西から）
5次

図版6 北斜面

- 1 調査区全景（北から）5次
- 2 墳丘内列石と円礫敷（北から）
- 3 墳丘内列石（北から）
- 4 斜面下方検出の礫（北から）

図版7 西斜面

- 1 調査区上側（西から）
- 2 円礫の堆積状況（西から）
- 3 第1列石根石（西から）
- 4 第2列石抜取跡（西から）

図版8 北東突出部

- 1 突出部南東側面 列石と円礫敷（南東から）
- 2 突出部南東側面 列石と円礫敷（北東から）

図版9 北東突出部

- 1 突出部南東側面（南から）
- 2 長頸壺130出土状況（東から）
- 3 第2列石と円礫の堆積（南東から）2次

図版10 北東突出部・西くびれ部

- 1 北東突出部北西列石抜取跡（南東から）
- 2 西くびれ部円礫敷・列石31（西上方から）
- 3 西くびれ部円礫敷・列石31（西から）

図版11 西くびれ部

- 1 排水溝と集石（南上方から）
- 2 集石と排水溝（北から）

図版12 西くびれ部

- 1 第2列石抜取跡1～4（西から）
- 2 排水溝（北から）
- 3 排水溝（西上から）

図版13 南西突出部

- 1 南西突出部（上が円丘部側）6次
- 2 突出部前面 列石と堀切状大溝（西上から）
5次

図版14 南西突出部

- 1 堀切状大溝（北上方から）
- 2 堀切状大溝（北西から）

図版15 南西突出部

- 1 堀切状大溝と列石 1区（南から）
- 2 列石 1区（上が西）
- 3 列石 1区（南西から）

図版16 南西突出部

- 1 列石 2区（南西から）
- 2 列石前側の堆積 2区（南西から）
- 3 列石前側の堆積 2区（南西から）

図版17 南西突出部

- 1 列石東端（東から）
- 2 列石東端（南から）
- 3 列石東端（上が北東）
- 4 列石前の掘込み断面（東から）

図版18 南西突出部

- 1 崩落石材・円礫の堆積 1区（南西から）
- 2 崩落石材・円礫の堆積 1区（東上から）
- 3 崩落石材・円礫の堆積 1区（南から）

図版19 南西突出部

- 1 土器の出土状況 1区（西から）
- 2 特殊壺251出土状況（東上から）
- 3 土器・円礫出土状況 3区（東から）

図版20 南西突出部

- 1 列石と崩落石材 1区（南西から）
- 2 大石・石材の崩落 5区（南西から）
- 3 列石 3区（南から）

図版21 墳頂

- 1 墳頂全景（南西から）
- 2 円礫堆上面（南西から）

図版22 墳頂

- 1 立石2基部・掘方1（東から）
- 2 墳頂円礫敷 N11（北西から）
- 3 建物1平・断面（西から）

図版23 円礫堆

- 1 円礫堆上面特殊器台溜まり（北東から）
- 2 円礫堆（北から）
- 3 円礫堆断面（北から）

図版24 木柱・大柱遺構

- 1 円礫堆南東部と木柱2（北東から）
- 2 木柱2（南東から）
- 3 木柱2（上が北西）
- 4 大柱遺構（北東から）

図版25 円礫堆・木柱

- 1 木柱3断面（北から）
- 2 人形土製品430出土状況（北から）
- 3 円礫堆断面（西から）
- 4 弧帯文石検出状況（西から）
- 5 調査風景
- 6 弧帯文石上の礫（西から）
- 7 弧帯文石（西上から）

図版26 円礫堆

- 1 円礫堆・大柱遺構（北から）
- 2 弧帯文石出土状況（南西から）

図版27 中心主体

- 1 木槨概形の検出（北から）
- 2 木槨平面および蓋（西から）

図版28 中心主体

- 1 中心主体全景（南から）
- 2 木棺・木槨（南東から）
- 3 木棺・木槨（北西から）

図版29 中心主体

- 1 棺内副葬品出土状況（上が南東）
- 2 棺内副葬品玉C群出土状況（上が北東）
- 3 木槨蓋（上が北東）
- 4 棺外副葬品出土状況（上が南東）

図版30 中心主体

- 1 木槨E断面（南東から）
- 2 木槨B2断面（東から）
- 3 木槨棧・台石1（北西から）

図版31 中心主体

- 1 木槨B2断面下部・木柱4（南東から）
- 2 木槨B1断面（北西から）
- 3 木槨A1断面～縦断面（棺と頭側小口の間）（南西から）
- 4 木槨縦断面（木棺頭部付近 図134）（南西から）
- 5 木槨縦断面（A B断面交点の頭側）（南西から）
- 6 棧断面（南西から）

図版32 中心主体

- 1 排水溝（東から）
- 2 調査風景（南から）

図版33 排水溝

- 1 排水溝（北から）
- 2 主水路（南から）
- 3 支水路（北から）
- 4 木槨小口外側（南東上方から）

図版34 第2主体・立石3

- 1 第2主体（西から）
- 2 立石3掘方と旧表土（南から）
- 3 立石3掘方断面（西から）

図版35 副葬品・土製品

- 1 玉A群・B群
- 2 土製玉類

図版36 土製品・土器

- 1 人形土製品430 前面
- 2 人形土製品430 背面
- 3 人形土製品・家形土器ほか

図版37 副葬品・土器

- 1 鉄剣
- 2 特殊壺 南西突出部前面出土
- 3 特殊壺251・小形特殊器台252
- 4 高杯371
- 5 脚付直口壺112・器台422

図版38 土器

- 1 特殊壺257
- 2 特殊壺253
- 3 特殊壺255
- 4 小形特殊器台256

図版39 土器

- 1 特殊壺251
- 2 長頸壺130
- 3 小形特殊器台252
- 4 特殊器台356

図版40 土器

特殊器台355

図版41 弧帯文石

出土弧帯文石 各面

図版42 弧帯文石

- 1 左側面～上面
- 2 足側～左側面
- 3 下面

図版43 楯築神社弧帯文石

- 1 上面
- 2 下面

- 3 前面
- 4 背面
- 5 左側面
- 6 右側面

図版44 弧帯文石・楯築神社弧帯文石

- 1 出土弧帯文石 左側面

- 2 神社弧帯文石 左側面
- 3 神社弧帯文石 顔（複製品）
- 4 神社弧帯文石 下面（複製品） 加工痕と自然面
- 5 神社弧帯文石 下面（複製品）

図目次

図1	調査区の配置	2	図37	北東突出部（2）	59
図2	調査状況説明資料	4	図38	長頸壺130出土状況	62
図3	調査の風景	8	図39	北東突出部出土遺物（1）	63
図4	遺跡の位置	11	図40	北東突出部出土遺物（2）	64
図5	周辺遺跡	12	図41	北東突出部出土遺物（3）	66
図6	西山丘陵	13	図42	北東突出部出土遺物（4）	67
図7	周辺遺跡の資料（1）	14	図43	南くびれ部上側	70
図8	周辺遺跡の資料（2）	15	図44	南くびれ部下側	71
図9	矢部大坵古墳	17	図45	南くびれ部断面	72
図10	墳丘	21	図46	南くびれ部の盛土と旧地形	73
図11	墳丘と調査区	22	図47	西くびれ部上側	75
図12	北斜面上側	24	図48	西くびれ部断面（1）	77
図13	北斜面下側	25	図49	西くびれ部断面（2）	78
図14	北斜面断面	26	図50	第2列石掘方・抜取跡	79
図15	墳丘内列石	28	図51	西くびれ部下側	80
図16	斜面下方検出の礫	30	図52	集石断面	81
図17	北斜面出土遺物（1）	32	図53	西くびれ部断面（3）	82
図18	北斜面出土遺物（2）	33	図54	西くびれ部排水溝	84
図19	北斜面出土遺物（3）	34	図55	排水溝構築過程・盛土西端部断面	85
図20	北斜面出土遺物（4）	35	図56	西くびれ部出土遺物（1）	86
図21	北斜面出土遺物（5）	36	図57	西くびれ部出土遺物（2）	87
図22	北西斜面	38	図58	西くびれ部出土遺物（3）	88
図23	北西斜面断面・石垣立面	39	図59	西くびれ部出土遺物（4）	89
図24	北西斜面出土遺物（1）	40	図60	南西突出部西側面	90
図25	北西斜面出土遺物（2）	41	図61	南西突出部西側面出土遺物	91
図26	西斜面	43	図62	南西突出部東側面	92
図27	西斜面断面	44	図63	南西突出部前面旧地形	94
図28	西斜面出土遺物	45	図64	南西突出部前面（西半）	96
図29	南東斜面（1）	46	図65	南西突出部前面（東半）	97
図30	南東斜面（2）	47	図66	南西突出部前面（東端）	98
図31	南東斜面出土遺物（1）	50	図67	堀切状大溝断面（1）	99
図32	南東斜面出土遺物（2）	51	図68	堀切状大溝断面（2）	100
図33	南東斜面出土遺物（3）	53	図69	堀切状大溝底面（1）	102
図34	東斜面	55	図70	堀切状大溝底面（2）・断面（3）	103
図35	東斜面出土遺物	56	図71	礫・土器の堆積状況（西半 3層）	104
図36	北東突出部（1）	58	図72	礫・土器の堆積状況（東半 3層）	105

図73	土器の出土状況	106	図116	人形土製品 (1)	163
図74	礫・土器の堆積状況 (東半 4層)	107	図117	人形土製品 (2)	164
図75	集石遺構	108	図118	土製玉類	166
図76	堀切状大溝出土土器 (1)	110	図119	鉄器	167
図77	堀切状大溝出土土器 (2)	111	図120	弧帯文石 (1)	170
図78	堀切状大溝出土土器 (3)	112	図121	弧帯文石 (2)	171
図79	堀切状大溝出土土器 (4)	113	図122	弧帯文石 (3)	173
図80	堀切状大溝出土土器 (5)	114	図123	弧帯文石下面	174
図81	堀切状大溝出土土器 (6)	115	図124	墓壇	177
図82	堀切状大溝出土土器 (7)	116	図125	墓壇埋土断面 (1)	178
図83	堀切状大溝出土土器 (8)	117	図126	墓壇埋土断面 (2)	179
図84	列石・列石石材の位置	119	図127	墓壇埋土の区分	182
図85	列石石材 (1)	120	図128	木槨・木棺の復元断面と各部名称	184
図86	列石石材 (2)	121	図129	木槨上部検出状況	185
図87	墳頂平坦面中央部	124	図130	木槨平面 (1)・断面	186
図88	墳頂平坦面北部	125	図131	木槨平面 (2)	188
図89	第1次調査トレンチ配置・ 墳頂南東部断面	126	図132	木柱 4	189
図90	墳頂北部～斜面断面	127	図133	木槨下部断面	190
図91	墳頂部断面・建物 1	127	図134	木槨・木棺断面	192
図92	立石 2	128	図135	木棺平面・断面	194
図93	立石 3 (1)	130	図136	棺外副葬品出土状況	196
図94	立石 3 (2)	131	図137	棺内副葬品出土状況	197
図95	立石 5	132	図138	棺外副葬品 玉A群	198
図96	立石 1	133	図139	棺内副葬品 (1) 玉B・C群	199
図97	立石 4	133	図140	棺内副葬品 (2) 鉄剣	201
図98	立石 6	134	図141	排水溝平面・断面 (1)	204
図99	大柱遺構	135	図142	排水溝断面 (2)	205
図100	立石 3 周辺の遺物	137	図143	第2主体付近円礫面	206
図101	立石 1 北側の遺物 (1)	138	図144	第2主体	207
図102	立石 1 北側の遺物 (2)	140	図145	木棺関連資料	209
図103	立石 2 周辺の遺物	140	図146	第2主体出土土器	211
図104	楯築墳丘墓復元図	142	図147	サヌカイト 第2主体出土ほか	212
図105	中心主体上の遺構・遺物	144	図148	サヌカイト 墳丘各地点出土	213
図106	特殊器台溜まりと土器片の散布	145	図149	表面採集遺物	215
図107	円礫堆・木柱 2・木柱 3	146	図150	楯築神社弧帯文石 (1)	218
図108	円礫堆の遺物分布 特殊器台・弧帯文石	148	図151	楯築神社弧帯文石 (2)	219
図109	円礫堆の遺物分布 高杯ほか	149	図152	楯築神社弧帯文石 (3)	223
図110	円礫堆上面出土特殊器台 (1)	153	図153	中世以降の遺構	225
図111	円礫堆上面出土特殊器台 (2)	155	図154	中世他の遺物 墳頂	226
図112	円礫堆出土土器 (1)	157	図155	中世他の遺物 墳丘斜面	227
図113	円礫堆出土土器 (2)	158	図156	瓦	228
図114	円礫堆出土土器 (3)	160	図157	中心主体復元案	230
図115	円礫堆出土土器 (4)	161	図158	山道の形状	231
			図159	墳丘復元図	232
			図160	墳丘立面・断面	233

図161	斜面施設模式図	235	図174	各地点での石の産状	259
図162	円丘と方丘	237	図175	立坂2号墳丘墓立石	261
図163	突出部をもつ墳丘墓	238	図176	特殊器台の構成(1)	264
図164	吉備南部弥生墳墓の列石	239	図177	特殊器台の構成(2)	265
図165	後期後葉の木槨	242	図178	特殊器台関連資料	267
図166	竪穴式石槨	243	図179	特殊器台製作地の推定	268
図167	北部九州の大柱遺構	246	図180	百間川米田遺跡出土特殊壺	269
図168	木柱の諸例(1)	250	図181	女男岩遺跡出土家形土器	273
図169	木柱の諸例(2)	251	図182	浮彫表現の弧帯文・関連資料	282
図170	墳頂諸施設の配置	253	図183	弧帯文基本図形の相違	283
図171	使用石材の形状	256	図184	弥生時代後期の顔表現	284
図172	石材の使用状況	257	図185	諸要素の導入と祭祀の伝播	289
図173	石材採取地の推定	258	図186	図版掲載遺物番号	298

表目次

表1	玉A群観察表	198	表3	使用石材の規模と重量	256
表2	玉B群観察表	200	表4	出土土器の構成	278

第1章 調査の経緯

1 調査の目的

岡山大学考古学研究室では、岡山市都月坂1号墳、同2号墓、総社市伊与部山墳墓群など、吉備地域に所在する弥生時代後期から古墳時代前期にかけての墳墓、古墳の発掘調査を継続して実施してきた。それらの調査によって前方後円墳に先行する墳墓の様相が明らかになり、また、これらに伴う特徴的な遺物である特殊器台等の研究が進められた。

1976年、楯築遺跡の発掘調査に先立って、研究を主導してきた近藤義郎は、これらのうち弥生時代後期の墳墓を墳丘墓と呼ぶことを提唱した。おもに盛土によって墓域を画し形成するものであり、立地や墳丘、墳形などの諸要素において古墳に通じる点が認められるが、一方で、その発展のうえに古墳が成立するとはみなしがたい隔たりが存在することを指摘した。それらでは中心埋葬の隔絶が進みつつあったことが確認できるが、それは首長の特別身分化、神霊化の過程であり、古墳成立をみちびく社会的、思想的基盤を形成するものと考えた。「弥生墳丘墓としては稀にみる規模の巨大さと古墳前方部に酷似する突出部その他の構造をそなえた楯築墳丘墓は、今後この問題の解明に深くかかわってくる」（近藤1977）。前方後円墳はどのように成立したのか、古墳とは何か、その研究の一環として、この遺跡の全体像を把握するために発掘調査を実施した。

2 調査の経過

a 発掘調査

発掘調査は7次にわたって実施し、それらの間に立石の実測や周辺遺跡の調査等を実施した。

第1次調査

1976年7月15日～8月1日

第1次調査は、楯築遺跡が弥生時代の墳丘墓であることを確認し、遺跡の概要を把握することを目的に実施した。それまでに特殊器台等が採集され弥生時代の巨大な墳墓であると判断されていたが、特殊器台等が墳丘に伴うことの検証、また、墳墓であれば埋葬施設の有無、墳丘の規模や構造はどのようなものかなど、数多くの課題があった。さらに、墳頂部や工事で掘削された法面に見られる円礫や、墳頂、斜面部に見られる大小の立石は類例がほとんど知られていないものであり、その性格や年代についても解明が必要であった。

調査に着手した時点では、楯築神社の境内となっている円丘部頂をのぞいてハゼの木を含む樹木が繁茂しており、それらの伐採ののち掘り下げに着手した。調査は墳丘の4ヶ所で実施した。1班は円丘部墳頂に調査区をL字形に設定して調査を進めた。墳頂平坦面には全体にわたって円礫が敷かれていることが明らかになり、さらに墳頂部の中心では円礫層が著しく厚くなること、そしてその上面では特殊器台片が土器溜まりの状態をなしていることが判明した。また、その箇所をとりまく形で墓壇とみられる掘り込みが存在することなどが明らかになった。2班は残存した北東突出部基部の中軸線よりも東側の部分を調査した。ここでは2列の列石の間に円礫敷を配した施設（円礫帯）が斜面に設けられていることが明らかになり、下側の第2列石に接した位置ではほぼ完形の長頸壺130を検出した。3班は墳丘の遺存状態が最もよいとみられた円丘部北斜面から円丘部墳頂肩部にかけて調査を行った。ここでは大形の立石をまじえた第1列石とその下方の円礫敷を検出し、北東突出部と同様の施設が設けられていると判断できたが、第2列石についてはその可能性がある1石のみで、列石をなさないこ

第1章 調査の経緯

とが課題として残った。4班は南西突出部が円丘部に接続していた箇所を調査を行い、円礫敷と第1列石抜取跡の存在を確認した。

発掘調査で検出したそれぞれの遺構には特殊器台等が伴う。円丘部中央で検出した円礫の集積は埋葬施設の陥没によって形成された可能性が考えられ、巨大な墓壇の存在とあわせて中心となる埋葬施設の存在を予想することができた。これらの成果によって、この遺跡が弥生時代の巨大な墳丘墓であることが確定した。

調査責任者 近藤義郎（岡山大学法文学部考古学研究室教授）

調査参加者 岡崎真・神谷正義・光永真一・用田政晴・桑田俊明・樋口伸子・古田春美・山野汐美・山本悦世・後藤一重・野口智子・松田順子・森原陽子・福井亮・細木啓義・秋山浩三・宇垣匡雅・瀬川拓郎・田代健二・長瀬治義・丸山英明・山口博・狐塚省蔵・（岡山大学考古学研究室）、若槻真治・野口篤郎・川原芳司・佐藤一雄・寺坂幸司（岡山大学）岩本正二・千田剛道・丸川義弘・山田猛・吉田恵二（奈良国立文化財研究所）

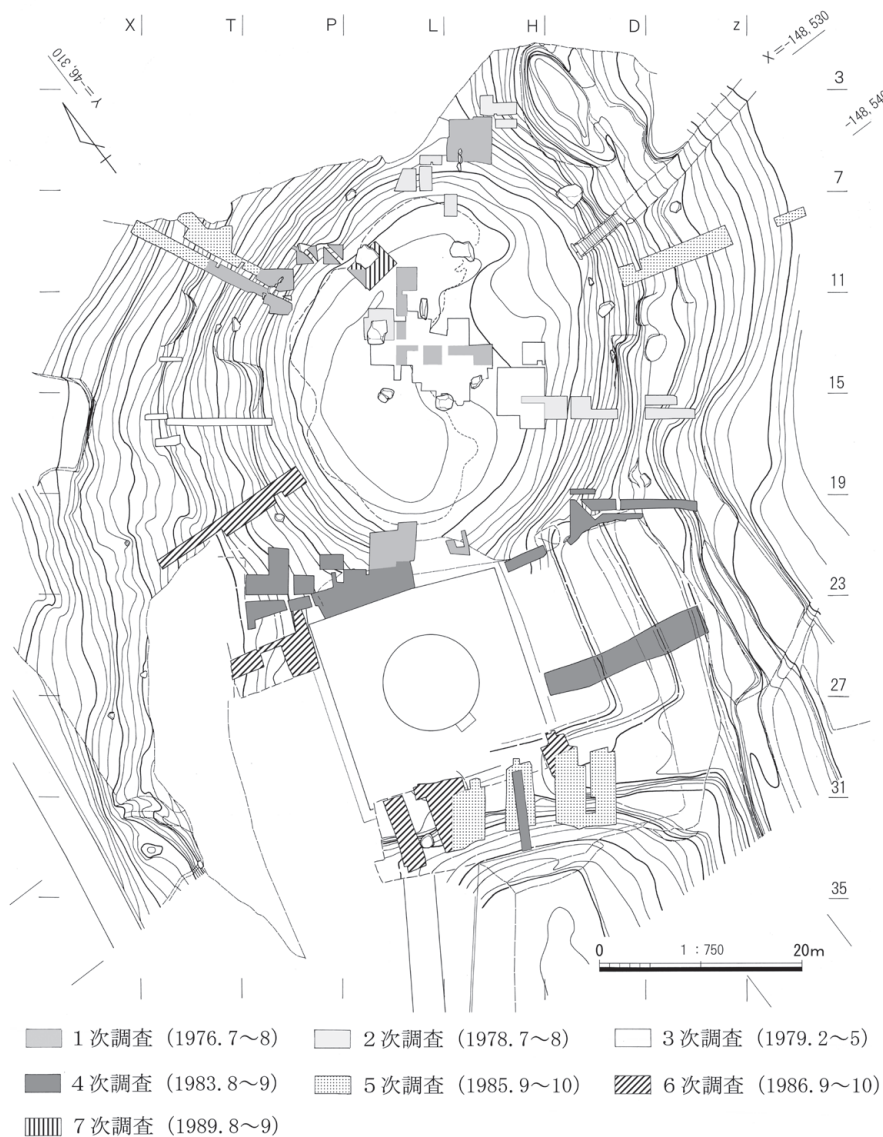


図1 調査区の配置 1 : 750

第2次調査

1978年7月17日～8月7日

円丘部墳頂に所在する立石が斜面部の第1列石を構成する斜面立石と同様に墳丘墓に伴うものかどうか、北東突出部の形状をさらに明らかにすること、円丘部斜面施設の把握、この3点を目的として3班編制で調査を実施した。

1班は墳頂平坦面に所在する立石のうち立石2と3を対象に調査を実施した。立石2では後世の改変が大きかったが、立石3では直立していた石材が傾斜して流土が入ったことが把握でき、部分的に検出した掘方と盛土との関係から立石は弥生時代の構造物であると判断できた。2班は北東突出部うち第1次調査で調査した南東側面部について調査区を拡張する形で調査するとともに、北西側面で第1列石の抜取跡を検出し、突出部の両側に同じ構造の施設が設けられていたことを把握した。3班は円丘部南東斜面を調査し、列石や円礫敷は失われていたが墳丘の築成状況や墳端位置を確認した。また、この調査では墳頂平坦面の端に近い位置で副次的な埋葬施設（第2主体）の存在を確認した。なお、調査の終盤に、第1次調査で課題が残った円丘部北斜面第2列石について補足的なトレンチ調査を行った。

調査責任者 近藤義郎（岡山大学法文学部考古学研究室教授）

調査担当者 小野昭（岡山大学法文学部考古学研究室助手）

調査参加者 用田政晴・光永真一・秋山浩三・宇垣匡雅・瀬川拓郎・田代健二・長瀬治義・荒俣一雄・池上博・亀井豊美・北岡真理・乗岡実・南堀正・山中悦雄・末永弥義・田中裕介・西川雅紀・丹羽野裕・福田輝子・吉村健（岡山大学考古学研究室）、小林令子・小若芳恵・曾根賢二・中尾文子・中野隆志・野口篤郎・森賀のぞみ（岡山大学）、佐藤弘幸・高谷光子（滋賀大学）
都出比呂志（滋賀大学教育学部助教授）、相山林継（国学院大学研究員）、岩本正二（奈良国立文化財研究所）

第3次調査

1979年2月24日～5月13日

第3次調査は円丘部中央に所在する中心主体と、南東に離れて所在する第2主体の調査を主目的に実施し、あわせて円丘部西斜面の調査を行った。以下に述べるように中心主体の調査に時間を要したため、調査期間は予定を大きく上回ることになった。

中心主体は、円礫面の全面的な検出と実測ののち掘り下げに着手した。円礫層は中央で厚みを増し、長さ4m、幅2mの深い落ち込みをなして堆積した状態にあることが判明した（円礫堆）。円礫堆には高杯等の土器や人形土製品、土製玉類、鉄器などが含まれ、上面・上層からは多量の特殊器台片が出土した。さらに3月16日には弧帯文石の破片が出土し、調査参加者を大いに驚かせた。下部に進むにつれて弧帯文石破片は多くなり、底面ではそれらの核となる石材が出土した。このことによって、注目を集めながら年代の確定が困難であった楯築神社神体の弧帯文石も弥生時代の遺物であることが確定した。

円礫堆の調査に併行して墓壇の検出、墓壇埋土の掘り下げを進め、その過程で木柱2を検出し、また、木柱3の調査を行った。円礫堆は下部の空間の崩落によって生じたと判断され、円礫堆の下に埋葬施設が所在すると見込まれたが、円礫堆下部を収める形で長さ3.7m、幅1.6mの長方形をなす施設を検出した。その内部に広がる粘土面で玉A群を検出し、その粘土面の下側で大量の朱によって形状を示す木棺を検出した。木棺には玉B群、鉄剣、小形の玉からなる玉C群等を伴う。木棺を収める施

設の構造を把握することは容易でなかったが、4月17日に木槨であることを示す明瞭な断面を確認し、以降、検討を重ねながら厚さを失い粘土化して痕跡となった木材を追求し、木槨の基礎や底板の構造を解明することができた。木槨の南側では墓壇が広がることが判明していたが、4月25日に木槨南側から墳丘外側に向かって伸びる排水溝が所在することが明らかになり、その構造、木槨との関係な

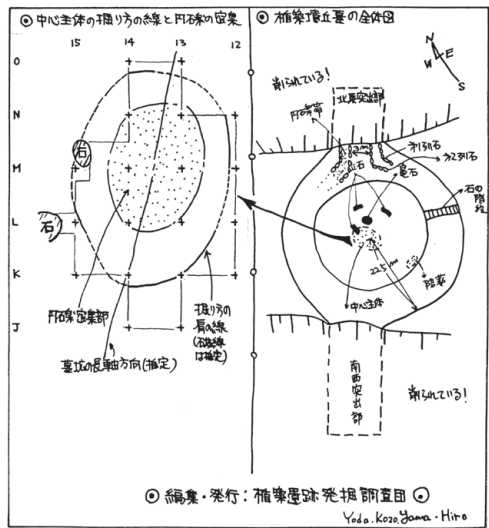
楯築Ⅲ ニュース1号 1979.3.10

■ 第3次発掘調査を始めるにきて ■
 昨年に引き続き、第3次の発掘調査を2月25日から始めました。今回の発掘の目的は、楯築墳丘墓が作られた直後の動機と考えられる埋等の構造を明らかにする事に置かれます。3年前の1976年に、部分的に明らかになっていた中心部分の埋等と、昨年一部を突き止めた「陪葬」の2つを発掘する計画です。この埋等の調査の結果と、これまでの墳丘表面の各種の調査を合わせて、楯築墳丘墓の性質をできるだけ明らかにしたいと思ひます。皆様の御協力に感謝いたします。 [近藤義郎]

■ 1-2次調査でわかった事 ■
 1次・2次の調査では以下の事がわかりました。
 1. 楯築墳丘墓は、円丘の北東部及び南西部に突出部を持つ。
 2. 円丘の規模は直径約45m、高さ約5mである。
 3. 円丘頂上の平坦部には円礫が敷き詰められている。
 4. 円丘頂上の平坦部にある巨石(立石)は土壇丘が形成された時期に立てられたと考えられる。
 5. 土壇丘の斜面には列石が2列廻りあり、その間には円礫が敷かれていた。そして、列石は突出部に向つて左右相称的に伸びていた。
 6. 埋等は中心主体と墳頂平坦部南東部の陪葬の少なくとも2つが存在する。

■ 第3次発掘の状況— 3月9日現在 — ■
 第3次発掘は埋等の状態を調査する事が主な目的ですが、現在、作業は中心主体及び「陪葬」部分の上方の円礫を完全に露出し終りました。それと平行して、墓壇の掘り方を確認する作業を行いました。その結果、次の様な事が

現在までに判明しました。
 1. 墓壇は地山から掘り込まれていて、長軸は約10mの長さを持つ。
 2. 墓壇の中心部は落ち込んどおり、そこでは円礫が30cm以上の厚さを待つ層をなしている。
 今後は、埋等全体上の円礫を取りはずし、それと同時に、掘り方内の土壁を排除し、埋等の状態を調査します。



楯築Ⅲ ニュース4号 1979.5.07

発掘も大詰めになり、12・13日に埋戻す予定になりました。これまでの掘削協力に感謝すると共に、埋戻しにも御協力をお願い申し上げます。
 さて、これまでに判明した事柄のあらましを報告いたします。すでに1・3号でお知らせしたように、今回の調査は、埋等の状態を明らかにすることに置かれました。埋等は3つ発見されました。その内2号埋等は、柴竹物木槨に収められていたもので、炭化した榎材と、わがががの葉が発見されました。これは既に埋戻しが終わりました。3号埋等は、その性質がまだよくわかりませんが、ここに少しばかりの葉が発見されました。又、右方にも、これから述べる1号(中心)埋等の南東側で発見されています。
 墳丘中心にある1号埋等は、9m×5mの大型の墓壇に収められたもので、墓壇のほぼ中心に、木槨の痕跡が発見されました。組合せ式の箱型木槨と推定されますが、構造の詳細はわかりません。しかし、榎材の上に厚く朱(酸化鉄)を置き、その上に土壁をよこたえ、さらに扉前を中心に土壁の上に土炭を敷いていたことがわかりました。扉前として、2組の首飾り、1本の剣が発見されました。首飾りは青い石で作られた管玉が大部分で、他に濃褐色のぬわの管玉が1個、黒い石で作られた石玉1個からなっています。剣のつかの付近には、小さく細い管玉とガラスの小玉が100個以上、壺状のように並べられました。剣のつかを飾ったものがそれ以外です。この槨の長さはおよそ2m、幅は約70cmです。
 さらにこの槨の外側には、槨を保護するような木組がみだり発見されました。もちろん、それは腐ってなくなっていますが、痕跡はその痕跡から、おおよそその変化がわかります。その構造のおよそを明らかにすることができました。長さは約2m、幅は約1m 50cmで、榎材より約40cmほど深いところから掘えられていました。木組の下層には、扉前とおおよしい痕跡が残っていました。このように、槨の外にも木組を設け、榎材に厚く20kgを越える朱を配り込む極めて特殊な埋等である事が判明しました。

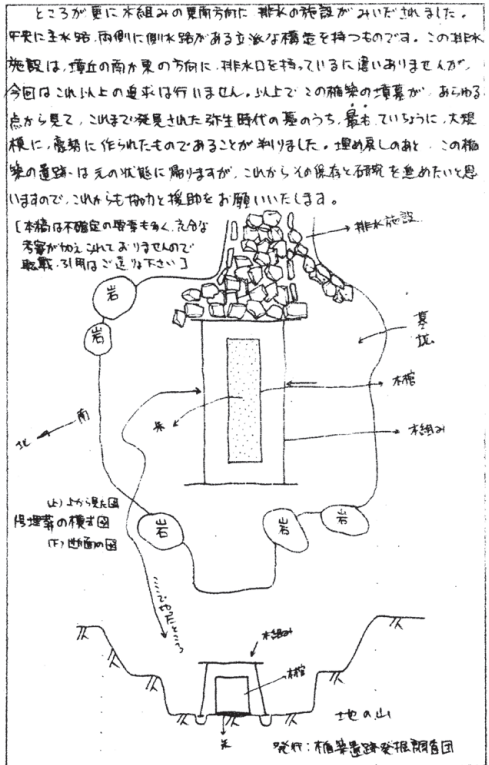


図2 調査状況説明資料

どについて調査を進めた。排水溝の調査は立石5の下方に達することになったため、立石5は調査を行い一時撤去することとした。なお、大柱遺構については表土・流土を除去した段階で柱上部を検出し、墓壇掘り下げの課程で墓壇外にのびる掘り込みを検出し調査を行ったがその性格を把握するに至らず、墓壇の掘り下げ後に掘り込み底面の位置を確認した。

第2主体の調査は、上面にひろがる円礫面の検出、実測から着手し、墓壇の検出をへて墓壇埋土の掘り下げを行った。埋葬施設は枕石を配した刳抜式木棺であることが明らかになった（3月2日～4月21日）。

円丘部北西斜面では、大形石材をまじえる石垣の存在が判明し、墳端施設の可能性が考えられたため、斜面上部から下方に所在する石垣に達するトレンチと、石垣付近に小トレンチを設けて調査を進めた。調査の結果、石垣は中世以降に設けられたものであって墳丘墓の遺構ではないことが明らかになった。トレンチの斜面上方部分では、第1列石は抜き取られていたものの、抜取穴と掘方を検出した（3月11日～4月11日）。このほか、墳丘斜面に所在する立石の実測を行った。

調査責任者 近藤義郎（岡山大学法文学部考古学研究室教授）

調査担当者 小野昭（岡山大学法文学部考古学研究室助手）

調査参加者 用田政晴・光永真一・秋山浩三・宇垣匡雅・瀬川拓郎・田代健二・長瀬治義・荒俣一雄・池上博・亀井豊美・北岡真理・乗岡実・山中悦雄・大石干城・小島日出一・末永弥義・田中裕介・丹羽野裕・福田輝子・吉村健・吉留秀敏・大久保徹也・阪本和子・関沢聡・高井健司・北條芳隆・宮原文隆・山田佳伸（岡山大学考古学研究室）、中尾文子（岡山大学）
都出比呂志（滋賀大学教育学部助教授）、梶山林継（国学院大学研究員）、岩本正二・巽淳一郎・毛利光俊彦・山田猛・吉田恵二（奈良国立文化財研究所）、安里進・石神怡・上村和弘・芝野圭之助・広瀬和雄（大阪府教育委員会）

第4次調査

1983年8月20日～9月23日

第3次調査までで楯築遺跡の性格や構造はおおむね判明したが、遺跡の範囲についてはなお不明確な箇所が残った。第4次調査は、楯築神社弧帯文石が重要文化財に指定されたことを受けて収蔵庫が新設される運びとなり、その予定地の確認と史跡指定範囲の検討のため、倉敷市教育委員会が事業主体となり、岡山大学考古学研究室が調査を実施した。

調査は、破壊された突出部のうち、南西突出部の残存状況把握を目的とし、南・西の両くびれ部、東側面、突出部前面推定位置の4ヶ所について、主にトレンチによる調査を行った。

突出部の東側面に設定したトレンチでは、造成工事によって埋没した畑を検出し、その箇所の調査を行ったが、遺構は認められなかった。南くびれ部のトレンチでは、斜面下方に達する厚い盛土層を検出し、墳丘構築にあたって大規模な造作がなされたことが判明した。西くびれ部では、第1次調査4班の調査区に接する部分から西にむかって調査区を設定した。調査範囲のうち突出部が存在し高くなる東側は工事による削平が大きく及んでいたが、第2列石の抜取穴を検出し、第1次調査の成果とあわせて西くびれ部の状況を把握できた。また、それよりも外側にあたる位置で、上部が削平されていたが南西突出部に存在した埋葬施設からのびるとみられる排水溝を検出した。さらに、くびれ部の西下方では盛土中に大量の角礫が含まれることが判明し、その性格の追求を行った。

突出部前面が遺存していることは予想していなかったが、この部分にトレンチを設けて掘り下げを行ったところ、深い位置に工事前の表土が遺存しており、さらにその下方で特殊壺などの土器片、円

礫、角礫等を含む堆積層を検出し、また、その下面は水平をなすことが明らかになった。このことから、突出部前端から前側にかけての遺構の下部が遺存していると判断できた。

調査責任者 近藤義郎（岡山大学文学部考古学研究室教授）

調査担当者 宇垣匡雅（岡山大学文学部考古学研究室助手）

福本明・鍵谷守秀（倉敷市教育委員会文化課）

調査参加者 小池幸夫・贅元洋・吉村健・家田淳一・高井健司・田中裕介・池上博・大久保徹也・北條芳隆・池橋幹・五十嵐直志・岩波忠史・杉山尚人・松田洋司・吉村昭彦・駒井正明・扇崎由・甲斐昭光・亀山行雄・森格也・保田義治・伊藤美登里・大西寿男・大橋雅也・武上弥尋・古市秀治・松岡かおり・矢田聡美・熱田貴保・荒谷由加利・大谷輝彦・小石繁・児島新子・島瀬美穂・藤原千鶴・堀江史子・安井宣也（岡山大学考古学研究室）、阿部泰久（岡山大学）

第5次調査

1985年9月30日～10月26日

文化庁の補助金を受けて倉敷市教育委員会が事業主体となり、岡山大学考古学研究室が調査を実施した。史跡指定範囲の拡大を目的とした調査であり、具体的には、第4次調査で残存が見込まれた南西突出部前面を構成する遺構の把握と、円丘部斜面のそれまでの調査で課題となった第2列石の状況、墳端施設の把握を目的に調査を進めた。

南西突出部前面については、トレンチを設けて造成工事前の堀切状地形の形状を確認した後、造成土を除去し地形測量を実施した。この面からの掘り下げにあたっては給水塔（突出部）側の掘削面が急角度になることが予想されたため、現地表下3m強まで樹脂（岩水3号とマイクロメント液）を注入・含浸させた。掘り下げは4本の広いトレンチを設けて行った。この部分には厚い堆積層があり、下部では円礫、角礫を多量に含む黒褐色土が形成されており、そこでは小形特殊器台や特殊壺からなる土器溜まりを検出した。さらに、トレンチの墳丘側、給水塔フェンスの下付近において大石を用いて構築された大規模な列石を検出した。また、突出部の前面は堀切状に掘削し墳丘を丘陵から切り離していることも明らかになった。

円丘部斜面下方の調査は、第1次調査で対象とした北斜面と、東斜面にトレンチを設定して行った。北斜面の調査は第1次調査トレンチ（Aトレンチ）の再調査からはじめ、それと平行するBトレンチを設けてさらに斜面下方までを調査した。それまで第2列石の可能性を考えた石材は列石をなすことが明らかになったが、盛土中に収まっており、第2列石そのものではないことが判明した。トレンチの斜面下方では流土下の地山面に礫が多数所在することが明らかになったが、それが遺構か地山中の礫の露出か判断が困難であった。もう一方の東斜面の調査区では、特殊器台等の土器片や円礫を含む堆積は見られたが、畑の造成による削平もあり、墳丘施設の遺構は認められなかった。

調査責任者 近藤義郎（岡山大学文学部考古学研究室教授）

調査担当者 新納泉（岡山大学文学部考古学研究室助手）

福本明・鍵谷守秀（倉敷市教育委員会文化課）

調査参加者 家田淳一・松井潔・亀山行雄・北條芳隆・扇崎由・大西寿男・大橋雅也・古市秀治・若林卓（岡山大学）、石坂俊郎（早稲田大学）、倉林真砂斗（東京大学）、黒沢浩（明治大学）、滝沢誠（筑波大学）、本間元樹（広島大学）、松木武彦（大阪大学）、岩見和泰（山形大学）、大谷晃二（島根大学）、岸本直文（京都大学）、澤田秀実（法政大学）、茂木克美（専修大学）

第6次調査

1986年9月30日～10月31日

第6次調査は先の第5次調査と同じ目的、枠組みで実施した。

この調査で課題としたのは以下のとおりである。1つは、南西突出部前面で検出した列石の端部がどのような形状をとるのかを確認することであり、あわせて丘陵を掘り切る大溝の追加調査も目的とした。第2は、南西突出部側面の調査である。第4次調査で西くびれ部では盛土中に大量の礫を配した集石を検出したが、それが突出部側面広がる状況を把握し、集石の性格を考える手がかりを得ることを目指した。第3は円丘部斜面の構造把握と、墳端施設の追求である。

南西突出部前端の列石と大溝の調査では、給水塔フェンスの内側1mまで調査が可能となったため、列石東端の調査を行うことができた。列石は緩やかな弧を描き、やや上方に向かうことが明らかになった。一方、西端については列石が調査範囲の外にさらに伸びることを確認した。また、列石上に設けられていた石垣が崩落した状況も捉えることができた。それらの検出に至る過程では第5次調査と同じく堆積した石材や円礫に混じって特殊壺や小形特殊器台の大形破片が出土した。このほか、列石の掘方や大溝底面の整地土などについても知見を得た。

西くびれ部の調査では、盛土中の礫は検出されず、集石は第4次調査の範囲に収まることが判明した。調査区では盛土が薄く広がることが明らかになり、突出部側面が広く整えられていることが判明した。

また、円丘部西斜面の調査では、第1・第2列石の抜取跡と掘方を確認した。ここでも墳端施設は検出されなかったが、これまでの調査成果とあわせ、礫などを用いた墳端施設は設けられていなかったと判断する手がかりが得られた。

調査責任者 近藤義郎（岡山大学文学部考古学研究室教授）

調査担当者 新納泉（岡山大学文学部助手）

福本明・鍵谷守秀・小野雅明（倉敷市教育委員会文化課）

調査参加者 大橋雅也・絹川一徳・古市秀治・若林卓・大谷輝彦・伊藤聖浩・柴田英樹（岡山大学）、黒沢浩（明治大学）、北條芳隆・野島永（広島大学）、澤田秀実（法政大学）、大谷晃二（島根大学）、斎田克史（国学院大学）、滝沢誠・武蔵美和（筑波大学）、岩見和泰（山形大学）、藤井美保（早稲田大学）

石坂俊郎（岡山大学埋蔵文化財調査室助手）

第7次調査

1989年8月23日～9月5日

第7次調査は、倉敷市教育委員会の委託を受けて実施した。円丘部墳頂平坦面に所在する立石のうち、大きく傾斜している立石3と立石2の据え直しに伴う調査である。立石3は第2次調査において西端部分を中心に調査したが、ここでは全体の調査を行い立石が設置された際の掘方を検出した。

調査後、両立石は安全のため基部をコンクリートで固定し、垂直に立て直した。

調査責任者 近藤義郎（岡山大学文学部考古学研究室教授）

調査担当者 福本明・鍵谷守秀・小野雅明（倉敷市教育委員会文化課）

調査参加者 大谷晃二・田中弘志・中田宗伯・粟屋聡・井上智博・光石鳴巳・安川満（岡山大学考古学研究室）

各調査の面積は抄録に示したが、墳頂部をはじめとして部分的に重複する箇所も少なくない。それらについては主となる調査の面積に計上した。

第1章 調査の経緯

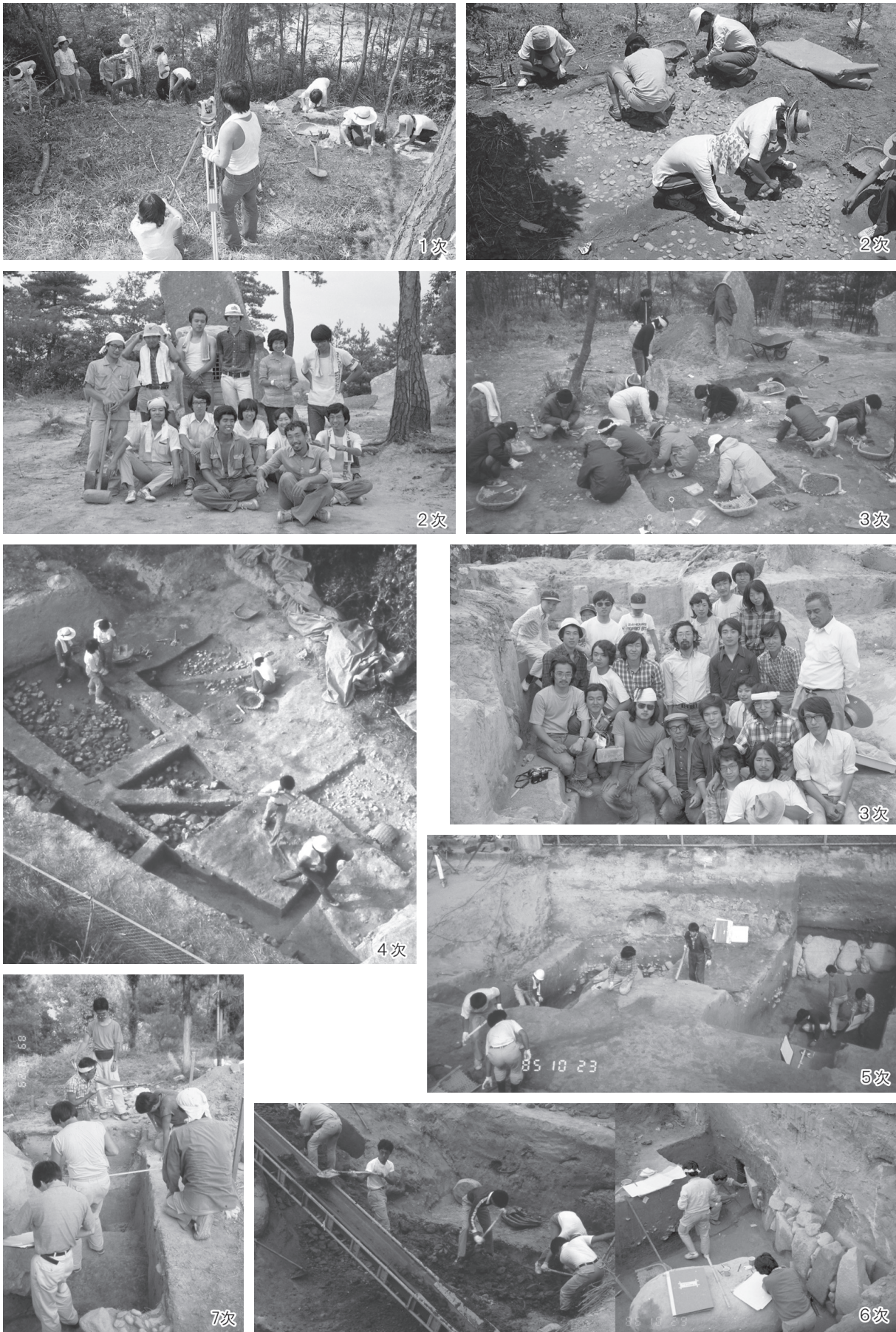


図3 調査の風景

調査の開始から終了に至る間、地元西山、矢部の皆さんをはじめとする以下の諸氏・機関、さらに多くの方々から、多大な協力や援助をいただいた。

赤木匡、赤沢万吉、楠強、綱島秀夫、矢尾孝治、吉田謙三、梶正一、三村健、白滝芳郎、神原英朗、河本清、葛原克人、中力昭、平井勝、内藤雋輔、高村継夫、脇本裕、藤井敬、黒住秀雄、吉田晶、出宮徳尚、柳瀬昭彦、鎌木義昌、高橋護、石井弘道、山田英輔、中田啓司、岡宏一、大西英一、近藤邦男、中山俊紀、甘粕健、平井泰男、末安祥二、加藤満宏、難波俊成、逢坂武雄、山本陶秀、三村京子、光野千春、村上幸雄、魚住昭、古川克行、行本章允、緒方徹、中田豊、山口松太、山口晋子、浄安寺、岡山県古代吉備文化財センター

また、第3次調査において、中心主体玉C群の取り上げについて沢田正昭氏（奈良国立文化財研究所）、歯の取り上げで宮川徳氏の指示を得た。

このほか、個別にお名前は示さないが、数日にわたって調査に参加いただいた方々もあった。また、調査中数多くの方々に来訪いただいた。いろいろな教示をいただいたというだけでなく、調査にあたる面々の励みとなった。あわせてお礼を申し上げたい。

b 整理作業

本報告書に掲載した遺物の実測は、以下の者が行った。

宇垣匡雅、秋山浩三、中尾文子、宮原文隆、古市秀治、大橋雅也、柴田英樹、田代健二、乗岡実、山中悦雄、近藤義郎、長瀬治義、吉留秀敏、山本悦世、平井典子、松田順子、山野汐美、用田政晴、吉村健、福井亮、樋口伸子、荒俣一雄、神谷正義、亀山行雄、細木啓義、岡崎真、後藤一重、大久保徹也、高井健司、丹羽野裕、福田輝子、後藤多恵子

玉類・土製玉類は長瀬治義、サヌカイトは吉留秀敏、人形土製品は山本悦世、円礫堆出土鉄器は平井典子による観察、作図である。また、円礫堆遺物分布図の作成は丹羽野裕、福田輝子が行った。墳丘測量図は北條芳隆の製図に加筆した。

円礫堆出土弧帯文石、楯築神社弧帯文石の作図にあたっては新納泉、四田寛人両氏から多大な協力を得た。このほか、報告書の作成に際して、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、岡山県古代吉備文化財センター、岡山県立博物館から助力を得た。

c 関連調査・測量等

発掘調査は以上の7次であるが、それ以外に以下の調査を実施した。参加者は特記以外岡山大学考古学研究研究室専攻生などである。また、下記のほかに期間を定めず周辺遺跡の分布調査を実施した。

墳丘測量 1973年10月3日～10月7日

突出部の破壊後、円丘部の測量を実施

近藤義郎、春成秀爾、小野昭、岩本正二、狐塚省蔵、国末和江、安川豊史、近藤耕一、石橋正樹、百瀬長秀

立坂2号墳丘墓立石実測 1980年5月25日

関連遺跡調査として実施（図175）

田代健二、秋山浩三、丹羽野裕、福田輝子、山中悦雄

矢部大塚古墳の測量調査 1980年10月6日～15日

周辺遺跡調査の一環として実施（図9）。

宇垣匡雅、秋山浩三、中尾文子、長瀬治義、乗岡実、山中悦雄、丹羽野裕、福田輝子、高井健司、大久保徹也、北條芳隆、宮原文隆、阪本和子、用田政晴、椎山陽子

気球カメラによる空撮 1982年3月16日

清水雅男（北海道大学）、石橋孝夫（北海道石狩町教育委員会）、近藤義郎、秋山浩三、乗岡実
墳丘・周辺部の測量 1982年2月24日～28日

1973年に円丘部の測量がなされていたが、円丘部斜面下方の誤差を修正するとともに周辺地形について測量を実施した。

立石の実測 1988年11月5・6日

斜面の立石、石祠の石材、墳頂に所在する石材の実測。

田中弘志、富田和気夫、大谷晃二、内山敏行、伊藤聖浩、萩能幸、井上智博、安川満、中田宗伯、氏平昭則

3 史跡指定等

史跡 楯築遺跡 1981年12月9日指定

重要文化財 旋帯文石 1982年6月5日指定

これに伴い、楯築神社弧帯文石は立石1の前側に設けられた石組みの祠から、新たに設けられた収蔵施設に移された。

4 座標

墳丘 北東、南西の両突出部が削平されたため、円丘部に残された掘削法面などをもとに北東－南西方向の軸線を設定し、これに平行するラインに南東を起点としてAからZを配した。Aよりも南東はy、z等である。これに直交するラインには北東から南西にむかって数字を1から順に割り振った。これらによって形成されるグリッドは2.5×2.5mである。個別のグリッドは、西側の軸線の交点を呼び名とし、M14、N15等とする。調査区は基本的にこれに沿うこととしたが、円丘部斜面などでは斜交するものも多い。グリッド軸線のうち数字を配した北西－南東の軸線は、日本測地系座標北に対して52°45′33.39″西に振っている。

中心主体 主軸は南東－北西方向である。調査主軸はA断面、それに直交するラインがB断面である。両者の交点はM14グリッドにあり、M14から13方向へ130cm、L方向に64cmの位置である。A断面（調査主軸）はグリッドの数字軸線に対して11°27′31.5″東に振っており、座標北に対しては41°18′01.9″西に振る。

第2章 遺跡の位置と環境・研究の歴史

1 地理的環境

遺跡の所在地は岡山県倉敷市矢部字向山および日畑字西山であり、岡山県南部のほぼ中央に位置する。旧国では備中、その東南部にあたり、備前との境に近い。

岡山市の中心から西に8 km、倉敷市街からは北東9 kmに位置する。遺跡の北東から西にかけて山陽自動車道がカーブしながら伸び、その中ほどで鳥取県米子市に至る岡山自動車道が接続する。また、南には山陽新幹線と山陽本線が東西に伸びる。かつては水田を中心とした田園地帯であったが、現在は市街地近郊のベッドタウンも形成されている。

現在、遺跡から瀬戸内海の海岸は遠いが、これは近世以降の干拓によるものであり、古代までは内海が深く入り込んでいて、海岸線は図5の下部、遺跡の南2.5km付近に位置していた。海岸の向かいには東西に長くのびる早島が所在するため、図5では薄く表示したが海は東西に伸びる狭い水道をなす。

海岸線から狭まりながら帯状に続く平野の幅は、遺跡付近で東西2.6kmを測る。平野の北西では1.4 kmに狭まるが、そこから総社市域の平野に続いており、東側も丘陵間の平地を介して一宮砂川流域の小平野に接続する。平野の中央には中規模河川である足守川が南流しており、現在の位置とは異なって平野の中で網状をなす旧河道を航空写真の畦畔などから読み取ることができる。田面の標高は平野南端の下庄遺跡で1.2m、北の津寺遺跡で5.0m前後である。

平野の周囲には大小の丘陵が所在する。東には吉備中山（162m）が所在し、この山を南北に備中と備前の国境が通る。北側には大平山（192m）、龍王山（287m）など200から300mの丘陵が広がる。西には江田山、仕手倉山など220m前後の山々が連なるが、それらの東および北側裾、楯築墳丘墓付近から北西にかけては西山丘陵、矢部丘陵、黒住山、三須丘陵など標高40～90mの低い丘陵が広がる。砂質岩・泥質岩からなる箇所もあるが、この地域の丘陵を形成するのは花崗閃緑岩や花崗岩である。それらは風化が進み風化土（マサ土）となっており、丸みのある巨石・コアストーンが露出する箇所も少なくない。なお、この付近の地質については第7章第4節で述べる。

遺跡が所在する西山丘陵¹⁾は足守川の西岸に所在する南北1.1kmの丘陵で、平野に大きく突出した形となる。団地造成のため地形は大きく失われているが、北から楯築山、王墓山、真宮山、そしてそれらから伸びる尾根からなる。3つの山のうち標高46.6mの楯築山（片岡山）が最も高く、楯築墳丘



図4 遺跡の位置



- | | | | | |
|-----------|---------------------------|-------------|-----------------|-----------|
| 1 桶築墳丘墓 | 2 浄安寺裏山遺跡 | 3 法伝山古墳 | 4 王墓山古墳 | 5 女男岩遺跡 |
| 6 辻山田遺跡 | 7 桶築山西麓遺跡 | 8 矢部A古墳群 | 9 日差山遺跡 | 10 矢部大坩古墳 |
| 11 矢部B古墳群 | 12 矢部丘陵遺跡群 (矢部堀越遺跡～妙見池遺跡) | 13 南代防古墳 | | |
| 14 郷境墳墓群 | 15 鯉喰神社墳丘墓 | 16 矢部南向遺跡 | 17 加茂B遺跡 | 18 加茂A遺跡 |
| 19 黒住山遺跡 | 20 造山古墳 | 21 雲山鳥打墳丘墓群 | 22 甫崎天神山遺跡・同古墳群 | |
| 23 津寺遺跡 | 24 高塚遺跡 | 25 加茂政所遺跡 | 26 中山茶臼山古墳 | 27 矢藤治山古墳 |
| 28 川入遺跡 | 29 新邸遺跡 | 30 岩倉遺跡 | 31 上東遺跡 | (■は弥生墳墓) |
- (地図の薄い部分は当時の推定海域)

図5 周辺遺跡 1 : 36,000



図6 西山丘陵 1:10,000 (番号は図5と同じ)

墓はこの山の頂部に築かれている。なお、図6では楯築神社は北西に下がった位置に表示されているが、地図の誤記である。

2 歴史的環境

集落 旧石器・縄文時代の遺跡は少ないが、これは岡山県南部、広くは瀬戸内海沿岸に共通する特徴である。遺跡の西1.1kmに位置する矢部貝塚は、縄文時代中期後半を中心に形成された貝塚である。貝層の大部分がヤマトシジミで、ハイガイ・カキが混じり、縄文時代には内海がさらに深く入っていたことを示している。このほか、西尾貝塚、甫崎天神山遺跡など、中期あるいは後期の遺跡が点在するが、いずれも遺跡の規模は小さい。

続く弥生時代には集落は沖積平野の微高地を中心に展開する。前期の遺跡として、岩倉遺跡(図5-30)、川入遺跡(28)などが知られている。遺跡数はかなりあるが、大規模なものはない。続く中期の前葉・中葉では高田遺跡、新邸遺跡(29)、加茂政所遺跡(25)などが知られる。

この地域の一つの画期となるのが中期後葉である。この時期、津寺遺跡(23)など沖積平野にも集落は形成されるが、黒住山東麓から江田山東麓の矢部丘陵にかけては、山陽自動車道建設に伴う発掘調査によって後池内遺跡、前内池遺跡、矢部堀越遺跡、矢部奥田遺跡、矢部大塊遺跡、矢部B古墳群と、この時期の遺跡が連なるように所在することが明らかになっており、さらにその近くには妙見池遺跡や散布地が所在する(12)(図7-1~5)。高速道路の路線幅であるため必ずしも集落全体が含

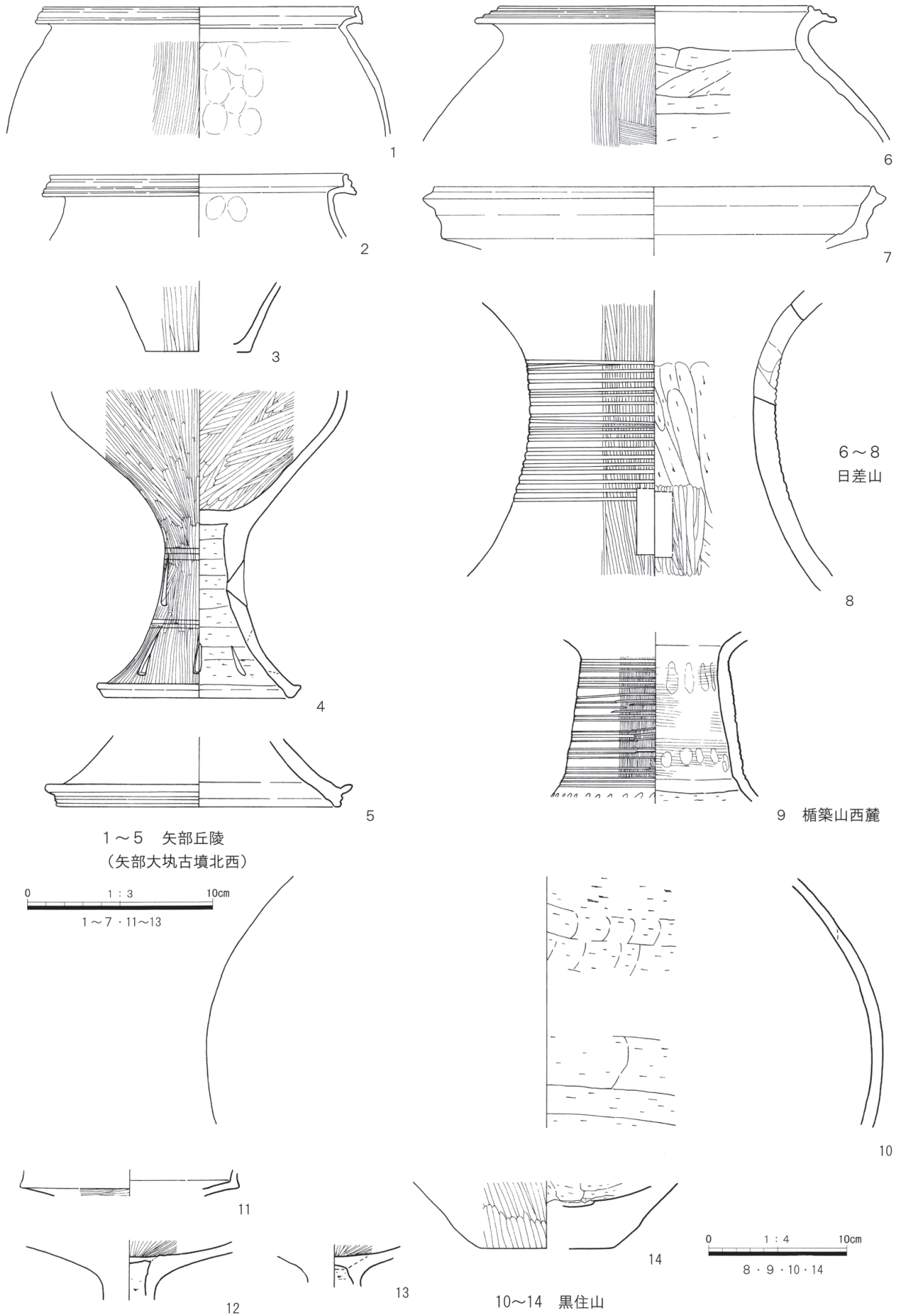


図7 周辺遺跡の資料(1) 1:3、1:4

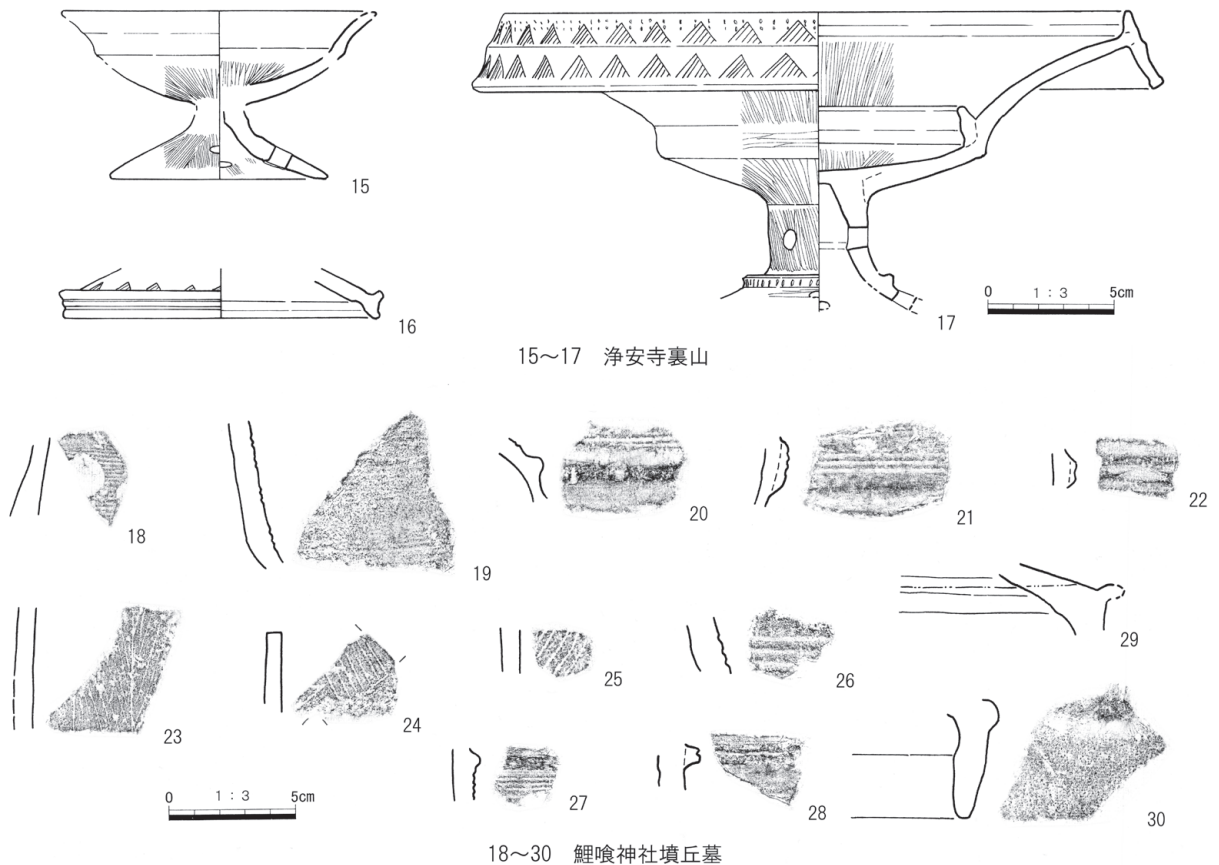


図8 周辺遺跡の資料(2) 1:3

まれるわけではないが、矢部堀越遺跡の18棟が最も多く、以下は8棟から数棟が該期の竪穴建物の検出数であり中小の集落といえるが、それらが高い密度で集中しており、備中南部の拠点的な集落が形成されたと考えている(宇垣1999)。これは中期後葉に限った形成で、後期には継続しない。

後期には、これらにかわって沖積平野の微高地に大規模な集落遺跡が形成される。その主なものに上東遺跡(31)、川入遺跡、矢部南向遺跡(16)、加茂A遺跡(18)、同B遺跡(17)、津寺遺跡、加茂政所遺跡、高塚遺跡(24)などがあり、瀬戸内海沿岸でも有数の遺跡集中地を形成する。これらの遺跡からは大量の遺物が出土しており、貨泉、銅釧、倣製鏡など他地域から搬入された遺物を含む。上東遺跡では製塩炉が検出されており他の集落遺跡でも製塩土器が見られ、農業以外の生産も活発になされている。また、上東遺跡の南端では「波止場状遺構」が検出されている。遺構の機能については検討が必要であるが、後期の前半に巨大な構造物の構築が可能となっていたことがわかる。こうした大規模な集落のほか、楯築山西麓遺跡(7)(図7-9)のような小規模な遺跡、丘陵上の日差山遺跡(9)(図7-6~8)なども知られる。

遺跡によって盛衰はあるが、この状況は弥生時代末(庄内式並行期)から古墳時代前期に至っても変わらず、津寺遺跡や津寺三本木遺跡、加茂A遺跡、同B遺跡などにおいては集落の形成が続き、竪穴建物が著しく密集、重複した状態で検出されている。これらのうち津寺遺跡では南北21m以上の方形をなす柵で囲まれた布掘建物が検出されており首長居館等とみなすことができる。また、これらの遺跡には讃岐、山陰、河内など遠隔地の土器が多量に搬入されており、他地域との活発な交流がなされたことがわかる。

こうした状況は古墳時代中期には一変し、高塚遺跡など一部では中期の遺構が見られるものの、他

の多くの遺跡ではその時期の遺構は見られなくなり、集落のあり方に変化を生じたと考えられる。津寺遺跡においては古墳時代後期に集落が再び展開することが明らかになっているが、総じてこの時期以降は、集落の姿は不明瞭になっていく。また、津寺遺跡では大量の杭と横木を用いた延長90mに及ぶ堤が7世紀に設けられたことが明らかになっている。

弥生時代の墓 弥生時代の墓のうち、前期・中期についてはこの平野では資料がないが、吉備の他遺跡の事例から、集落域の縁辺に営まれていたとみられる。墓の様相が判明するのは後期からで、後期前半の資料として甫崎天神山遺跡(22)がある。後期に入ると墓は集落から分離し丘陵上に設けられるが、まさにそうした立地である。甫崎天神山遺跡は墓群の形成が後期前葉にはじまり、丘陵上で位置を移しながら後期末葉まで継続する。総数58基の木棺墓群として検出されており、墳丘の有無については削平や流出のため不明であるが木棺の配置から小規模な方形の墳丘を伴っていた可能性が考えられる。これに似た墓群形成を示すものとして総社平野に面する前山遺跡がある。後期後葉でも楯築墳丘墓よりも早い時期を中心とする黒住山遺跡(19)では、土器棺片(図7-10・14 同一個体)のほか朱が著しく付着した高杯(図7-12)が採集されている。

楯築墳丘墓と同じ西山丘陵の尾根先端部に位置する浄安寺裏山遺跡(2)からは図8-15~17に示す装飾高杯や高杯が出土しており、楯築墳丘墓と同時期の墳墓遺跡とみられる。図示した資料は第3次調査時に工事掘削法面で検出したものである。

後期後葉以降、明瞭かつ大規模な墳丘をもつ墓が築かれるようになり、その代表が楯築墳丘墓(1)である。楯築墳丘墓に続いて末葉に築かれる大形の墳丘墓が鯉喰神社墳丘墓(方40m)(15)である。埋葬施設は竪穴式石槨などの可能性があり、特殊器台(図8-18・19、23~30)、特殊壺(同20~22)、高杯や脚付直口壺などが採集されている。23は分割型の文様帯片である。また、この墳丘墓の特筆すべき遺物として弧帯文石がある(平野・岸本2000)。雲山鳥打1号墳丘墓(方20m)・2号墳丘墓(円20m)・3号墳丘墓(方15m)(21)は、後期後葉に形成される墳丘墓群である。埋葬施設には木槨が用いられ、特殊器台、家形土器、鳥形土器などが出土している。雲山鳥打墳丘墓群や楯築墳丘墓では墳丘の周囲に木棺墓群は形成されず、墳丘墓のみが築かれている。

楯築墳丘墓と同じ西山丘陵に所在する女男岩遺跡(5)では、畑による削平のため墳形が不明であるが、長さ約20mの墳丘墓が検出されており、高杯等の土器のほか特殊壺や家形土器が出土している。ここでは墳丘墓に近接して木棺墓群が所在する。また、同じく西山丘陵に所在する辻山田遺跡(6)も削平が大きい。後期末葉から古墳時代前期にかけての墳墓群で、小形特殊器台をはじめとする土器が出土している。

これら以外に、平野北側の丘陵には生石神社遺跡、八幡山遺跡など、特殊器台や小形特殊器台が出土した遺跡が知られている。後期後葉以降、つまり楯築墳丘墓築造以後、墳墓の築造が盛行し平野をとりまく丘陵に多数の墳墓が築かれる。

弥生時代末から古墳時代前期初頭にかけての小規模な墳墓の築造も、この地域に特徴である。尾根の切断ないし斜面上方側からコ字形に溝を設けることによって、長さ10m前後の方形の墳丘を形成する。埋葬施設は1、2基で箱形木棺であることが多く、土器棺を伴うこともある。この種の墳墓の例として、甫崎天神山古墳群の一部、郷境墳墓群(14)、矢部B古墳群(11)、矢部A古墳群(8)、上記の辻山田遺跡などがある。10基程度の群を形成するようで、累代の墳墓というよりも比較的短い時期幅で築造がなされた墓群である。これらでは、以前にくらべて伴出する土器の量が激減し、甕の存在が目立つようになる。後の小古墳との関係について検討が必要であるが、他地域で古墳時代初頭に出現する方形周溝墓群との類似を考えることができる。

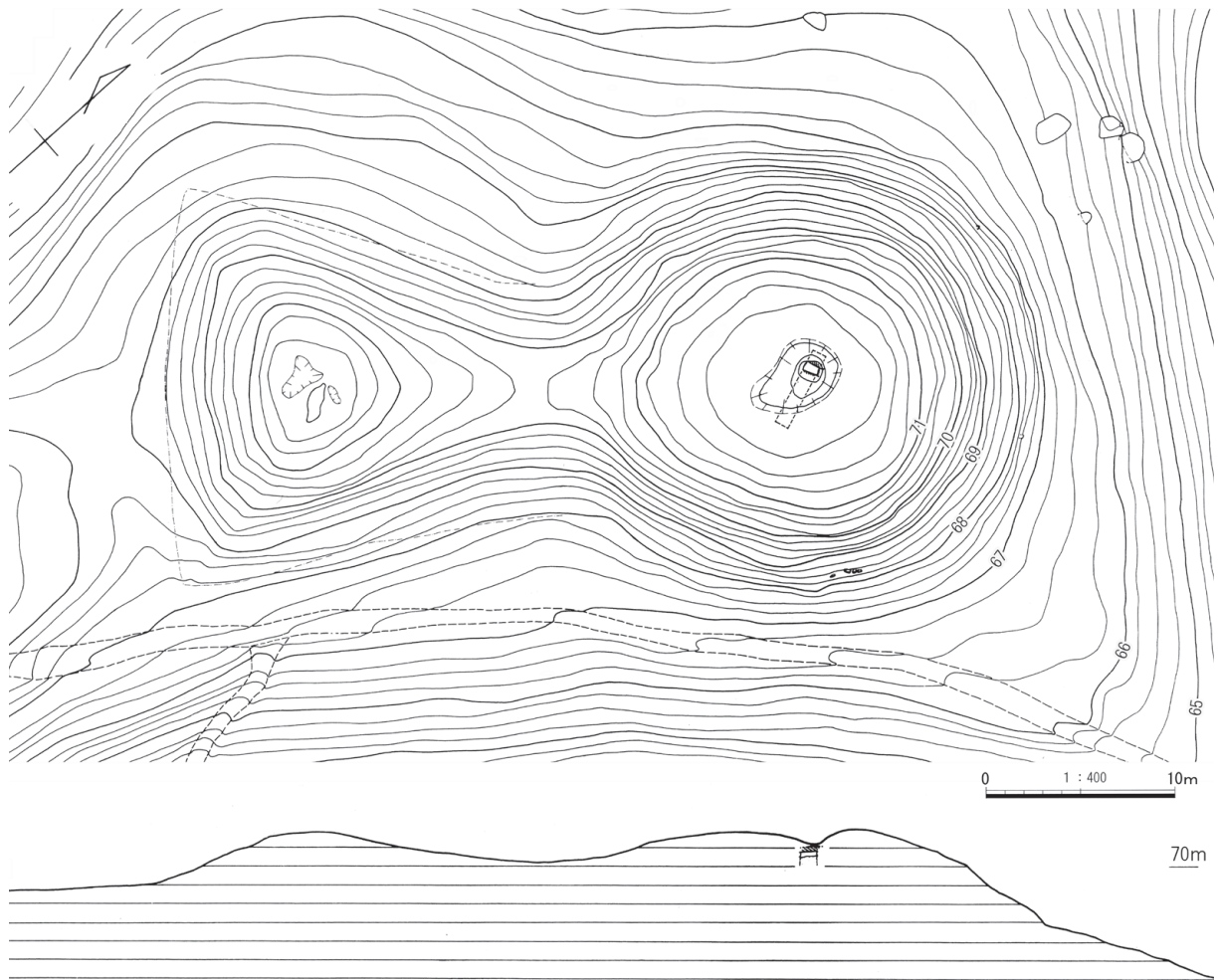


図9 矢部大塚古墳 1 : 400

古墳 古墳時代には、まず、東の吉備中山に矢藤治山古墳（前方後円36m）（27）、続いて西の矢部丘陵に矢部大塚古墳（前方後円47m）（10）（図9）が築かれる。矢部大塚古墳はバチ形の前部をもち、後円部径25.5m、同高さ4.8m、南北方向の竪穴式石槨を設ける。2段築成と推定でき後円部斜面下方で葺石の一部が列石状に見られる。特殊器台形埴輪を伴う可能性が強い。この築造ののち、中山茶臼山古墳（前方後円105m）（26）が築かれる。また、平野北側の丘陵上では上土田1号墳など全長30m弱の前方後方墳が築かれる。前方後円墳、前方後方墳の築造がなされるとはいえ、同時期の備前地域でなされる浦間茶臼山古墳（前方後円138m）や網浜茶臼山古墳（前方後円92m）、備前車塚古墳（前方後方48m）などの築造にくらべると、墳丘規模、築造数ともに劣勢である。

大形墳は中山茶臼山古墳の後、4期の尾上車山古墳（前方後円122m）まで築造がなされず、3期の古墳が認められない。

中期の6期にいたると備前地域では前方後円墳の築造が停止状態となるのに対し、この地域では平野の北西端ともいえる場所に造山古墳（前方後円350m）（20）の築造がなされ、続いて総社平野に作山古墳（前方後円282m）が築かれる。この2基の巨大古墳の周辺には、南代防古墳（前方後円約40m）（13）、小造山古墳（前方後円146m）や宿寺山古墳（前方後円116m）など、造山古墳に前後する時期の大形前方後円墳や中小の方・円墳が築かれ、大規模な古墳群（造山・作山古墳群）を形成する。西山丘陵においてもその時期には法伝山古墳（方40m）（3）をはじめ、削平された小規模墳とみられる西の平古墳、後期の半俵3号墳周濠に流入した円筒棺を含む埴輪資料などがあり、広い意味で造

山・作山古墳群の東縁を形成するといえる。中期末8期の夫婦塚古墳（帆立貝43m）の築造をもって造山・作山古墳群の築造は停止するが、10期以降その地で再び古墳の築造が活発となる。こうもり塚古墳（前方後円100m）の築造がなされ、以降も江崎古墳（前方後円45m）、新池大塚古墳（円18m）など巨石墳が集中して築かれており、首長の墓域に選地されたとしてよい。

後期の群集墳の築造はこの地域を含む吉備南部全体で活発であり、平野をとりまく丘陵には横穴式石室墳が多数築かれる。上記の造山・作山古墳群が営まれた地域では、巨石墳のほかに群集墳も数多く築かれる。西山丘陵でも築造は多く、家形石棺をもつ王墓山古墳（円か25mか）（4）以下、60基以上の横穴式石室墳が築造されている。

古代以降 古代には山陽道がこの平野の北部を東西に通過しており、鯉喰神社墳丘墓の近くに所在する矢部遺跡は津岨駅家跡と推定されている。山陽道は時代によって位置が変化するが、この付近では近世山陽道は古代のそれとほぼ同じ位置にある。丘陵の位置や平野の形状などの関係で、経路はほとんど動かなかつたとみられる。

西山丘陵の東麓に日畑廃寺、さらにその東には惣爪廃寺が造営されるなど、古代寺院の分布は密で、さらにその瓦を生産した二子御堂奥窯跡も知られている。また、津寺遺跡では南北124mの長方形をなす区画を設け、掘立柱建物を整然と配した官衙が検出されている。

中世の集落や墓は、三手遺跡や津寺遺跡など多くの遺跡で検出されている。

戦国時代には備中においても争乱が繰り返されるが、最終的に備中は毛利氏が支配することとなり、備前は毛利氏から離反し織田氏と結んだ宇喜多氏が領有することになる。西国の攻略を進める織田方の羽柴秀吉が宇喜多氏を傘下に加えて天正10年に備中に侵攻し、平野北側の山に本陣を置く。これに対して毛利方では、備中高松城をはじめ加茂城、日畑城など境目七城と呼ばれる城郭を足守川にそって南北に配し、備えを固めていたが、それらのうち北部の城は激戦の末に落城、あるいは開城する。楯築墳丘墓の東に所在する日畑城も内応によって一度は落城し、北に位置する加茂城も一時は城内での戦闘に至る。要となる備中高松城は水攻めを受け、小早川隆景以下の毛利勢は足守川西岸の日差山等に拠って羽柴勢と対峙することになる。そして、本能寺の変、備中高松城の開城と秀吉の中国大返しは、よく知られるところである。

3 遺跡の史料と以前の研究

墳頂部に立石を配した楯築遺跡の特異な景観は、早くから人々の注目を集めてきた。古くは、立石を石の楯とみなし、孝霊天皇の皇子五十狹芹彦命、のちの吉備津彦命が、この地を荒らす鬼（温羅）と戦いそれを退治した際の陣とされ、近代にいたって遺跡としての解釈が試みられる。そして、1970年代に弥生時代の墓と判断され、発掘調査の結果、最大級の弥生時代の墳丘墓であることが明らかになる。以下では、楯築遺跡が過去の人たちにどのように理解されてきたかを概観する。

近世 楯築遺跡についての最も古い記録は、地名のみの記載であるが、戦国を生きた武将、中島大炊助元行によって元和元（1615）年に記された『中国兵乱記』（加原1987）である。羽柴秀吉による備中侵攻が確実な情勢となるなか、この地を領していた毛利氏は備中高松城をはじめとする境目の諸城を整え対戦の際の布陣を策定する。足守川西側の丘陵に抛り山陽道をはさむ形で南北に展開するものであるが、その予定位置の一つが楯山であり、この地名は遺跡の立石がすでに楯とみなされていたことを示すと考えられる。天正10年の3月にはじまる戦いにおいては、楯山には上原元祐が布陣するが、遺跡に陣城の構築などの痕跡は認められず、また、軍記の内容からみて、軍勢の配置は遺跡よりも北東、楯築山の備中高松城に面した尾根ではなかつたかと思われる。

温羅退治説話は中世後半に成立したと考えられている（中山2013）。上記とほぼ同じ年代の『吉備津宮修造勸進帳』（天正11（1583）年）（藤井・水野1955）では、吉備津彦の敵である鬼は「加陽郡登高山、拳磐石壘構城^(ツツ)榑築」とされ、これに先行するとみられる『鬼城縁起』でも同様に古代山城鬼城山（鬼ノ城）が鬼の築いた城とされるが、榑築山については記されていない。遺跡が説話に登場するのは元禄13（1700）年に筆写された『備中吉備津宮縁起』であり、ここでは鬼ノ城が落城したのちに鬼が再度戦うため陣を構え石榑を築いたとされる。

また、『都窪郡庄村史蹟解説』が示す榑築神社の文書では、天和元（1681）年に代官が榑築山を訪れ社殿を造るよう命じ、その際に、地元では北側の矢部に下ろされていた石を元に戻すように願い、それが聞き届けられたとある。これにいう石は現在も遺跡に所在する手洗鉢状の石などらしい。文書の作成年代が明らかでなく、これは参考にとどめる。

これらに続く資料は、宝暦7（1757）年に編まれた『備中集成志』の古蹟之部、鯉喰ノ宮の項である。鯉喰ノ宮はいうまでもなく鯉喰神社墳丘墓の上に所在する鯉喰神社のことであり、榑築大明神はこれに付随する形で記される。榑築大明神については「岩を以て榑とし玉ふ」「神体は石にて色々の異形の人形を彫りたる物なり」とある。江戸時代半ばには弧帯文石が御神体としてまつられていたことと、立石が吉備津彦命の陣の榑とされたことを知ることができる。この頃までに吉備津彦命が榑築山に陣を置き、鬼ノ城に拠る鬼と矢で戦ったという説話が定着したのであろう。

嘉永6（1853）年頃集成がなされた『備中誌』では、榑築明神について、立石こそが神体であるべきだとし、にもかかわらず「近頃平石の青く三尺許り有るに足の形の付たるを何れの地よりか捜し出し是を神体とせり。石はいかにも奇と云へけれ」、「近頃足形石の前に叢祠までも作りたり」と記す。『備中誌』は江戸時代後期に主に記され嘉永6年頃まで加筆されたとみられている（藤田・間壁1974）。「近頃」「捜し出し」という記載は上記の『備中集成志』と合わないが、これについてはよくわからない。なお、弧帯文石は弧帯文の弧の中心を円形に表し、その中に直線の稜を設けてその両側を下降する斜面とするが、「足の形」はこの形状を牛の足跡とみなした²⁾のではないと思われる。

ここでは、温羅は鬼ノ城ではなく榑築山の西に位置する日指山（日差山）の東方の丘に陣取ったと記される。また、『都窪郡誌』に掲載された鯉喰神社の由緒には、鯉に化した温羅を鵜に変身した命が捕らえたという現在よく知られる話とは異なり、命の食事に鯉を奉ってもてなしたことに由来すると記されている。「温羅退治説話」は時代によって変化し、異伝もあったようである。

榑築遺跡の立石は、江戸時代の中頃に説話のなかに位置付けられたとみられる。

近代以降 近代に至って、榑築を遺跡として理解しようとする試みがなされる。大正・昭和にかけて岡山県下の歴史研究に大きな足跡を残した永山卯三郎は、この遺跡に注目し、大正10年に「片岡山古墳址」として報告した（永山1921）。報告では墳丘の直径32間（58m）、高さ6間（約11m）、墳頂部径18間（33m）とし、円丘部斜面の円礫と埴輪円筒（おそらく特殊器台）の破片を確認している。永山は墳頂部の立石を横穴式石室の残存石材と考え、北端の最も幅の広い立石（立石3）を奥壁とする巨大な横穴式石室がかつて存在したと理解した。古墳址という名称を用いたのは、石室が著しく破壊されているという判断にもとづくのであろう。この見解が妥当でないことは明らかだが、説話から離れて、考古資料の類例から判断しようとしている。

南西突出部前面に設けられた堀切状大溝の当時の形状についても記録されており、長さ50間（約90m）、幅22尺（約7m）、深さ10乃至15尺（3～4.5m）とある。氏は戦国時代掘削のものとしたが、その形状は山城の堀切を思わせるものであったのだろう。長さは目測によるのか実際とは合わない。なお、この報文では「新本村の境上に於ける建阪の立石」（総社市立坂2号墳丘墓立石（近藤1996）

(図175)が楯築遺跡の立石に類似することも指摘している。永山氏調査の時期には弧帯文石は鯉喰神社に合祀されており、氏の目にはとまっていない。

以降、この永山氏の見解が受け入れられたが(宇垣1932)、戦後、この遺跡が注目されることはほとんどなかったようである。さまざまな意味で類例がまったくないこと、そして、墳頂平坦部に散在中世の土器片が遺跡の年代をわかりにくいものにしてきたようである。

突出部の破壊 楯築墳丘墓を語るうえで最も大きなできごとは、1972年末ないし1973年初めに起きた宅地造成とそれに付随する工事による両突出部の破壊である。このことによって、突出部とは何かという問題を解く手がかりの多くが失われたといえる。

その経緯については以下に示す文献のうち近藤1992に記されており、近藤2002、福本2007にも同内容があるので参照されたい。

神体石の呼称 以上、古記録を中心に楯築遺跡がどのように理解されてきたかを概観した。楯築神社神体石については、少なくとも江戸時代中頃には遺跡で信仰の対象となっていたことを確認できた。

神体石の名称は、『楯築神社縁起』(成立年代不明)では白頂馬龍神石である。発掘調査前後には、やや平たい石の側面の1ヶ所に顔が表現された形状を亀になぞらえて亀石と呼んだが、御神体に対して失礼と、これは用いないこととした。その後、弧帯石(近藤1984)、のちに弧帯文石(近藤1995)とした。重要文化財指定名称は弧帯文石である。

前報告書(近藤義郎 著・編1992)では弧帯石であるが、弧帯文石が呼称として定着しているため本報告書ではこれを用い、円礫堆出土資料との区別のため楯築神社弧帯文石と呼ぶ。

4 遺跡・調査の文献

この遺跡についての文献は

近藤義郎 著・編1992『楯築弥生墳丘墓の研究』楯築刊行会 が基本となるが、他に下記がある。

近藤義郎 編1987『倉敷市楯築弥生墳丘墓第V次(昭和60年度)・第VI次(昭和61年度)発掘調査概要報告』倉敷市教育委員会

これら以外に、考察が加えられたり論及がなされた文献は多数にのぼる。それらのうち、調査の過程が紹介されたもの、また、遺跡の全体像を述べたものを以下に示しておく。

近藤義郎1977「古墳以前の墳丘墓－楯築遺跡をめぐる－」『岡山大学法文学部学術紀要』第37号、1-15頁・図版

近藤義郎1980『楯築遺跡』山陽カラーシリーズ3 山陽新聞社

近藤義郎1987「楯築を掘る」『古代史を歩く4 吉備』毎日グラフ別冊 毎日新聞社、21-27頁

近藤義郎2002『楯築弥生墳丘墓』吉備考古ライブラリィ8 吉備人出版

福本 明2007『吉備の大首長墓・楯築弥生墳丘墓』遺跡を学ぶ034 新泉社

宇垣匡雅2010「巨石・王たちの暗号」『NHK 極める』第6巻第5号 日本放送出版協会、134-154頁³⁾

大阪府立弥生文化博物館編2013『吉備と邪馬台国－靈威の継承－』平成25年度大阪府立弥生文化博物館秋期特別展図録

このほか、下記では遺跡についてまとめた検討がなされている。

考古学研究会編2017『楯築墓成立の意義』考古学研究会例会シンポジウム記録11

第3章 墳丘の構造と出土遺物

1 墳丘の現状 (図6・10)

墳丘は楯築山山頂から北東に下降する尾根にかけて築かれている。円丘部墳頂平坦面の最高所は46.74mで、南西突出部前面の堀切状大溝を隔てた南側の頂部にはほぼ同じ高さ46.6m⁴⁾の三角点が設けられている。給水塔の造成をはじめとする地形の改変によって旧状がわかりにくくなっているが、南北に長い楯築山最高所の北半に南西突出部と円丘部が、そこから続く尾根に北東突出部が構築されている。遺跡から北東にのびる尾根は起伏をもちながら下降し、足守川の西岸に達する。墳丘下方の北西斜面は墳丘斜面からほぼ一連の傾斜で下降するのに対し、東側は41.75m付近から下は傾斜がやや緩やかとなっている。

遺跡からは東、北、西の3方向に視界が開け、眼下に足守川流域の平野、さらに遠く鬼城山や吉備中山を望むことができる。南には堀切状大溝を隔てて楯築山の山頂が所在するため、この側からは墳丘は視認できなかつたとみてよい。

円丘部の北東、南西の2方向に突出部が設けられた墳形であるが、北東突出部は円丘部側の基部を



図10 墳丘 1 : 750

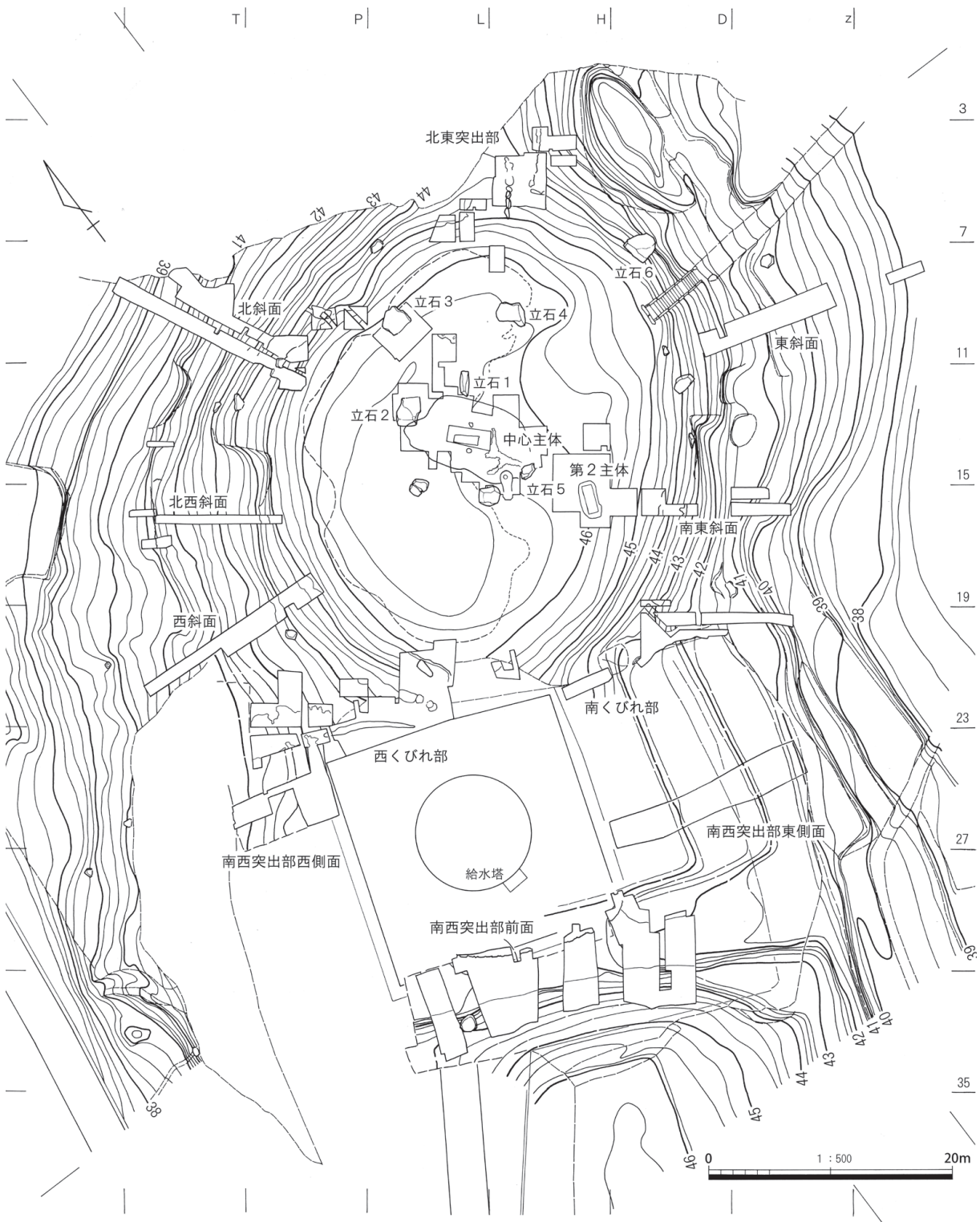


図11 墳丘と調査区 1 : 500

ごく一部を残して丘陵とともに削り取られており、南西突出部は円丘部との接続部分を含めて削り取られ、東西の斜面を埋めて造成された平坦面に給水塔が建設されている。

円丘部はほぼ完存し、墳頂部には立石、墳丘斜面には斜面立石が遺存する。墳頂部には、楯築神社神体石を収める祠が立石を利用して設けられており、その南西にはかつての社の位置を示す石碑や近代に立てられた小規模な立石なども所在した(図版3)。墳頂部東側は東の石段に向かって緩やかに

下降しており、平坦面の端は北あるいは西側に比べて1m以上低くなる。

現在、円丘部を含めて一帯は山林であるが、南西突出部東側面などの調査成果や周囲の微地形から、円丘部をのぞいて階段状の畑が広く設けられていたとみられる。北東突出部の東側くびれ部には小規模な溜池が地形を利用して設けられている。溜池の東岸は狭い平坦部となるが、かつてはここから北に向かったのち北西にカーブして尾根を斜めに横切り北麓に達する山道があり（図158）、突出部はこの山道まで伸びていたことが北東突出部が破壊される前の観察で確認されている。南西突出部の先端には堀切状の地形が工事前に見られたが、この部分は造成面下に埋没していることが発掘調査によって明らかになった。なお、図10など墳丘図のうち破線で示した南西突出部東側面および南西の丘陵部分の下側等高線は、第4次～第6次調査の発掘調査成果をもとに復元したものであるが、畑の形状等は一部推定を含んでいる。

2 北斜面

a 調査区と調査経過

調査区の状況（図12～14） 調査区は円丘部の北斜面に位置し、38mから46mにかけての範囲である。畑の造成はなく、斜面の遺存状況は良好である。46.0m等高線が墳頂平坦面の肩にほぼ一致し、そこから第1列石までは東部で23°、西側ではさらに緩く16°で下降する。第1列石から下は約25°で下降する。斜面下方に明確な傾斜変換は見られないが、図14墳丘断面に示すように41mよりもやや高い位置で傾斜が若干変わり、それよりも下は20°程度のやや緩やかな傾斜になる。

調査範囲の最下端付近には掘削が及んでおり、掘削の崖に接した箇所では、大きく円形に掘削された部分もある。この攪乱は南の墳丘側を大きく削り取るが崖側では地表面に留まっており、図16 E断面に示すように断面観察は可能であった。

調査の過程 円丘部斜面の構造把握を目的として第1次調査で斜面立石4（R10）とその上方（Q10）、斜面立石6の周囲（S・T11・12）に調査区を、さらに斜面立石6の下方から北下側にのびるAトレンチを設定して調査を進めた。検出した斜面施設は北東突出部（図36）と同様の構造で、斜面上部をめぐる第1列石の下方に円礫敷が設けられており、斜面下方には特殊器台片を多数含む流土が堆積することを確認した。また、墳丘斜面の立石は第1列石の一部であることが判明した。

北東突出部で確認した第2列石に相当するのは斜面立石6の下方、円礫敷残存部から約30cm外側に離れ、斜面立石6と同様に墳丘斜面に対してほぼ直交して突出した板石と判断した。しかし、この板石の左右には列石をなす石材が見られず盛土面からの突出も低かったため、第2次調査においてこの板石部分にトレンチを設定して補足的に調査を行った。その結果、この板石は基本的に盛土中に所在しており、外側の面を露出させる北東突出部の第2列石とは異なることが判明し、これが円丘部の第2列石であるのかどうか判断しがたい結果となった。

この後、円丘部斜面の調査は地点を変えて実施したが、第2次調査円丘部南東斜面では石材の抜き取りが大規模で斜面施設の遺存状態がよくなく、第3次調査円丘部北西斜面では第2列石の痕跡は認められなかった。第2列石や墳端についての課題を解明するため、第5次調査で上記の板石付近よりも下側のAトレンチを再発掘、延長し、さらに、これに平行するBトレンチを東側に設定して調査を行った。これらの調査の結果、第2列石は遺存しておらず、上記の板石は墳丘内列石の一部であることが明らかになった。

b 検出遺構（図12～16、図版4～6）

第1列石（図12・14、図版4・5） 調査範囲の東側に斜面立石4、西側に斜面立石6が5.4mの間隔

第3章 墳丘の構造と出土遺物

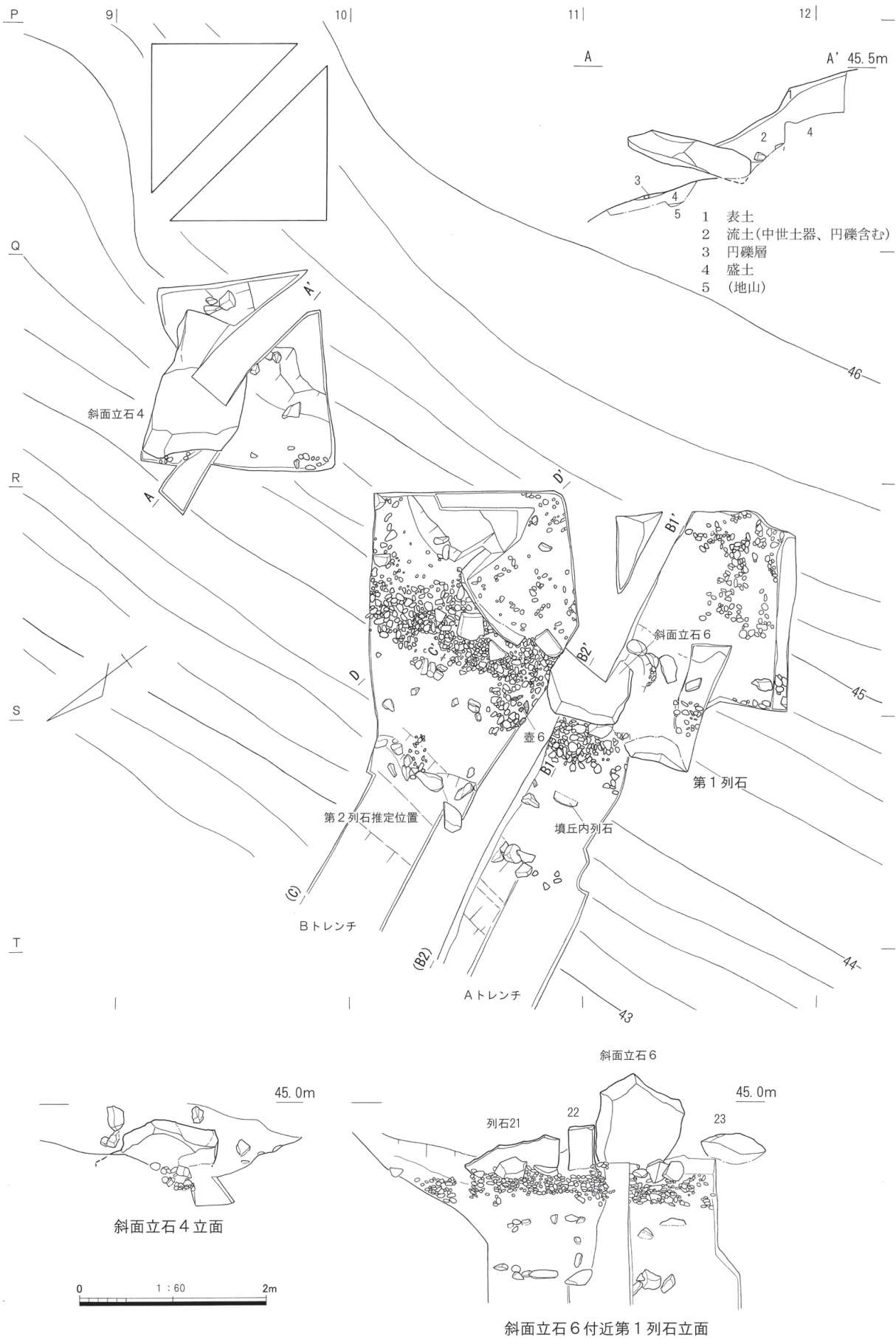


図12 北斜面上側 1 : 60



図13 北斜面下側 1 : 60

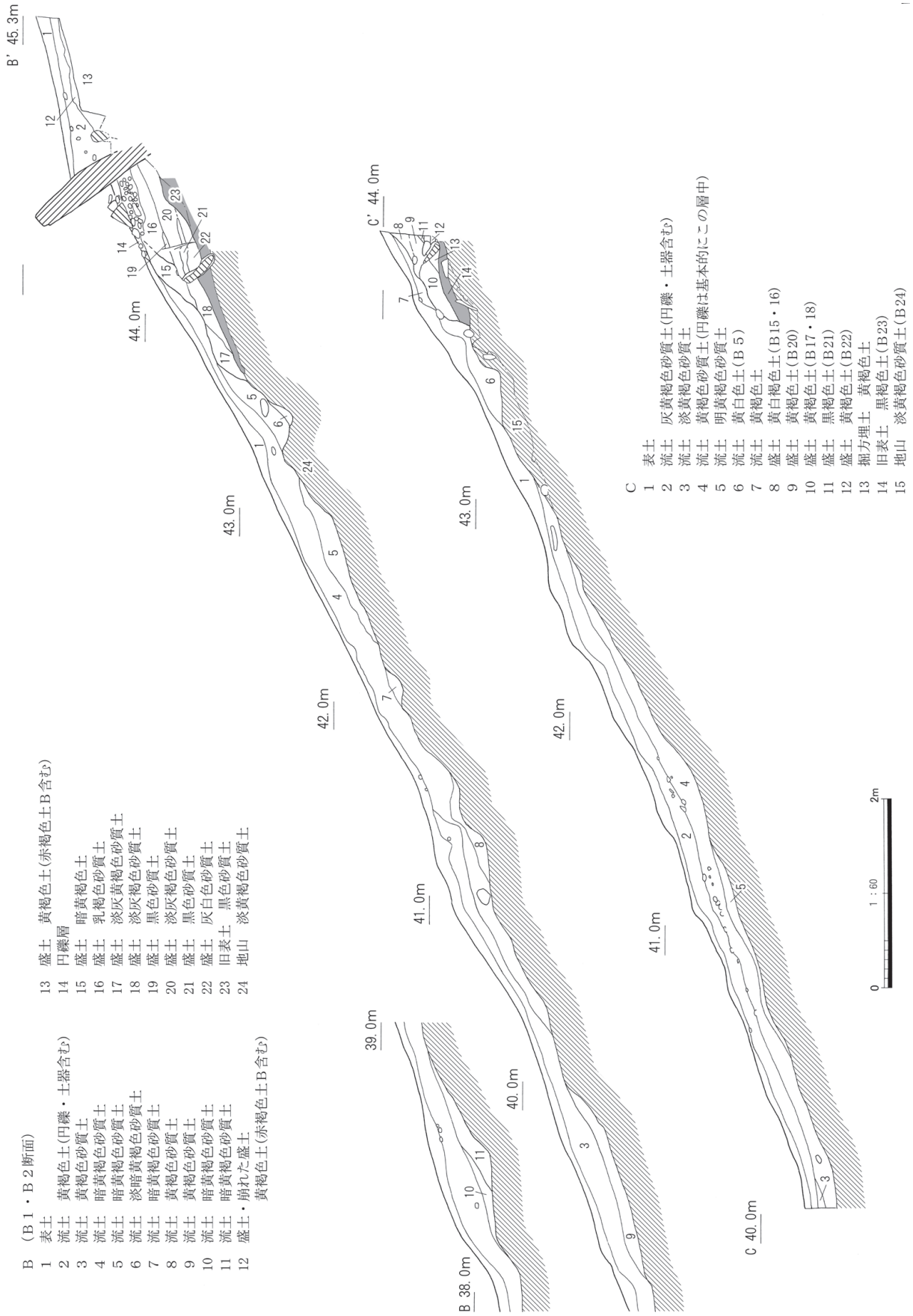


図14 北斜面断面 1:60

で所在する。斜面立石4は平面形が台形の大石で、長さ1.62m、幅94cm、厚さ30cmである。垂直に対して75°傾いてほぼ横転の状態であるが、本来の位置からは動いていないとみられる。斜面立石6は板状の大石で長さ1.29m以上、幅89cm、厚さ24cm、下方に35°傾いている。1.1mの高さで円礫敷から突出する。なお、図12下側の立面図は、列石に正対してのものであるが、紙幅の関係で平面図との対応位置に置いていない。

斜面立石6の両側には少なくとも3.3mにわたって第1列石が遺存し、本来の形状をよくとどめる。西側にはほぼ横転しているが幅73cm以上の石材（列石23）があり、東側には円礫敷から43cm突出する角柱状の石材（列石22）、それに続いて幅1.0mの薄い板状の石材（列石21）が遺存する。列石21の東側には列石が脱落した痕が残る。斜面立石4と6の間の斜面下方には遊離した状態の石材、列石5（図84・85）があるが、この付近から脱落したとみられる。列石5は長さ90cm、幅81cm、厚さ21cmである。斜面立石4の周辺では墳丘がかなり流出しており、第1列石は遺存しない。後述のように、これらの斜面立石や列石は石材と墳頂側の墳丘盛土の間に流土が入り込んでおり、元は垂直に立っていたと判断できる。

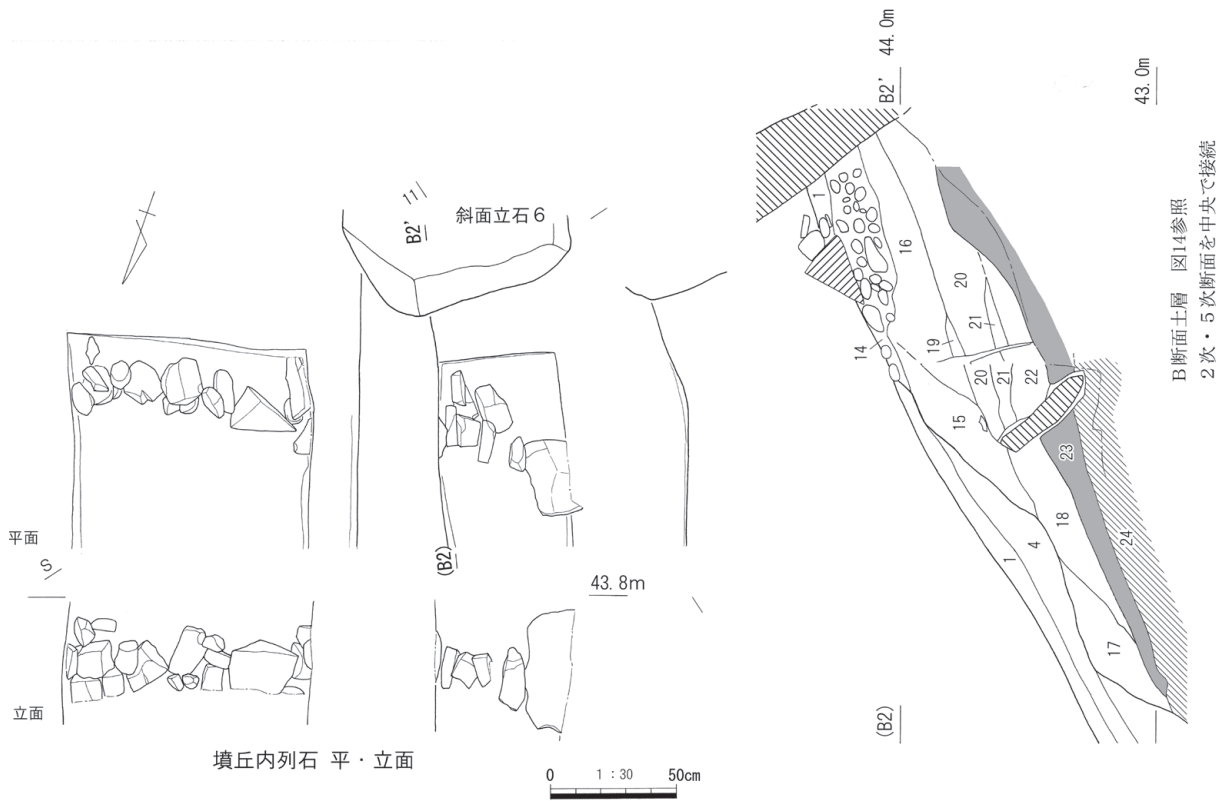
石の傾きによる変形や流出はあるが、斜面立石6の上下両側は盛土を含めた遺構の状態が最もよい（図14 B断面）。垂直を想定した斜面立石6に接する墳頂側盛土上面の高さと、下側の円礫敷上端の高さの差は40cmであり、墳丘は第1列石をはさんで段をなす。墳頂側から第1列石を見たとき、列石の上端は墳丘から若干突出した状態であったと判断でき、列石22は8cm上に出ることになる。これに隣接する列石21は、直立すれば西側はこの高さになると思われるが、東側は盛土よりも低くなる。このことに関わるとみられるのがこの列石下側の円礫敷上に所在する角礫で、列石の低い箇所を補ったり上端の高さをそろえるために列石の上に積まれていた石が落下したものと推定できる。下側の角礫のうち東側が長さ26cm、厚さ10cmである。列石は1石のみで構成されたのではなく、角礫を加えて高さを確保しており、円礫敷からの高さは45cm前後であったと推定できる。斜面立石6下側に所在する角礫は、斜面立石6と列石23の間の詰め石が落下したと思われる。

図12 A断面に示すように斜面立石4の墳頂側では盛土がほぼ垂直に下がる。これは、直立し盛土で固定されていた斜面立石4が下方へ傾斜して生じたもので掘方ではない。こうした斜面立石や列石の傾斜による隙間の発生と流土の入り込みは、斜面立石6や列石21でも認められる（図14 B断面2層・図15 D断面2層）（以下、断面を省略、D2層等と呼ぶ）。斜面立石4の基部付近には長さ10～25cmの角礫が散在するが、根石に用いられた石材が遊離したものであろう。斜面立石4は根元まで現れているが、石の根入れがきわめて浅いことがわかる。埋め込んで固定するというよりも、石の長さを最大限表示するためバランスをとって直立させて根元を固定するという立て方をしており、そのため横転や傾斜を生じやすいという、この遺跡の立石・列石全体に通じる特徴をよく示している。

斜面立石6の墳頂側断面（図14 B断面上端）では石の傾きで隙間に入った流土の外（墳頂）側で盛土13層の下がりを検出し、調査時には掘方と考えたが、立石の傾斜によって盛土にずれが生じた可能性を考えておく。この落ち込みは西の列石23上側に設けた小トレンチに続き（図12平面図）、そこではやや屈曲した平面形を示す。このトレンチでは平面の検出にとどめて掘り下げを行っていない。列石23が前方にせり出し、そのため墳丘側が崩れたのではないと思われる。

第1列石よりも上側の斜面には円礫がかなり見られるが、これらは流土に入っており、墳頂平坦面から流出した円礫が傾斜の緩い位置に堆積したと判断できる。

円礫敷（図12・15） 斜面立石6付近では110cmの幅で円礫敷を検出した。列石や斜面立石の傾斜によって外側に押されていることを考慮する必要があるが、図15 B断面に示すように円礫層の厚さは10



～15cm、円礫3石の重なりがあり、本来の円礫敷が円礫の厚い層であったことを示している。円礫敷は下方に緩傾斜をなす。後に記載するように、円礫敷からは長頸壺胴部6が出土した。

斜面立石4の下側は調査範囲が狭いが、ここにも円礫敷が広がる。
盛土と墳丘内列石 (図14・15、図版6)
 図14 B・C断面に示すように、墳丘は斜面立石6の外側2.4mまで盛土で構築されており、後述する円丘部北西半の他調査区よりも盛土の範囲は広い。盛土の厚さは最大45cmである。

墳丘内列石の位置は斜面立石6から1.1m外側で、第1列石に平行する(図15)。検出延長はA・B2本のトレンチ内の2.0mであるが、東のD断面下端で検出した傾斜する石材もこれを構成するものとみてよく、少なくとも2.7mの延長で続いている。列石は外側に面をもつ。いずれの石材も外側に傾斜しているが、第1列石が外側に傾斜し盛土を押し出したこ

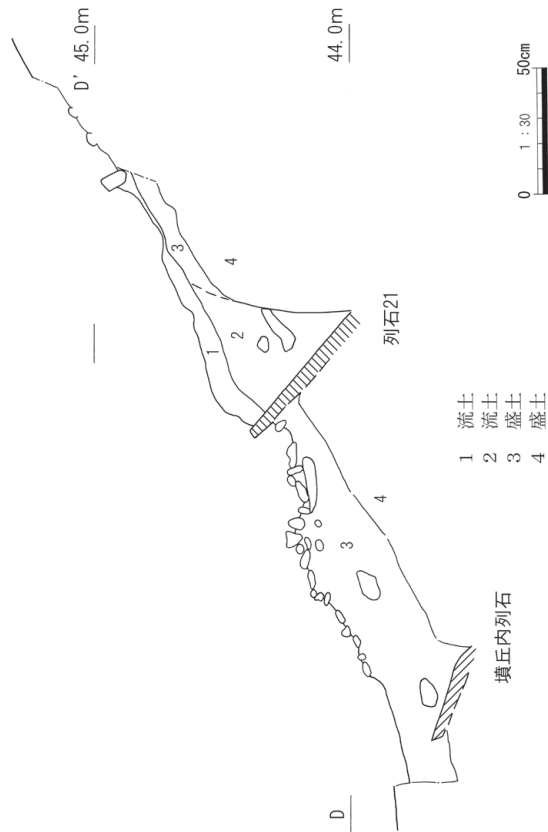


図15 墳丘内列石 1 : 30

とによるのであろう。検出範囲西端の石材が当初第2列石の可能性を考えた石材であり、長さ58cm以上、下部の厚さ12cmの板状で、先端は現地表から7cm突出するが、元は盛土内に収まっていたとみられる。用いられた石材はこれが最も大きく、他は10～25cm程度の角礫を2～3段積んで高さ20～30cmの石垣としている。第1列石と同じく石を縦に用いることが多く、斜面立石6の下にあたる位置では特に大きい石材を配しており、第1列石を縮小して埋め込んだかのようなのである。最下の石材は旧表土上に置いた状態であるが、大きな石材は掘方を設けて設置している。

盛土は斜面立石6と墳丘内列石の間では図14・15 B断面19、21層のように黒色土をまじえて互層に近い状況を呈するのに対し、外側の盛土（B18層）では黒灰色砂質土をブロック状に含みはするがそうした特徴をもたない。まず墳丘内列石までの間（B19～22層）を築成し、続いて墳丘外側（B17・18層）を盛った後、上部（B15・16層）に盛り土作業を行ったとすることができる。墳丘内列石はこうした作業の単位としての機能をもつが、一方で、上記のような技巧的な形状をとり、地中にも列石を設けるという意図があったとみることもできる。墳丘の構築にあたって土木技術として導入されたが、必要以上に丁寧な造作を行ったということであろう。墳丘内列石の最古の例と考えられ、この墳丘墓の墳丘構築技術の系譜を考えるうえで手がかりになるとと思われる。

なお、盛土には縦方向に薄く異質な土が入る箇所が見られ、B19層やB21層はその箇所で土層が途切れたり、幅が変わるといったことが認められた。図15 B断面ではそのうちの1つが見られるが、同様の断層状の変化は他の断面でも認められた。板材が所在したとみるには幅が最大2cmと狭く、下にさらに狭くなることから、斜面立石6に押されて盛土に亀裂を生じ、それに添って盛土が浸食されて不整合を起こしたと理解する。

第2列石 調査では第2列石は検出できず、すべて流出していると考えられる。その位置とみられるのは第1列石から外へ約2.7m離れた盛土端の外側で、地山が幅90cm、外側からの深さ10cmの浅い掘り込み状、あるいは幅60cmのテラスをなす。ここよりも下方は若干の凹凸はあるがおおむね一様な斜面で、このような地山面の大きな変化は見られない。この段やくぼみをなす部分が、第2列石が流出して掘方の形状が残った、あるいはそれを反映した箇所と判断する。なお、平面図（図12）ではこの部分の墳頂側に礫が多く見られるが、これらは基本的に地山中の礫が露出したものであり、これよりも奥側になる盛土下の地山にも礫が多数含まれることをトレンチで確認している。

このように考えた場合、第1列石と第2列石の間隔は約2.8m、第2列石脱落跡の底面と円礫敷上端の高さの差はB断面で1.83m、C断面で1.53mとなる。第2列石脱落跡は掘方そのものでないと思われ、列石崩落後の流出や置土・根石の厚さなどを見込めば高さの差は小さくなるが、円礫敷が一定の緩斜面であったとするなら第2列石は70cm程度の高さが必要となる。しかし、斜面下方に大形の石材が落下した状況はなく、第1列石よりも高い列石は考えにくい。

傾斜が強い斜面に一定の幅をもつ円礫敷を設けたため第2列石の位置が低くなり、それを円礫敷の勾配で調整したと推定する。円礫敷は第1列石にそって狭い緩斜面を形成したのちに傾斜を変えて下降し、その下端を低い第2列石が受けたと考えておく。

下方斜面（図13・14・16、図版5・6） Aトレンチの下端から墳頂側へ8.0m、U10の北約1mまでの間が第5次調査での拡張部分、それよりも墳頂側は第1次調査での発掘範囲である。第1次調査範囲ではトレンチの中央、42.2～40.7m付近で特殊器台片が散在した状態で出土した（図版5-2）。円礫も散見されたが、Bトレンチで見られるような濃密な状態ではない。Bトレンチでは下方を中心に円礫敷から落下したとみられる円礫が広く堆積する（図13、図版5-3）。円礫の間には土器破片や長さ15～40cmの角礫も含まれており、角礫は2つの列石を構成した石材であろう。傾斜のわずかな差で

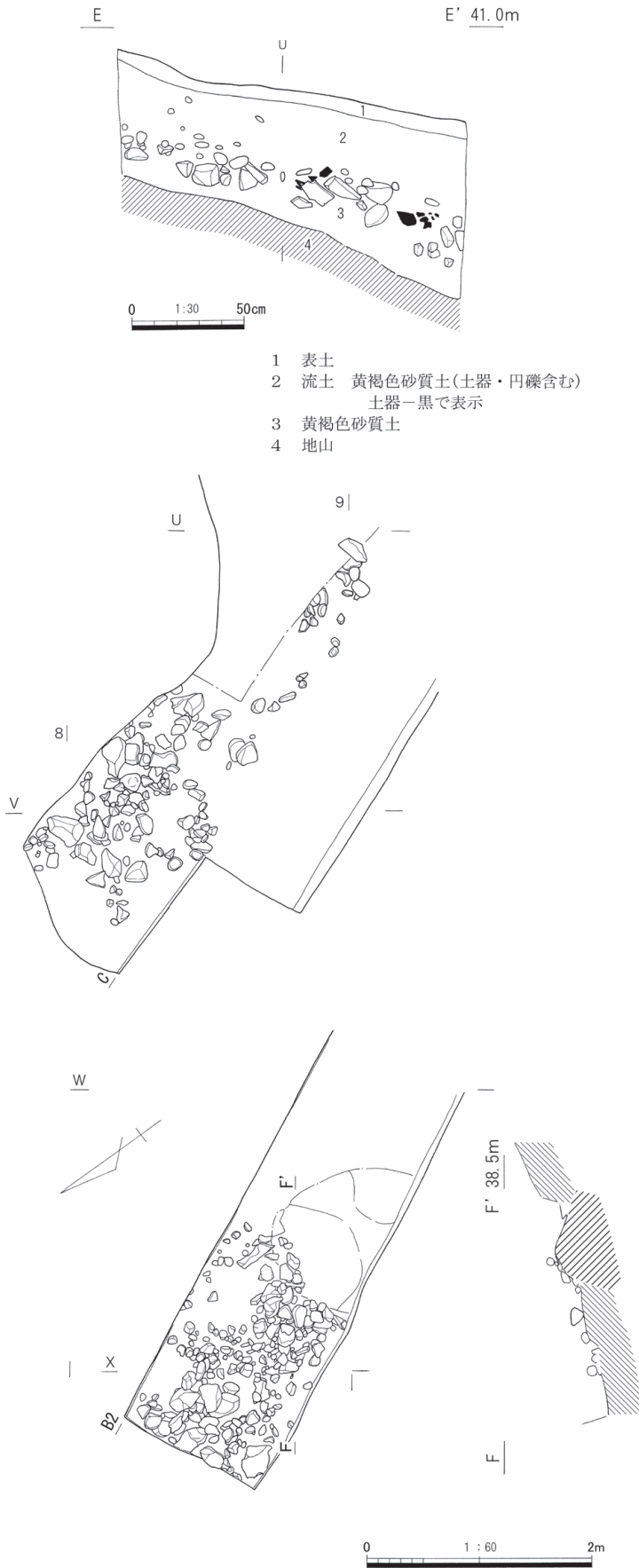


図16 斜面下方検出の礫 1 : 60・1 : 30

東のBトレンチでは円礫等が堆積し、西のAトレンチでは円礫の多くは基本的に下方に転落したと思われる。

両トレンチの下端付近では、この円礫・角礫・土器片を含む流土層の下に図16に示すように10~35cm、主に15cm程度の大きさの花崗岩類⁵⁾の礫が面的に広がる。東の崖面(E断面)でも認められることから、礫の広がりも約10mの長さをもつ。礫の広がりも東では高い位置からはじまっており、広がりの上端は等高線に斜交し、平面的には土器、円礫等を含む堆積よりも若干下側にずれる。なお、Aトレンチでは礫の広がりを受けて地山の大きな石が露出する。礫はB3層下部、10層、11層に包含されており、E3層がそれらに相当する。これらの土層は円礫等を含む流土とほぼ同一であるため流土と判断したが、墳丘構築後の早い段階の流土である可能性とともに、この付近では基盤層上部の風化層や墳丘構築以前の流土層が地山となる可能性も考えられる。

これらの礫は円礫敷が崩落を開始するより前に存在していたことは明らかであるが、その成因について以下の3つが考えられる。①第2列石を構成する石材が崩落、堆積した。②地山中の自然石。③墳丘築造時に斜面下方の表面に礫を配した。確実な地山中の礫の例としては西斜面調査区下端のものがあるが(図26)、そこでは石が小さく範囲も狭い。E断面に示すように礫は墳丘表面にまとまっており範囲も広く自然に形成されたと考えにくいようにも思われる。一方で、ここで検出した礫のように丸みを帯びたものは根石には用いられても列石に用いられることは基本的になく、先に示したように墳

丘内列石であっても角礫が用いられており、すべての礫について①を積極的に考えることはむずかしい。判断がむずかしいが、一応②としておく。

墳端 墳丘を画する施設は認められなかった。B・C断面40.7mで地山の勾配が変わり下方がわずかに緩傾斜となっており、この位置を墳端と判断する。

c 出土遺物 (図17～21)

出土状況 長頸壺胴部6は、斜面立石6東端の下方、円礫敷の上面で検出した。内側には円礫が多数入っており、破片の端が円礫間に環状に現れ一部が付近に遊離した状態であった。遺物図では復元して示しているが、接合を終えた形状は胴部側面を縦に皿状に切り取った形である。土器を横倒しにして胴部をある程度円礫層に埋め込んだとみられ、円礫敷の流出とともに土器の大部分が失われ、埋め込まれた部分の下部が遺存したと判断できる。北東突出部の長頸壺13も横倒しの状態で検出したが、共通する置き方かもしれない。遺構に伴う土器はこの1点のみである。

まとめて遺物が出土したのは下方斜面のAトレンチで、特殊壺口縁部1、器台口縁部と推定の2、長頸壺底部7、特殊壺胴部8、そして特殊器台16～34が流土から出土した。これらはトレンチの内に破片が散在した状態であり、上方にあたる斜面立石6下側の円礫敷付近から落下、堆積したと推定できる。また、長頸壺14と高杯15は、墳丘北側の掘削崖面(図16 E断面)から採集したものである。破片は花崗岩類礫の直上に堆積し、付近には円礫も多く見られる状況であり、やはり円礫敷から流出、堆積したとみられる。

長頸壺口縁部3・同頸部5・特殊器台片11は斜面立石4付近(R10)、長頸壺口縁部9がその南東(Q10)からの出土である。長頸壺4・特殊器台12・13が斜面立石6東側(S・T11)から、口縁部小片10はAトレンチ近くの試掘での出土である。

長頸壺と特殊器台の2器種が主体を占め、出土量では下方斜面のAトレンチが中心となる。なお、斜面立石6付近では第1列石の遺存状態が良好で、上方からの流土を受け止める形になる。墳頂部から流出した円礫の堆積が見られるものの土器の出土量は少なく、墳頂平坦面肩部には土器が置かれていなかったことを示している。

土器の胎土・色調 長頸壺は胎土・色調の差が比較的小さく大別がややむずかしいのに対し、特殊器台・特殊壺は、胎土・色調から3以上のグループに区分できる。単に胎土・色調が異なるだけでなく、その差に応じて口縁部や間帯の形状なども異なっており、製作集団の差を示すと考えている(第7章第5節)。A類は濃い赤褐色を呈し、石英、長石の粗砂を含む。B類は暗褐色～褐色でやや軟質、石英、長石粒以外に角閃石粒を多く含む。C類は明赤褐色～黄褐色を呈し石英、長石粒を含む。煩雑を避けるため、以下では特殊器台A類等と記載し、必要がない場合は胎土・色調の記載は省略する。特殊器台以外の器種がこれと共通する場合、胎土A等と記す。また、しばしば見られる赤色顔料の塗布は、これまでの慣用により丹塗りと呼ぶ。

長頸壺ほか 口縁部3・4・9・10・14は、口縁端を上には拡張し、その外面に沈線を施した後にナデを加えて凹線に近いものとする点で共通するが、下端の拡張の程度など断面形はそれぞれに異なる。受け部外面の調整も3がタテハケ、4・9がヘラミガキ、14ヨコナデである。頸部5の内面調整は破片上半が指頭押圧、下部がヘラケズリである。胴部6は復元径30cmを測る。外面調整は肩部がナデ、それ以下がヘラミガキである。7も6と同様の大きさとみられる。6・9・10・14および2では胴部外面及び口縁部内面に丹塗りが見られる。9は胎土B。

14は各部が接合はしないが、同一とみても支障ないため、ここでは1個体として扱う。受け部がやや厚く、肩が張らない胴部である。胴部外面の調整は斜めハケのちナデ、内面調整はヘラケズリで

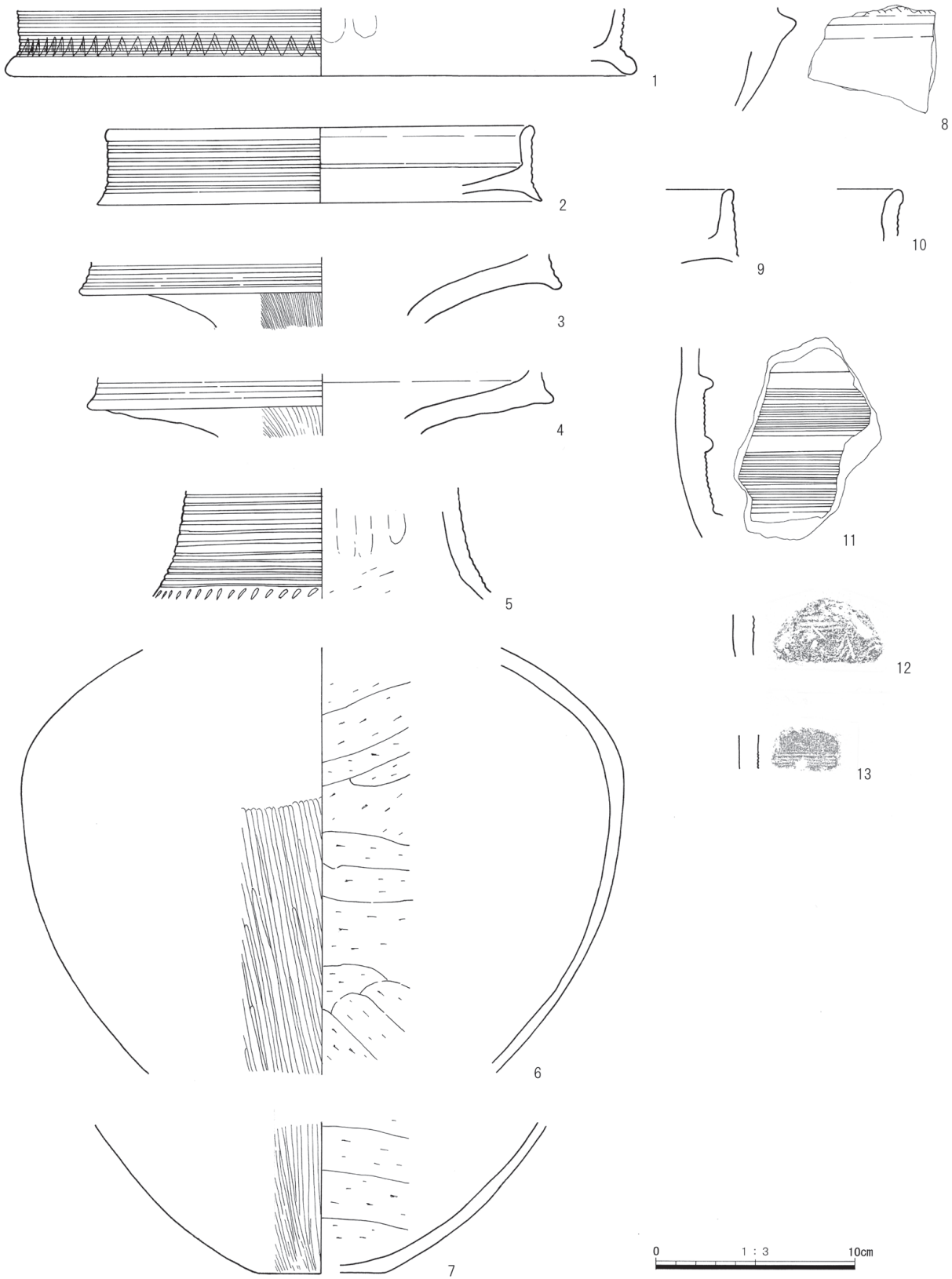


図17 北斜面出土遺物(1) 1 : 3

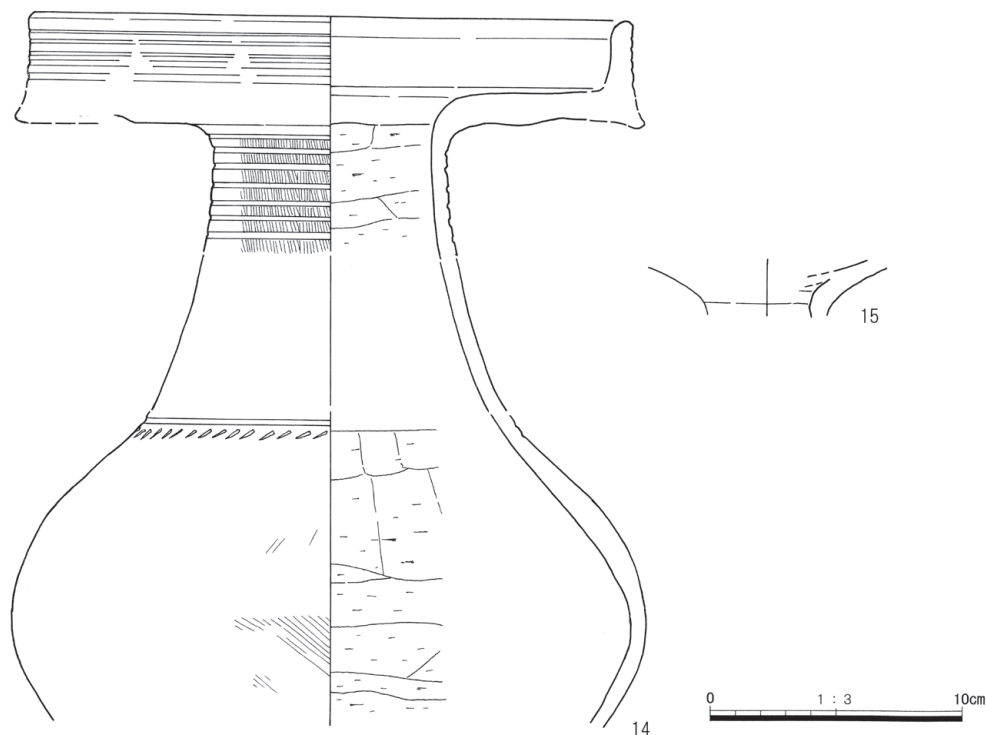


図18 北斜面出土遺物(2) 1 : 3

頸部上端までなされており、上部ではヘラケズリののちにナデが加えられる。受け部内面から胴部外面まで丹塗りが見られる。

2は受け部が薄く、器台口縁かと思われる。胎土B。

15は高杯の杯部下端である。この時期の一般的な高杯とは異なってやや大きく杯部底面を円板でふさいで形成しており、ここでは高杯Bとするものである。

特殊壺 口縁部1は小片である。器壁は比較的薄い。口縁部外面には沈線を配し、小ぶりの鋸歯文をめぐらせる。胴部8は下段突帯から胴部下半にかけての破片で、1と同一個体とみても支障はない。突帯の上方には鋸歯文かと思われる文様の基部が残る。内面調整はヘラケズリである。いずれも外面には丹塗りが見られる。胎土Bで、以下に示す特殊器台16~33とセットになるとみられる。

特殊器台 11は特殊器台A類の破片で、最下段の間帯部分である。保存状態はよくなく他に破片もないことから墳頂平坦面から流出したものとみられる。12・13もA類の小片で、12では鋸歯文と平行沈線が残る。11と同様に上方からの転落と思われる。

16~32は同一個体と判断した。破片それぞれの位置を特定できないため図化可能な破片をすべて示しており、同一の段を個別に示すことになっていると思われる。特殊器台B類の最もまとまった資料であり、これらをもとに推定した全形は図176に示した。いずれも外面には丹塗りがなされる。色調は暗褐色で、胎土に角閃石粒を含む。内面調整は左あるいは上方向のヘラケズリである。25の内面下部には、長さ4cmの紡錘形の平面形で丹塗りがされた面が見られる。面の下端はヘラケズリで切られており、上になるにしたがって土器内側に入り込む狭い斜面をなす。本来は上に積み上げられる粘土によって覆われる面が部分的な粘土の不足によって残ったわけであるが、製作途中に丹塗りを行ない、さらに上部を製作していったことをよく示している。

間帯と文様帯の幅が狭い16・17が個体の上部、文様帯幅が広い24・25が下部の破片と推定できる。また、器壁が薄い31は16近くの可能性がある。

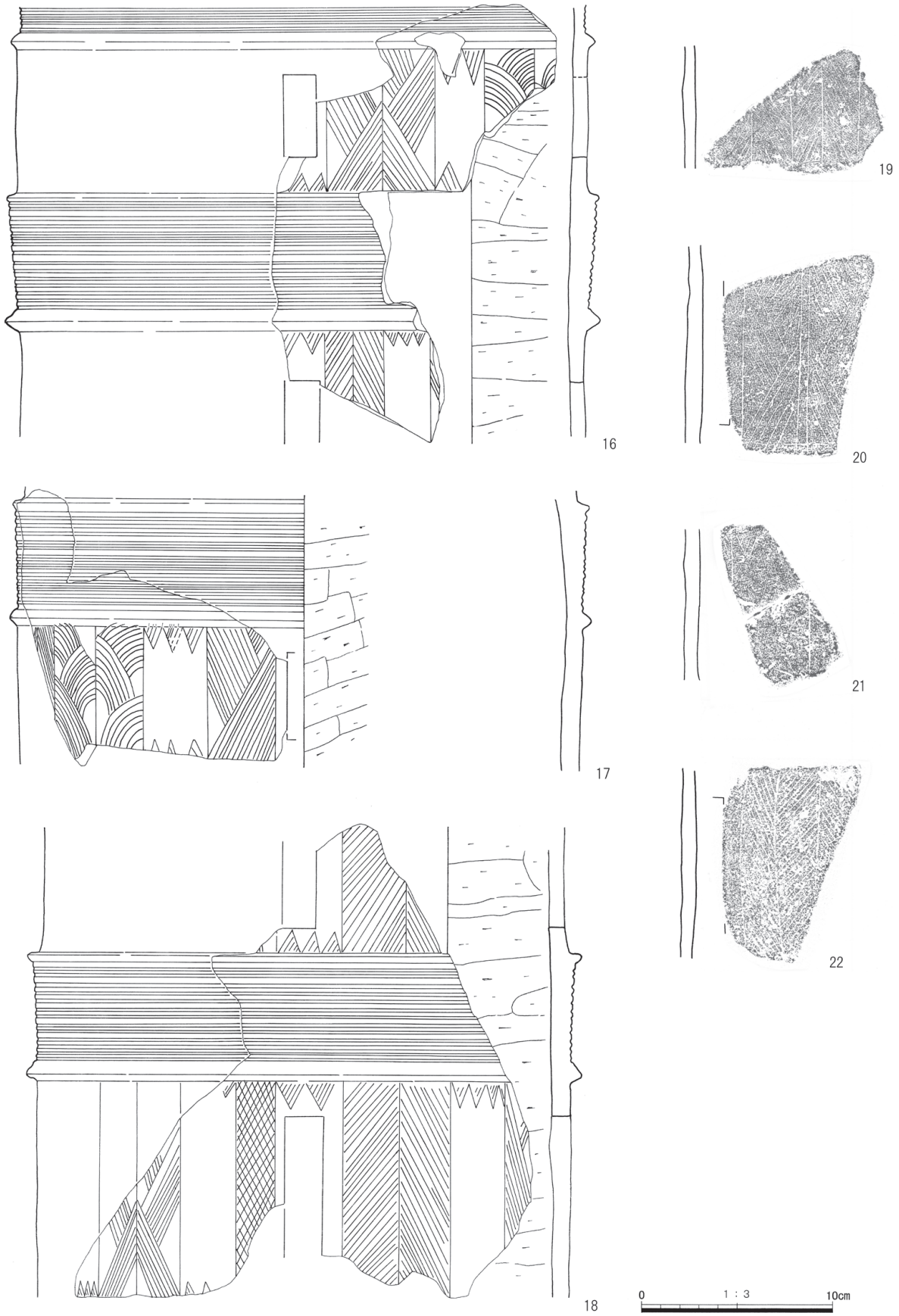


図19 北斜面出土遺物(3) 1 : 3

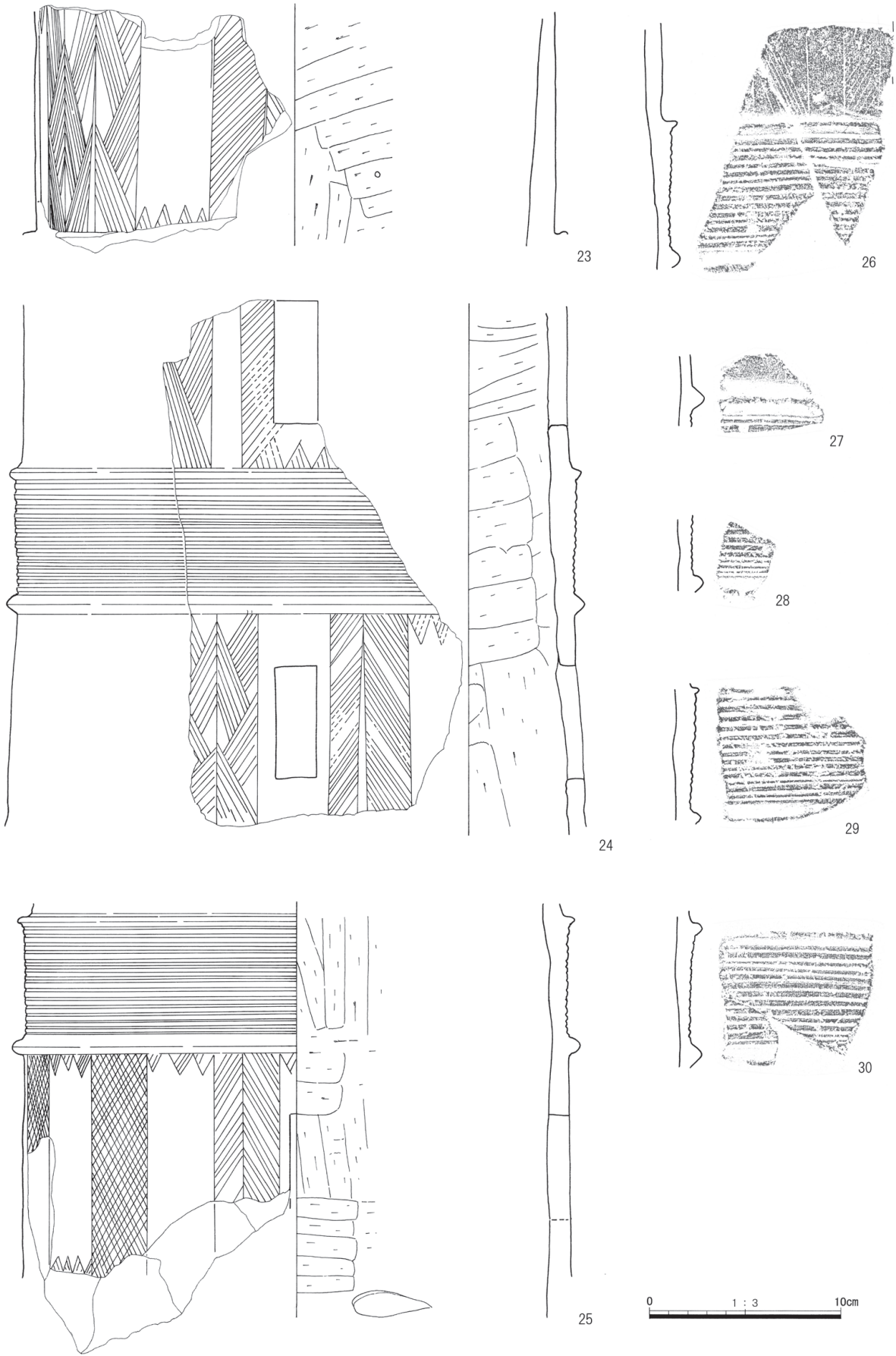


图20 北斜面出土遺物(4) 1 : 3

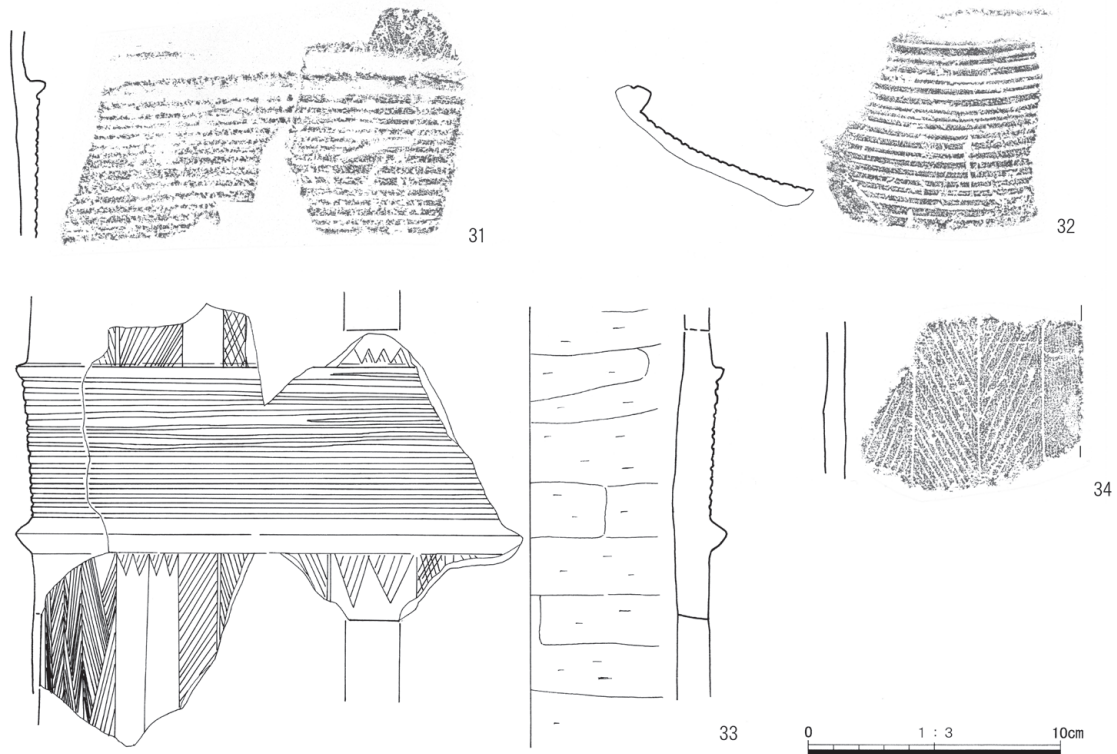


図21 北斜面出土遺物(5) 1 : 3

間帯は下端に大きい突帯を置き、そこから上に向かって間帯を肥厚させ上端に小さい突帯を配するが、16・17では段をなす上端をわずかに突出させる程度である。上下の突帯間には沈線をめぐらせた後にナデが加えられており、沈線の間は緩い凸面をなす。

文様帯はいずれも分割型であり、この特殊器台の文様はすべて分割型で構成されたと思われる。長方形の透かし孔を4方向に配しており、その部分は上下に鋸歯文を配するものが多いが、24下段では無文である。また、24上段はそうした原則からはずれて斜線文を鋸歯文の上側に配する。無文区画が透かし孔区画に接することになったため、やむをえずこの位置に文様を入れたようである。文様帯を縦に分割する区画線は通常1本であるが、23、24下段では2本になるものがある。2つの透かし孔区画の間には上下鋸歯文の区画を2ないし1つ配するが、鋸歯文がない無文区画となる場合もある。そして、それらの中には斜線文、複合斜線文(23左など)、複合弧線文(17左など)、斜格子文を配している。これらのうち斜格子文は1区画だけ配する。一方、斜線文、複合斜線文、複合弧線文は、17の複合斜線文と16上段の複合弧線文をのぞいて2ないし3区画を接続し、それらは区画線で図形が対称になるように配置している。斜線文は18、22のように斜線の間隔が均等なもの、24・25下段のように間隔が広い箇所を設けて「鷹の羽」状の表現にするものがある。複合斜線文は、斜線を区画内に充填せず上下に余白を残し帯が斜めに交差する表現とする。文様帯の上下幅が狭い16・17では3本の帯の交差とし、他は4本の交差とする。複合弧線文は16と17に見られ、これら以外では円丘部東斜面調査区から出土した126他に見られる。複数の線からなる帯が向きを変えながら交差する図形であり、複合斜線文の斜線帯を弧帯で表現したとみてよい。斜線文の沈線間隔をあける表現を含めて、これらの文様が弧帯文の帯を表現したものであることを示している。

32はこの特殊器台の脚裾部で、最下段間帯下側の突帯から緩やかな反りをもって裾が広がる。

33は上記と同じ特殊器台B類であるが、上記とは別個体と判断した。器壁がやや厚く、間帯の沈線にナデが加えられていない点が異なる。間帯の残存部が広い破片であり、沈線を一本ずつ引いている

ことがわかる。文様の構成や特徴は上記と大きく変わるところはないが、各区画が狭く、その分、多数が配される。下段の文様帯構成は左から透かし孔区画、斜線文2、複合斜線文2、上下鋸歯文2、斜線文4（推定）、透かし孔区画（上下鋸歯文）、斜格子文となる。上下鋸歯文の区画が2つ接続する点はやや特異であるが、適当に区画を設けた後、順に文様を充填していったように見受けられる。

34はこれまでの2個体と胎土が異なりC類で、3つ目の個体となる。透かし孔左側の文様帯破片である。

土器の構成 小破片を除いて土器は円礫敷よりも下から出土しており、元は円礫敷に配されていたと考えられ、長頸壺、特殊壺と特殊器台からなる。高杯は15があるが、これはやや大形で、精良な胎土を用いる一般的な形態の高杯A⁶⁾は見られない。

3 北西斜面

円丘部の西斜面下方には、墳頂平坦面肩部から5m下方、41m付近に石垣が所在する。石垣には大形の石も用いられており、墳端施設の可能性が考えられたため、石垣の性格の解明と墳丘斜面構造の把握を目的として調査を行った。石垣全体を検出するとともに、墳頂平坦面肩部の下方から石垣に至る中央トレンチ、石垣に直交する3つの小トレンチを設定した。

西斜面には、中央トレンチの上端、45m付近に傾斜変換があり、それは直角に曲がって斜面に直交する段差となっており、これに囲まれた方形の範囲は他の箇所よりも緩やかな16°前後の斜面となる。

a 検出遺構（図22・23）

長さ10mの中央トレンチの上端近くで第1列石の掘方と抜取跡を、それらが重複した状態で検出した。この部分よりも上の墳丘は盛土で構築されており、下方は地山である。

第1列石掘方・抜取跡 中央トレンチの上端近くで、第1列石の掘方とみられる幅80cm、深さ54cmの溝状の掘り込みを検出した。埋土はトレンチの左右両壁で異なり、北壁では黒色土の単層（図23 B1層）であるのに対し、南壁では黒色土（A19層）や黄褐色土（A20層）などからなり堅く締まる。南壁のA15・19・20層は列石掘方の埋土が遺存したものと判断した。A20層には厚さ2、3cmの黒色土薄層が互層状に数層入る。A19層は墳丘盛土に続くことから、列石の設置が墳丘上部の構築と並行してなされたと考えられる。掘り込み南半の埋土には25cm前後の礫が多数含まれる。これらは図22立面図に示すように上部と下部に分かれる。トレンチ内北半では礫が少なく、溝状部分の断面形が袋状になり、上記の土質とあわせ、抜取跡と考えられる。トレンチは掘方と抜取跡が重複した箇所にあると判断した。この部分の下方になる6層は円礫を多量に含んでおり、列石間の円礫敷が崩落、再堆積したとみてよい。

トレンチの中央には浅い溝があり、20cm前後の礫がまとまって所在する状況が見られた。礫を含む土は上記の列石掘方埋土とは異なっており、墳丘墓に伴う遺構ではなく後述の石垣と同様のものと考えられるが、調査記録として図示した。

墳丘盛土 第1列石の上側は盛土（図23 A16～19層）で構築されており、盛土の厚さはトレンチ南東壁で最大55cmを測り、橙色土と黒色土が互層をなす。最下の19層は黒色土であるが、黄色土のブロックを含んでおり、全体が旧表土とは考えにくい、下半は旧表土の可能性はある。

石垣（図23） 斜面下方では石垣を長さ5.5mにわたって検出した。ほぼ直線をなし、北端では直角に曲がって約80cm墳丘側に伸びる。立面は南西側から北東側にむかって下降する。崩落箇所も多く、最も遺存状態のよい箇所では高さは40cmである。石垣は横目地が通るように積まれている。調査範囲南西端に近い箇所には幅80cm以上、厚さ35cmの板石が用いられているが、元は第1列石の用材であったと

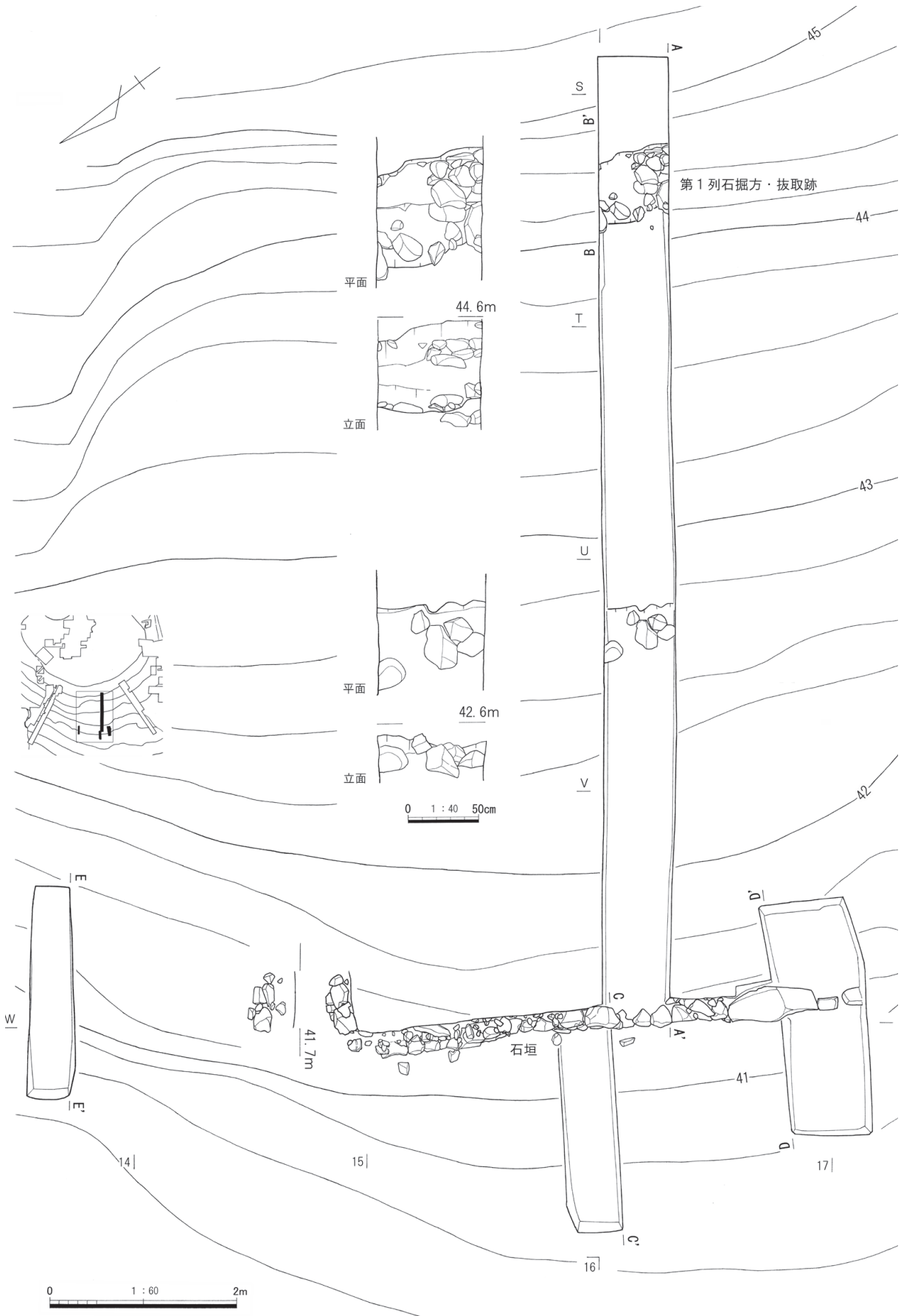


図22 北西斜面 1 : 60、1 : 40



図23 北西斜面断面・面壁石垣立面 1:60

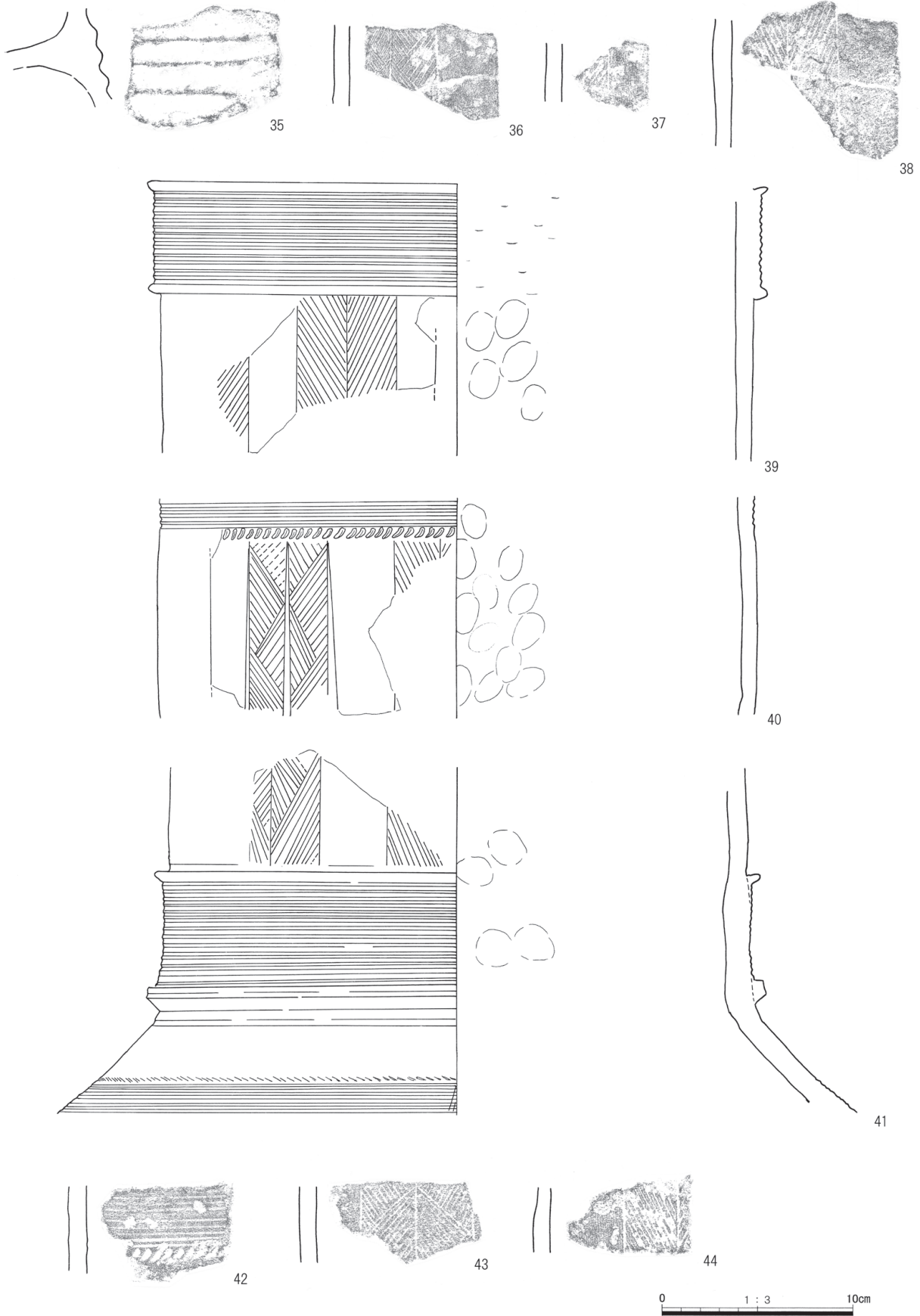


図24 北西斜面出土遺物(1) 1:3

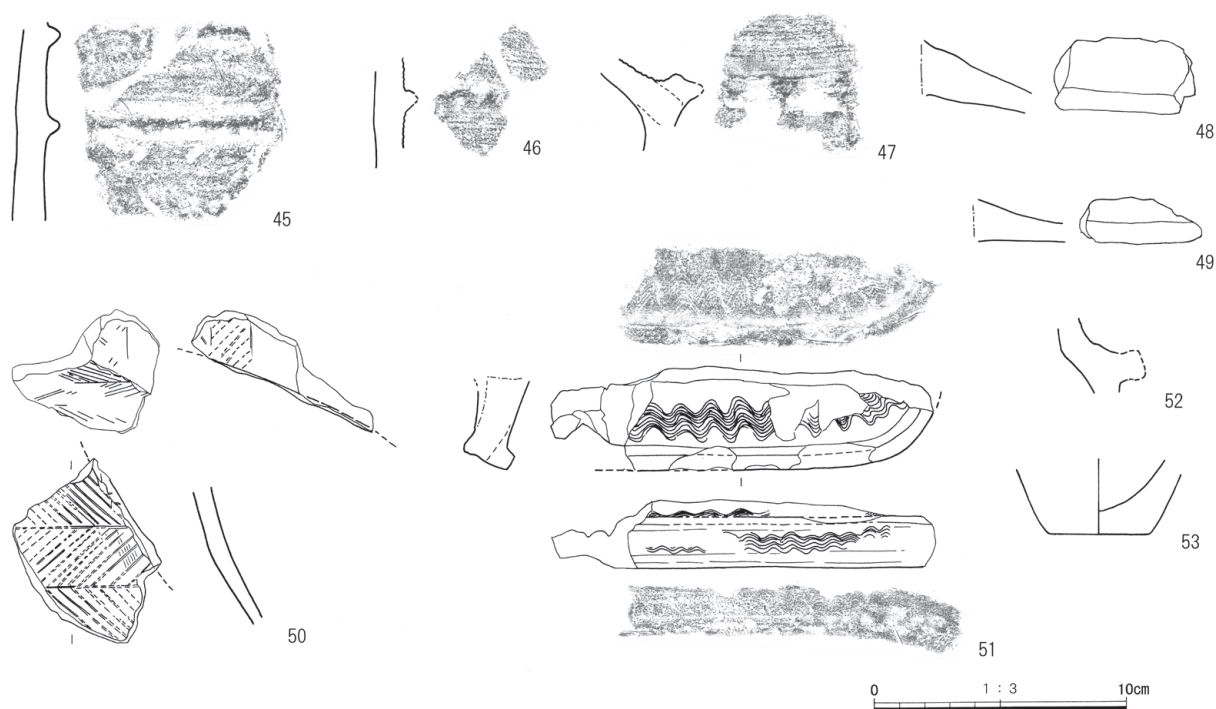


図25 北西斜面出土遺物(2) 1 : 3

みてよい(列石20)。根石は上面をそろえて設置されるが大小さまざまで、大きいものは基盤層上面を掘り込んで置かれる。石垣が受ける土(A5・7層)は円礫や中世土器を含む墳丘墓の流土で、石垣の間にも円礫が入ることから、中世以後に設けられたことが明らかで、上方の平面形が方形になる地形改変とあわせ畑の石垣と判断した。石垣の外側には整地と推定される層(D5・6層)が広がる部分もあり、下方にも畑が設けられた可能性が強い。

このほか、石垣裏側では規模の大きな掘削があるが、流土を掘削しており中世以降である。

なお、A21・22層は南壁ではあまり明瞭ではないが、厚さ5cm前後の黒色土と2~3cmの黄褐色土の薄層が互層をなし、円礫は含まない。人為的に形成された互層とは考えにくく、墳丘墓築造前の堆積層と判断する。

石垣北側斜面 石垣の北に設定したE断面トレンチでは、北西端では掘削が見られるが、それ以外は地形改変を受けていない。E5層は特殊器台片等を含むが中世の土器を含んでおらず、早い時期の流土層とみられる。

以上のように、石垣は墳丘墓には関わらないことが判明した。墳丘墓の遺構では第1列石の位置を把握できたが、第2列石は畑の造成による削平のため情報を得ることはできなかった。石垣の裏側41.3mで平坦部が見られ上に厚い流土が形成されており、この位置を墳端と推定する。

b 出土遺物(図24・25)

出土状況 中央トレンチ上端からの出土は少なく、大形の破片がまとまるのは第1列石掘方の下方(U17)のA6層・5層である。特殊器台36~44、家形土器50・51、不明48がここから、特殊器台口縁部35はその下方V17の出土であり、元は円礫敷付近にあった可能性が強い。これら以外の特殊器台45・46、不明49・52、甕53はトレンチの下方(W17)、特殊器台脚部47は石垣付近からの出土である。

特殊器台 特殊器台35~44は同一個体と判断できる。文様帯部分の直径は31cm前後である。間帯は、粘土の貼り付けによって肥厚させる39・41と、肥厚させず平行沈線と列点文を施す40(42)がある。

文様は斜線文と複合斜線文があり、36・43では複合斜線文はかなり緩い角度で斜線を入れており、文様帯幅が狭くなる上部の破片とみられる。長方形の透かし孔をもち、39・40からこの区画は無文であることがわかる。内面調整はナデで、浅い指頭押圧が見られる破片が多く、39の上部ではその上に爪跡が点在する。口縁部35は器表の状態はよくないが、波板状に突帯が配されており、突帯のみが装飾となるようである。丹塗りが見られる破片はない。明黄褐色～明赤褐色で、2mm以下の石英・長石粒を含み、特殊器台C類のまとまった資料である。

45～47は特殊器台A類で、間帯45・46、脚部47がある。小片で保存状態もよくなく、斜面上方から落下したものである。52は胎土Aであるが、特殊器台とは考えにくい脚部破片である。

甕53はしっかりした平底で器壁も厚く、墳丘墓よりも古い時期の遺物が畑に關係して混入した可能性が高い。保存不良で調整は明確でない。

家形土器 50は家形土器の屋根部分である。寄棟で急角度に立ち上がる。水平に3段に区画して斜線文を向きを違えて配している。胎土Cである。51(図版36-3)は鱗状の破片で右端が弧をなしており、内側は垂直の面から剥離した状況を示す。箱形の土器の側面に貼り付けられた部位で、家形土器の一部である。50と同一個体とみてよい。50とは施文が異なっており、軒ではなく家形埴輪の裾廻台に相当する部位で、家形が載る器台部分の受け部先端になると思われる。下面側は粘土を薄く貼り加えている。上面は端を方形に突出させ、その内側に櫛描波状文を配する。側面にも櫛描波状文をめぐらせる。薄い赤褐色～黒灰色を呈する。48は垂直の面に貼り付けられた部位の小片で、接合部で剥脱している。通常の土器にはない形状であり家形土器の一部と考えるが、破片の上下、また、どの部位になるかなどは不明である。出土位置と胎土から50・51と同一個体と思われる。これよりもやや小さい49は48と同様の破片である。

4 西斜面

a 調査区の状況と検出遺構(図26・27、図版7)

調査区の状況 円丘部斜面の上端45mから墳丘裾40.6mに至るトレンチを設定した。調査区付近の墳丘の保存状態は良好であるが、列石等は遺存していない。斜面の傾斜は18°とやや緩やかである。

墳丘斜面には20～45cmの厚さの流土が堆積しており、その下層(図27 A 8層)ではトレンチの上方で長さ6mにわたって円礫が濃密に散在する。円礫の間には弥生土器、中世土器、長さ20cm程度の角礫も認められた。円礫の溜まりは一部は後述の第1列石抜取跡・掘方と第2列石抜取跡・掘方の間にも見られるが、主に第2列石抜取跡・掘方の下方に形成されている。円礫敷が崩れて下方に堆積したとみてよい。

なお、トレンチ下方、西端部分に示した礫は地山(A20層)中の風化の進んだ花崗岩類礫で、5～20cmのものがまとまりを示す。北斜面調査区下方の礫との比較のため図示した。

第1列石抜取跡・掘方 トレンチの上端で検出した。墳頂平坦面肩から3.2m外側、1.5m低い位置である。幅1.0m前後、上方からの深さ44～54cmで、断面は墳頂側が急角度に下がる。埋土はブロックを多く含む黒色土で、内部には長さ10～30cmの礫が多数配されており、第1列石の根石とみてよい。掘方埋土中層(図27 A14層)は墳丘盛土下層として上外側に続いているが、これは北西斜面第1列石掘方(図23)で見られた状況と同じである。南壁断面では抜取跡が掘方埋土上部を掘削するが、北壁(A断面)では根による攪乱を除けばそうした状況はなく、このトレンチ北側部分に用いられた列石材が小さかったか、石材と石材の間にあたるかで埋土が遺存したとみられる。

第2列石抜取跡・掘方 第2列石抜取跡・掘方は第1列石のその端から2.1m外側で検出した。北

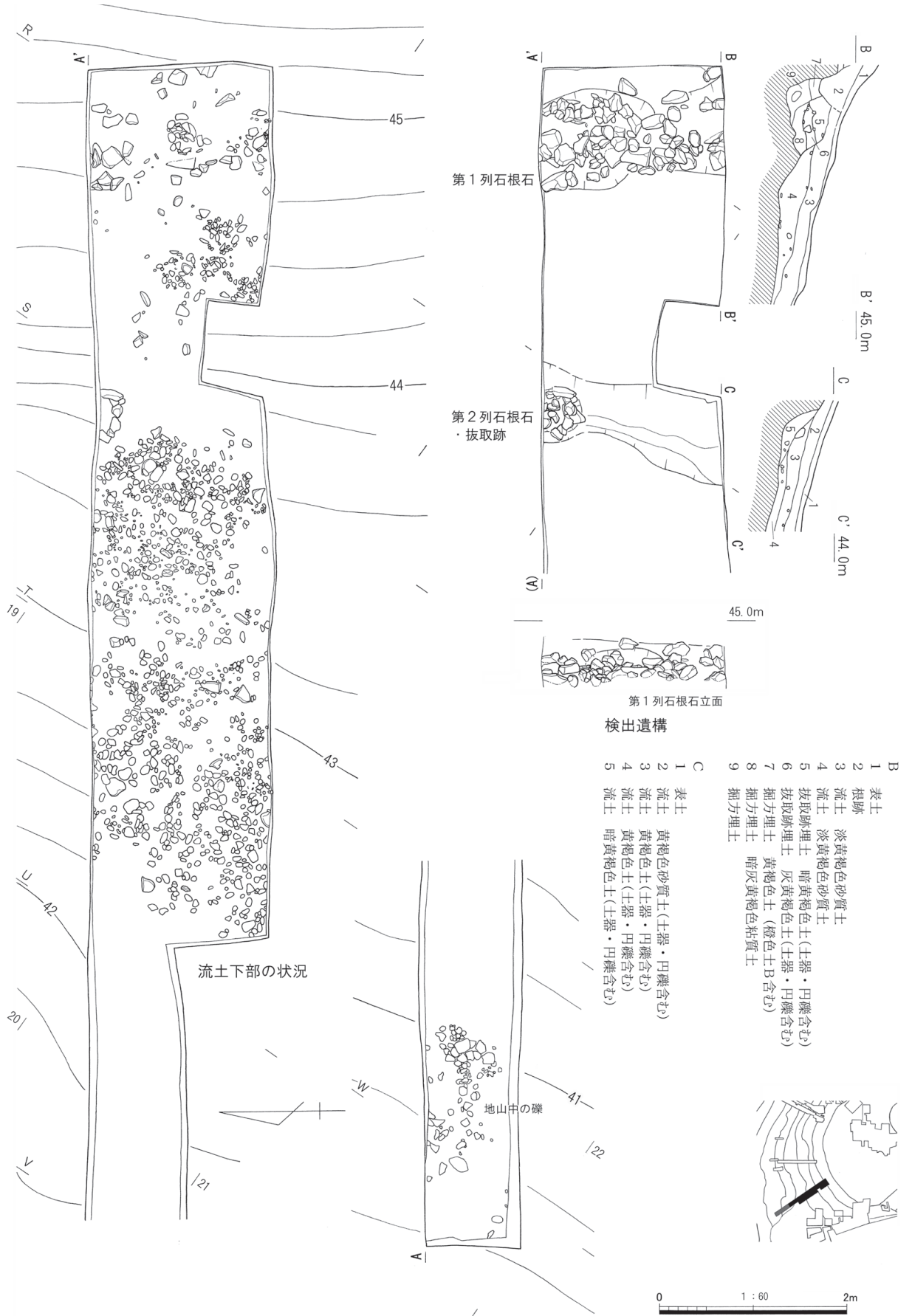


図26 西斜面 1 : 60

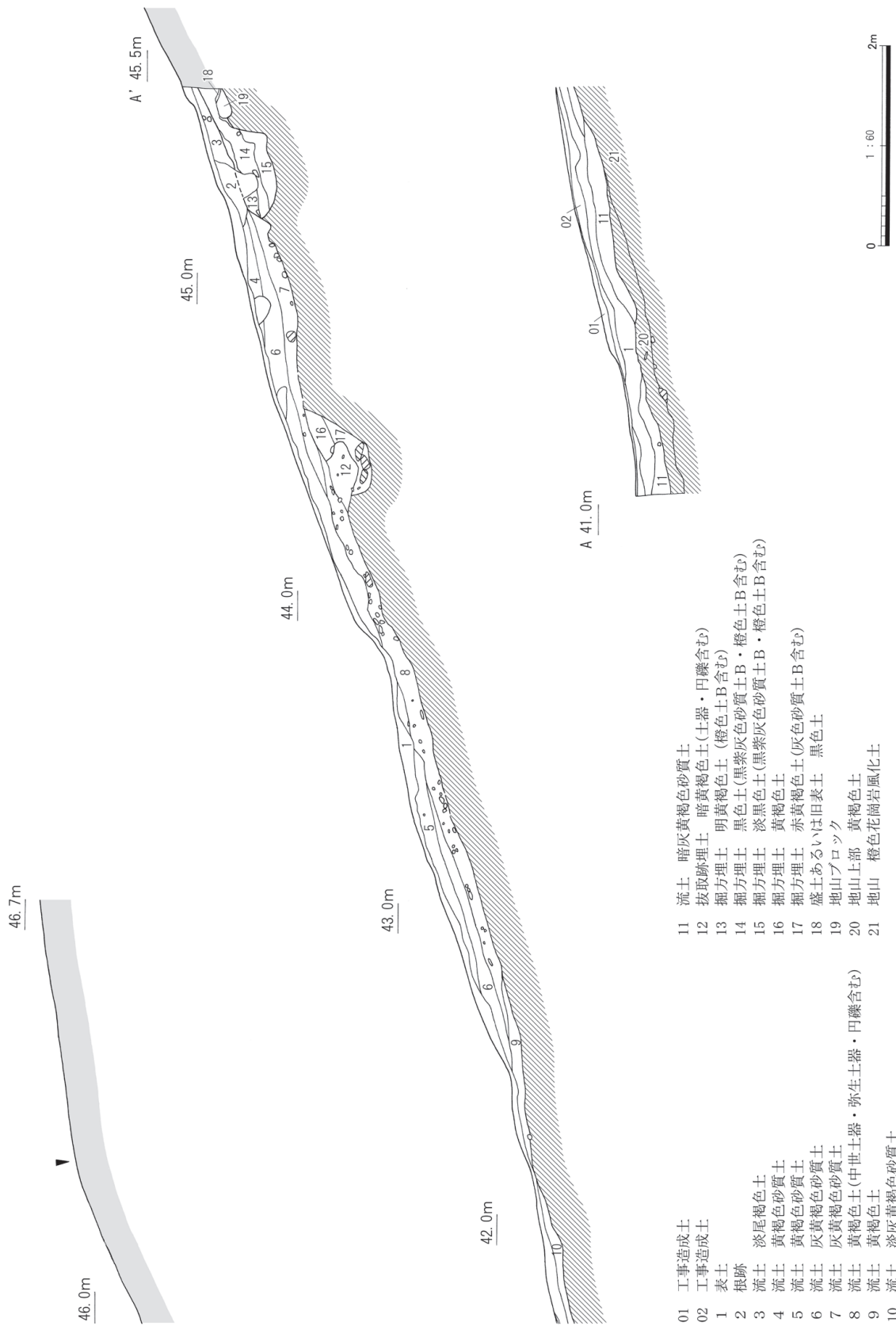


図27 西斜面断面 1 : 60

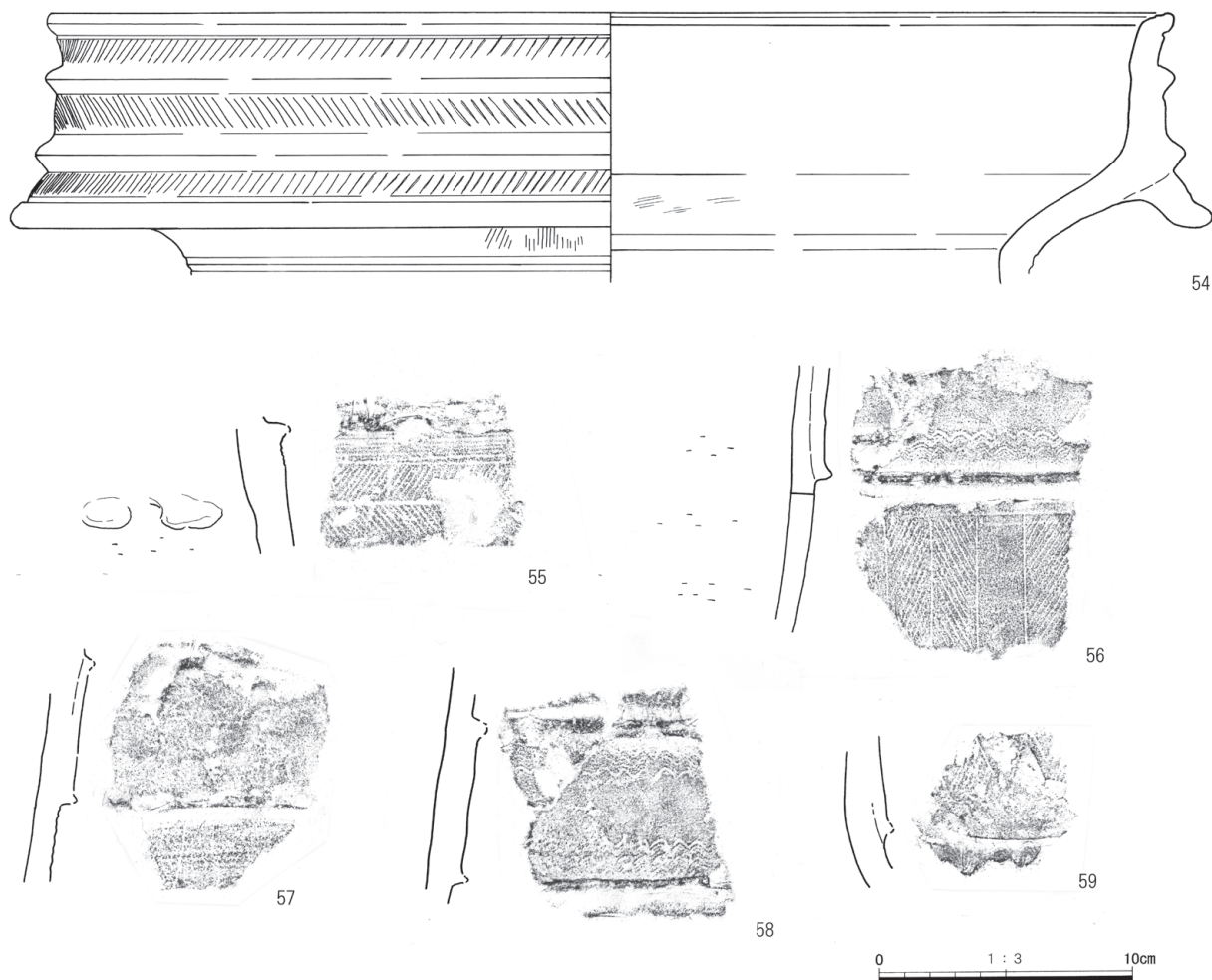


図28 西斜面出土遺物 1 : 3

端では掘方の下部が遺存するが、それよりも南は浅い抜取跡となる。第1列石抜取跡・掘方とほぼ平行する幅55～87cmの溝状で、南側（C断面）ではテラス状になる。深さは上方側から40cmであるが、トレンチの北側ではトレンチ北壁に向かって土坑状にさらに20cm深くなり、抜取跡（A12層）を囲むように10～30cmの礫が部分によっては重なって所在しており、遺存した根石と判断できる。2つの列石の抜取跡・掘方の間隔は2.9mである。

墳端 トレンチ上端から下方9.5m、高さ41.75mの位置に幅1.3mにわたってやや平坦になる部分があり、墳端位置と考えることができる。

b 出土遺物

特殊器台（図28） 流土中から特殊器台をはじめとする土器類が出土した。54～59は特殊器台C類で、破片によって色調や状態に差があるが、内面調整の浅い右ヘラケズリは共通しており、同一個体と判断できる。口縁部54は口縁拡張部を2本の突帯と上下両端の突出とで3段に区画する。形状は同じC類の35とは異なりA類と同様であるが、楕円描波状文を主体とする施文ではなくヘラによる斜め斜線であり、上下の端部・突帯が太く丸み強い点も異なる。破片の下端、筒部の上端位置には沈線2本が見られる。

間帯は6～7cmと狭く、粘土の貼り付けによって形成し、上下両端を細く突出させる。間帯が剥離している破片が多いが、剥離によって現れた筒部外面にはハケメは見られない。55は破片内面下半までがヘラケズリ、上部はナデで、最上段の間帯破片である。間帯を水平に区画して斜線文を対向させ

て入れ、その上側には櫛状工具による細かい平行沈線を配する。57は間帯表面の状態が不良のため明らかでないが、56や58では間帯の上下両側に細かい櫛描波状文を配している。文様帯は56では縦に細く分割し無文区画を挟んで斜線文を配する。状態がよくないため未掲載とした破片には長方形の透かし孔があり、その箇所には鋸歯文は入れていない。そうした分割型のほか、文様帯に平行沈線を配する57がある。59は遺存状態がよくない破片であるが、最下段の間帯付近である。間帯に鋸歯文を配し、その下と破片下端の屈曲部に56・58に見られるのと同様の細かい櫛描波状文を配している。

文様帯と間帯をあまり区分せず施文する特殊器台C類の特徴をよく示す資料である。54頸部の復元径から筒部は太いとみられるが、間帯の狭さから器高はそれほど高くないと推定できる。

この調査区からはこれ以外に特殊器台A類の筒部、脚部破片も出土している。

5 南東斜面

a 調査区の状況

墳丘南東側の構造を把握するため、第2次調査で発掘した。この付近では墳頂平坦面の肩は明瞭でなく調査範囲の上部は緩やかな傾斜を示し、調査域の中ほど付近から25~30°の斜面となる。斜面の下側、Dライン付近から南側は緩斜面となる。草木の繁茂もあってわかりにくくなっているが、調査域下端付近よりも下側には畑の跡が見られる。

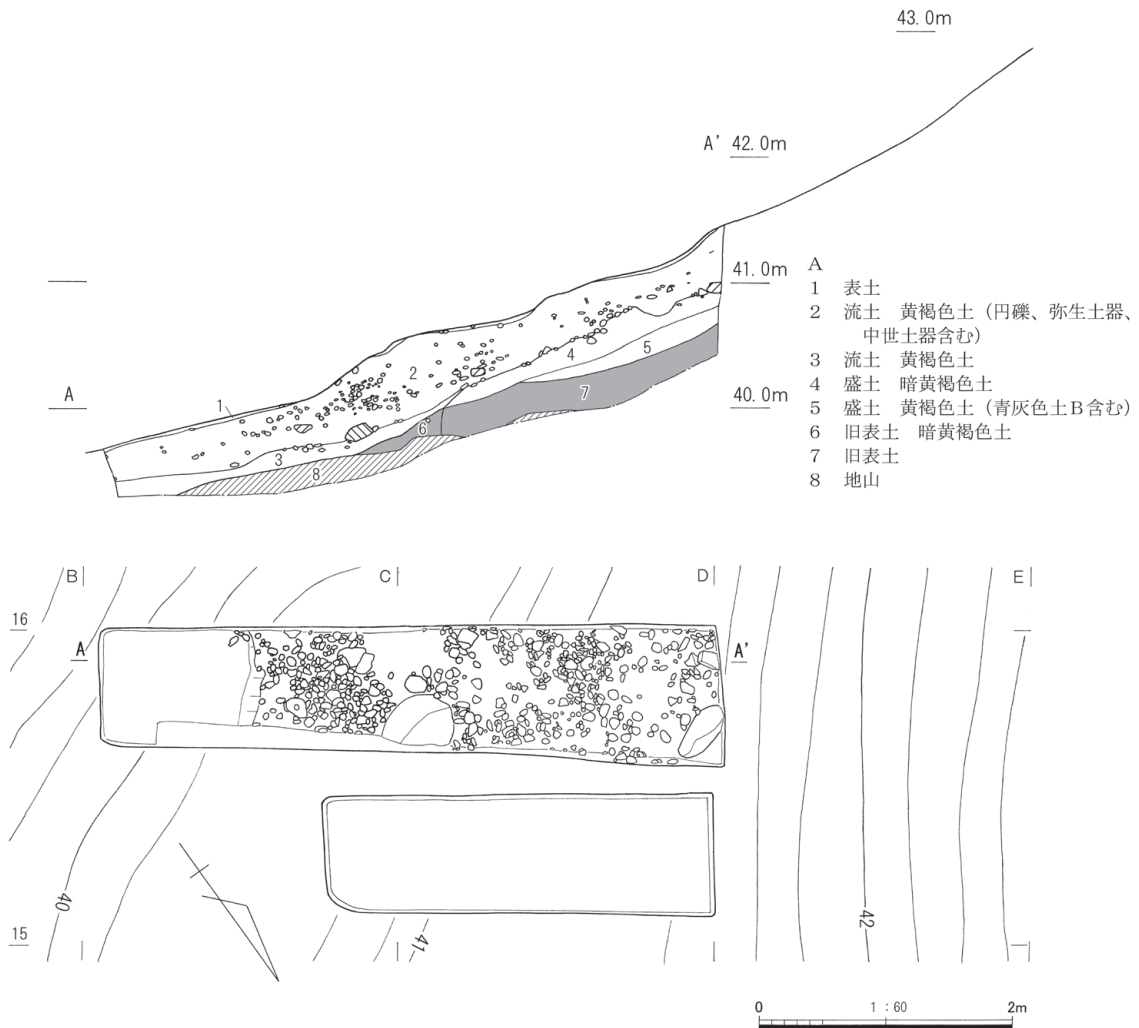


図29 南東斜面(1) 1 : 60

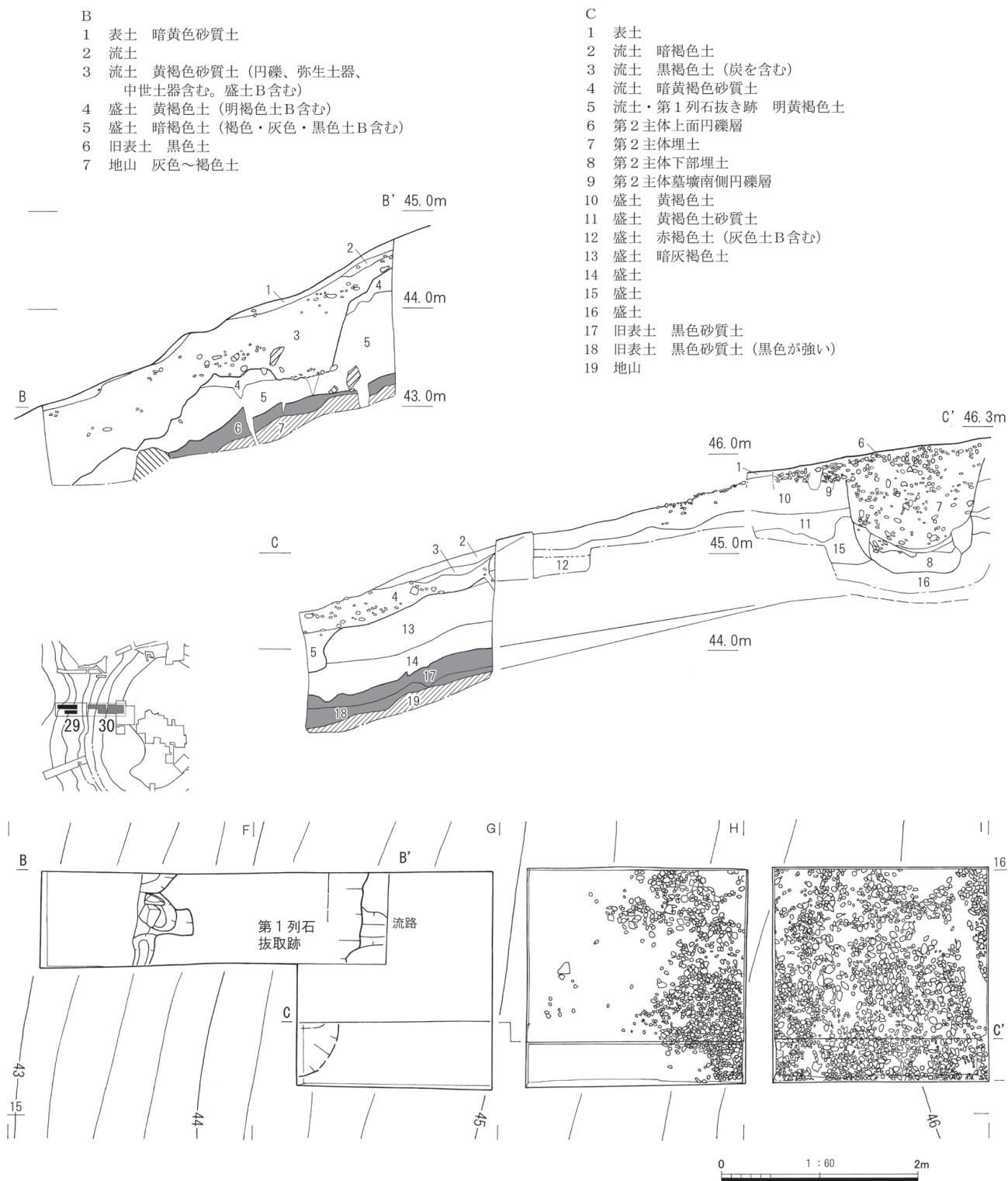


図30 南東斜面(2) 1 : 60

上端のI16で第2主体を検出したが、これについては第5章で記載する。

流土 (図29・30) 斜面の上部にあたるH・I16では厚さ5cm前後の表土・流土下で円礫面を検出した。その下方のF・G16では流土層が厚くなる。円礫を多量に含んでおり、G16の掘り下げ初期には斜面下方側を中心に疎らながら円礫敷を思わせる状況を呈した。C3層下面では炭片を含む黒色土が浅い皿状に広がる。この層およびC4層には近世瓦片も含まれており、これらの層は新しい時期の堆積である。

南西のF・G16トレンチ (B断面) と北東のG16トレンチ (C断面) では第1列石抜取跡を検出した。第1列石抜取跡を埋める流土 (図30 B3層) には円礫のほか25cm前後の角礫や、盛土のブロックが多数含まれていた。この部分の下方にも流土は厚く堆積する。F・G16トレンチでは抜取跡が埋没した段階で第1列石抜取跡肩部から埋土上面にかけて形成された溝を検出した。断面はV字形に近く、その埋土には円礫を多量に含む。流路が形成されて円礫などが上から流れ込んだとみられる状況であり、ここから脚付直口壺112が出土した。

調査区下端 (C・D16) では厚さ30~55cmの流土 (図29 A2層) が堆積する。多量の円礫を含み、その量は下部で多くなる傾向にあり、平面図に示すように層の下面では円礫敷に近い状況を呈した。また、円礫に混じって長さ30cm以下の角礫もかなり見られた。A3層では円礫の包含は少なくなるが、土質や色調は上のA2層と似ており、築造初期の堆積とはみなしがたいと判断した。トレンチ下端になるA断面南東ではA2層の円礫の含有が少なくなり、平面図でも円礫がなくなる。この箇所の下面は平坦で、墳丘側で小さな段を示すことから、調査時には認識しなかったが、畑の掘削によって円礫の堆積が失われた可能性が強い。なお、南西側トレンチの中央には地山の大石が露出しており、平面図には示していないが同様の大石は上のF・G16の盛土下にも所在する。

A2・3層では墳丘墓に伴う土器の出土が多く、北東のトレンチの墳丘寄りでは土器溜まり状をなして家形土器の大形破片や特殊器台片などが出土した。ただし、中世の瓦片や須恵器片も出土しており、木の根による小片の移動を考慮する必要があるが流土の最下部まで少量ながら中世の土器が混じっていた。墳丘の裾に形成された厚い流土層、A2・3層は、墳丘斜面に設けられた第1・第2列石間の円礫敷の崩落に、中世の土器や瓦片も包含することから墳頂部の円礫と盛土の流出が加わって形成されたと考えられる。

b 検出遺構 (図29・30)

第1列石抜取跡 調査区の中ほど、F・G16トレンチ (B断面) とG16トレンチ (C断面) で検出した。墳丘側上端からの深さ70cmで、墳頂側は急角度に下がり底面は若干凹凸をもつが幅1.2mのテラス状をなす。2つのトレンチにかかる形で検出したが、G16トレンチで掘り込みの上端は南東に向かう。形状と位置から、第1列石を抜き取った跡と判断でき、掘削の大きさから斜面立石を取った跡の可能性もある。南東斜面に残存する立石との関係を考えるためあえて復元すれば、流土の厚さを考慮する必要もあるが30°程度傾いて石材が遺存していた場合、43.8m付近に石材下面が露出していたことになるだろう。

抜取跡底面奥端に近接した箇所の盛土には長さ20cm前後の大形円礫や角礫が含まれていた。立石の根石の広がり末端が遺存した可能性が強いが、これを収める掘方は検出していないことから、墳丘の構築と一連で第1列石が設けられ、列石下の盛土に礫が配されたと考えられる。

第1列石抜取跡の下方、F16中央の盛土上面では、第1列石の抜取跡と平行する幅25~40cmの溝状のくぼみを検出した。不整形な土坑が接続したような形状で、深さは20cm前後、埋土は黒色粘質土である。検出範囲の中ほどにあたる箇所では長さ20cm前後の礫2点を検出した。この礫よりも南西側は

やや深くなって流土が入っており抜取跡あるいは石材脱落跡とみられる。北東の部分についても抜取跡等の可能性を考えておく。遺構の浅さから、この付近は墳丘がかなり流出しており、遺構の下部が遺存したとみられる。この位置に礫が列をなして配されていたと考えられ、第2列石の根石あるいは墳丘内列石のいずれかとなる。前者であってこの石列が第2列石の位置を示すとした場合、第1列石まで約1.6mで、2つの列石の間隔が他の箇所にくらべて狭くなることや、西斜面調査区などで検出した根石の状況とは異なることから、後者の可能性を考えておく。

墳丘盛土 墳丘斜面全体が盛土によって構築されていることが判明した。調査範囲の上端になる第2主体付近で盛土は1.2～1.6mと最も厚く、厚さを減じながら墳丘裾近くに達する。盛土は大きくは上部のB4層、C10・11層が黄褐色、下部のB5層、C12～14層は暗褐色で褐色土・灰色土・黒色土のブロックを含む。盛土下の旧表土は斜面上部で10～20cmの厚さであるが、下方ではさらに厚さを増す。墳裾の土層A6層は盛土A4層にも似るが、旧表土A7層が風化して形成されたと考える。A6層の外端で墳丘斜面の傾斜が変わり緩傾斜となることから、この位置を墳端と判断する。高さは39.1mである。

以上のように、墳丘斜面の施設は失われていたが、墳丘の概要を知ることが可能であった。墳丘上面の遺存状態は全般によくはないものの、墳裾付近では大きな変更はない。墳端の外側は狭い緩斜面となる。

c 出土遺物 (図31～33)

出土状況 遺物の大部分は調査区の南東下端(C・D16)から円礫と混在した状態で出土しており、85や103などは小規模な土器溜まりの状態をなしていた。上側の第1列石抜取跡付近で出土したのは67・73・76・79・104・111・112・113で量は少ない。そのうちの104と同一個体になるとみてよい破片が南東下端C・D16からまとまって出土しており、列石材の抜取りによって完全に失われているが、ここに設けられた円礫敷付近の遺物が墳裾に落下、堆積したと判断できる。もちろん、さらに上方の遺物も含まれるとみられる。また、第1列石抜跡付近出土の脚付直口壺112は、前述の出土状況から上方から大量の円礫とともに流下したと考えられ、第2主体付近が元位置になる可能性が高い。

出土土器は小片が多く、保存状態は必ずしもよくない。長頸壺、特殊器台、特殊壺、家形土器などが主で、高杯等は少ない。

長頸壺 長頸壺60は、胎土、色調から図示した上下の破片が同一個体と判断した。受け部内面はナデ、同外面はヘラミガキである。頸部の沈線は、斜めになったりつなぎ目が食い違うなど整ったものではない。全体に器壁は厚めである。これ以外に長頸壺や壺は61・62、64～66がある。63は器台の可能性もある口縁部破片で、ヘラミガキがなされた受け部内面に二枚貝の腹部を用いた押圧がなされる。61・63以外は胎土Bに類似し丹塗りが残る。61も丹塗りである。

特殊壺 67～72がある。68～72が暗褐色の胎土で角閃石粒を含む胎土B。突帯が細いものが多く、幅が広い71は中段突帯と思われる。67は赤褐色で角閃石粒は見られない。胎土Aに似るものの、胎土・色調が異なる。3条の突帯をもつと思われ、突帯間は無文である。

73は広口の器種の小片で、鉢と思われる。内面にはナデ調整に先行するヘラケズリが部分的に見られる。胎土A。なお、67・68・73・111は調整等の表示のために小片からの作図である。

特殊器台 特殊器台は3つのグループからなる。74～84がその1で、赤褐色で石英、長石粒を含み、本遺跡で中心となるA類である。間帯の破片74～76、79～82のうち82では突帯の間に施された櫛描波状文がわずかに残る。77は脚上端部から筒部に移行する箇所であるが、全面に平行沈線が入る。裾部78には平行沈線と列点文がある。脚部は83・84がある。小片が多く、80・81のような保存状態がよく

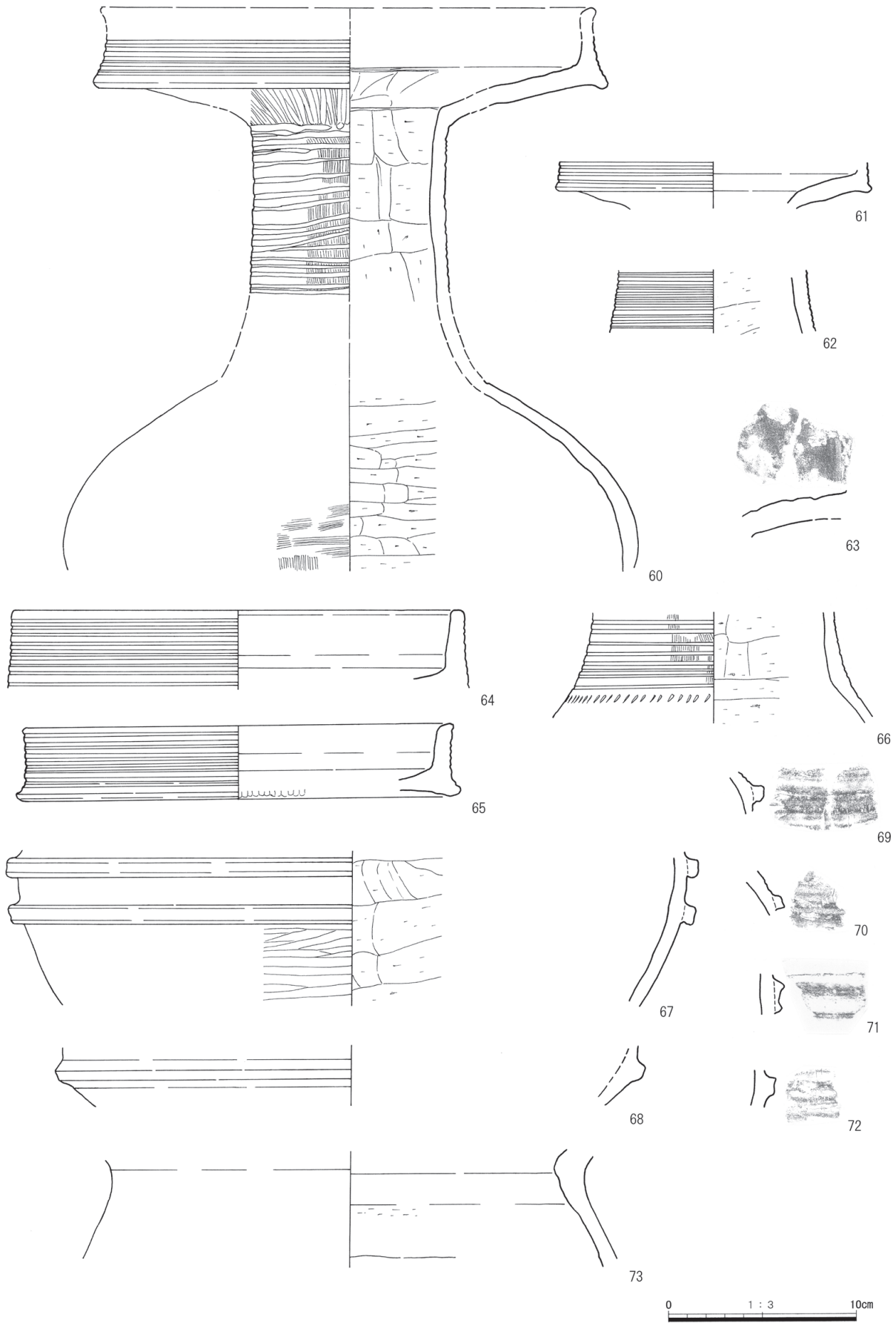


図31 南東斜面出土遺物(1) 1 : 3

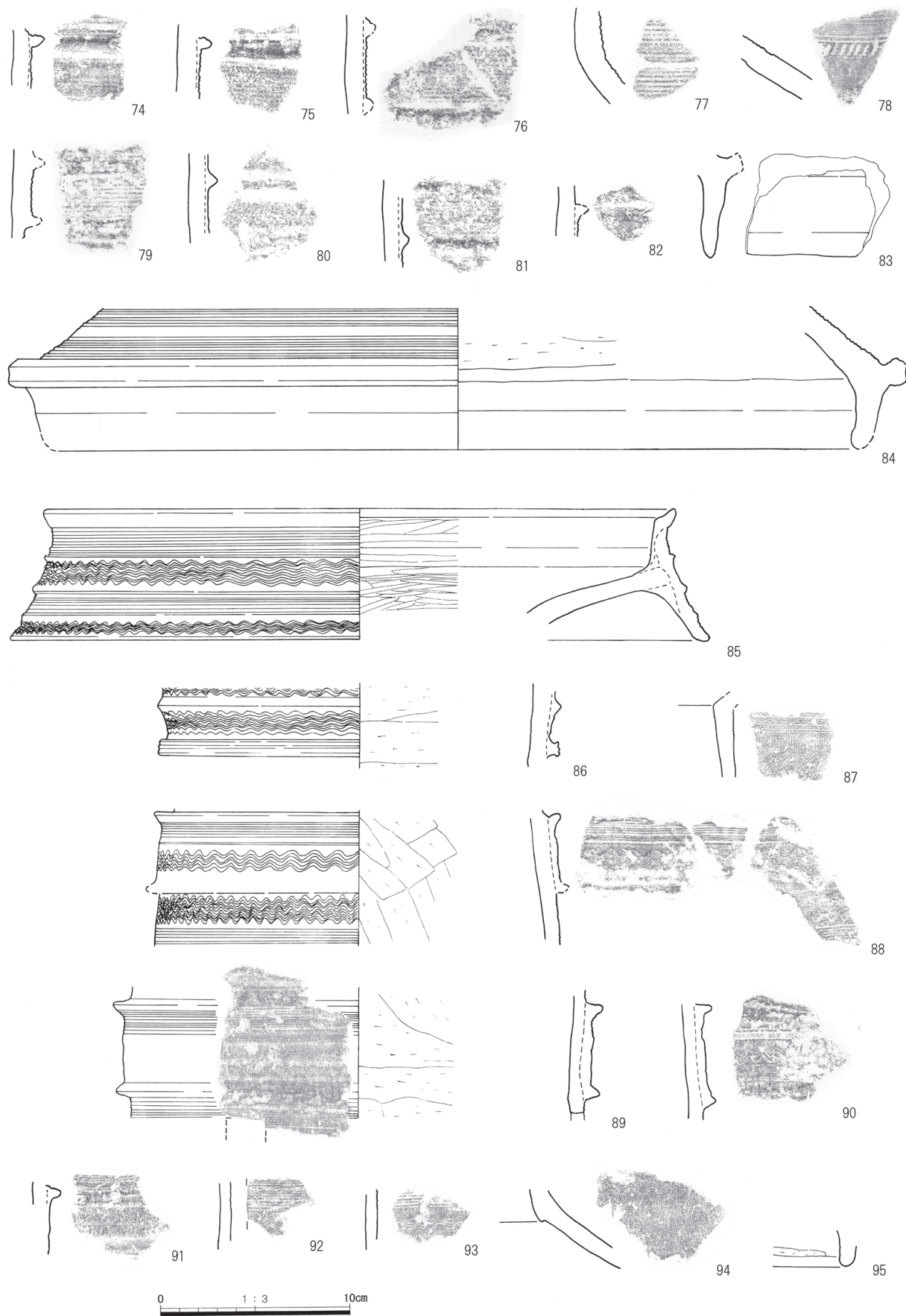


图32 南東斜面出土遺物(2) 1:3

ないものが主体を占める。

第2が85～95で、明赤褐色～黄褐色を呈し石英、長石粒を含むC類である。丹塗りは見られない。口縁部85と筒部上端87が接続する可能性はないため、複数の個体からなると判断した。87・89～95が同一個体とみられる。筒部の器壁は薄く、脚裾部93や脚端95は著しく薄く小形であることから、かなり小さな特殊器台であったと思われる。間帯は貼り付けによって形成し、上下の両端を突出させる。間帯、文様帯ともに櫛状工具による波状文と平行沈線文が施されており、間帯と文様帯で文様の差はない。89の下端、92の左縁で長方形透かし孔が見られるが、透かし孔は文様とは関係をもたない。裾部94は上端に櫛描波状文が施される。筒部の内面調整はヘラケズリを基本とするが、94の上部はヨコハケである。筒部86・88は小片からではあるが復元径が89よりも小さいため上記とは別の個体と考えた。文様は上記と同一で、88は間帯の形状も同じであるが、86では断面方形の突帯の上方に低い突帯を配する。口縁部85はこの個体の口縁部と考えた。広い口縁拡張部を突帯で4段に区画し、櫛描きの平行沈線と波状文を配しており、断面形、施文ともA類と同様ながら、大きさははるかに小さい。

第3が96～98で、暗褐色を呈し角閃石粒を含むB類である。出土量は少なく、間帯96、複合斜線文の文様帯97、脚部98などがある。

家形土器 99～110は板状破片などからなる器種で、家形土器と判断した。これらのうち103・105は傾きを判断できるが、他の小片は不明のため任意に置いている。106・108は図示した傾きの可能性を考えたが、確実ではない。

99は100以下とは別固体の小片で、黄褐色で複合斜線文を刻む。下部は貼り付けられたものが剥がれているようにも見えるがはっきりしない。

100～110は特殊器台A類と同一の胎土、色調である。103が最も大きな破片である。緩やかな弧を描く破片であり、きわめて大きな製品と考えることもできるが、断面図に示すように、左側では内側に粘土が貼り足されて厚くなっていて均等な断面をなさない。左側の先で別の部材と接合するために粘土が加えられたと推定でき、平面形は胴張りをもつ方形になるとみられる。破片下端は接合部で剥離しており、下側の部材にこの部分を載せるようにして製作している。上面の外側には突帯をめぐらせ、その内側に粘土を貼り足して幅広の段を形成している。突帯の上面には櫛状工具による列点文、段部分には櫛描波状文が施されており、形状や施文は特殊器台A類の口縁部に似る。器壁が薄くなる上方には斜線文を入れる。側面に施される斜線文の下で器面がわずかに外反することから、下を突帯がめぐるとみられる。内面調整はナデと指頭押圧である。105は103と同一の部位であるが、側面の斜線文が右下がりになる点が異なり、103とは別の辺になるみてよい。

100～102・104は厚さ7mm前後の板状の破片で、103・105の上側になるとと思われる。いずれも斜線文が施されるが、104では1本、102では3本からなる区画線があり、それを隔てて斜線文が向きを違えて配されており、家形土器の屋根部分50と同様の施文である。内面調整がナデのものとヘラケズリのものがあり、下方がナデ、上方がヘラケズリになるとと思われる。斜め上方にのびる部分が屋根と考えられることと胴張りのある平面形から、103・105は家形土器の軒部分と判断した。軒の出が表現されず、かわって突帯が設けられており写実性を全く欠く。胴張りのある平面形は直後の時期となる後期末葉の竪穴建物の特徴であり、この土器は竪穴建物と考えることができる。

一方、107は破片の長軸に沿って3本で構成される区画線を入れてその両側に斜線文を刻み、108では2本で構成されるとみられる区画線の間斜線文を入れる。この2点は、内面に別の部材との接合のために付加した粘土が見られる。断面形が斜めの三角形をなす粘土が破片の長軸方向に貼り付けてあり、その広い方の面にはヘラケズリが施され、もう一方の面はきれいな剥離面をなす。107は傾

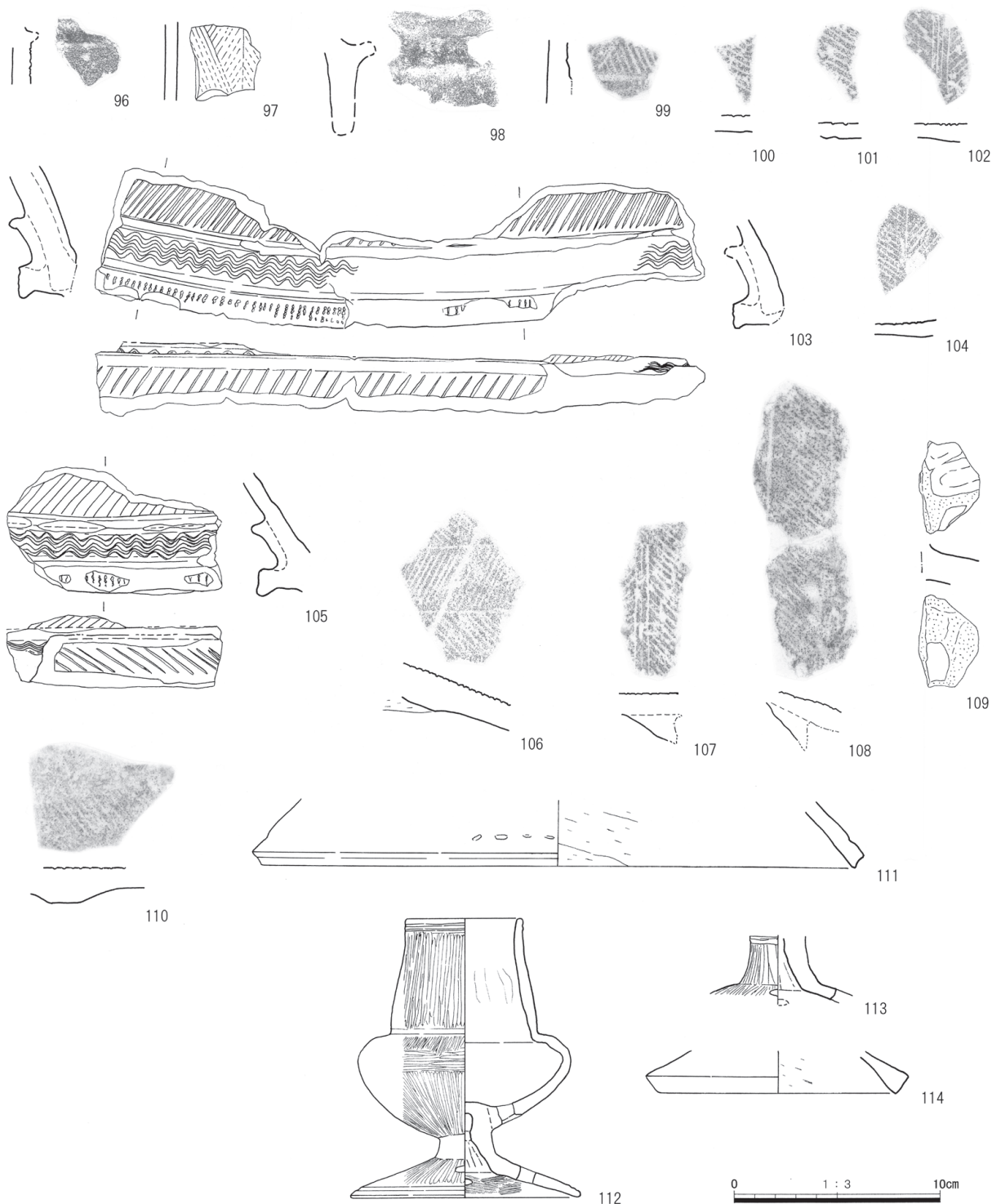


図33 南東斜面出土遺物(3) 1 : 3

きを判断しにくいいため水平に置いており、108は下になる部材の先端内側が垂直であったとした場合の傾きで示した。剥離面の形状が均一でないこともあって傾きを確定することはむずかしいが、下側の部材と角度を変えて斜めになるように粘土板を接合したことは确实であり、先の103・105とは別の、屋根が壁に接する部分と判断した。これら2点の上面は平板で曲面をもっておらず、掘立柱建物の形状と考えることができる。

106・110は内面に低く底面幅の広い突帯状の部分を作り出している。110は施文部分の残存範囲が

狭いため斜線文の存在しかわからないが、106では向きを違えた斜線文を3段連ねる（図版36-3）。106は器壁がやや厚く、内面の突帯状部分の上面にヘラケズリを加えている。109は上下両面に指頭押圧を加えたもので、破片左側の別部材との接合面で剥離している。これらは2個体の家形土器のいずれかと同一個体になると思われるが、その部位や破片の上下は不明である。

以上の破片は、かなり大きいとみられる家形土器に対して量が少なく、原形を推定することはむずかしい。小片99についてはさらに別の家形土器になると確定することはむずかしいため、ここでは2個体の家形土器の出土としておく。

高杯ほか 111は器台の脚部と思われるが、通常の器台の脚端とは異なる形状で器壁も薄い。胎土A。脚付直口壺112は遺存状態が良好で、器形の全体を把握できる。胴部径と頸部径の差は小さく、口頸部が比較的長い。外面調整はヘラミガキ、脚部下面の調整はヨコハケである。微砂をわずかに含む精良な胎土である。胴下半には焼成後の穿孔がなされるが、脚の上になる位置であり、細長い棒で内側から擦り切るようにして穿孔したと判断できる。頸部内面には朱を含む液の滴が付着した跡が1ヶ所見られる。113は脚付直口壺ないし高杯の脚部である。112・113の2点は調査区中ほどの第1列石抜取跡付近からの出土であるが保存状態もよく、第2主体埋土から流出した可能性が強い。114は脚端が断面三角形になる高杯Bである。他に小片のため図示していないが装飾高杯口縁部片がある。

以上のように、この調査区では出土土器は多様で量も多い。これらのうち特殊器台A類・B類は保存状態のよくない小片で、墳頂部から流出、堆積した可能性もある。破片がある程度まとまるのは長頸壺55、特殊器台85～95、家形土器103～110である。それらが置かれた位置は、家形土器の破片104が墳丘中ほどから出土したことから、墳丘斜面に設けられた円礫敷付近とみられる。中世土器等については第6章第3節で記載する。

6 東斜面

a 調査区の状況（図34）

調査位置は円丘部東側に設けられた石段の南側で、円丘部裾の傾斜変換部を中ほどにおさめるトレンチと、その東端から4.5m離れて墳丘外側の緩斜面に設定したトレンチからなる。墳丘斜面は東に下降するが、下側では小さな段が見られる。傾斜の変換は明瞭で、そこから東側は緩やかに下降する。**流土** 墳丘斜面にはかなり厚い流土層が形成されている。調査区の上方面になる墳頂平坦面の東側は墳頂の他の部分よりも低くなるが、ここから流出した土が東斜面に堆積したようである。A2層からA23層まで円礫・弥生土器・中世土器を含む。A3層上部からは瓦片がまとまって出土した。また、A24・25層は土坑状をなすが、土層断面の不規則な形状から根跡と判断した。これ以外にも調査区西半部地山面では根によるとみられる凹凸が多い。

調査区のほぼ全体にわたって畑が設けられていたことが判明した。中央から東にかけて下段の畑（A2～4層）があり、西にはA16層が耕作土になると考えられる上段の畑がある。A13層と17層の関係によっては順序が逆になるが、上段の畑は流土の堆積（A14・15層）によって上面が上昇して、墳丘側に1m拡張されたと考えておく。その後、さらに堆積が進んで最終的に表土が緩傾斜をなす41.0～42.0mの間が利用されたのであろう。東下側のトレンチ（B断面）では畑の跡は明確ではないが、B3層は耕作によって形成された可能性が考えられる。

斜面上端 トレンチ西側の斜面上端では特殊器台片と円礫が小規模な土器溜まりをなしていた。特殊器台片は大きく保存状態もよく、これを含むA27層は攪乱を受けていない堆積と判断できる。この部分の下位になるA29層は黒褐色土で、遺物・円礫を含まない。調査時には旧表土等の可能性も考慮

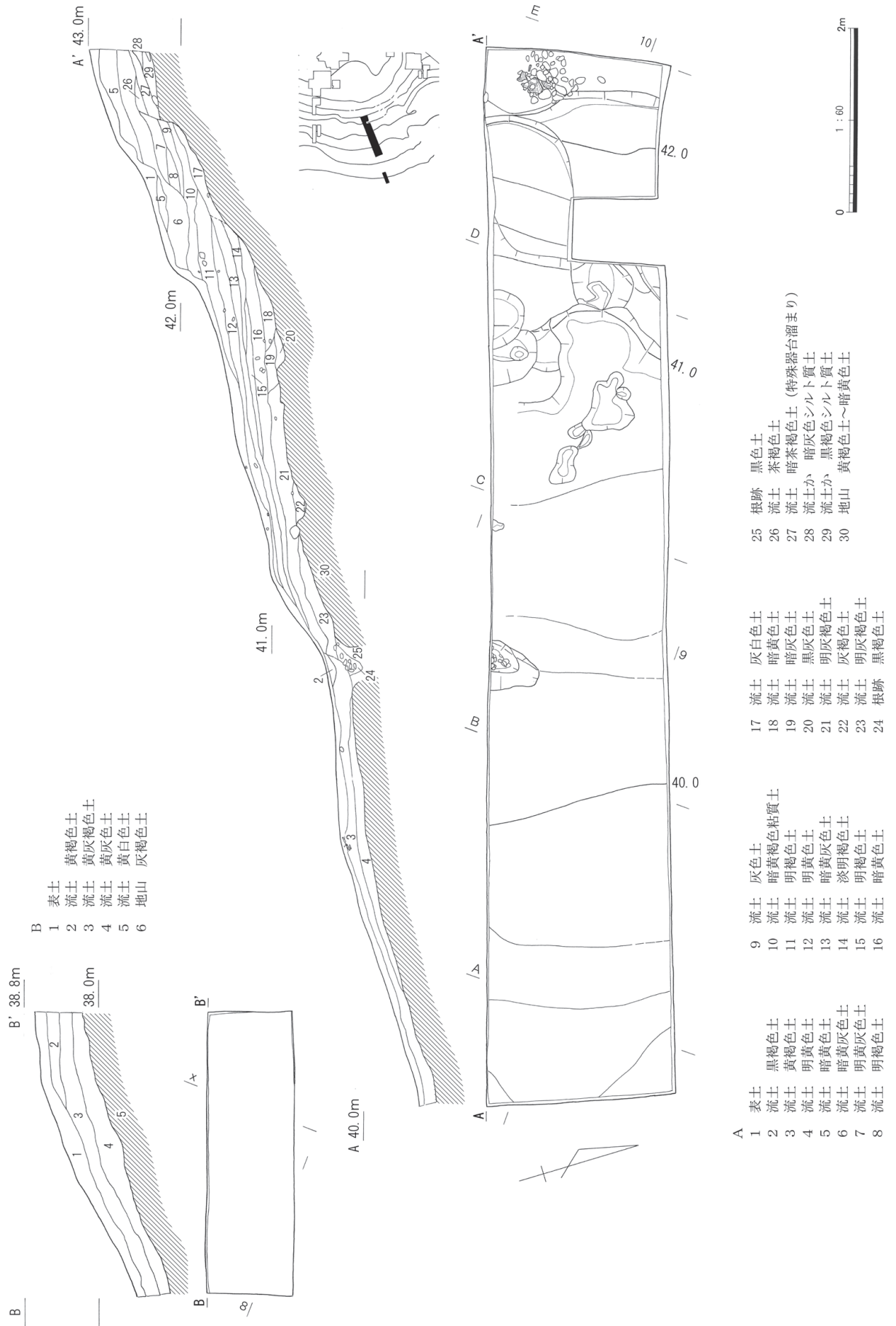


図34 東斜面 1 : 60

しつ断定に至らず流土としたが、墳丘盛土下の旧表土の端である可能性を考えておく。

以上のように、この調査区では畑の造成による削平のため、墳丘、墳端に関する情報は得られなかったが、上端の42.40mが盛土（A28層）端になる可能性がある。削平を考慮する必要があるが、傾斜変換は調査区西端から2.9mの位置で、高さ41.0mである。

b 出土遺物（図35）

115はトレンチ上端から出土した特殊器台である。破片下端の径は小さく、上に大きく開く筒部になるが、土器が歪んでいる可能性もある。上下とも分割型の文様帯であるが、上段左端の斜線文区画

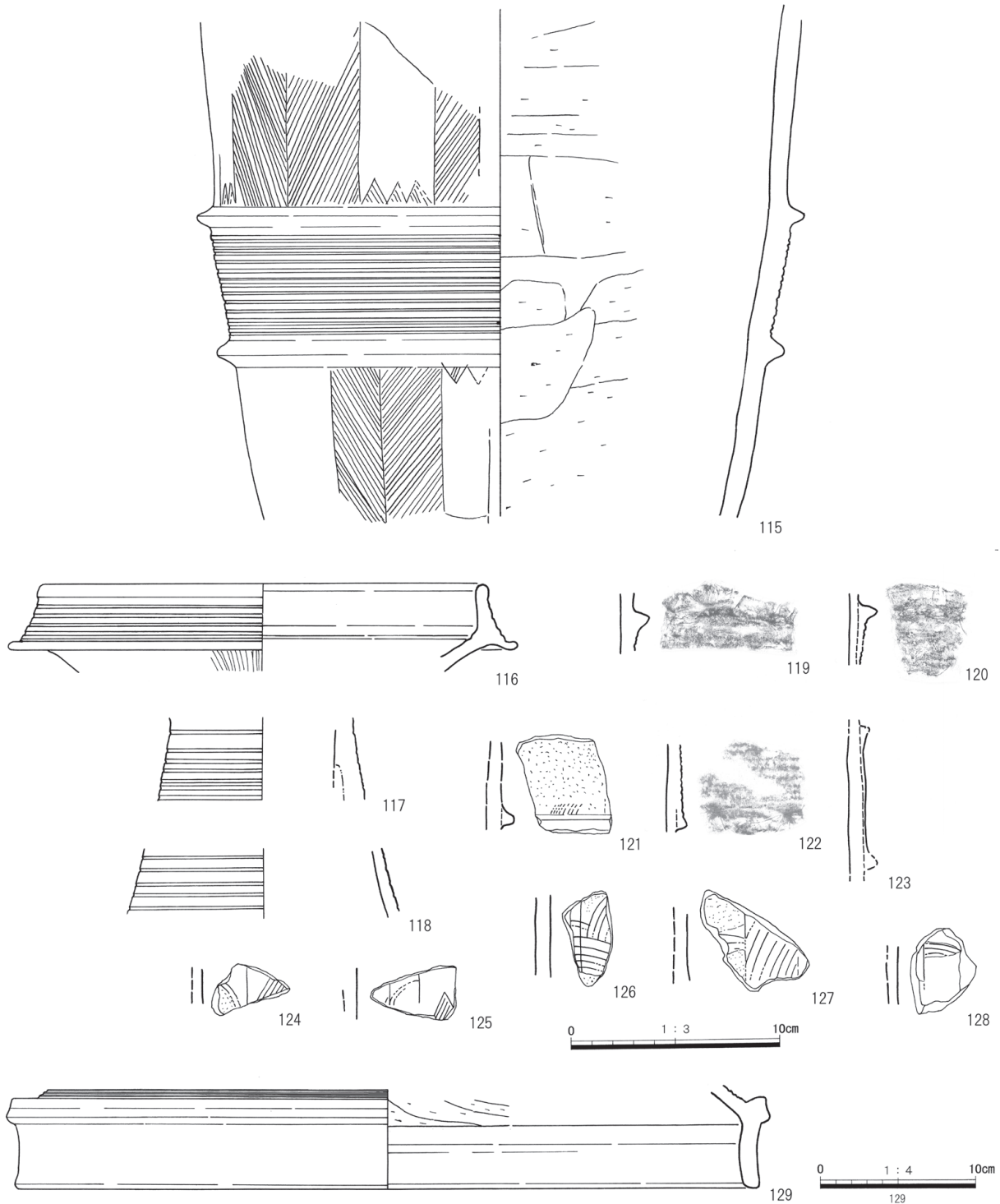


図35 東斜面出土遺物 1 : 3、1 : 4

の横幅が4.8cmであるなど、いずれの文様区画も横幅が広く、そのため区画の数は少ない。下段は長方形透かし孔の区画を鋸歯文区画とするのに対し、上段では透かし孔区画に斜線文が入る。区画の幅が広いと、この段の左端の鋸歯文区画はずいぶん左に寄っており、左側縁に想定できる透かし孔区画との間に十分な間隔がなくなっている。内面は整ったヘラケズリで、上半はヘラケズリの後にナデを加える。B類で間帯の形状は他と共通する。

第2次調査において円丘部南東裾で小範囲の試掘を行っており、位置はこのトレンチに近接し南側になる。円礫と土器片を包含する厚さ30cmの流土を検出し、116～129が出土した。いずれも小片で保存状態はよくなく器表の剥落が著しい。

116は器台の口縁部で、口縁拡張部下端を外反させる。口縁拡張部外面から受け部内面にかけて丹が塗られる。胎土B。117・118は壺の頸部である。このうち117は製作途中でなされた丹塗りが器壁の内部で観察でき特殊壺頸部を思わせるが、復元径は小さい。いずれも胎土Bである。

119～128は胎土・色調から同一個体と見てよい。器壁が薄い特殊器台である。剥落のため内面調整がわかる破片は少ないが、ヘラケズリである。間帯は薄く粘土を貼って形成し、その上下両端に突帯を配しその間に平行沈線を入れる。文様帯は分割型で、125右側で鋸歯文が見られる他は、弧をなす帯が配される。構成を比較的把握できる126では、弧帯が縦の区画線を越えて伸び鱗状に重なっており、立坂b類に似た文様である。分割型の文様帯の中に横に広がる文様を配しているわけであり、文様配置の点ではかなり特異である。127はそれとは異なり、区画線の左右で弧帯の傾きが変わる。文様の全体像は不明ながら、弧帯が主となる文様帯であったとみてよい。小片で保存状態もよくないが、この遺跡の特殊器台で弧帯を用いるのはこれらの資料と16・17のみである。胎土には金色の雲母粒、石英、長石を含み、明褐色を呈する。特殊器台D類である。

129は特殊器台B類の脚部である。わずかに残る裾部下端には平行沈線のほかに斜めの細い沈線が見られ、鋸歯文が裾に配されていたようである。外面の突帯から上に丹が残る。

7 北東突出部

a 調査区の状況

北東突出部は造成工事によって基部から先が斜めに切断されており、南東側がわずかに残る状態である。東くびれ部の下方には、形状を利用して小規模な池が設けられている。工事掘削によって生じた崖面の2箇所には突出部両側面に設けられた円礫敷が露出し、2m～4mの長さで円礫が散乱した状態であった。また、突出部上面の円丘部寄りには板状の石3個からなる列石が遺存する。

第1次調査で南東部分の調査を行い、円丘部から続く第1列石と第2列石、その間の円礫敷を検出し、円丘部と一体の突出部であることを確認した。さらに第2次調査では南東側については第1次調査の調査区を先端側に拡張する形で追加の調査を行うとともに北西側と円丘部墳頂平坦面肩部の調査を実施し、突出部の構造を把握した。

b 検出遺構（図36・37、図版8～10）

突出部上面 突出部上面は横断方向はおおむね平坦で、縦断方向では北東の先端に向けてごく緩やかな傾斜で下降する。表土の下に厚さ10～20cmの流土層（図37 B3層、E2・3層、C7層、D3層）がある。その下が盛土で、盛土上面の高さは列石を隔てた円礫敷上端の高さとほぼ等しい。突出部上面の流土層は円礫、土器片を基本的に含まない。突出部の上面は円丘部側からの土の流入、堆積よりも流出のほうが多いと考えられ、流土と判断した層は盛土の風化によって形成された層であり、本来の遺構面は少なくともこの層の上面になると考えておく。この理解によれば、流出による減少を考慮す



図36 北東突出部(1) 1:60

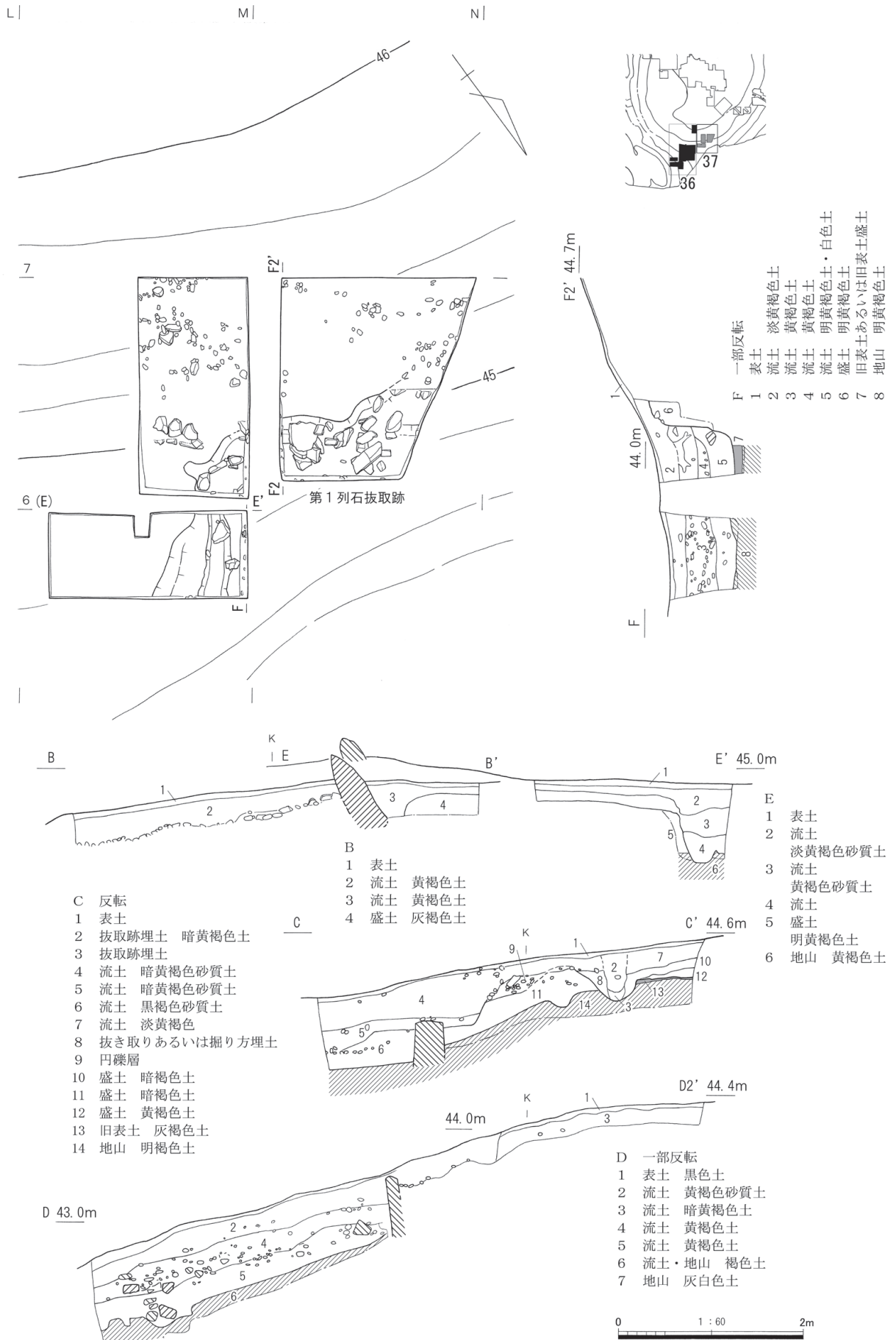


図37 北東突出部(2) 1:60

る必要があるが、突出部上面は調査区の円丘部側で12cm、それ以外では30cm、検出した円礫敷よりも高くなっていたことになる。上面に施設等は認められない。

上面が円礫敷上端のカーブと同じであったとすれば、上面の勾配は前端側から円丘部に向かってわずかに高くなっており5°の傾斜、円丘部に接続する部分で15°前後である。後述のように円丘部墳頂平坦面の端は上方の調査区(L8)の端付近になるが、そこから突出部上面の端までは2.6m前後である。突出部上面の端と円丘部肩との高さの差は推定で80cmである。

南東側第1列石 東側の第1列石は3石が遺存しており、その北には列石の抜取穴が連なる。第1列石の残存部長さは2.2m、検出した抜取穴を含めた全長は5.2mで、直線をなす。残存する3石の上端は円丘部側から突出部前側にむかって緩やかに下降する。列石には長さ70cm～1m、厚さ30cm前後の石が用いられる。上端をそろえて石の上部が地表に突出するように設置されており、現在はいずれも墳丘外側に傾いている。第1列石は3石のうち南端の石が突出部側の起点になり、また、ここで折れて円丘をめぐるとみられる。

検出した3つの抜取穴のうち北端はオーバーハングする箇所もあり抜取りによるものであるが、中央のものはC断面に示すように北西側は掘り込みが旧表土面からなされており、この部分では掘方が抜取穴と重複している可能性がある。抜取穴には角礫が散在しており、根石として用いられた石材が遊離したものとみられる。

南東側第2列石 第2列石も多くが抜き取られている。5石が遺存し、その前後に抜取穴が続く状態であったが、突出部側面から屈曲して円丘部側面をめぐると把握できた。抜取穴を含めた検出全長は突出部側面が5.0m、円丘部側で1.2mである。以下、遺存した列石材をくびれ部側から順に列石24～28と呼ぶ。列石25は列石24に続く側が外にずれており、列石28は外側に大きく傾いている。大きさは列石27が幅63cm、厚さ14cm、遺構面からの高さ73cmである。列石24・27・28は石材を縦に据えるが、列石25・26は横に置いている。列石26では低くなる箇所に小形の礫を重ねているが、上端が不整形な列石24や低い列石25などでも元は同様にさらに石を積んで石垣状にすることで高さをそろえていたと考える。第2列石の下方側では長さ10数cm～30cmの角礫が円礫に混じって出土したが、それらが第2列石上部に用いられた石材であろう。北東の抜取穴に見られる礫は、根石と列石の小形石材が混在した状況とみてよい。第2列石が屈曲し円丘部側の起点となる位置に所在する抜取穴は円礫敷からの深さが85cmであるが、円礫敷の端は元の形状をとどめており抜取跡の壁面は垂直に下がる。大形の石材が抜き取られた形状と考えられ、第1列石と同様の大きな石が配されていた可能性が強い。これと24との間の石材も大形であったとすれば、これらと列石27が大形で、その間は小形の石材を用いた石垣状になっていたと推定でき、円丘部の第1列石と同様に大小の石を使い分けた配置になっていた可能性がある。ただし、列石27の長さから、円丘部第1列石の斜面立石のように大きく上に突出するものではなかったと思われる。なお、D断面では列石27は5層上面から掘り込まれるかの表示となるが、これは石に沿って入り込んだ根などの有機物による汚れであろう。

第2列石基部は前側に向かって下降していくが、円礫敷上端の下降の勾配よりもわずかに傾斜が強い。

南西側第2列石外側 第2列石の外側はくびれ部付近では平坦であるが、前側では列石外側に平坦部はなく、斜面となる。

この部分には多量の土器と円礫、若干の角礫を含む流土が堆積する。D5層は流土と地山上部とが類似して区分できておらず、円礫の包含がなくなる中ほどの位置で分けられるとみられる。また、D断面のトレンチでは、第2列石から2.4～2.5離れた調査区下端に近い位置で、第2列石と平行する形で

花崗岩類礫10数個が幅60cm、深さ40cmの帯状をなす状態を検出した。この礫は斜面に平行する溝に入る可能性があるが、評価を確定することができなかった。

円礫敷 2つの列石の間は円礫が敷かれた斜面となり、円丘部斜面から屈曲して突出部側面に続く。検出状態では円礫はおおむね一重であるが、C9層のように2、3石が重なり15cmの厚さをもつ箇所もある。円礫は長さ10cm以下の大きさであり、他に長さ20cm程度の角礫も散見された。D断面に示すように円礫は斜面下方に大量に流出、堆積しており、本来は厚い円礫層を形成していたとみてよい。なお、C断面では盛土11層に円礫が少量入るが、地山の形状からも木の根等による攪乱が入っていると思われる。

北西側第1列石抜取跡 突出部北西半の調査区では、く字形に伸びる第1列石の抜取跡を検出し、列石が配された位置をおおむね把握することができた。抜取跡は北東から南西へ東側面の第1列石と平行に1.5mのび、屈曲して円丘部斜面を西に向かう。抜取跡の位置から、突出部の北西側は円礫敷の半ばから下が削り取られていると判断できる。

抜取跡の北東半では底が溝状になる。また、抜取跡は墳丘上面から70～80cmと深く、かなり大きな石が用いられていたと思われる。抜取跡西側の埋土には長さ10数cm～最大40cmの角礫が多数含まれており、根石に用いられた石材と列石材が混在していると思われる。また、多量の円礫が入り中世の土器片も含まれる。

調査区の上方側の円丘部斜面には少量の円礫が散在する。墳頂平坦面から流出したものとみられる。**墳頂平坦面北東部** 墳頂平坦面の北東端、突出部の延長上に設定したL8調査区では、厚く円礫が敷かれた状況を確認した。円礫層上面は突出部にむかってわずかに下降する。調査範囲の南西側2/3は密な円礫層をなすのに対し、突出部側の1/3では円礫の密度が低くなる。後者は円礫敷から流出し再堆積したのか、円礫敷が流出し一部が残存したのか判断しがたいが、円礫敷がさらに突出部側に広がっていたとは考えにくく、この調査区の北東端付近が墳頂平坦面・円礫敷の端になると考える。

ここでは盛土の上部に円礫を含む。A断面に示した円礫のうち、破線で表示したものは断面にかからない位置で検出した円礫である。円礫敷の遺存状態から、墳丘築造後の掘り込みや攪乱は考えにくい。根によって礫が落ち込んだのでないとすれば盛土に円礫が混入したことになるが、他の地点では見られない状況である。この箇所の少なくとも盛土上部が墳丘全体の中で遅い段階に構築された可能性も考えられる。

墳丘盛土 突出部中央での盛土の厚さは38cm、一方、北西側第1列石付近では地山が下降しており約85cmの厚さとなる。前述のように突出部上面の流土層を盛土の風化層とみなせば、そこでは盛土の厚さはこれを加えたものとなる。これに対して南東側第2列石の下方は地山の削り出しである。原地形は尾根の北西側斜面の下降が大きく、その側に多くの盛土を行って突出部を形成したと判断できる。また、上記の墳頂平坦面北東部では盛土は厚さ1.0mである。

突出部の形状 突出部上面は、南東側第1列石の円丘部側の端を起点とすれば、5mまでを調査した。これに先端側の未掘部分を加えると、約6mが残存することになる。くびれ部の墳端は池の構築による地形の改変のため推定とならざるをえない。円丘部から続く墳端が折れて北東にのびる位置を池中央の西側、H軸の4と5の中間付近に想定すれば、突出部の残存長さは8m、高さは2.5mとなる。

突出部南東側面に設けられた2つの列石は、検出範囲ではどちらも直線をなす。2つの列石の間隔は前側で広くなっており、第2列石の突出部側起点で1.9m（石材中心間の距離）であるのに対し、検出範囲の前端で推定2.5mである。また、円丘部斜面部分での幅は推定2.5mである。突出部の上面幅は、北西側が第1列石抜取跡からの推定となるが、列石が円丘部に折れる箇所では3.75mである。上

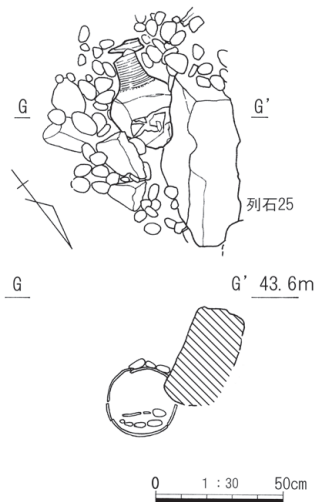


図38 長頸壺130出土状況
1 : 30

面の平面形については推定とならざるをえないが、均一な幅で前にのびると考えておく。

c 遺物の出土状況

墳頂平坦面端 (L8) の出土遺物は僅少である。北西側第1列石抜取跡およびその上方にあたる調査区 (M・N7) も図示できる遺物はほとんどなく、北東側の調査区 (J~L4~6) からが主体を占める。そして、後者でも第1石列よりも上側からの出土はなく、多くは第2列石下方の流土からの出土であり、それ以外に円礫敷上、第2列石の抜取跡からの出土がある。これらのうち、第2列石下方の流土には大形で接合可能な破片が含まれる。

壺底部154は南東側第1列石に近接した円礫敷上からの出土で、円礫敷上で内面を上に向けて出土しており、円礫の流出を考慮すれば、円礫層を掘り込んで配置された可能性がある。特殊器台間帯163、脚部182はその南東、調査区端近くの円丘部側の円礫敷上からの出土である。

一方、長頸壺130は南東側第2列石の外側で横転した状態で出土した (図38、図版9-2)。周辺には上方から転落した円礫がおびただしく堆積しているが、土器はこの円礫に覆われ、ほぼ完形で口縁部側を南西に向けた状態であった。胴部下半は若干ずれ動いた第2列石石材がのしかかった状態であった。口縁部や肩部の一部を欠失した状態であったが、欠失した破片の一部は近くから出土した。土器の下半を埋める土も円礫を含む黒色の流土である。土器の内部には黒色の流土とともに円礫数個が入っていた。掘り込みに収められた状況はなく、この時期の土器棺でなされる頸部の折り取りもなされておらず、土器棺の可能性はない。この土器については①この位置で横に置かれたか、正位に置いたものが早い段階に横転した、②上の円礫敷から落下した、この2つが考えられる。判断がむずかしいが、円礫敷上に安定して設置されたものが早い段階に列石に接した位置に転落する可能性は低いとすれば①であり、後述のように単に地表に置くことがむずかしい器形であるため検出の状態に置かれた可能性を考えておく。

出土状態から、土器類は基本的に円礫敷上に設置されており、それらが円礫とともに下方に流出、堆積したと判断できる。また、長頸壺130から、一部が第2列石外側に置かれた可能性が考えられる。

なお、146・160・179・180・188は突出部北側崖面での表採資料である。このほかに、円礫敷からサヌカイト塊3が出土しており、これについては他のサヌカイト資料とともに記載する (図147)。

中世の遺物も出土しており、これも後に示す。

d 出土遺物 (図39~42)

北東突出部出土土器は長頸壺を主体とし、他に特殊壺、特殊器台がある。高杯等の小形器種はわずかで、図示可能なものはない。

長頸壺 長頸壺130は、胴部の一部を欠く以外ほぼ完形である (図版39-2)。器高44.4cm、口縁部径2.3cm、胴部径29.2cmである。土器の軸線に対して口縁部上端と底面が傾いているため、底面で設置すると口縁部は大きく傾くことになり、製作時にそうした用い方は想定していなかった可能性がある。下に大きく開く頸部と張りの強い胴部をもつ。口縁拡張部は沈線を入れたのちにナデを加えており、沈線の縁がつぶれるが、これは他の多くの個体と共通する。受け部内外面の調整はヨコナデである。頸部には沈線が施され、その間に縦ハケが残る。頸部と胴部の境には列点文がめぐる。胴上部外面はナデ調整、下半はヘラミガキである。他の多くの壺と同様、底部から胴下半にかけて黒斑が見られる。

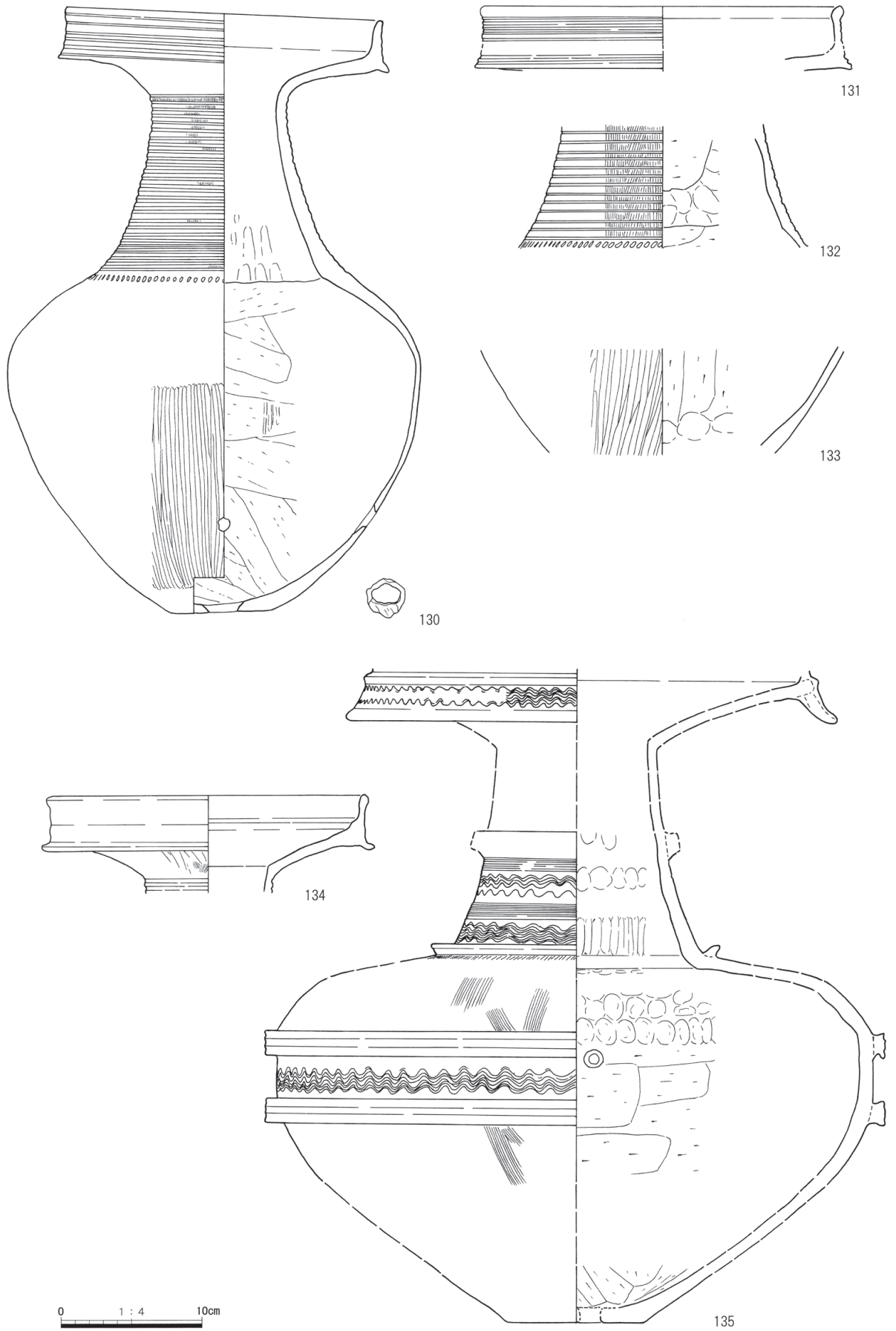


图39 北東突出部出土遺物(1) 1 : 4

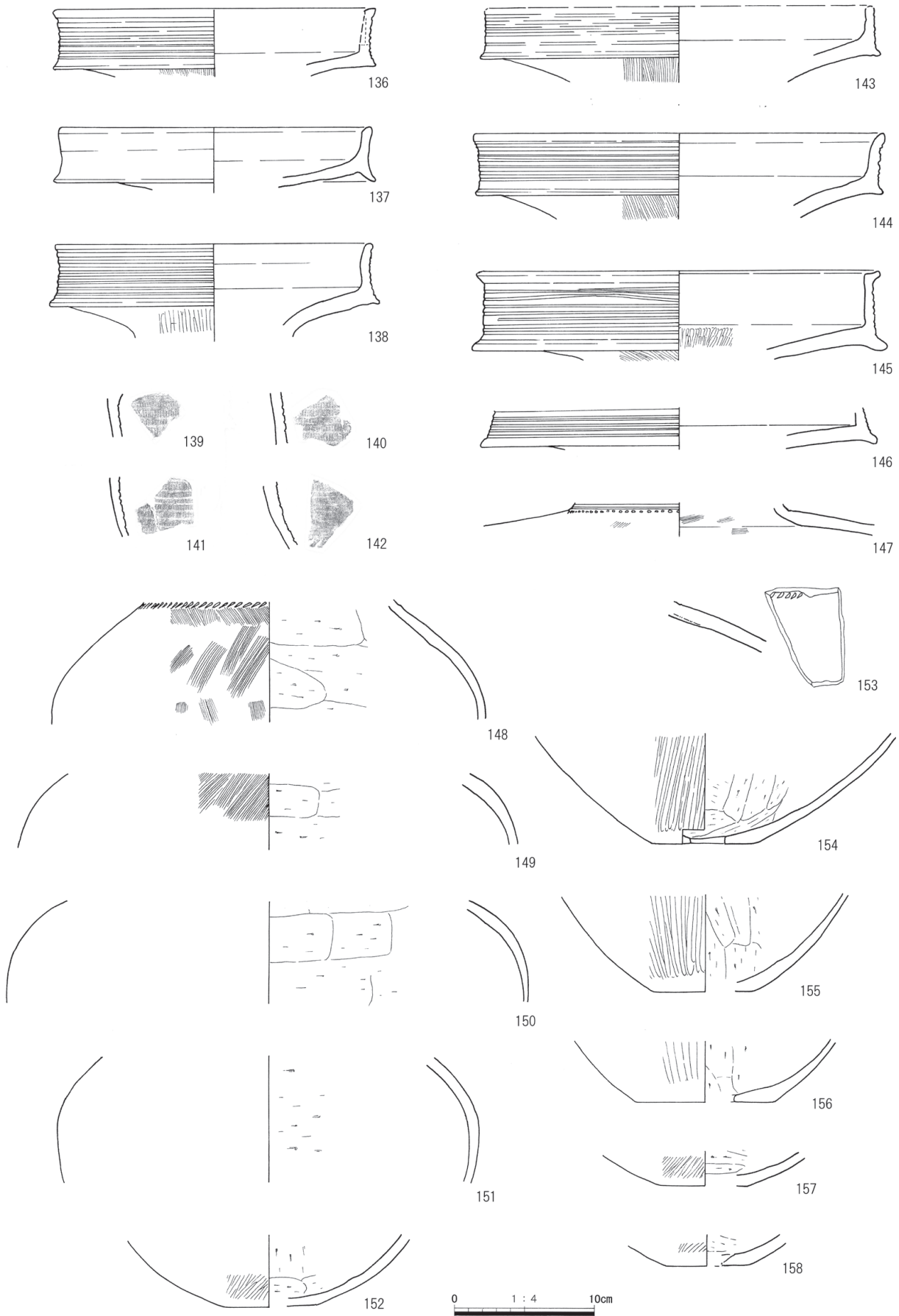


図40 北東突出部出土遺物(2) 1:4

胴部の内面調整はヘラケズリで、頸部内面にはヘラケズリは及ばず下半に指頭押圧が見られる。丹塗りは受け部内面から外面胴部下半、底から4.5cm上までの範囲で確認できる。胴下端部分には丹塗りが認められないが、後述の他の底部付近の資料でも丹塗りが見られるものがなく、器台に載せられる、あるいは地表を浅く掘り込んで設置すると見えなくなる底部付近については丹塗りが省略されている可能性がある。胴下部と底面の2ヶ所には、いずれも焼成後に外側から穿孔がなされている。胴下部のものは径約1cm、底面のものはそれよりも大きく長径約2cmである。図右下には、底部の穿孔の内面からの形状を示した。胎土は暗褐色で、角閃石粒を含み胎土Bに近い。

131～133は胎土・色調から同一個体の可能性が考えられるもので、130と同様の長頸壺である。各部の復元径はいずれも大きく、130よりも一回り大きい個体である。受け部外面の調整はヨコナデである。頸部内面にも部分的にヘラケズリがなされており指頭押圧を切る。また、胴下部内面には指頭押圧がわずかに残る。

これら以外に、長頸壺口縁部とみられる資料は多い(134・136～138・143・144)。胴部片や頸部片も出土しているが復元には至らず、口縁部を中心に示した。これら口縁部のうちいくつかは器台の口縁と考えることもできるが、器台の筒部や脚部は出土しておらず、その可能性はほぼない。口縁拡張部下端を若干突出させ、外反気味に口縁拡張部が上に伸びる点は共通するが、沈線等のあり方や受け部外面の調整は多様である。134や137のように口縁拡張部がヨコナデ調整になるものも見られる。受け部外面の調整は134がタテハケののち粗いヘラミガキ、136・137・143・144がタテハケ、138が横ヘラケズリののちヘラミガキである。保存状態は必ずしもよくなく丹塗りは部分的に残る程度で範囲は確定しにくい。色調は赤褐色を呈するものが多いが、明褐色のものもある。

頸部は139～142に示した。外面はタテハケののち沈線が施され、丹塗りが見られる。内面は140がナデ、他はヘラケズリである。胴部は148～151がある。外面調整はナデあるいはタテハケである。

底部152・154～158のうち、154と156では底部穿孔がなされており、158もその可能性が強い。152のみ残存胴部の中ほどで部分的に丹が見られるが、他では丹は認められない。なお、152では上方の丹塗りに垂れたとみられる丹が内面に付着している。底面から胴部下端にかけて黒斑があるものが多い。

特殊壺 135は図上復元できた個体である。口縁部上方を欠落するが、推定高さ48cm、胴部最大径は突帯を含めずで42.5cmと大きい。上下に拡張した口縁部、頸部中ほどと下端の突帯、肩が大きく張り2条の突帯をめぐらせる胴部をもつ。櫛描波状文を主文様とし口縁部、頸部、胴部突帯の間に施しており、頸部では同工具による平行沈線文もめぐる。内面調整は胴部中ほど以下がヘラケズリ、それよりも上は指頭押圧である。内面の突帯間にあたる箇所には竹管状の押圧が深く入るが、この意図はよくわからない。底部には焼成後の穿孔がなされる。丹塗りが認められる破片はない。後述の特殊壺の多くは暗褐色を呈するが、この個体は黄褐色で石英、長石粒を含むなど胎土は異なりC類である。

口縁部145は口縁拡張部が高く、その上下両端が大きく突出しており特殊壺口縁と判断した。受け部内外面の調整はヘラミガキである。口縁拡張部外面の沈線は一部に食い違いがある。146も口縁拡張部が高くなるようで、特殊壺の可能性を考えた。

147・153は頸部下端から肩部にかけての破片である。153の内面調整はヘラケズリ、147はヨコハケののちナデである。153では破面の粘土接合部に丹が見られ、製作途中での丹塗りを示す。160は胴部破片で、突帯下に鋸歯文の先端がわずかに残る。145・153・160は胎土Bである。159は特殊壺胴部の突帯とみられる小片である。突帯は細く小形特殊器台に伴う特殊壺かと思われる。胎土A。

壺の個体数 口縁部をもとに算定すると、図示しなかった小片と採集資料を含め、長頸壺・特殊壺の

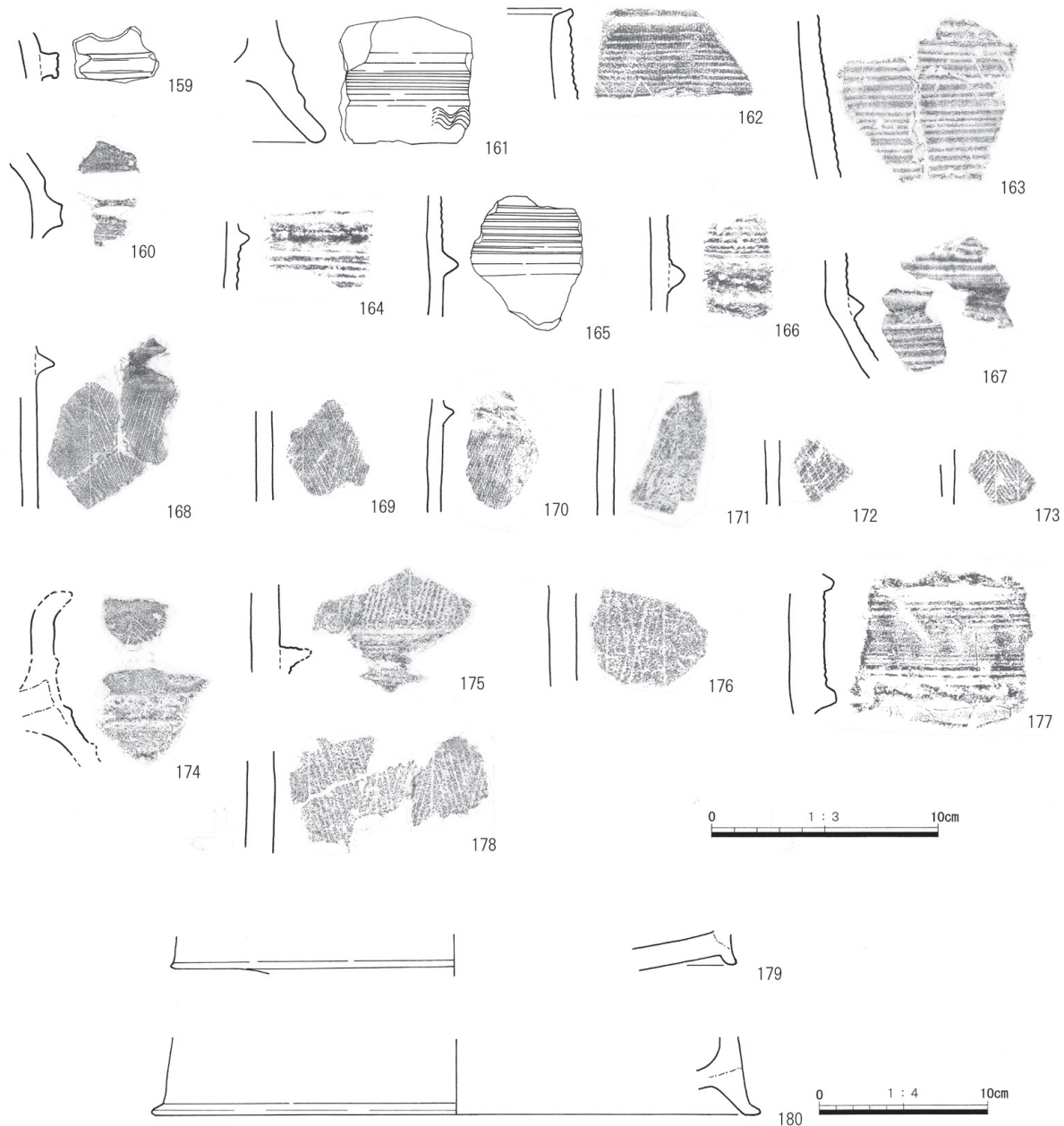


図41 北東突出部出土遺物(3) 1 : 3、1 : 4

総個体数は13個体、そのうち特殊壺は3～4個体である。特殊壺を4とすれば長頸壺9となり、特殊壺よりも長頸壺が多い。個体の判別がむずかしい破片が多く、実数はこれよりも多いとみてよい。採集資料（長頸壺口縁部未掲載、特殊壺口縁部146、特殊壺胴部160）を除外した10個体としても、8mに満たない円礫敷の検出長に対してかなりの密度で壺が配置されていたことになるが、土器を多量に包含する第2列石下方の流土層の発掘範囲は部分的であり、配置された個体の数はさらに多かったと判断できる。

特殊器台 161はC類の口縁部である。保存状態がよくないが突帯の間に楕円描きの波状文と平行沈線が残る。

162～172、181・182はB類で、外面には丹塗りがなされ、筒部の内面調整はヘラケズリである。口縁部162では平行沈線と鋸歯文が見られる。164～170はやや細い突帯が共通し、間帯の肥厚は行わないようである。文様帯は分割型で、斜線文171、複合斜線文168・169、斜格子文172などがある。間帯

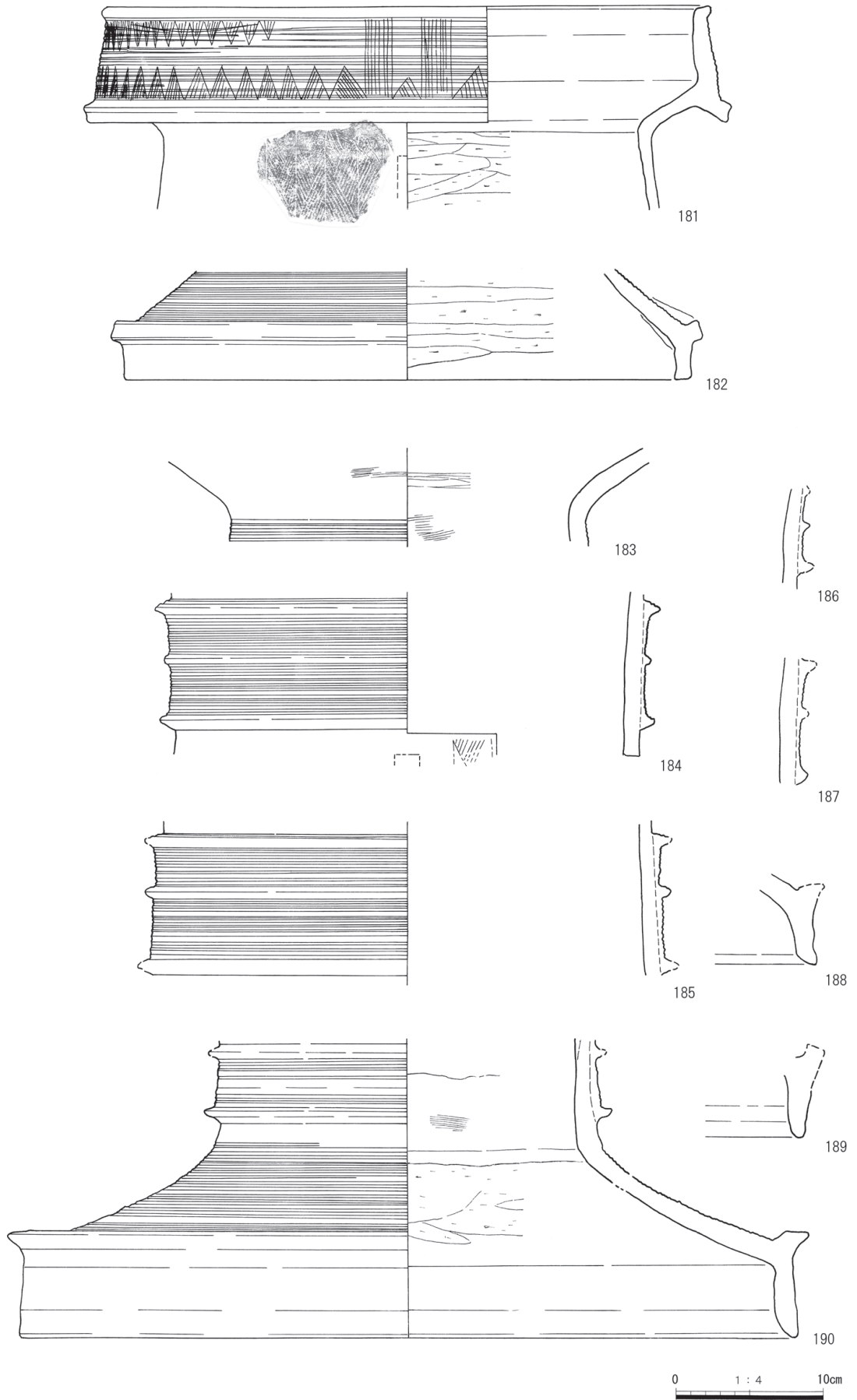


图42 北東突出部出土遺物(4) 1 : 4

0 1 : 4 10cm

163は7.1cmの残存幅で上下の突帯に達しておらず、相当に幅が広い間帯である。

181は比較的接合できた口縁部から頸部にかけての破片で、口縁拡張部には沈線を入れた後に上下に対向する鋸歯文、縦の平行線を刻む。頸部には複合斜線文を連続して刻み長方形の透かし孔を入れる。多くの場合、特殊器台の頸部には文様を入れないが、この個体では本格的な文様帯である。頸部にも文様を配しているのか、通常と異なり文様帯から口縁部に移行するのかわからない。受け部内面から外面全体に丹塗りが見られる。脚部182は破片がまとまる。脚直立部は低く復元径も小さいことから、かなり小さい特殊器台である可能性が強い。断面部分にのみ示したが、裾部には縦方向に粘土が貼り付けられ突帯状をなす。貼り付けは内面にもなされており、製作時に亀裂を生じてその部分を補修した跡である。裾部には平行沈線をめぐらせ、屈曲部には断面方形の突帯を配する。丹塗りは外面のほか内面のヘラケズリ部分にも部分的に見られ、製作の過程で内面にも塗られたものが削られ残ったようである。163と181、164～170と182がそれぞれ同一個体になるかもしれない。

174～178、183～190はA類で、内面調整はナデである。口縁部174の外面の施文は上段が櫛描波状文、2段目は不明、3段目が櫛描平行沈線である。文様帯破片は少ないが、いずれも複合斜線文を刻む。183と190は復元径が小さいが、小片からの復元のため、確実に細身になるかは確定しがたい。

個体数はC類が1片ながら1、B類が2、A類が脚部から3個体であり、計6個体となる。ただしA類のうち188は表採資料であり、発掘資料では5個体となる。数字の上では特殊器台の数と特殊壺の数は近いが、特殊壺はB類が主体であり特殊器台はA類が多く、各類がセットとはならない。

小形特殊器台 179・180は径が大きくしっかりした口縁部の破片である。いずれも器表の剥落が大きく、外面の文様などはわからない。小形特殊器台とみられる。赤褐色を呈する。これらは採集資料である。

その他 図示していないが、上記以外に高杯等は5個体の破片が出土している。細く分割して斜線文を施す173は、他と異なり墳頂平坦面調査区(L8)からの出土である。小片ながら全く扁平で家形土器と推定できるが、部位および天地は不明である。器壁は薄く細砂を含む胎土であり、大きな製品ではないと思われる。

8 南くびれ部

南くびれ部は、第1次調査で造成面よりも上の掘削面付近の調査を行い、第4次調査では工事造成土を撤去してくびれ部下方斜面の調査を実施した。調査区は複数のトレンチで構成されているため、ここではA以下の断面名をトレンチ名称として記載する(図43～46)。

45.0mよりも上、突出部の上部はくびれ部から先が削平され、それよりも下の斜面は給水塔建設のための造成土で埋められた状態であった。造成工事の際、工事範囲の端になるくびれ部には円形の掘削がなされて削平時に出た地山中の大石を集めて入れてあり(Bトレンチ・Gトレンチの間)、そこから下にむかって排水のためとみられる溝が掘られ、そこにも大石が入れてあった。G断面はこの溝の掘削面を整形して調査したものであり、工事掘削形状のため屈曲する。掘削は大きく、トレンチの南壁は工事造成土である。

工事前の地形 この箇所には44.0m、43.0m付近、41.8m、41.1mの高さで4段の畑が設けられていたことが判明した。円丘部斜面の状況から、上段の畑は調査区付近が畑の北東端で、そこから突出部前端側にのびており、下の畑は突出部下方から円丘部裾をめぐるように続いていたと考えられる。各断面に示すように、かつては畑は水平で丘陵側に溝(図45 E5・6・8層、F3～5層、G4～6層)が配されていたが、埋没が進んで斜面となった状況が認められた。畑は流土と盛土の一部を掘削して

設けられている。流土には土器片、円礫を含み、特に斜面上方で円礫の量は多い。また、Eトレンチ下方では流土が厚くなる。

第1列石抜取跡（図43） 掘削法面に設定したAトレンチでは、第1列石の抜取跡を検出した。抜取跡は部分的な検出ながら、調査区西端で弧状をなすようで、列石が東から南西へ、円丘部から突出部に向きを変える箇所とみられる。抜取跡は円丘部盛土A4層を少なくとも39cm掘り込んでいる。検出面下の掘り下げは行っていないが、抜取跡には円礫と花崗岩類礫が散在しており、円礫敷から流入した円礫と攪乱された根石とみられる。

列石（図44） 上記トレンチの東12mのCDトレンチでは墳丘外側に倒壊した列石を検出した。2石が並んで倒れており、東側の石（列石29）はかなり大きく、長さ85cm以上、幅90cm以上、最大厚さ50cmである。西側の石（列石30）は細長い長方形の平面形でやや薄く、長さ1.3m、推定幅60cm、推定厚さ30cmである。東側の列石29が斜面立石にあたるとみられ、列石30は列石材と考えるが、後者も大形で整った石材であり、この付近は大形の石材を連ねた列石であったとみられる。いずれも上端となる部分が水平よりも下がった状態であり、列石33は墳丘から完全にはずれているが、配置の状況をとどめていることから大きくは動いていないとみられ、列石の位置はほぼこの付近で、43.0mよりもやや高い位置にあったと推定できる。

これらで構成される列石が第1、第2のいずれかは、斜面施設全体の復元に関わる。2つの石材が原位置から大きくは動いていないとした場合、復元される第1列石線よりも下方であるため第2列石となり、一方、2m弱移動している、あるいは第1列石線がこの位置で外にふくらむとすれば第1列石とみることも可能である。第2列石の可能性を考えておく。

下方の流土（E4層）に含まれる多量の円礫は、円礫敷が再堆積したものであろう。

第1列石下側（図43） Aトレンチから4m離れたBトレンチではトレンチの西半で工事前の表土が削平されている。B2層は畑の耕作土で、近代・近世の遺物を含む。この層の下は地山面となり、畑の造成のため削平を受けている。B断面東側の地山面の高さは43.5mで、畑の造成以前は少なくともそれ以上の高さがあったとみてよい。一方、円礫敷はA断面第1列石抜取跡の円礫の高さ44.9mよりもある程度高いところにあったと考えるが、両トレンチ間の距離7mに対して下降は小さい。この7mの間に円礫敷と第2列石が所在することになるが、突出部側面のうち少なくともこの付近では、それらの外側には緩やかな斜面が広がるか平坦面となっていて、このトレンチの東側から下降がはじまる形状であったと考えられる。

テラス状の掘削（図44・45） くびれ部下方斜面は大規模な盛土で築かれていることが判明した。盛土は以下に述べるように、斜面上方で地山を掘削して形成したテラス状部分を埋めるものと、その下方の斜面を埋めるものからなる。

E・Gトレンチの上半付近では、盛土に先だって平面が半円形でテラス状になる掘削がなされる。掘削の規模は検出幅3.3m、深さ99cmで、椀形に斜面をえぐったような形状で断面形は丸みを持ち、外側の縁は底よりも若干高くなる（F・G断面）。トレンチ調査のため形状の変化を平面で把握しにくい、底面の外寄りに掘削が加えられており、G断面では幅43cm、深さ23cmの溝、東のE断面では浅く広い溝状になる。東側が低くなっており、流入あるいは湧出した水を東の端から落とすようにしたようである。

斜面部盛土（図45） このテラス状部分の下方、トレンチが及んだ水平距離で8.0mの範囲には最大厚さ80cmの盛土がなされる（E14・15・17～19・21層、G7・9・17層）。盛土の下端は薄くなるが、トレンチの外側に及んでいる。盛土は一部が畑の溝で掘削されており、また、上に厚い流土（E9層）

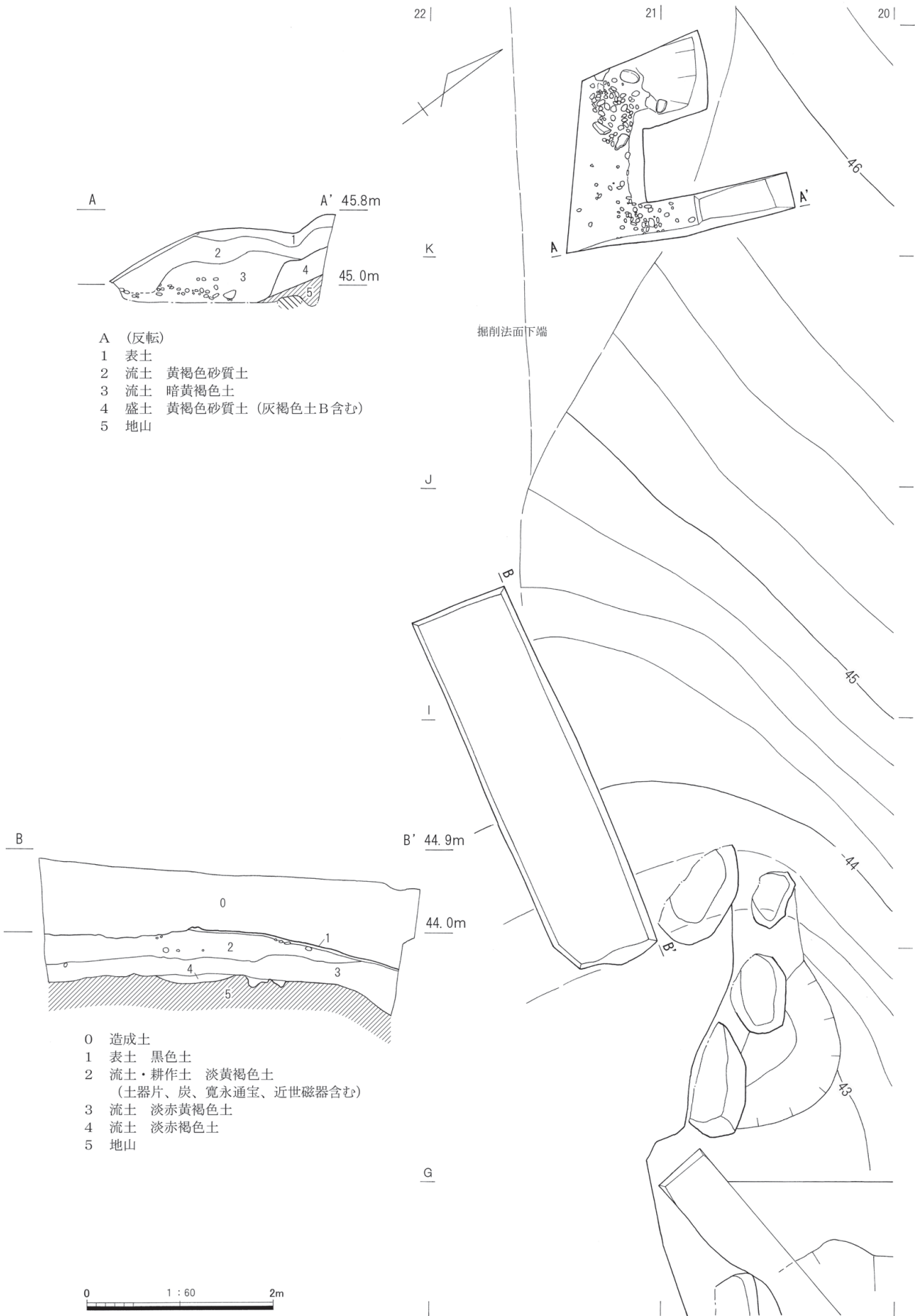


図43 南くびれ部上側 1 : 60

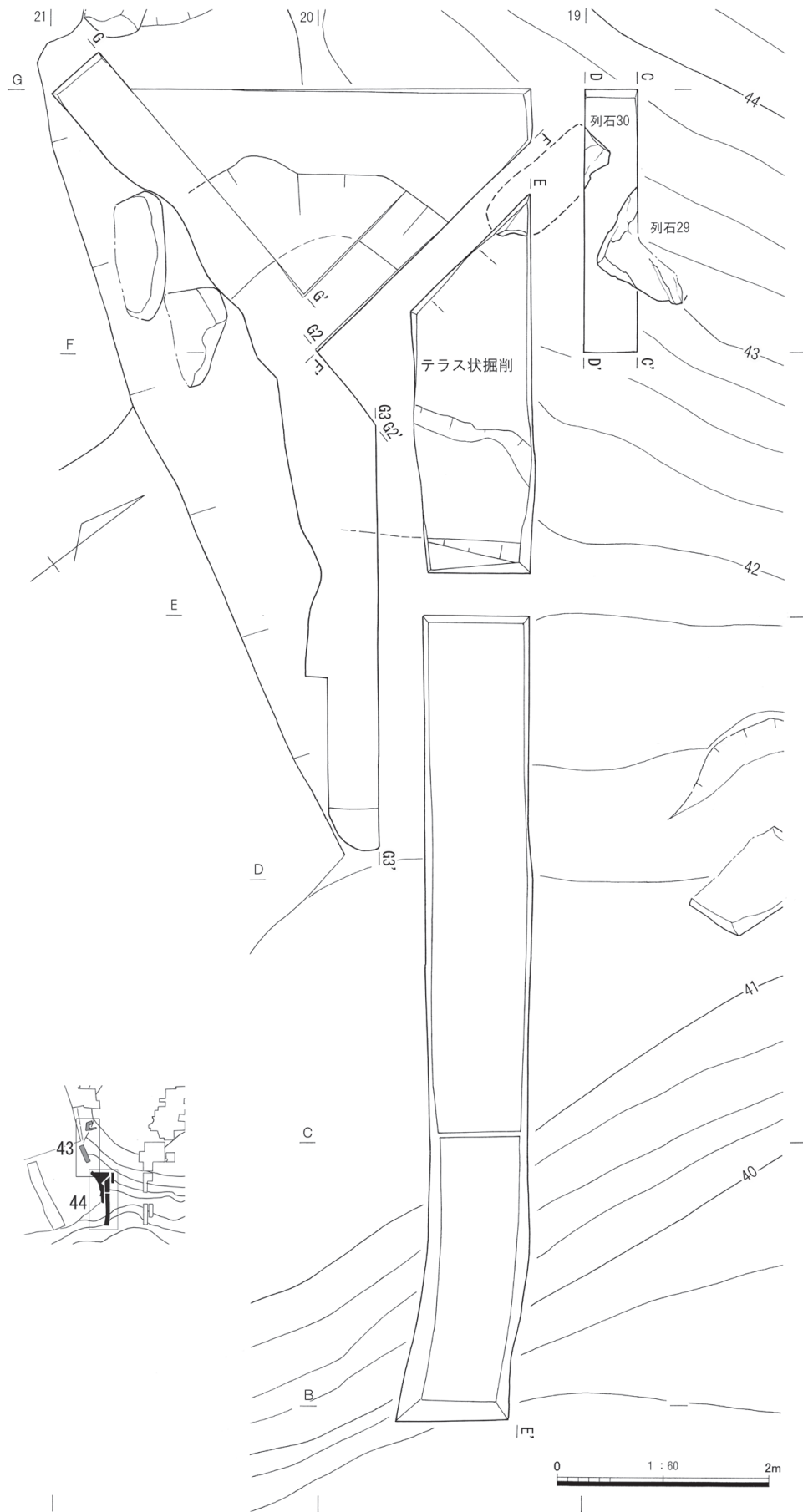


図44 南くびれ部下側 1 : 60

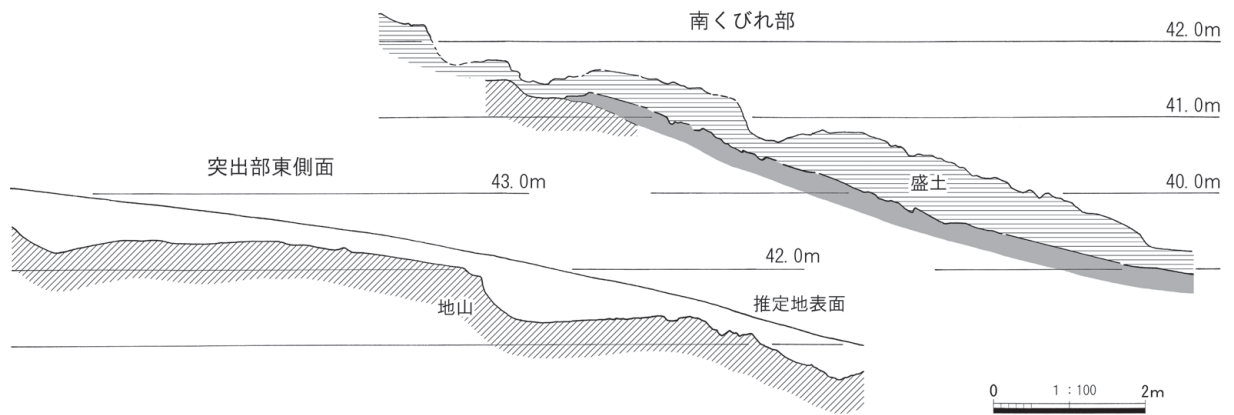


図46 南くびれ部の盛土と旧地形 1 : 100

が堆積する箇所もある。盛土下には旧表土（E22層）がある。

斜面部の盛土とテラス状部分を埋める盛土（E12・13・20層、G8・10～15・18層）との関係は、両者が接続する箇所に畑の溝による掘削（G4～6層など）や攪乱が入っているため明確でないが、斜面下方盛土の上端が高くなるのに合わせてテラス状部分の盛土作業を行っていると思われる。ただし、テラス状部分の盛土は赤黄褐色あるいは灰褐色土中に黒色土ブロックを含む土で、分層がむずかしい土質であった。この箇所の盛土は斜面部分の盛土とは異なり、類似した土を水分が多い状態で積んでいったかと思われる。テラス状部分の盛土の厚さは97cmである。テラス状に掘削した後に埋めていることについての評価はむずかしいが、原地形の勾配が急、あるいは湧水があるといった、直接盛り土を行うことが困難な要因があり、盛土を受ける平坦面を形成したと考えておく。

盛土の性格 くびれ部になされた盛土は、テラス状掘削部分の上端からGトレンチ下端まで斜距離で11.5mにおよぶ大規模なものである。図46上段には明らかになったくびれ部の地山（旧表土）と盛土を示し、下段には後述の突出部東側面トレンチで検出した地山と畑が造成される前はその上に30cm程度の厚さで地山風化層・表土層が乗っていたと仮定した場合の旧地形を示した。2つのトレンチの対応については、畑の段が旧地形をある程度反映していると思われるため、畑の溝のうちの1つをもとに上下2つの図の位置を合わせている。図は縦方向に対応するが、くびれ部の地山は南西の突出部東側面よりも45cm程度低く、くびれ部盛土の上面が東側面の旧地形に近くなる。くびれ部付近に浅い谷が入って地形がやや低くなっていることは、東側面では畑の耕作土直下に固い花崗岩類風化土が現れるのに対し、くびれ部の盛土下では旧表土層が厚く、その下で部分的に検出した地山層が暗灰褐色土であることから裏付けられる。このことから、斜面になされた盛土の目的は谷地形を埋めるためであったと判断できる。したがって、39m付近までが整える必要がある範囲、つまり墳丘の範囲と考えられ、遺構や盛土が認められなかった後述の突出部東側面も、加工の程度は少なかったかもしれないが整形がなされていたと考えることができる。

流土中からは特殊器台D類文様帯577（図177）、同A類破片、中世土器が出土した。

9 西くびれ部

a 調査区の状況（図47～55、図版10～12）

調査経過 西くびれ部の調査は第1次・第4次調査の2回にわたっており、調査範囲は一部で重複する。東端、N・O21・22の円礫が広がる部分が第1次調査の範囲であり、南くびれ部（L21・22）のAトレンチとともに南西突出部が円丘部に接続する箇所の残存状況を把握するために調査を行い、第1

列石抜取跡と円礫敷を検出した。

第4次調査ではくびれ部から下方にかけての状況を知るため造成土を除去し、1次調査区の外側から西側にかけてトレンチを設定して調査を進めた。削平部分から墳丘遺存部分にかけて排水溝を、斜面下方で集石を検出したため調査範囲を拡張し、最終的に西側で広くなる調査区となった。造成土除去範囲は東端で3m、西端9.4m、長さ16.6mの扇形の平面形である。

2回にわたる調査により、西くびれ部の様相が判明し、墳丘斜面の構造について多くの知見が得られた。主な検出遺構は第1列石抜取跡、第2列石の抜取跡と掘方、排水溝、集石である。

西くびれ部に続く突出部西側面については第6次で調査を行い、集石がそこまでは広がらないことと盛土の広がりを確認した。

墳丘の遺存状況 (図10・47・51) 墳丘は大きく掘削されて、工事の後に現在の地表まで埋め戻されている。掘削は43.5m前後の高さに及んでおり、給水塔に近い箇所ではさらに深くなる。そのため調査範囲の中央付近になるQラインよりも南東の側は円丘部から段をなして地山面が広がり、北西外側では造成土下に元の地形が遺存していた。残存した旧状は、調査範囲の中央の43.75m付近で傾斜が変わり、そこから下は緩斜面となって広く浅い谷状の地形となる。調査範囲の東部では小さな起伏が若干あるが、畑の形成やそれに伴う列石の抜き取りに起因するようである。

H断面東南端には耕作土とみられる土層があり(図49 H4・5層)、図47でH断面位置から西にむかっているのびる溝1は、この畑の縁の溝の下部である。また、第2列石の下方(P23～Q22)を弧状にめぐる溝2は西に下がる。検出面での幅は15～30cmであるが、断面(図48 E3～6層、図49 H16～18層)に示すように流土の上面から掘り込まれており幅は60cm～1m以上と大きく、掘り直しがなされている。これも畑の溝とみられる。突出部側面に階段状に設けられる畑が調査域付近からはじまるようである。なお、土坑6・7としたものは木の根による攪乱である。

流土と遺構面の状況 墳丘斜面上には流土が堆積する。現地表44.25m付近の流土が最も厚く30～40cmで、それよりも下方ではやや薄く10cm前後となり、流土中には弥生土器、中世土器を含む。また、円礫敷から流出したとみられる円礫を大量に含むほか、列石の抜き取り時に掘り出された根石等とみられる礫も比較的多い。斜面下方のS22では円礫等が面的に堆積する状況が認められたが、これは北側に位置する円丘部西斜面調査区で見られた円礫等の堆積に続くのかもしれない。これよりも下方になる集石上の流土には円礫等の包含は少ない。

調査範囲の東端、調査区が円丘部側にかかる部分(N21)は、円丘部墳頂平坦面にあたるが、大きな攪乱が入っており、墳頂平坦面から突出部に至る状況は把握できなかった。図48 A断面はその箇所の北西側にあたるが、流土が厚くなっていて墳頂の円礫敷は見られない。O21の東隅付近では小範囲ながら円礫のまとまりが見られたが、墳頂円礫敷の端か、円礫が斜面側に流れたものか不明である。墳丘斜面は厚さ15～25cmの盛土で形成される。この付近の盛土下には旧表土は認められない。

b 斜面施設

第1列石抜取跡 (図47・48、図版10-2) 墳頂平坦面に近い箇所(N・O21・22)で円礫敷とその上に横たわる大形の石材(列石31)を検出した。石材は細長い台形の平面形で、長さ161cm、幅は広い側が70cm、狭い側が47cm、厚さは北側が厚く20cmである。石の形状と位置から、第1列石を構成していた石が横転しているとみてよい。円礫敷に接することから、かなり早い段階に倒れて埋没し、そのため転用を免れたようである。

列石31の東側では、等高線に沿うようにのびて南端で屈曲する落ち込みを検出した。検出長さ3.6mで、墳丘側から10～20cm下がる段の形をなすが、A・B両断面に示すように幅80～107cm、深さ74～68



図47 西くびれ部上側 1 : 60

cmの溝の墳丘側上端を検出した状態であり、溝には円礫を含む流土が堆積していることから、溝は第1列石の抜取跡と判断できる。列石31は、北端が溝（抜取跡）を覆う形で倒れている。溝の上部には円礫とともに長さ12～35cmの角礫が点在するほか、列石31の北端下部でも角礫3点がまとまって所在する。これらの角礫は列石間に配された石材や動かされた根石とみられる。抜取跡は南端でく字形に屈曲するが、この箇所が第1列石が突出部にむかって向きを変える箇所とみてよい。

調査区外側の46.0m等高線の位置からも明らかなように、現況の墳頂平坦面肩は抜取跡の肩から約70cmの距離であり、第1列石は墳丘の他の箇所とくらべて墳頂平坦面に大きく近接する。

円礫敷 第1列石抜取跡の西側には、円礫敷が広がる。用いられた円礫は長さ3～8cmである。上方の抜取跡近くの遺存状態はよく、最大4石が15cmの厚さに重なる箇所も見られる。この付近では円礫敷の上に特殊器台片等が散在しており、円礫敷本来の状況をよくとどめる。

円礫敷の南部は第2列石とともに削平を受けている。A断面の南端、A'付近には円礫が遺存しないが、下方のH断面南東端には畑の耕作土とみられる土層（H4・5層）が部分的に残り、その奥にあたる円丘部側が急角度で削り取られていることから、畑の端がこの箇所まで達しており、その畑の墳丘側法面までが工事によって削られたようである。列石31西側の円礫敷は西に下降するが、B断面に示すように中ほどで傾斜が変化し下降が強くなる（図版10-3）。以下に述べるように第2列石が抜き取られることによって、あるいは、近くまで設けられた畑の造成によって急斜面となり、上側の円礫層が崩れ込んだようである。

円礫敷が第1列石に接していた箇所の高さは45.26m、抜取跡底面の高さは44.72～44.81m、抜取跡墳丘側肩が45.34～45.55mである。これに対して先に述べた東側（図43 Aトレンチ）では円礫散布面が44.9m、抜取跡墳丘側肩の可能性が考えられる下がりの上端が45.25mであり、東西のくびれ部の高さが大きく異ならないとすれば、突出部の東側では第1列石抜取跡の前側から円礫敷にかけての部分がほぼ失われており、検出面は第1列石抜取跡の底面に近い箇所の可能性がある。

第2列石抜取跡（図47・50、図版12-1） 円礫敷の下方、工事により削平された箇所で第2列石の掘方と抜取跡を検出した。北西-南東方向に並ぶ土坑群の状態であるため、ここでは、順に土坑1、2等と呼ぶ。

土坑1（図50） 列をなす土坑の南東端に位置する。土坑2に重複しており、溝1によって北端が掘削される。形状はやや不整形で底面は南に偏る。径56cm、深さ23cmである。削平で北東側では埋土上部が遺存するものの中央～南西側は段をなして下がっているため、断面図埋土上部には断面位置よりも北東側の土層を示している。流入土で埋まっており、5層を中心に角礫、円礫と長頸壺の胴部破片194が出土した。

土坑1は第2列石の抜取跡と判断できる。土坑2付近に据えられた石材を抜き取った際に形成され、付近に所在した長頸壺の破片が落ち込んだとみてよい。

土坑2（図50） 土坑1の南に所在し、北側を土坑1によって掘削される。長径76cm、深さ20cmである。埋土には長さ31cmの角礫があるのみで、円礫や土器を含まない。第2列石の石材を据えるために掘削された掘方で、石材は若干ずれた土坑1の位置に設置されたかやや高い位置に据えられたため、抜き取り時の攪乱をまぬがれて遺存したとみられる。この付近の墳丘面が44.40mであったとすれば、掘方底面との差は90cmとなる。

土坑3（図47・50） 土坑1・2の北西に位置する。凹凸のある不整形な平面形で、長径71cm、埋土上面からの深さ45cm、東肩部からの深さ26cmである。北西端は土坑4によって掘削される。図47平面図にある礫は土坑4に入っており、この土坑に伴うものではない。土坑の断面形が袋状になること

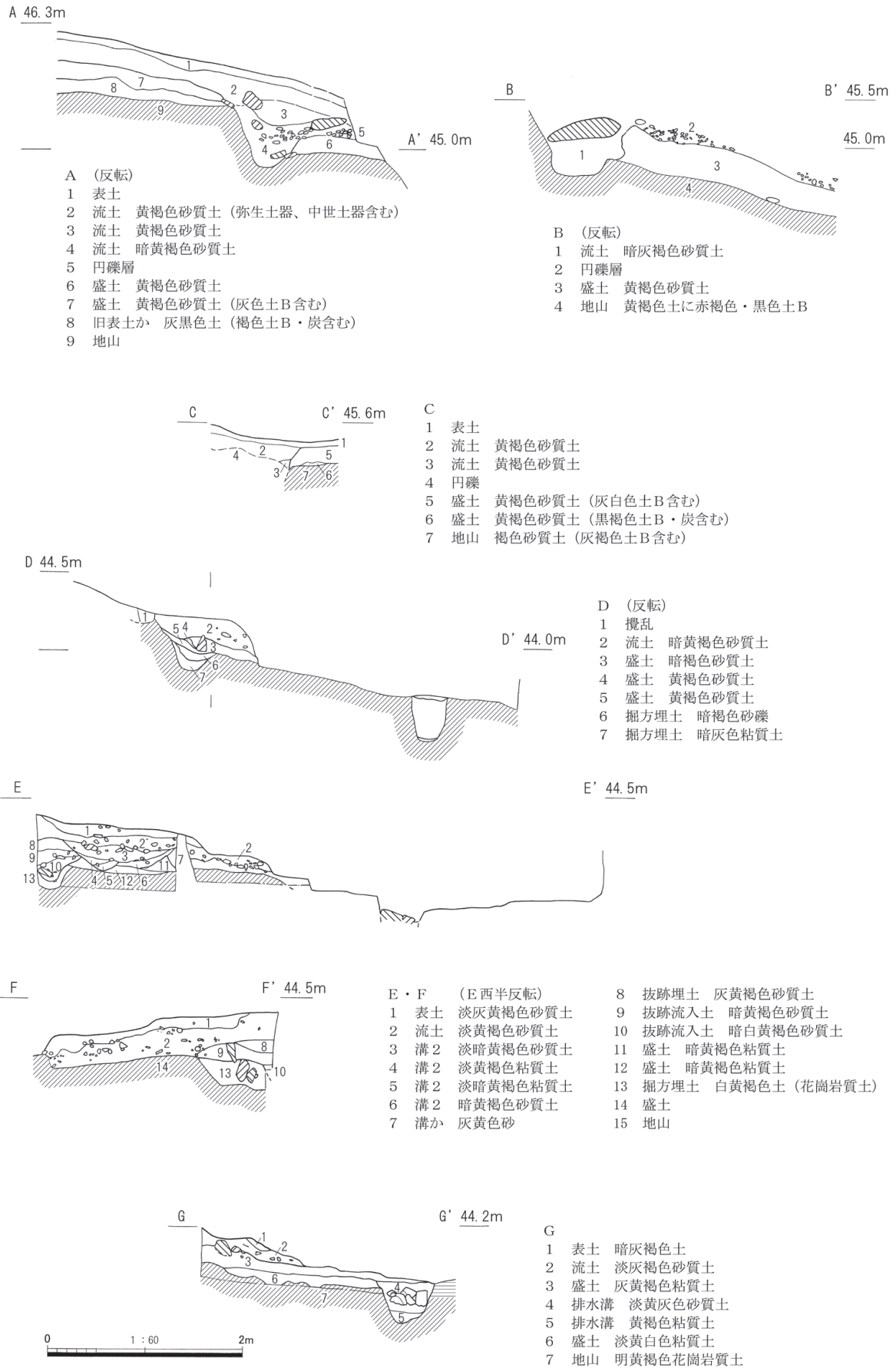
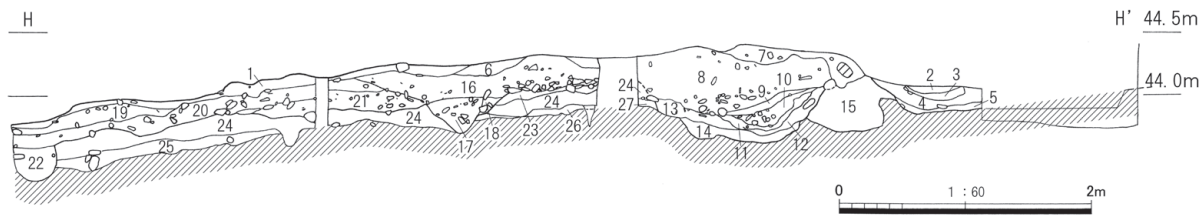


図48 西くびれ部断面(1) 1 : 60



- | | |
|-------------------------------|-----------------|
| H (一部反転) | |
| 1 表土 | 15 土坑3埋土 明赤黄褐色土 |
| 2 流土 黄灰色砂質土 | 16 溝2 淡灰黄褐色粘質土 |
| 3 流土 黒褐色土 | 17 溝2 灰黄褐色砂質土 |
| 4 耕作土か 暗灰白色砂質土 | 18 溝2 明灰黄褐色粘質土 |
| 5 耕作土か 暗灰白色砂質土 | 19 流土 暗黄褐色粘質土 |
| 6 流土 淡黄褐色砂質土 | 20 流土 淡灰黄褐色砂質土 |
| 7 流土 黄白色砂質土 | 21 流土 淡黄褐色粘質土 |
| 8 土坑4流入土 暗黄褐色砂質土 | 22 根痕 黄褐色粘質土 |
| 9 土坑4流入土 黄褐色砂質土 | 23 盛土 明灰黄褐色粘質土 |
| 10 土坑4流入土 褐色土 (円礫を多く含む) | 24 盛土 明黄褐色粘質土 |
| 11 土坑4流入土 黒褐色土 | 25 盛土 暗黄褐色粘質土 |
| 12 土坑4流入土 暗褐色土 (黄褐色土B含む) | 26 盛土 灰黄褐色粘質土 |
| 13 土坑4流入土 暗褐色砂質土 (土器を比較的多く含む) | 27 掘方埋土 暗褐色砂礫 |
| 14 土坑4埋土 明赤褐色砂質土 (地山に似る) | 28 地山 明黄褐色土 |

図49 西くびれ部断面(2) 1 : 60

や配置された石材が見られないことから抜取跡の可能性も考えられるが、埋土中 (H15層) に円礫や土器を含まず、埋土が東側で土坑の上端を越えることから掘方で、石材の設置は上部にとどまったと判断する。

土坑4 (図47・図50) 不整長楕円の平面形をなす大形の土坑で、長径推定1.6m、幅88cm、深さ48cmである。H7～12層には多量の円礫と土器が含まれており、石材の抜き取り後に流入した土である。土坑の形状と深さから、大形の石材が据えられていたとみてよい。土坑最下の14層は地山に似た土で、埋没初期の堆積土とみられるが、掘方の最下部が遺存したとも考えられる。

土坑4北西の掘り込み (図50) D断面で確認した列石掘方である。この部分には土坑4の端が及んでおり流入土の上層 (D2 = H8層) が堆積するが、下には18cmの厚さで盛土 (D3 = H24層) が遺存しており、その下に幅46cm、深さ32cmの溝あるいは土坑の断面が見られ、列石の掘方と判断した。掘り込みの墳丘側は一連の勾配で下がらず中ほどで角度が変わっており、地山をテラス状に掘削した後に列石の掘方を設けた可能性が考えられる。盛土中には長さ17cmの礫が見られる。また、断面位置の東側では同様な大きさの礫4点が見られ、本来はこの掘方に伴う可能性がある。

土坑5 (図50) 土坑1～4から2.7m離れた22Q東隅で検出した。全体の約1/3を検出しており、隅丸長方形の平面形になるとすれば、全体の大きさは幅70cm、長さ1m強かと思われる。上面からの深さは35cmである。

抜取跡と掘方が上下に重複した状態である。抜取跡は掘方の南東に位置してE断面にかかっており、抜き取られた列石は掘方の東寄りであったとみられる。抜取跡は円礫・角礫を含む土 (E8～10層) で埋まる。埋土の上部は中央付近で高くなっており埋め戻された可能性が考えられるが、埋め戻しだけで盛り上がることは考えにくく、溝2の掘削土などが乗せられた可能性がある。抜取跡の南西端及び埋土は溝2によって掘削されている。

掘方は地山面から掘り込まれており、埋め戻し後に掘方上面が盛土 (E12層) によって覆われることから、石材の設置がなされた後に墳丘斜面が完成したとみられる。掘方は地山に由来する土 (E13層) で埋められており、長さ20cm前後の礫が置かれていた。

斜面施設の復元 この調査区では列石、円礫敷など円丘部の斜面施設が比較的良好に把握できたので、ここで一応のまとめを行っておく。

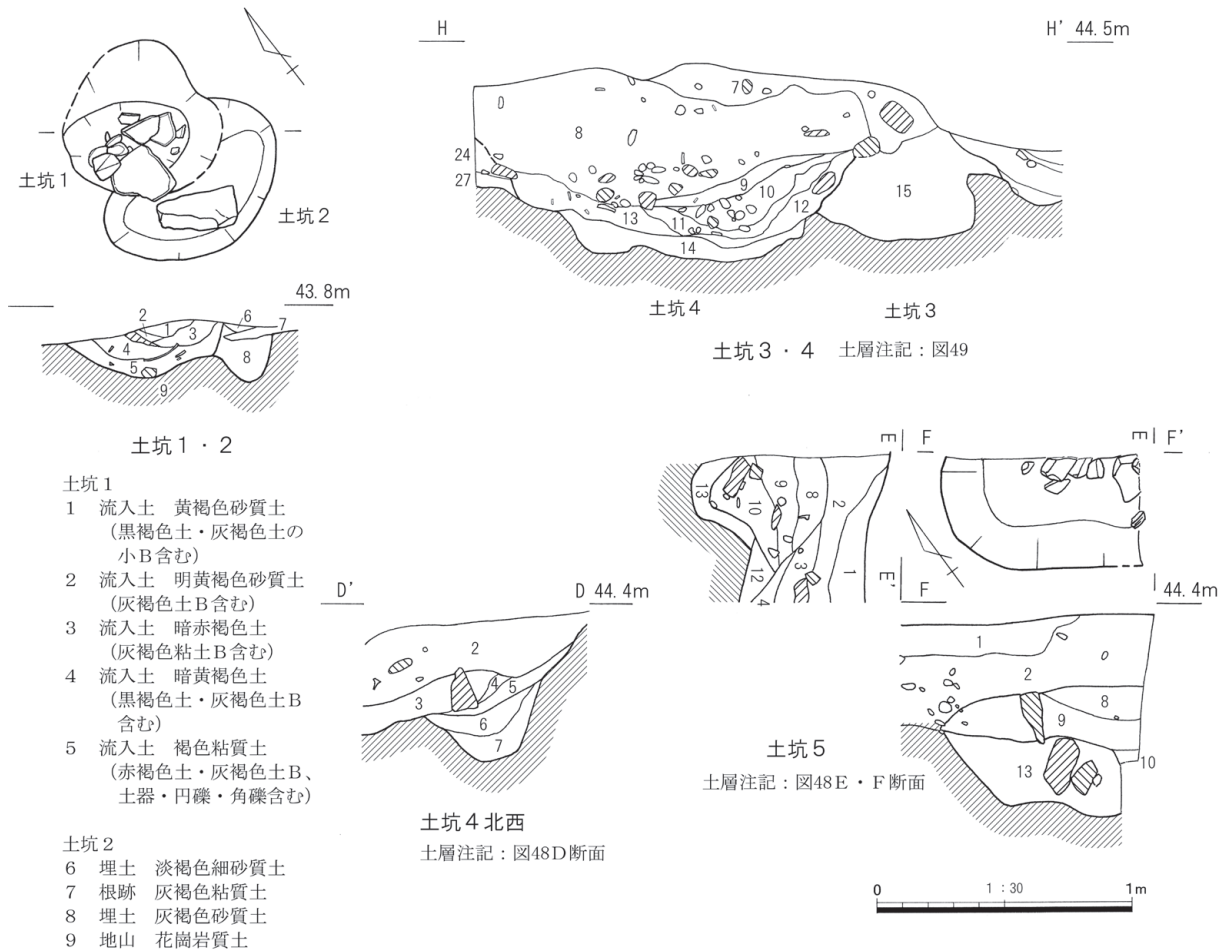


図50 第2列石掘方・抜取跡 1:30

列石は全く遺存していないが、抜取跡や掘方から第1・第2列石の間隔は円丘部側で2.7mと推定できる。一方、突出部側については第1列石の屈曲部が抜取跡の南端、第2列石のそれは土坑1である。突出部側第1列石が墳丘主軸に対してどのような角度で伸びるか不明であり正確は期しがたいが、両者の間隔は推定で1.2mと狭くなる。これに石材の厚さを勘案すれば円礫敷はさらに狭いものとなる。南西突出部の第1列石の間隔、つまり突出部の上面幅については、南くびれ部のAトレンチ (L21・22) 西端付近を第1列石の屈曲部とすれば、4.2mとなる。

第1列石は抜取跡が連続し幅が変わらないことからすると、この付近には列石30・31のような比較的薄い石材が用いられていた可能性が考えられる。

墳頂平坦面と突出部上面の関係については、残存状況がよくないため推定となる。墳頂平坦面の高さは、A断面では流土 (A2層) 上面となるが、墳頂部全体の状況から46.1m付近とみられる。突出部上面はC断面5層上面が45.36mである。また、北東突出部でのあり方から、くびれ部付近では突出部上面は円礫敷の上端よりも10~15cm高くなるとすれば、円礫敷上端がB断面で45.3mであるので南西突出部基部上面の高さは45.4m前後となり上記に近い高さになる。これを妥当とすれば墳頂と突出部の高さの差は70cm前後となる。

構築作業の推定 くびれ部円丘部側の構築は、以下のように考える。まず、墳丘斜面の地山を階段状に掘削する。上段の高さは44.90m、下段は43.95m付近となる。下段ではこの面に土坑を連続するように掘削する。掘削の深さは20~40cmと一定しない。上段の第1列石について掘方は確認しておらず同様の掘削がなされた可能性を考えるが、第1列石に第2列石よりも大きな石が用いられたとすれば、

掘削は深くなると思われる。この後掘削部分に角礫を措いて根石とし、石材を順に据える。そして盛土を行い、列石間に円礫を敷く。

c 集石 (図51~53、図版11)

調査区の西側では集石を検出した。集石は土手や縁辺の未掘部分にわずかに広がると思われるものの、下方になる西側を除いた3方は検出範囲にほぼ収まる。平面形はおおむね長方形をなしており、南北の幅は3.4m、検出延長は7.1mである。集石は大きいもので長さ35cm、小さいもので5cm、主に20cm前後の花崗岩類の礫で構成されている。地山に含まれる風化の進んだ礫が主である。

礫のあり方は図51平面図の左になる北東側と右の南西側で若干異なる。北東側は小形の礫をまじえて礫の密度が高く礫の上面は比較的そろそろ。それに対し、南西半は礫の密度が低く大形の礫が主体となり、上下の石が接しなかったり散在の状況をなす箇所も多い。ただし、西隅では、礫4石程度が35



図51 西くびれ部下側 1 : 60



図52 集石断面 1 : 50

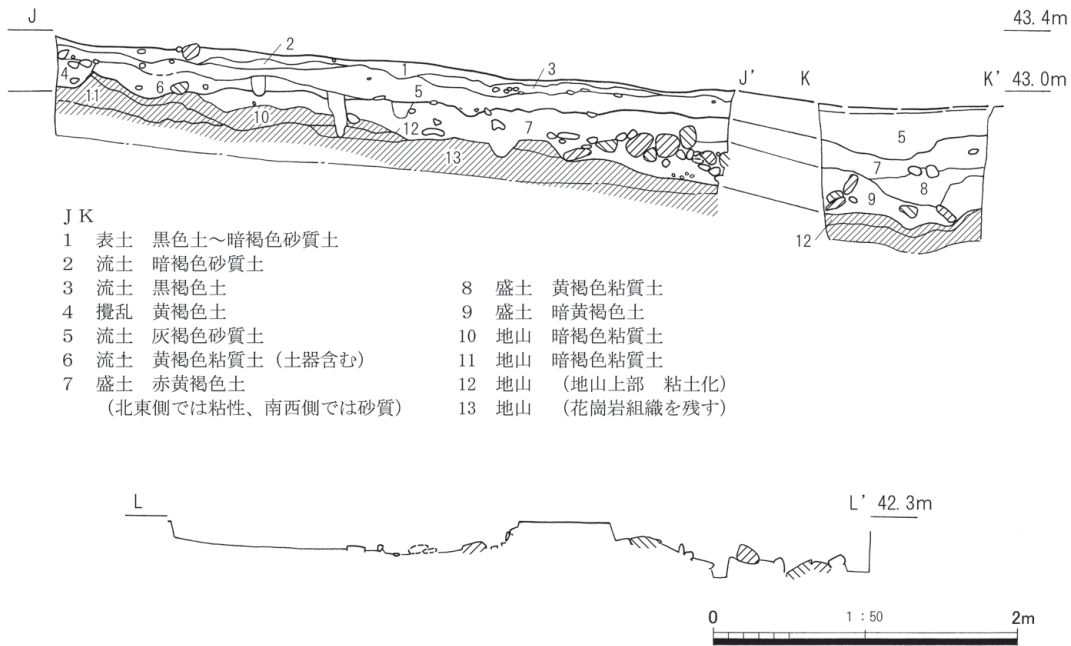


図53 西くびれ部断面(3) 1 : 50

cmの厚さに重なる (P断面西下端)。集石検出上面での傾斜軸線はN・O・P断面の方向で、礫の広がり平面形とは若干ずれる。集石は石敷のような状況ではなく、盛土中 (図52 Q・R 5層、図53 J・K 8・9層、図55 I 7層) に形成されている。

集石を含む盛土の下の地山面は北東側からは緩やかに下降するのに対し、南側はそれよりも強い勾配で下がる。図55 I断面、排水溝の左下に見られる下降である。南側の下がりの肩は弧をなして調査区の西側に抜ける (図51)。後述の西側面調査区で検出した地山の高さから、これは調査区の外を調査区に平行するように伸びると思われる。

集石を含む盛土は、J断面に示すように北東端から徐々に厚くなり遺構の中央付近で30cmの厚さになる。南側の地山の下がりよりも外では薄くなり礫は含まない。以上のように、集石はそれ自体で一つの構造物をなすわけではなく、礫を多量に包含する盛土である。

形成過程 この盛土の形成の手順は以下のように復元できる。

地山との間には旧表土とみられる土がないことから、まずこの付近の表土が広く削り取られたとみられ、北東側は緩やか、南西縁がやや急な傾斜で中央に向かって下降する地山面が形成される。この形状は元の地形を反映したものか、意図的に形成したものか不明である。この表土除去は、上側でなされる列石形成のための地山掘削と一連でなされた可能性もある。

形成された幅の広い溝状部分に礫を投入しつつ盛土を行う (集石の形成) (1次盛土)。

この1次盛土=集石の一部を掘削して後述の排水溝が設けられる。

排水溝完成後、盛土がなされ (2次盛土) (図48 G 3層、図52 Q・R 4層、図53 J・K 7層、図55 I 4層)、1次盛土及び排水溝が覆われる。G 3層からわかるように、2次盛土は円丘部斜面を形成する盛土である。なお、R 4層下方は5層と区分できていないが、Rトレンチ中ほどで4層は終わり、西側の集石は5層に含まれるものと理解している。

以上のように、集石=1次盛土は規模が大きな構造物で、墳丘構築の初期に形成される。遺構の機能なり性格を推定することはむずかしく、2つの解釈が可能である。1つは、地山掘削時に生じた礫を集めて低い箇所埋め込んだとすることである。これによって墳丘外側はより整ったものとなる。

もう1つは、資材などを運び上げる路面の補強のために集石=1次盛土が設けられたとの理解である。この付近は墳丘墓の周囲で最も緩やかな傾斜であり、集石=1次盛土によって形成される斜面はO断面、P断面に示すように13°前後である。墳頂の立石や斜面部の列石を構成する石材などを搬入するためにこれが構築されたと考えることもできる。遺構自体に推定の手かがりがないため、両論の併記とせざるをえない。

d 排水溝 (図54・55、図版11-1、12-2・3)

調査区の南側で石組の排水溝を検出した。掘方の検出全長は7.74m、幅は遺存のよい箇所では52cmである。

平面形は緩い湾曲をもち、南西突出部に向かう。C断面よりも東側は工事による削平を受けており、南東端から先は工事掘削で失われている。C断面よりも西側にも工事掘削は入るが掘削は流土と上層盛土中にとどまる。掘削域からはずれるI・E断面では、厚さ25cmの流土、12cmの2次盛土が排水溝を覆う。

南東部では掘方の断面はU字形をなし、A断面で幅37cm、深さ48cmであり、地山上面が現状よりも約20cm高く、そこから掘り込まれたとすれば、元の深さは65cm程度であったと思われる。中央よりも北西では断面形は外への開きが大きくなってV字形に近くなり、C断面で幅61cm、深さ42cmである。掘削時点では底面は墳丘側は水平に近く、出口側では7°の勾配になる。底に薄い砂層が形成される箇所があり(A3層)、構築中に水が流れたこともあったようである。掘方は南東側では置土で埋められ(A1・2層)、中央部から西は置土(C2下半・3層、F3層)が徐々に薄くなる。北西側は掘り下げを行っていないが、薄い置土の上に石組が構築され一部の石が掘方に直接置かれる状況と思われる。置土で排水溝底面全体の傾斜が形成される。

構築過程 石組は置土の上に構築されており、その位置が高くなる南東部では失われている。C断面から西の部分では、石組は以下の手順で構築される。

①石の形状によっては下に小さな礫をかませ、長さ15~20cmの石を中央に置き並べる。排水溝の軸線に対して直交するように置き、それらの間に礫を置く(図55-1)。

②低い部分にはさらに石を重ねて高さを整える。これが底石となる。

③下端が底石の端にかかるように、溝の両壁にそって長さ20cmほどの石(側石)を並べる。石は北西から墳丘側に向かって置いていく(図55-2)。

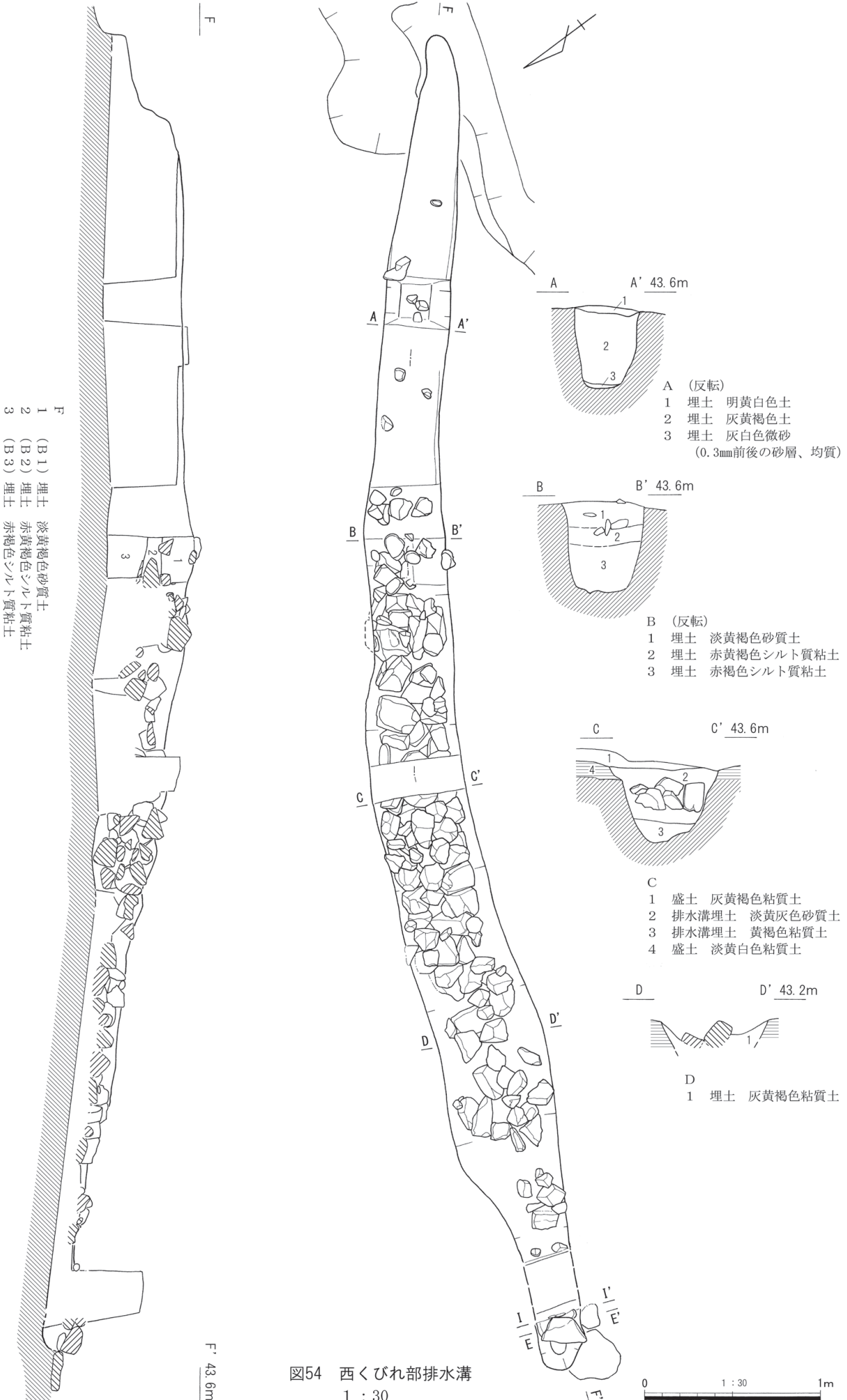
④底石と側石で形成された空間に石を入れる(図55-3)。

⑤それらの石から側石にかけても石を配し、側石の低い箇所にも石を置く(図54)。

幅、深さとも10~15cmの、断面形が凹字形になる溝を石で組み、それに石を入れて整えるという構造である。この上面に木蓋を置いた可能性も考えられはするが、それがなくてもある程度の空隙が形成される。ただし、長期的には隙間に土が入り込むことは避けられない。

E断面では、北側の側石しか断面にかかっていないが、両側石をV字形に配し、その上に大きめの石を被せている。末端では掘方が狭くなるため底石と内部の石が省略されたとみられるが、基本的な構造は上記のC断面付近と同じである。なお、排水溝西端の掘方外側にある平たい石は下の集石の一部である。D断面付近から西では上面に見られる石は疎らにはなるが、同じ構造で構築されているとみられる。

C断面よりも南東側の部分のうちC断面土手に近い箇所では同じ箱形の構造が続くが、そこから南東の範囲では箱形の構造が明瞭でなくなる。部分的に側に薄い石を配する箇所もあるが、石どうしが接しない箇所が多くなり、25cm前後の大きな石の使用が目立つようになる。この部分では石を組むの



ではなく、大きめの石を土を交えて置いている。掘方の幅が狭いため、深くなる箇所では丁寧な施工がむずかしかつたのではないと思われる。

先に集石で記載したように、排水溝は最初になされる1次盛土を掘削して構築されており、排水溝完成後に墳丘斜面と一連の2次盛土で被覆される。

中心主体排水溝の石組の内法が幅30cm、側石に用いられた石の長さ25~30cmに対し、ここではそれぞれ幅15cmと長さ20cmで一回り小さいものの、基本的な構造は同じである。排水溝が行き着く南西突出部には中心埋葬に次ぐ規模の埋葬施設（南西突出部主体）が構築されていたことは疑いない。弥生時代の石槨は壁面構築後に棺を納めることができる構造であり、木槨も同様の可能性がある。葬送が同時に完了したかどうかまではわからないが、中心埋葬と同時に南西突出部主体が構築されたとみてよい。

e 出土遺物（図56~59）

出土状況 調査区東部で検出した円礫敷上およびその付近から出土した遺物を主に示した。図56右の小形器種197~204、図57・58、図59特殊器台226~236がこれにあたる。特殊壺頸部の大形破片215は、列石31の東に接してまとまる角礫の上から出土した。198・207・208・214・219は円礫敷付近の流土からの出土である。

それら以外では、長頸壺191~193、器台196、土製勾玉239が第2列石抜取跡およびその下方（P22・23）の流土、器台195、小形特殊器台205、小形土器237・238が集石東側（R・S22~24）の流土からの出土である。長頸壺191以下の第2列石よりも下方から出土した土器も、円礫敷付近から流出したものと考えてよい。

また、長頸壺胴部194は第2列石抜取跡土坑1からの出土である。このほか、土製勾玉240は南西突出部破壊時に採集されたものであり、元はこれらに伴っていた可能性が強いためここに示した。

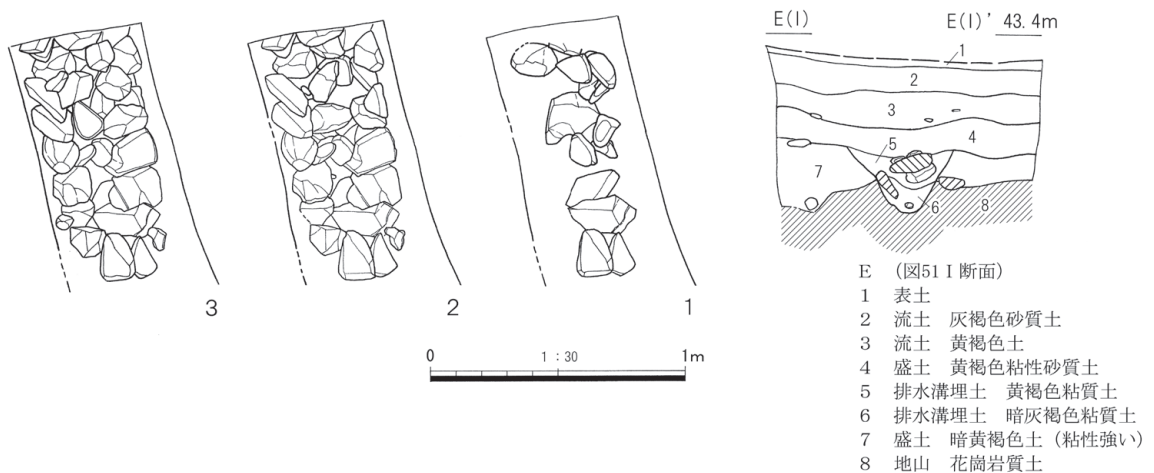


図55 排水溝構築過程・盛土西端部断面 1:30

長頸壺・器台 191~193は胎土に角閃石を含みB類類似で丹塗りが見られる。受け部の外面調整は191がヘラミガキか、192がヘラケズリののち粗いヘラミガキ、器台195ではタテハケである。193の頸部内面調整はヘラケズリののちナデを加えており、これは器台196も同様である。

小形器台・高杯ほか 小形器台197~201はいずれにも丹塗りが見られる。201では裾の稜線下側まで丹塗りをを行うが脚端までは達しない。部分的に丹が下に垂れた様子が見られる。197の受け部内面は細かいヨコハケののちヘラケズリである。

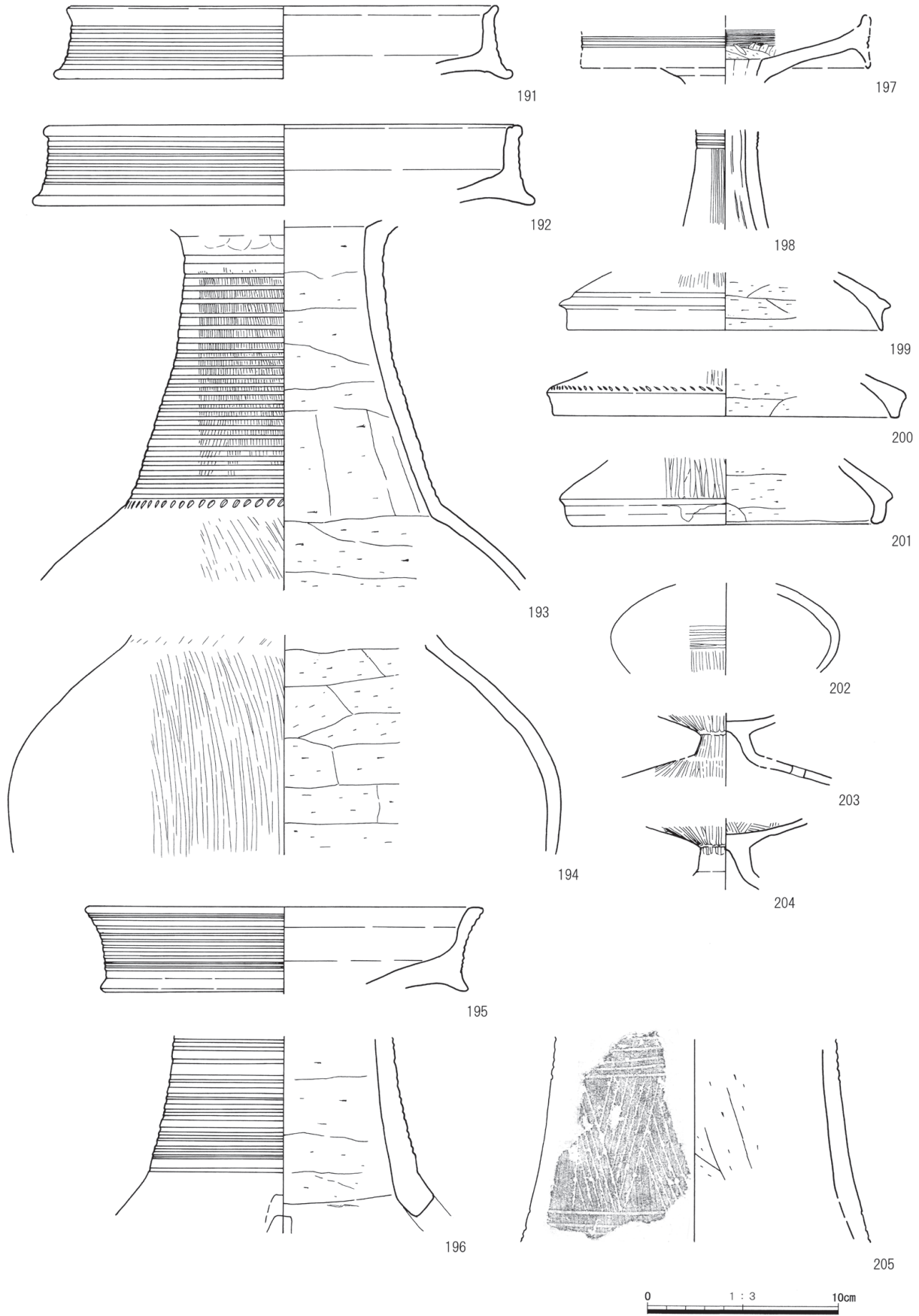


図56 西くびれ部出土遺物(1) 1 : 3

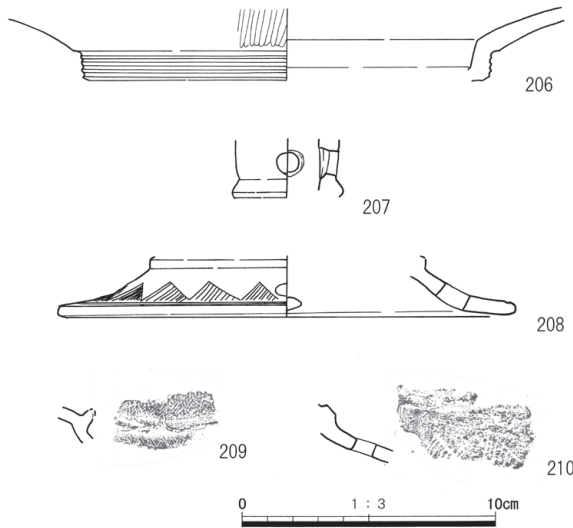


図57 西くびれ部出土遺物(2) 1:3

高杯・脚付直口壺202~204はいずれもきめの細かい精良な胎土で、外面調整は縦のヘラミガキを基本とする。204の内面調整は細かいハケで脚付直口壺の下部である。装飾高杯は206~210がある。杯部206、脚柱部207がどの脚部に組み合うか不明だが、3個体はあったことになる。脚下部209では突帯の上下に細かい楕描波状文を配する。**特殊壺** 211~220がある。218や219など小片では丹が残存しないが、他は基本的に丹が認められ、丹塗りがなされていたとみてよい。底部217では胴部外面に丹が認められるが、底部まで塗られていたかはわからない。口縁部213は上下に対向させた鋸歯文を配する。受け部外面の調整はヘラケズリである。また、これとは別個体の口縁部片

214がある。頸部215は外面に細かいタテハケののち沈線を配する。沈線は細く、1本ずつ施しているが、うまく接続できていない箇所がある。その下端には鋸歯文を配する。胴部は突帯の破片を示した。中段突帯とみられる218・219はやや幅広で、216・220の下段突帯は細い。216は突帯の上側に斜線文が配される。219では鋸歯文であろう。

特殊器台 221~224は同一個体とみられる。間帯から文様帯にかけての221は粘土を貼って間帯を形成しており、上下端の低い突帯間には沈線を配する。文様帯は分割形で斜線文を配する。221では認められないが、222~224には丹塗りが見られる。明黄褐色~灰色を呈し、石英、長石粒を含み、角閃石粒は見られずC類である。

225は器壁が薄い破片で、褐色を呈し胎土には石英、長石、金雲母を含む。2本からなる区画線の左右に裾広がり斜線文を配するが、区画線下部近くは斜線を充填しない。器面の荒れのためわかりにくいだが、その下に楕描波状文がある。小形特殊器台の破片かと思われる。205は小形特殊器台の筒部で、平行沈線で区切った部分に複合斜線文を配する。胎土B。

226~236は特殊器台A類である。口縁部は226・227があり、他のA類と同様、大きな口縁拡張部を突帯で区画し楕描波状文と楕描平行沈線を配する。227は口縁拡張部下半が接合面で剥離している。この個体では頸部に楕描平行沈線と楕描波状文を配する。受け部内外面はヘラミガキ、筒部外面の調整はタテハケである。間帯228は他のA類と同様の形態であるが、突帯間を平行沈線で充填するのではなく、平行沈線と楕描波状文を配する。これと同じ文様構成をとるのは南東斜面出土の小片82である。文様帯は分割型で斜線文を入れるが、区画線の間隔が狭く、それを越えて斜線文を充填し、文様が通常の交互配置にならない破片230~234が多数を占める。斜線は右下がりと左下がりがあり、233では中央2区画と右の区画で斜線の向きが変わっており、2区画を文様の単位としているようである。裾部上端の235は平行沈線を配する。脚部236は比較的大形の破片で、脚直立部と脚部突帯の外面が1つの面をなし、平行沈線がめぐる。沈線にはナデが加えられ、凹線に近い。裾部には鋸歯文の一部が残る。その下方は荒れのため明瞭でないが、多条の沈線になる。

土製勾玉ほか このほかに、小形の壺237、同鉢238、土製勾玉3点がある。237、238のようなミニチュア土器は、遺跡全体でこの2点のみである。土製勾玉239は頭部先端が平たい。長さ5.2cm、最大厚さ1.7cmである。同240は尾部が欠損しており、現状で長さ5.6cm、最大厚さ1.9cmである。同尾部破片

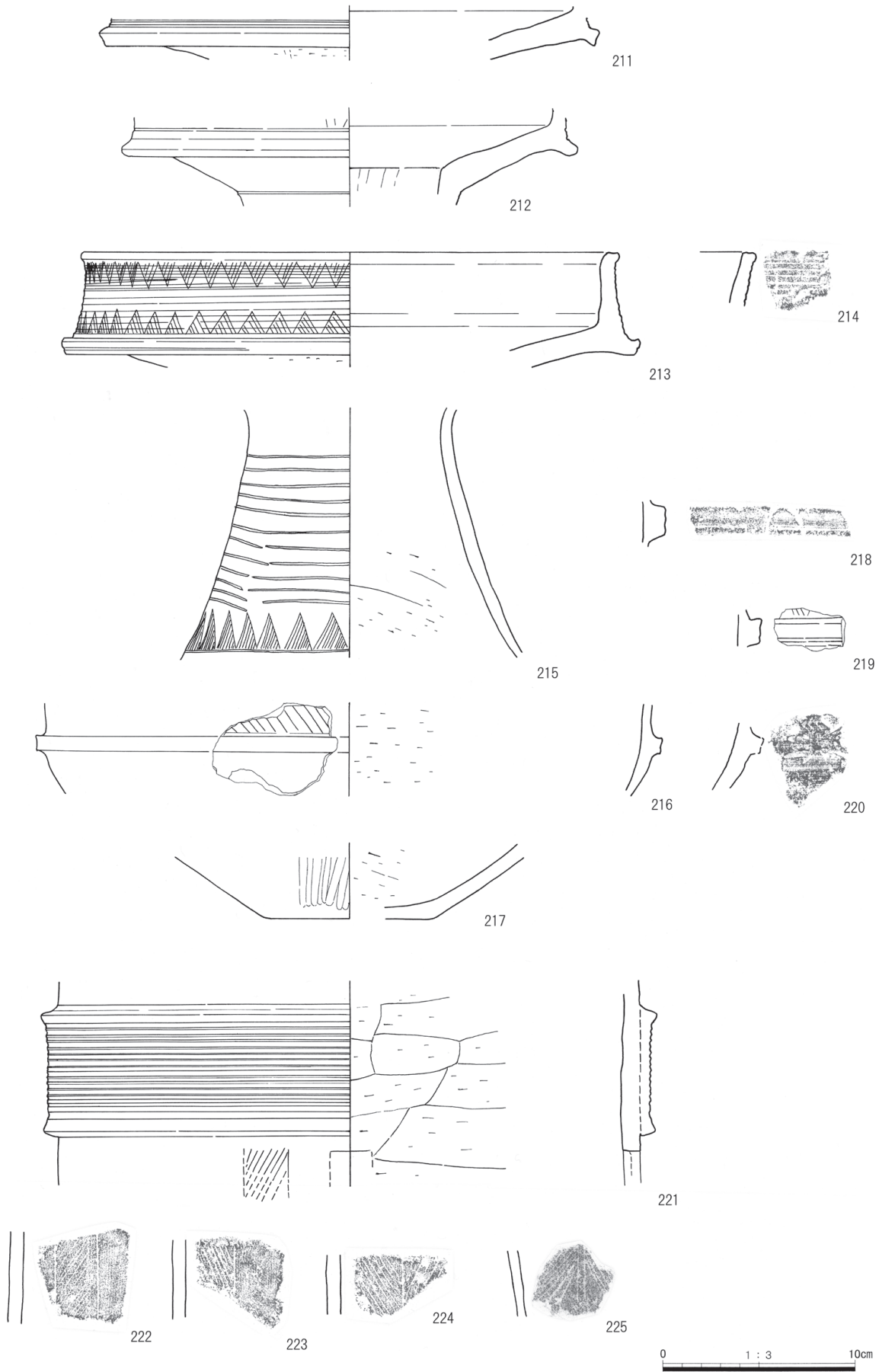


図58 西くびれ部出土遺物(3) 1:3

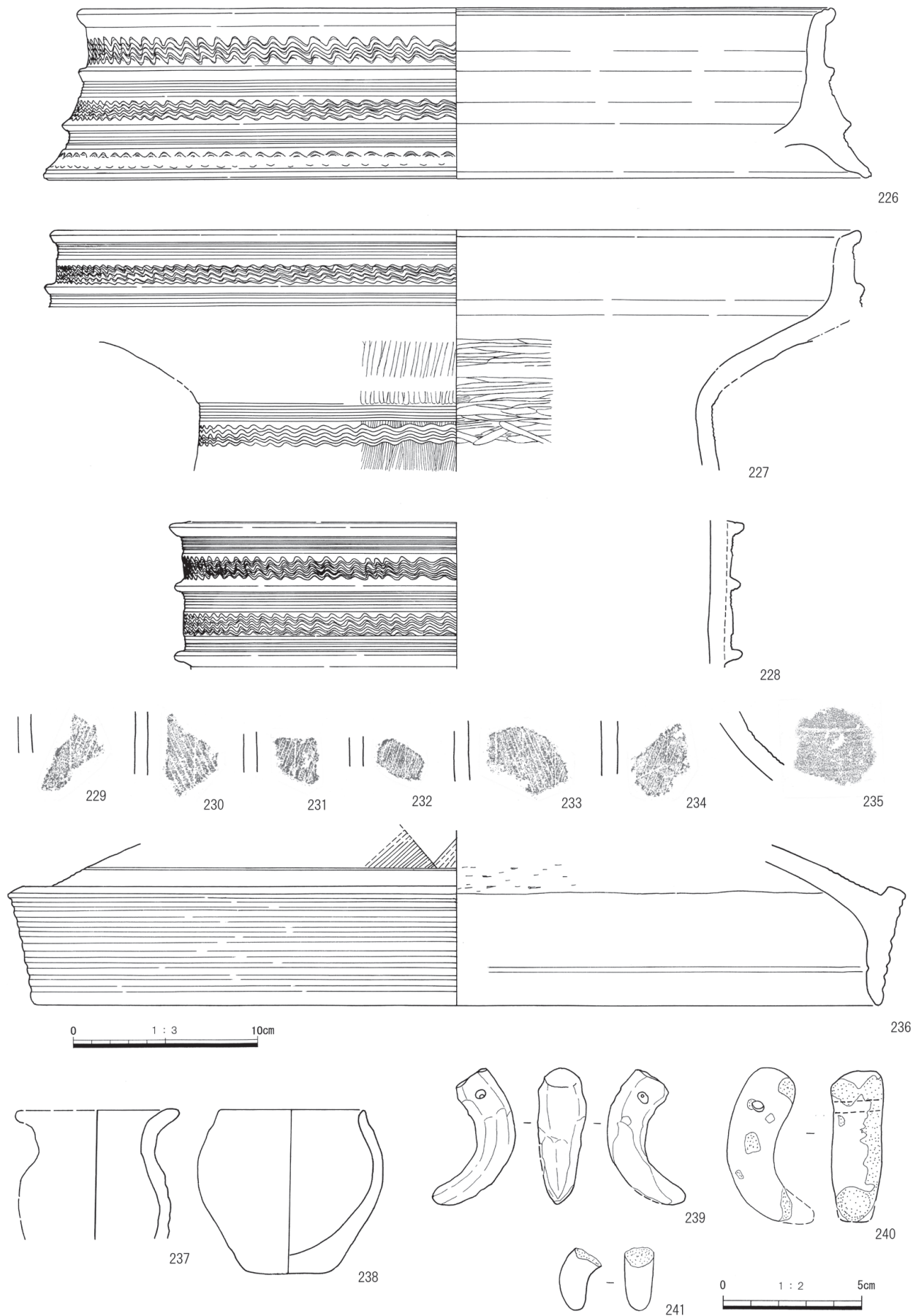


図59 西くびれ部出土遺物(4) 1:3、1:2

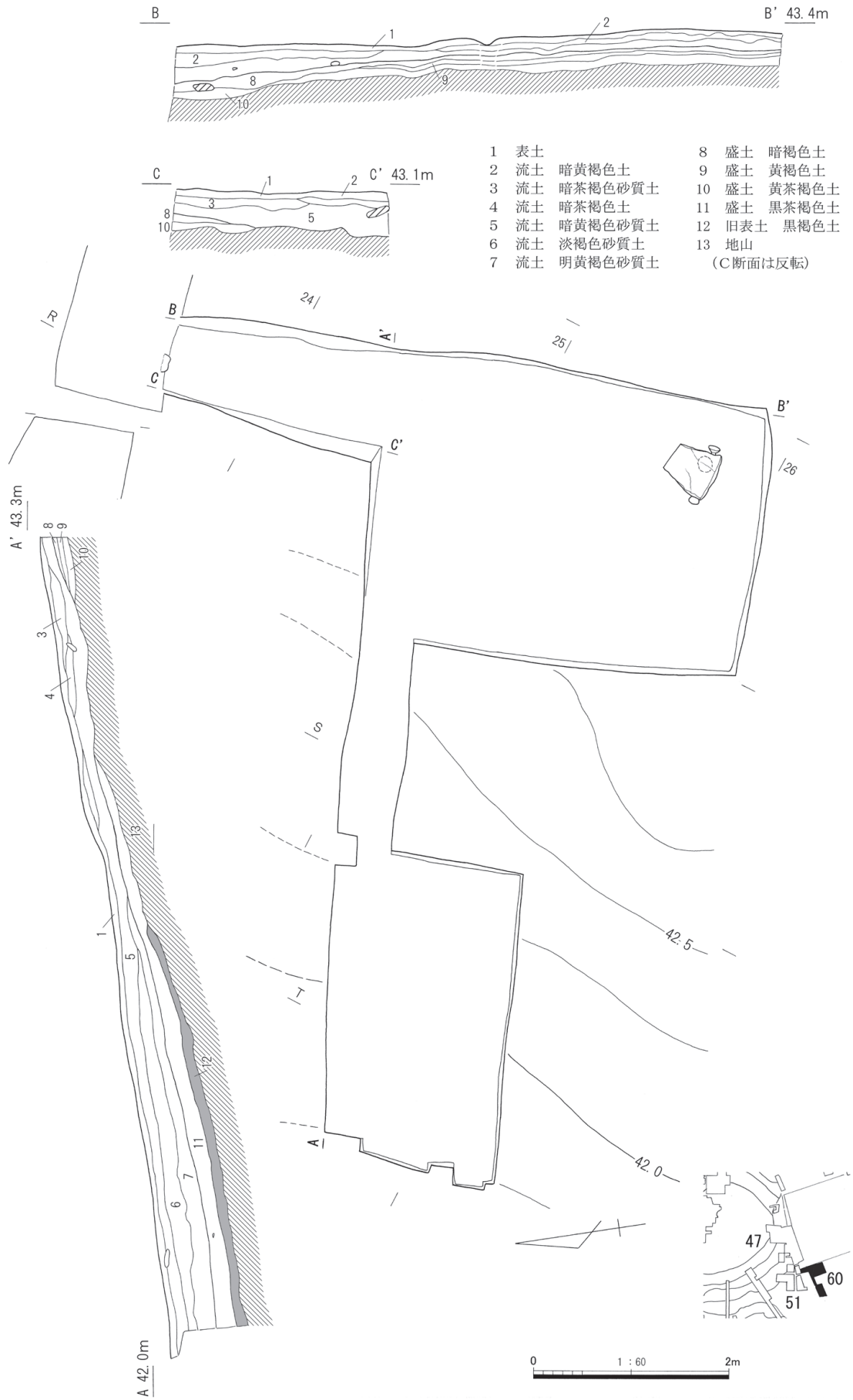


図60 南西突出部西側面 1 : 60

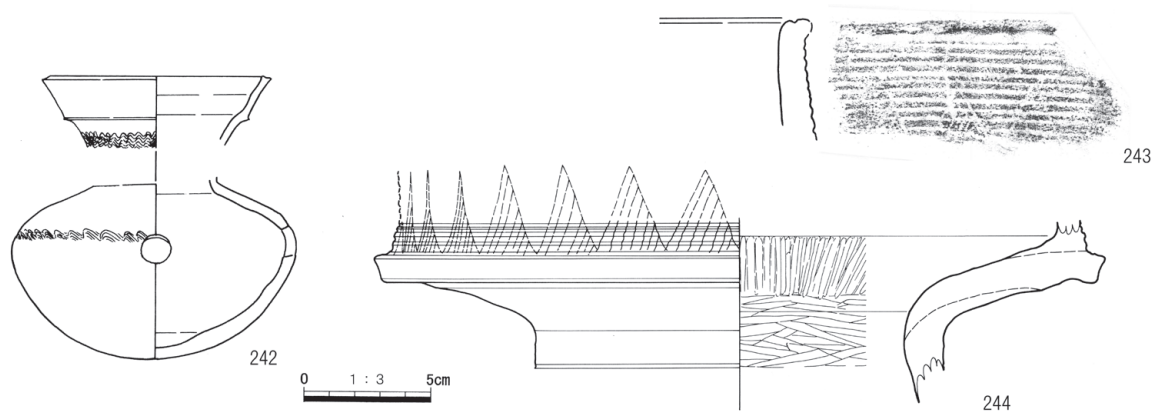


図61 南西突出部西側面出土遺物 1 : 3

241はそれらよりも小形である。

器種構成 以上を示した資料のうち、円礫敷部分について個体数をまとめると、特殊器台3、小形特殊器台1か、特殊壺3、小形器台3、脚付直口壺2、装飾高杯3であり、第2列石採取跡出土194を含めると長頸壺1が加わることになる。特殊器台以下の大形器種が中心となるが、脚付直口壺、小形器台など他の円丘部斜面では見られない器種を含む。後者は近接する墳頂からの流入であるのかこの箇所のものであるのか判断がむずかしいが、比較的大きな破片も含むことから、ここに配置されたと判断する。これ以外に土製勾玉やミニチュア土器など特殊な製品も出土しており、他の円丘部斜面とは異なる器種が配されたとみてよい。

第2列石よりも下方の流土からは長頸壺、器台、小形特殊器台、特殊器台A類などが出土している。大量に土器を含むと見込まれるくびれ部下方の堆積層が失われており、本来の土器量は相当なものであったと思われる。

10 南西突出部西側面 (図60・61)

南西突出部の西側面については、上記の西くびれ部調査区に部分的に接続する形状の調査区を設置し、第6次で調査を行った。厚さ約2mの造成土下になる。工事前の旧表土面は緩やかに北西に下降しており、集石が設けられる西くびれ部の谷状地形が浅く及んだ位置といえる。

旧表土下には上端で厚さ10cm、下端で厚さ45cmの流土(2～7層)が堆積しており、流土は少量の円礫や土器片を含む。調査区南東端の流土下部には長さ50cmの板石が所在しており、その西隅下で須恵器甕242、東隅下で土師器高杯、石の下から土師器鉢が出土した。

図60断面図に示すように、調査区の上端では厚さ23cmの盛土(8～10層)の存在を確認した。10層が西くびれ調査区の1次盛土、8・9層が2次盛土に対応すると判断した。一方、中ほどから下方にかけては流土下に厚さ20cmの黒茶褐色土(11層)が広がる。この層は旧表土とみられる黒褐色土(12層)の上であり、遺物等を含んでいないことから、11層を墳丘構築時の盛土、12層をその時点の旧表土と判断した。11層は斜面を薄く広く覆うことから造成土と呼ぶことも可能であるが、盛土と基本的な差はない。緩斜面を広く覆う盛土であり、突出部下方が広く整えられたことを示している。調査区上端の盛土は部分的な検出であるが、ここから墳丘斜面を形成する盛土がはじまると判断する。

須恵器甕242は墳丘墓とは年代が異なる古墳時代中期の遺物である。体部は完形で、頸部で打ち割られており口縁部破片が伴出した。出土状態からごく小規模な祭祀遺構と判断でき、築造から大きく年代を経た後に祭祀がなされている。

243と244は小形特殊器台の口縁部と受け部である。破片は大きく保存状態はよい。この調査区の造成土から出土したものである。これらが本来所在した位置は西くびれ部あるいは南西突出部前面と想定できるが、いずれか確定できないためここに示した。西くびれ部や南西突出部東側面の造成土には含まれていなかったが、後述の南西突出部前面の造成土にも土器が含まれる箇所が認められた。将来、遺跡の整備がなされる場合には、造成土中の遺物についても注意が必要である。資料は小形特殊器台でも大形の個体で、口縁拡張部外面に鋸歯文を配する。243の口縁部上端には丹が遺存する。胎土A。

11 南西突出部東側面 (図62)

突出部南東側の斜面の状況を把握するため、給水塔フェンスから東に長さ16.7m、幅約2.5mのトレンチを設定した。トレンチの東部、検出した畑の中段と下段の境付近が工事造成面の肩になり、トレンチ東端がその下端付近にあたる。図示していないが、トレンチ中央の造成面肩で造成土は最も厚く、2.1mを測る。

トレンチでは3段の畑を検出した。南くびれ部のトレンチで検出した畑が続いており、それらは斜面下方の畑と同じく等高線に平行するとみてよい。南くびれ部のFトレンチで検出した畑はこのトレンチの上段の畑よりも60cm高く、畑は南北の間で段をなすのかもしれない。旧耕作土下は地山となり、遺構や盛土は認められなかった。旧耕作土等には土器小片、円礫を含むが、その量は僅少である。地山の大き石が耕作土中に突出している箇所もある。

遺構は認められないが、南くびれ部の調査成果からこの付近も墳丘の範囲に含まれ、ある程度の整形がなされた可能性がある。

12 南西突出部前面

a 調査の経過と旧地形

調査の経過 第4次調査において、給水塔と南西の丘陵の間の状況を確認するためのトレンチを設定し、掘り下げを行った。厚い造成がなされていたが、丘陵側の地山が急角度で落ち込み、現地地表下1.5mに工事前の地表、その下に厚さ1.5mの堆積層が存在することが明らかになった。堆積層の下部には円礫や特殊壺破片などが含まれ、また、角礫が密集して広がっており、地山面は水平になることを確認した。このことから、現地地表の下3mまでの間に削平を免れた突出部前面の施設が存在すると判断できた。

この箇所の調査を主要な目的として第5次調査を実施し、突出部前面に大規模な掘削がなされており、突出部前端には大形の石材を用いた列石が設けられていることが判明した。続く第6次調査では、列石端部の形状の把握などを課題として調査を行った。この一連の調査によって、突出部前面の構造を解明することができた。

検出した遺構は、突出部前端に設けられた列石と堀切状大溝である。調査区は第5次調査で4ヶ所、第6次調査で3ヶ所のトレンチからなるが、第6次調査のトレンチのうち2つは第5次調査トレンチの拡張の形をとるため、調査箇所は最終的に5ヶ所のトレンチにまとまる(図1)。以下では第5次調査での名称を引き継ぎ、北西から5区、1区～4区とする。第4次調査のトレンチは2区の中央に重複する。列石個別の番号は、北西から1区32～39、40・41、2区が42～45、3区46～50とする。

調査前の地形 (図63) 南西突出部前面の地形については、工事施工前の観察所見(近藤1977)と、古い記録(永山1921)があるが、調査時点では削平され厚い造成土に覆われた状態であった。造成土(0層)は厚く、1.5～1.7mに達する。堀切状大溝の上部を含む丘陵頂部は高さ1.8m、奥行き5.5m、

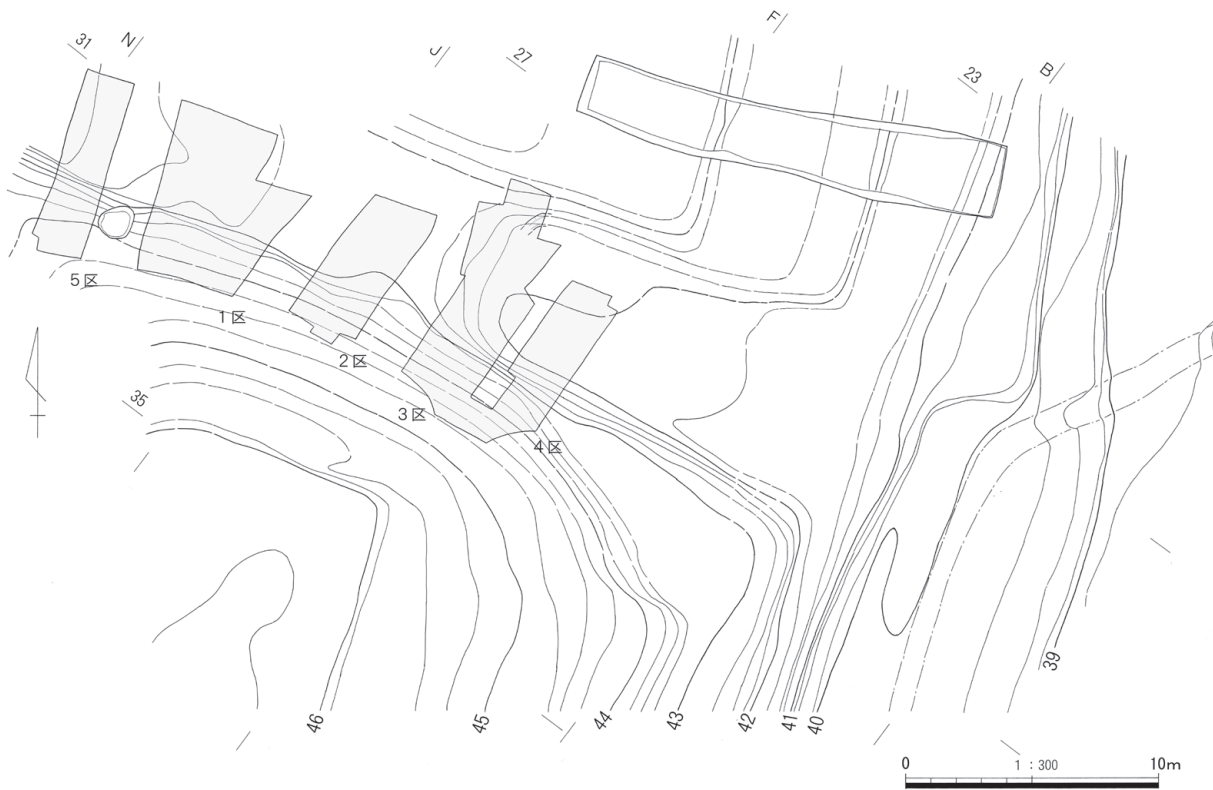


図63 南西突出部前面旧地形 1 : 300

幅30mにわたって削り取られており、突出部は42.4mより上が削平され、さらに給水塔に向かって工事掘削が深くなる。図67・68に示すように、堀切状大溝の埋土は丘陵側では44.0m付近から下が遺存する。

図63に示した地形図は、造成土の下方あるいは上側に残存した地形と調査区に残存した旧地表面をもとに、地形を復元したものである。突出部東側面に階段状に設けられる畑の形状のうち、南西側短辺の位置と形状は推定である。

突出部前面の旧地形は長い堀切状をなし、底面は平坦で丘陵側が急角度の斜面をなす。南東に下降する底面は発掘調査範囲東部分で斜面をなして上段と下段に分かれ、それぞれ平坦な面をなす。3区の北、下段底面の縁となる箇所ですり込まれ等高線にそって弧を描く幅47cmの溝を検出しており（図63）、下段の底面は畑として使用されたとみられる。上段の底面もこうした谷状の地形でありながら平坦で、畑として利用され、そのため上下の段に分かれることになったと思われる。上段の底面は長さ7mの平面が続いたのち北西に下降する。南東の頂部から上段の底面までの深さは3.4mである。

b 検出遺構（図64～75、図版13～20）

堀切状大溝 突出部の形成にあたって、最初に山頂を切断する堀切状の大溝が掘削される。周辺の地形が失われているが、南西の丘陵の三角点の位置や等高線から稜線は2区付近を通過しており、堀切状大溝はそれに直交して掘削されたと判断できる。

丘陵頂からの深さは4.3m、上幅は推定7mである。底面幅は列石が設置されるため概略となるが、北西の1区で4.0m、2区で3.1m、南東の4区で3.5mと、2区で狭くなる。掘削底面の高さはそれぞれの中央部分で北西の5区B断面41.07m、1区C断面41.32m、2区E断面41.46m、3区H断面41.20m、4区J断面41.02mと、2区のE断面が最も高く、両側に緩やかに下降する。

底面では1区北西隅と2区の西端、4区の東端にそれぞれ1ヶ所、3区の東端2ヶ所に深さ8～21cmの掘り込みが見られる(図66・69・70)。いずれも不整形な平面形で、埋設などを行った形跡はなく整地土で埋められており、底面に露出した地山中の石を取り去った跡とみられる。一方、3区の列石東端の前面では列石線と同じカーブを描く溝状の掘削がなされる(図70)。検出長さ1.80m、幅87cm、深さは南側の大溝底面から10cmである。整地土によって埋め戻され、その後、内側に列石掘方が掘られるため、掘込みの墳丘側の肩はそれによって掘削される。この箇所では列石によって画される突出部墳丘は丸みをもち墳端線は北側に入り込むが、その形状を決め、そこまで墳丘側の地山を削り込んだ際に生じた掘削とみられる。

堀切状大溝の底から斜面にかけて、大石4個とそれよりも小さい石3個(大石a～g)が所在する(図版14-2、15、20-2)。このうち最も大きいcは推定長径1.9mの偏球形の大石で、下端が底面の地山に入っている。落下してめり込んだと考えるが、掘削の際に撤去することができなかった石の可能性もある。残る6石のうち大石aとbは早い時期に形成された堆積土に乗っており、斜面から落下したものである。

丘陵側斜面(図67・68) 堀切状大溝の丘陵側斜面の勾配は、上側と底面近くとで異なる。B断面では40°であるが、E・H・F断面では底面近くで62～66°の急勾配をなす。一方、上方はいずれの断面も30～45°の傾斜となる。傾斜が変化する位置は各調査区で異なる。

この断面形状は、当初のものとは考えにくい。長径1.5m以上の大石eは堆積土に乗っており、元は丘陵側の斜面に所在したものである。長さ2.1mの大石bや1.6mの大石aも南北いずれの側かは不明であるが、築造時には安定した状態で斜面に所在し、後にそれを支えていた土が崩れ落ちて落下したと判断できる。また、下方へ流出した土も少なくなかったであろうが、1.5mに達する厚さの堆積が形成されている。これらから、法面は全体にわたって大きく崩れて後退したと考えられ、早い段階に埋没した下部の62°の傾斜が元の形状をとどめると判断できる。当初は堀切と見まがう急勾配の法面であったと考えてよい。

列石(図64・65、図版15～17) 突出部前端の基部には列石が設けられる。列石線は緩やかな弧を描いており、調査区間の未調査部や土手があるが、それを含めた検出延長は15.1m、両端をむすぶ直線で14.4mである。深い位置に埋没していたため保存状態はよく、この遺跡の威容をよく表す。これまでに示したように他の多くの箇所では列石は小形石材の間に間隔をもって大形石材を配するが、ここでは中形・大形の石材を連続して配しており、石の用い方は北東突出部に残存する第1列石が似るようである。列石は石材を縦に使うって構築されており、平らな面を外側に向けてそろえる。石材の間には、隙間を埋めるため長さ20cm前後の角礫を重ねて詰めている。また、下部に根石状に石を配する場合がある。

石材は2区の2石目となる列石43が最も大きく、長さ1.37m、幅1.12m、厚さ推定60cm、据えられた状態での高さは1.14mである。他の石材は高さ65～105cm、幅55cm前後である。使用石材は場所ごとにまとまっており、列石32～41はやや角張り稜線が比較的はっきりした石材で、厚さ25～30cmである。それらに対して列石42～45は風化によって形成された丸みが強い石・コアストーンで、列石43のように大きなものを含む。一方、南東端の列石46～50は、円丘部の第1列石などに用いられるのと同様の厚さ10～20cmの板状の石で、稜が明瞭なものが多い。

列石42～45など球形気味の石は楯築山で採取可能と考えられ、堀切状大溝の掘削の際に出たものを用いた可能性がある。板状の石材は他の山で採取され持ち込まれたと考える。列石の石材は基本的に花崗閃緑岩であるが、列石48は流紋岩と判断した。流紋岩はこの丘陵からは産出せず、板状石材の搬

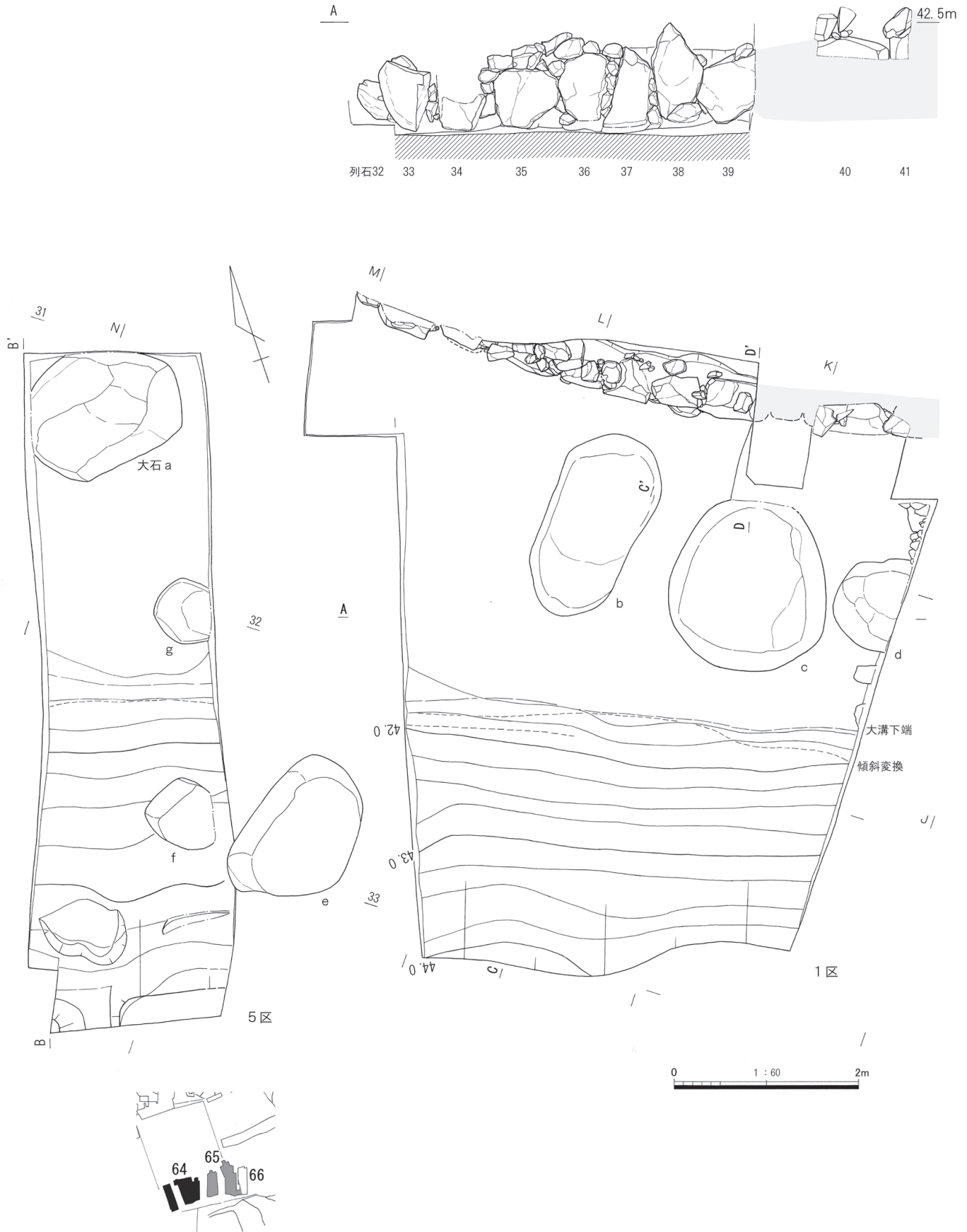


図64 南西突出部前面(西半) 1:60

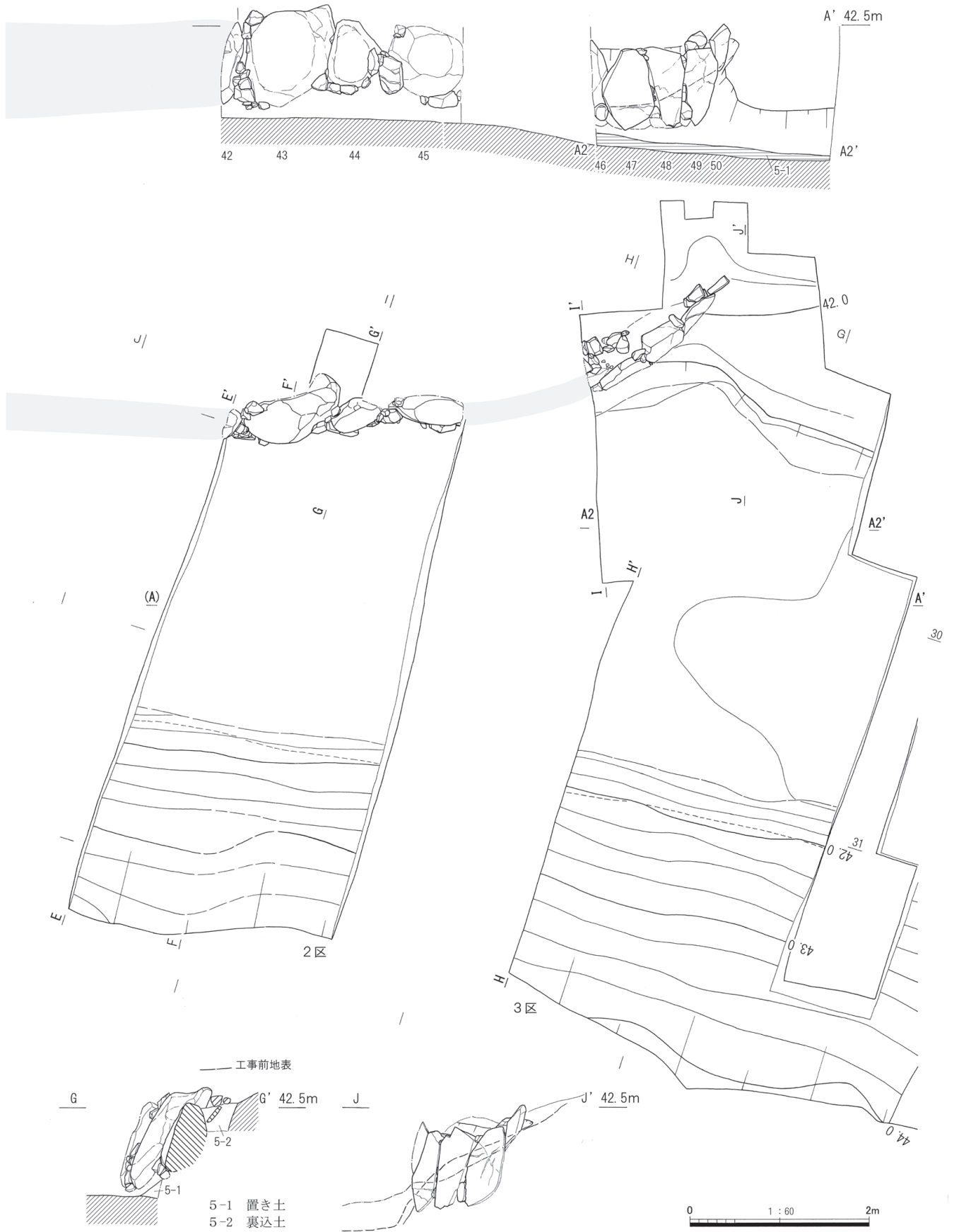


图65 南西突出部前面(東半) 1:60

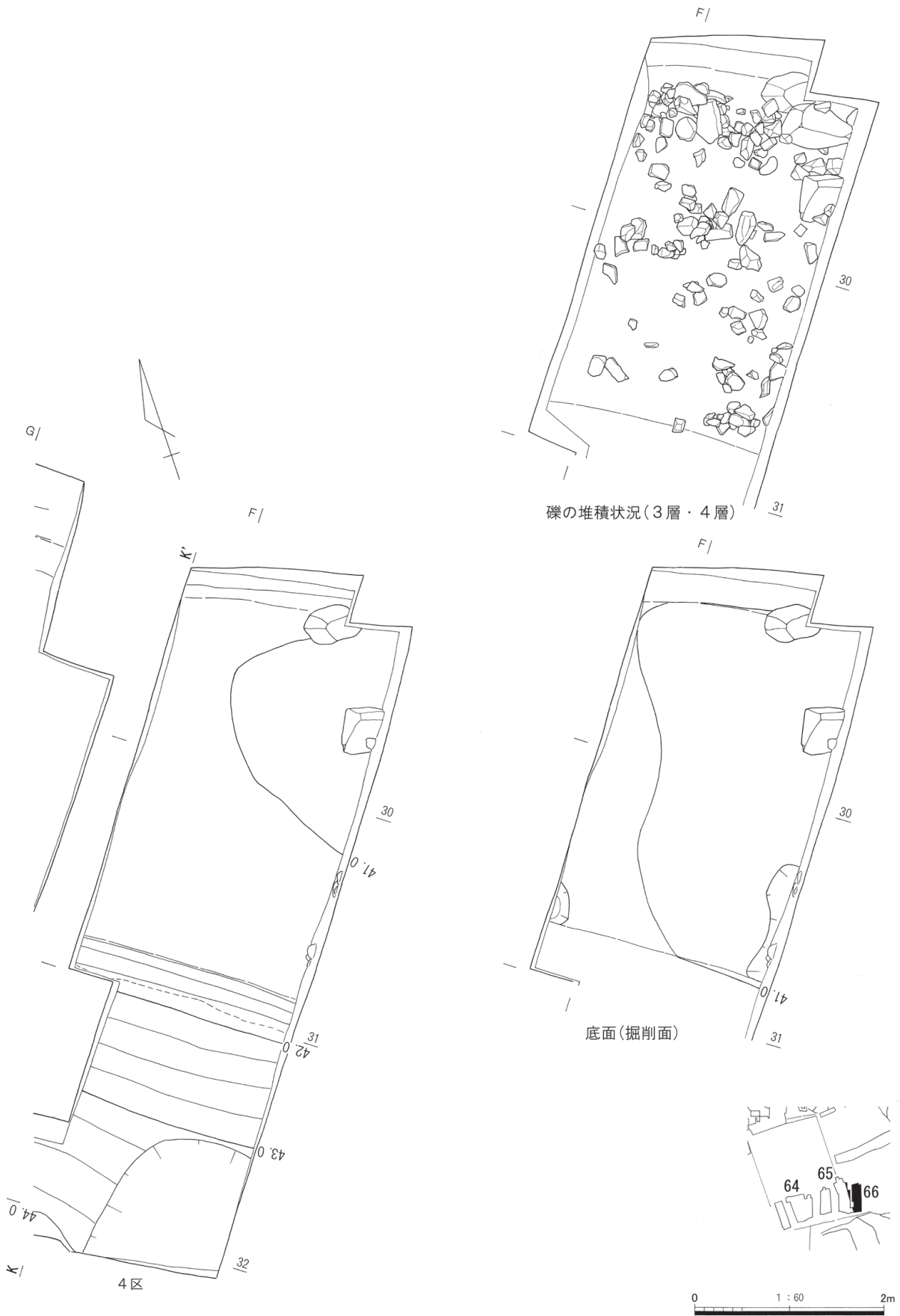


図66 南西突出部前面(東端) 1 : 60

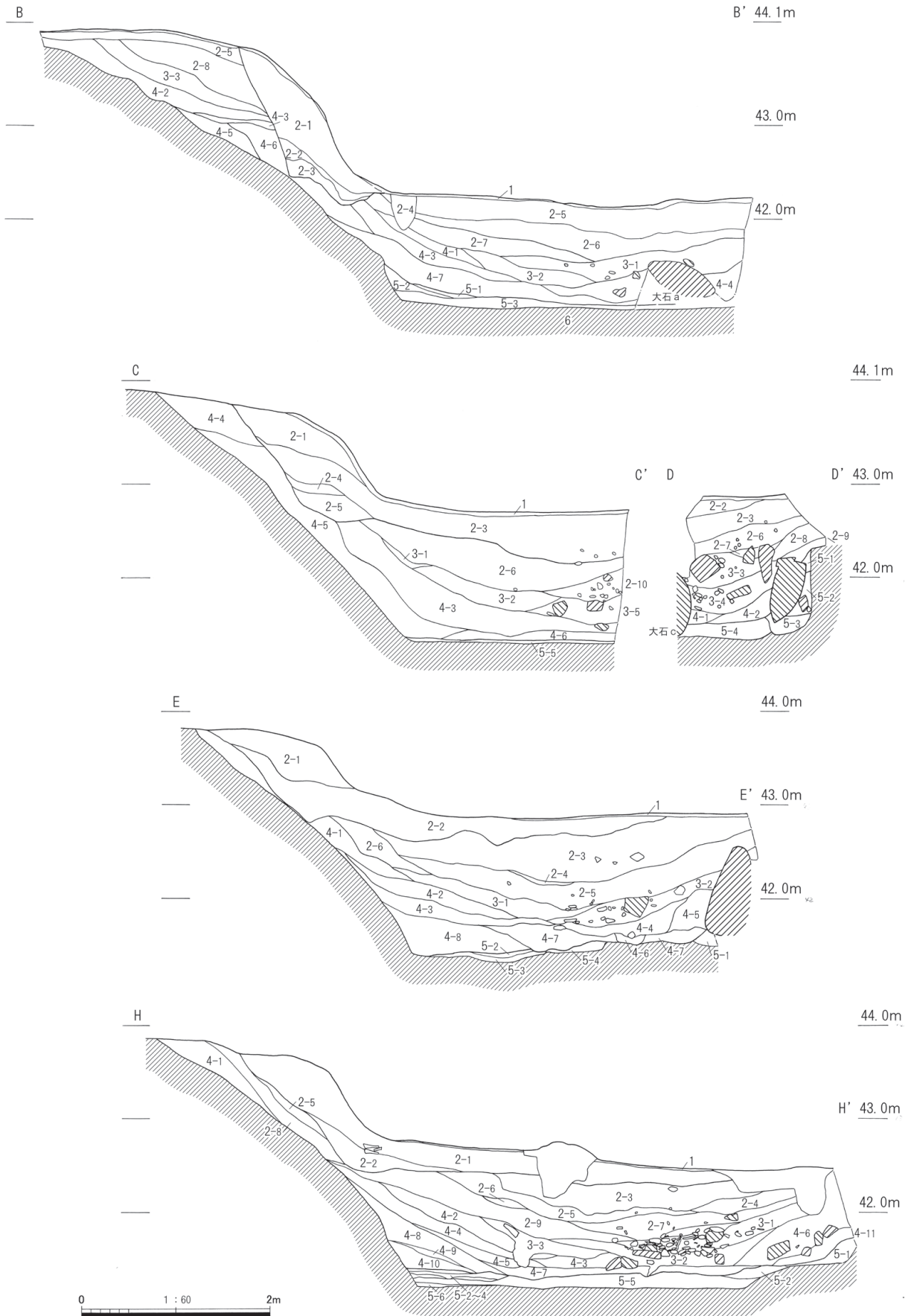
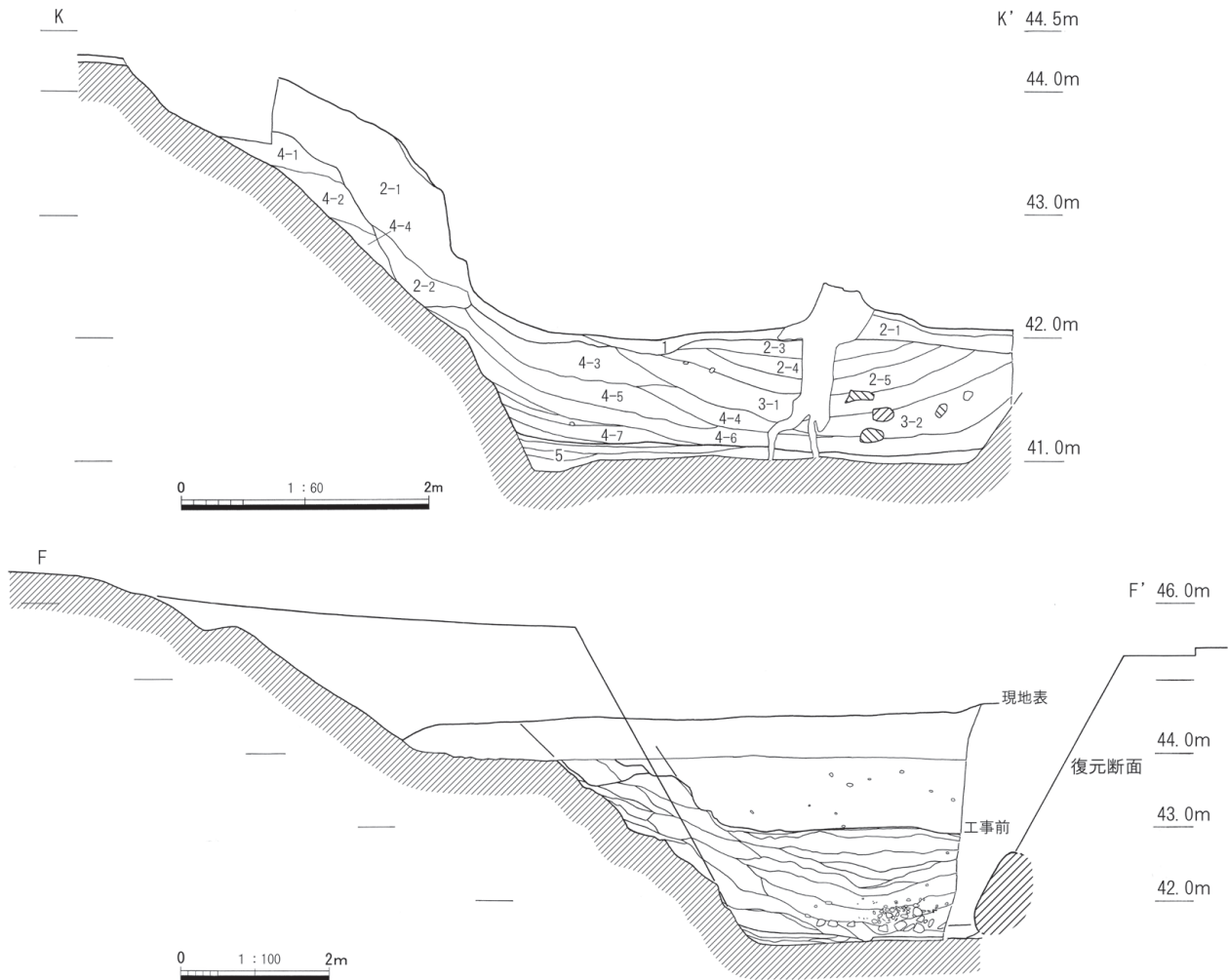


图67 堀切状大溝断面(1) 1 : 60

第3章 墳丘の構造と出土遺物



- B
- 1 旧表土
 - 2-1 溝埋土 明黄褐色砂質土
 - 2-2 溝埋土 暗褐色砂質土 (有機質含む)
 - 2-3 溝埋土 明黄褐色砂質土
 - 2-4 攪乱 暗褐色砂質土
 - 2-5 堆積土 黄褐色砂質土 (中世土器含む)
 - 2-6 堆積土 明黄褐色砂質土
 - 2-7 堆積土 暗褐色砂質土
 - 2-8 堆積土 暗褐色砂質土
 - 3-1 堆積土 黄褐色砂質土 (円礫・土器含む)
 - 3-2 堆積土 黒褐色砂質土 (遺物少ない)
 - 3-3 堆積土 黒褐色砂質土
 - 4-1 堆積土 明黄褐色粗砂
 - 4-2 堆積土 黒褐色砂質土
 - 4-3 堆積土 黒褐色砂質土
 - 4-4 堆積土 暗褐色砂質土 (角礫・土器多く含む)
 - 4-5 堆積土 黄褐色砂質土
 - 4-6 堆積土 黄褐色砂質土
 - 4-7 堆積土 黄褐色砂質土
 - 5-1 整地土 赤黄褐色土
 - 5-2 整地土 黄褐色シルト
 - 5-3 整地土 赤黄褐色砂質土
 - 6 地山

- C・D
- 1 旧表土 黒色土
 - 2-1 堆積土 黄褐色土
 - 2-2 堆積土 淡黄褐色砂質土
 - 2-3 堆積土 黄褐色土
 - 2-4 堆積土 黄褐色土 (黒色土を含む。ある時期の旧表土)
 - 2-5 堆積土 黄褐色土
 - 2-6 堆積土 暗黄褐色土
 - 2-7 堆積土 淡黄褐色砂質土
 - 2-8 堆積土 淡黄褐色砂質土
 - 2-9 堆積土 明黄褐色砂質土
 - 2-10 堆積土 暗黄褐色土
 - 3-1 堆積土 黒色土 (黒色薄い)
 - 3-2 堆積土 黒色土 (遺物量多い)
 - 3-3 堆積土 黒褐色砂質土 (遺物量多い)
 - 3-4 堆積土 黒褐色砂質土 (遺物量多い)
 - 3-5 堆積土 黒色土 (角礫含む)
 - 4-1 堆積土 暗黄褐色細砂質土
 - 4-2 堆積土 黄褐色細砂質土
 - 4-3 堆積土 橙褐色土 (黒色やや混じる)
 - 4-4 堆積土 橙褐色土 (黒色を帯びる)
 - 4-5 堆積土 橙褐色土
 - 4-6 堆積土 橙褐色土 (わずかに粘質)
 - 5-1 列石裏込め土 黄橙褐色砂質土
 - 5-2 列石裏込め土 淡黄褐色細砂質土
 - 5-3 列石裏込め土 暗黄褐色砂質土
 - 5-4 整地土 明橙褐色細砂質土
 - 5-5 整地土 赤黄褐色砂質土

- E
- 1 旧表土
 - 2-1 堆積土 明黄褐色粗砂質土
 - 2-2 堆積土 明黄褐色粗砂質土
 - 2-3 堆積土 黄褐色粗砂質土 (黒色有機質土含む)
 - 2-4 堆積土 暗黄褐色細粗砂質土
 - 2-5 堆積土 暗褐色シルト (土器細片、円礫少量含む)
 - 2-6 堆積土 暗黄褐色細粗砂質土
 - 3-1 堆積土 黒色細粗砂質土 (黒色有機質多く含む)
 - 3-2 堆積土 黒色細粗砂質土 (黒色有機質多く含む) (円礫、角礫、土器片多量に含む)
 - 4-1 堆積土 暗黄褐色粗砂質土
 - 4-2 堆積土 暗黄褐色粗砂質土 (黒色有機質含む)
 - 4-3 堆積土 暗黄褐色粗砂質土
 - 4-4 堆積土 暗褐色粗砂質土 (黒色有機質含む)
 - 4-5 堆積土 暗赤褐色粗砂質土 (黒色有機質含む) (角礫多く含む、土器細片含む)
 - 4-6 堆積土 暗褐色粗砂質土
 - 4-7 堆積土 暗黄褐色粗砂質土 (黒色有機質土B状に含む)
 - 4-8 堆積土 黄褐色粗砂質土

図68 堀切状大溝断面(2) 1:60、1:100

5-1 整地土 黄褐色粗砂質土	3-2 堆積土 暗褐色細砂質土	K
5-2 整地土 明灰黄褐色粘質土	3-3 堆積土 暗褐色細砂質土	1 旧表土
5-3 整地土 赤黄褐色砂質土 (固く締まる)	4-1 堆積土 暗黄褐色シルト	2-1 堆積土 黄褐色土
5-4 整地土 赤黄褐色砂質土 (固く締まる)	4-2 堆積土 暗黄褐色微砂質土	2-2 堆積土 黄灰褐色土
	4-3 堆積土 赤黄褐色微砂質土	2-3 堆積土 褐色土
	4-4 堆積土 赤黄褐色粗砂質土	2-4 堆積土 暗褐色土
	4-5 堆積土 赤黄褐色粗砂質土	2-5 堆積土 暗灰黒色土
H	4-6 堆積土 暗褐色微砂質土	3-1 堆積土 暗黒色土
1 旧表土	4-7 堆積土 暗赤褐色砂質土	3-2 堆積土 暗灰褐色土
2-1 堆積土 黄褐色砂質土	4-8 堆積土 暗黄褐色微砂質土	4-1 堆積土 灰褐色土
2-2 堆積土 暗黄色砂質土	4-9 堆積土 赤褐色粗砂質土	4-2 堆積土 灰色土
2-3 堆積土 暗黄褐色細砂質土	4-10 堆積土 黄褐色粗砂質土	4-3 堆積土 暗灰褐色土
2-4 堆積土 黄褐色細砂質土	4-1 堆積土 暗褐色細砂質土	4-4 堆積土 灰褐色土
2-5 堆積土 黄褐色細砂質土	5-1 整地土 暗黄褐色細砂質土	4-5 堆積土 明褐色土
2-6 堆積土 黄褐色細砂質土	5-2 整地土 暗赤褐色粗砂質土	4-6 堆積土 暗黄褐色土
2-7 堆積土 暗褐色シルト	5-3 整地土 灰赤褐色粘質土 (固く締まる)	4-7 堆積土 明黄褐色土 (地山由来の薄層を挟む)
2-8 堆積土 黄褐色細砂質土	5-4 整地土 暗黄褐色細砂質土	5 整地土 明褐色土 (暗灰色砂薄層を挟む)
2-9 堆積土 暗黄褐色シルト	5-5 整地土 暗黄褐色細砂質土	
3-1 堆積土 黒色シルト	5-6 整地土 灰赤褐色粘質土 (固く締まる)	

入を裏付ける。なお、列石50には被熱の痕が見られる。石材の採取方法を示すのか、転用材であるのかといった課題が残る。

列石の基底はおおむね水平ながら2区の列石44が最も高く、そこから北西に徐々に下降しており、列石33の基底で50cm下がる。また、南東は列石47で46cm下がった後、端の列石50で大きく上になる。列石の基底はやや波打った線となるが、これは列石44・45が置土を厚くして高い位置に据えられたことに起因している。列石44・45は石材の長さがやや短い、その上端を列石43の高さにそろえようとしたのかもしれない。後述のように列石は基本的に全体を表に出すが、東端では列石は最大で半ばまで埋め込まれる。

石垣(図64・65・71・72、図版16・18・20) 1区の列石のうち33、35、36、39、40、41では列石の上側に長さ30cm前後の石が配されており、上端が低い列石35、36では2石が乗る。図71に示すように、列石の前面には大量の角礫が堆積しており、L断面、M・N立面に示すように石材がなだれ落ちたような重なりを見せることから、列石上に設けられた石垣が崩壊し、一部の石だけが列石の上に残存したとみてよい。崩落したなかで最大の石は長さ88cm、幅42cm、厚さ12cmの板石で(図71上段 大石bの北東に半ばが露出)、それ以下は長さ50cm前後の板石、長さ20～35cmの角礫などからなり、30cm前後の角礫が目立つ。列石41上の石材の高さ42.66mが、確実に復元できる石垣の高さである。これにどの程度の高さが加わるか推定がむずかしいが、42.7m付近を上端とした場合、石垣の高さは、列石が低い箇所では遺存部分を含めて70cm、高い箇所では20cm、列石を含めた高さは約1.3mとなる。崩落した石は多く、部分的にさらに高くなる可能性がある。また、転落している石の一部は、さらに上方の突出部上縁に設けられた列石の石材の可能性もある。用いられた石材のうち列石35中央上側の石は焼けており、崩落したうちの小形石材1点にもそれが認められた。

石垣の崩落は1区、5区で顕著に見られるのに対し、2区では列石に近接した位置に長さ約80cmの大形石材が落下しているほかは20cm前後の石が散在し、3層で円礫の堆積の間に40cm前後の石が点在する状況である。3区から4区にかけては30cm以上の石はさらに少なく、20cm前後の石が広く散在する(図66・72・74)。2区から4区にかけて散在する20cm前後の石のうち、南半のものは丘陵側から流入した堆積土に含まれており、地山に含まれていた石とみられる。北半の石は列石の上や間に配された小形の石材が落下したものが含まれるとも考えられるが、基本的に南半のものと変わらないことから、これらは地山の石であり、石垣は2区では若干の石が積まれる程度であったとみられる。

ここでは列石の呼称で通すが、以上のように、これらによって構成される遺構は石垣と呼ぶべきものである。北東突出部第2列石でも大きな石材の上に礫を重ねて石垣を形成するなど、石垣はこの箇

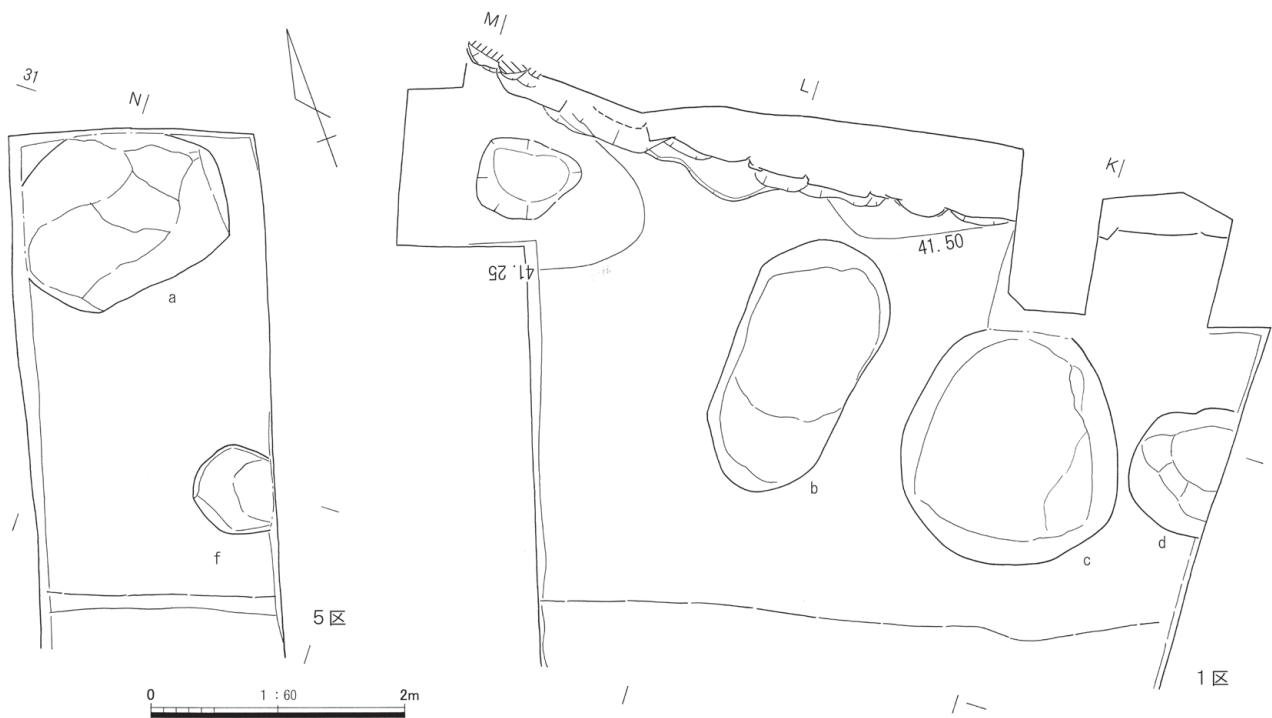


図69 堀切状大溝底面(1) 1 : 60

所のみで用いられた特別な構造ではないが、少なくとも高さ1.3mに達する石壁になることは他の箇所に見られない特徴である。これと同様な石垣を形成する例として、岡山市みそのお遺跡39号墳墓（以降では、みそのお墳墓群、同39号墓等と表記する）などがある（図164）。

列石東端の状況（図65、図版17） 列石東端では列石線の弧がきつくなり、掘方の底面は端で大きく上昇する。また、前述のように石材は板石に変わる。

1区、2区の列石は石の面の全体を出すのが、ここでは石を溝状の掘方に収めており、石材全体は露出しない。図65列石立面、同図下側に示した横方向からの立面（J立面）の一点鎖線から上が地表に現れる部分である。J立面の破線は断面位置での地山線である。列石48は長さのほぼ4割、列石49は6割が埋めてあり、根入れを浅くして石材なるべく表に出すこの遺跡の中ではかなり特異な石の用い方である。

図70 I断面に示すように、列石46の裏側では石の上端から31cm下まで流土が入り、これは列石47でも同様である。この箇所に限って雨水によって列石の後側がえぐられた可能性は考えにくく、石材を変えていることとあわせ、この部分は名前どおりの列石に変化させたと判断する。列石48・49の根入れが深いのも、そのことによるのであろう。なお、15-1層には円礫が含まれるが、これは混入とみられる。

東端の列石50は長さ51cm、厚さ7cmと、他の石材にくらべて著しく小さい。これは列石の端を示す様相との理解もあるが、列石50はここでは小さいといえるものの円丘部北斜面や北東突出部の列石石材の大きさと遜色はない。また、この石よりも上側は畑の形成あるいは流出のため墳丘が遺存しておらず、続く列石がなかったとすることはできない。図66・72・74に見られるように、3区や4区の堆積土中には長さ45cm以上の石材がいくつか見られるが、それらが落下した列石材を含むとすれば、現

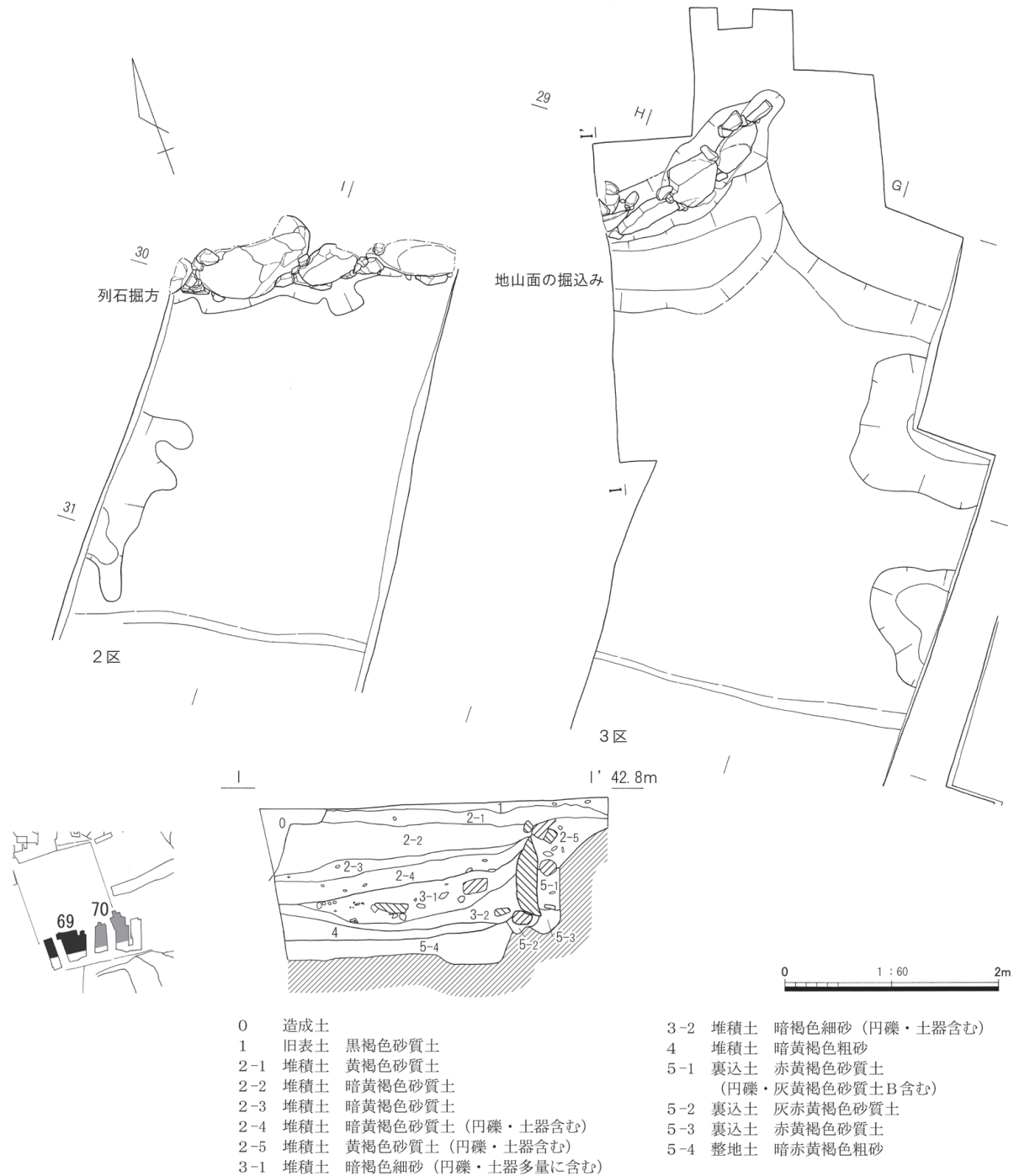


図70 堀切状大溝底面(2)・断面(3) 1 : 60

状よりも上に列石が続いていたと考えることができる。列石をこの付近で終わるとすれば石垣のままでは問題はないが、それを文字どおりの列石に変化させた理由は突出部の稜線に続けて配するためと考えられ、列石線は突出部上縁の隅角に向かい上縁に想定される列石に接続すると推定する。

列石の北西は調査区外にのびており、突出部前端の幅は不明とせざるをえない。東端と同様の形状をとるとすれば、少なくともその長さが加わることになる。ただし、工事掘削は列石の背後付近でさらに深くなっており、それが及んで削り取られている可能性が強い。

列石の構造(図65・67) 列石は垂直に対して 8° (列石37)～ 25° (列石43)で配される。列石の掘方は堀切状大溝の底面に入れられた整地土を掘り込んで設けられており、背面側では地山を急角度に

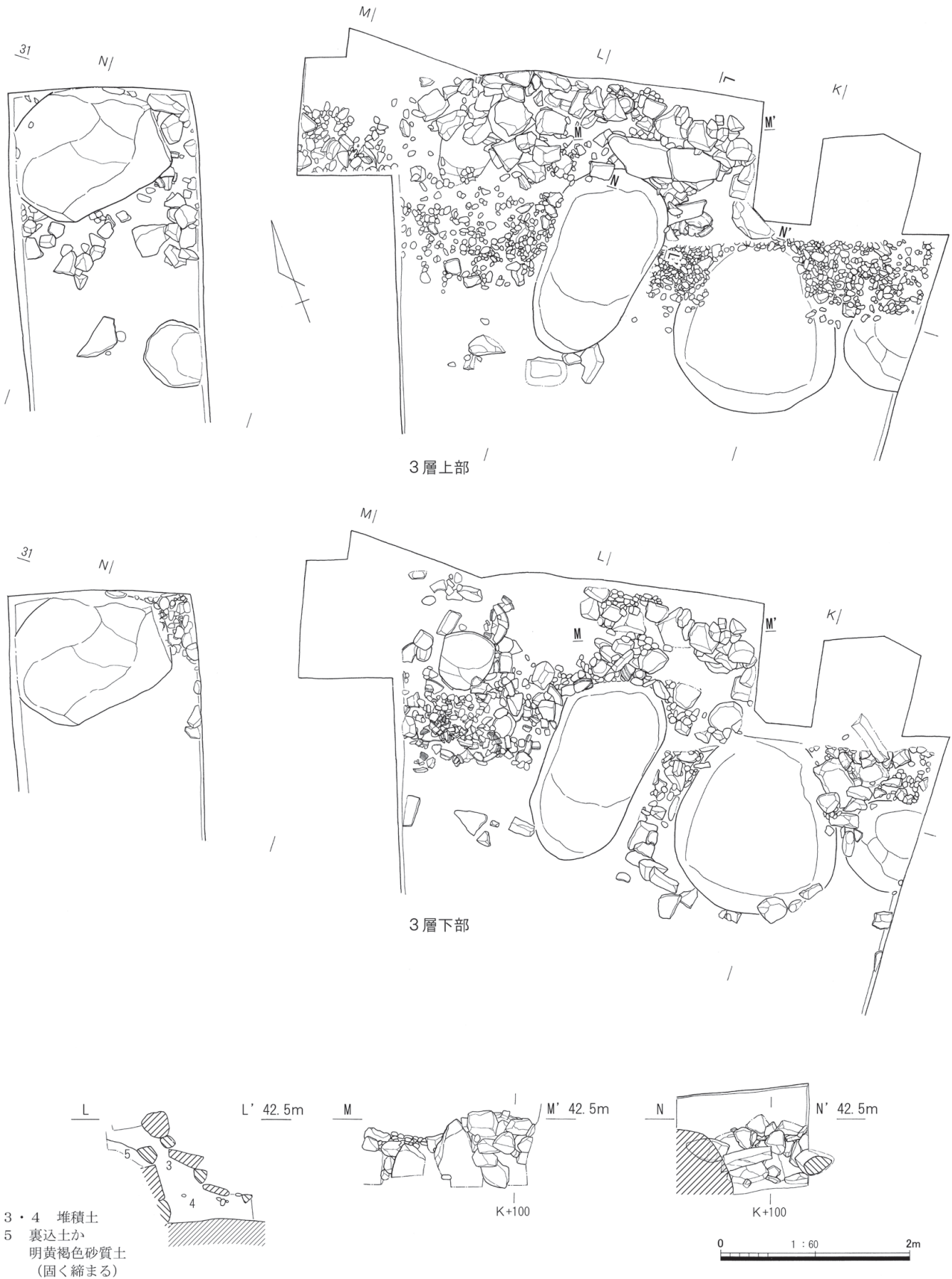


図71 礫・土器の堆積状況(西半 3層) 1:60



図72 礫・土器の堆積状況(東半 3層) 1:60

削り取っている。1区では、整地土を掘削する掘方は石ごとに設けられており、その重複関係から北西方向に順に石を据えていったことが明らかになった。また、3区の列石東端では列石の状況から東にむかって列石が配されたと推定できる。このことから、列石の構築は2区あるいは1区と2区の間からはじめられ、そこから両端にむかって石を据えていったと判断できる。

石材の傾斜からみて、多くは背後の地山にもたせかけるように石を配し、隙間に裏込め土を入れたと思われる。裏込め土には小礫を含む。なお、図69・70には堀切状大溝底面で検出した整地土下の掘り込みと列石掘方を示したが、後者は整地土上に設けられており、同一面の存在ではない。

整地土(図67・68) 各断面に示すように底面には整地土が入れられる。整地土5層は黄褐色の粘質

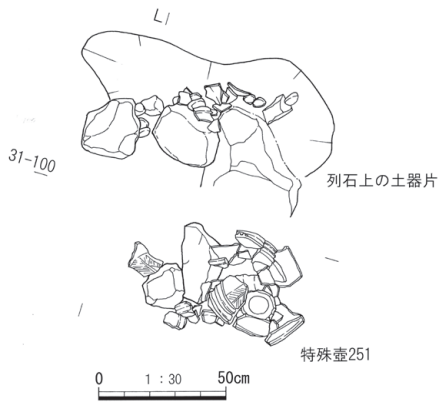


図73 土器の出土状況 1 : 30

土～砂質土で、堆積土とは異なり堅く締まる。厚さや範囲は部分によって異なり、B断面の中央で4cm、H断面中央で15cm、また、E断面では底面の中央付近にのみ薄く広がる。C断面では厚さ3cmであるのに対し、それに近接し早くに落下した大石bの下では最大17cmである。こうした厚さのばらつきや、H断面では北東端で20cmの厚さをもつ一方、中央で厚さを減じることなどから、整地土は築造当初には20cm程度の厚さで敷かれていたが堆積土が形成される前はかなり流出し、特に分水をなすE断面付近で最も失われたと考えることができる。

B・F・K断面では整地土は南西端で斜面にそって上に伸びるような形状を示す。その上端が整地土の元の上面を示すとすれば、

整地土はさらに厚く38cm（B断面）があったことになるが、この形状と同様のカーブで整地土を分層できる箇所が多く、斜面にそって端部が上がる形で整地層が形成されていたようである。

堀切状大溝の掘削後、整地、続いて列石と石垣の構築を行い突出部前面が完成する。丘陵側斜面の下端から列石までの幅は整地土で埋められる分、若干広くなり、1区西端で4.0m、2区で3.2m、3区の列石東南端付近で4.3m、4区で3.9mである。

堀切状大溝の埋没過程（図67・68） 墳丘の完成後、堀切状大溝は南北両側からの流入土によって徐々に埋没する。初期の堆積土である4層は粒子の粗い砂質土で、円礫・土器などをほとんど含まない。1区付近（C～E断面）ではこの層には礫を含まないのに対し、2～4区（H・J断面）では礫の包含が見られる。土砂は南北両側から流入し、断面が三角形になる堆積を形成する。溝底の大石bはこの層に含まれており、かなり早い段階に斜面から落下したとみられる。K断面丘陵側の4-7層では層中に地山風化土の薄層3枚が見られ、崩落と安定を繰り返したことを示している。

続いて堆積した3層は粒子の細かい砂質土で黒褐色を呈し、多量の角礫・円礫・土器を含む。層の厚さは15～25cmで、弓形の断面形をなして4層の上に堆積する。5区および1区では角礫・円礫・土器は層の中央から墳丘側にかけてまとまり、列石の前面に幅2m、厚さ20cmほどの溜まりを形成している（図版18・19）。角礫・円礫・土器の堆積は、石垣など列石の上方に設けられていた施設の崩落によって形成されたものである。角礫はこの層の下部に多く、円礫と土器は上部に多いのが全体の傾向であり、角礫で形成された石垣が早くに、続いて円礫や土器が落下、堆積したとみられるが、特殊壺251のように早い段階に流入した土器や円礫も見られる。3区では角礫・円礫・土器の溜まりは狭くなり、列石からやや離れて形成される。流入した円礫と土器の量が少なく4層の堆積によって形成された谷状部分の中央にまとまったようであり、土器や円礫は上からではなく2区から流れ込んだ可能性がある。2区はこの3区と1区の間隔的な様相を示し、4区では3層は形成されるが角礫・円礫・土器の溜まりは形成されない。3層が形成された段階で土砂の流入がおさまり地形が安定したようで、長期間地表面となって腐植土が形成され、有機質によって黒褐色を呈することになったのであろう。

以降の堆積の形成は古墳時代よりも後、中世を主体とした時期である。2層は粒子の粗い砂質土で、堆積の厚さは溝の中央部で60～70cmである。2層は円礫や弥生土器片を少量含むが、B断面2-5層には中世土器の破片も見られる。また、3区では2層の下面付近から川西編年V期の埴輪片277が出土した。中世には円丘部墳頂が利用され、それに伴って植生が変わるなどのため墳丘および周辺域の流出が進んだと思われる。

この後、堆積土上部に溝状の掘削がなされる。堆積土で形成された南側の斜面を削り込み堆積土2

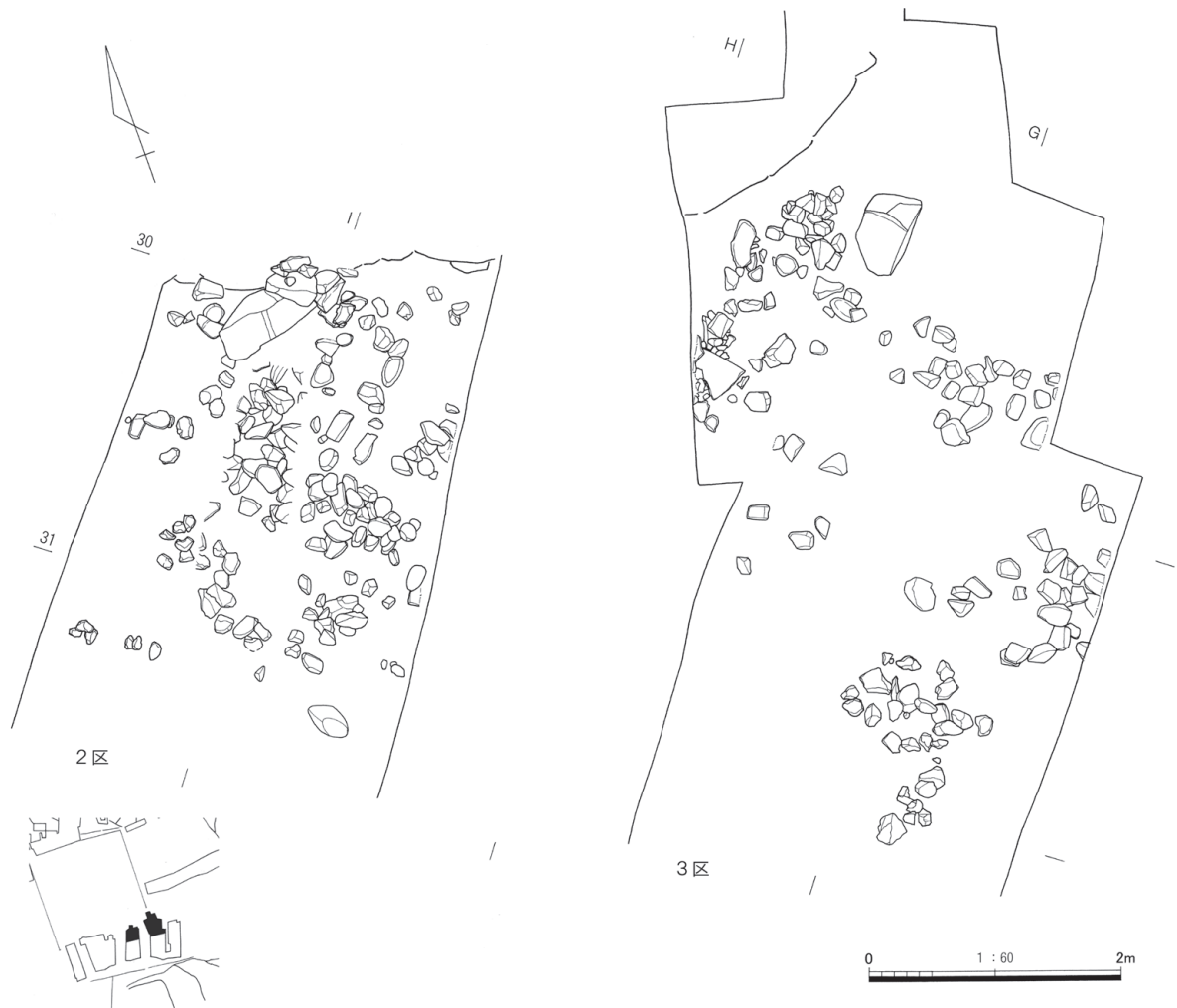


図74 礫・土器の堆積状況(東半 4層) 1 : 60

層の上部を浅く窪ませた底面が形成されており、畑の横の山道とみなすのが適切かもしれない。3区ではこの部分の堆積土中から近世あるいは近代の大甕1個体分が出土した。また、1区の西壁に接する位置では、この掘削の底面で配石遺構を検出した(図75)。配石遺構は長さ15~20cmの礫を配して長さ59cmの偏球形の石を置いたもので、石の転落を止めたのかもしれない。

その後、この部分も埋没し、1972年の造成工事に至る。堀切状大溝底面から現地表までは3.1m前後になる。

突出部の復元 2区中央のF断面(図68)を用いて復元案を示すが、突出部上部については高さに限っての復元であり、平面形状については別に検討を試みることにする(図159)。

前述のように整地土の厚さが20cmとすれば、堀切状大溝の底は41.7mとなる。先に石垣上端の高さの目安として42.7mを示したが、列石43上端の高さは断面位置で42.66mで、ほぼその高さである。列石43は石垣を積みにくい球形気味の石であり、付近に落下した石材も少ないことから、この列石には石垣は加えられなかったとしてよいだろう。E断面よりも北西では列石材が小さくないため石垣が占める比率は高くなり、また、崩落石材が多いことからすれば石垣の上端も42.7mよりも高くなっていく可能性がある。列石43は垂直に対して25°と勾配が緩いが、他の列石では8°前後である。垂直に近い石の壁ということになるが、上方が同じ勾配であったとは考えられず、丘陵側の法面と同様に60°の傾斜をなしていたと推定する。

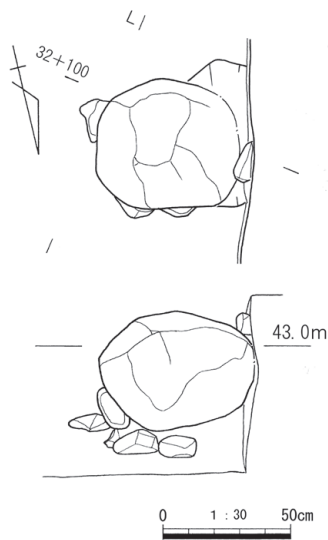


図75 集石遺構 1 : 30

再三述べたように南西突出部は削り取られており、突出部上面の高さは不明である。先に西くびれ付近の状況をもとに突出部の円丘部側基部上面の高さを45.4m前後と推定した。工事前の観察や写真から、南西突出部上面は平坦であったことがわかる。畑の形成による削平が考えられるが、大きく地形が改変されるものではなかったとするなら上面前端の高さも45.4m前後となる。堀切状大溝底の整地面からの高さは、3.7mである。

堀切状大溝に堆積した土器、円礫から、突出部上面前端にはくびれ部から続く2つの列石とその間の円礫敷がめぐっていたと判断できる。堆積した円礫の量が多いが、たとえば北東突出部調査区流土中の円礫の量には及ばないように思われる。西くびれ部の突出部基部で列石の間隔は狭くなるが、その幅かそれを若干広くした幅で南西突出部をめぐる と推定する。突出部隅の稜線には前端の列石・石垣から続く列石が上に伸び、第2列石に接続すると推定できる。

c 出土遺物 (図76～83)

特殊壺、小形特殊器台が主体を占め、他に長頸壺、鉢がある。他の箇所では普遍的に見られる特殊器台を伴わない点が大きな特色である。また、高杯など小形器種も含まない。深い位置に埋設していたため保存状態はよく、完形近くに接合できるものも少なくない。なお、円丘部等の資料と型式差はない。

中世の土器の出土量は少なく小片で、中世土器の使用の場は円丘部であったことが明らかである。他に、埴輪や近世の土器片がある。

遺物の出土状況 (図版16・18・19) 堀切状大溝の堆積土中からは多量の土器が出土した。出土破片は大きく、その場で1個体が損壊して埋没、あるいはそれに近い状態で破片がまとまるものもある。特殊壺251の出土状況を図73・図版19-2に示したが、大石bの北東端に接した位置で、元の形状をとどめた状態で出土した。1区ではこの土器のように崩落した石材の間から出土したものがかなりあるが、調査範囲全体で見れば、円礫や礫に混じっての出土が主となる。図72下段の3区3層下部がその典型で、帯状の円礫溜まりの中に大破した特殊壺等が点在する。円礫と土器が関連をもって出土することから、突出部前端上側に円礫敷が設けられて土器が配され、それが突出部前面の崩落に伴って下方に堆積したことは確実である。このことは、1区中央で石垣が崩れた後、列石の裏込め土がえぐられて形成された浅いくぼみに土器片が流入していること(図73上側)からも裏付けられる。

長頸壺 245～247、249、250がある。細く長い頸部と、肩の張りが強く球形気味の胴部をもつ。いずれも底部に焼成後の穿孔がなされる。受け部外面の調整はヘラミガキのものとタテハケのものがある。胴部外面は下半を中心にヘラミガキがなされるが、その範囲や密度はそれぞれで異なる。

特殊壺 248・251・253・255・257・260、図版37-2がある。これらのうち胎土、色調から251は小形特殊器台252と、253は施文の共通性から小形特殊器台254と組み合わせると考えられる。255以降は下に示した小形特殊器台と組み合わせるとは限らないが、出土土器の構成から特殊壺は小形特殊器台とセットで用いられたと判断できる。口縁拡張部には沈線が施されるが、253ではさらに複合弧線文と鋸歯文、248、257では鋸歯文を入れる。なお、251では焼成前に口縁部に生じた亀裂を補修した粘土が浮文状に見られる。頸部には沈線を入れ、肩部は無文とするものが多いが、251ではその箇所を文様帯とし、区画線を入れて複合斜線文と鋸歯文を配する。また、253でも頸部と肩部に分割型文様帯を配して斜

線文、鋸歯文、複合斜線文を刻み、260は斜格子文などを入れる。斜めに交差する帯を表現した複合斜線文や斜線間に隙間を入れる斜線文など、文様は特殊器台24など特殊器台B類のものと共通である。

大きく張る胴部には3条の突帯を配する。突帯は断面がM字形のものが多く、三角形気味などそれとは異なるものも見られる。突帯の間は鋸歯文あるいは斜線の充填が多いが、無文のものもある。胴部と底部の境は丸みをもち、境が不明瞭に近いものも見られる。底部には焼成後の穿孔がなされる。口縁部受け部内面および外面に丹塗りがなされる。248では内面の丹塗りは頸部上端に及ぶ。251では外面底部まで丹塗りが認められるのに対し、257では胴部の下側4分の1に丹塗りが認められなかった。**小形特殊器台** 個体数は多く、252から270、それに加えて274と275で14個体を数える。256のように列点文を上下に配した平行沈線帯を筒部に3段置き、その間を無文として長方形透かし孔を入れるのが他遺跡の資料でも見られる一般的な形態であり、そうしたものが多く、それらとは異なる文様、装飾をもつものがある。252では沈線帯上に透かし孔を入れ、沈線帯の間は分割型の文様帯とする。上段の透かし孔は4個であるが、下段は5個である。254は透かし孔の配置は他と同様であるが、上の透かし孔の位置にも平行沈線を入れ、下側は分割型文様帯とする。また、この個体では口縁拡張部と裾部に複合弧線文を入れる。丹塗りは受け部内面および外面になされる。

272・273は小形特殊器台の口縁部と思われる。直径がやや小さい271は特殊壺あるいは長頸壺の口縁部か。274は最大級の小形特殊器台で、口縁部直径37cmと254や256など通常の小形特殊器台よりも一回り大きい。口縁拡張部を文様帯とし斜線文、鋸歯文、斜格子文を配する。通常、胎土Aでは丹塗りが認められないが、この資料では丹塗りが見られ、特殊器台A類等も本来は丹塗りであったことを示すと考えられる。275は以上の資料とは異なり、上下に大きく拡張した口縁部を低い突帯で区画して櫛描きの波状文と平行沈線文を入れており、特殊器台A類と全く同じである。筒部は平行沈線と列点文を2段置くが、下段には細い突帯を加える。それらによって形成される無文部分のうち上側では円形、下側では長方形の透かし孔を入れる。胎土Aで、丹塗りは見られない。

図76～83に示した土器のうち、上記の274・275を除けば多くは胎土に角閃石を含むが、251、252は角閃石を含まず淡赤褐色を呈する

このほか、鉢276がある。この遺跡では少ない器種である。

土器の構成 図示できた資料の個体数は、271などの扱いで若干変わる可能性があるが、小形特殊器台14、特殊壺7、長頸壺5、鉢1である。突出部前端の円礫敷に置かれた土器のすべてではなく主要な資料の構成ではあるが、この箇所出土の土器の様相を示すと思われる。他の箇所と同様に高い密度で土器が配されたみることができる。個体数からは、特殊壺だけでなく長頸壺も小形特殊器台と組み合った可能性が考えられる。ただし長頸壺は円礫敷に設置される器種とすれば、特殊壺を伴わない小形特殊器台があったことになる。

277は堀切状大溝堆積層出土の埴輪で、図示したほかに若干の破片がある。突帯上側筒部の直径13.3cmときわめて小さく、内外面ともごく粗い1次調整のタテハケが見られる。古墳時代後期の埴輪でも最終段階の資料である。堀切状大溝の南側、山頂から南に下がった位置には横穴式石室墳が所在するが、それらに先行する小墳が山頂付近に築かれ、そこから流入したとみられる。

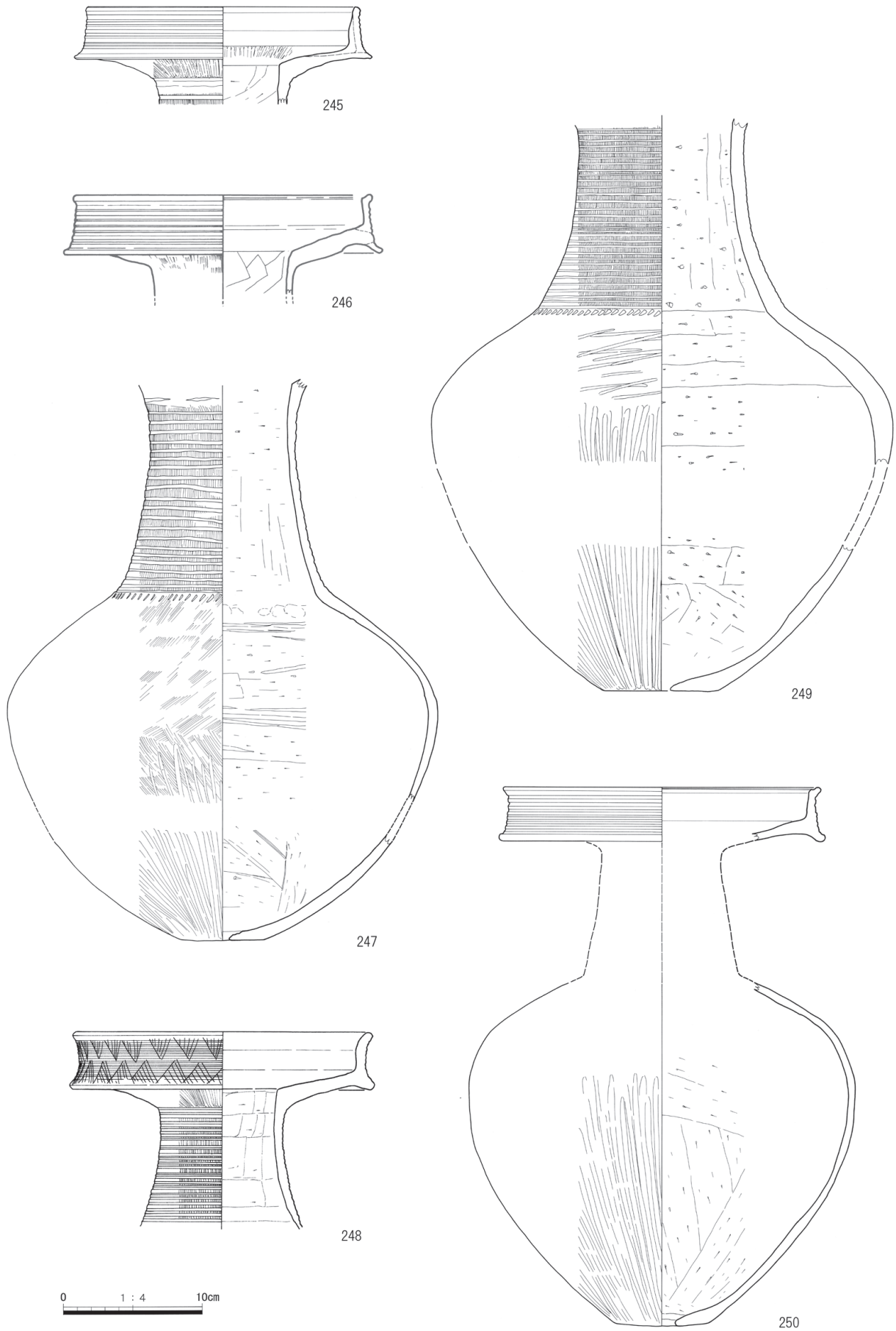
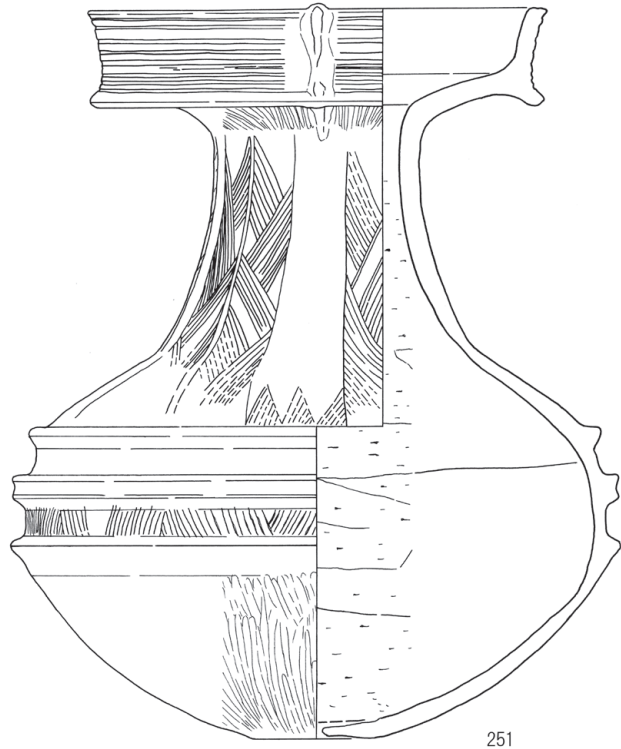
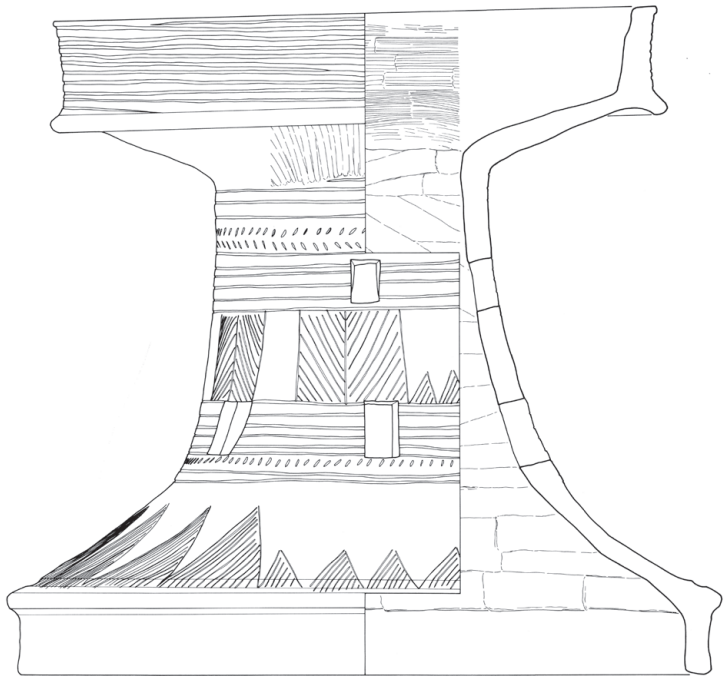


図76 堀切状大溝出土土器(1) 1:4



251



252



图77 堀切状大溝出土土器(2) 1 : 4

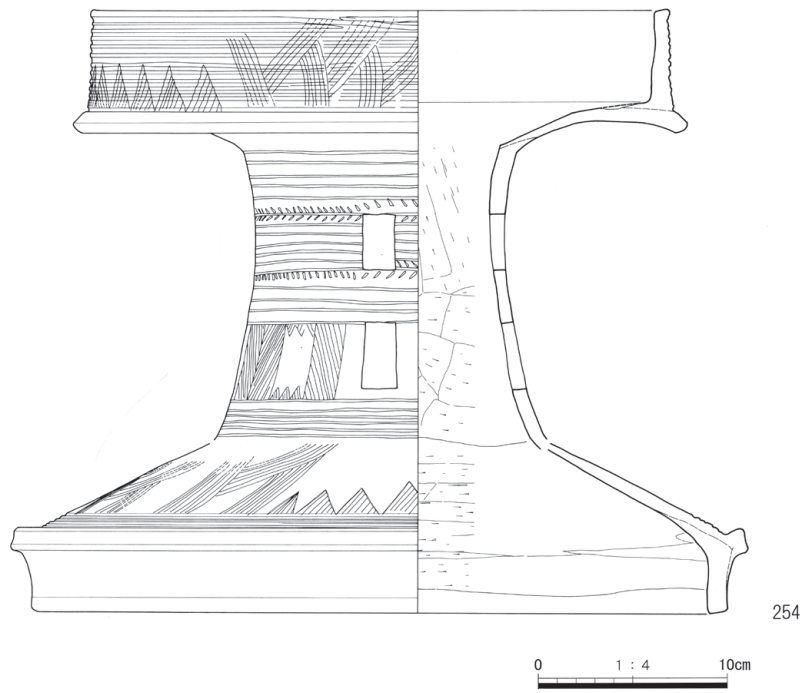
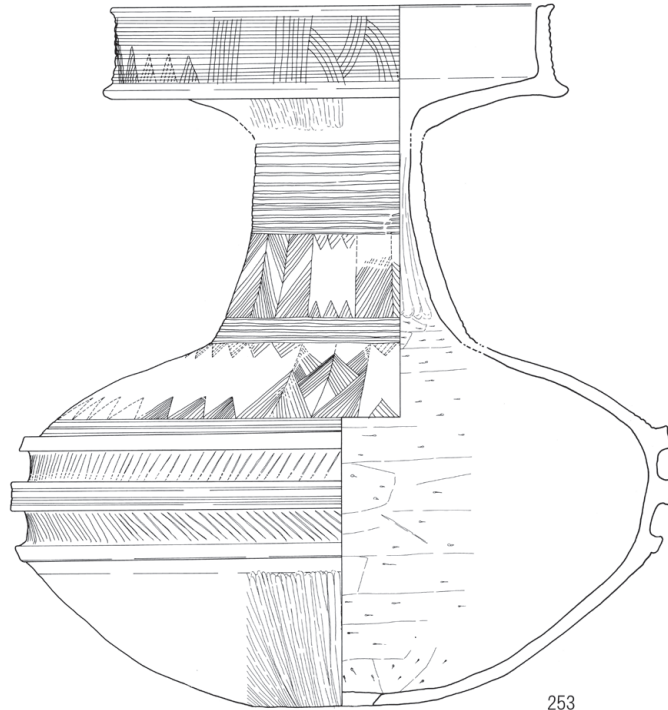


図78 堀切状大溝出土土器(3) 1 : 4

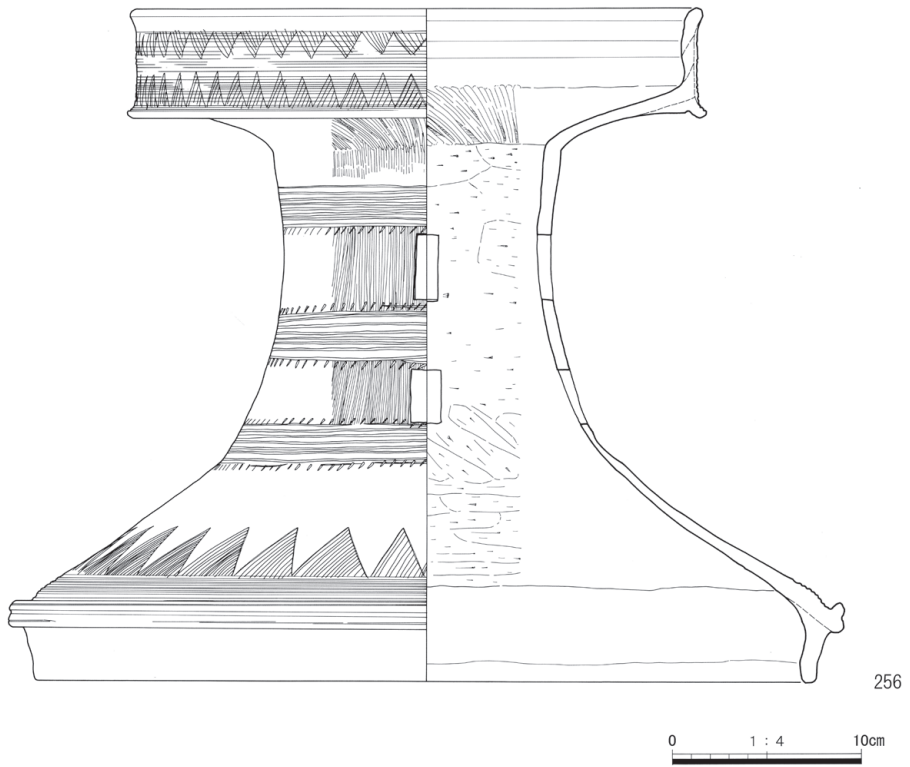
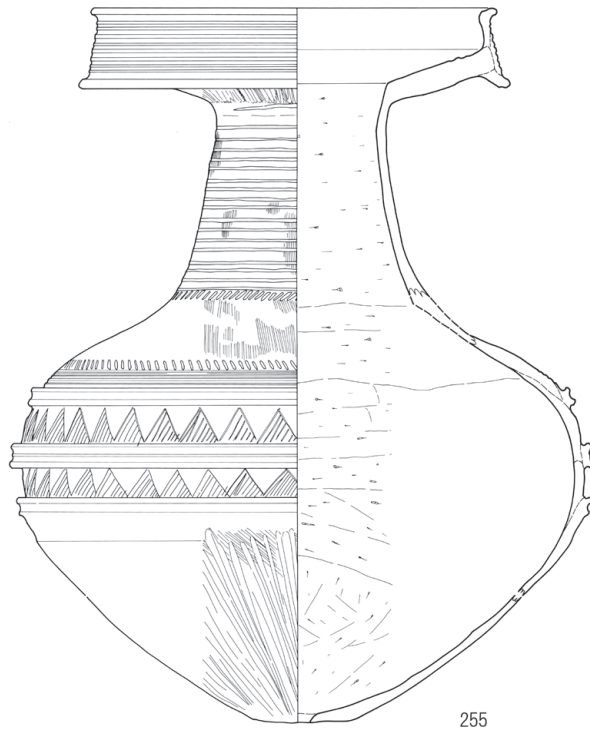
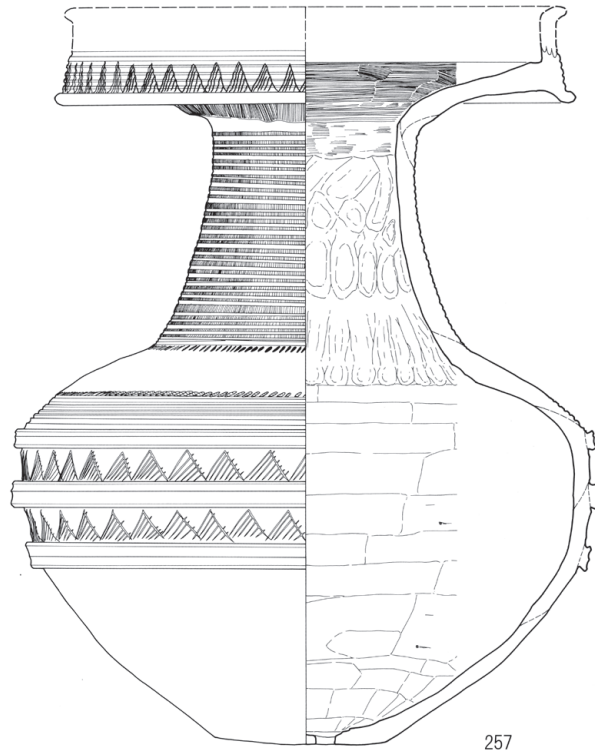
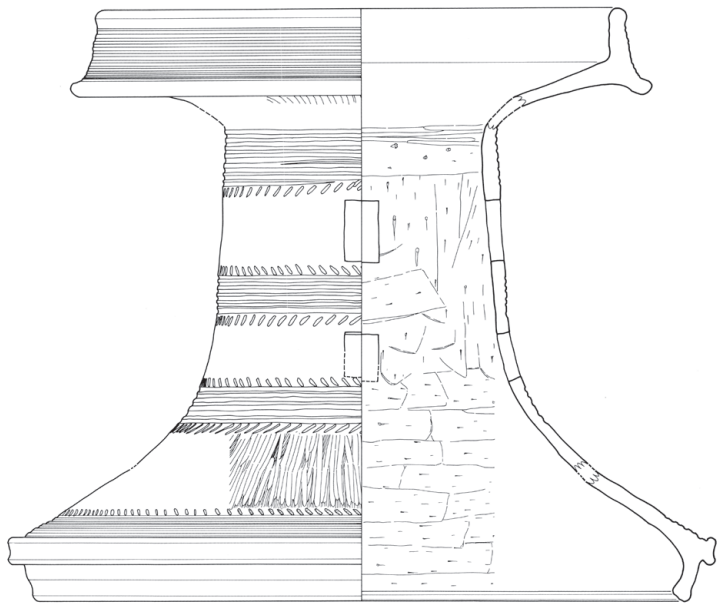


图79 堀切状大溝出土土器(4) 1 : 4



257



258

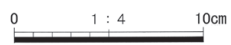


図80 堀切状大溝出土土器(5) 1 : 4

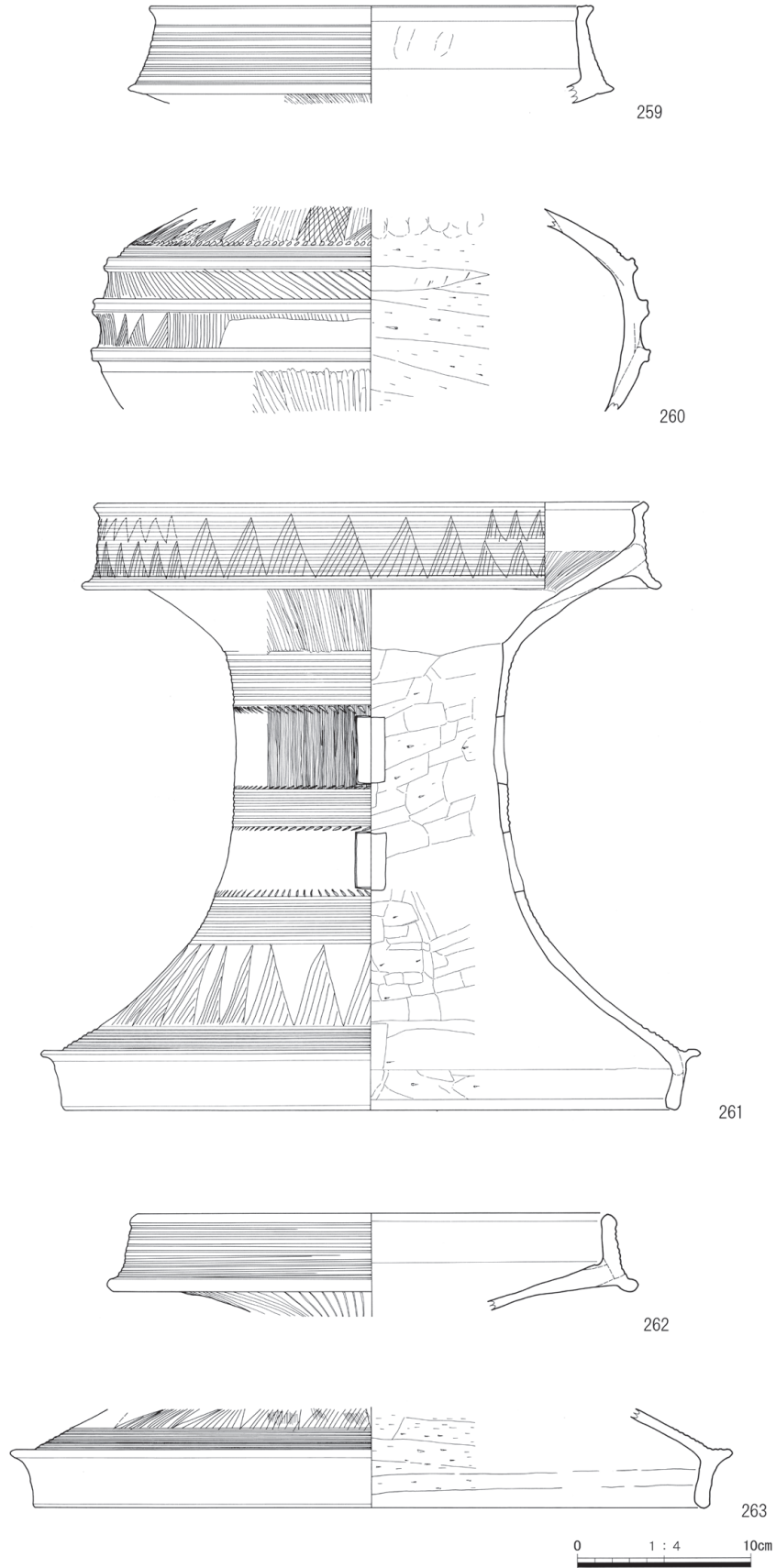


图81 堀切状大溝出土土器(6) 1:4

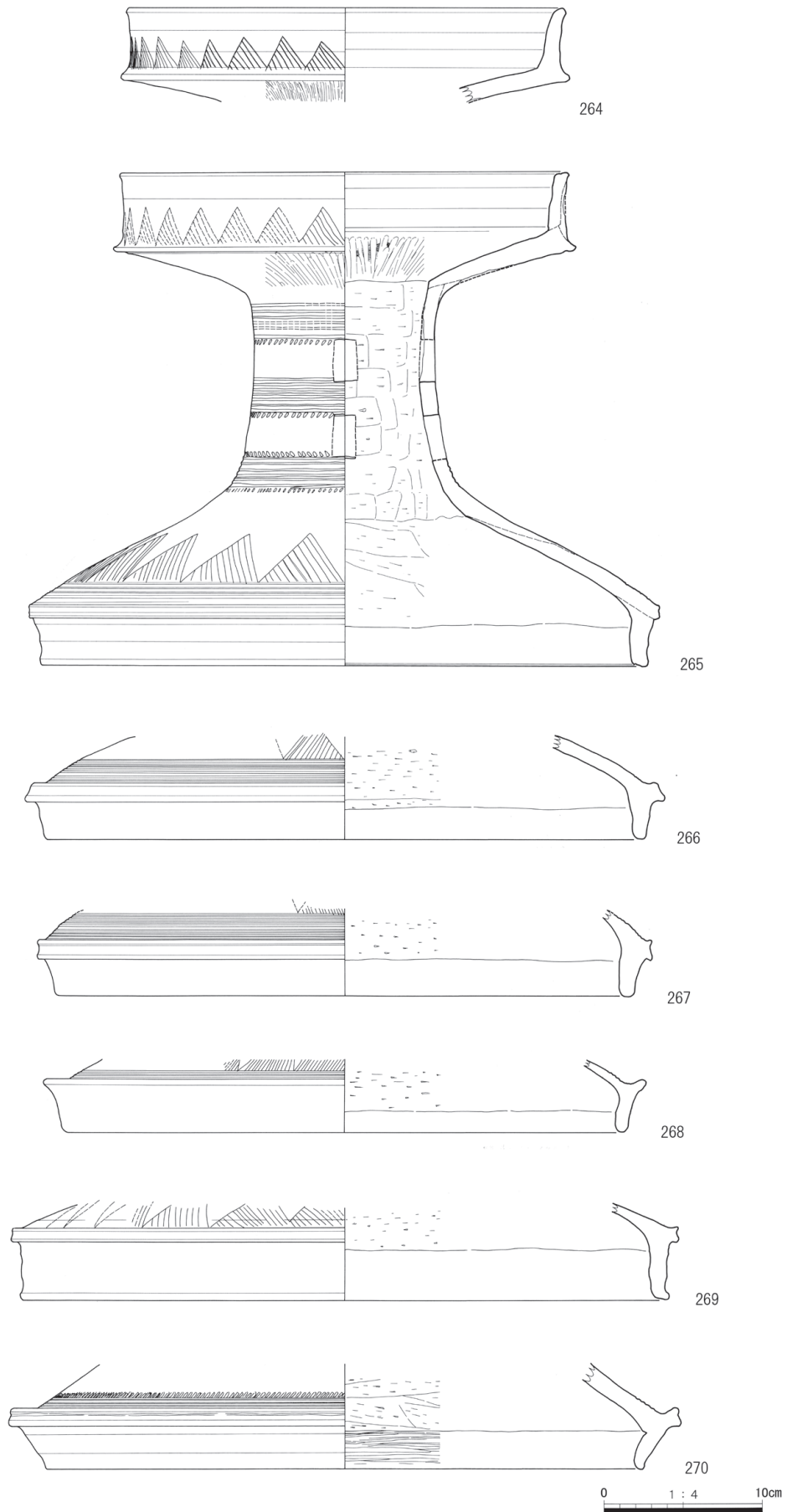


図82 堀切状大溝出土土器(7) 1 : 4

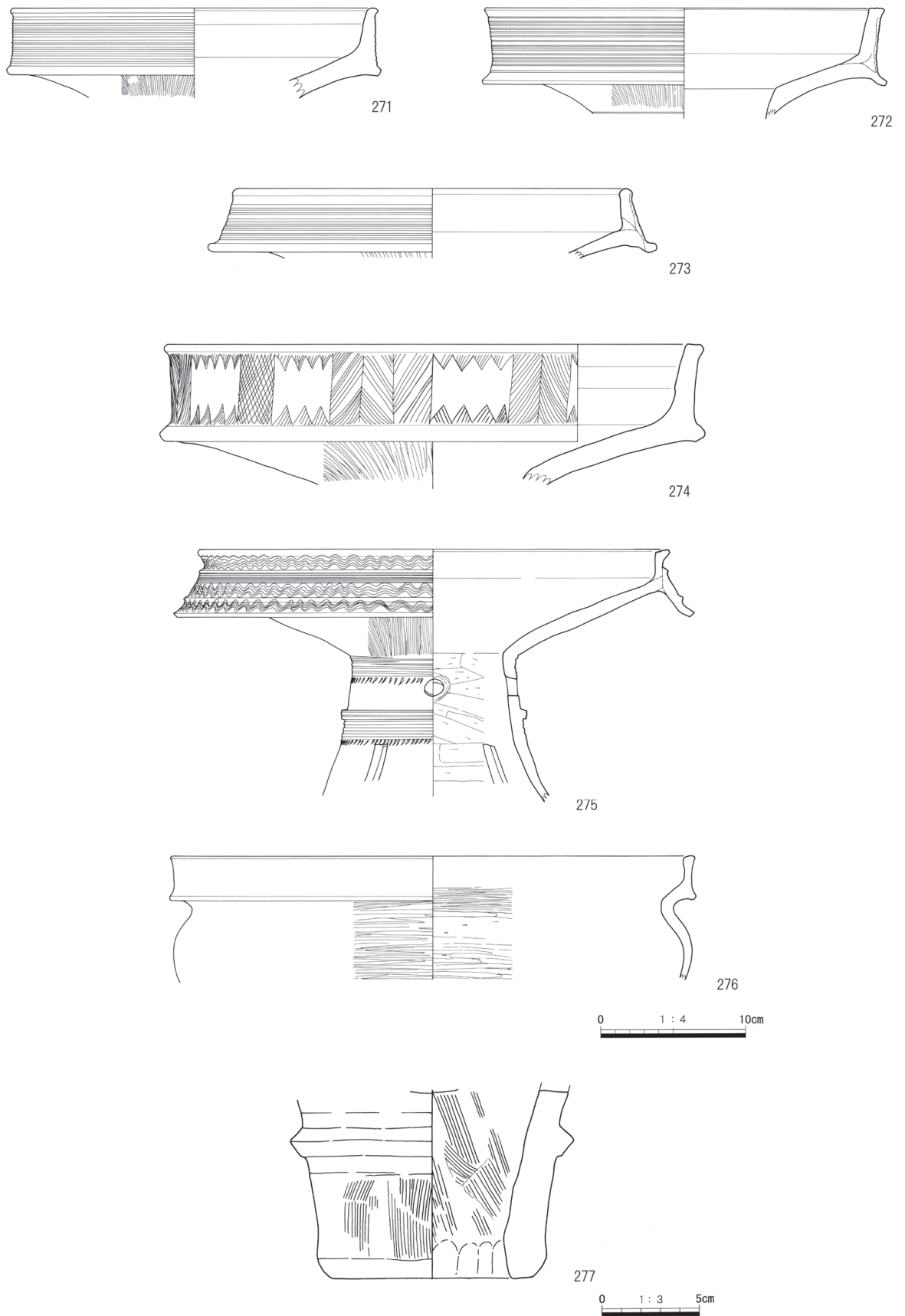


图83 堀切状大溝出土土器(8) 1 : 4、1 : 3

13 円丘部の石材

a 墳丘斜面（図84～86）

調査区に所在する石材については遺構図に示したが、それ以外にも第1列石を構成する石材が数ヶ所に遺存している。また、下方に転落したとみられるものや抜き取られて転用されたものがあり、それらについて記載する。半ば埋没して全体の形状が明らかでないものもあるが、多くが大形の石材で、斜面立石および第1・第2列石の大形石材とみられる。番号は前報告を踏襲したが、地山の石等と判断された1、10、19は掲載しておらず、11、12は未実測である。前報告20は墳頂立石6とし、20から50までを調査区で検出した石材の番号とした。墳頂部の石材は、これに続けて番号を付した。図84・153に各列石の位置を番号で示したが、ゴシック体が図85・86に掲載、明朝体は遺構図で示したものである。記載の角度は垂直に対してのものである。また、遊離・転用石材は斜面立石か大形の列石石材か明らかでないため列石の名称で一括した。

斜面立石3 北斜面の原位置に遺存する。長さ60以上cm、幅1.37m、厚さ30cm。丸みのある平面形で、横倒しに近い70°で下方に傾斜する。

列石5 北斜面下方に所在している。第1列石を構成する石材で斜面立石4と6の間付近から抜け落ちたと判断した。平面形は方形で、長さ90cm、幅81cm、厚さ21cm。

列石7 北西斜面に所在。長さ1.53m、幅70cm、厚さ29cm以上と大形である。

列石8 列石7の下方に位置する。長さ83cm、幅35cm、厚さ22cm以上。

列石9 西斜面に位置する。小形の石材とともに部分的に露出している。長さ50cm、幅30cm。

斜面立石13 東斜面に所在する。斜面立石15よりもかなり低い位置にあり、墳丘斜面下方が削られて倒れた状態を維持しながら下がっていると考えられる。長さ47cm以上、幅1.33m、厚さ30cmの板状の石材で53°に傾斜する。

列石14 墳丘の南東下方に所在し、楕円形に近い平面形である。長さ2.05m、幅1.33m、厚さは不明。

斜面立石15 列石15・16は南東斜面に原位置をとどめて所在する。15は長さ1.77m以上、幅1.29m以上、厚さ55cmと大形の石材である。63°に傾斜する。

斜面立石16 15の北に位置する小形の立石。長さ56cm以上、幅55cm、厚さ32cm。42°の傾斜。

列石17 墳丘の東裾、石段の脇に所在。平面形は長方形。長さ1.47m、幅69cm、厚さ22cm以上。

列石18 列石17のさらに下方に所在。長さがあまりなく楕円形気味の平面形である。長さ1.28m、幅1.09m、厚さ20cm以上。

b 墳頂平坦面（図86）

墳頂平坦面には5石が所在する。そのうち2石は大正期など後世に立てられたと伝えられる小形の立石である。

列石51 長さ1.30m、幅80cm、厚さ32cm。楕円形を半裁したような断面形である。3次調査前は墳頂中央L15付近に所在。

列石52 後世に立てられた小形の立石。やや歪んだ形状の石材である。長さ70cm、幅49cm、厚さ26cm。

列石53 大正期に立てられたと伝えられる立石。中心主体の西側に所在しており、3次調査ではこの立石の一部を調査範囲に含む。立石の設置にあたって多数の根石を配しており（図153）、立石3や5など墳丘墓本来の立石とは異なる。石の軸線方向で長さ1.13m、幅77cm、厚さ27cm。

列石54 墳頂中央やや西側に所在。長方形に近い平面形。長さ1.03m、幅86cm、厚さ16cm。

列石55 立石3の南側に半ば埋め込まれた石材。3つに割れているが、長さ2.0m、幅90cm、厚さ22cmの大形石材である。

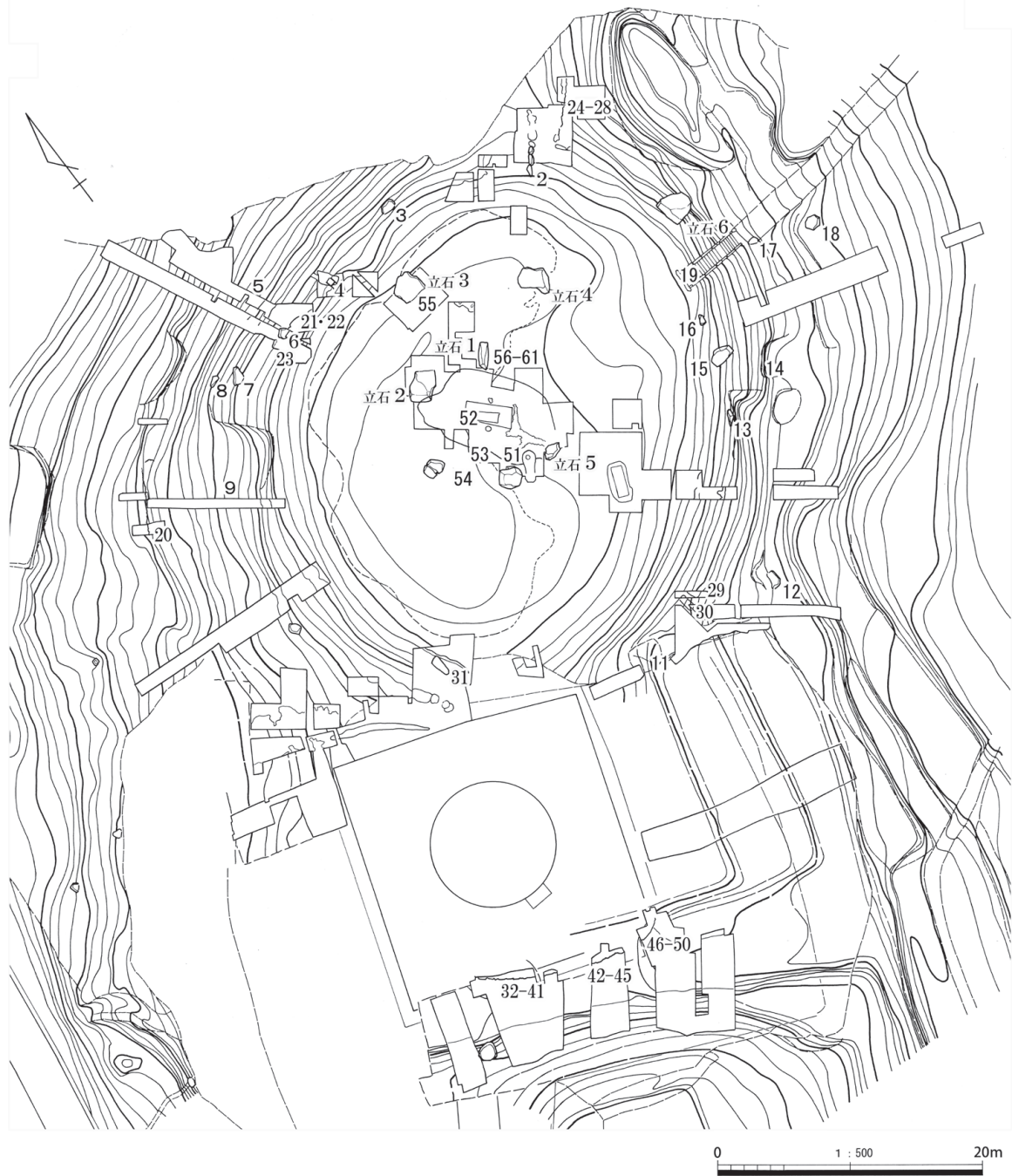


図84 列石・列石石材の位置 1 : 500

c 祠使用石材 (図86)

弧帯文石を収めていた榑築神社の祠は、墳頂立石1を背面に用い、板石を組み合わせることで底板、側板、天井からなる箱形の石室を形成したもので、祠の前面には板石2枚を置く。これは大正5年に弧帯文石が合祀されていた鯉喰神社から戻された際に構築されたものである。

列石56 祠の台に用いられた石材で、立石1に接する。一方の端は直線をなし、他は丸みのある平面形である。長さ2.01m、幅1.55m、厚さ43cm以上である。他が板状であるのに対して、この石材は丸みのある平面形で厚い。不鮮明であるが永山1921の写真に写る石材の可能性があり、それが正しいとすれば祠の構築以前からの所在で、他の祠使用石材とは来歴が異なる可能性がある。

列石57 祠前の石材。上面は平坦である。平面形は矩形。長さ1.42m、幅1.30m、厚さ20cm。

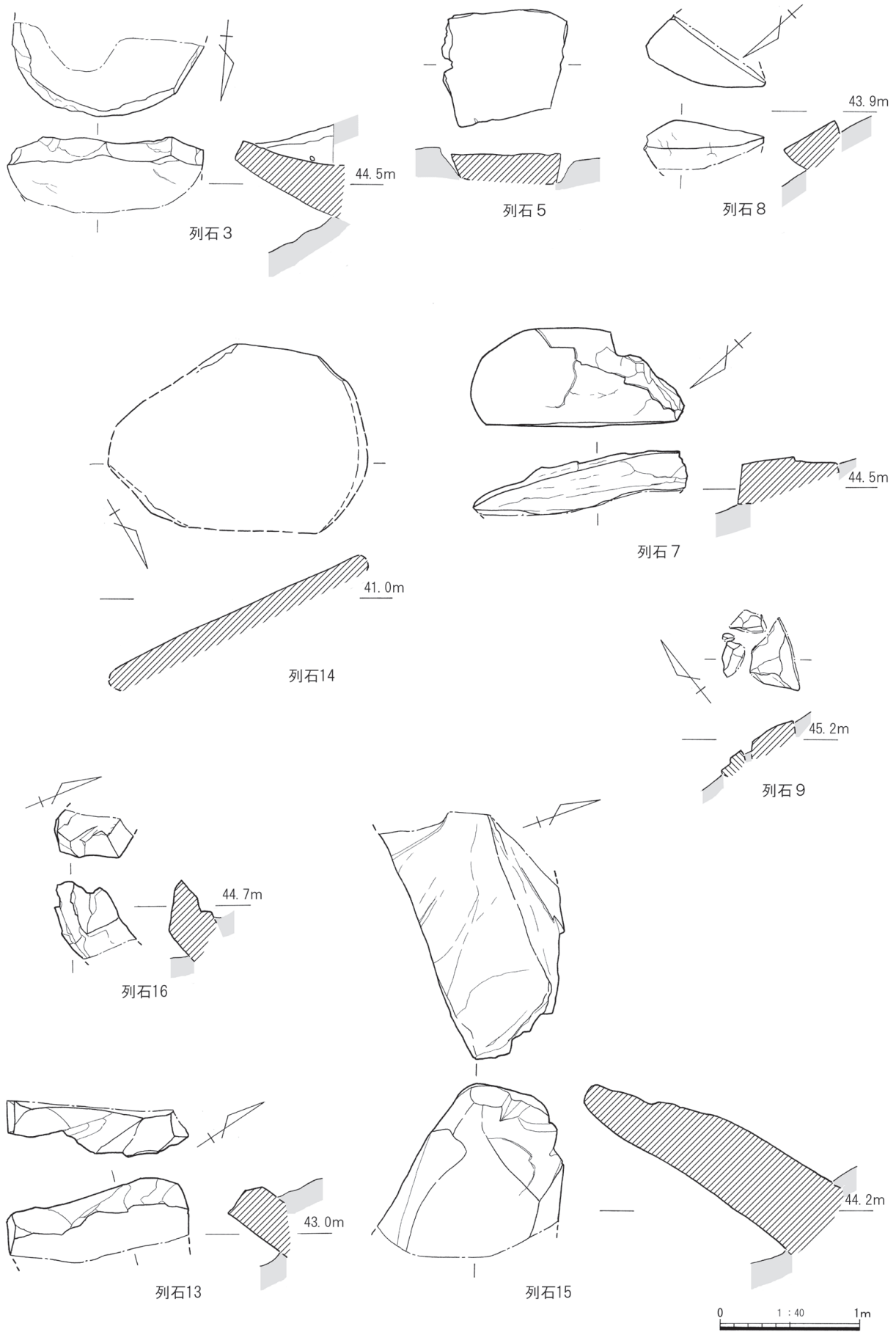


図85 列石石材(1) 1 : 40

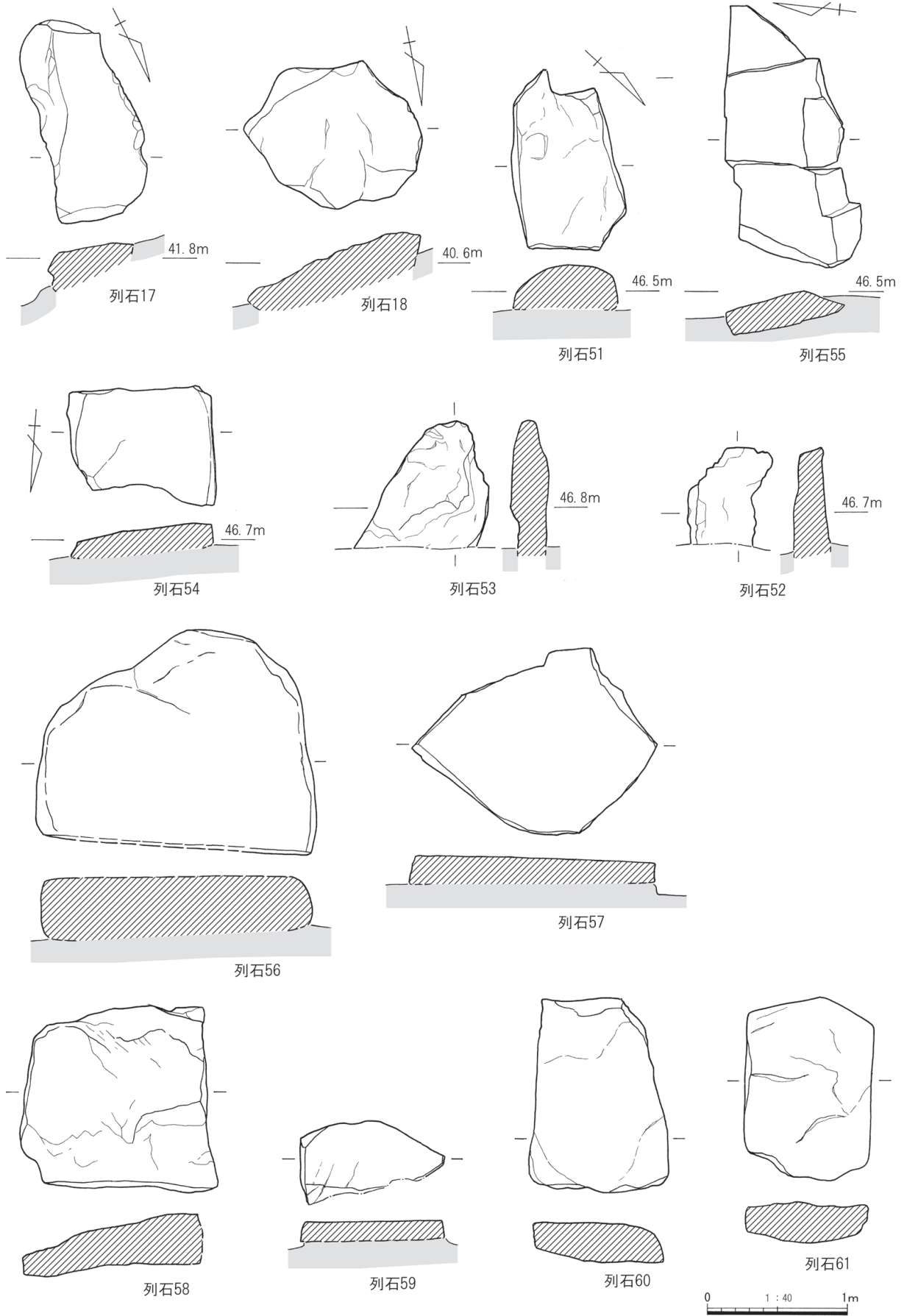


図86 列石石材(2) 1:40

列石58 祠の天井に用いられたほぼ正方形の石材。長さ1.37m、幅1.33m、厚さ37cm。

列石59 祠の前に置かれた小形の石材。平面形は台形で、長さ1.04m、幅55cm、厚さ14cm。

列石60 北東側壁の長方形石材。長さ1.40m、幅99cm、厚さ28cm。

列石61 南西側壁の長方形石材。長さ1.32m、幅90cm、厚さ29cm。

d 石材の構成

以上に示した石材のうち、原位置をとどめるのは斜面立石3・15・16で、13もほぼ元位置を示す。これに北斜面調査区の4・6・21・22・23が加わる。また、南西突出部くびれ部の調査で検出した29・30・31は元の位置に近接して所在する。第2列石はくびれ部では大形石材を用いた可能性が強いが、円丘部斜面・裾の遊離石材5・7・8・9・14・17・18はくびれ部から離れた位置であり、基本的に第1列石の石材が脱落したものと考えられる。一方、墳頂平坦面にある石は祠の構築や新たに石を立てるために運び上げられたものであり、それらの本来の位置は円丘部の列石に加えて突出部やくびれ部の第1、第2列石を含む可能性がある。

以上に示した石材は、長方形で板状を呈するものが多い。長さがわかるものについて区分すれば、2.0m前後のものとは1.53m以下に分けることができる。前者にあたる列石14・55・56のうち、列石14は斜面立石に用いられたものとみられる。55も斜面立石材と思われるが後述の墳頂の立石5に似る点があきかりで、最も小さい墳頂立石の可能性も考えられるが、積極的な根拠はない。56は長さとともに幅、厚さのある石材で、評価がむずかしい。一方、1.53m以下の資料であるが、83cm～1.13mと、1.28～1.53mの2群に区分でき、小さい1群は列石の構成石材とみられる。1.28～1.53mの石材は、長さ1.3mの南くびれ部列石30のような斜面立石にはならない大形の列石材と思われるが、斜面立石でも小形のものを含む可能性はある。厚さについては、斜面立石15のようにかなり厚いものもあるが、多くは30cm前後である。

斜面立石の配置について検討できる資料は、3・4・6・13・15・16である。16はやや小さく、小形の斜面立石か大形の列石か判断がむずかしいが斜面立石に含める。遺存する斜面立石の間隔は3～4間7.0m、4～6間5.4m、13～15間4.5m、15～16間3.3m、また、南斜面D16で検出した抜取跡が斜面立石を取った跡とすれば、それと13との間は5.5m前後となる。ただし、13～15はその間にあった14が抜け落ちたとすれば間隔は半分になる。これらから、斜面立石は等間隔ではなく、南東側では3m前後、北西側では5～7mであったと考えられる。

第4章 墳頂部の施設と出土遺物

1 墳頂平坦面の遺構

a 調査の経過

墳頂平坦面は、主軸となる北東－南西方向が33m、それに直交する北西－南東方向は現状で28m、主軸方向に長い楕円形をなす。ここには立石1～5が所在し、それらの中には弧帯文石を収める楕築神社の祠や、後世に設けられた立石（列石52・53）も見られた。楕築神社の祠は石で組まれているが、図88では床になる石とその前側の石のみを示した。墳頂中央よりもやや南西、図87左端に位置する丸い石と、その北西に所在する近接した2つの石（図11）は立石ではなく、地山の巨石である。

調査によって、この部分に中心主体をはじめ、第2主体、大柱遺構、建物1などが設けられたことが判明し、中世の柱穴や土坑の存在も明らかになった。

墳頂部の調査は第1次～第3次調査と第7次調査の4回にわたる。第1次調査では円礫敷をはじめとする墳頂部の諸構造について調査を行い、その過程で建物1を検出した。第2次調査では立石2と立石3の調査を実施した。第3次の中心主体調査の過程で大柱遺構を検出し、また、立石5を調査した。第7次調査では立石3の全面的な調査を実施した。

中央の中心主体の調査区と南の第2主体調査区が広く、前者の北には立石2の調査区が接続し、北東に墳頂部の調査区が続く。そして、その北側に立石3付近の調査区が位置する。このほかに、第3章第7節北東突出部で示したが、墳頂北東端の調査区がある。

中心主体と第2主体については第5章で記載する。第2主体付近の状況についてもそこで述べることにし、ここでは墳頂北半部を中心に記載する。

b 円礫敷と築成（図87～91、図版22・34）

円礫敷（図87・88） 墳頂の肩は墳丘の北西半では明瞭であるが（図11）、図30断面に示すように南東側は不明瞭である。中央やや北東に位置する楕築神社の祠前面から石段の上にかけては墳丘の流出が大きい。

薄い表土層下には円礫敷が広がる。円礫敷の高さは、立石2の南西、O14で46.60m、一方、立石3の西、P11南側で46.36mと24cmの差をもち、さらに、北東端のL8南西（図36）では46.05mに下降する。墳頂の円礫敷は水平ではなく東西方向で55cmの差をもつ。平坦面の広さからすれば傾斜というほどではないが、水平な墳頂部の築造を企図したもののそれに及ばなかったと考えられる。

平坦面端部の状況を見ることができる2ヶ所のうち、北東突出部に面するL8では円礫敷は外側にむかって1.50mで16cmの下降を示し、北端のP11でも2.5mで22cmの下降を示している（図90）。端部のため墳丘の流出と円礫の再堆積を考慮する必要があるが、下降の程度にもやや差はあるが、墳頂肩部までの1.5～2.5mの間は、ごく緩やかに下がる傾斜をもつように仕上げたと考えておく。円礫敷の外縁がどのように収まるかは流出を受ける箇所であり明確ではないが、北斜面調査区第1列石上方の流土には墳頂から流出した円礫がかなりの量の含まれていることや2つの調査区の様相から、円礫敷は墳頂肩部まで敷き詰められたとみることができる。

墳頂平坦面の中央（図87）には中心主体が設けられているが、この部分では木槨の主軸線におおむね一致し、軸線方向に長くなる不整楕円形の平面形を呈する円礫面を検出した。長さ6.1m、幅3.5mの規模である。円礫面の中央は浅く窪み、上に20cmの厚さの流土が堆積する。この箇所については第5章第1節で詳しく述べるが、木槨・木棺の腐朽によって生じた陥没とその影響の範囲を円礫面が示



図87 墳頂平坦面中央部 1 : 60

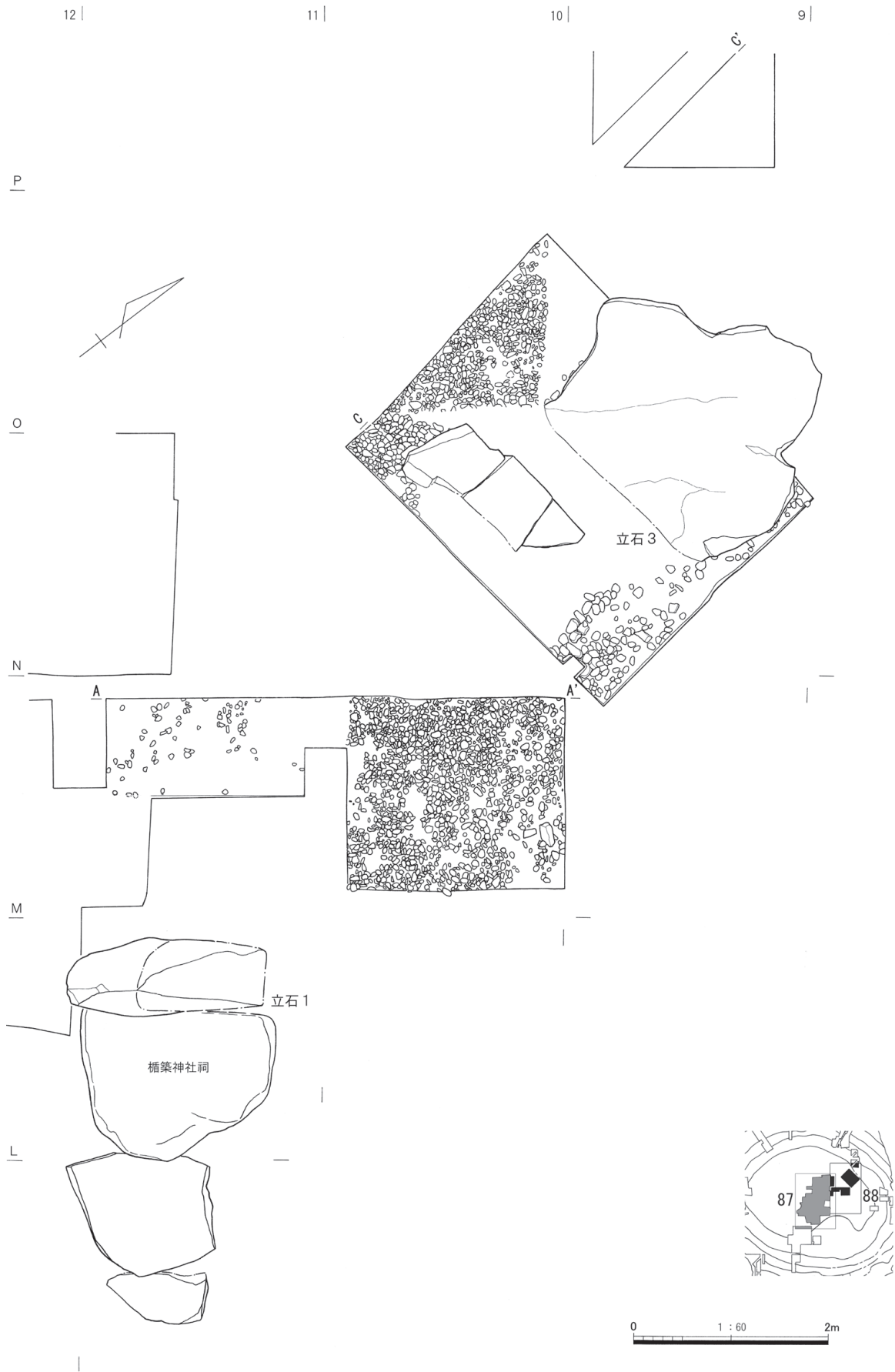


図88 墳頂平坦面北部 1 : 60

している。

この円礫の広がり東側は墳頂部上面が流出して円礫敷は遺存しておらず、遊離した円礫もあまり見られない。北東の立石1に近接した箇所(M13)では角礫と中世・近世の瓦が混在する中に円礫が散漫に見られる。中心主体の北側になる立石2の周辺は、墳丘の流出はさほどでもないが円礫敷の遺存状態はよくなく、円礫は立石2の北側や南西に離れた位置に残存する。立石2の東に中世の土坑が掘削されたことに加えて立石2の立て直しがなされており、表土直下か厚くても約5cmの表土・流土に覆われるにすぎない円礫敷が攪乱を受け流出したと考えられる。そうしたことがなければ円礫敷は中心主体上の円礫面に接続していた可能性がある。中世の土坑8は規模が大きく立石1の北西になるN12までが範囲となる(図153)。この土坑の北東外側となる箇所も円礫敷は遺存していないが、これは円礫敷が南西にむかってわずかに上昇するのに対して、この付近の現地表は水平で、また表土も薄

いためである。円礫敷の遺存はN11円礫図示範囲(図88)よりもやや南西、11ライン付近からはじまる。

立石1と3の間のN11、立石3の西側など、墳頂の北部では円礫敷が良好に遺存する(図版22-2)。円礫は8cm前後のものが主で、それらの間に少量の角礫が見られる。立石3の南側では15~20cmと大きな円礫が用いられるが、この理由はよくわからない。円礫層は2~3石が重なって8cm前後の厚さである。

立石3調査区の西側では、円礫の図示は三角形の範囲にとどまるが、細い土手を隔てた北東の側は円礫敷の遺存状態が不良となる。さらに北東の立石3下(北)側では、立石3で述べるが、傾いた立石に押されて円礫敷が沈下し乱れた状態であった。また、立石3南側の3つに分かれた石材(列石55)の周囲では円礫敷が遺存しないが、この石材は後世に立石の傾斜を止めるためにいずれかに所在した斜面立石等を運んで半ば埋め込んだものであり、その際の掘削によって失われている。また、それに先だって、立石3が北に傾いて生じた空隙に南側の円礫が流入したことも、円礫敷が失われた原因となっている。

以上のように、墳頂平坦面全体に円礫が敷かれるが、墳頂北半のうち立石2付近では地表直下となるため削平・流出を受けており、北側では良好に遺存、東側は流出となる。第2主体周辺の円礫面については第2主体の節で述べるが、基本的に二次的に堆積したものと考えている。

築成状況(図89~91) 地山は北東にむかって緩やかに下降しており、図91 A断面南西で21cm、北東で60cm、立石3調査区西側の図90 C断面で75cmの厚さの盛土がなされる。地山上面が高い箇所では部分的にしか見ら

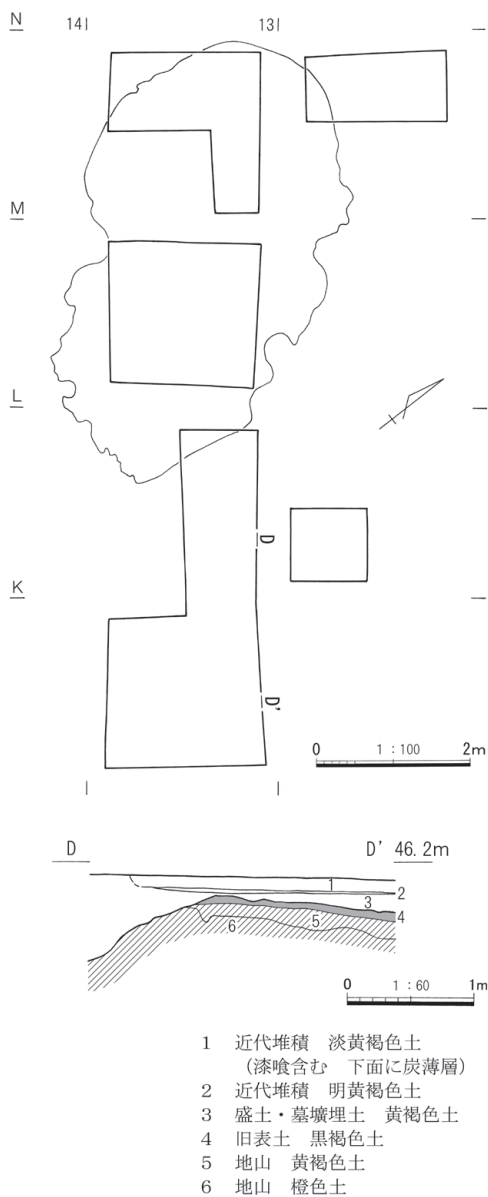


図89 第1次調査トレンチ配置
・墳頂南東部断面
1 : 100、1 : 60

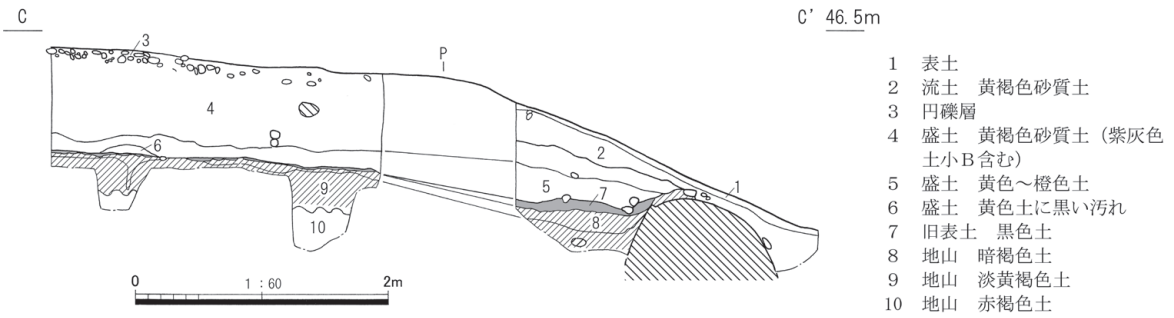


図90 墳頂北部～斜面断面 1 : 60

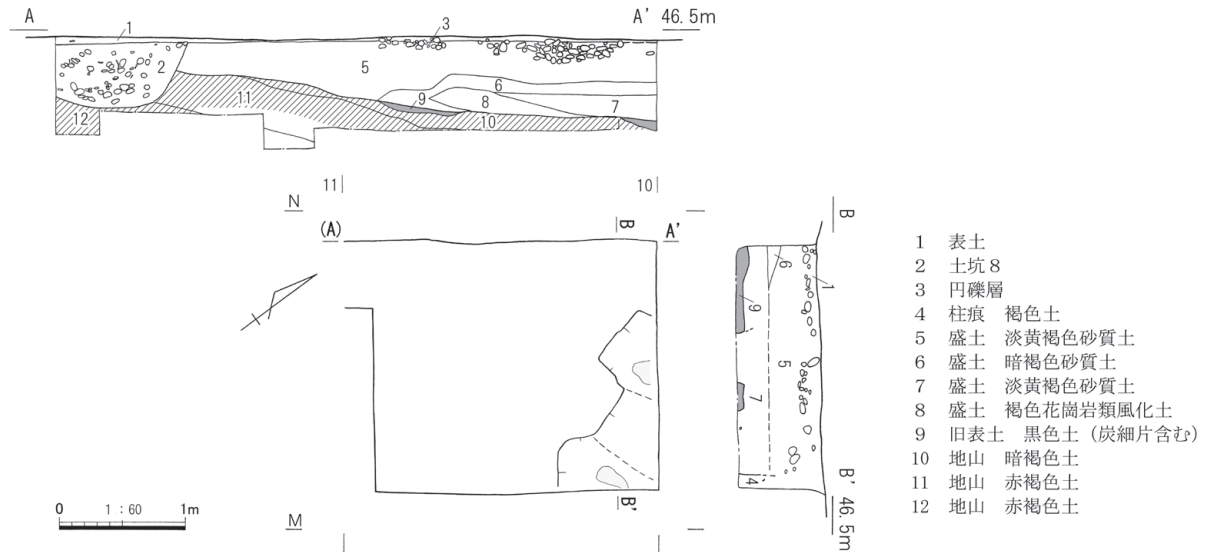


図91 墳頂部断面・建物1 1 : 60

れないが、低くなるB断面やC断面では旧表土があり、C断面の北部、墳丘斜面部分では地山の大きな大石付近で最大10cmの厚さとなる。なお、C断面北部では盛土上部の風化が進んだ部分を流土（2層）に含めすぎていて、盛土（4層）上面は図示よりもやや上になる。墳頂部南東側の状況は中心埋葬南東部のトレンチ（図89 D断面）を示した。流出と近代の削平のため墓壇肩の外側で盛土の厚さは14cmにとどまるが、元は30cm以上の厚さがあったとみてよい。このほか、墳頂部北東肩部のL8で1.0m（図36）、第2主体付近では1.5mの盛土（図30）を確認している。それらに対して中心主体の西側では40cmの厚さである。調査を行っていない墳頂西半部では地山の大きな大石も見られ、地山の勾配を勘案すれば盛土は薄くなると思われる、部分的に盛土がほぼない箇所がある可能性も考えられる。

墳頂部の南東側は盛土が厚く、西側は薄いと見込まれるわけであるが、西側も北西斜面（図23）・西斜面（図27）のトレンチに見られるように第1列石よりも上は盛土で築かれており、墳頂平坦面肩部は盛土で形成される。

c 建物1（図91、図版22-3）

立石3と立石1の間にあたるN11の東隅では、地山旧表土面において遺構の一部が調査区にかかる形で掘り込みを検出した。平面検出にとどめ、掘り下げは行っていない。平面形は凹凸があり、2ヶ所で張り出すような形状である。破線で示した埋土中のラインは明確なものではなく、特に北側のそれははっきりせず、埋土の若干の差か掘削が重なることを示すのかは不明である。掘り込みの内側、調査区東隅には長さ26cm、幅13cmの、その北には幅18cmの柱痕とみられる黒褐色土部分があり、この2つの間隔は88cmである。B断面にかかる南（調査区東隅）の柱痕は上の盛土中に続いており（B4

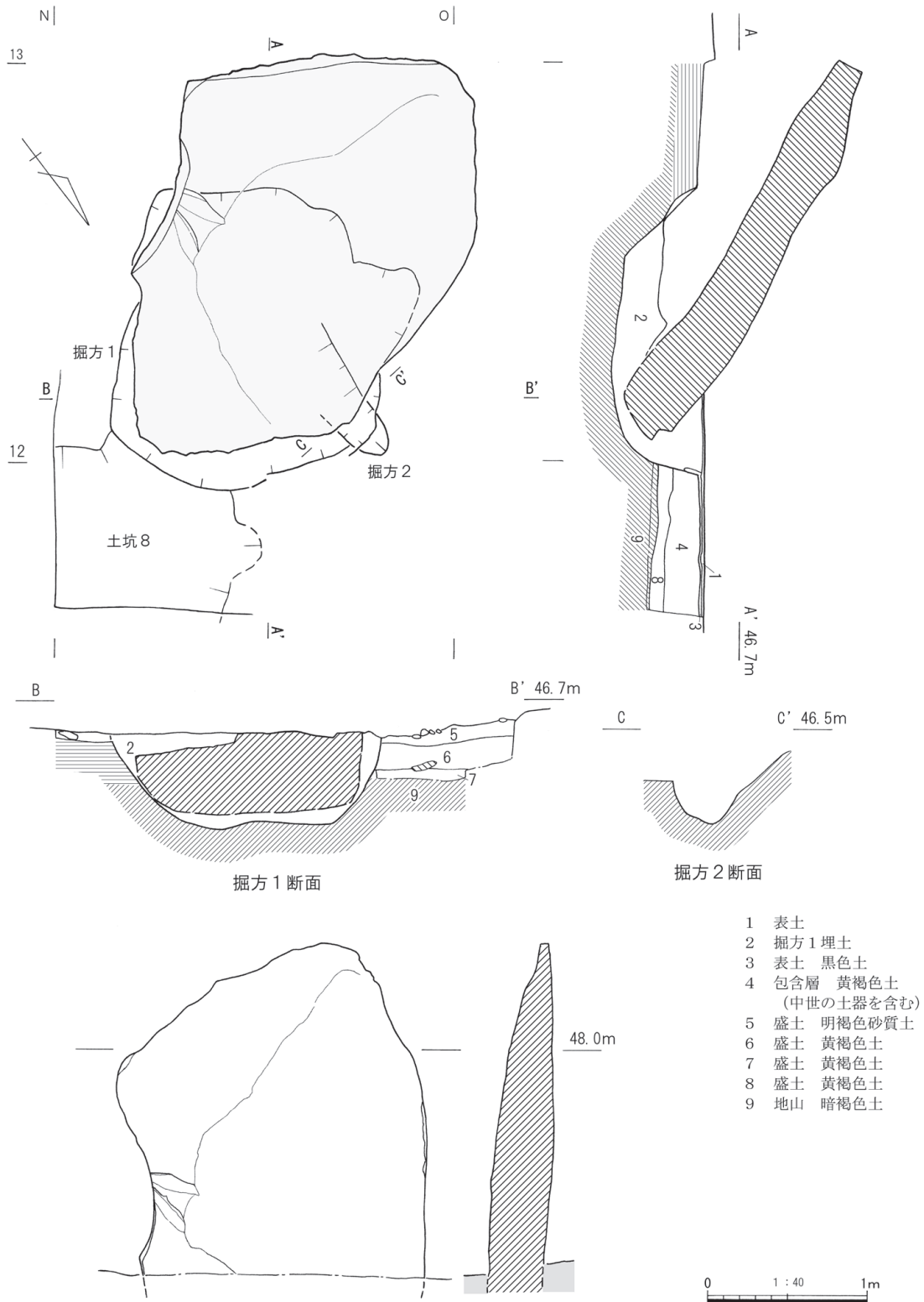


図92 立石2 1:40

層)、ここには土器小片を含む。また、柱痕外側の埋土には小円礫が含まれる。北の柱痕も、断面が円礫層下まで続く。こうした状況から、遺構は布掘りの掘削を行い柱を設置したものとする。なお、掘方が地山面からか、さらに上の盛土から入るか不明であるが、後者の可能性がある。

遺構の時期を確定しがたいが、円礫敷に掘削の跡が見られず、上記の小円礫をのぞけば円礫層を掘り込んだ遺構に見られる図91 A2層のような埋土中の円礫の散在は見られない。また、中世の柱穴よ

りも深く大きい点も異なる。B断面東端に見られるやや深い位置の円礫は、柱が朽ちて生じた穴に円礫が落ち込んだ可能性が考えられ、この遺構の構築後に円礫敷が設けられたとみるのが適切である。

立石1と3、そして4の間となる位置に何らかの構築物が設けられたことになり、柵列や立石の構築に関わる施設なども想定できるが、布掘の建物の可能性を考えておく。調査時に評価が確定しなかった遺構であるためむずかしさがあるが、以上のように判断した。遺構の詳細については、将来の調査・探査に委ねることになる。

d 立石2 (図92、図版22-1)

墳頂平坦面には立石6基が所在する。傾きながらも立っているものが4基(立石1・2・3・5)、完全に横転しているものが1基(立石4)、そして、東斜面に転落しているものが1基(立石6)である(図84)。

立石2は中心主体の北に位置する。南西側に垂直に対して59°と大きく傾いた状態であった(図版3-3)。傾いた立石の下側には、それ以上の傾斜や倒れを止めるために多量の礫が入れられていた。立石の大きさは長さ約2.6m、幅約2.0m、厚さ42cmで、上下の辺が平行で側辺が斜めの平行四辺形気味の形状である。全体の長さのうち地表に出ているのが2.16mと根入れはきわめて浅い状態であった。立石の東側には中世に土坑8が掘削されている。

前述のように立石の周囲は円礫敷の遺存は少ない。図87平面図に示す円礫のうち立石に近接して所在するものは後に入れられたもので、若干の隙間を隔てた調査区端のものが遺存したものである。

この立石には長さ1.9m、幅1.65m、深さ57cmの楕円形気味の掘方1が伴う。この掘方は表土直下から掘り込まれている。北東側では表土の一部(A3層)が掘方に入り込んでおり、また、中世土器を含むA4層を掘削しており、この掘方は築造当初のものではないと判断できる。1978年の発掘調査の5、6年前にこの立石を据え直したと伝えられるが、そうした作業などによって形成されたとみられる。

この掘方に掘削された先行する掘方2を、立石基部の北側で検出した。幅40cm、深さ26cmの溝状で、長さ90cmにわたって検出し、軸線はほぼ南北である。この掘方2は、後に判明した立石3の掘方下部と同様であり、この立石の当初の設置方向を示すと判断する。

なお、かつて地元でこの石を据え直した際に90°向きを変えたとされることから、調査後にそれを修正する形で立て直したが、それは大正期の写真と整合しないことから、調査前と同じ向きで直立する形に再度据え直してある。

e 立石3 (図93・94、図版34)

墳頂平坦面北端に位置する。長さ4.1m、幅2.87m、厚さ53cmの五角形気味の平面形をもつ巨大な板石が用いられている。基部の軸線をほぼ東西にとり、北の墳丘斜面にむかって53°に傾斜していた。地表からの高さはその状態で1.65m、幅2.9mであるが、図上復元の高さは3.2mで立石1に次ぐ高さである。立石の南側には、傾斜を止めるために後世に置かれたとみられる石材(列石55)がある。

掘方の上面が盛土と円礫敷で被覆されていること、地表下で検出した立石西端が割れて断片となった石材が現在の立石よりも垂直に近い角度を示している傾いた状態が本来ではないこと、また、立石の南側には立石の傾斜によって生じた隙間に流入したと判断できる土層が存在することなどから、立石は墳丘墓に伴うものであり、元は垂直に立てられていたことが判明した。

立石は2段掘りの掘方を伴う。上段は長さ約2.9m、幅1.9m、おおむね長方形の平面形をなし深さ約50cmである。北の斜面側の掘方上端は南側よりも約30cm低くなるが、立石の重量によって墳丘が沈下したとみられる。立石の北下側には円礫敷が続くが、沈下の影響で礫がある程度動いた箇所が多い。掘方下段は長さ約2m、幅50cm、深さ最大66cmの溝状で、立石はこれに落とし込んで立てられている。

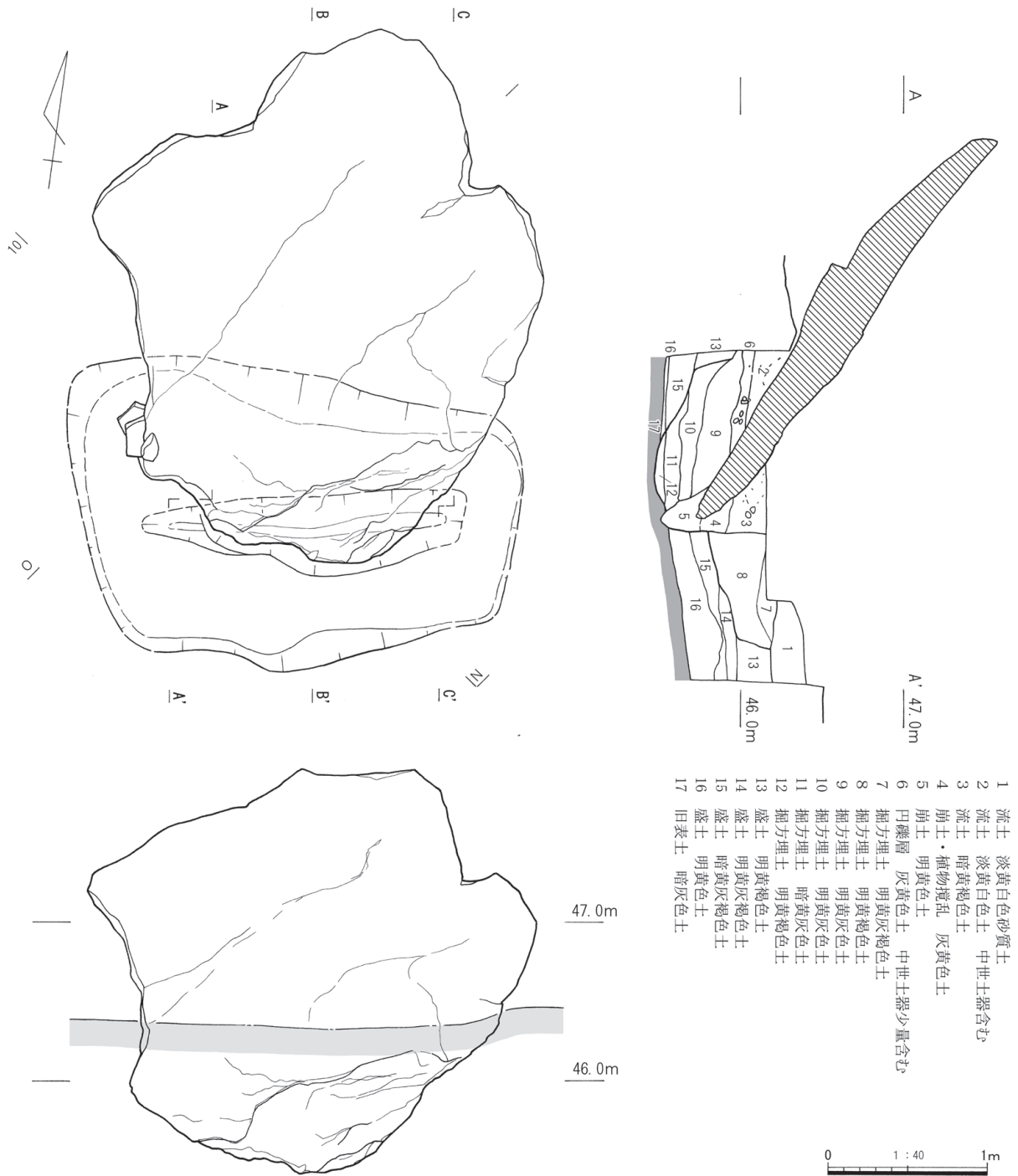


図93 立石3(1) 1:40

掘方の底面は西端近くで段をもつ。東が若干下がっており、立石下端の形状にあわせて底面を調整した可能性がある。B断面では立石の下に石があるが、立石の一部が割れたものか、根石として置かれたものかは不明である。C13層は9・11・12層とは異なりよく締まり均質で、立石設置前の置土の可能性がある。A・B断面では掘方の上は厚い流土であるが、遺存状態のよいC断面は掘方を盛土4層が覆い、その上面に円礫敷が設けられた状況を示す。

各断面に示すように、立石基部の上に生じた隙間には流土が流入している（B2層など）。この下にはA4・5層、B5層、C3層などの土層がみられる。これらは立石の傾斜する過程で掘方埋土が崩れたり、その部分に植物の根がはいって形成された層である。

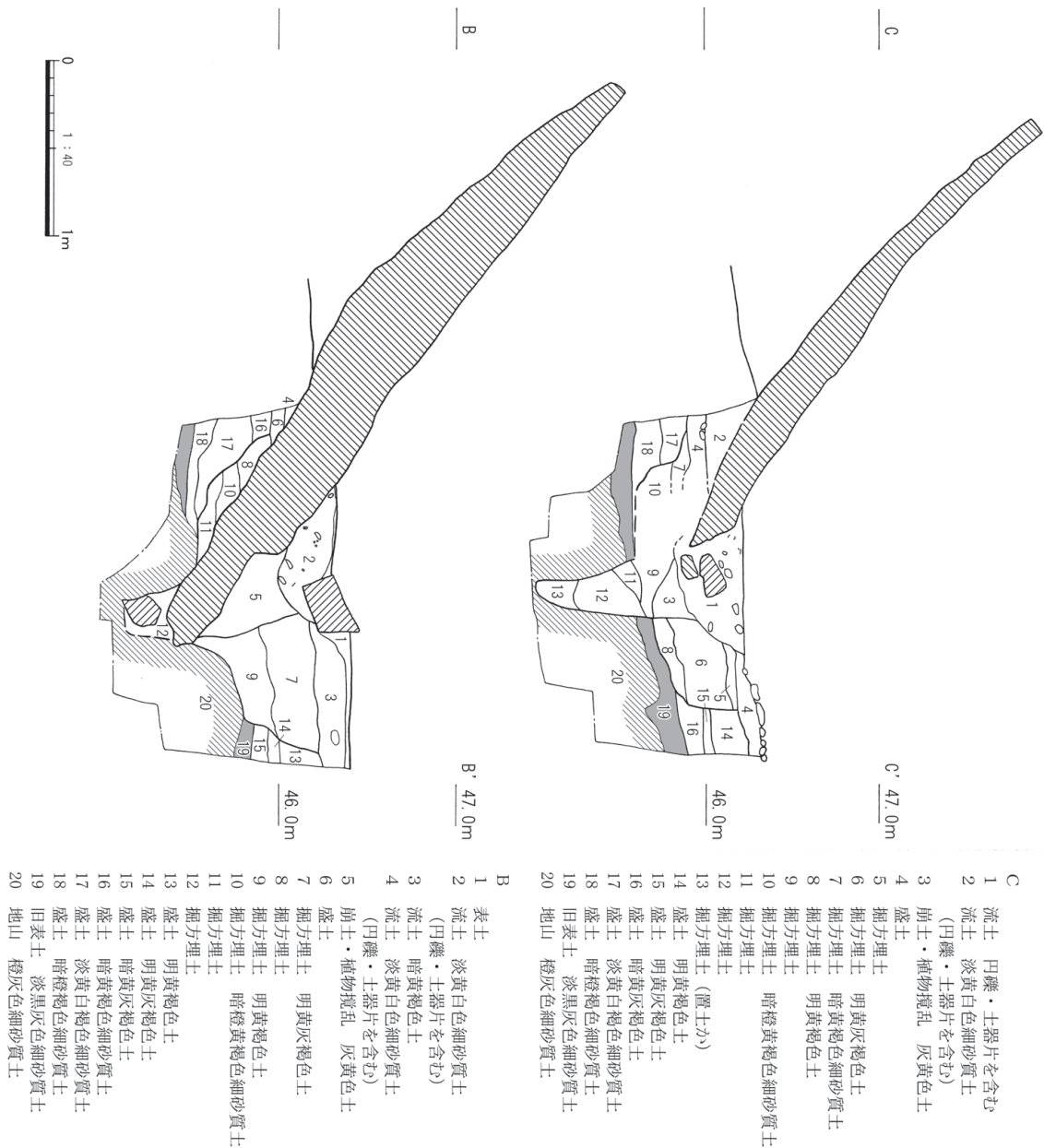


図94 立石3(2) 1:40

調査後に据え直しており、現地表からの高さは2.75mである。

f 立石5 (図95)

中心主体の南側に所在しており、排水溝の上に位置する。排水溝の調査域に近接するため、一時撤去し、あわせてこれについての調査を行ったが、移動作業中に石が横転したため掘方上部等の情報が不完全となったことは否めない。

長さ2.5m、幅75cm、厚さ35cmの細長い板状の石が使用されており、東南東-西北西に軸線をとる。南西方向に傾いた状態で、墳丘現地表から高さは2.13mである。なお、B断面に示した立石断面は見通しである。

石の根入れはきわめて浅く、長径1.0m、深さ44cmの掘り方に設置されていた。石の傾きによって掘方の南側は押しつぶされていた。付近は墳頂が流出している箇所であり、元の墳頂が46.35mとするなら、掘方の底面から地表まで50cm強であったことになる。なお、調査範囲の南東部分には立石に

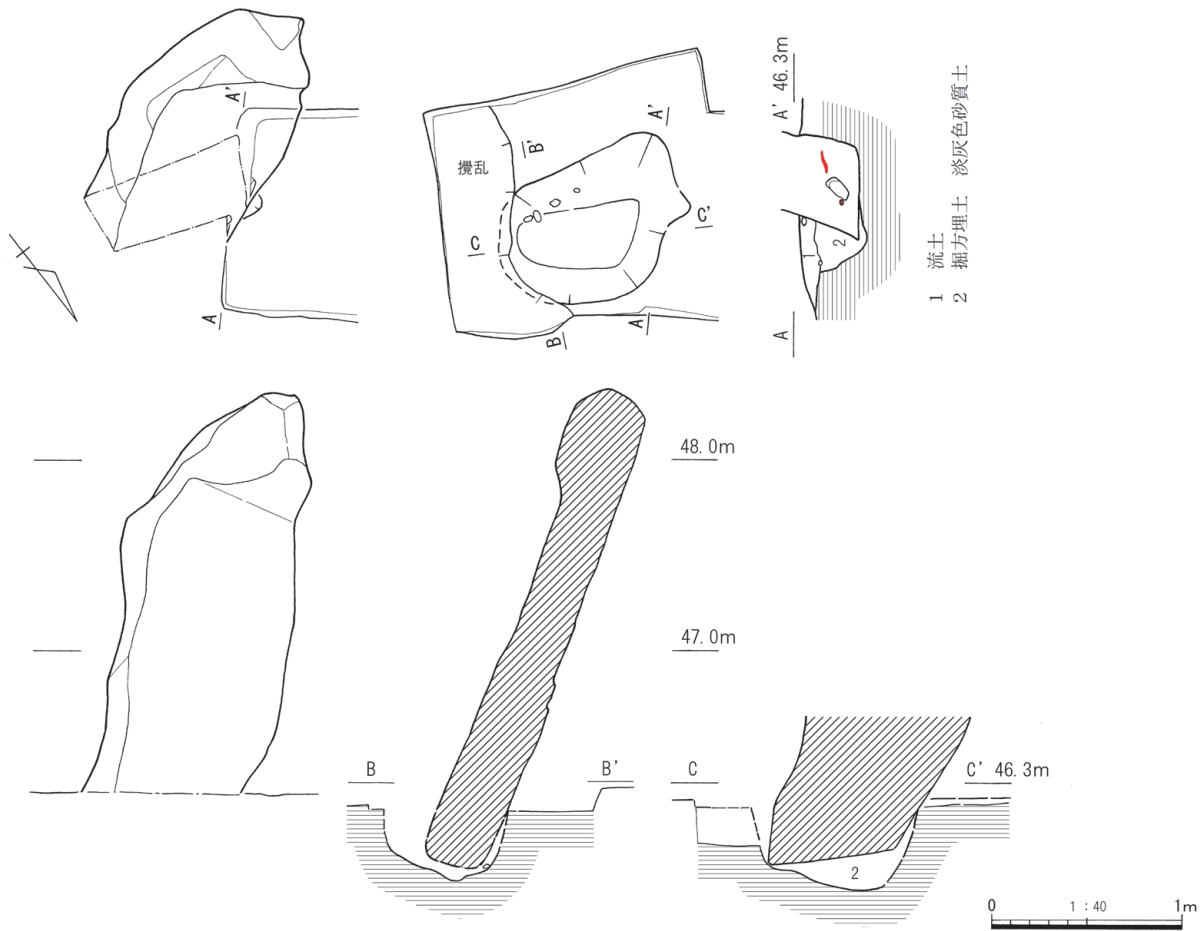


図95 立石5 1 : 40

接して陶器片を含む攪乱土が広がる。

掘方底部の埋土は淡灰色砂質土で円礫を含む。石の基部から18cm上の立石に近接した位置では埋土中に長さ12cmにわたって朱の広がりが見られ、それに近接する円礫にも朱が付着する（A断面）。これらから、立石の設置にあたって朱を撒きながら埋め土を行ったと判断できる。立石3の掘方埋土では朱は見られず、一連の遺構ではあるが設置にあたっての儀礼に差があったことを示している。また、埋土に円礫を含むことから墳頂の円礫の敷設に近いか並行する段階でこの立石が設置された可能性が考えられる。

g その他の立石

立石1（図96） 墳頂平坦面の北東側、中心主体の墓壇に近接した箇所に位置する。長方形の柱状の巨大な石を用いており、現地表からの高さ3.18m、直立を想定すると3.3mで、墳頂の立石で最大の高さである。南西に傾斜している。以前弧帯文石を収めていた榊築神社の石組みの祠は、この立石を背面に使う形で立石の南東に設けられている。石材の長さ3.5m以上、幅1.30m、厚さ80cmである。

立石4（図97） 立石1の東側、墳長平坦面の端近く、北東突出部に面する位置に横転した状態で所在する。断面形はカーブをもち巨大な椅子のような形状である。地中に据えた側を推定しにくいが南東側が厚いようで、この側かと思われる。移動が困難な巨石であり、現位置付近に立てられていたと考えてよいだろう。平面形は長方形に近いが、一方の隅が突出した形状であり、そのため重心が偏って横転したのかもしれない。長さ2.35m、幅1.51m、厚さ60cm以上である。なお、図170に示したのは、この立石が北西に倒れていると想定して復元した位置で地表に接する形状であるが、回転気味に倒れ

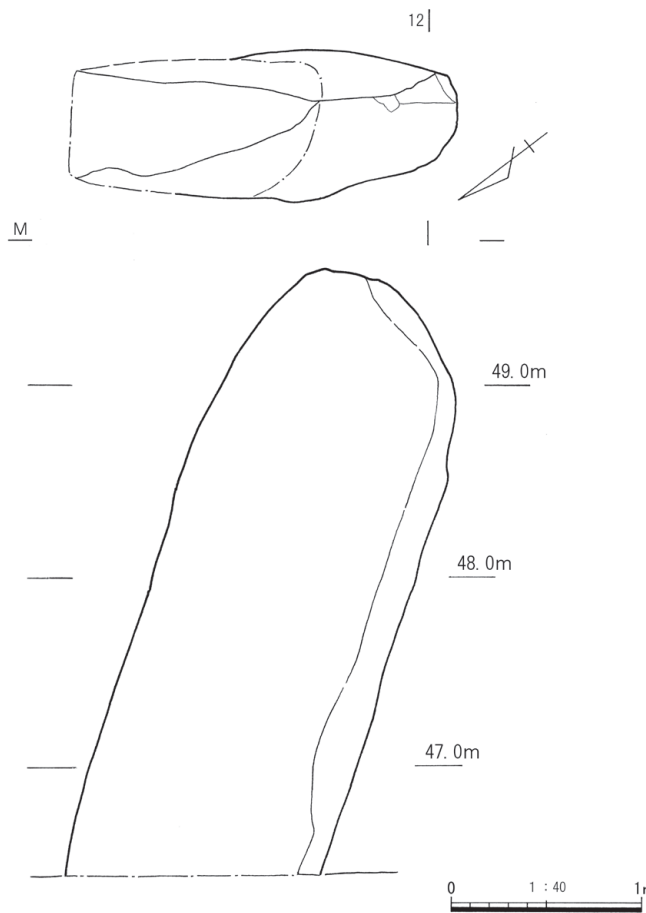


図96 立石1 1:40

たとすれば、これ以外の向きになる可能性がある。

立石6 (図98) 石段の北側、円丘部東側で斜面に添うように所在する。上端が直線をなし左右が丸みをもった厚い板状の石で、下端は埋没する。長さ3m以上、幅2.47m、厚さ45cm。表面の中央付近に境と文字が彫られており、境石に利用されている。

形状から現在の上端が埋め込まれた側とみられ、立石3と同様に墳頂平坦面の端近くに設置された立石が墳丘下側に反転して落下したと考えられる。本来の設置位置はこの石の上側としてよいだろう。旧番号は石20であるが、墳頂立石として番号を振り替えた。

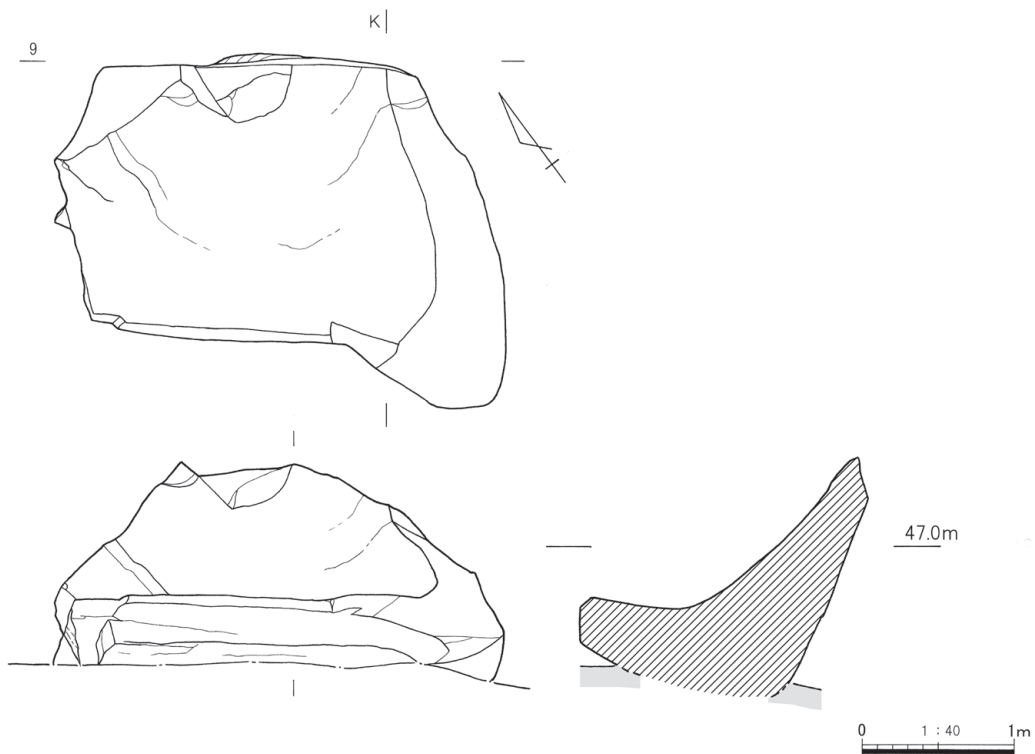


図97 立石4 1:40

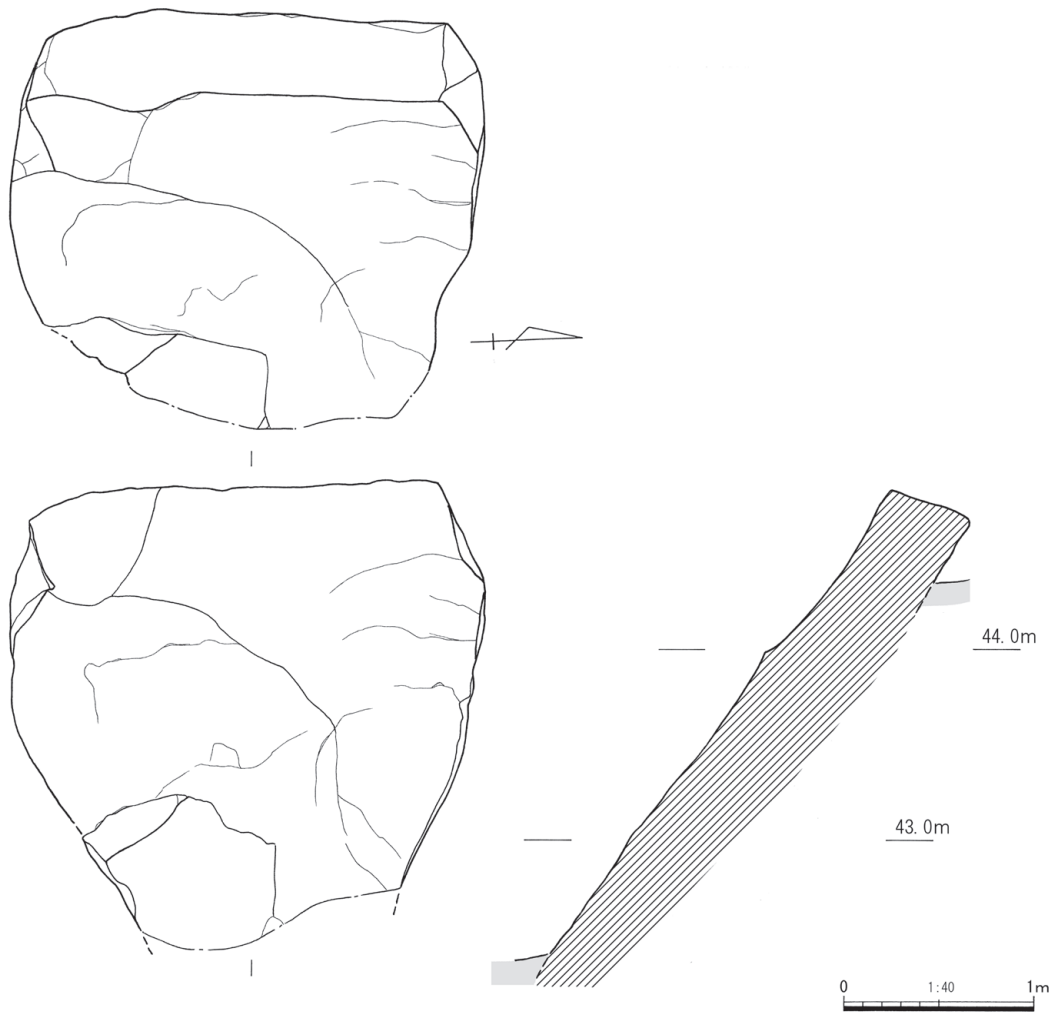


図98 立石6 1:40

墳頂平坦面には、これらの立石に加えて以下に示す大柱遺構や木柱2・3があり、それら全体で墳頂部の施設を形成する。

h 大柱遺構 (図87・99、図版24・26)

中心主体墓壇南縁を掘削して設けられている。調査中に十分理解、評価するに至らなかった遺構であるため、調査の過程を記しながら説明する。

調査の経過 検出位置付近は流出のため円礫敷は基本的に失われており、ごく少量の円礫が散在する状態であった。表土と薄い流土を除去した段階で直径85cm、深さ58cm、円錐台を逆にした形状の土坑を検出した(図87)。縁をかなり新しい掘削とみられる土坑11(図153)が切る。中世の柱穴よりも大きい土坑であり他の攪乱よりも深い点が異なったが、埋土に円礫を含むこと、この面で検出されるのは中世あるいは近代の攪乱等であるため、中世の遺構と考えた。上面から瓦片が出土したが混入とみてよい。CD1層には円礫が多量に含まれ円礫の充満といえる状態で、中世の遺物は含まず弥生土器小片、鉄器39が出土した。

盛土を除去し墓壇の輪郭を検出する段階で、墓壇から西にのびるラインを検出した。これはこの遺構の南東の輪郭にあたるが、北西については土坑11が所在したため認識できなかった。墓壇埋土上になる北東部分も検出できなかったが、これは中心主体側に下降する墓壇埋土上面に掘削されていて検出可能な高さになかったためと思われる。これらのことにより、この段階では独立した遺構であるこ

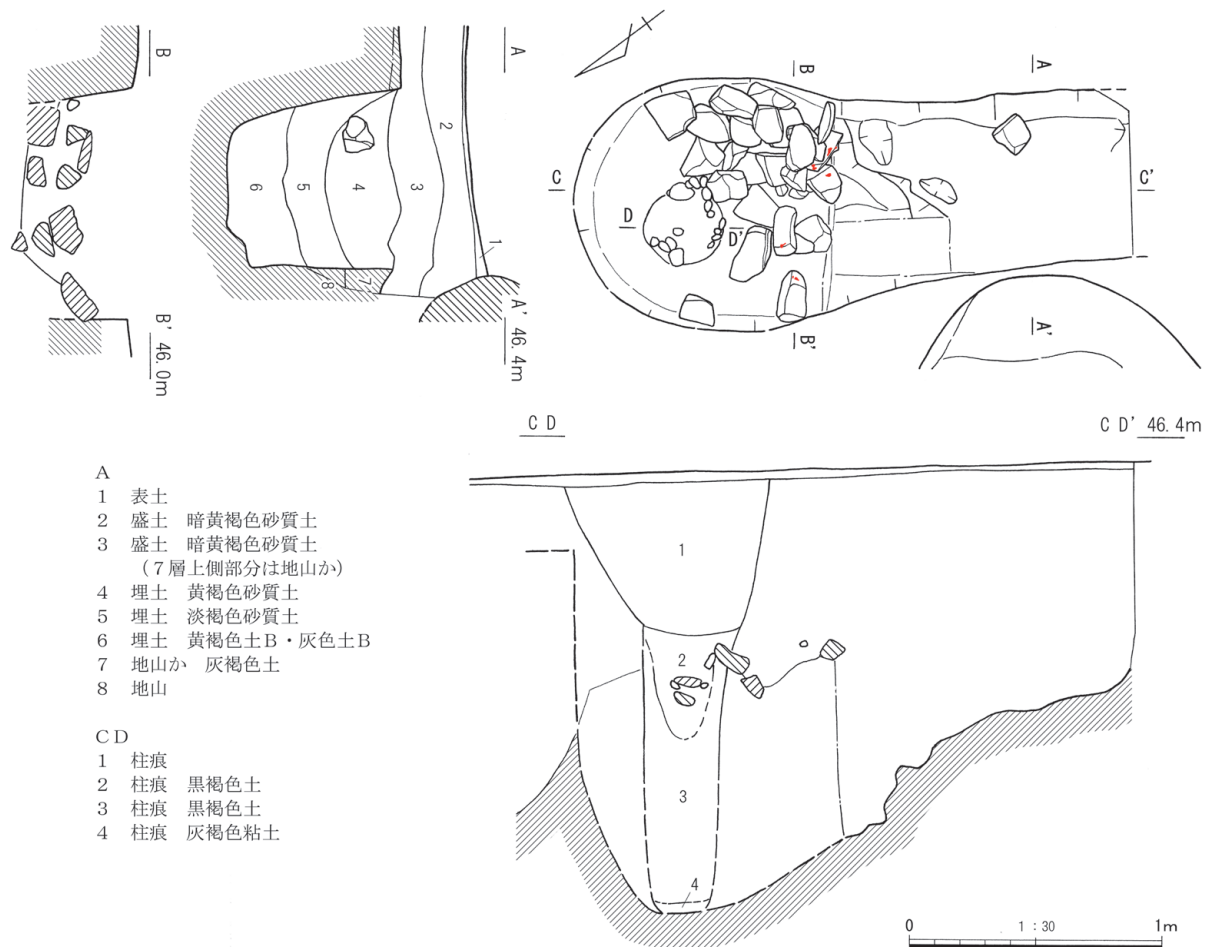


図99 大柱遺構 1:30

とを把握するに至らなかった。

そののち、墓壙埋土を掘り下げる過程で、墓壙斜面をなす地山がこの箇所では検出できないことから、この遺構の存在を把握した。遺構の幅から埋葬施設の可能性を考えて調査を進めた結果、礫が面をなして配置されており礫には朱が付着するものがあることを確認した。それにより墳丘墓に伴う遺構と判断できたが、埋葬の痕跡が確認できず底面が中心主体側に下降するなど、埋葬施設とは考えにくいことが判明した。礫の集中を検出した面では円礫を包含する柱穴状の落ち込みを検出したが、これについては上記の土坑底面の残存と考えていた。遺構の性格が不明なためこの箇所の調査については明確な方針をもつことができず、また、中心主体木槨の調査に傾注したこともあり、集石下については掘り下げは行わなかった。柱穴状部分については掘り下げを継続したところ、それが下に円筒状に続くことが判明した。その後、柱穴状部分の底面は再検出した高さからほぼ1.0m下になり、遺構全体の掘り込みがその深さまでなされているとみられることを確認した。

遺構の概要 調査時点では対比すべき資料がほとんど知られていなかったが、現在の知見をもとに大柱遺構と判断できる。掘方の北東部は上部を掘削したが円形をなすのは確実で、それに幅広の溝が接続し調査範囲外にのびる。全長2.2m以上、最大幅99cm、南西端での幅67cmである。深さは最も深くなる柱の下端で1.48m、南西側で69cmである。溝状部分の南東側壁面は若干の傾斜をもつのに対し、北西壁は垂直に下がるが、これは近接して所在する大石の横いっぱいまで掘削を行ったことによるのだろう。底面は凹凸や段差があり、仕上げの掘削はなされなかったようである。

柱痕の上部は広がっているが、45.0～45.5m付近では直径29cmでほぼ一定しており、柱材の太さを示す。盛土上面から下端までの深さ1.71mと十分な根入れがなされており、柱は相当な高さであったことが予想される。いうまでもないが、柱が腐朽したのち上部は周囲が崩れて広がり円礫が流入して検出時の形状になったとみてよい。

柱を立てた後に埋め戻されるが、その半ばで礫が置かれる。長さ20cm前後の礫が柱付近から溝状部分にむかって配されるが、2石程度の重なりである。B断面掘下げ底面よりも下に礫はないようで、石による根固めとはいいがたい。礫の大半は花崗岩類礫であるが、平面図に示したうちの5点は大形の円礫で、円礫敷に用いるため用意した円礫から大きいものを選んだようである。表面に朱が付着する礫があり、埋め戻しの過程で朱が撒かれたとみてよい。また、柱痕内（CD2層）に落下しているのは5cm前後の円礫であるが、そのうちのいくつかには朱の付着が見られた。墳頂平坦面の円礫が敷設された後、柱の根本に朱が撒かれたことを示すとみられる。なお、平面図のうち北東側の円形の部分で示した下端線は礫を検出した面でのものである。図のように集石下の埋土は残置しており、C断面中央北西側も掘りきっていない。

遺構は墓壇埋土を掘削して設けられており、墓壇が埋め戻された後、墳丘最上部が形成される前に設けられて柱の設置がなされたとみてよい。掘方上の盛土の厚さは24cmである。

鉄器39は円礫堆出土鉄器とともに示す（図119）。

2 墳頂平坦面の遺物

土器構成の特徴を示すため、グリッドに対して斜めの長方形をなす立石3の周辺、立石3と立石1の間部分（N11、以下では立石1北側と呼ぶ）、立石2周辺の3つの範囲に分けて示す。この順に中心主体に近くなる。なお、前述のように立石2周辺は他の調査区と異なり円礫敷の遺存状態がよくないため墳丘面からの出土はほとんどなく、出土遺物は基本的に立石に接して掘削された中世の土坑8から出土したものである。したがって他の2ヶ所とは異なり、その箇所だけでなく周囲の土器を含む可能性がある。土器は基本的に小片であり、表示のためにあえて直径を復元したものが多い。

a 立石3周辺（図100）

立石3の調査（2次・7次）と、立石3西側の円礫敷調査（1次）によるものからなる。278～280、282は小形の壺あるいは器台の口縁部である。280、282は口縁部を上下に拡張し、280は2条、282では1条の小突帯を配しその上下に櫛描波状文を入れる。281は小形の壺の頸部と考えた。細い沈線を配しており、下に広がる。283は胴部に2条の突帯をもつ小形の壺で、長い頸部をもつ直口壺とみられる。破片の量は多い。下側突帯から上に列点文を4段に施す。胎土Bである。284は小形の壺、装飾高杯の脚のいずれか不明。板状工具先端を用いた列点文を配し、内面調整はハケメである。小片285は壺の肩か。外面に列点文があり、内面調整は粗いハケメである。286は砂粒の少ない精良な胎土の製品で、幅広の突帯の下側に櫛描波状文を施す。図とは異なり垂直の部位で装飾をもつ脚付直口壺の胴部の可能性もある。292は壺口縁部。

287・288は小形の、289～291・300はそれらよりも若干大きい器台である。287は口縁端を下に大きく拡張し沈線を施しており丹が見られる。289、290は同一個体と思われるもので、脚端を斜め上に突出させ、その上側と脚柱部に沈線を配する。これと同様な形状の脚部291がある。

高杯では、この時期に一般的な形状の高杯A（脚付直口壺脚を含む）295と、杯部の底を円板充填で形成し、脚端を断面3角形に肥厚させ内面をヘラケズリで仕上げる高杯Bの297～299がある。後者は黄褐色で砂粒を含む。装飾高杯296は杯部の屈曲部の破片で、内面屈曲部にそって連続する菱形文

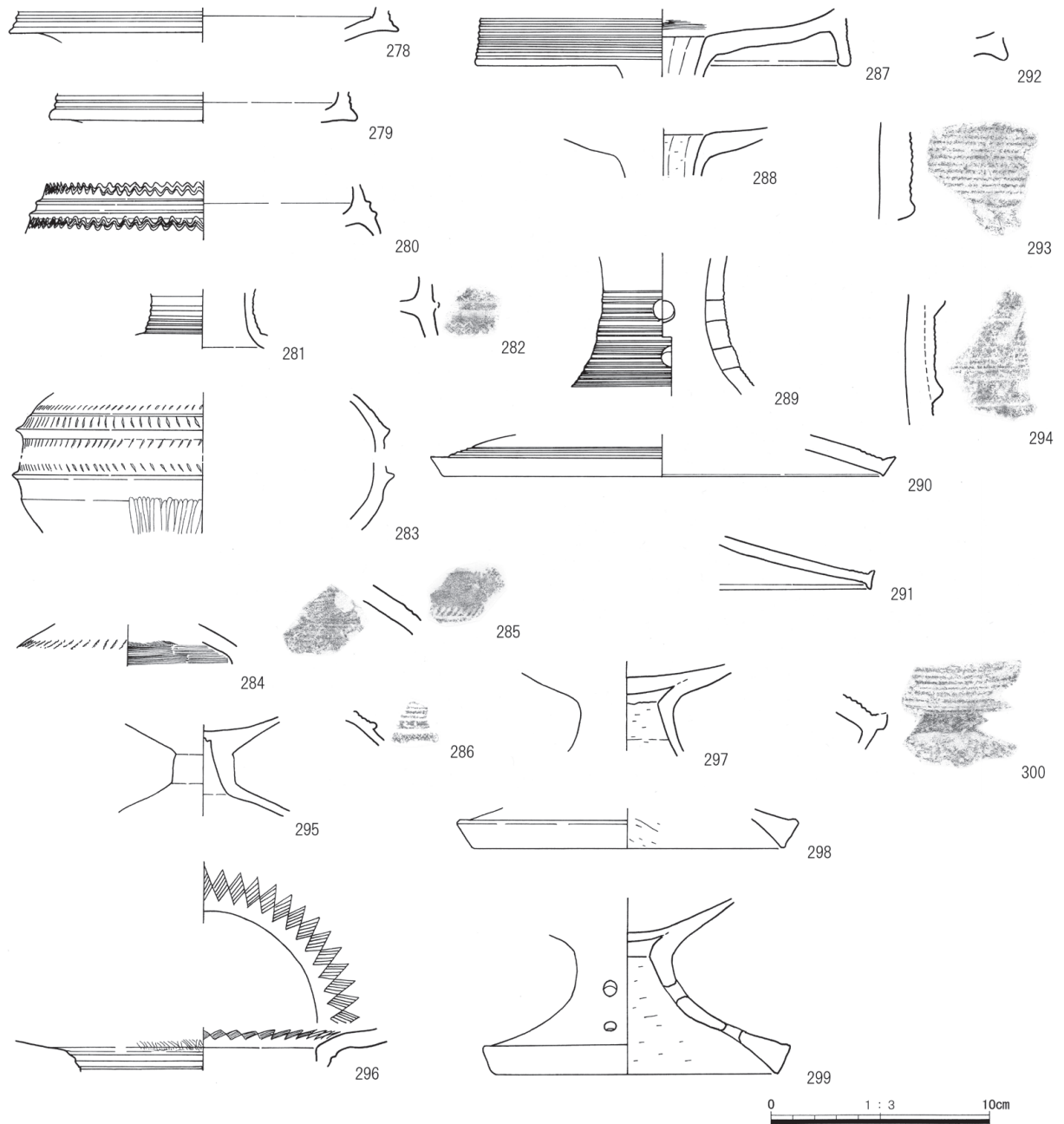


図100 立石3周辺の遺物 1 : 3

を、外面には沈線を入れる。

特殊器台は、A類の間帯小片293、294などが少量出土している。

b 立石1北側 (図101・102)

301～303は小形の壺ないし器台の口縁部である。301は表面の荒れのため下半の施文は不明である。304は特殊壺ないし小形特殊器台の口縁部。305は特殊壺肩部の破片で、突帯上面に沈線、突帯の上方に櫛描波状文を入れる。小形器台は316～319がある。脚端を下に拡張し、内面調整は脚端から受け部下端までがヘラケズリである。317の受け部内面、318・319の裾部には丹が見られる。

309、320、321は高杯Bの脚端である。306、308は大形の高杯である。杯部は屈曲部からやや内湾したのち、外反するようである。高杯Aは307、310～313、315の6個体が出土した。いずれも砂粒を含まない精良な胎土であり、破損して脚柱部付近の破片となっている。脚柱部は中空に形成した後に

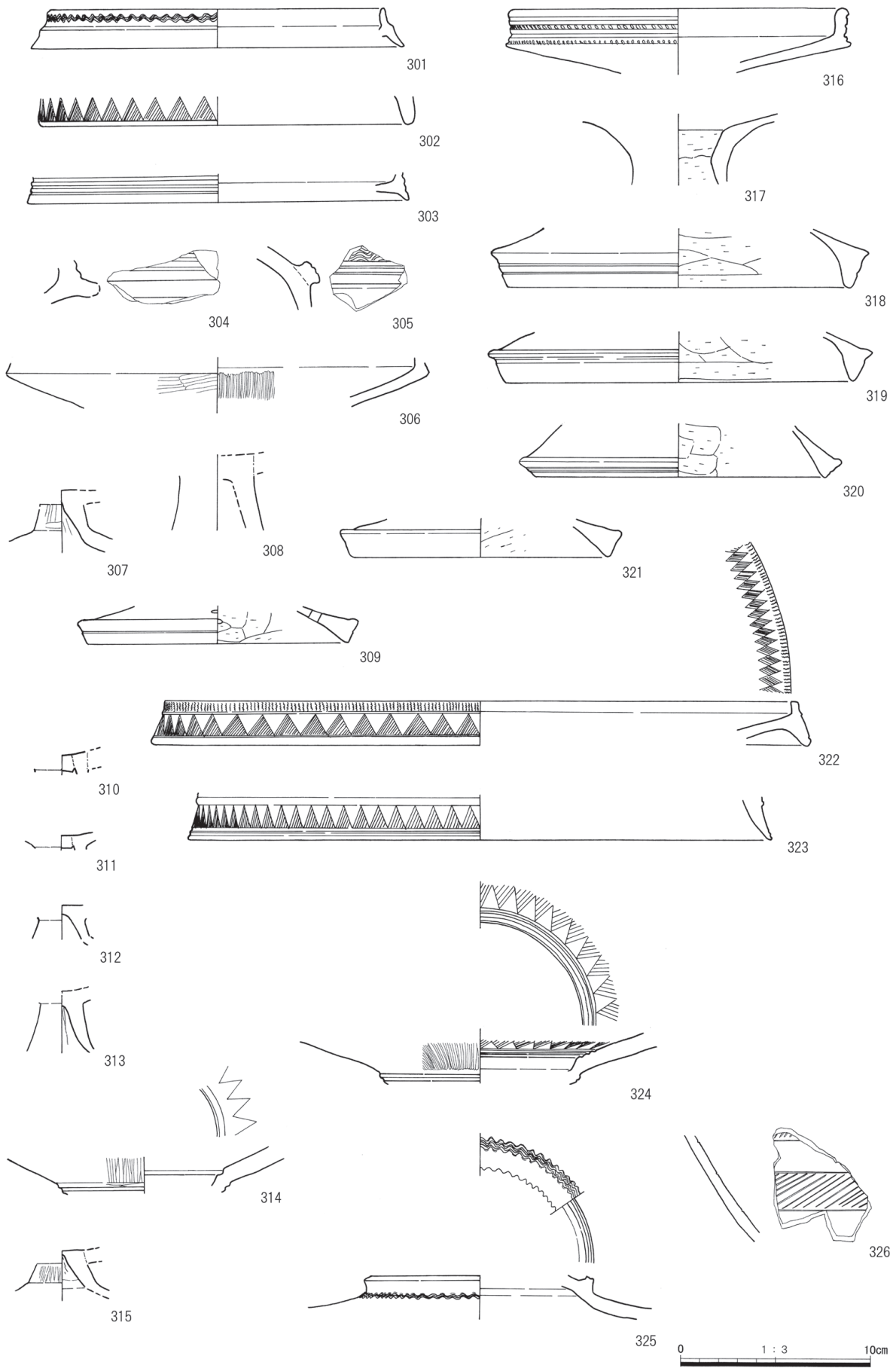


図101 立石1北側の遺物(1) 1:3

粘土塊を充填するものと、内面に絞り目が見られるものがある。

装飾高杯の破片は多い。口縁部322では口縁拡張部に鋸歯文、その上側に櫛あるいは板状工具による列点文を巡らせる。また、杯部内面の外端にも列点文と菱形文をめぐらせている。復元される外径は34.2cmである。323は口縁拡張部下半で、外面には細い突帯を配しその下に鋸歯文と沈線を配する。杯部324は内面上段に沈線と鋸歯文、外面には沈線を配する。314はそれとほぼ同様であるが、内面の沈線の数が異なる。遺存状態がよくなく鋸歯文はその存在がわかる程度であり、内側の斜線は記入していない。脚部325は屈曲部外面に突帯を配し、その上面に2条の沈線をめぐらせる。突帯の上下両側には櫛描波状文を配する。

326は器壁の薄い破片で、内傾する。斜面を水平に分割し無文部と斜線区画を交互に配している。家形土器の屋根である。

327は特殊器台A類口縁部の良好な資料である。受け部外端の上下に粘土を加えて広い口縁拡張部を形成しており、拡張部の上端は強く外に反る。拡張部外面は3本の突帯で水平に区画し、上から列点文、櫛描波状文、平行沈線、櫛描波状文、平行沈線を配する。また、口縁拡張部の上面にも平行沈線を入れている。文様の構成は特殊器台355によく似るが、327は上端が強く反り、外面上端に沈線を入れない点異なる。他に文様帯の小片が少量出土している。

c 立石2周辺 (図103)

328は小形の壺ないし器台の口縁部で、同心円を斜線でつないだ文様がめぐる。胴部に突帯をもつ小形の壺のうち329は突帯間に櫛描波状文を配する。330はそれよりも大きく、剥離した突帯の間は無文である。331は低く幅広の突帯上面に細い沈線を密に入れ、突帯間には櫛状工具による列点文を入れる。胎土には砂粒をほとんど含まない。胴部に突帯をもつ脚付直口壺の可能性もある。特殊壺333は突帯の上側稜線の上下に列点文を配する。胎土Bである。小形の器台では口縁部338、脚部339がある。339は脚部290とよく似た端部をもつ。高杯Aは335が、高杯Bは336、340、341がある。334は低く小さいが装飾高杯の脚柱部とみられる。337は砂粒を含まない胎土で、鉢状の杯部になる大形の高杯と思われる。342は小形特殊器台の受け部下端、343がその脚端である。

特殊器台は他の箇所よりも破片の量が多い。A類では間帯347、348、352がある。破片が大きい352では無文区画の左右に複合斜線文を2区画配する文様帯が見られる。C類はある程度の量が出土しているが、図化できるのは346、351である。351は細く高い突帯をもつようで、その下側には細かい櫛描平行沈線を入れる。それよりも下側は剥離が著しい。346では櫛描平行沈線と櫛描波状文を配する。このほかの特殊器台はいずれも小片で、344は平行沈線の下側に鋸歯文を置く。349は裾部上端。脚裾350は平行沈線の下側に列点を入れる。345は保存状態はよくないが、細い突帯と平行沈線をもつ。

353は板状の破片で、天地、傾きは不明で、表面の状態もよくない。斜線文を向きを違えて3段に配置している。図の上に向かって薄くなり、下端は接合部で剥離している。家形土器の屋根である。354も小片ながら板状で、別の家形土器と判断した。下側に突帯を配し、その上側に斜線文と菱形文を刻む。

この他、地元の方が採集された資料のうち486～494は、墳頂平坦面北側採集とされるが、立石2を立て直した時とするならそれがここに加わることになる。

d 土器の構成

墳頂部の土器構成は、長頸壺と特殊器台が中心となる斜面部の構成と大きく異なる。長頸壺は全く見られず、かわって小形の器台、それとセットになる小形の壺、高杯、装飾高杯などからなり、器高15cm内外の器種が数多く置かれていたことがわかる。飲食器である高杯・脚付直口壺も含まれるがそ

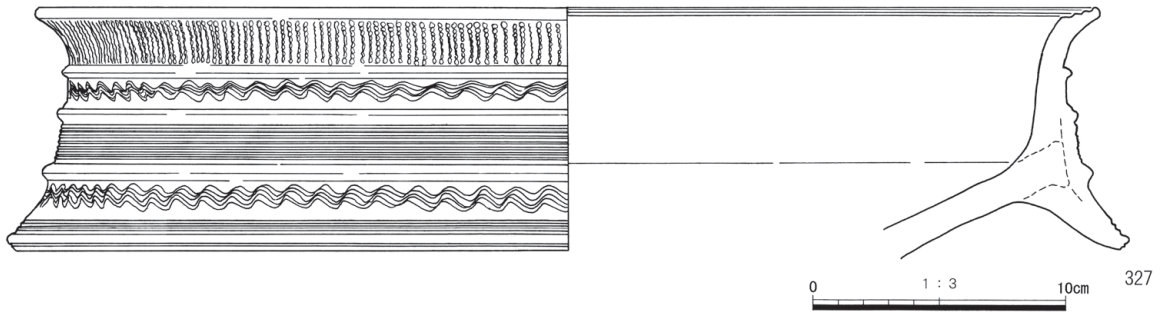


図102 立石1北側の遺物(2) 1:3

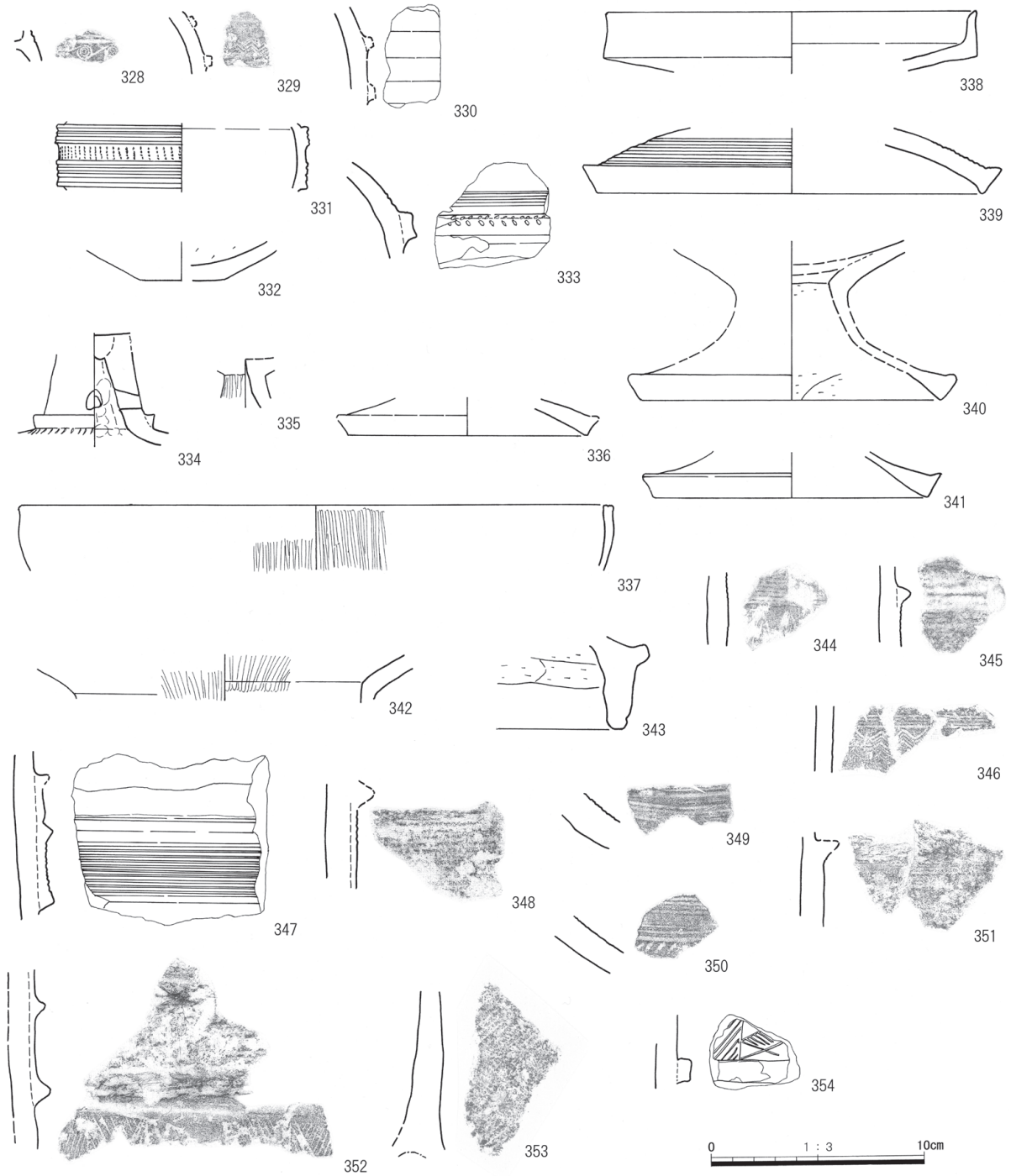


図103 立石2周辺の遺物 1:3

の比率は高くない。高杯Bは円丘部斜面では1点の出土があるにすぎず、墳頂平坦面を特徴付ける器種の1つといえる。

図示したよりもさらに小さい破片は掲載しておらず、個体数の推定はかなり困難であるが、最も条件のよい立石1北側(N11)で算出すれば、小形壺3(301~303)、小形器台3(318、319、未掲載)、高杯Bが3(309、320、321)、高杯Aが6(307、310~313、315)、大形の高杯1(308)、装飾高杯2(314、324)、家形土器1(326)となるが、軸部で計上した高杯以外は、口縁部と脚端は別個体といった可能性は多分にあり、この数よりも多くなるとみた方がよい。それが2.3×2.0mの範囲に置かれていたことになる。特殊壺304や305など、それらよりも大形の器種の破片も少量含まれており、付近にそうした個体が所在したとみられる。したがって、小形の器種が多数存在し、それらの間に大形品が点在していたと推定できる。

立石1北側(N11)からは特殊器台口縁部327が出土しているが、口縁部の大形破片1点の他は小片がわずかに出土しているにすぎず、この位置にこの個体があったのではなく、別の位置から破片が動かされたと考えている。立石3調査区の特異器台片293、294なども同様に考えるべきだろう。ただし、特殊器台A類の破片が墳頂全体に見られることは確かで、特殊器台A類は墳頂部では中心主体の円礫堆(壇)にのみ置かれていたとは考えにくく、ある程度の数が墳頂に置かれていたと考えられる。中心主体に近い立石2調査区では特殊器台の出土量が多くなり、347や352のような比較的大形の破片を含むことや、後述の円礫堆上面の特異器台溜まりに破片が見られない特殊器台C類の破片がある程度の量見られることなどから、中心主体の円礫堆に近い位置に特殊器台があった可能性を示している。

それぞれの調査範囲の広狭はあるものの、高杯Aあるいは脚付直口壺は立石3周辺で1、立石2周辺で1、一方、立石1北側では6と出土数が異なっており、器種構成が一様ではなかった可能性がある。また、高杯Aあるいは脚付直口壺の出土が多い立石1北側では装飾高杯の出土も多く、この2つの器種はセットで用いられた可能性が考えられる。

このほか、先に第3章第2節で述べたが、円丘部北斜面の上方に流入している土器片はわずかであることから、墳頂平坦面の端には土器は置かれなかったと考えられる。

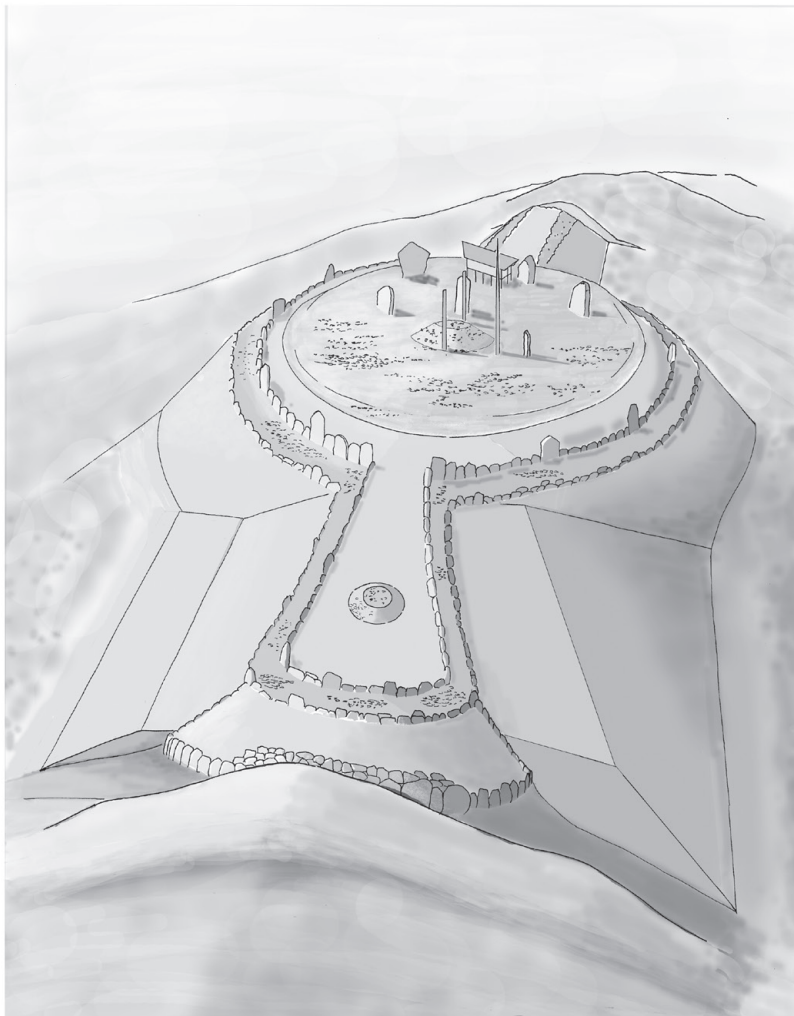


図104 楯築墳丘墓復元図

第5章 埋葬施設

1 中心主体上の遺構

墳頂平坦面の中央に設けられた中心主体は木棺を収める木槨で石組排水溝を伴う。中心主体上には木造の施設が朽ちて生じた陥没が形成されていた。木槨の規模が大きいため陥没も大きく、上の土が落盤しただけでなく側面の土も内側に傾き、さらに一部は崩れ込んでおり、陥没の影響は周囲に及んでいた。

陥没した部分には円礫が充満しており、そこから弧帯文石や人形土製品など、多量の遺物が出土した。それら遺物のあり方から、陥没にむかって周囲から円礫が流入することによって円礫の堆積が形成されたのではなく、埋葬施設の上側に盛り上げて置かれた円礫群が関係をほぼ保ったまま落ち込んだと判断した。検出した遺構を円礫堆、復元される円礫で形成された高まりを円礫壇と呼ぶ。

a 円礫面（図87・105、図版21）

主体部上から周辺にかけて南北6.1m、東西3.5mのいびつな楕円形をなす円礫面が広がる（図87）。円礫面は中央に向かって緩やかに下降し浅い皿状をなす。西縁から30cm、東縁からは15cm低くなる。縁辺部では円礫は表土直下で検出されるが、深くなる中央ではその上に厚さ約20cmの流土が堆積しており、円礫面のくぼみを完全に埋めて南東にわずかに傾斜した平坦面となっていた。円礫面の一回り狭い範囲が円礫堆の平面範囲である。円礫堆の縁辺や西側の円礫が薄い密度で散在する部分は、沈下によって残存した円礫敷と沈下によって生じた斜面に外側から流入した円礫、それらが混じったものである。なお、円礫面中央部（下記特殊器台溜まり検出面）は46.1m前後であるため等高線は複雑な形になるが、外縁にあるものだけを示した。

円礫面を構成する礫の基本的な大きさは長さ5～10cmで8cm程度のものが多いが、内側ではそれよりも大きいものが散見され、中央の特殊器台溜まり付近では長さ12cm程度のものが多く、15cmや20cmの長さの円礫や角礫も見られた。円礫壇の上面には大きめの円礫が用いられたようである。また、円礫面南端は3～6cmの小さい円礫が集中する。縦（A）断面に見られるように円礫層は薄く、この部分は再堆積で形成されたとみられる。

b 特殊器台溜まり（図105・106、図版23-1）

1次調査において、円礫面中央の最も深くなる部分（M14北部）で特殊器台破片を主体とする土器溜まりを検出した。特殊器台溜まりは流土下で検出した円礫を2、3石程度掘り下げた段階で検出しており、特殊器台溜まりが円礫壇の上面を示し、これを覆う薄い円礫層は沈下後に周囲から流入したものとみてよい。

特殊器台は、裏返った状態の脚部大形破片（355脚部）を中心に、口縁部や筒部の大形破片が折り重なった状態で出土した。破片が密集する範囲は直径約70cmであるが、周囲にも大形の破片が散在する。図106には特殊器台溜まりとともに円礫堆上面での土器片の散布状況を示した。散布する土器片には壺363～365の破片なども含むが、基本的に特殊器台片である。特殊器台片は特殊器台溜まりが位置する円礫堆の中央から北側にかけて長径3.1mの範囲に散布しており、特殊器台溜まりから離れるにつれて散布の密度は低くなる。この範囲では円礫堆の上層にも特殊器台片が含まれており、それら以外に、平面ではこの範囲の中になるが筒部の大形破片数点は円礫層（円礫堆）のやや深い位置から出土した。円礫堆上面・上層から出土した破片は特殊器台溜まりが最も低い位置となり、そこから北に離れるほど高くなる。特殊器台片が北西側から低所に転落して特殊器台溜まりを形成したかの位置



図105 中心主体上の遺構・遺物 1 : 60



図106 特殊器台溜まりと土器片の散布 1 : 30

関係になるが、破片は特殊器台溜まりを離れるほど小さく疎らになっており、散在する範囲は広がる。円礫壇の上部にまとまって置かれた特殊器台片の一部が外下側に流出し、その後の円礫壇の沈下によって上下の位置関係が逆になったと考える。円礫堆の深い位置から出土した破片については、一部の破片が円礫壇の中に入れられたと考えることも可能であるが、後述のように、沈下の過程で落ち込んだと判断する。特殊器台溜まりは基本的に特殊器台片からなるが、他に装飾高杯421、不明器種426、壺363～365、器台422・423、人形土製品432・437のそれぞれ一部が混じって出土した。

c 円礫堆 (図107・125・126、図版23～26)

円礫面の下面は、図107に示すように46.0m付近から下、長さ4.1m、幅2.0m範囲で落ち込みが強くなり円礫層が厚くなる。さらにその内側、長さ3.05m、幅70～120cmの長方形に近い形状の範囲では、45.7m付近から下が急な傾斜をなし、壁面が垂直あるいはオーバーハングをなす部分もある。底は南東、北西の両端が深く、中央は最も深くなる北西側よりも40cm高い。円礫層の厚さは北西部で113cm、中央で60cm、南東で98cmである。

円礫堆が形成された落ち込みの平面図は完掘に近い段階で作成したが、その後の掘り下げによって底面形状がかなり変わり、また、著しく不規則な落ち込みの形状を十分に表示できていない。そのため、図107ではそれをベースとして平・断面図や写真などをもとに等高線を復元して示したが、部分によっては正確さにやや欠けることは否めない。この図は円礫が密集した層を掘り上げた段階を示し

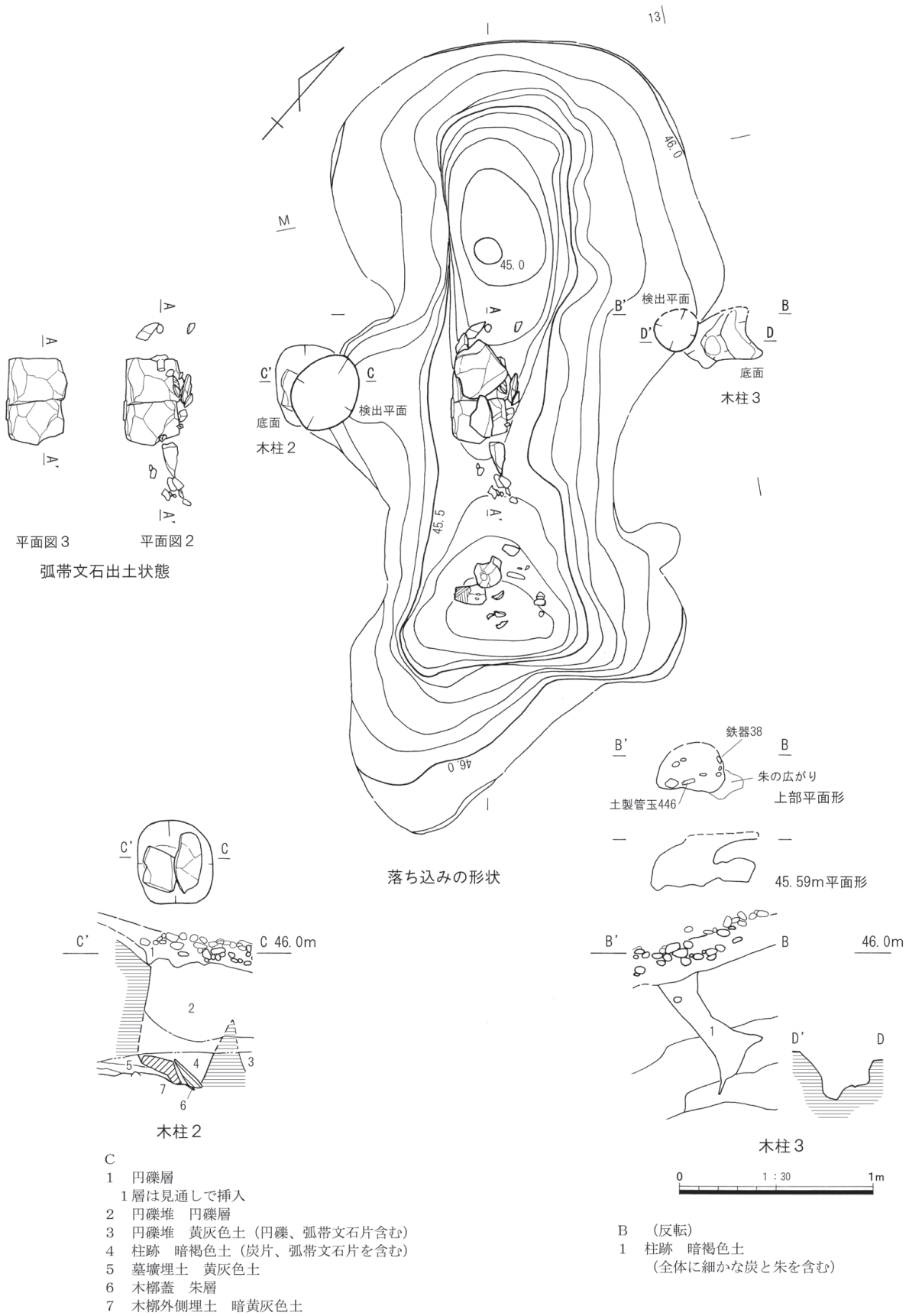


図107 円礫堆・木柱2・木柱3 1:30

ており、ほぼ完掘状態といえるが、南西側面中央部分の斜面については、陥没の早い段階に形成されたと思われる円礫混じり土層（図125 B断面10層西半）を掘り下げていない段階である。それを掘り下げた完掘状態では、南西側斜面の北部に見られるオーバーハングが弧帯文石にさらに近い位置まで続くようになる。

円礫は基本的にこの落ち込みに収まっているが、北西側の底面では円礫を含む土が直径15cmのピット状に落ち込む箇所も見られた。木槨内北隅などでは落下した木槨の蓋よりも下で少量の円礫の散在が見られ、南側にも同様の箇所がある。小さい陥没や亀裂を通過して一部は下まで落ち込んでいる。

円礫堆は円礫の充満といえるものである。上面と同様10cm以下の円礫が主体を占め、少量の角礫が含まれる。北西側で円礫の密度が高く、南東側中・下部では土の量がやや多くなる。円礫・遺物間の土は灰色土や褐色土の小ブロックを多く含む黒色土あるいは暗褐色土である。土を交えて壇が築かれたのか、本来円礫と有機質を含めた遺物のみであったところに周囲から土が流入したのか判断しがたいが、図126 A 8層は細礫や砂を多く含んでおり、この層などは陥没時に流入した土砂の可能性はある。南西側面側の図125 B10層は上記とは異なり円礫を含む褐色土で、木槨上の墓壇埋土が円礫と遺物を含んで崩落した土である。

円礫堆の元となった円礫壇の高さは特殊器台溜まりから弧帯文石下面までの円礫の厚さ60～70cmとみてよい。

d 円礫堆遺物の出土状況

円礫堆には多様な遺物が含まれており、葬送の儀礼が多様な器物を用いてなされたことを示している。出土遺物は土器：特殊器台・器台・壺・装飾高杯・高杯・脚付直口壺・家形土器、土製品：人形土製品・土製勾玉・土製管玉、鉄器、弧帯文石、種子、朱、炭片などであり、土製管玉の一部がほぼ完形、高杯366が形状を保った状態である他はすべて破片の状態であった。

以下、それぞれの出土状況を述べるが、大きくは上面に特殊器台片、下部に弧帯文石という出土状況である。これらのうち特殊器台は、北西側では特殊器台355筒部上部の大形破片が先に述べた特殊器台溜まりと周辺の散布から下に離れてやや深い位置から出土したが（図版23-3）、こうした状況は円礫堆の北西側に限られる。また、弧帯文石の垂直方向分布では、円礫堆縁辺の高い位置にとどまった破片もプロットしているためわかりにくくなっているが、円礫堆北西側では中ほどの高い位置から出土した破片がある。これらのことから、円礫壇は一様に沈下したのではなく、北西側は一部が早く沈下をはじめたか、発生した陥没に円礫壇が崩れ込むといったことによって、上の遺物が深い位置になるなど上下の関係がやや乱れたのではないかと思われる。

特殊器台（図108） 出土状況は以上に述べたとおりであり355と356の2個体が特殊器台溜まりと北側への破片散布を形成する。この2個体は完全に混じった状態で出土した。

遺物の記載においてもふれるが、355では破片の大きさは大小の差が大きく、小片がまとまる復元箇所がある。この場で土器が倒壊したのではなく、筒部の中ほどなどいくつかの部分を中心に土器が割られたと考えられ、破片の状態で見られたと判断する。また、個体の破片すべてが出土しているわけではなく、356では破片の量はさらに少なく全体3割程度の破片量であるが、高杯をはじめとする円礫堆内部の土器にくらべて破片の量は格段に多い。この2個体のほか、特殊器台では口縁部424がそれらに混じって出土しているが、破片の量はわずかである。

壺・器台（図108） 特殊器台と同様、平面的には北西側、上部から主に出土しており、多くが特殊器台と同じ取り扱いであったとみられる。特殊器台の一部と同様、北西側では深い位置にあるものも認められる。



図108 円礫堆の遺物分布 特殊器台・弧帯文石 1:40

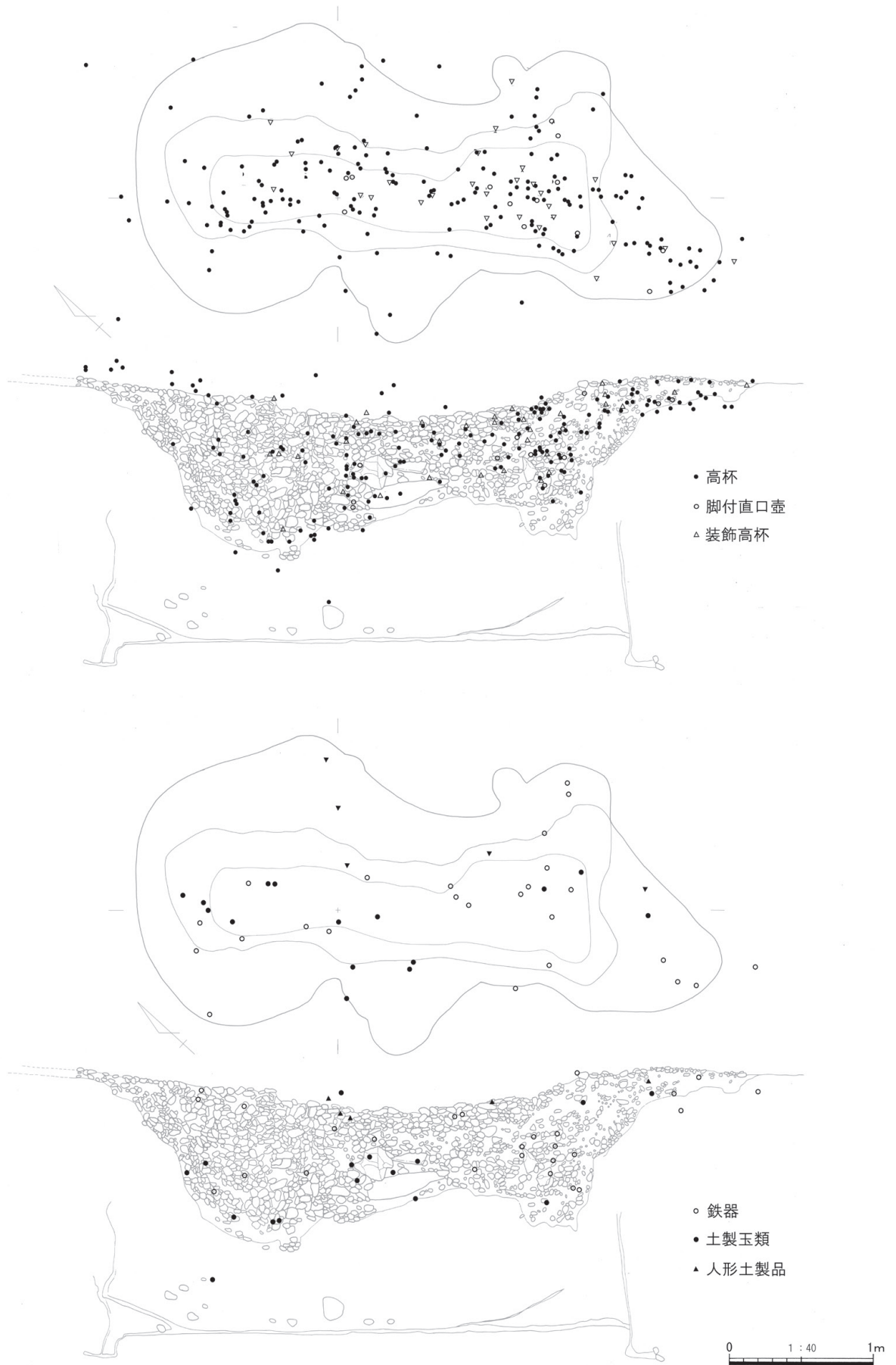


図109 円礫堆の遺物分布 高杯ほか 1 : 40

装飾高杯・高杯・脚付直口壺・人形土製品・鉄器（図109）高杯と脚付直口壺、装飾高杯、鉄器は平面位置、深さともに偏りがなく、円礫堆全体にわたって出土している。脚付直口壺は、それが確実な破片を分離して示したが高杯の出土状況と差はない。脚部のみで高杯と弁別できない破片は高杯に含まれている。高杯366は出土土器のなかで唯一形状をとどめるが、この個体は円礫堆北西側底面の中央、図107 45.0m 数字の図左上にあたる位置で、円礫層よりも下の陥没した墓壇埋土上部から杯部を上に向けた状態で単独で出土した。土器を収める浅い深さに埋め込まれたと判断できる状態である。

人形土製品は出土点数が少ないが、いずれも上面からの出土である（図版25-2）。

土製玉類（図109）弧帯文石と同じく円礫堆下部からの出土が多い。木柱3埋土上部から1点が出土しているが、これは他とは別の使用のあり方であろう。

弧帯文石（図107・108、図版25・26）1個体の出土であるが、焼き割られているため破片数は著しく多い。核となる部分は中央で2つに割れながらも関係を保った状態で円礫堆底面の中央から出土した。以下では、この石材を弧帯文石、遊離した破片を弧帯文石破片と説明上呼び分ける。

図170に示すように弧帯文石は棺の軸線上、被葬者の頭上に位置し、北西にやや傾く。弧帯文石の上には長さ32cm、平面形が不整形の角礫が、それに接した南東に長さ22cmの縦長の角礫が所在した（図107 落ち込み内平面図・図125、図版25-6）。沈下、陥没の過程で移動したとみられる前述の特殊器台のような遺物もあり、最終的に角礫が上に乗ることになった可能性もあるが、沈下・陥没の過程で著しく水平方向に動いたとは考えにくく、2つの礫は真上にあることから、本来この位置に置かれたと考える。2つの角礫のうち大きい北西側のものは下の弧帯文石にほぼ接するが、南東側の角礫は上に離れている。北西の角礫は下面に角をもつ形状であるためこの礫だけを弧帯文石の上に置くことはできず、円礫壇を形成する過程で角礫が弧帯文石の上に配されたとみられる。

弧帯文石の上面にはわずかな量の破片が乗っていたが、本来上面を構成していた破片は残っていない。上に角礫や円礫が充満している状態であり沈下の過程で上部の破片がはずれることは考えにくく、円形壇の構築がはじまる時点で上面の破片は剥脱していたことになる。単純に焼き割った状態であれば、側面は落下するとしても上には破片が残ると考えられるが、そうした状況にはなく、上の破片を落として弧帯文石の破壊を完全なものにしたとみてよい。

弧帯文石破片のうち、弧帯文石南東側の隅にあたる大きな破片と上面中央の大形破片は南東に約70cm離れて出土した。平面図2では破片取り上げの最終段階に弧帯文石の周囲に見られた比較的大きな破片のみを示しているが、これ以外に、1cmに満たない小片が弧帯文石側縁下側を中心に多量に散在していた。それらの多くは被熱によってきわめて脆弱な状態となっており、一部は土とともに取り上げた。また、これらの破片では炭小片が付着しているものがあり、弧帯文石はこの位置で焼かれ、砕けた破片が周囲に積もったと考えてよい。図108に示すように弧帯文石破片は平面では円礫堆の中央から南東にかけて分布し、立面では下部に集中しているが、北西側ではかなり高い位置から出土しており、逆に円礫堆下の木槨内に落下した土からも小片が出土している。繰り返しになるが、沈下の過程での上下関係の乱れや亀裂等による下への落ち込みを示している。後述のように弧帯文石破片は木柱2埋土下部からも出土しており、円礫壇形成時に破片がある程度の広がりをもって散在していたと考えられる。弧帯文石の下にも円礫は見られ、円礫敷上に弧帯文石を置いて焼き割ったとみてよい。

e 木柱2（図107、図版24）

木槨の両側面上側には木柱が設置される。前章で大柱遺構を示したが、それと一連の遺構でもあるため、木槨の南西側の柱を木柱2、北東側を木柱3とする。

木柱2は円礫堆中央の南西側に位置する。以下では検出の過程を記して記載の補足とする。

円礫層の掘り下げに伴って円礫堆の縁辺では中央にむかって下降する斜面が現れるが、この部分では円形の平面をなして円礫を含む土が残るため、長径42cmのピットと認識した。円礫堆の形成過程を把握する以前のことであり、先行して調査を進めた円礫堆北部では円礫堆の底面に規模は小さいがピット状の下がりも見られたため、局部的に生じた不規則な落ち込みという認識であった。検出の後に行った掘り下げはおおむねC断面の一点鎖線までであり、円礫を密に含む土層を掘り上げたと判断した。しかしながら、半掘後に掘り下げたピットの北西半では下部の壁面にはなお円礫多数が見られ、その円礫群は北西にのびる溝状をなして円礫堆中央に続くことが判明し、ピットとの判断が疑わしく思われる状態であった。後述のように、木槨の蓋板は、木柱2の斜め下方になる南西の側板と接する箇所で腐朽し、土砂が内部に落下しつつ陥没したと考えられる。木柱痕の上部からその側面をへて木槨蓋板の腐朽箇所に至るトンネル状の隙間が土の吸い込みによって形成され、そこに円礫が充満したため、こうした状況を生じたのではないかと思われるが、通常は生じることのない複雑な状況であり、掘り下げ時には十分に読み解くことがむずかしかったというのが、率直な述懐である。

その後、木槨横断面位置を設定し、それにあわせて墓壇埋土上部を掘り下げたところ、2点鎖線の高さで円形のピットを検出し、上記のピットがさらに下に続いていたことが判明した。ピット、つまり柱痕は斜めになっているため検出した穴の平面位置は先に検出したものよりも若干外側になる。

柱痕の下には長さ32cmと19cmの板状の角礫2点が礎石として置かれていた。礎石のうち大きい北東側のものは後述の木槨蓋材痕跡線の直上にあり、木槨蓋の端に接して置かれていた。柱の痕跡は柱の傾斜のため平面形が楕円形になるが、軸線に直交ではほぼ円形で、再検出面で長径42cm、底面で直径36cmである。埋土の下部には少量の円礫のほか弧帯文石小片が含まれていた。柱の腐朽に伴って近接して散在していた弧帯文石破片が流入するなどし、後に空洞となった上部に多量の円礫が堆積するという経過をたどったようである。

柱を収める柱穴はなく、礎石上に設置され墓壇を埋め戻す土によって柱が固定されている。礎石は水平でなく、柱跡もやや斜めになるが、これは木槨側面が内側に傾いたためであり、本来は垂直に立っていたと考えてよい。断面図の上部には木柱2の断面位置から北西へ35cm離れた位置の木槨横断面の円礫層を示した。これによれば柱の根入れは66cmであり、大柱のような著しく高い柱ではなかったとみられる。

この遺構の調査を終えたのち、礎石をはずした面で黒色土が直径18cmの円形をなす状況を認めた(図132)ため、その部分の掘り下げを行ったが、下に続く柱等と判断することはできなかった。しかし、後述の木柱4はこの箇所の下にあり、その上端がここまで達していてその上に木柱2が設けられた、つまり礎石の上下に木柱が所在したと考える。

f 木柱3 (図107、図版25-1)

木槨の北東側面の外側に位置し、木槨横断トレンチに一部がかかる。傾いた木槨側板と同じ傾斜となっており、本来は直立であったとみてよい。

B断面はトレンチ壁面での断面形で、木の根にも似た斜めのI字形をなす。遺構中央の断面ではないため幅は狭くなっている。墓壇埋土上面での検出状態では直径23cmの円形(円礫堆平面図)であったが、これは周囲の土が崩れ込んで形で狭まった形状であったようで、それよりも下では長径35cmの不整形円形になる。下部での平面形はさらに大きくなり(45.59m平面図)長さ約54cmで、北東側は2つに分かれて不整形なC字形の平面形となる。底面の形状も不規則な形である。上部に円礫が充満した木柱2とは異なり、木材が土壌化していく間に周囲の土全体が傾いていったため著しい変形を生じたようである。

埋土（木柱痕跡）には少量の円礫のほか炭細粒と朱が全体にわたって認められた。木柱の根元になる墓壇埋土上部では木柱痕跡に接する部分から東外側20cmの範囲に朱が面的に広がる部分や朱粒の点在する箇所があり、炭がまとまったり朱と炭が混在する状況も見られた。設置時に柱の根元に多量に撒かれた朱と、炭が後に痕跡内に流入したと考えられる。また、柱痕跡の上部からは土製管玉446・鉄器38が出土し、埋土に朱が集中する箇所が認められた。これらも木柱の根元に置かれたものの流入と思われる。

掘り方はなく、墓壇埋土で固定した木柱である。柱の大きさの復元はむずかしいが、上部での検出幅などから直径35cm前後と考える。根入れは74cmで木柱2よりも深くなるが、木柱2は礎石を用いた分浅くなったようである。木柱の据え付け深さがほぼ等しいことや配置などから、2つの柱は一連の遺構とみてよい。柱の間隔は2.15mであるが、木槨両側の土全体が内側に動いているため、本来はこれよりもわずかに大きい数値となる。

2 円礫堆出土遺物

a 特殊器台

特殊器台355と356の2点が、円礫堆上面に特殊器台溜まりを形成し、また、その周辺へ散在した状態で出土した。

特殊器台355（図110、図版40） 口縁部から脚端まで接合、復元が可能であった。器高111.9cmである。幅9.9cmと大きな口縁拡張部、5段の間帯と4段の文様帯を配した筒部、踏ん張る形状の脚部からなる。口縁部径46.4cm、脚下端径46.2cmで、口縁拡張部下端が径50.3cmと最も大きい。筒部は中ほどでエンタシス状をなして膨らみ、第2文様帯中ほどで径32.0cmである。筒部に設けられる間帯の幅は最上段（第5間帯）が6.0cmである他は、8.7cm前後と共通する。それに対して文様帯幅は最下の第1文様帯が幅13.5cm、第2文様帯11.6cm、最も上の第5文様帯が6.9cmと、上に向かって順次幅を狭めている。筒部は10cm程度ずつ粘土を積み上げたようで、接合部が剥離面をなす場合もある。

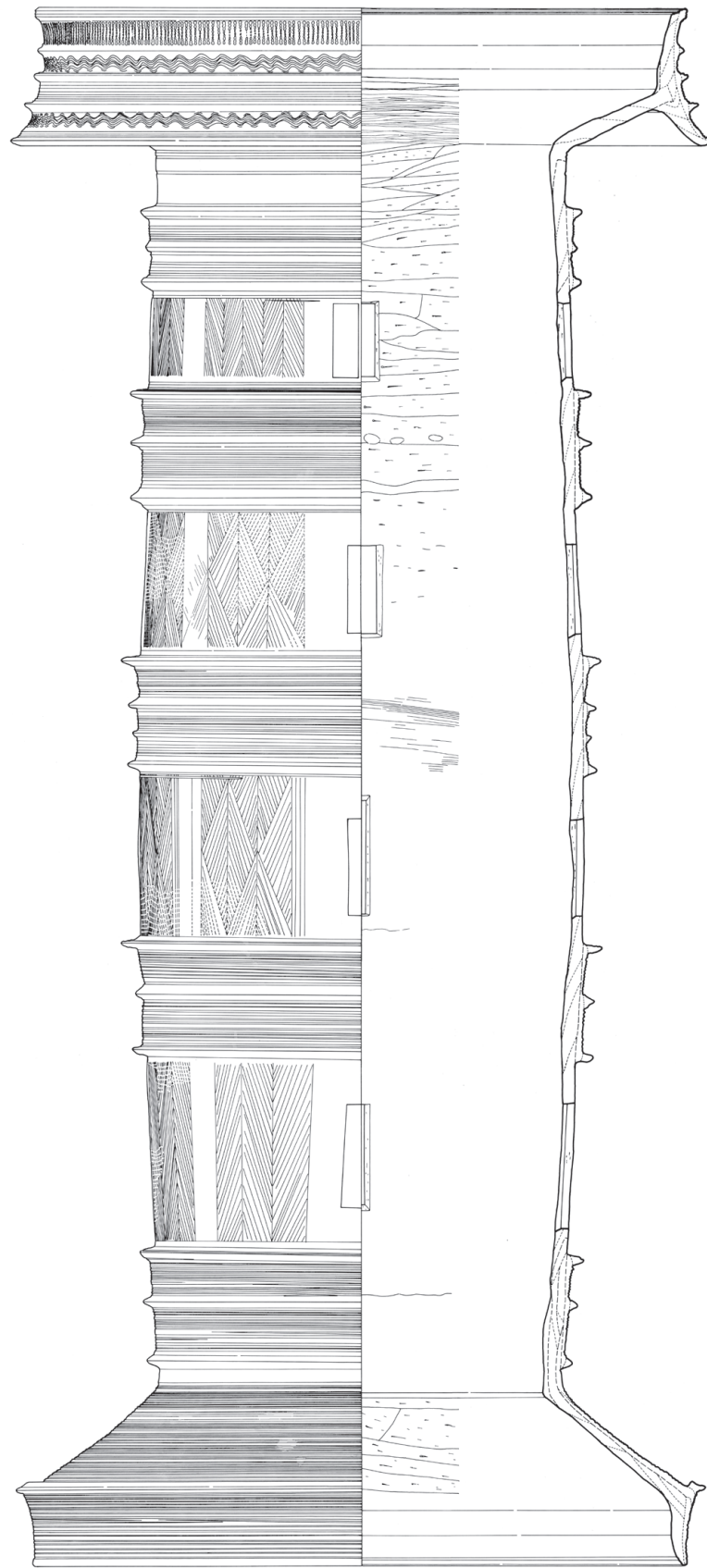
口縁部は上下に大きく拡張して外面に3段の突帯を配し、上から順に櫛状工具による列点文、櫛描波状文、櫛描平行沈線、櫛描波状文と入れ、上下両端と上端面に沈線を配する。

文様帯は、第1・第4文様帯が斜線文、第2・第3文様帯は複合斜線文である。いずれの文様も隣接する区画の文様と左右対称になるように配置される。複合斜線文は余白を設けず斜線を充填しており、複合鋸歯文に似た文様になる。施文は鋭利な工具でなされる。文様帯の4方に長方形透かし孔を配し、その部分は無文とする。2つの透かし孔の間には無文区画を配する。図の第3文様帯ではそこにも施文が部分的に残るが、これは文様を描いた後にナデ消されており、間違いを直したとみてよい。また、第2文様帯では無文区画の中央に分割線が入り、透かし孔区画と文様区画の間の分割線を3本としている。

透かし孔はヘラ切りで形成されるが、切削面を調整しており、孔面の下半にはヘラミガキが見られる。孔の内側は面取りがなされており、まず上側の稜を左方向に、続いて左右の稜を上側に向かって削り取っている。

間帯は上下両端と中央に突帯を設けるが、土器の中央になる第3間帯では突帯をもう1条加えて4条の突帯とする。突帯間には櫛状の工具を用いた平行沈線を充填しており、ナデが加えられて凹線気味になる箇所もある。第1間帯～第4間帯では上側突帯の上辺に1あるいは2条の浅い沈線を入れる。裾部と脚直立部の間には鋭角の突帯を配し、裾部、脚直立部ともに工具による平行沈線を施す。

煩雑になるため図示していないが、文様帯にはタテハケが見られる。タテハケは間帯の近くでは突



355

0 1:5 10cm

图110 円礫堆上面出土特殊器台(1) 1:5

帯表面を調整するヨコナデがかかって消えている。内面調整は、受け部がヘラミガキである。筒部上端はヘラケズリであるが、受け部に近い部分にはヘラミガキが及ぶ。また、ヘラケズリに先行する指頭圧痕が残る箇所がある。筒部中ほどからはナデ調整で、上部では爪の痕が見られる。第3間帯の裏側にはヨコハケが残る。裾部内面は横のヘラケズリである。

赤みの強い赤褐色を呈する。外面には黒斑が見られる。胎土には角閃石粒は見られず、2mm以下の石英・長石粒を含む。特殊器台A類を代表する資料である。丹塗りは認められない。

前述のように破片の大小の差が顕著である一方、似た大きさの破片がある程度まとまることや、筒部中ほどの欠落部を構成するとみられる接合不能破片は数cm大の小片であることなどから、土器は割り砕かれたと推定する。このことは、以下の356も同様と考える。

特殊器台356 (図111、図版39-4) 第3間帯とその上下、脚裾を欠くが、推定高さ117cmと355よりも大きい個体に復元できる。355の口縁部幅9.9cm、脚端から脚部突带上端までの高さ6.1cmに対し、この個体では同幅10.6cm、同高さ7.3cmなどと大きい。また、器壁もわずかに厚い。口縁部直径は42cm、脚端はそれよりも大きい55cmに復元できるが、ともにゆがみがあり、特に脚部は正確な復元径を求めることがむずかしく、図よりも小さくなる可能性がある。筒部はエンタシス状に中ほどが太くなり、第5文様帯から頸部にかけて強くくびれる。

第1間帯から第2間帯にかけては破片がまとまるが、裾部や筒部上半の破片がかなり欠落する。

口縁部は突帯で4段に区画され、上から櫛描波状文、櫛描平行沈線、櫛描波状文、櫛描平行沈線・櫛描波状文となる。口縁部上端面には沈線が配される。特殊器台頸部には文様がないことが多いが、この個体では櫛描波状文が入る。第4文様帯は幅が狭く、円形透かし孔を配する。上部に櫛描波状文を入れ、その下は分割型の文様帯とし、透かし孔の左側は菱形文、右側には斜線文を入れる。第3文様帯は、接合できない残破片にそれが含まれる可能性はあるが、この部分の破片を抽出することができない。第1文様帯と第2文様帯は長方形透かし孔を配する分割型文様帯で、複合斜線文を刻む。透かし孔の内側は面取りがなされる。裾部は上端に櫛状工具による平行沈線を入れ、その下に鋸歯文をめぐらせる。裾部下端にはおそらく平行沈線が施されると思われる。

脚と裾の屈曲部は斜め上に突出する突帯とし、脚直立部と一連の面が上にのびる。

間帯は他のA類と同様3本の突帯を配するが、第1間帯中央の突帯は他と異なって上面にナデを加えた幅広の突帯である。突帯の間は335などと同じく櫛状工具による平行沈線であるが、施文がおよばず狭い隙間となる箇所が部分的に生じている。第5間帯以外は間帯上側の突帯の上辺に沈線を入れる。なお、第4間帯は破片が小さく第4文様帯とは接合せず、第3間帯の可能性もあるが、内面にハケメが目立つことからこの位置と考えた。

外面調整は、頸部から受け部、脚直立部などはヨコナデで、筒部の文様帯にはタテハケが見られる。内面調整は口縁拡張部下部から受け部上端にかけてがヘラミガキ、それよりも下側はヨコハケの後ナデである。筒部はヨコハケののちナデで、第4文様帯内側以外ではヨコハケは部分的に残る程度である。筒部下半は丁寧なナデ、裾部はヘラケズリである。

胎土・色調は、混在して出土した355・356の破片を区分することが復元の当初やや困難であったといえるほど共通する。同じく丹は見られない。この個体は器面の保存状態がよくないが、焼成の若干の差によるのか、他の理由によるのか判断しがたい。

b 円礫堆出土土器

円礫堆出土遺物の主体となるのは土器と弧帯文石であるが、土器はいずれも小破片であり、基本的に破片の状態でも礫壇に入れられたと考えられる。上記のように円礫堆上面の特殊器台は、破片は不

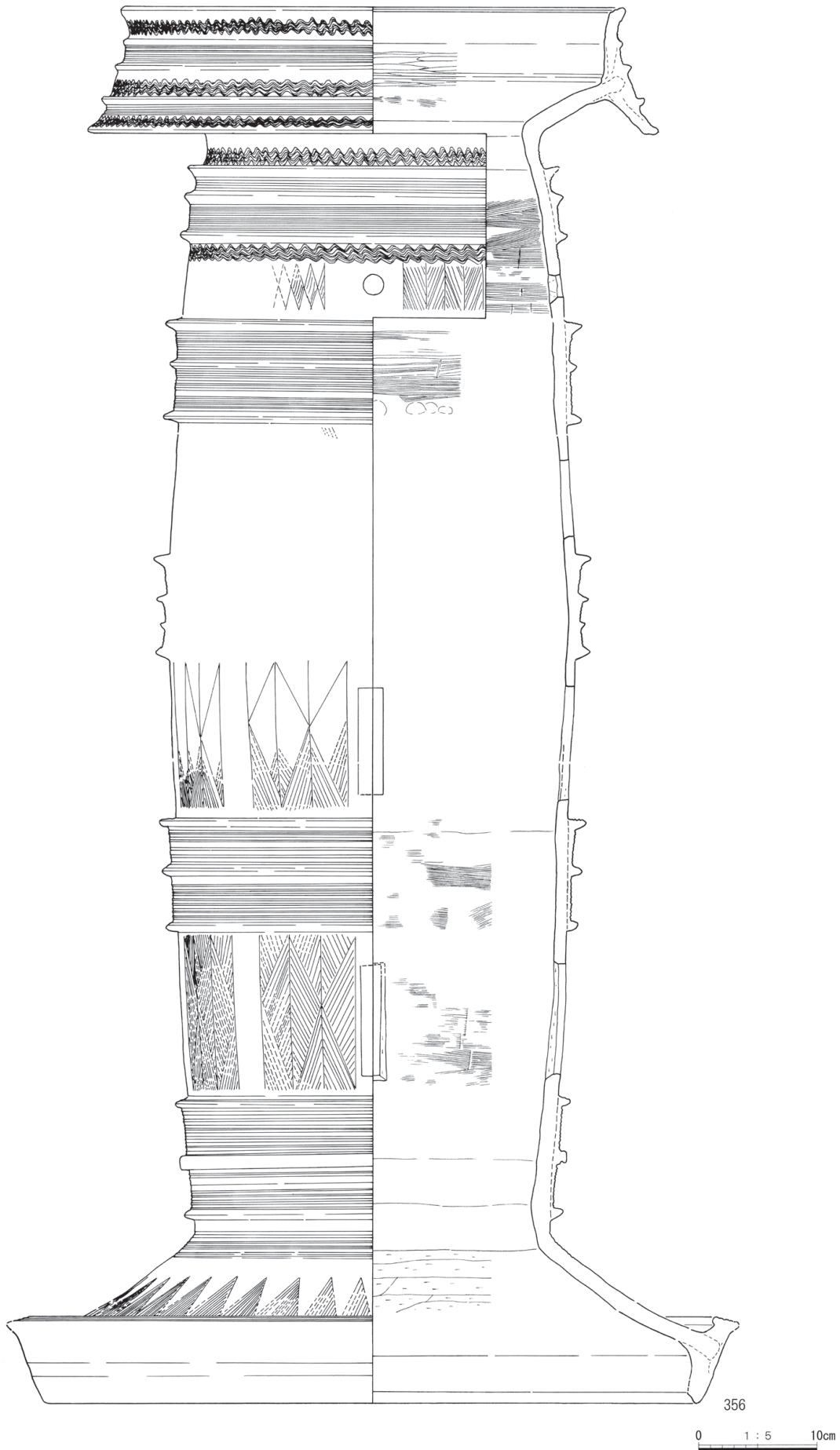


図111 円礫堆上面出土特殊器台(2) 1 : 5

足するものの355は口縁部から脚部まで接合が可能、356は図上での復元が可能である。それに対して円礫堆の中から出土した土器では個体それぞれの破片はさらに少なく、接合できるものはごくわずかである。

2次加熱土器（図113） 出土の土器には特異な状態を示すものが少量含まれる。典型は高杯371で、上面が明赤褐色であるのに対して脚下面は暗灰色、破面も暗灰色を呈する。破面には発泡が見られ、器壁は大きくふくらんでいる（図版37-4）。また、ほぼ完形の状態出土した366も脚下面および外面脚端付近、杯部外面下半は灰色を呈する。この時期の高杯等小形器種は内外面とも均質な焼成であり、器壁が厚い場合、破面中央は表面よりも暗い発色であったり灰色を呈するものも認められるが、破面全体が暗灰色等を示すものや上面と下面で色調が異なるものは通常見られない。366や371は二次的に火を受け、炭や灰の作用でこうした変色を生じたと判断できる。366や371と同様に破面全体が灰色を呈したり表面の一部あるいは全体が灰色や灰黒色となっているのは高杯383、脚付直口壺389であり、外面の一部が灰色を呈する装飾高杯416もこれに含めてよいように思われる。

この5点と同様に火を受けても、火から遠い位置などにあっても変色の程度が軽かったり目立たないものがあることは考えられ、2次加熱のグループは5個体よりも多くなる可能性があり、くすんだ淡褐色の脚付直口壺391・392はその候補となるが、それら以外は通常の色調を呈しており、大幅にこの数が増加することはないと思われる。なお、後に述べるが土製玉類にも同様の変色を示すものがある（図版35-2 土製勾玉左端439）。

円礫堆出土の土器は2次加熱の有無で二分できる。2次加熱の一群はいずれも高杯の類で、図113では高い比率を示すかたちになるが、これは、2次加熱グループが通常のグループと異なって、ある程度の接合が可能であったり、破片が大きいという特徴をもつためである。366以外の2次加熱土器は、中心主体上で破砕されたと考えられる。

壺・甕（図112） 以降は器種別に記載する。口縁部357は先端が丸くこの時期の一般的な形状ではない。358は短い頸部をもち、肩が張る器形である。破片の量は比較的多い。内面調整はユビナデ、ユビオサエで、壺で通常見られるヘラケズリがこの部位では用いられていない。外面調整は不明瞭であるがナデとみられる。胴部の形状、張りが均等ではないため、図上復元の形状は歪みを生じる。下端の一部に黒斑がある。底部359は胎土・色調から壺358の底部になる可能性が強い。内面調整は剥離のため明瞭ではないが一部の砂粒が動いており、内面下部はヘラケズリであったことになる。底部穿孔の可能性が高いが、その箇所は遺存が少なく断定しがたい。破片全体に黒斑が広がる。

小形の壺では口縁部360と胴部362があり、362の外面調整はヘラミガキである。なお、362はここに含めたが、他とは異なり円礫堆の南外側に離れた位置からの出土であり、円礫堆からの遊離か円礫堆周辺として扱うべきか判断しにくい。

363～365は同一個体で、胴部の復元径が45cm程度となる大形の壺で、短い頸部になると思われる。出土土器のなかでは破片が比較的多いが、大きい土器であるため復元には至らない。また、焼成の関係か保存状態もあまりよくない。363が頸部下端で、平行沈線と列点文がある。肩部364にはハケメが見られる。365が胴部下端付近である。胎土A。

甕361は肥厚せず狭い口縁の端面に沈線を入れる。Bに似た胎土で、丹塗りである。

高杯・脚付直口壺（図113） 出土土器のなかで両者の出土量は最も多いが、図示できるものは少ない。器壁が薄く破損しやすい器種であり、多くが脚柱部付近の破片となっており、全体の形状を知ることができるのは366のみである。また、高杯の口縁部片で図示できるのは383のみで脚付直口壺もわずかししか示せないが、基本的に小破片となっていて、ある程度の大きさであったり直径を復元できるもの

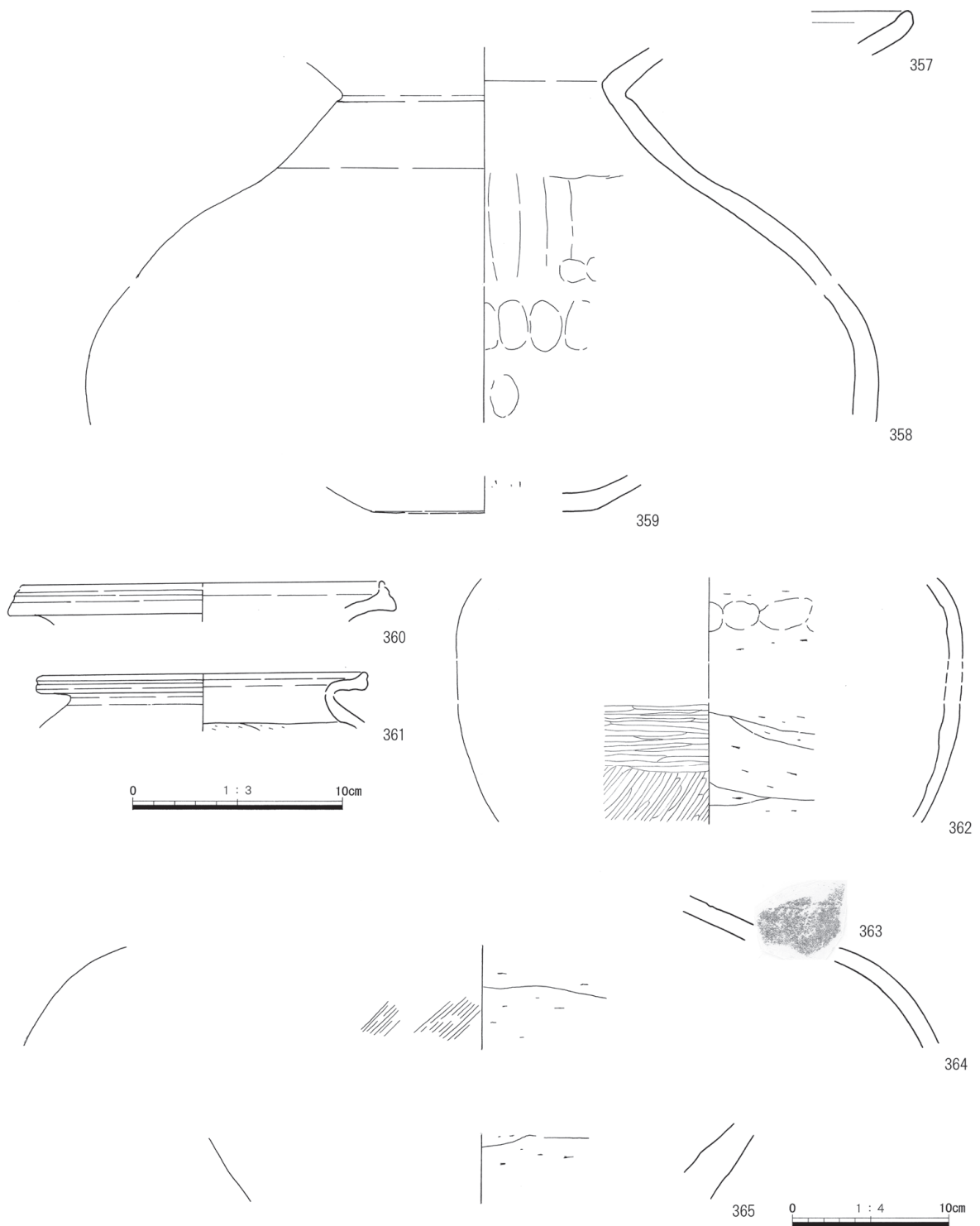


図112 円礫堆出土土器(1) 1 : 3、1 : 4

が少ない。

高杯は小形の製品が主体を占めており、それと同形状ながら杯部がやや大きいもの(386~388)、長い脚部をもつ大形の製品(403、405)が少量含まれる。366以下は短い脚柱部をもち、脚部には円孔を4方向に配する。2次被熱グループの366では杯部に焼成後の穿孔が見られ、残存が少ないが383も同様の位置に穿孔がなされるようである。366はほぼ完形で検出したが杯部を中心に劣化が顕著である。368~370は脚柱部に水平方向の細い沈線を加える。370は杯部が水平気味に開いており、大き

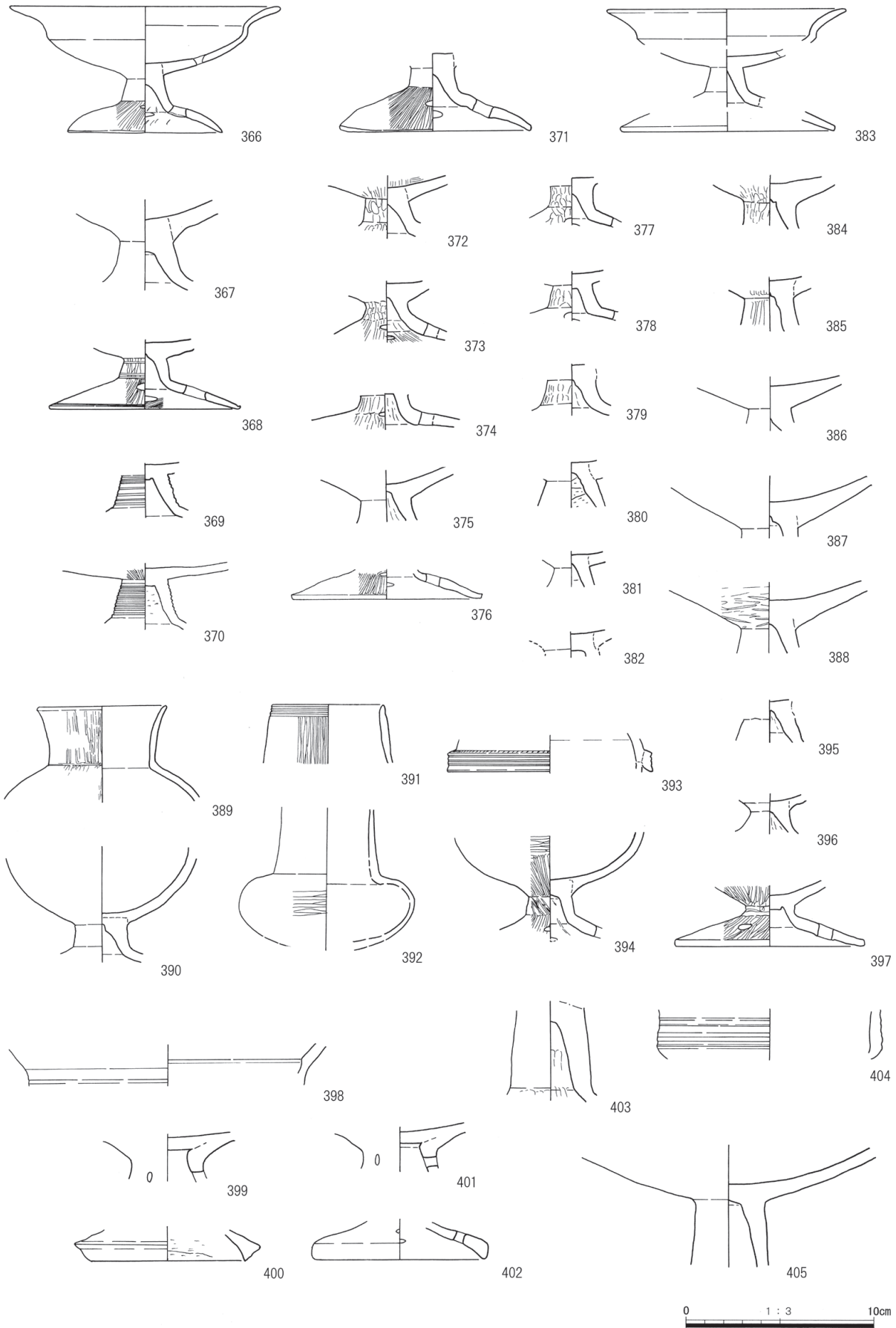


図113 円礫堆出土土器(2) 1 : 3

な杯部になるようである。

これらの外面調整は縦方向のヘラミガキである。脚柱部のヘラミガキは縦に長く通るものと短く加えるものがある。脚部の内面調整はナデと斜めのハケメがある。脚柱部の断面形状は多様で、内面もナデを加えるもののほか、粘土を絞った縦方向のしわが残るものなど変化が大きい。胎土も砂粒をほとんど含まないものと少量含むものがある。個体差がかなり大きく製作にあたった人員なり集団はかなり多いことが予想される。ただし、377と378のように類似するものもある。

やや大きい杯部をもつ388の杯部外面は部分的に斜めハケののち横のヘラミガキである。

脚付直口壺（389～397）の脚柱部の形態は高杯と同一であるため、395・396のように脚柱部上側の色調が他の部分と異なる場合をのぞいて脚柱部を分離することはほぼ不可能であり、高杯とした中にこれが含まれるとみてよい。壺部は389では頸部が短く392は頸部が長い、いずれも胴の張り出しは強く胴部径と頸部径の差が大きい。外面調整は頸部が縦のヘラミガキ、胴部中ほどは横のヘラミガキを基本とする。393は他と異なり胴部に幅広の突帯を配し突帯上に平行沈線、上辺に細かい列点文を入れる。装飾をもつ脚付直口壺である。

398～402は高杯Bで、円盤充填の杯部と断面三角形の脚端をもつが、かなり小形である。398は杯部で、399以下よりも大きい個体である。

404は外面に浅い沈線を施しており、椀形の杯部をもつ特異な形態の高杯と考える。403・405は大形の高杯で、長い脚柱部をもつ。

以上に示した高杯・脚付直口壺は脚柱部の破片が主体を占め、前述の2次加熱グループをのぞけば破片が接合するものは基本的にない。脚柱部から算出した出土個体数は93個体で、2次加熱グループを含んでの数である。高杯と脚付直口壺の口縁部破片の比率に大きな偏りは見られず、両者は半々であったと推定できる。それら以外に、図示しなかったものを含めて高杯Bが4個体、中・大形の高杯が4個体である。

装飾高杯（図114・115）大きく広がる杯部の中ほどに段をもち、脚柱部はエンタシス状、脚裾が2段になる。木製高杯を模した器種であるが出土資料はその新しい段階のものであり、脚柱部は短い円筒形になるものが含まれる。杯部の形態は差が大きい。

407・408はともに大きく拡張した口縁部で、407では中ほどに2本の浅い沈線を配し、上側には櫛状工具による列点文、下には鋸歯文を配する。408も同様の形状・施文であるが中ほどを低い突帯とし鋸歯文の中を充填せず輪郭のみを3本線で描く。406はここに含めたが、装飾高杯ではなく大形で皿状の杯部をもつ高杯である。口縁部の内外に鋸歯文をめぐらせる。杯部屈曲部分の形状は多様で、突帯をめぐらせる409・413、断面がやや丸みをもつ突帯を屈曲部の内外に配する412、段とする414・415・417がある。屈曲部の上段側には多くが菱形文を、417では鋸歯文を配する。脚柱部410は短いエンタシス状で円孔を2段に配し下に突帯を置く。一方、418は筒状で、下端の突帯は断面三角形で太く、突帯の上辺に列点文、下に鋸歯文を配する。脚部411・416はよく似た形状で、中ほどを突帯で区画し、突帯の下側から脚端にかけて鋸歯文と櫛状工具による列点文を配する。

421は通常装飾高杯とは異なる形状である。装飾高杯の脚裾部は411のように2段になるが、421の形状からは3段に屈曲して中段が縦の面をなす脚部が考えられる。また、著しく大形である。屈曲部の突帯の上側には平行沈線と菱形文、下側には平行沈線を配する。杯部で数えた装飾高杯の個体数は11である。

器台（図115）419は器台あるいは壺の口縁部で櫛状工具による列点文と鋸歯文を配する。420は小さな透かし孔があり平行沈線と列点文を刻む。422はやや小さい器台で、ある程度破片があり脚端まで

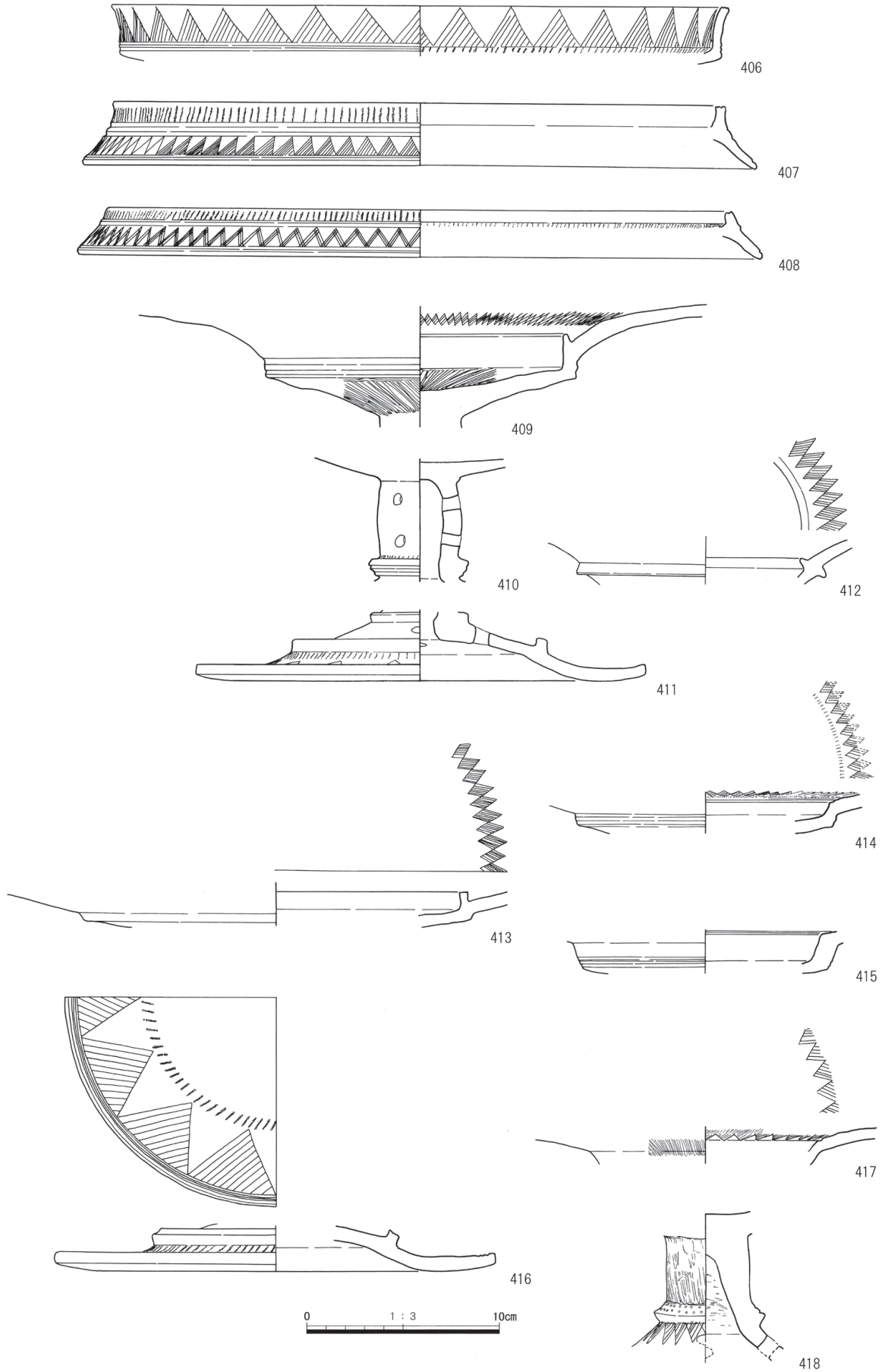


図114 円礫堆出土土器(3) 1:3

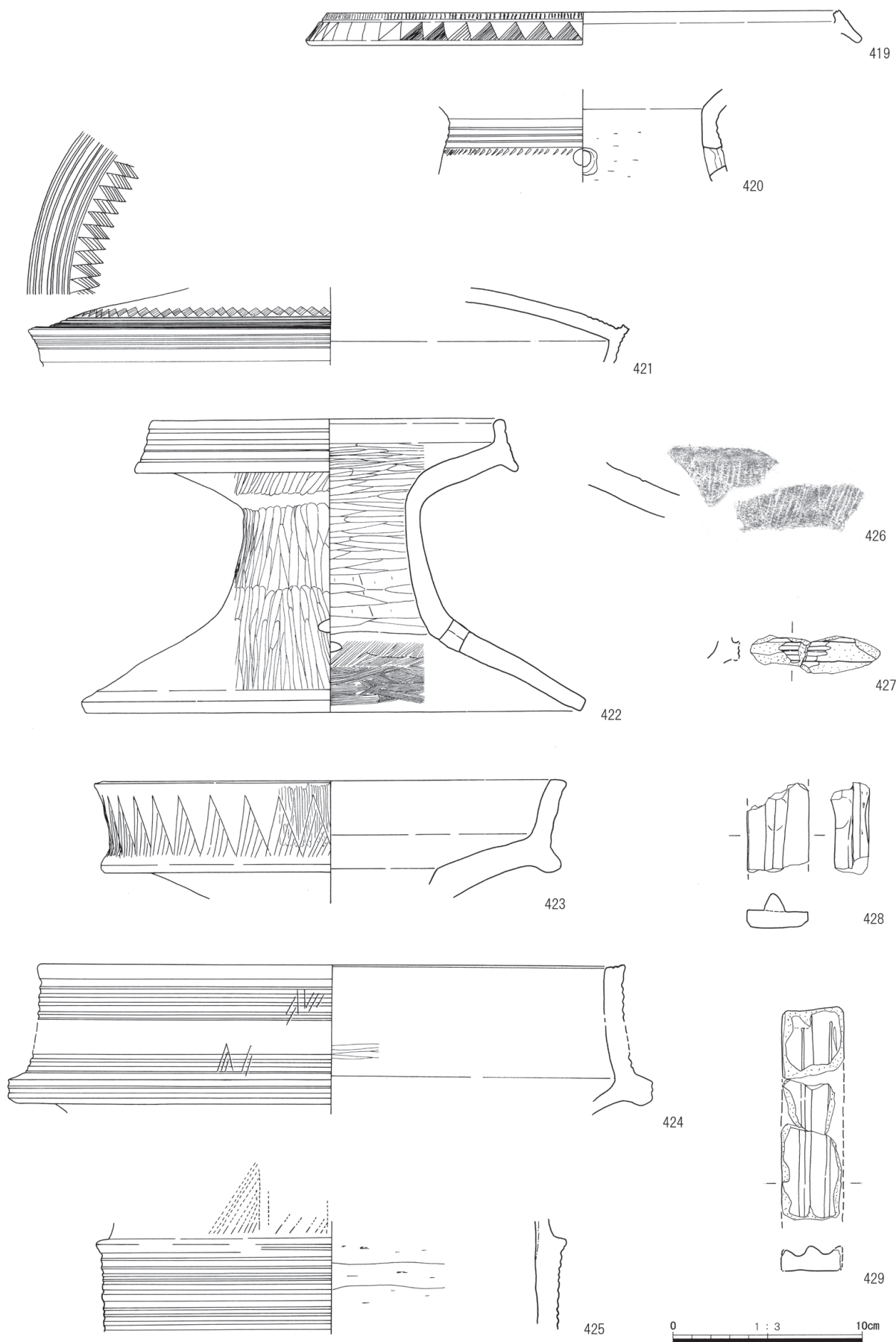


图115 円礫堆出土土器(4) 1 : 3

接合が可能であった（図版37-5）。口縁部径18.2cm、器高15.5cmである。口縁部は壺の口縁部に類似し細い沈線を配する。外面調整は幅広のヘラミガキである。内面調整は受け部から筒部上半がヘラミガキで、筒部下半もヘラケズリの上に及ぶ。裾部はハケメである。423は器台あるいは小形特殊器台の口縁部である。全体に器壁が厚い。やや外に開く口縁拡張部には鋸歯文を大きく刻む。口縁拡張部外面の調整はヘラミガキである。黄褐色を呈し、丹塗りがなされる。

特殊壺 図示していないが、立石2に近接して所在する中世の土坑8から出土した肩部破片333と同一個体とみられる同程度の大きさの破片1点が、円礫堆上層から出土している。円礫壇の遺物の周辺への流出を示すものといえる。

特殊器台（図115） 円礫堆上面から出土した2個体以外では、特殊器台B類の口縁部424がある。いずれも円礫堆上面の北西半からの出土で特殊器台355・356のあり方と同様であるが、破片は小さく少ない。筒部425は円礫堆から北側に離れた立石2近くの表土からの採集であるが、文様帯下端での復元径23cmと細身で、口縁部424も直径が小さいとみられることから同一個体と判断した。上記の特殊壺片と同様、円礫堆からの流出を示すと考えられる。

平行沈線を施す口縁部424には縦方向の斜線文帯と鋸歯文が部分的に残る。受け部は器壁が薄い。外面および内面には丹塗りが見られ、口縁受け部と上の口縁拡張部との接合面にも丹が認められる。425の間帯は他のB類と同様の形状をとり、上端に小さな突帯を配する。文様帯はほとんど残存しておらず、斜線文あるいは複合斜線文の下端が残る。筒部上端の内側では接合部で上側が剥離した状況が見られる。

不明器種（図115、図版36-3） 426はわずかに曲面をもち特殊器台裾部の可能性も考えられるが、特殊器台では見られない下向きの鋸歯文が連続することや内面調整がヨコナデである点が異なる。器壁が厚い大形の製品である。胎土A。小片427の内面調整はヨコナデで、壺等ではない。屈曲部に突帯を配しその上面に沈線を入れている。家形土器の可能性もある。胎土は大形の高杯に似る。

428は板状の破片で、家形土器の一部と思われる。縦方向に貼り付けられた突帯の上端は外側に反っていることから、上に出る軒に接続するのかもしれない。側面の内側は面取りがなされており、窓というべきかもしれないが、方形の透かし孔に挟まれた部位である。孔面はヘラケズリ後にナデがかかる。内面調整はナデである。胎土A。

429は細長い長方形で、貼り付けられたものが剥離した可能性もあるが、これ自体で製品になると思われる。家形土器ではないようである。平行する3本の稜を作り出し、谷部の底は細い棒状の工具を押し引いている。

c 人形土製品（図116・117、図版36）

人形土製品は、胴部のほぼ全体が残る1個体のほか10片が出土しており、ある程度の個体数があったことがわかる。

人形土製品430は高さ9.5cm、肩幅10.0cm、胴下部幅5.0cmである。首から上と、胴よりも下の部分を欠く。上部は肩が大きく張る一方、前後が薄くなって人の形状をよく示すが、下端では円筒形になる。左手は一部を欠くが、肘を曲げて細かく表現された指で胸の中央にある勾玉を押さえている。右手は腹に当てている。右手の剥離からわかるように、これら両手は粘土の貼り付けで形成されている。また、右胸には小さい膨らみが表現されている。腰にあたる箇所には断面が三角形の突帯がめぐっており、それよりも下は全体が開いていく。下に裾が表現された可能性もあるが、装飾高杯の脚柱部下端に似る。

肩から胸元にかけての3条の沈線と刺突で表現された胸元の2つの勾玉で首飾りを表示する。器表

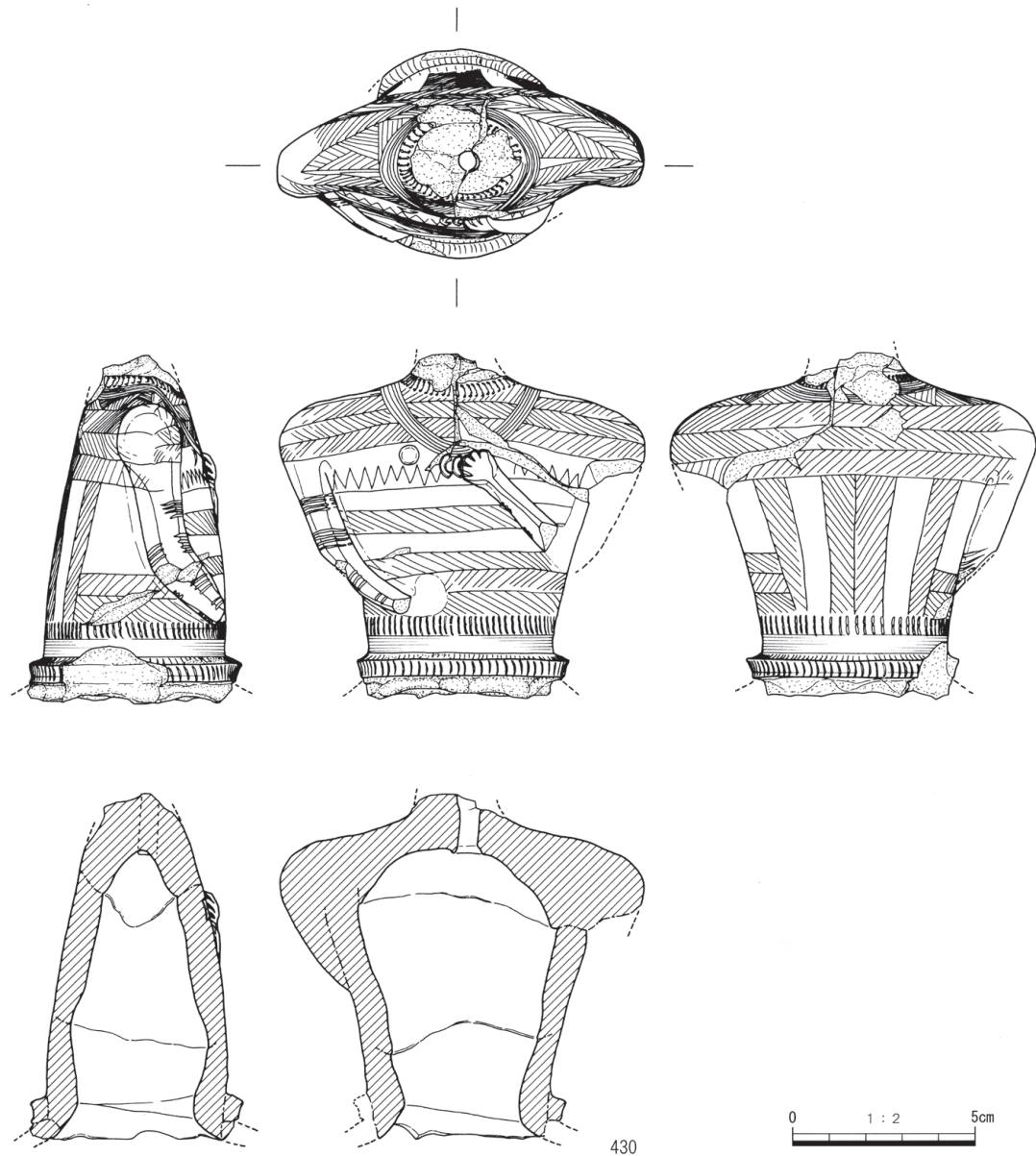


図116 人形土製品(1) 1 : 2

の全面に施文がなされており、首元には刺突文、肩の上面は複合斜線文、その下は水平に分割して方向を違えた3段の斜線文が入る。それよりも下、胸から腹にかけての前・側面は同様に水平に分割して単線の鋸歯文、無文、斜線文、無文、方向を違えた3段の斜線文の順に文様を配する。一方、背面は縦の分割で、中央で対称の形をとり無文部をはさんで斜線文を入れる。両脇部分は無文である。胴部の下端と突帯の上辺・前面には楯状工具による刺突文がめぐる。右腕には4条1単位の沈線が間隔をおいて配されており、左腕にも同様の文様の下端が残る。

腹部には外面調整のタテハケが残り、他は丁寧なナデである。中空の内面には粘土の接合痕が見られる。黄褐色を呈し、微砂を含む胎土である。

431以下はいずれも430よりも器壁が薄い。431~435・438は430と同様の微砂を含む胎土である。色調は白色を帯びた褐色~淡黄褐色である。436・437は淡赤褐色~黄褐色で、胎土には砂粒をほとんど含まない。

431は、430に似た製品である。胸から肩にかけての部位で、刺突による勾玉が3つあり、その上側

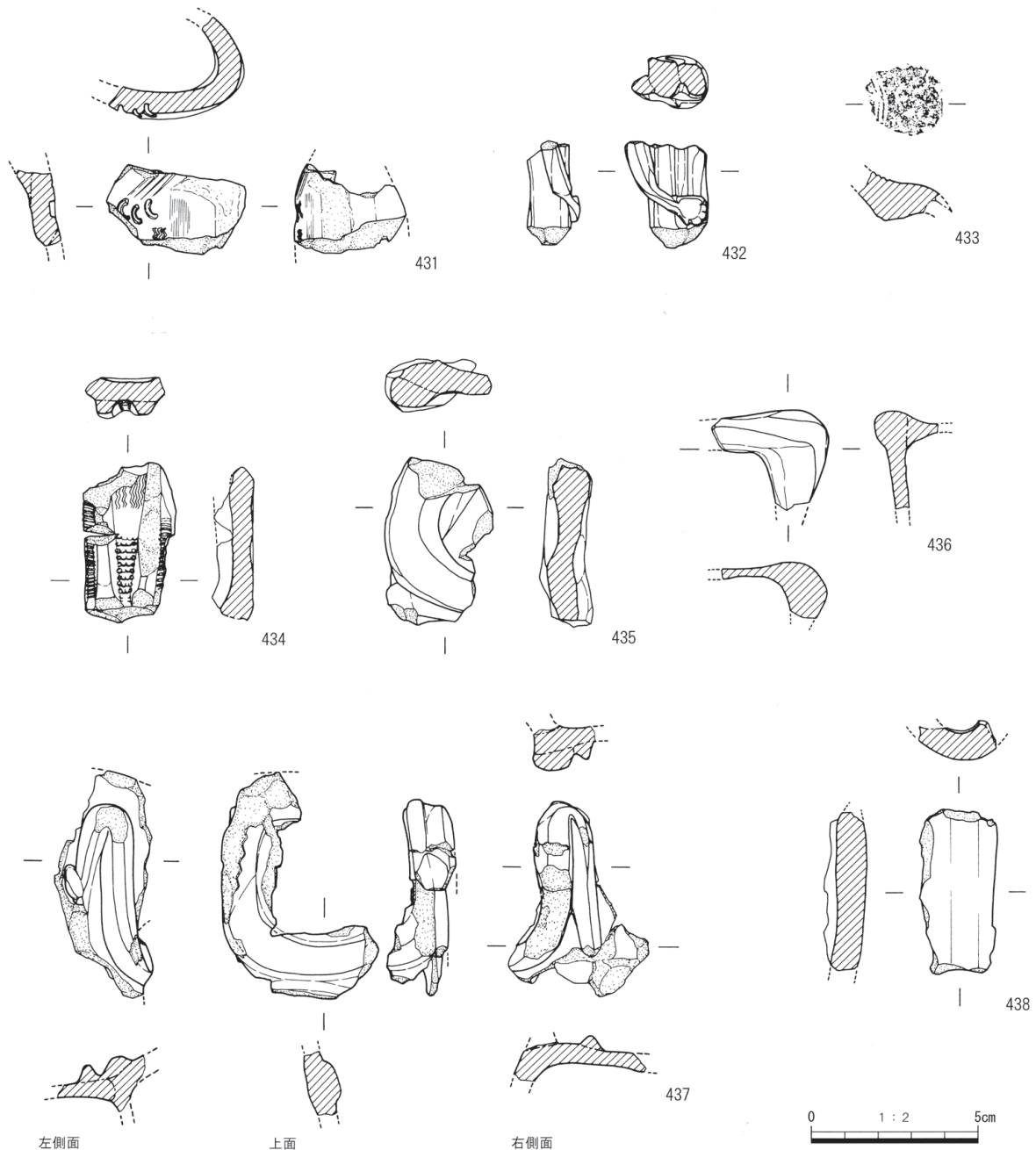


図117 人形土製品(2) 1:2

には斜線4本がある。勾玉の下側にはM字に似た形状が3つ連なる刺突文がある。側面は貼り付けの腕が剥離している可能性がある。

432は2つの棒状のものを右手で抱える表現で、全体の形状は想定がむずかしい。図の下端で別の部材と剥離しているようである。

433は首元から肩にかけての破片で、破片端には3条の沈線があり、首飾りの表現とみられる。

434は器面に430の腕に似た2本の棒状の突帯を一方の端がやや開くように貼り付け、その間と両側に細かい刺突文を入れる。突帯は下に向かって太さを増し、下端近くで外に反り気味のカーブをもつ。下端は接合面で剥離している。全体像を想定しにくい。

435は帯状の粘土を交差させる。腕で抱える形であるのかもしれない。

436は肩の破片か。器壁は著しく薄い。

438は人形土製品とすれば胴部かと思われる破片である。

437は2片からなる。箱形に近い形状とみられ、前端は図上端で収まるとみられるのに対し、後方(図下側)はこの形状が続く。両側の面に腰を下ろして曲げた足が貼り付けによって表現される。上面の後方側には低い突帯が環状気味に配される。この突帯の内側は上方に立ち上がるようで、胴部が付くかと思われる。

人形土製品は430以外はいずれも小片であり、本来の形状が不明のため個体数を判断することがむずかしい。破片がすべて別個体とすれば9個体となるが、肩部で算定すれば430・431・433・436で4個体となる。器壁の厚さや細部がかなり異なるようで、大きさや表現は多様であったと思われるが、衣類の表現がないことや、首飾りを表示する点は共通する。

d 土製玉類(図118、図版35-2)

土製勾玉8ないし9個体、同管玉10個体が出土しており、図示可能な勾玉7点、管玉9点を示した。勾玉のすべてと管玉のうち4個体が破片あるいは欠損品となっている。これらのうち管玉446は木柱3柱痕上部からの出土、他は円礫堆下部からの出土である。

勾玉439と443はそれぞれ接合復元が可能で、440もある程度の接合ができたが、他の個体は接合する破片がない。大形の439~441と、小形の442~445に区分できる。大形品のうち439は長さ6.7cm、幅4.5cm、厚さ2.8cmで、全体の曲がり強く、頭部は大きく尾部は細長い。頭部には孔から斜め前にむかって3本の沈線を入れて丁字頭としており、沈線の間には方向を違えて斜線文を入れている。440もそれと同様の施文である。小形品のうち、全形がわかる443が長さ3.9cm、幅2.8cm、442で厚さ1.7cmである。439をはじめ440・443は全体の曲がり大きい、445は緩い曲がりになるようである。頭部は丸いものが多いが、445は円筒形気味で、西くびれ調査区出土の239がこれに近い。439・442・443は2方向からの穿孔で、440では孔面に横方向の製作痕跡が見られ、粘土がある程度乾いた段階に棒状の工具を回転させながら貫通させたと推定できる。442の腹部にはヘラミガキが見られる。

管玉のうち5点は完形であるが、他は欠損の状態である。長さ・太さで3つに区分することができる。大形は446で、長さ8.2cm、太さ1.9cm、中形は447~449の3点で、447が長さ4.5cm、太さ2.0cmである。他が小形品となり、450で長さ2.8cm、太さ1.3cmである。長いものほど太くなるが、太さの差は比較的小さい。孔径は4.2~8.1mmで、玉の太さに応じて大きくなる。446では穿孔は2方向からなされている。孔内には横あるいは縦方向の細かい製作痕跡があり勾玉と同様の製作手法を示す。保存状態のよいものでは円筒部端と孔口部の稜線が明瞭であり、穿孔後に端面を整えたと思われる。外面調整はいずれも軸線方向のヘラミガキである。

多くが欠損しているが、勾玉の欠損が顕著であり、439~443は縦方向に破断している。勾玉443や管玉448には細かい亀裂が多数見られるが、器表の状態がよくないものは勾玉に多い。炭素を吸着して薄い黒色を呈する箇所が見られるものが多いが、勾玉443尾部の破片と中ほど以上の破片では薄い黒斑様の範囲が異なっており、製作時の炭素の吸着ではなく破片となってからそれが生じたことがわかる。また、勾玉439の背面破片は表面が部分的にしか残らないが、背面と本体側で破片の色調が異なる。これらのことから、土製玉類は勾玉を中心に割り砕かれた後に弧帯文石などととも焼かれたと判断できる。

勾玉・管玉の小形品は実際の玉の倍程度の大きさであるが、大形品は長さ以下の法量が数倍かそれ以上の大きさとなっている。通常の玉類の構成にくらべて勾玉の比率が高く、破碎の程度、火の受け方ともに勾玉が管玉よりも顕著で、勾玉が主となる存在であったとみられる。

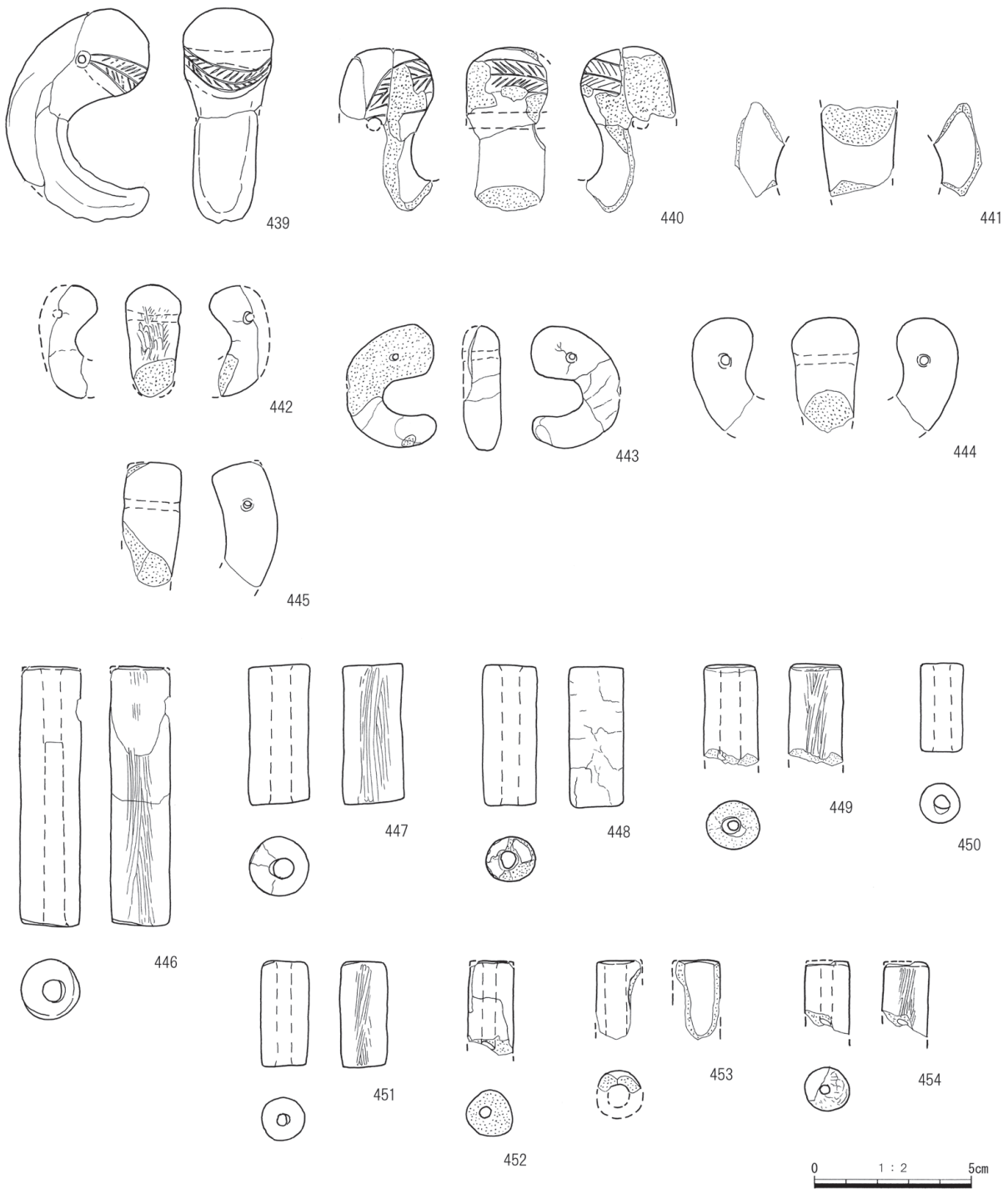


図118 土製玉類 1 : 2

e 鉄器 (図119)

鉄器は38点出土した(1~38)。このうち38は木柱3柱痕埋土上部からの出土である。円礫間での検出の際に端部を毀損したものが多く、本来、欠損した状態である。ただし、小形の鉄片を折り割ることはむずかしいと考えられ、錆が進んで劣化し円礫の重さで折損した可能性を考えておく。

全体の形状がわかるものがないが、ほぼすべてが細長く先端が薄くなって刃になる小形の器種とみられる。なお、14と19は側面の一方が刃となるようである。最も幅広の1が幅14mm、細いものは5が6mmである。厚さは1と19がやや厚く、1で4mm、他は2mm前後である。1~5のように幅が先端ま

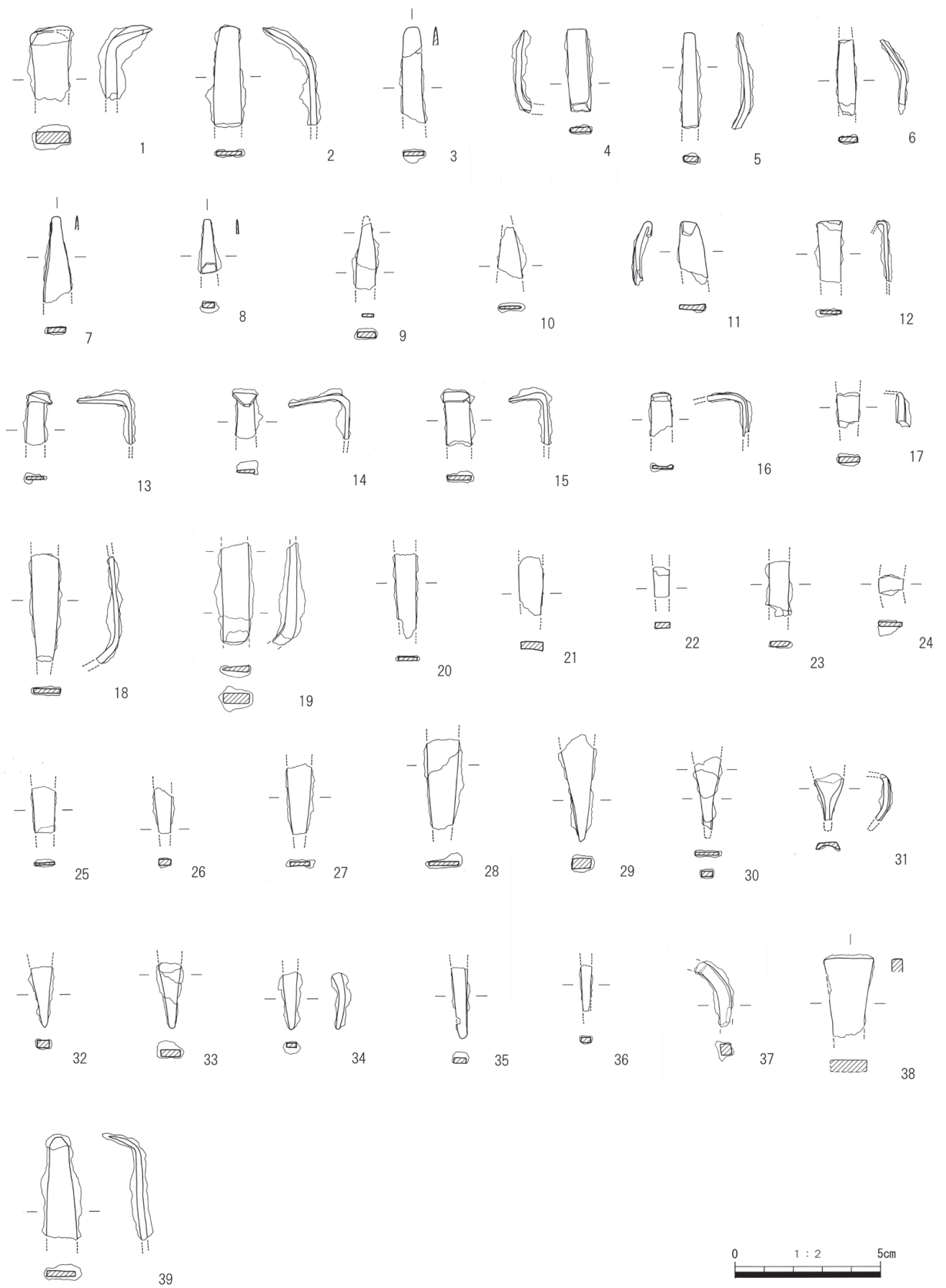


図119 鉄器 1 : 2

であり変わらないものと、7～11のように幅を減じて狭い先端となるものがあり、前者は3のように先端がやや丸みをもつものと、4のように直線をなすものがある。刃幅は1が一部欠損しているため9mm前後、15：7mm、4：6.5mm、2：6mm、3・5が4mm、7：3mm、8：2.5mmである。木製品の製作も考慮する必要があるが、これらのうち7mmと3mmは出土した弧帯文石や楯築神社弧帯文石に見られる加工痕の刃幅と同じであり、少なくともそれらについては弧帯文石加工具の可能性を考慮することができる。

湾曲しているものが多く、13～16は形状が似るが、他は屈曲の部位や角度が異なる。先端が完全に曲がる11や、それに近い角度になるとみられる12は壊された状態と判断でき、他の曲がった個体も折り曲げられた状態の可能性が強い。

18・20～28は一方の側が狭くなるが、刃・基部のいずれに向くのか判断しがたく任意に配している。細長く尖る29～36は基部とみられる。38は他と異なり厚さ4mmと厚く、平らな上端が基部になるかと思われる。37は出土層位からここに示したが、断面が方形で長く、混入した中世の釘の可能性が強い。

先端付近がおおむね残存するものを含めて算定した場合は13点、29～36等に38を加えた基部で13点となり、流出や遺存状態による消失を考慮すれば若干の増はありうるが、この数が個体数の目安になる。

大柱遺構の柱痕埋土から出土した39は2に類似するが、刃が丸みをもつ点が異なる。

f 弧帯文石 (図120～123、図版41・42・44-1)

実測図は被葬者頭側（南東側）になる小口を上、足側（北西側）を下に向けている。側面は図の左右で呼ぶこととする。薄いグレーは表面が失われた部分を示している。文様を構成する要素のうち、平行して弧をなす沈線の単位を帯、それらのカーブや屈曲の中心となる円形部分を渦心円と呼ぶ。渦心円は中央に稜、そこから両側に下がる斜面をもち、周縁から斜面に向かっては円筒形に下がる内壁が形成される。

1) 全体の形状と破片

形状ほか 丸みをもった直方体で、平面形はほぼ平行四辺形である。接合を終えた法量は長さ56.9cm、幅32.4cm、中央の横断位置での幅30.4cmである。側面図に示すように足側が高くなっており、17.7cmである。上面の状態から明らかなように完全に復元はできず、本来の形状には厚さ、長さとも10mm未満の値が加わることになる。重量は48.2kgであるが、これも若干の増が見込まれる。

平面形は頭側左隅が突出気味で、足側右隅も鋭角気味となり、残る2つの隅は丸みをもった鈍角となる。両小口はほぼ直線をなし、一方、両側面は緩い弧をなして中央で幅が若干狭くなる。

上面の中央には石の節理で生じた浅い谷状の凹みが横断方向にのび、そこよりも頭側はわずかに高くなって高さ16cmの面となる。足側はその部分から斜めに高くなり17.7cmと一段高い面をなす。両側面は、ほぼ垂直となる部分もあるが中ほどがややふくらんだ曲面となる。一方、2つの小口面は外傾する平面である。下面はおおむね平坦といえる。これらは原石の形状を反映したものとみられる。

石材は紅柱石質蠟石である（逸見1992、光野1992）。この資料の堅さを調べることはできないが、工程を考えるうえで必要なため、同種石材を彫刻刀で削ってみた。石によって堅さに差があり、固まった石膏と同程度の堅さのものから、力を入れれば少しずつ削ることができる程度のものである。見かけのうえでは資料の堅さは後者に近いようにも思われるが、それであったとしても乾燥した檜などを削るよりは容易である。堅いため、工具は刃幅が広いものは不向きである。切削面は整った面になり丁寧に削れば平面を形成できる。

部分により薄い灰色や褐色を帯びるくすんだ白色を呈するが、元は明るくきれいな白色であったと思われる。

本体石材 図122断面のうち厚さ12cm前後の下側部分が先の出土状態記載において弧帯文石と記述した本体部分である。位置関係を保っていたが中央で2つに割れ、破断部の上側に狭い隙間を生じていた。さらに2つに割れたうちの足側になる石材には破断面に直交する亀裂が入っており、側面の一部は剥離して下側に落ちた状態であった。また、頭側小口の半ばを含む長さ20cmの大形部材は本体部分から縦断方向外側に70cm離れていた。本体部分を接合し、さらに格段に大きいこれらの破片を接合した重量は37.2kgである。総重量との差は11.0kgとなるが、その重量、全体の23%が残りの破片の量である。なお、石材分析の資料は、本体部分の接合前に中心部から採取した。

破片の状態 円礫堆に広く散在して出土した破片は、足側方向から出土したものは本体の足側というように、基本的に近い側に接合するが、足側から出土した破片が本体の頭側小口や上面右側縁など、一部は遠い箇所に接合した。接合した破片は139点である。

出土した弧帯文石の最大の特徴は、上部および側面の表層が破片となっていることである。断面図に示すように現状の上面から浅い部分で3cm、深い箇所まで8cmまでが破片となっている。破片の大きさは最大で長さ21cm、小さいものは粉末の状態である。基本的に内部の破片は塊状で大きく、表面側は小さくて板状あるいは鱗状である。破片化が顕著なのは両小口側であるが、特に足側は5層程度に割れており、それらのうち上部破片のまとまりや大形破片は玉葱状をなす。

両小口上部と両側面上端の破片は劣化が顕著で、白色が強く軟質で表面は粉状になり、破片端部は丸みのあるものとなっている。一方、両小口内部の破片は固く稜が明瞭である。

上面中央の破片は小口内部の破片の状態に近い。上面中央は浅い谷状部分で割れて2つの大きな破片となっている。頭側破片の長さ19cm、足側が長さ15cmで、稜は明瞭である。頭側の破片では表面がかなり遺存するのに対し、足側の破片は表面がほぼ失われた状態にある。表面の遺存状態は異なるが、ともに上面には淡黒色～灰色を帯びた部分が広がっている。同様の色調は左側面表面にも広く認められ、頭側小口面下部表面にも黒色を帯びる箇所がある。また、内部の破片でも薄い黒色を帯びた面をもつものがある。これらは炭が表面に入り込んだ状態とみてよい。

線刻がある破片やそれにごく近い位置の破片、多くは小片であるが、未接合のものがある程度残る。剥離した面は角砂糖を思わせる劣化状態で、本体側もそれと同様であるため、接合位置を確定することが困難なためである。線刻のある未接合破片は上面や右側面の欠落範囲にくらべて圧倒的に少ない。本体石材の周囲下側、特に両側面下側には白色の細片、小粒が密集した状態であったが、表面の破片の多くはそれらに含まれると考えられる。なお、底面には劣化はない。

破片の状態は打撃によって生じたものとは考えられず、石全体が熱を受けて割れた状態とみられ、火焚きの結果と判断する。これは本体石材周辺の小破片に混じって炭の小片が出土したことからも裏付けられる。最も熱を受けた上面周縁を中心に剥離と劣化が進み、劣化が弱かった部分では炭が入り込んだ面が残ったとみることができる。

微少な破片が本体石材の周囲に散在する状況から、陥没による垂直方向の移動はあったが、平面としては検出位置で焼かれたとみてよい。出土状態においても述べたが、側面・小口面の破片は落下するとしても、小口側内部の破片や上面中央の破片は、焼かれた時点では本体の上に乗ったままであったと思われる。木槨が朽ちたことによる沈下を考慮しても、すべての破片がはずれている状況から、意図的に破片を取り除き石の破壊を完全なものにしたと考える。

加熱実験 この推定の確認のため、同種石材を用いて実験を行った。6時間にわたって木材を焼き、石に炎をあてたところ、石に縦横の亀裂が入り表面の一部が剥離した。ただし、層状に剥離するまでには至らなかった。弧帯文石の周囲に遺存した炭は多くなく小片が主体であったことから完全に燃料

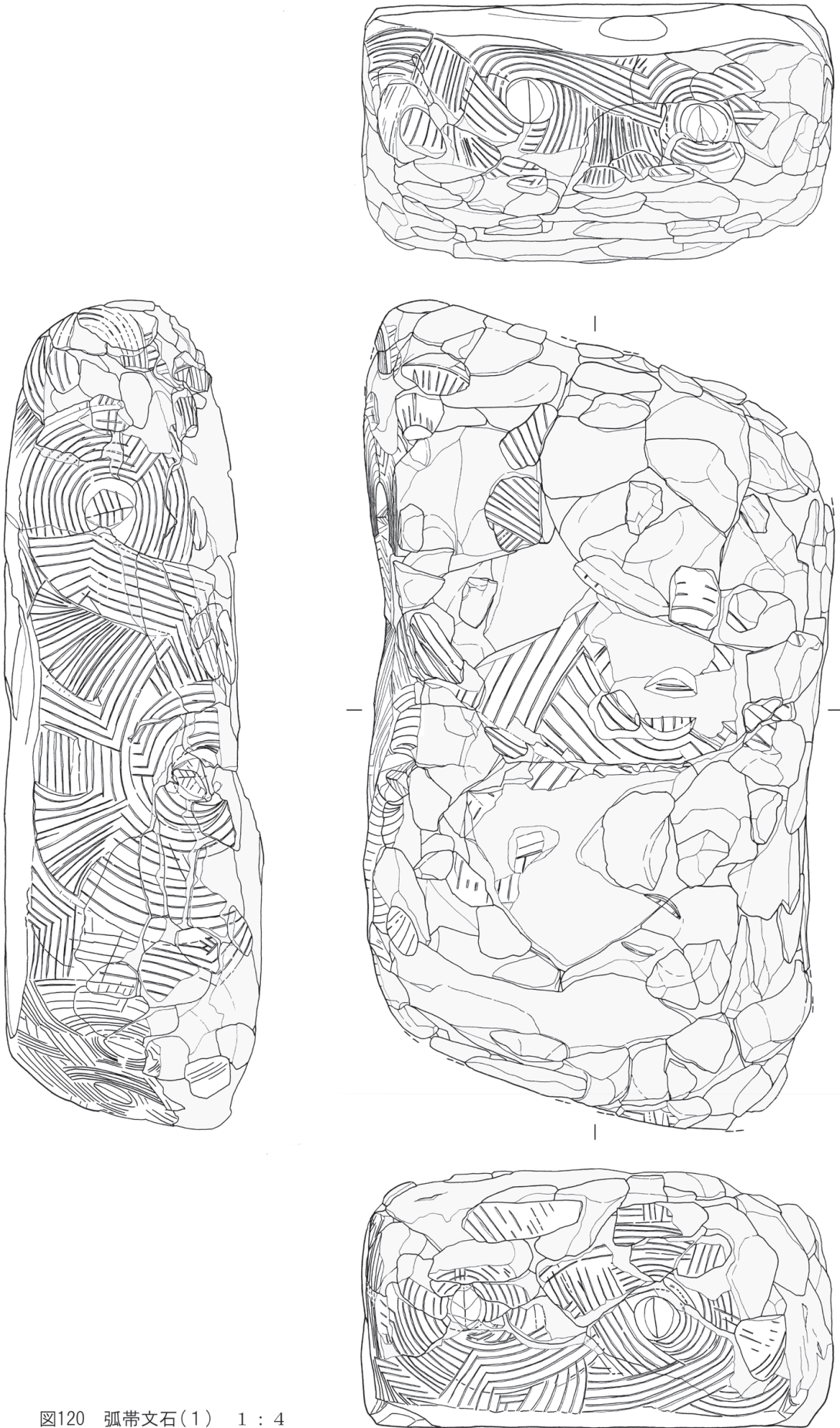


图120 弧帯文石(1) 1 : 4

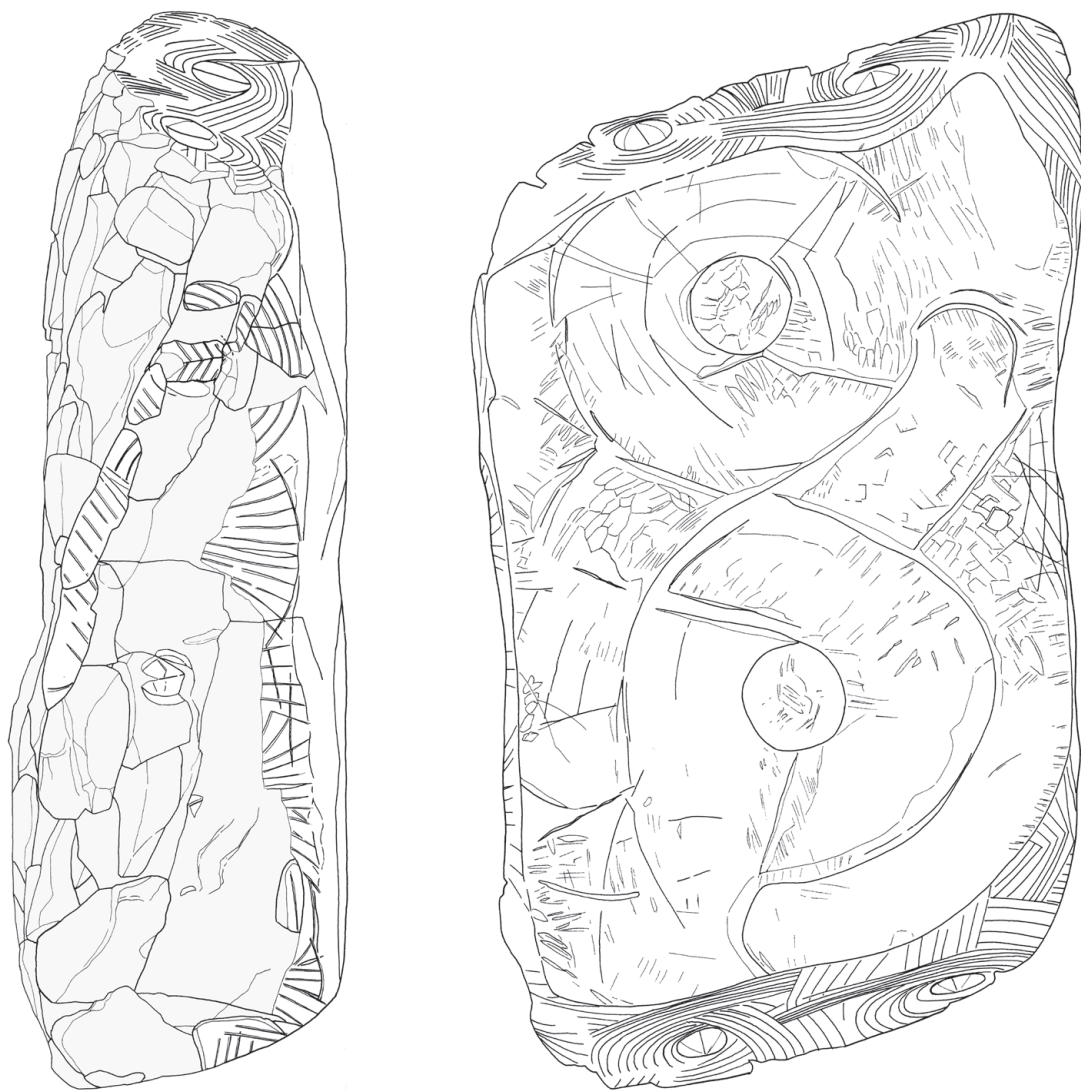


图121 弧带文石(2) 1:4

が燃え切ったとみられ、水をかけての急冷は考えにくい。念のため一部を急冷したが特に変化はなかった。同時に焼いた素焼きの製品は炭を吸着して広い範囲が黒色となった。

円礫堆出土の高杯371には発泡を生じているが、秋山浩三氏による土器の二次焼成実験では1100°C、3分間の加熱で土器に発泡を生じることが明らかになっている（秋山2007）。高杯371の発泡はその実験の資料に見られるものほど顕著ではないため、そこまでの高温ではないと思われるが、通常の野焼きで生じる状態ではない。弧帯文石を焼き割るために鞆を用いるなど何らかの送風を行って高温を得たと推定する。送風を伴った場合、どれほどの時間で石に層状の剥離を生じるかについては持ち越すことになった。

2) 文様構成

上面と側面・小口面には、交差し渦心円をめぐる帯で構成される弧帯文が浮彫で刻まれる。表面は平滑に仕上げられており、これは渦心円の内側も同様である。帯を構成する沈線は幅1mm以下であり、鋭利な刃物で刻まれている。

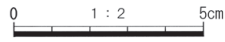
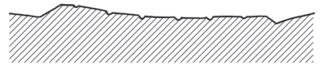
上面 線刻は中央にやや広く残るが、他の箇所では断片的に残るのみである。中央やや右に渦心円があり、その足側にも渦心円の下部が残る。この2つの配置から、痕跡は残らないが、頭側右隅近くにも渦心円が配されていた可能性が考えられる（図122上面復元案）。残存する渦心円の斜面には元あった稜線と平行あるいは直交するとみられる沈線が刻まれる。中央の渦心円の左側では幅5.5cm前後の幅広の帯が斜めに交差する。このうち渦心円に近い帯の横断面を図122上側に示したが、帯の上面は浅い凹面をなす。6本の沈線の間隔は広く、沈線は太めである。この帯の残存範囲端近くが谷状のくぼみ部分となるが、谷をまたぐ際に沈線がやや乱れている。この帯に交差する帯は同様に幅広であるが、上面の左上や左下に部分的に残る帯はここまで広い沈線間隔ではなく、側面・小口から上面に向かう帯も右側面中央からのものを除いて幅が狭い。上面中央の渦心円付近の帯は広く、他では狭くなるとみてよい。他に文様を把握できる箇所は少ないが、頭側左隅付近では端が若干広くなるバチ形気味の帯が配されるようである。

左上隅に近い箇所では小さく窪む箇所がある。残存状態がよくないが、復元できる直径が小さく、内側に筒状の内壁をもたず浅く下がることから渦心円ではないと判断できる。帯はこの円をめぐるように突き抜けるようであり、他の箇所では見られない表現である。意図的なものではなく原石のくぼみを整えた可能性がある。

頭側小口面 2つの渦心円とそれをめぐる帯が遺存する。帯は幅3～4cmと狭く、6～7条の沈線を入れる。帯が交差する際には1～2mmのごく浅い段を設けるが、小口面下端にある帯や細い帯は段をなさず同一面で交差している。中央の2つの帯に挟まれ上にむかって広がるバチ形の部分は低く作り出された面で、多い沈線は上で分かれる2つの帯である。この面を含めて小口・側面の帯はわずかに凹面をなすか平坦で、上面中央の帯のような凹面はなさない。2つの渦心円の斜面は平滑に仕上げられているが沈線はない。

左側面 各面のうち遺存状態が最もよい。焼かれた際の風下側になるのかもしれない。渦心円を1つは頭側に、もう1つは中央やや足側の側面上端に配する。渦心円の斜面にはいずれも稜線に直交する沈線を配する。

帯は前者の周囲では1重、後者では3重にめぐる。帯の幅は4cm前後で沈線の本数は4～8本と多様である。帯が交差する場合は段を設けることが多く、平行する場合は緩い稜が境界をなす。特徴的なのは中心から下側にむかう帯の端部で、バチ形に広がっており、それらは段をなして他の帯よりも上の位置になる。中央下側のバチ形部分では中央に太い沈線を入れて2つの帯であることを表示する。



上面中央帯 断面



上面復元案

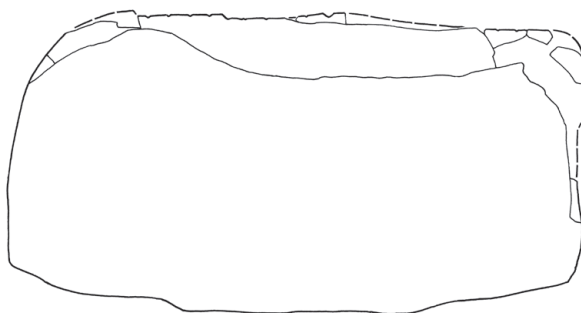
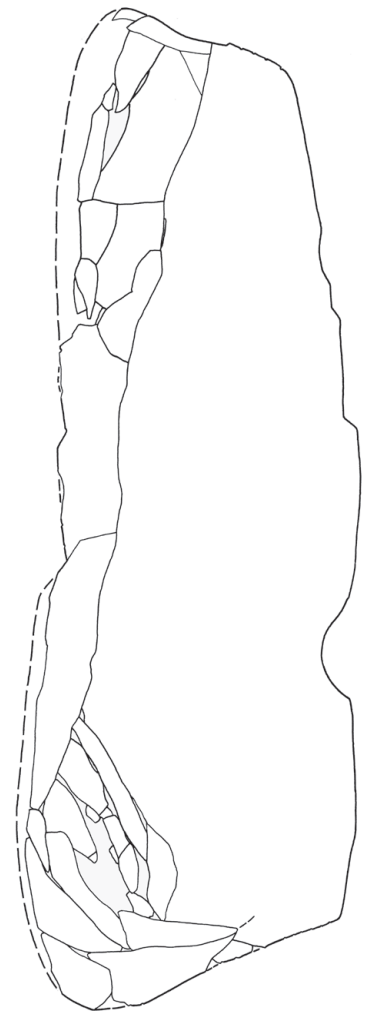
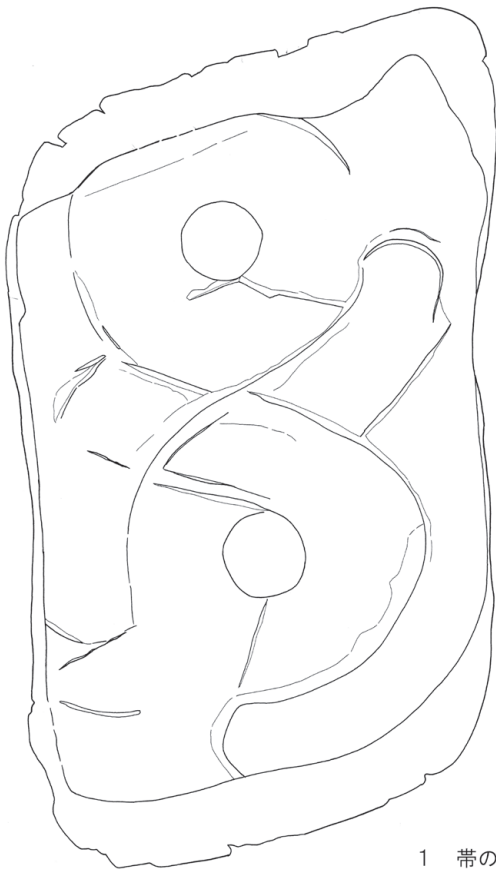
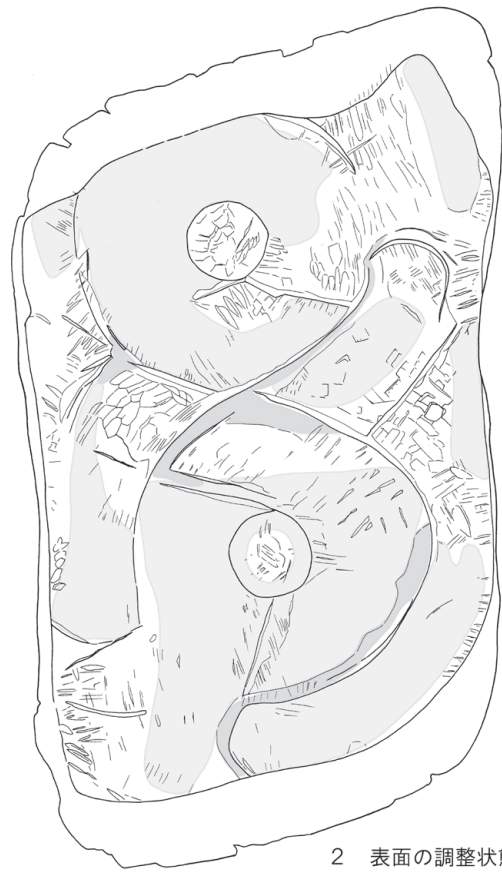


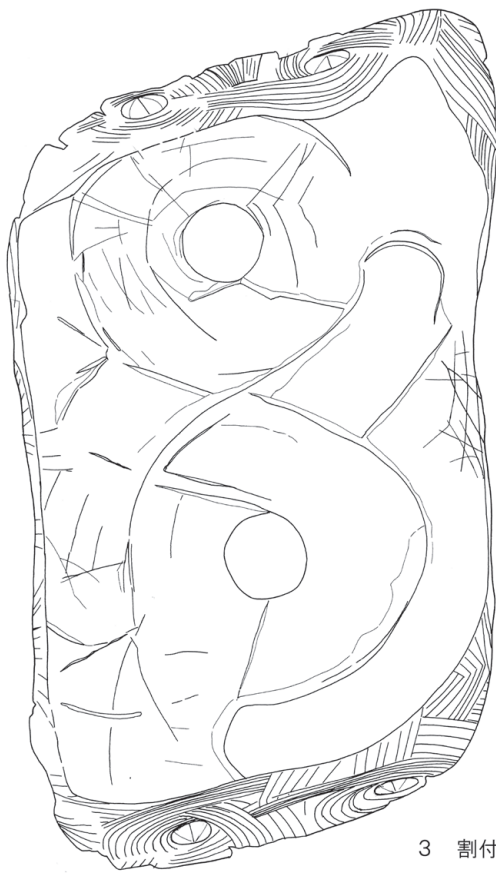
图122 弧帯文石(3) 1:4、1:2



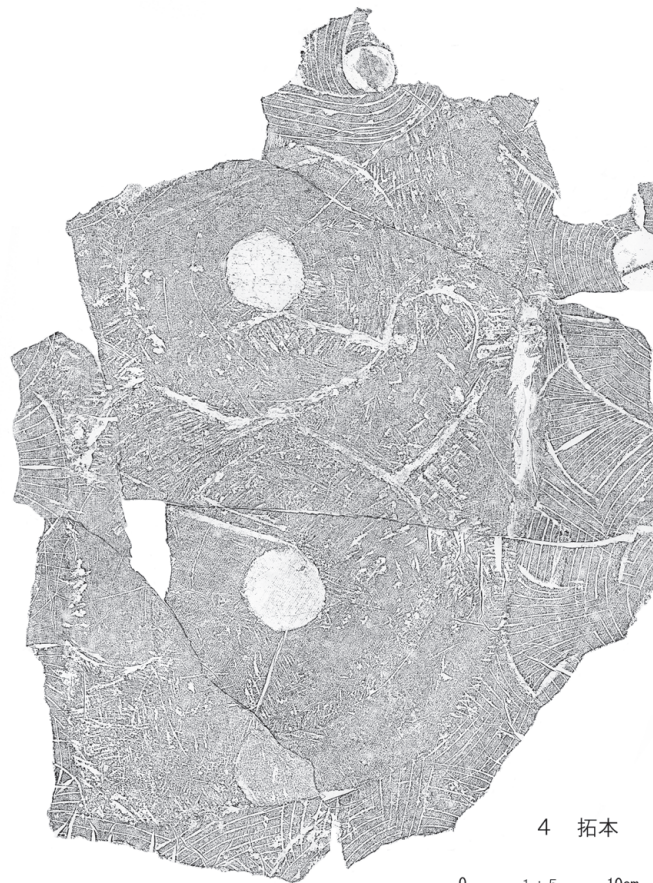
1 帯の形状



2 表面の調整状態



3 割付線



4 拓本

0 1:5 10cm

図123 弧帯文石下面 1:5

足側小口面 本体部分では面の残存が少なかったが、表面が遺存する比較的大きな破片の接合が可能で、面の全体を復元できた。頭側小口面と同様に2つの渦心円を配し、それをつなぐS字状の帯とそれに交差する帯によって文様が構成される。帯の幅は3.5cm前後で沈線は5本になるものが多い。他と同様に帯の側縁はわずかな稜、交差部分は小さな段を設けるが、同一平面で帯が交差する部分もある。頭側小口面と同じく渦心円の斜面は無文である。

右側面 表面の剥離が顕著で、文様は下部を中心に残る。渦心円は中央やや足側に基部が残っており、頭側小口に近い箇所にも配される。前者の斜面は残存がよくないが、沈線があったとみられる。後者の斜面は沈線を配する。足側小口に近い部分は表面がほとんど残らず文様構成は不明である。足側の端から10cmの位置には湾曲して急角度に下がる面が小さな三日月形に残っている。旋回する帯の段とみるにはやや深く、渦心円の内壁で支障ないため、この位置にも渦心円が配されていたと考えるが、文様構成のうえでも妥当と思われる。したがって、側面・小口面のうち、この面のみ渦心円は3つが配されたことになる。中央の下部には左側面と同様のバチ形をなす帯の端部があり、そこから足側にかけて下端が広がる帯の先端が並ぶ。先端に弧線を配して帯の端を明示するものと、先が開いた帯のままとするものがある。中央の上方には上面中央の渦心円に向かう幅の広い帯が残る。

3) 下面

下面は製作の途中で作業を止めた状態であり、ノミ痕跡が残る箇所や平滑に整えられた部分が混在する。中央の2ヶ所に渦心円が設けられる。大きさは上面のものと同様であるが、椀形に彫り凹めてあって稜線や斜面を作り出すことは予定されていない。渦心円をとりまく帯は幅が広く、横断面は浅い凹面となる。

底面の図形 (図123-1) 帯のレイアウトは以下のように理解できる。渦心円をめぐる帯は隣接する渦心円に向く位置で、右からきた側が左の帯の上を通過して交差し、隣接する渦心円の帯の外側をめぐる。この帯は隣接する渦心円の帯の下を、もう一方の帯は上を通過 (図183-1)。渦心円2つという最も単純な構図であるため、弧帯文の基本となる図形が表示されたと思われる。一部の帯では太い沈線を加えて単純な基本図形を改変しはじめた様子となっている。帯が交差する部分は段をなし、内・外の帯の境は段あるいは稜で表示する。帯の中に軸線に対してやや斜めになる段を配しているが、これらは外側に向かう帯を設ける予定の位置とみられる。また、左下隅と右上隅には大まかなバチ形を太い沈線で表示する。

加工痕 (図123-2) 帯は小形のノミによる彫込みと削り調整で形成される。彫込みは、中央の右側や左の端近くなど渦心円をとりまく帯の外側に見られる。ノミ痕跡はa: 方形～長方形の小さな平面からなるもの、b: 長さ2～2.5cm、幅2、3mmの細長い平面形で断面がV字形をなす谷が同方向に並ぶものがあり、bのほうが深い。aは面を作るようにノミで彫ったものであり、刃幅は8mmである。bはノミを斜めに用いて細長い切り込みを平行に入れ、続く工程で間に残った稜をつぶして面を下げるものである。右上付近などではbののち、それを削って消しかけており、bの後にaという手順ではなく、面を浅く下げる場合にはa、深く下げる部分ではbと、目的に応じたノミの使い分けのようである。

ノミ加工ののち削りによって平滑な面が形成される。この面の範囲を薄いグレーで示した。渦心円周辺の帯を中心に形成されており、外周の帯に及ぶ。渦心円のうち頭側のものは整形がなされないが、足側のものは斜面上半が平滑な面となっている。足側の渦心円右側の帯は平滑化しているがノミ痕がかなり残る。この部分よりも頭側や頭側渦心円の右側などは平滑加工の範囲には入れていないが、ある程度の調整はなされている。

底面が最も突出して稜になる部分では細かい不整形の凹みが多く見られる。面を整えたとしても後の作業の際に削り落とされた石片と底面が擦れるなどして痛んだ痕かと思われる。この範囲は濃いグレーで示した。

割付線 (図123-3) 頭側の渦心円をとりまく帯、足側左外周の帯、右側縁の中央、これらは面が平滑に整えられた箇所であるが、ここには文様の割付けがみられる。一見してわかる太さの沈線はわずかで、多くは斜めの照明で確認できる細い線である。文様をごく大まかに刻んでおり、正確な割付線ではなく、続く工程での帯の延伸を示しておくケガキ線といった性格の線とみられる。右縁辺中央部では2つの帯を重ねて示してあり施文の予定をやや読み取りにくい、頭側の渦心円をとりまく帯では右上と左上でそれぞれ帯が屈曲して出て行くことが予定されたことがわかる。

施文の特徴 以上の下面に見られる状況から、まず基本図形を大まかに形成したのちに、それを改変していく形で文様を展開することがわかる。加工痕から、弧帯文石はそれぞれの工程を完了させて次に進むのではなく、一部を先行させて文様を形成し、それとのバランスを見ながら帯を延伸させていくといった手順で製作された可能性が強い。もちろん出来上がりイメージはあったであろうが、部分の表現については自由度が高かったのではないかと思われる。

この弧帯文石は榑築神社弧帯文石と共通する要素がある一方、帯の表現をはじめ異なる部分が多い。このことについては第7章第8節で検討を行うが、使用目的に差があり、相違を生じさせたと考える。

g 種子・朱

炭化した種子が出土した。モモ、クスノキ属、カジノキなどである。

円礫堆掘り下げの過程で朱の小粒がしばしば見られたが、採取した土を水簾したところ、朱混じりの土層が薄く形成された。朱の包含比率は高くはないが、土の量が多いため朱の総量はかなり多いと見込まれる。木柱3基部など主体部上施設の構築に伴って撒かれたものだけでなく、円礫壇形成の過程で撒かれた、あるいは、他の遺物と同じく祭祀に用いた朱が最終的に取められたなどの可能性が考えられる。

h 円礫堆出土遺物の区分

以上、円礫堆出土遺物について破片の状態や接合状況を含めて記載したが、破片の遺存状況や表面の状態などは一様ではなく、遺物は3つに大別することができる。

Aは火を受けた一群で、2次加熱の高杯・脚付直口壺等、土製玉類、弧帯文石である。種別によって破片の残存率は異なるが、接合する破片は多いといえる。列記した順の後になるほど接合できる破片の量が多くなるが、弧帯文石本体が中心とすれば、そこから円礫壇形成時にそれぞれが所在していた位置までの距離に比例するのかもしれない。高杯366はこれに属するが1点だけ埋められており、扱いは他のAおよび以下のB・Cとは異なる。Bは円礫堆内部の遺物で、高杯・脚付直口壺、装飾高杯、鉄器等であり、土器類では基本的に接合する破片はない。Cは円礫堆上面・上部出土の特殊器台355・356が代表となる。接合する破片、あるいは同一個体破片があるが、復元に十分な量ではない。この2点以外では特殊器台424、器種不明426、壺358・363~365、器台422・423、装飾高杯421などの破片が特殊器台溜まりあるいは円礫堆上面から出土しており、これに属する。また、人形土製品も出土は円礫堆上層で一部は特殊器台溜まりから出土しておりCに加わる。

Cの特殊器台では、きわめて大きな破片とともにかなり小さい破片が見られ、土器が割り砕かれたと判断したが、小片の存在からほぼこの位置でそれがなされた可能性が考えられる一方、破片は不足する。この点については、小片とともにある程度の量が別位置から円礫壇上に運ばれたとするのが1つの解釈である。もう一つは、特殊器台溜まりから破片が北側に流出した状態が認められたが、同様

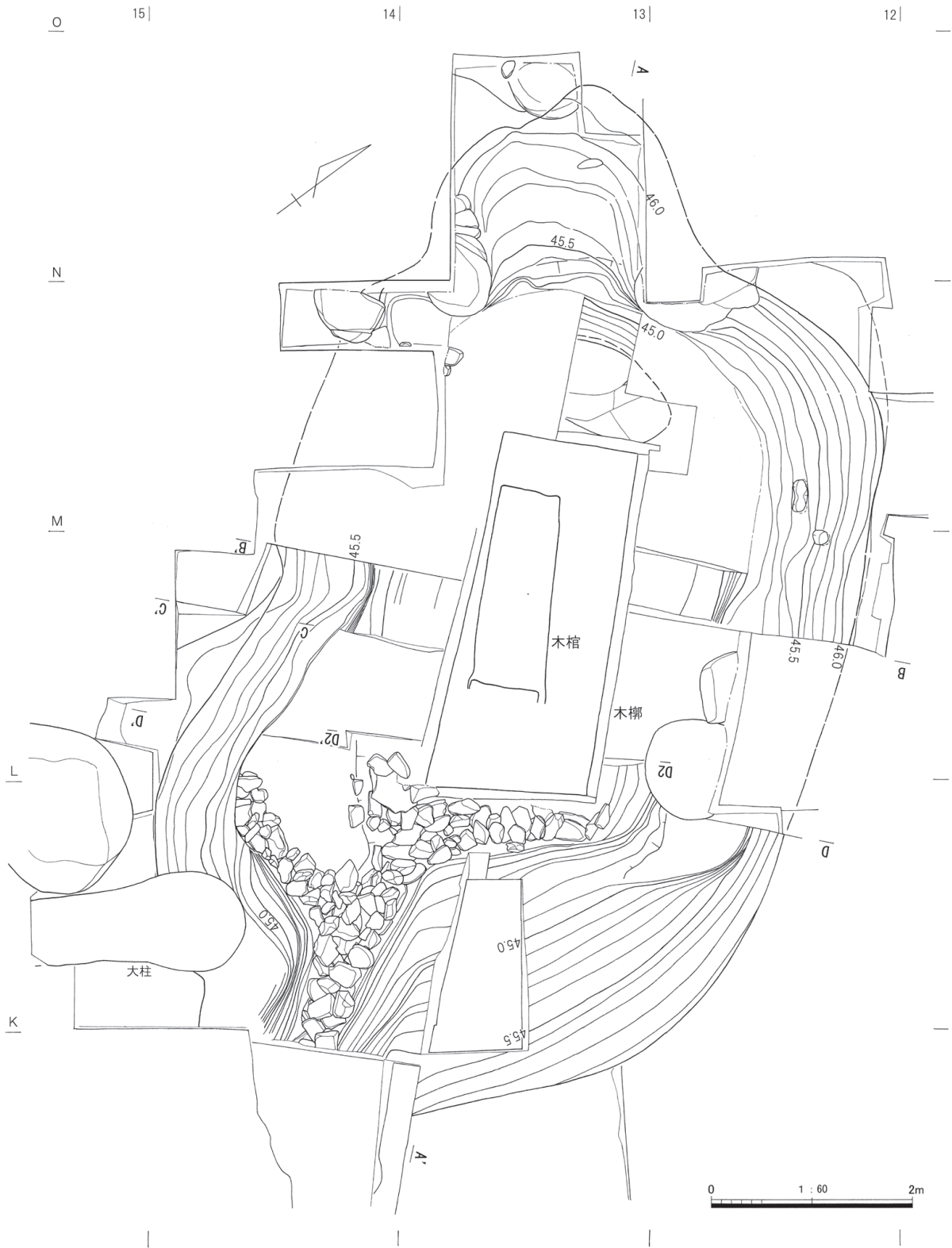


图124 墓壙 1 : 60



図125 墓墳埋土断面(1) 1 : 40

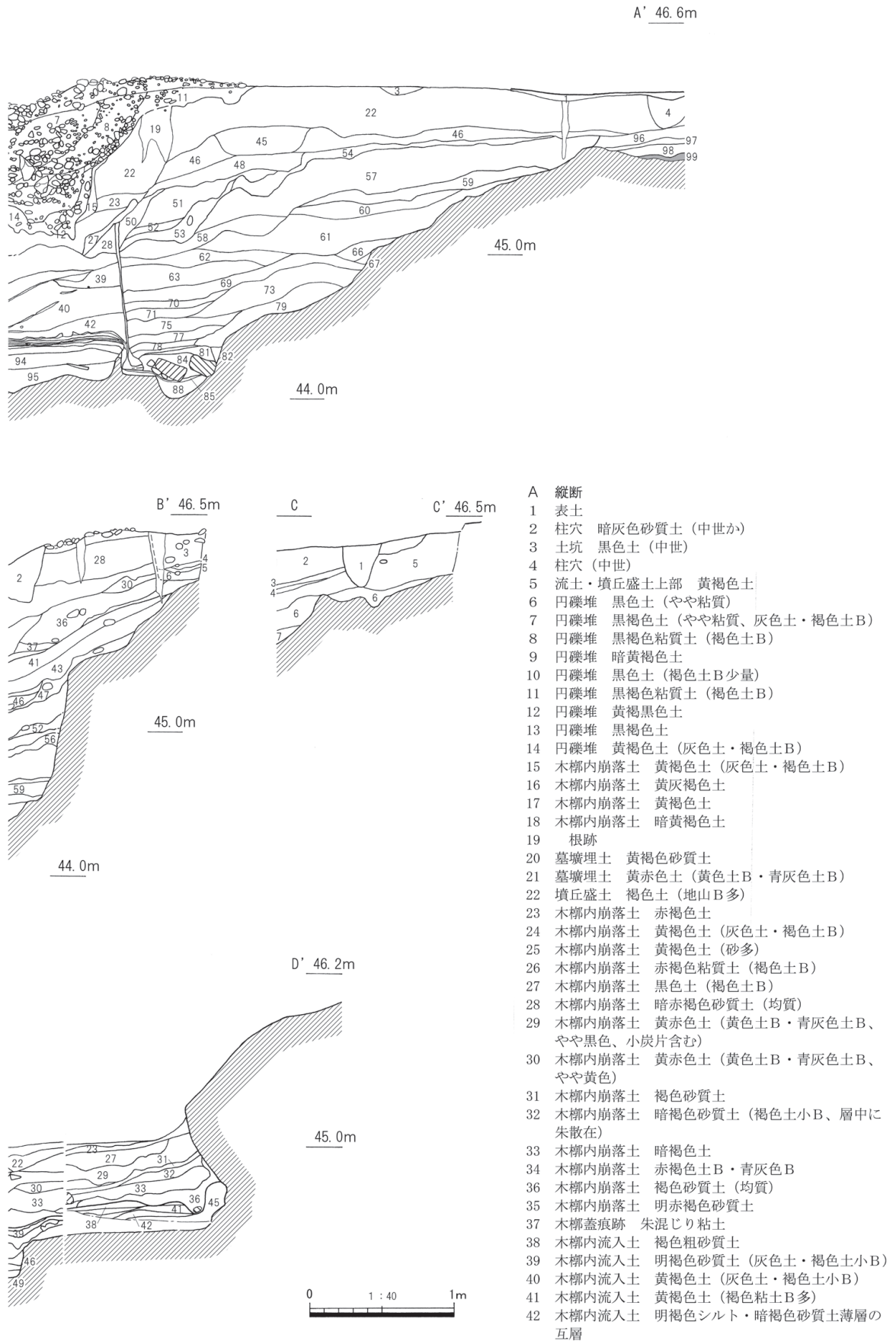


図126 墓壙埋土断面(2) 1 : 40

第5章 埋葬施設

- 43 木槨痕跡 朱
 44 木槨痕跡 朱混じり粘土ほか
 45 墓壇埋土 赤褐色土 (45層の一部、やや暗い)
 46 墓壇埋土 赤褐色土 (粘土小B、砂を含む)
 47 墓壇埋土 黄赤色土 (黄色土B・青灰色土B、外側ではB小さく少)
 48 墓壇埋土 赤褐色土
 49 墓壇埋土 黄赤色土 (黄色土B・青灰色B)
 50 墓壇埋土 赤褐色土 (灰色土B、やや砂質)
 51 墓壇埋土 黄褐色土
 52 墓壇埋土 赤褐色砂質土
 53 墓壇埋土 黒色土
 54 墓壇埋土 黄褐色土 (褐色土・灰色土B)
 55 墓壇埋土 黄赤色土 (黄色土B・青灰色土B、褐色粒)
 56 墓壇埋土 黄赤色土 (黄色土B・青灰色土B、やや黒色)
 57 墓壇埋土 赤褐色土 (褐色土・灰色土B)
 58 墓壇埋土 暗褐色砂質土 (粗砂)
 59 墓壇埋土 赤褐色粘質土
 60 墓壇埋土 明赤褐色土
 61 墓壇埋土 赤褐色土
 62 墓壇埋土 黄褐色砂質土
 63 墓壇埋土 明黄褐色砂質土
 64 墓壇埋土 黄赤色土 (黄色土B・青灰色土B)
 65 墓壇埋土 黄褐色砂質土 (青灰白色土B)
 66 墓壇埋土 黄褐色土
 67 墓壇埋土 明赤褐色粗砂質土
 68 墓壇埋土 暗褐色土
 69 墓壇埋土 暗赤褐色砂質土 (粗砂B)
 70 墓壇埋土 暗黄褐色砂質土
 71 墓壇埋土 褐色砂質土
 72 墓壇埋土 暗褐色土
 73 墓壇埋土 明褐色粘質土 (砂)
 74 墓壇埋土 暗褐色土 (青灰色土B少量)
 75 墓壇埋土 地山小B・黄褐色粘質土
 76 墓壇埋土 黄褐色土 (褐色土・青灰白色土B多)
 77 墓壇埋土 赤褐色土
 78 墓壇埋土 暗赤褐色細砂質土
 79 墓壇埋土 暗赤褐色砂質土
 80 墓壇埋土 黄褐色砂質土
 81 墓壇埋土 赤褐色砂質土
 82 墓壇埋土 暗赤褐色土
 83 墓壇埋土 黄褐色土
 84 排水溝埋土 暗灰色粗砂質土 (上面に白褐色細砂質土)
 85 排水溝底面鉄分沈着 赤褐色粗砂質土
 86 木槨基礎埋土 黄色土
 87 木槨基礎鉄分沈着 濃い黄褐色土
 88 排水溝置土 黄褐色細砂質土 (地山B)
 89 墓壇埋土 灰白色砂質土 (黄褐色土B少量)
 90 墓壇埋土 黄褐色砂質土 (青灰白色土B少量)
 91 墓壇埋土 暗褐色粗砂質土
 92 墓壇埋土 黄褐色砂質土
 93 墓壇埋土 淡赤褐色土
 94 墓壇埋土 黄褐色砂質土
 95 墓壇埋土 黄褐色土
 96 墳丘盛土 赤褐色土
 97 墳丘盛土 褐色土 (黒色土)
 98 墳丘盛土 赤褐色土
 99 旧表土 灰黒色土
- B 横断**
 1 流土 暗灰色砂質土
 2 標柱等 (現代) 設置穴
 3 土坑埋土 暗褐色砂質土 (瓦片含む)
 4 土坑埋土 暗褐色土
 5 土坑埋土 黄色砂質土
 6 土坑埋土 暗褐色砂質土
- 7 円礫堆 暗褐色砂質土 (褐色土B)
 8 円礫堆 黒褐色土 (褐色土・灰色土B)
 9 円礫堆 暗黄褐色土
 10 円礫堆 褐色土
 11 木槨内崩落土 黄褐色砂質土 (炭片含む)
 12 木槨内崩落土 赤褐色粘質土 (褐色粘土小B、炭片含む)
 13 木槨内崩落土 青灰色砂質土 (黄色土B)
 14 木槨内崩落土 褐色砂質土
 15 木槨内崩落土 暗褐色砂質土
 16 木槨内崩落土 黄褐色砂質土 (褐色土小B、炭片含む)
 17 木槨内崩落土 暗褐色砂質土 (褐色土小B) ~ 淡灰黒色土
 18 木槨内崩落土 暗褐色砂質土
 19 木槨内崩落土 暗褐色砂質土 (赤褐色土小B)
 20 木槨内崩落土 黄褐色土B
 21 木槨内崩落土 黄色土B ~ 灰色土・褐色土B
 22 木槨内崩落土 明黄褐色砂質土
 23 木槨内崩落土 赤褐色・青灰色B
 24 木槨蓋 朱混じり粘土
 25 木槨内流入土 灰褐色土 (黄褐色土小B多)
 26 木槨痕跡 朱混じり粘土ほか
 27 柱3 黄赤色土 (細かな炭、朱含む)
 28 墓壇埋土 黄色砂質土 (黄褐色土B)
 29 墓壇埋土 黄褐色粘質土
 30 墓壇埋土 黄褐色土 (明褐色粘土B)
 31 墓壇埋土 黄赤色土 (黄色土・青灰色土B)
 32 墓壇埋土 黄赤色土 (黄色土・青灰色土B)
 33 墓壇埋土 暗黄褐色土
 34 墓壇埋土 赤褐色土 (褐色粘土B)
 35 墓壇埋土 黒褐色砂質土
 36 墓壇埋土 暗黄色砂質土
 37 墓壇埋土 黄褐色砂質土 (褐色粘質土B)
 38 墓壇埋土 暗褐色砂質土
 39 墓壇埋土 黄灰色土 (部分的に朱含む)
 40 墓壇埋土 黄赤色土 (黄色土・青灰色土・黒色土B)
 41 墓壇埋土 暗黄色砂質土 (灰色粘土・褐色土B)
 42 墓壇埋土 褐色砂質土 (白色砂B)
 43 墓壇埋土 黄色砂質土 (褐色土B)
 44 墓壇埋土 黄褐色砂質土 (褐色粘質土B・炭化物含む)
 45 墓壇埋土 黄褐色砂質土 (褐色粘質土B)
 46 墓壇埋土 黄褐色粘質土
 47 墓壇埋土 黒色土
 48 墓壇埋土 黄赤色土 (黄色土・青灰色土B)
 49 墓壇埋土 青灰色・黄色土B
 50 墓壇埋土 黄褐色砂質土 (黄褐色土B、炭化物)
 51 墓壇埋土 黄褐色土B・褐色粘質土B
 52 墓壇埋土 暗黄褐色粘質土 (褐色粘質土小B)
 53 墓壇埋土 黄赤色土
 54 墓壇埋土 黄赤色土 (落ち込みの肩に朱)
 55 墓壇埋土 褐色砂質土 (褐色・黄色粘質土B)
 56 墓壇埋土 暗黄褐色砂質土 (炭化物少)
 57 墓壇埋土 褐色砂質土B・同粘質土B
 58 墓壇埋土 黄褐色砂質土 (炭化物)
 59 墓壇埋土 暗黄褐色粘質土
 60 墓壇埋土 褐色粘質土 (炭化物)
 61 墓壇埋土 褐色砂質土
 62 墓壇埋土 明黄褐色粘質土 (青灰白色土B)
 63 墓壇埋土 暗褐色土
 64 墓壇埋土 明黄褐色粘質土 (青灰白色土B)
 65 墓壇埋土 青灰白色土B・暗黄褐色土B
 66 墓壇埋土 暗黄褐色砂質土
- 67 墓壇埋土 暗褐色土
 68 墓壇埋土 暗褐色土 (青灰白色土B)
 69 墓壇埋土 灰色粘質土B・褐色粘質土
 70 墓壇埋土 青灰白色土 (黄褐色土B)
 71 木槨基礎埋土 灰色粘質土
 72 木槨基礎埋土 青灰白色土
 73 木槨基礎埋土 青灰白色土 (黄褐色土B少量)
 74 鉄分沈着 濃い茶褐色土
 75 墓壇埋土 灰白色砂質土
 76 墓壇埋土 黄褐色砂質土
 77 墓壇埋土 黄褐色砂質土
 78 墓壇埋土 黄褐色砂質土
 79 墓壇埋土 黄褐色砂質土
- C 横断墓壇肩**
 1 柱穴 黄色砂質土
 2 墓壇埋土 黄色砂質土 (黄褐色土B)
 3 墓壇埋土 暗黄色砂質土
 4 墓壇埋土 黄褐色砂質土
 5 墓壇埋土 暗黄色砂質土 (褐色粘質土B)
 6 墓壇埋土 褐色砂質土
 7 墓壇埋土 褐色砂質土
- D 南東横断**
 1 表土
 2 墳丘盛土 明黄褐色土
 3 墳丘盛土 明黄褐色土
 4 墓壇埋土 明黄褐色土
 5 墓壇埋土 黄褐色土B・青灰色土B
 6 墓壇埋土 黄褐色土B・青灰色土B
 7 墓壇埋土 黄褐色土B・青灰色土B
 8 墓壇埋土 黄褐色土B・青灰色土B
 9 墓壇埋土 黄褐色土B・青灰色土B
 10 墓壇埋土 黄褐色土
 11 墓壇埋土 褐色砂質土 (朱点在)
 12 墓壇埋土 黄褐色土 (明青灰色土B)
 13 墓壇埋土 黄褐色土 (明青灰色土B)
 14 墓壇埋土 暗黄褐色土 (青灰色土B)
 15 墓壇埋土 黄褐色土
 16 墓壇埋土 明黄褐色土 (青灰色土B)
 17 墓壇埋土 黄褐色土 (明青灰色土B)
 18 墓壇埋土 黄褐色土 (明青灰色土B)
 19 墓壇埋土 黄褐色土 (青白色土B)
 20 墓壇埋土 黄褐色土B・暗青白色土B
 21 墓壇埋土 赤褐色粘質土
 22 墓壇埋土 赤褐色土
 23 墓壇埋土 赤褐色粘質土
 24 墓壇埋土 黄褐色土
 25 墓壇埋土 赤黄褐色土
 26 墓壇埋土 赤褐色砂質土
 27 墓壇埋土 赤褐色粘質土
 28 墓壇埋土 明黄褐色砂質土
 29 墓壇埋土 暗赤褐色粘質土
 30 墓壇埋土 黄褐色砂質土
 31 墓壇埋土 黄褐色粘質土
 32 墓壇埋土 黒褐色~赤褐色砂質土 (地山B多)
 33 墓壇埋土 暗赤褐色粘質土
 34 墓壇埋土 褐色粗砂質土
 35 墓壇埋土 明赤褐色粘質土
 36 墓壇埋土 暗褐色粘質土
 37 墓壇埋土 赤黄褐色微砂質土
 38 墓壇埋土 黄褐色砂質土
 39 墓壇埋土 淡黄褐色土
 40 墓壇埋土 褐色粘質土
 41 墓壇埋土 黒褐色粘質土
 42 墓壇埋土 暗褐色土
 43 墓壇埋土 淡黄褐色粘質土
 44 墓壇埋土 淡赤褐色土
 45 墓壇埋土 赤褐色土 (地山B)
 46 墓壇埋土 黄褐色土 (赤褐色土B)
 47 墓壇埋土 明赤褐色土
 48 墓壇埋土 明赤褐色細砂質土
 49 墓壇埋土 赤褐色土

に東や南にも破片が流出し、それらは墳頂の流出によって失われたとすることである。後者であって円礫壇の一部を含めて流出しているとすればAの土製玉類の破片の不足なども理解が可能であり、後者を考える。

3 墓壙と墓壙埋土

a 墓壙（図124～126、図版28）

平面形 墳頂平坦面のほぼ中央に設けられており、主軸を南東－北西にとる。縦断（A断面）軸よりも北東の側は小判形の平面をなすが、南西の側では北西が張り出して南部も大きくふくらんでおり、全体の平面形はやや不整形な楕円形となる。主軸方向（南東－北西）の長さは北西の張り出し状になる部分を含んで10.4m、幅はB断面付近で5.75mである。墓壙底の南側には排水溝が設けられており、墓壙の南から排水溝が外にのびる。その西側では大柱遺構の掘方が墓壙肩を掘削する。

地山には直径1m前後の大石が含まれており、墓壙斜面にかかったそれらは除去せずに残置してある。墓壙の北西側では大石2つが所在したためにその外側では予定した墓壙の掘削を行わず、凸字形の平面形になったと考えられる。この部分は墓壙のなかで傾斜が最も緩やかになっているが、大石を残したままでの深い掘削は意味がないため浅いものにとどめたとみられ、意図的に設けたとは考えにくい。一方、墓壙が南西に張り出す部分では、D断面に示すように墓壙斜面が中ほどで庇状をなす。斜面下部は削り込まれたようになり、底面が最大29cm入り込む。排水溝の記載でもふれるが、湧水によって墓壙斜面が崩れ、それを改修した形状と考えられ、墓壙の南西への張り出しは、そのために生じたとみられる。

これらから、小判形の平面形をなすように計画されたが、施工時の事情によってやや異なるものになったと考えられる。なお、排水溝出口側の西、墓壙南端は未掘で、上面で検出した地山と埋土の境界を記入している。

肩部と深さ 墓壙は地山面から掘削されている。地山は比較的高さがそろそろ北西半に対して、排水溝の側である南東が50cm低くなる。高い側となる西（図126 B断面 B'側）から墓壙中央の木柵下方までの深さは2.1mである。低い南東側（A断面 A'側）では旧表土上に墓壙肩で8cm、図示範囲外の肩から1.4mの位置で34cmの盛土がなされている。墓壙上端は地山掘削面から一連で立ち上がり、この付近は部分的に盛土による構築墓壙になると判断する。

C断面に示すように、墓壙肩を覆う盛土は直接地山に接しており旧表土は見られず、墓壙掘削にあたって掘削面が整えられたことを示している。墓壙肩の上には墓壙西側で厚さ30cmの盛土が見られるのに対し、流出が顕著な東側では薄い流土直下が地山となる。元は墓壙全体が厚さ30～20cmの盛土で覆われたとみられる。

墓壙斜面 墓壙は2段掘りで、斜面の中ほどに緩傾斜をなすテラスをもち、そこから下側は垂直に近い急傾斜となる。平面図等高線の間隔は10cmである。上側の傾斜は45～50°で、北西の張り出し状部分の傾斜が最も緩く30°である。縦断側の傾斜が緩く横断側の傾斜が強い。下側の傾斜は80～85°である。墓壙斜面には先にふれた2つの大石のほか、各所に大石が点在しており、墓壙底北部にも所在する。なお、墓壙斜面上部東側では2ヶ所で直径15cm前後のピットが見られたが、柱穴等ではなく根跡とみられる。

テラスを面的に検出したのは各断面のトレンチ以外では北西の張り出し状部分とB断面のB'側から南の範囲である。図124や図125・126 B断面から明らかなように設けられた高さは均一ではなく、北東側が南西側よりも50cm近く低くなる。45.5m付近から下側斜面を掘り込む予定であったが、大石

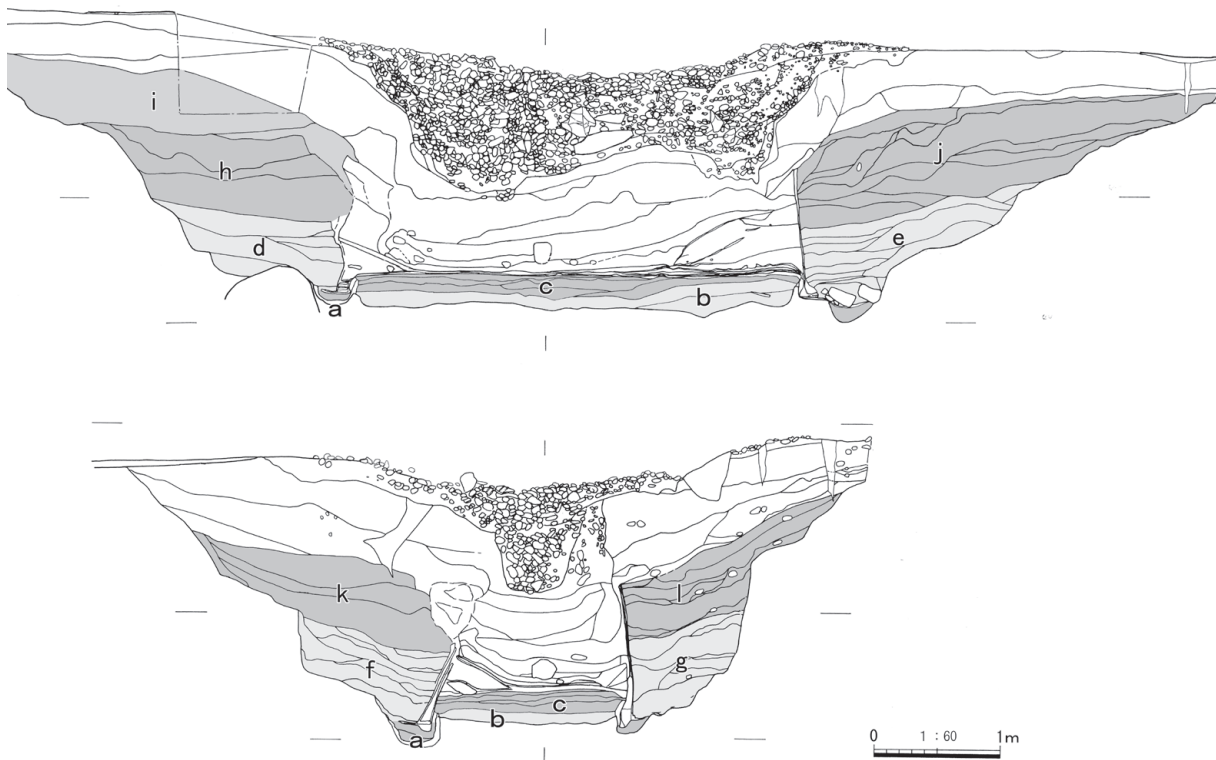


図127 墓壇埋土の区分 1 : 60

に阻まれて連続したテラスを設けられず高さがばらついたのかもしれない。テラスの幅は30~60cmであるが、北西の張り出し状部分では全体が緩やかなため範囲を把握しにくい。また、排水溝西側の部分には設けられていない。

D断面がかかる南東斜面の大石の南側から、排水溝東側の台形の平面形をなす未掘部分までの間は、D断面のトレンチと排水溝に近接した部分(Lラインから南東へ1.0m、13ラインから北東へ8cmまでの範囲)を除いて墓壇斜面を面的に検出していないため、1次調査の断面をもとに等高線を推定して示した。D断面のD側では大石の南に奥行き85cmの平坦面が形成されている。このテラスは排水溝に添って下降しながら南にのびると思われるが、未掘のため想定できる最小限の範囲を示すにとどめている。他のテラスよりもかなり低い位置となる。

底面 テラス下側の墓壇傾斜を急角度にすることによって長さ5.2m、幅3.3mの墓壇底面が形成される。墓壇底面は中央にむかって緩やかに下降し、中央におおむね平坦な部分が作り出され、ここに木槨が設けられる。なお、木槨南東側で墓壇底面の掘削が深いが、意図的なものか、石を除去した跡などが判断しがたい。

b 墓壇埋土 (図125~127)

木槨と排水溝が構築された後、墓壇は埋め戻される。墓壇埋土は黄赤褐色土~赤褐色土が主体をなす。いずれの埋土も小さいブロック土を含むが、下半の土層は2、3種のブロック土の混合といえる状態であることが多い。

埋土の各層はいずれも墓壇外側が高く、層の上面は緩斜面をなす。粘質土の間に砂質土を挟む箇所も見られるが、明確な互層等ではない。木槨外側の墓壇埋土は、木槨の腐朽に伴って内側に傾斜しており、木槨北西部では埋土が崩れた状態(B21、A29・49層)が見られる。

木槨の構築とともに墓壇は以下の順番で埋め戻される（図127）。

①礎板溝に土（埋土a）を入れ礎板を設置する。

②木槨内下部を埋めて木槨底面を作る。埋土b・c（A89～95層、B75～79層）のうち、下半のbは墓壇掘削と同時に掘りくぼめられたとみられる部分を埋めるが、これは①に先行して埋め戻しがなされたとしても支障ない。この埋土からはサヌカイト片6が出土した。

③埋土d～g（A65～84層、B55～70層、D10・11・17～20・23～44層）を入れる。埋土各層の厚さは5～10cmと薄い。これによって木槨下半は固定され、排水溝は埋められる。埋土の上面は墓壇北東のテラスに接続しており、南東ではテラスを埋める。なお、B断面B側ではB69層とB55～60層の2つに区分することができる。

墓壇埋土は遺物を含まないが、墓壇南側の埋土ではeと続くjの間で壺胴部破片が出土した。ただしそれのみで、朱や炭といった祭祀等を思わせる遺物等は認められなかった。また、eの上面は排水溝断面（図142 L断面）22～24層上面に続く。

④続いて埋土h・j～l（A48・50～64層、B41～54層）で埋め戻されて浅く広い斜面が形成され、木槨蓋が設置される。木棺の設置はこの段階と考えるが、③の可能性もある。B断面では木槨上端外側に平坦な面が形成されるのに対し、A断面ではそれがなく木槨小口板から斜面をなして上がっており、木槨蓋は小口板側では外へのはみ出しがなく、小口板上までであったと考えられる。なお、A断面北東側では陥没によって土層が乱れているため判断しにくい。埋土i（A47・49層）もこの段階に含まれるかと思われる。

④墓壇最上部まで埋め、さらに墳丘上面の盛り土を行って墳頂平坦面が完成する。この埋め戻しの過程で木柱2・3を設置する。A20・22層、B29・31層など、各層は厚い。この上に円礫壇が形成される。木槨上の土は木槨内に陥没している。

各段階の埋土には朱が点的に認められた。木槨蓋上のA32層が多く、ほかにB31・39・48・54層、D11層で認められた。埋め戻し開始から朱の散布がなされたとみられるが、A32層やB39層など木槨蓋設置後の埋土が多い。

4 木槨

木槨は上下の底板間にある台石を除いて木材で構築されているが、すべて腐朽しており本来の形をとどめておらず、粘土等からなる痕跡に変化していた。そうした粘土層や、土質の境界、色調の変化などを追求することによって木材の位置や形状を把握することができたが、それらは木材そのものではないため、構造や法量の概略を知るにとどまった箇所も少なくない。遺構を把握する糸口をつかむまで、そしてその後も、新たな知見に向き合い続けた調査であった。

a 構造と規模

構造（図128） 木槨各部の記載をおこなう前に、まず、大まかな構造を示しておく。木槨は上下2重になった底板の周囲に側板と小口板を配し、上を蓋板で覆って木棺収納の空間を作り出したものである。小口板や側板は墓壇底に掘られた溝に据えられた礎板で支えられ、小口板が側板を挟んで配される。横方向に並べられた棧の上に下底板が置かれ、その上に配置された台石の上に上底板が設置される。それによって下底板の下と上下の底板の間には狭い空間が形成される。上底板の上には組合式箱形木棺が収められる。

木槨・木棺を構成する上記の諸材、側板・小口板・礎板・底の構成材（棧・下底板・台石・上底板）・蓋板は、おおむね平面的位置関係を保持して沈下し圧縮された形で痕跡が遺存していた。これらのう

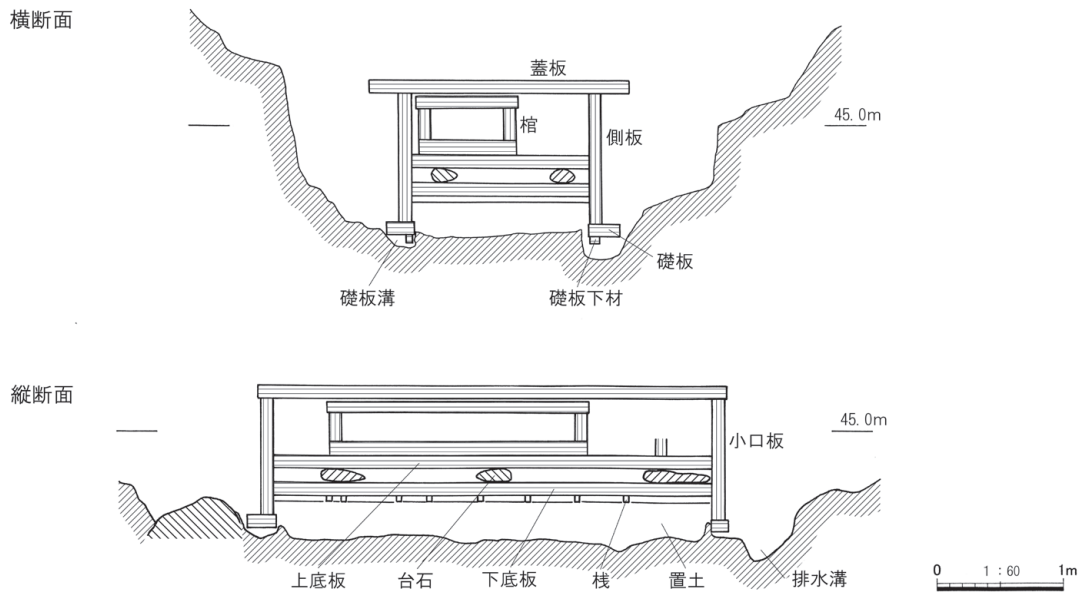


図128 木槨・木棺の復元断面と各部名称 1 : 60

ち、壁面を構成する側材や小口材がどのような構造であったか、板であるのか角材を積んだものかが課題となるが、板の名称で記載を進め、後に検討を加える。

木槨・木棺の軸線は正方位と斜交している。後述のように埋葬頭位が判明しており、以下では仰臥伸展葬と判断し、小口板や側板等については頭側小口板、足側小口板、北東の側板を右側板、南西を左側板等と呼ぶ。

規模と形状 (図124) 木槨は頭側となる南東が広がる長方形の平面形で、A・B断面位置での内法は長さ355cm、幅146cm、高さ88cmである。以下は推定値であるが、頭側小口内法幅162cm、足側同幅136cmである。側板の内法長さは、右側が348cmに対して左側は362cmと14cm長くなっており、そのため平面形は南隅がやや鋭角となって張り出す。この平面形は木槨基部での形状であるため腐朽等による変形とは考えにくく構築された形とみてよい。大石が所在するなどのため側板長さの調整がなされ、完成した平面形に歪みが生じた可能性が考えられるが、このことについては第5節で述べる。

b 検出の過程

円礫堆掘り下げの後、下部に存在が見込まれた埋葬施設の調査に移行した。記載が若干重複することになるが、まず検出の過程とその際の所見を記し、その後、各部の記載を行う。

落ち込みの検出 図129-1、図版27-1は掘り下げに伴って検出した木槨上部の輪郭である。足側小口及び右側板の足側は木槨上部が内側に崩れた状態であり、一方、左側板頭側付近は木槨の遺存が良好で側板上端まで遺存していた。左側板線の中央には小さな弧状の部分があるが、木槨蓋が落ちる段階で土が流入する箇所となって部分的にえぐれたとみられる。

左側板頭側の外では側板上端から25cm外側(1)で薄い朱の広がりを検出した。朱面は外側が直線をなし、これは一部で途切れながらも1.1mにわたって続く。この朱の線はごく浅い角度で斜めに下がる朱面の端であり、木柱2の礎石の下を通る。木槨蓋に朱が塗られていたことを示し、線をなす朱が木槨蓋の端となる。右側板頭側(2)でも同様に長さ28cmにわたって朱が線をなし、その延長上にも朱が点在する。これも木槨蓋を反映したものである。

足側小口～右側板足側付近の斜面(3)では長さ20cm前後の薄い朱の広がりが点在する。この部分は木槨上部がかなり崩れた箇所にあたるが、蓋板の一部ではないとすれば、崩れによって小口板・側

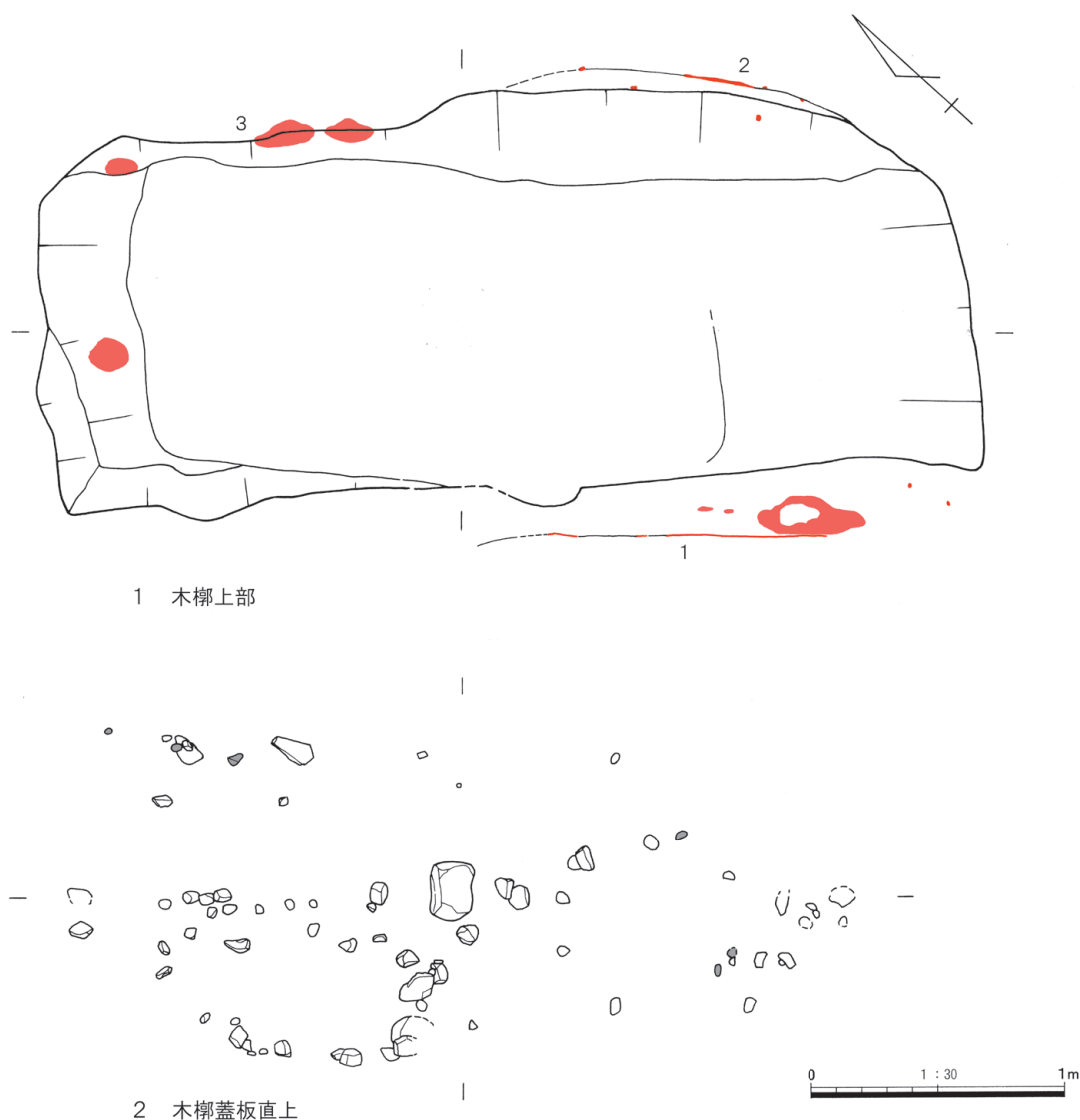


図129 木槨上部検出状況 1 : 30

板の朱が逆によく遺存した可能性も考えられる。

蓋材直上 図129-2は、木槨内の掘り下げを進めた段階の図で、落ち込んだ蓋板直上の状況であり、蓋板上の盛土に含まれる礫を示したことになる。墓壇埋土は地山の礫をある程度は含むが、かなり礫が多い土で蓋板が埋められている。右側板足側近くでは円礫堆から下に落ち込んだ円礫（グレーで表示）を含む。木槨のほぼ中央となる位置に長さ24cmと大きい礫があるが、地山に含まれる礫で他と異なる特徴はない。

上部平面形 図130が木槨平面の検出状態である。側板・小口板の痕跡は墓壇埋土と崩落・流入土との間の厚さ3cm前後の明褐色砂質土等、あるいは墓壇埋土と崩落土の境界線として捉えられた。左側板は上端で、右側板頭側は上端から10cm下、他の箇所は17~34cm下で検出した。土圧によって側板が内側に傾き、側板上部の幅が119cmと狭くなっており、小口板が側板を挟む構造であることを示している。頭側小口板は若干内側に傾く程度である。足側小口板は直線とならず中央付近で向きが異なる3つの痕跡からなり、土圧による損壊を示している。

左側板外側の墓壇埋土中(1)には炭小粒が散在するが、これの成因はよくわからない。

右側板と足側小口板が接する隅部分(2)では長さ10cm、幅5cmの方形の平面をなす青灰白色砂質

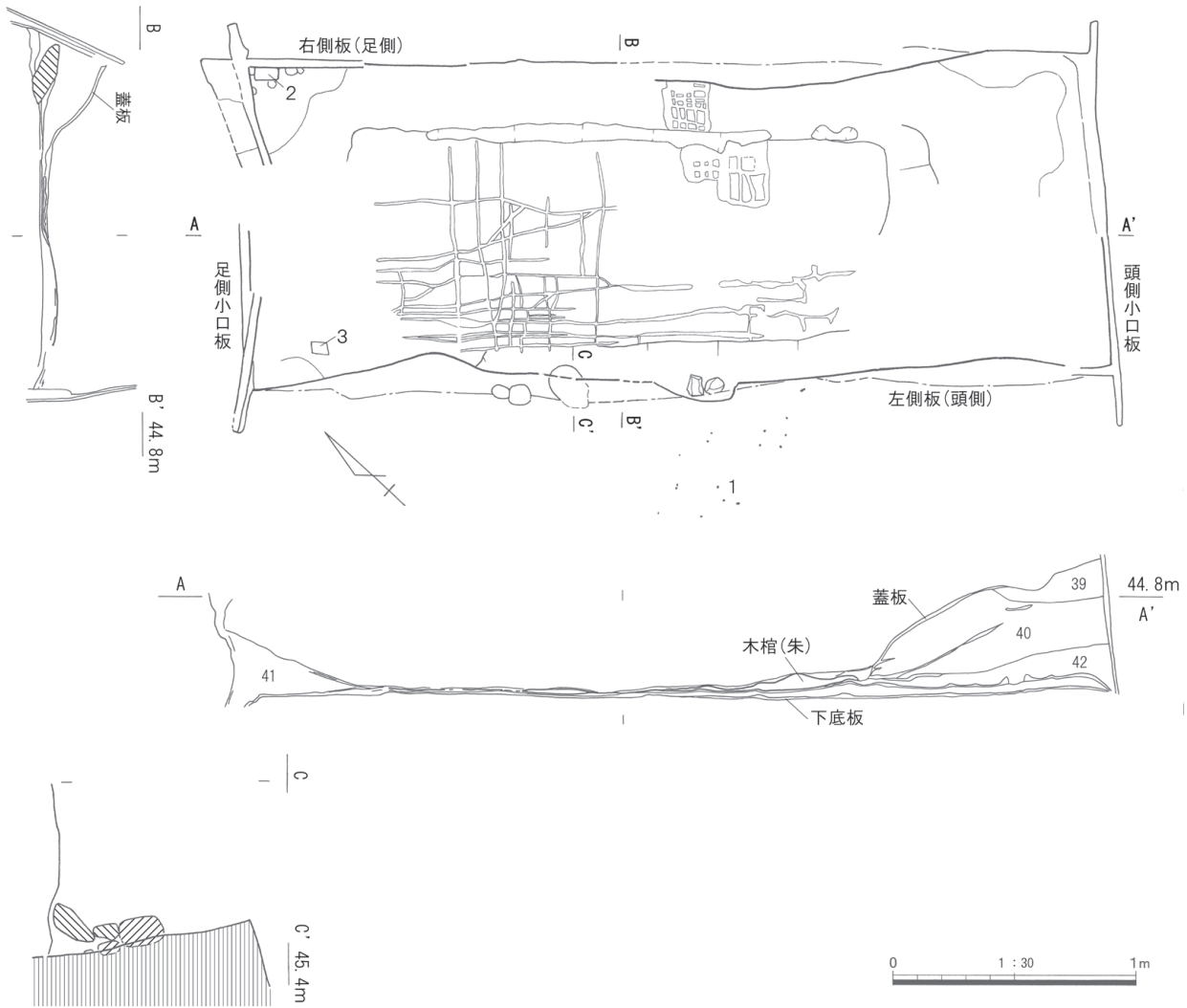


図130 木槨平面(1)・断面 1 : 30

土が流入土中に見られた。上底板の上50~20cmの間を、下がるにつれて隅に向かって斜め下方向にのびるが、それよりも下、さらに木槨構築面にはこれに続く痕跡や掘り込みは認められなかった。検出の段階では内側隅に角材が配された可能性を考えたが、付近の流入土中には流入した円礫も見られることから、倒れ込んだ材、あるいは部分的な土の変化と思われる。なお、これと同様なものが左側板近く(3)にも認められた。同じく上底板の上側40~10cmの間を延びるが、それ以下には続かなかった。

調査は、以下に示す蓋材の調査を経て、木棺の検出、続いて底板・基礎部分の調査に移行した。複数の自然石が木槨底に所在することを把握していたが、底板痕跡がそれらの上下に別れ、石を包む形になり、これらが底板の間に配された石であることが判明した。下底板の下では棧の痕跡を検出し、木槨の全体構造を把握することができた。

c 木槨各部の形状

蓋板 (図129・130、図版27・29) 蓋板は側板外側の墓壇埋土上に残った部分と、内部に落ち込んだ部分に分かれる。まず側板外側の状況であるが、この検出状況は前述のとおりである。蓋板は朱の混じった白色砂質土として把握できた。図125 B42層の上面がこの層の位置であるが、左側板の痕跡に直交して緩傾斜をなす。側板部分が土圧で傾き、水平であった蓋板接地面が位置関係を保ったまま内側へ傾斜した状態である。蓋板の張り出しは側板から25cmである。一方、前述のように頭側の小口側

では墓壇埋土が木槨上端外側に平坦面を形成しないことから、蓋板は小口部では小口板上で収まり、側板側にのみ張り出していたと判断できる。左側板外側蓋板の朱は、外端とその内側が明瞭、一方、側板に近い箇所では不明瞭であり、内側に近い箇所では塗られた朱が流下したとみられる。直線をなす朱は蓋板がよほど広いものでなかったとすれば、大きさをそろえて丁寧な加工がなされたことを示すのであろう。軸線に直交して蓋が架けられたと考えている。

木槨の内側では蓋板が下に落ち込んでおり、青灰白色砂質土とその下の淡赤色粘土として検出した。両層で1 cm弱の厚さである。淡赤色粘土は朱を含んでの発色であり、上記の木槨外側の状況と符合する。落ち込んだ蓋板は、左側板に接する長さ2.3m、幅1.05mの長方形の範囲、これはおおむね木棺の位置を反映するが、ここでは水平に木棺や上底板の痕跡に接していた。それを囲むコ字形の部分では外周が高く、断面が三角形になる流入土に乗り、上記の平坦面に下降する斜面を形成していた。木槨内の蓋板外縁の高さは上底板から頭側小口側で48cm、右側板側で26cm、足側小口側で28cm上である。

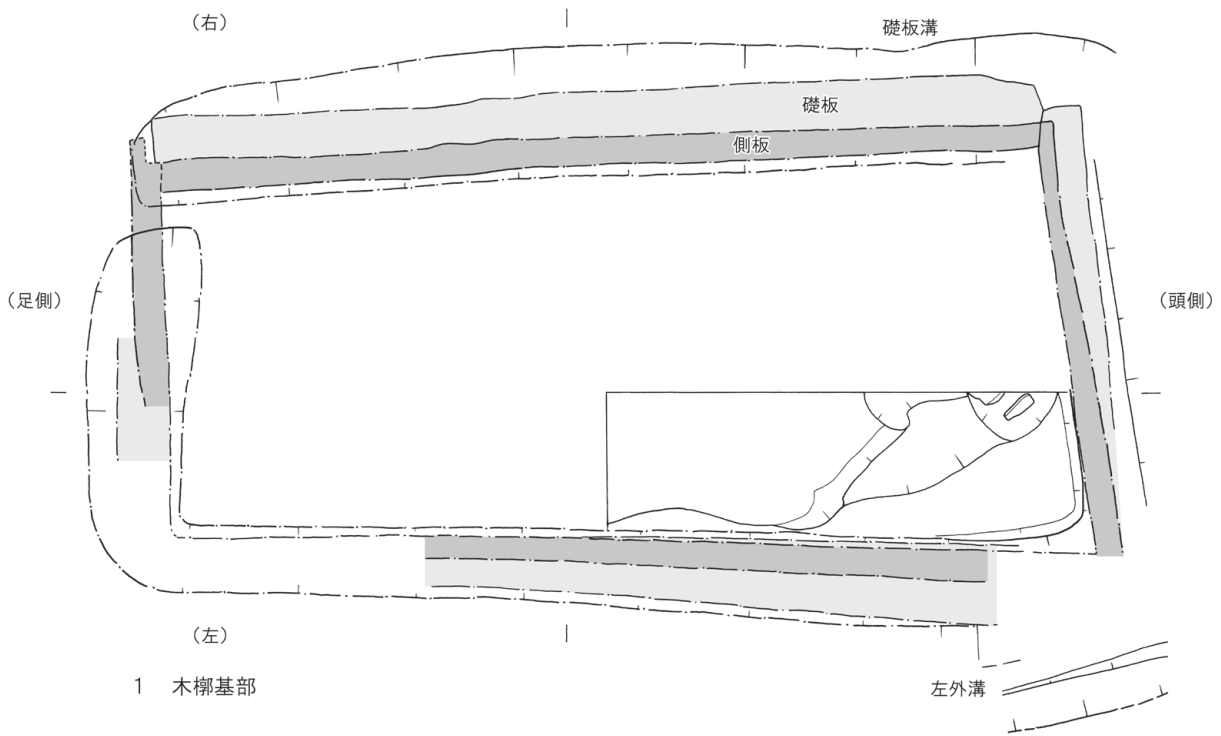
蓋板の痕跡である淡赤色粘土全体を検出した段階で、やや異なる色調の部分の不規則な格子あるいは網状に広がる状況が認められた(図版29-3)。蓋板が水平に落下した範囲を中心に広がっており、幅2~3 cmで、長いもので1.8mにわたって木槨縦断方向にのびる線とそれに交差する細い線からなる。右側板側の斜面では長さ2~5 cmの格子状になる箇所もある。蓋板痕跡の微妙な凹凸が面的な検出で現れたとみられるが、人為的な形状を示すものではなく蓋板、底板等の腐朽や粘土の亀裂などによって生じた可能性が強い。

蓋板下の流入土(図125・126・130、図版31-2・3) 蓋板と底板、側板・小口板によって形成される断面が三角形の部分には流入土が溜まっていた。流入土はA断面頭側では上(A39・40層)、下(A42層)に区分することができる。下層は明褐色シルトと褐色砂質土の薄層が互層をなし水成堆積とみられる。上層は下層と同質であるが上記2者が入り交じった状態で互層にならず、円礫や弧帯文石小片、土器片なども少量ではあるが混入していた。また、上層では層中に混朱粘土、褐色粘土の薄層が認められた。混朱粘土の薄層は断面位置から左側板近くまで広がっており(図133 A1断面 蓋と底板の間の朱層)、板材の可能性も検討したがその確証はなく、土砂の流入が安定した段階に流下した朱が溜まったと考えておく。

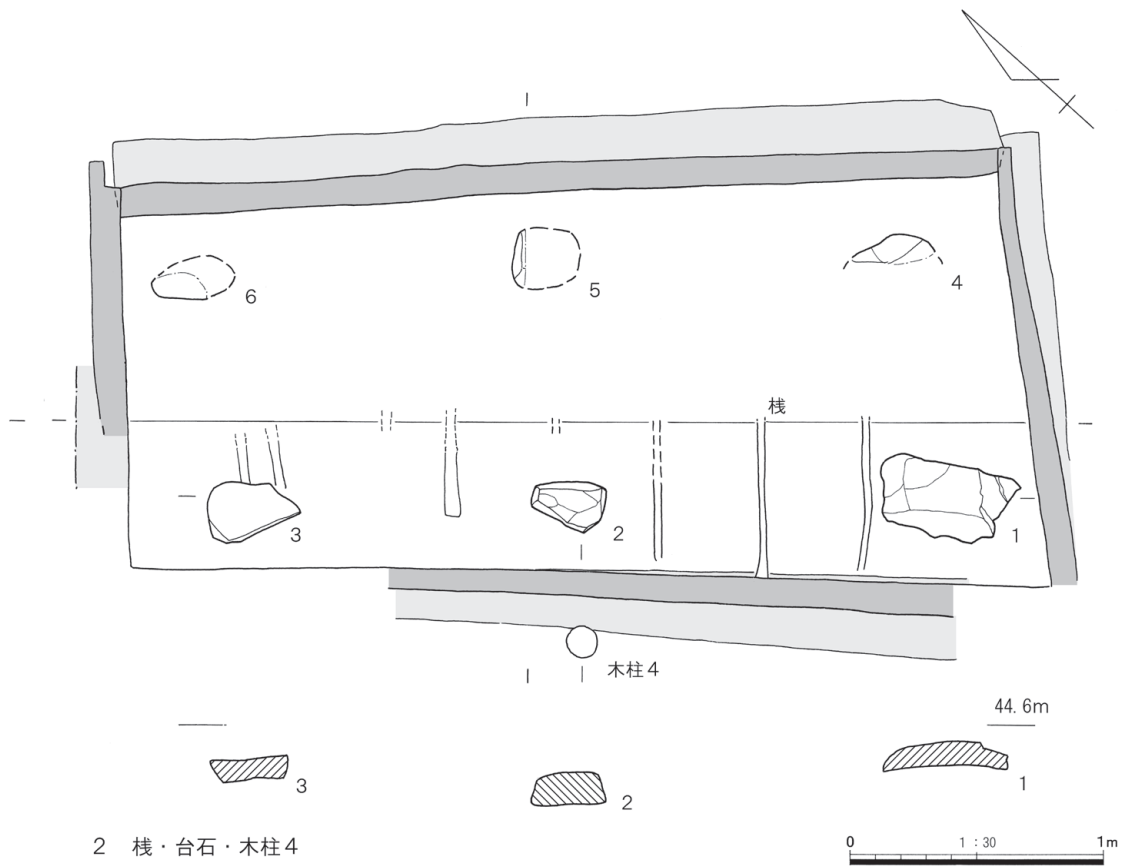
構築後、年月の経過とともに雨水によって土が流入して堆積し、後に隙間が生じて円礫堆の遺物の一部も流入するという経過をたどったようである。この時点では木棺が遺存していたため流入土が木棺を囲む形になったと思われる。円礫堆の底面は頭側と足側の両端が低く、中央で高くなる。弧帯文石の設置箇所を高く作った可能性もあるが、木棺がある程度の期間木槨蓋を支え、その間に両側上方の墓壇埋土が流入したことによって円礫堆底面の形状が生じた可能性が考えられる。また、互層をなす流入土下層の上面は外側が若干高く、薄層は木棺側に緩く傾斜する。木槨蓋の沈下によって木棺側の流入土が圧縮された可能性がある。

左側板の中央に近い位置では、側板に接して大きいもので長さ20cmの礫が所在する。図130 C断面に示すようにこの箇所では縦に3石が壁沿いに重なっていた。蓋板が大きく割れて土砂が流入する過程で盛土に含まれた礫が割れ目から落ち込んだ状態とみられる。

以降は、木槨の基部から順に記載する。木槨を構成する木材は粘土等からなる痕跡に変化しており、平面での検出は容易でないうえに上部の除去が多くなっていく。そのため、図133に示すA1~Gの断面(図版30・31)をもとに各部材の平面形の把握を行った。図131-1では平面での検出部分を実線、断面間の推定を一点鎖線で示したが、図131-2・図133平面図ではその表示を省略した。礎板東隅と北隅については平面検出を行ったが、木槨左側板足側など、遺構保存のため未掘とした箇所も少



1 木槨基部



2 棧・台石・木柱4

図131 木槨平面(2) 1 : 30

なくないため、推定が多くなる箇所がある。

礎板溝 (図131-1・図133) 基礎となる礎板を設置するため、木槨の平面形にあわせて溝が掘削されており、これを礎板溝と呼ぶ。設けられるのは頭側小口を除く3方で、コ字形になる。溝の幅は25～48cm、深さは内側の地山から7～21cmである。断面形は木槨内部の側が垂直に下がり、外側は墓壇底から斜めに掘り込まれている。底面の高さは足側小口部が両側板部分よりも15～20cm高い。

この溝は基礎となる礎板を収めるためのものであるが、排水溝と一連で掘削され、排水溝に接続する。溝の壁面で鉄分が沈着する箇所があり (A87・B74層) 排水の役割も果たしたとみられるが、底面の高さは各断面で6cm程度の高低があり一様の勾配とはなっておらず、他と同じ埋土で埋められている。結果として排水溝の役割を果たすことになったのか、当初からの目的であったのかは不明であるが、前者を考えておく。

北隅では溝は続いておらず足側小口の側と右側板側に分かれる。足側小口の下側に大石が所在したため深く掘り下げることができなかった結果、北隅で溝が途切れることになったと思われる。ただし、西隅は未調査であるため足側小口部分と側板部分で溝が分かれる可能性がないわけではない。

頭側小口部分では、右側板の礎板溝底から22cmと一段高い位置に地山を削り出して幅23cmのテラスが設けられており、テラスの外側は排水溝の掘り込みとなる。排水溝と近接しているため、溝の外側を省いた形をとったとみられる。他と同様、木槨内側は垂直に掘削される。

この溝を4～16cm埋め戻し、その上に木槨基礎となる礎板が設置される。頭側小口ではテラスの上に直接礎板が置かれる。なお、図131-1、図133 C断面に見られるように、左礎板の頭側では礎板溝と肩を共有する溝が外側に設けられている。必ずしも適切な名称ではないが左外溝と呼ぶ。西からの湧水を除ける溝と考えており、これについては排水溝でふれる。

礎板 (図131-1・図133) 側板・小口板の基礎となる礎板は、厚さ2～5cmの平板な灰色粘土となっていた。幅は左礎板 (図133 C断面) 31cm、右礎板 (E) 30cm、頭側小口礎板 (A1) 11～(D) 18cm、足側小口礎板 (A2) 24cmで、両側面で広く、頭側の材がやや幅が狭い。

遺存した厚さは当然本来のものではない。木槨東隅では頭側小口礎板と右礎板の端が重なり前者が上になることを確認した。頭側小口礎板の右側はD断面に示すように外側が下がっているため厳密な高さを求めにくい。2つの礎板の検出高さの差は12cm前後であり、右礎板に頭側小口礎板が直接乗るとすれば、これが右礎板の厚さを示すことになる。なお、図131-2には右礎板の形状を示した。また、足側小口礎板は、おそらく大石の存在で右礎板にまで伸びないが、同様の上下関係であったとみられA2断面 (足側礎板) とG断面 (右礎板) の高さの差は11cmである。これらから、右礎板の厚さを12cm前後と考えておく。一方、左礎板はA1断面とB2断面で同様に算定すると6cmとなり、礎板の厚さに差があった可能性がある。

頭側・足側の両小口礎板の高さはほぼ等しい。左礎板 (B2断面) は右礎板よりも約5cm高い。C



図132 木柱4 1:30

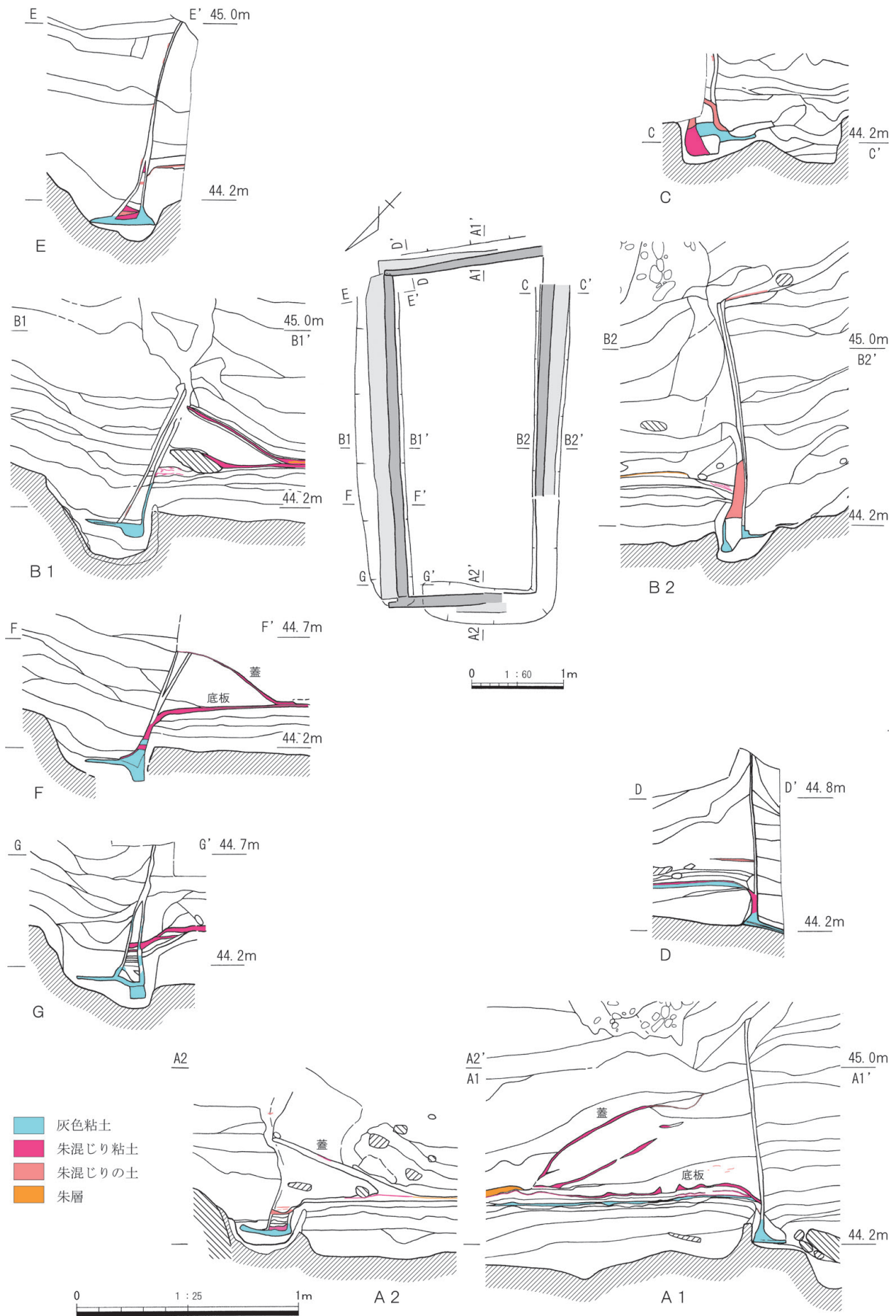


図133 木槨下部断面 1 : 25

断面ではさらに5 cm高く頭側小口礎板とほぼ同じ高さになるが、このことについてはよくわからない。

B1～G、C・B2断面では、礎板痕跡粘土の下面内側が断面方形に突出しており、左右両側の礎板の下には角材が置かれたと考えられるが、右礎板頭側のE断面には見られず、礎板よりも短い。また、B1断面のトレンチでは、この材が途切れる箇所が見られ、複数の材からなるようである。角材痕跡の厚さや幅は断面ごとに異なっており、腐朽の過程で縮小が生じたと思われる。痕跡の最も大きい数値をとれば、角材の幅はC・B1の11cm、厚さはFで8 cmである。これを礎板下部材と呼ぶが、最も重量がある側板を支える、あるいは水平をとるために角材が配されたとみられる。

B2断面・C断面に見られる礎板痕跡は他の断面での形状とやや異なっており、礎板や礎板下材のあり方が異なる可能性もあるが、痕跡が形成される過程での差と考えている。

側板・小口板 (図133) 木槨の壁を構成する側板、小口板は礎板の内側から垂直に立ち上がっていたとみられるが、土圧によって内傾している。B2断面のように最下部で本来の直立した形状をとどめるものもある。木槨の壁面を形成していた部分では、板は厚さ1 cmの明褐色砂質土とその外側に添う厚さ1～2 cmの赤褐色土となっているが、内外両側が埋められる基部では幅を残しており、細長い縦長の三角形の断面をとるものが多い。

基部の断面のうち、A1・D断面では側板・小口板は礎板と一連の灰色粘土となって三角形の断面をなし、A2以下の断面は基本的に内外の両表面に薄い砂質土等が形成され、内部はそれとは別の粘質土や砂質土になっている。後者の基本的な形状は同一であるが、中の層の厚さや土質は断面ごとに異なる。A2断面を例にとれば小口板痕跡下部の内側には厚さ1～2 cmの砂質土と粘質土が互層状に形成されており、それらの上、下端から10cmの高さには水成堆積の層が形成され、その中に流れ込んだ朱の薄層が見られる。朱の流れ込みはE・G断面でも明瞭で、粘土の多様な色調と合わさって複雑な色合いを示していた。

これらからみて、地下水位が高い礎板から側板・小口板の下端にかけては板材の腐朽によって粘土が形成され、それよりも上では墓壇埋土・崩落土と板材の間に水あるいは板材表面の腐朽によって砂質土が形成される。板材下部では腐朽とともに空隙が少しずつ形成され土砂が流入することによって板材の幅が遺存し、上部では土圧で本来の厚さが失われるといった過程が考えられる。

下端での厚さはややばらつき、D断面が6 cmと薄く、A1断面が10cm、C・E・G断面が14cm、他が11cmである。数値に差があるが板の厚さにばらつきがあったのではなく、痕跡の形成状況の差と考える。これらのうち、14cmの数値は内外表面の薄い砂質土を含んでのものであり、それは木材の表面部分に形成された土層とするなら、約10cmが側板・小口板の厚さとなる。

側板と小口板は垂直であったため面そのものは全く残っておらず、朱の塗布を判断する材料は少ない。先に足側小口部では小口板の中ほどにあたる高さで朱の広がりが見られたが(図129-1)、朱の塗布を確定する材料とすることはむずかしい。前述のように板材基部で見られる朱は、底板の朱層に続く状況がしばしば見られ、多くが底板からの流入とみられる。底板よりも高い位置で朱を含む土が見られるのはB2断面(B80層)とE断面である。木槨蓋の朱が流れ込んだ可能性を除くことはできないため確実な根拠とはしがたいが、側板にも朱が塗られたと考えておく。

側板や小口板の構造を考える手がかりは少ない。A2断面は上記のように小口板痕跡の下端から10 cmで土層の状況が変わる。また、B2断面でも下端から9 cmで土層の境界が見られる。これらが壁を構成する木材の境界、つまり、それを高さとする角材の存在を示す可能性が考えられる一方、腐朽の過程の一段階とも考えられる。

置土 木槨の底には土が敷かれ(図127 埋土a・b)、礎板底面よりも20cm高い位置に底板の基礎とな

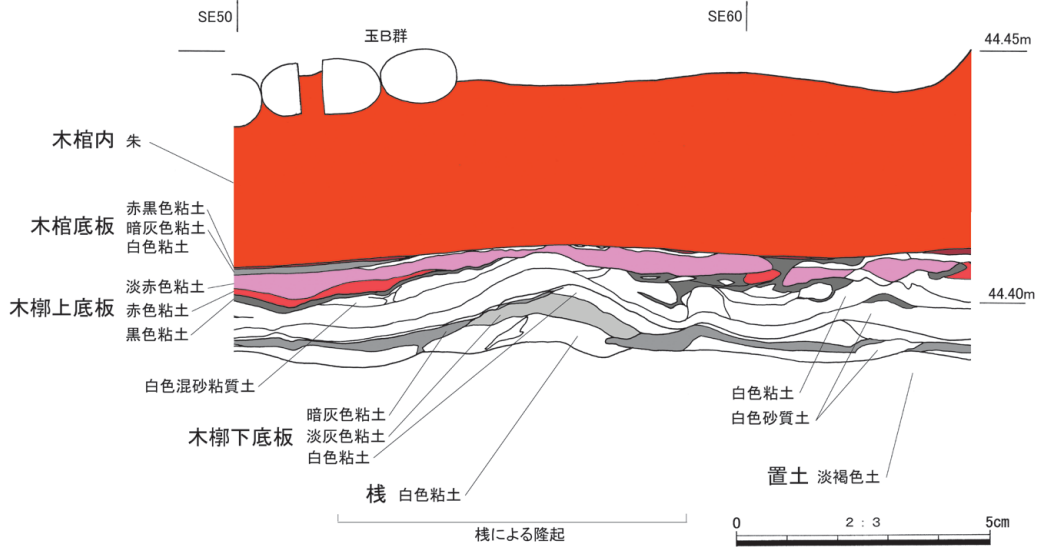


図134 木槨・木棺断面 2 : 3

る面が設けられる。墓壇底に盛土を行っておき礎板溝の掘削と一連で削り出したと考えることもできるが、連続した工程であったとすれば垂直に削り出すことはむずかしいと思われ、側板等の構築に応じて土が入れられたと考える。置土の上面は縦断方向はほぼ水平であり、横断方向は中央から縁にむかってそれぞれ約3cm下がる。A・B断面に見られるように、縦断方向では地山が掘り残されていて縁の置土が薄くなるのに対し左右両側は置土が厚く、側板等の腐朽によってそれらが若干外に傾いて上面が沈下したとみられる。

棧(図131-2・134、図版30-3、31-4・6) 下底板の検出過程で下面では小口に平行する棒状の盛り上がりが見られ、規則的な形状から、棧と判断した。底板間の流入土が多かった頭側では検出しやすかったが、上下の底板が密着に近い足側ではかかすかにそれとわかる痕跡を把握できる程度であった。間隔は頭側では規則的に40cmであるが、足側では20cmや13cmとばらつく。8本の存在を確認した。棧の痕跡は遺存のよいもので幅5cm、高さ3cmで、断面は山形あるいは紡錘形をなし下底板の粘土が上下に分かれて中に褐色砂質土が入るものや白色粘土が高まるものなど、状態は一様ではない。基本的に下底板痕跡を押し上げる形状から、基礎の土中に埋め込まれるものではなく置土の上に置かれて下底板を支えるものと判断した。本来の大きさや形状は明らかでないが、沈下した底板など上に大きく影響を与えており、埋め込まれる礎板等とは異なって形状を保持しにくい状況を考慮すれば、遺存した痕跡よりもかなり大きいものであったと考えられる。

平面・断面で検出できたのはこの8本であるが、図示した最も頭側の棧と頭側小口板の間では下底板痕跡の縦断面が小さく波打った形状を示す。規模が小さく、それらの下部は土質の変化はないが、下底板痕跡が隆起する点で棧痕跡と同様である。底板が腐朽する過程で頭側小口側からの土圧で小規模な褶曲を生じた可能性もあるが、明瞭な痕跡を残さなかった細い棧が3ないし4本所在した可能性が考えられる。

下底板 木槨の底を形成する各材は扁平に圧縮された痕跡となっており、木棺底から下底板までが2cm前後の厚さに圧縮され(図134、図版31-4・5)、上底板は台石にそって盛り上がり、下底板は台石下に広がっていた。

下底板は厚さ1~5mm前後の暗灰色粘土となっており、底全体に広がる。粘土中には微細な炭粒が見られ、木材の存在を示す。一部に朱が見られるが、これは上底板などの朱が流れ込んだものと思わ

れる。棧で支えられることから、主軸方向に長い板材複数で構成されたと考えられる。

台石 (図131-2) 下底板と上底板に挟まれるように石材が検出され、2つの底板の間に配された台石と判断した。台石は2列6個が置かれる。配置は横断方向90cm前後、縦断方向1.4mの等間隔で、側板に近い側に配されていた。これらのうち右側の3点(4~6)は一部の検出にとどめた。台石1は花崗岩類で割石かと思われる。2・3・5は花崗岩類角礫、4・6が大形の円礫である。長さは56cm(台石1)~30cm(台石2)と不ぞろいである。厚さは、台石1を例にとれば石自体の厚さは9cmであるが反りをもつため高さは12cmで、台石2の13cmに近似する。似た高さの石を選び、薄い板等で上端の高さを調整したと思われる。

これに乗る上底板の構造は下記のように推定がむずかしいが、いずれの場合でも水平に設置するには台石上での調整が必要となる可能性があり、台石が外側寄りに配されるのはそのためかもしれない。そうであれば、この高さよりも上の側板・小口板は上底板の設置後に設けられたことになる。

上下の底板間には台石以外にそうした高さ調整あるいは保持のための木材が所在した可能性を考えるとできる粘土層・朱層が断面の数ヶ所に見られる。1つはA・B断面の交点付近に見られる白色粘土で、部分的に黒色粘土、朱混じり粘土を含む。また、同じくA断面の頭側小口に近い部分で検出した厚さ1cmの朱混じり粘土、B断面右側に見られる厚さ5mmの白色粘土がある。これらは上下の底板痕跡の間に位置するが、平面的に検出したものではなく、また、2番目の朱混じり粘土は下底板上に流入した土の上に流下した朱が溜まった可能性がある。他の部材とは異なり部分的なもので判断がむずかしいが、上底板の高さ調整等を考える手がかりでもあるため、調査の所見として記しておく。

上底板 下底板と同じく木槨内全面に広がる。あわせて約1cmの厚さの混朱粘土で、細別すれば黒色粘土・赤色粘土・淡赤色粘土の3層からなり、これらの中には下底板と同様微細な炭粒が見られる。また、赤色粘土・淡赤色粘土は朱の発色によるものであり、板の表面に朱が塗布されていたと判断できる。足側では下底板とごく近接した位置にあるが、頭側ではそれとの間に厚さ2~5cmの白色砂質土等が入っている。朱は木槨下にも見られ、棺の設置前に塗布がなされている。

縦(A1)断面の頭側小口板と木槨小口との間では、これが途切れる箇所がある。朱混じり粘土層の端が高さ3cmの小さな三角形の断面をなし、8cmにわたって途切れる。平面では断面位置から南に湾曲しながらのびる長さ20cmの溝の形をとる(図135)。端部は下に位置する台石に添って終わっており、検出状態が必ずしも本来の形状を示さず沈下の過程で痕跡が消失した可能性が考えられる。仕切板あるいは横木などが設けられたことが考えられる。

上底板の構造については、小口板・側板の内側に設けられた複数の材からなり、台石上に横断方向に渡した材によって支えられたと考えておく。上底板が小口板に挟まれる構造もありうるが、台石の機能を理解しにくくなる。

木柱4 (図131・132、図版31-1) 木槨左側板中央(B断面)部分に設けたトレンチの墓壇埋土下部で、淡灰色粘土に変化した木柱を検出した。左側板痕跡の外側13cmの位置で、礎板外縁に接する。下端は地山面に達するが地山を掘り込んでおらず、木槨構築にしたがって入れられた墓壇埋土によって固定された太さ13cmの木柱が粘土化したとみられてよい。そうした構造や位置から、側板を外から支えたり固定するといった機能は考えにくい。

木柱4は木柱2と上下の関係にあり、両者の平面上の位置を図132-2に示した。木柱2の調査の際、礎石下で直径18cmの円形をなす黒色土を検出した(図132-3)。薄い皿状で深さがなく柱との確証は得なかったが、木柱4上端が腐朽し周囲の土が落ち込むなどして形成された可能性が考えられ、木柱4が木柱2の礎石直下に達していたと推定する。2つの柱の中心位置は若干ずれがあり木柱2が南に

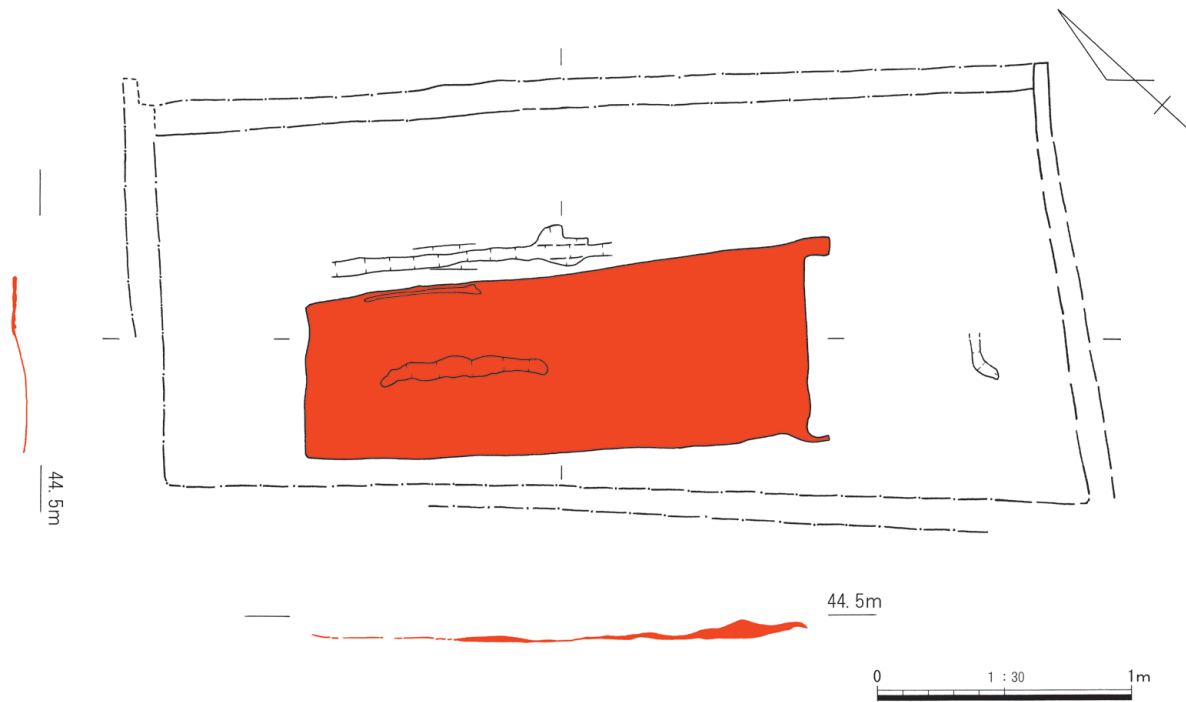


図135 木棺平面・断面 1 : 30

位置する。木槨の腐朽による墓壇埋土の傾きによって木柱2の位置が若干動いている可能性があるが、それ以外に、断面からわかるように木柱4は外への若干の傾きをもって立てられているため、2つの柱の基部が完全には重ならないことになったと考える。木柱4を垂直に立てると上端が木槨蓋の下になるため、やや傾けて設置したと推定する。

木柱が深くまで続くことに意味があったとも考えられるが、木柱2の設置は木棺が見えなくなる木槨蓋設置後であるので、被葬者の位置を把握し木柱2を立てるべき位置の目印として木柱4が設置されたと推定する。こうした周到な作業によって、厚い盛土によって隔てられても弧帯文石を目的の位置に置くことができたと考える。

d 木棺 (図135、図版28・29)

木棺は棺材が失われていたが、敷き詰められた朱の輪郭によって形状を把握することができた。木槨のやや奥、左側板に近接して設置されていた。歯の出土位置から南東が頭位と判断できる。木棺の軸線は木槨の軸線に対して若干斜めになる。

内法の長さは195cm、頭位となる南東小口で幅78cm、足側の北西小口が幅59cmで、頭側が19cm広くなる。頭側小口では朱面が隅から細長く軸線方向外側に伸びており、1つは幅7cm、長さ10cmの長方形、もう一方は角状になる。棺内の朱が木材の合わせ目にそって流出した状況としてよい。このことから、木棺は小口板を側板が挟む型式と判断でき、この突出の長さが小口板の厚さを示し、約10cmの厚さであったと推定できる。朱層の断面形から棺は平底である。

棺内には純度の高い朱が厚く敷かれており、鮮やかな赤色を呈した。粉状で重く、検出した朱の総重量は32kgをこえる。歯や副葬品の配置から、頭の位置と判断できる箇所にもっと多くの朱が用いられていた。木棺の中軸上、頭側小口近くでは朱層の厚さは2.5cm、頭側小口端から25cm付近で朱層は最も厚く8cmに達する。足側に向かっては朱層が薄くなり、A・B断面の交点で1.0cm、足側小口付近では5mm前後である。両側板に近い箇所では薄く、朱面となる。棺内副葬品の玉B群の一部は完全に朱に埋まった状態で検出しており、厚い部分の朱には遺体上に撒かれたものがあったとみられる。なお、

B断面では朱層は平面をなさないが、これは左側板の側は上下の底板間の流入土が多く、上底板が若干高くなるためである。

木棺内足側の朱面には細長くくぼみが認められる。棺外にもそれと平行し同様の幅の溝状のくぼみが見られ、上底板が朽ちる過程で生じた小規模な落ち込みと考えられる。前述の木槨蓋の上面で見られた形状、特に縦断方向に伸びる線は、同様に上底板の腐朽も反映した可能性が考えられる。

木棺上は木槨蓋痕跡の朱を含む粘土層が覆う。この層の下部が棺蓋痕跡とみられるが、これを平面的に把握することはできなかった。一方、底板の痕跡は朱層と木槨上底板痕跡に挟まれた厚さ2mm以下の赤黒色～暗灰色粘土およびその直下に広がるきわめて薄い白色粘土として捉えられた。赤黒～暗灰色粘土には微細な炭化物粒が含まれ、それが木材に由来することを示しており、平面的な広がりや朱層の広がりとおおむね重なる。

木棺左側板の足側は木槨左側板に近接した位置になる。後者は推定位置であるが、それと木棺朱面足側端との間隔は10cmで、小口板の推定される厚さと一致する。木棺の足側部分は木槨側板に接していたと考えてよいだろう。木棺の本来の外形は、長さについては棺内長さに小口板推定厚さを加えた215cmを若干上回る大きさ、頭側の幅約90cmと想定できる。棺底部の構造、側板・小口板が底板を挟むのか乗るのかは判断しがたい。

5 木槨の構築

木槨は複数の大形部材を組み合わせて構築されるが、再三述べたように木材が痕跡と化しているため本来の形状を詳細に知ることはむずかしい。憶測が多くなるが、ここで法量を中心に復元的に整理を行っておく。

棺槨の配置 木槨の設計は入念になされたと考えられるが、地山の大きな大石が施工の障害となり、現地で調整がなされたのではないかと思われる。木槨の主軸がN42°W、それに対して木棺の主軸はN45°Wと、両者の軸線がわずかに振れるのも、それによる可能性が考えられる。

墳頂平坦面の中心点を正確に求めることはむずかしいが、得られた資料から木棺頭側左隅の近くと推定した。被葬者の頭部が墳頂の中心になるように木棺が設置されたと考えてよい。

木槨は墓壇上面の輪郭に対してはほぼ中央になるといえるが、墓壇底に対してはかなり南東に寄っている。木槨頭側小口、排水溝、墓壇斜面の間はかなり狭く、頭側の礎板を設置するテラスも礎板の幅に近い。墓壇北西の底面、足側小口の下に所在する大石のために足側礎板の位置を現状よりも北西に寄せることがむずかしく、その結果として木槨の頭側が墓壇斜面に対して窮屈になったと考えられる。左礎板足側付近の状況がわからないが、墓壇西隅には大石が多く、その付近にも支障となる大石が存在する可能性もあり、それらとの兼ね合いのため木槨はやや歪んだ平面形にせざるをえなかったのではないかと思われる。

地山の大きな大石はさまざまな箇所で支障となった可能性が強いが、立石や南西突出部前端的列石など大石を取り回す技能をもちながら除去していない。この理由はよくわからないが、墳丘の構築にあたる人員と埋葬施設の構築にあたる人員の数が大きく異なっていたのかもしれない。

木棺は木槨の中央ではなく西に寄り木槨軸線に対しやや振れる。これは上記のような支障生じても計画された木棺の位置と方位、墳頂平坦面中央での主軸との直交に努めた結果と考えることができる。

部材 部材がどのようなものであったかは大きな課題であるが、それを知る手がかりはあまりない。推定を多分に含むため数値の1桁はあまり意味がないが、各部材の法量をまとめれば以下のとおりである。なお、上・下底板の長さは左側の推定値を用いたため右側板よりも長くなる。

- 木槨 右礎板 長さ352cm 幅30cm 厚さ12cm (左礎板厚さ6cm)
- 右側板 長さ349cm 幅98cm 厚さ10cm
- 頭側小口板 長さ165cm 幅(高さ)90cm (礎板厚さ12cmの場合)
- 上・下底板 長さ365cm 幅160cm 厚さ—cm
- 台石 厚さ13cm
- 蓋板 長さ405cm 幅205cm 厚さ—cm
- 木棺 小口・側板 厚さ10cm

水平に置かれた材の厚さは礎板をのぞいて推定の手段がないため、上下の底板・木棺底板・蓋板を厚さ10cm、棧と台石上の支持材をそれぞれ5cmと仮定すれば63cmである。木槨蓋と木棺蓋の間には玉A群が置かれるためそれらの計に1cmを加えた数値と、木槨底面から蓋板下面までの高さ88cmとの差24cmが木棺内法高さとなる。上底板底面を削り込んで支持材を取めたとすれば支持材の厚さはなくなるし、強度をそれほど必要としない底板の厚さは実際には上記よりも薄かったであろうから、棺の内法高さは試算よりも余裕のあるものであったろう。しかし大幅に数値が変わるとは考えにくく、木槨・木棺の上下空間はそれほど大きいものではなかったといえる。

各材のうち、側板・小口板が板材であったのか角材を重ねたものであったのかも判断がむずかしい。A2・B2断面で見られた土層の境界が木材の形状を反映したものであるとすれば、角材であったことになる。また、礎板の厚さを前述の数値とした場合の礎板上面は木槨底部の置土上面の高さよりも2~17cm低い。側板等を設置した後に置土を入れたと考えるが、幅の広い板で形成される側板では、その後になされる上底板の水平をとる作業がむずかしくなる。そのように考えれば、側板・小口板の少なくとも下部は角材で構成された可能性がある。

上下の底板や蓋板については、長さとはかくとして1.6~2.1mの幅が必要となるが、それを一木で得ることはむずかしく、複数の板材で構成されたと考えるが、それらが部分的に落下するなどした痕跡が全く見られないことが推定をむずかしくしている。下底板は長軸方向に長い複数の板からなり、

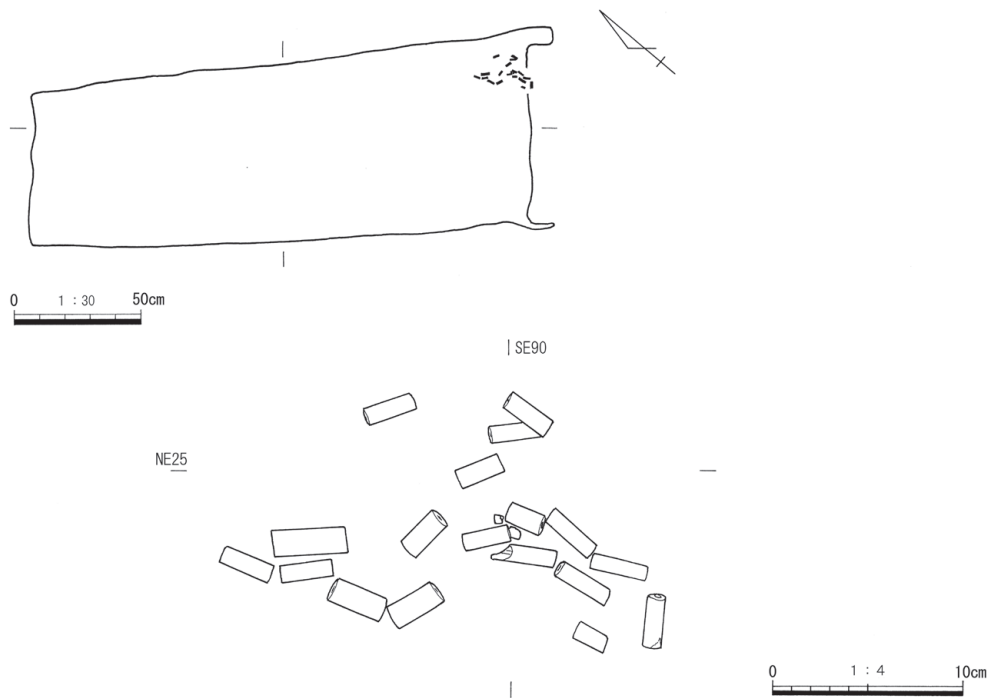


図136 棺外副葬品出土状況 1:4、1:30

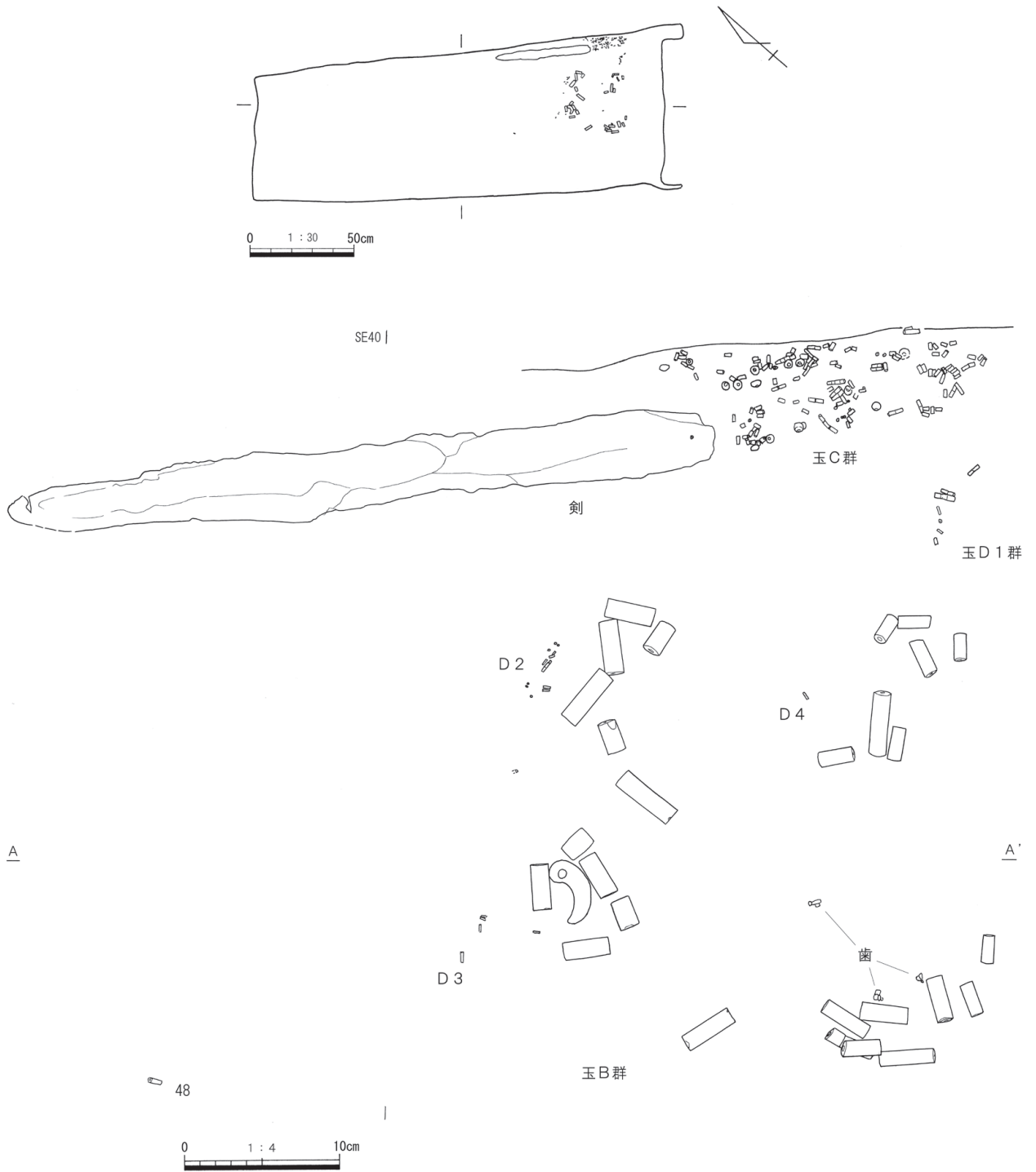


図137 棺内副葬品出土状況 1 : 4、1 : 30

蓋板は長軸と直交方向に複数の板が渡されたと考えておく。

棺の設置段階 上記のように側板等が角材によって構成されたとした場合、棺設置の段階は2つの可能性が考えられる。1つは上底板が設置され側板等がある程度組み立てられ、墓壇埋土d～g（図127）が入られた段階。もう一つは側板等の設置が終了して墓壇埋土h～lが入った段階である。そのいずれかは判断しにくい。墓壇埋土上部に朱の散布が多いこと、また、同時期の竪穴式石槨が石槨壁面を構築した後に棺を収めることができる形状であることから、後者を考えておく。なお、棺は組合式であるが、土による固定はなされない。木槨や石槨の組合式木棺ではどのように材の結合がなされたか

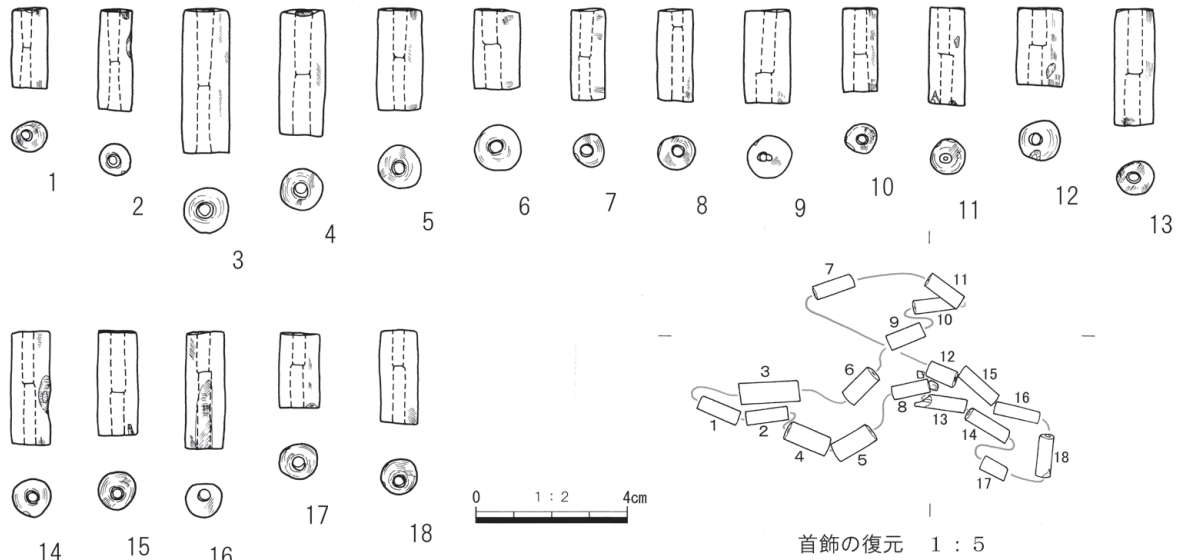


図138 棺外副葬品 玉A群 1:2

表1 玉A群観察表

No.	種別	長さ(mm)	直径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	穿孔	色
1	碧玉管玉	21.6	9.3	3.0	3.31	両面	濃暗緑色
2	〃	27.2	9.1	3.2	4.02	〃	〃
3	〃	38.6	12.8	4.4	11.32	〃	〃
4	〃	32.8	12.5	4.6	9.21	〃	〃
5	〃	27.6	12.0	3.7	7.31	〃?	〃
6	〃	21.1	12.6	4.1	6.13	〃	〃
7	〃	24.4	9.1	3.6	3.42	〃	〃
8	〃	25.0	9.9	3.2	4.38	〃?	〃
9	〃	25.6	12.4	4.5	6.84	〃	〃
10	〃	22.7	9.4	4.0	3.37	〃	〃
11	〃	26.3	9.9	3.3	4.68	〃	〃
12	〃	21.1	12.3	3.8	5.74	〃	〃
13	〃	31.3	10.5	4.1	5.83	〃	〃
14	〃	30.1	10.9	3.3	6.05	〃	〃
15	〃	28.2	10.9	3.8	5.97	〃	〃
16	〃	31.7	10.4	3.3	6.07	〃	〃
17	〃	20.6	10.7	3.3	4.26	〃	〃
18	〃	24.9	10.3	3.3	4.69	〃	〃

考える必要がある。

6 副葬品

a 副葬品の出土状況 (図版29)

棺外 (図136) 上記のように木槨蓋と木棺蓋の痕跡は融合し朱混じり粘土の状態であるが、この層の中から玉A群が出土した。平面位置は木棺の頭部右隅で、棺蓋上に置かれたと判断した。玉A群は碧玉製管玉18点からなり、緒が通った状態で副葬されたと判断できる。

棺内 (図137) 木棺の南東側、小口板から30cm付近を中心に歯と副葬品が出土した。歯小片が長さ8cmの範囲内の3箇所に点在しており、それを囲うような形で玉B群が出土した。翡翠製勾玉1、瑪瑙製棗玉1、碧玉製管玉27からなり、着装の状態であった。それらの右隣には木棺右側板に接する位置

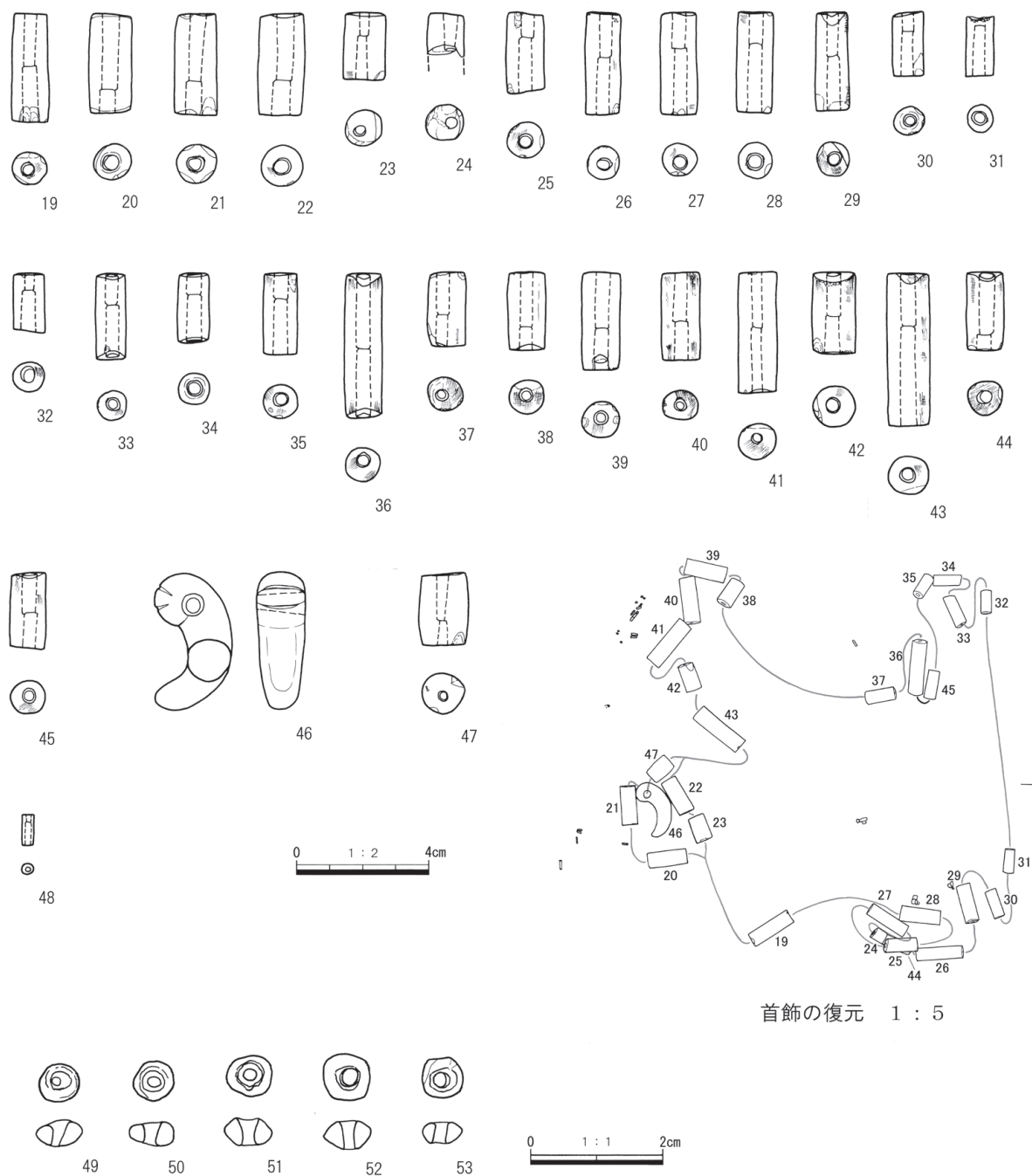


図139 棺内副葬品(1) 玉B・C群 1:2他

にガラス製の細身管玉とガラス製小玉多数が一括して置かれていた(玉C群)。ガラス管玉は方向をそろえて並ぶものが多く、緒を通った状態であったとみてよい。これらは有機質の容器に収められたのかもしれない。

玉C群と同じ細身のガラス管玉とガラス小玉は、B群付近にも若干の量が見られ、これをD群とする。D群はB群をとりまくように所在する。C群とB群の間にはガラス管玉の小さなまとまりがある(D1群)。また、B群の足側にはガラス管玉12、ガラス小玉9点が点在する(D2群・D3群)。ガラス管玉の向きは全くの不規則ではなく、これらが散布する軸線、やや斜めに棺を横断する方向になるものが多いことから、間隔は広いが一連であった可能性が考えられるが、管玉41(図139)付近(D2群)と管玉21付近(D3群)それぞれでまとまると見るべきかもしれない。B群の間に散財するガラ

表2 玉B群観察表

No.	種別	長さ(mm)	直径(mm)	孔径(mm)	重さ(g)	穿孔	色	端部の剥離等	取上げ番号
19	碧玉管玉	34.1	11.4	4.6	7.50	両面	緑青色	○	1
20	〃	30.4	13.1	5.0	8.35	〃	〃		2
21	〃	31.1	13.3	5.2	8.92	〃	〃	○	3
22	〃	31.8	13.9	5.3	10.11	〃	緑青色		6
23	〃	20.7	13.0	4.0	5.64	〃	〃		7
24	〃	12.8	11.8	4.6	2.54	〃	〃	欠損	8
25	〃	25.0	11.8	4.5	5.65	〃	青緑色	○	9
26	〃	31.8	11.0	4.7	7.16	〃	〃	○	10
27	〃	31.2	11.1	4.7	6.20	〃	緑青色	○	11
28	〃	31.0	11.3	5.8	6.07	〃	〃	○	12
29	〃	30.2	10.3	4.5	5.11	〃	青緑色	○	13
30	〃	19.9	9.5	4.3	2.81	〃	〃	○	14
31	〃	18.4	8.5	4.7	1.98	〃	緑青色	○	15
32	〃	18.1	9.9	5.0	2.71	〃	〃	○	16
33	〃	26.3	9.2	4.4	3.47	〃	〃	○	17
34	〃	21.4	9.3	5.3	2.65	〃	〃		18
35	〃	24.9	10.6	4.4	4.66	〃	青緑色	○	19
36	〃	43.9	11.5	4.1	9.50	〃	〃		20
37	〃	22.9	11.6	3.8	5.07	〃	緑青色	○	21
38	〃	24.0	11.4	4.0	5.05	〃	〃	○	22
39	〃	30.0	11.5	4.6	6.61	〃	〃	○	23
40	〃	26.9	11.7	4.1	5.95	〃	〃		24
41	〃	37.0	11.7	3.1	9.08	〃	〃		25
42	〃	25.0	13.2	4.7	6.82	〃	〃	○	26
43	〃	46.9	12.9	4.4	13.38	〃	青緑色		27
44	〃	24.0	11.2	4.5	4.89	〃	〃	○	28
45	〃	23.7	10.8	4.4	4.58	〃	緑青色		29
46	ヒスイ勾玉	41.6		7.0	20.62	片面	緑色		4
47	瑪瑙棗玉	22.6	15.0	3.1	8.49	両面	褐色	○	5
48	碧玉管玉	9.7	3.8	1.9	0.20	〃	緑青色		45

ス管玉（D4群）は、管玉21の下、同21の左、管玉36の足側の3点である。D4群の中にはB群管玉の下に位置するものもあり、単純に遊離と考えることはむずかしい。管玉48についてもいえることであるが、別に小さい装飾があったか、一部が抜き出されて配置されたなどの理解が必要となる。

玉B群から約30cm足側に離れた位置で、碧玉製小形管玉48が単独で出土した。鉄剣は、棺側近くで切先を棺頭側小口に向け、玉C群に接して置かれていた。

b 副葬品

副葬品は玉類と鉄剣で、玉類は棺外副葬品のA群と棺内のB・C・D群からなる。

玉A群（図138・表1）、図版35-1）大形の碧玉製管玉18点からなる。濃い暗緑色を呈し、色調はよくそろっている。これらのうち管玉14は一方の端が割れており、破片は近接して所在した。木槨蓋板が沈下した際に生じた破損とみられる。

長さ20.6～38.6mm、太さ9.1～12.5mmで、長さ2～3cm、太さは10mm強のものが多いが、3は長く太い。これらから復元できる首飾りの長さは48cm以上、重さ103gである⁷⁾。

5・8の2点がやや明確でないが、両面穿孔が基本で、孔の食い違いはきわめて小さい。孔径は3.0～4.4mmで、3.1mm前後と4.0mm前後の2群に区分できるが、穿孔具の太さを反映していると思われる。なお、9は穿孔をやり直している。基本的にすべての資料で端面に回転痕が認められる。2・4・14

では円筒面に製作時の剥離痕を残すが、その部分もよく研磨されている。面取りを行っているものも多く、丁寧な仕上げである。

孔口部にわずかな糸ずれを確認できるものもあるが、佩用による痛みは少ない。材質については但馬地域の玉谷産の石材が用いられたと判断されている（中村2017）。

玉B群（図139・表2、図版35-1） ヒスイ製勾玉1、瑪瑙製棗玉1、碧玉製管玉27からなる。これらによって構成される首飾りは、出土状態から勾玉（46）と棗玉（47）、管玉2（20・21）が全体の環から別れて垂れる形状が考えられる。

長さは全体で78cm以上となり、重さ192g、A群の倍に近い。

ヒスイ勾玉46は透明度が高い緑色で、整った形状を示し、3本の沈線が入る丁字頭である。長さ41.6mm、幅23.6mm、厚さ14.5mm、片面穿孔である。瑪瑙棗玉47は暗い赤色を呈し、長さ22.6mm、最大径15.0mmである。管玉はA群と同じく大形品である。大きくは緑かかった青色といえるが、A群にくらべて色調にややばらつきがあり青色の強さで2分できるようなものもあるが、はっきりしたものではない。長さは18.1~43.9mm、太さ9.2~13.9mmで、長さ3cm、太さ11mm前後が主体をなす。穿孔は両面からなされており、孔径は2.9~5.3mmで、3.1mm前後、4.4mm前後、5.0mm前後の3群に区分できる。仕上げの研磨は丁寧になされている。端面に回転痕は見られない。

この資料の特徴は、棗玉と管玉のほぼすべてに小さい傷が生じていることである。端面の縁から側面方向に大きいもので長さ5mm、小さいもので1mmの浅い剥離が見られ、24は折れて一方が失われている。また、孔口に糸ずれ痕が見られるものもある。これらは長期の佩用を示すものである。

使用石材は翡翠勾玉が糸魚川産、管玉が朝鮮半島産の未定C群である（中村2017）。

これらから1点だけ離れて所在する小形管玉48は、長さ9.7mm、直径3.8mmと、長さ直径ともB群の半分以下の大きさである。これも両面穿孔である。石材はB群と同様で、緑青色である。

玉C・D群（図139）ガラス小玉と小形のガラス管玉（大賀2010）からなり、ガラス小玉は大小がある。ガラス小玉のうち大形は直径6~7mm、高さ4mm前後、孔は1~2mmである（49~53）。小形は直径1.5~2mm、高さ2mm弱で直径0.5mm程度の細い孔である。いずれもアルカリ石灰ガラスで、前者が紺色、後者は黒色に近い。取り上げ時等の観察では前者が45点、後者が49点を数えたが、小玉類の重なりを考えれば実数はこれよりも多くなる。

ガラス管玉は風化が進み、淡い灰緑色を呈し、きわめて脆弱になっている。長さ4mm前後、直径2mm、孔径0.8~1.1mmである。448点を数えた。

これらは一括で取り上げたが、保存処理に手違いがあり、ガラス管玉等については十分に資料を提示できていない。今後の課題とする。

鉄剣（図140、図版37-1）全長46.9cmに対して茎は4.5cmと短い。表裏両面に木質が遺存しており、拵が付いた状態で副葬されている。剣身下部では銹

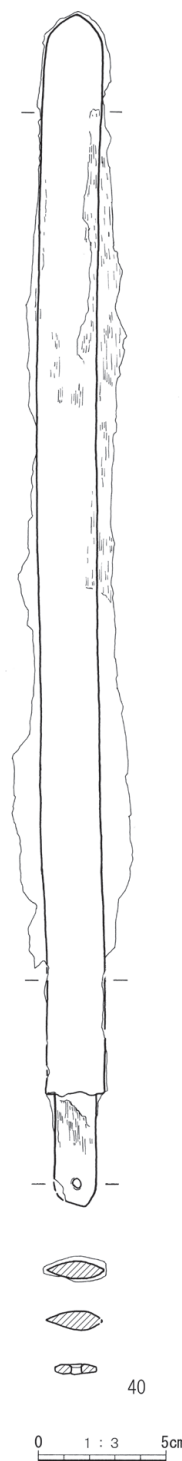


図140 棺内副葬品(2)
鉄剣 1 : 3

が刃の位置からそれぞれ1 cm以上張り出すが、この部分の図示しなかった側にも木質が見られる。幅の広い鞘であったようである。

全体に浅く湾曲するが、銹による変形と思われる。身幅は基部で22mm、切先近くで23mmと細身で、切先は丸みをもつ。錆による膨らみがあり現状で身の厚さは7～8 mm、紡錘形の断面をなす。幅16mm、厚さ3 mmの茎には直径4 mmの目釘孔がある。茎尻は偏ってやや角をなす形状である。この剣については、北部九州で製作されたとの見解が示されている（村上2000）。

7 排水溝（図141・142、図版32・33）

墓壇底に設けられた石組排水溝で、木槨の南側で検出した。木槨の頭側小口部を囲むようにはじまって南東の墓壇外に伸びるが、途中には墓壇裾の水を集める支水路が設けられており、樹枝状とでもいべき平面形をなす。構築に用いられた石材は花崗岩類の角礫で、長さ20～30cmのものが主体をなす。

排水溝を構築する掘り込みは、幹線となる主水路部分の北端、木槨南隅で2つに分岐する。北東側の溝は主水路から続く形で木槨小口にそって伸び、木槨東隅で曲がって右礎板溝に続く。北西に分かれた掘り込みはさらにV字形に分岐し、木槨側の掘り込みは左礎板溝へ続き、西側のそれは左外溝になる。

主水路、木槨小口外側、木槨南隅外側、支水路の順に記載する。主水路からカーブして木槨小口に添ってのびる部分を合わせた検出延長は約4.1mである。

主水路 わずかに弧をなし墓壇の南東外にのびる。断面がU字形をなす掘り込みの両側斜面に添わせて板状の石を置いて側石（図141 平面図グレー表示部分）とし、その間に石を配し、さらに上に石を置くという構造である（J・K断面）。側石を含む石組の幅は50cm内外、J断面で側石内側の規模は幅30cm、深さ27cmである。上に置いた石のため側石が隠れる部分もあるが、側石が見える箇所も多く、完全に上を石で被覆する作りではない。K断面よりも南側では側石は西の列だけとなり大きめの石を重ねるように配する。一方、東の側石列は図中北端のものに続いて上に配された石の下にもう1石程度は続く可能性もあるが、西の側石列はJ断面で終わる。

J断面に示すように、掘削面を少し埋め戻して（J6層）底面を形成して排水溝を構築しており、底面には水の影響によって鉄分が沈着し（J5層）、その上には粗砂が薄く堆積する（J4層）。その上方20cm（J3層）は層理構造が見られる細粒の砂質土で、水成堆積層である。断面上部の石材上端近くでは再び鉄分沈着（J2層）があり、その上には薄く粘土層（J1層）が形成されている。これら堆積層の状況から、排水がなされていたことがわかる。堅固な構造であるが、上面が被覆されていないため上方に隙間をもつことになる。植物質の材料で被覆して埋め戻した可能性も考えられるが、側石よりも上に置かれる石の高さは不ぞろいで、木槨小口外側でも石の上端はかなりの高低があることから、土で埋められ、下部の石の間を伝って水が流れることを想定したと考えるが、不完全な作りといふべきかもしれない。

木槨小口外側 主水路東側のカーブをそのまま延長する形で木槨小口に添ってのび、木槨東隅で終わる。南西から北東へ伸びるにしたがって平面の幅は減じていく。石材は木槨礎板に接して置かれており、小口板にもたれかかるように置かれたとみられるものもある。側石は設けず、下に大きな石を置き、さら石を重ねる作りである。A断面では南西からの湧水が北東に流入するのを防ぐためか埋め土が厚く、形成された底面はB断面よりも推定で6 cm高くなる。埋め土上面には鉄分が沈着する。

木槨南隅外側 木槨南隅の外側では木槨小口礎板を設置するテラスと墓壇壁面の間隔は広く、排水溝の幅が広がる。他の箇所と異なり、この部分の木槨に接する箇所には長さ61cm、幅約35cm、厚さ5

cmの板石が置かれる。この板石付近は5石前後の重なりで厚さ50cmに石が配されており、最も入念な施工といえる。

礎板溝は木槨の構築に伴って埋め戻され、一方、排水溝は石材の間に空隙をもつことが求められる。H断面北端では板状の石材が斜めに置いてあり、それよりも南（木槨外）側は塊状の石材を置き、さらに板状の石材を重ねるといった構造となっている。最奥の斜めに置かれた板状の石材が礎板溝と排水溝の境界になるとみられ、礎板溝の端をこれで塞いで埋土の流出を防いだと考えられる。

木槨隅外側の板石の底面は44.35～41mである。一方、木槨頭側小口礎板下面の高さ（図133 A1断面）は44.21mで、礎板の厚さを12cmと見積もれば44.33m付近が小口礎板上面となり、板石は礎板に乗るか若干上になる位置に置かれたことになる。板石の木槨側の形状は確認していないため、木槨小口板・左側板と板石の平面関係は不明であるが、木槨の基礎と排水溝が近接するため、補強のため板石が置かれたとみられる。なお、C断面では礎板痕跡（C18層）に接して外側に木材由来の可能性がある灰色粘質土（C17層）が見られ、礎板の外側にさらに板材が置かれたとも考えられ、板石設置の際に板材が加えられた可能性もある。

礎板溝の外側に肩を共有して設けられた左外溝は、C断面から北に1.7m離れたB2断面（図133）では見られず、そこまでの間で終わる短いものである。排水溝はこの溝を埋めて設けられており、排水溝と一連で掘られながら機能した期間はごく短かったこととなる。底面は墓壇斜面に近い側に設けられており、木槨の基礎部分を構築する際に、墓壇斜面側からの水を除けることを目的に設けられたと考える。

礎板溝と左外溝の分岐の手前となるF断面に見られるように、排水溝・左外溝の掘り込みは急角度でなされる。掘り込みの外（南西）側には高さ16cmの埋土によって掘り込みに至る斜面が作り出されている。この埋土は墓壇底を北西側から舌状に広がるように形成されており、低い土手としての機能をもつ。墓壇南西側からの湧水が木槨南隅付近へ流入するのを防ぐと同時に墓壇斜面下端では支水路の肩を形成する。

支水路 墓壇で述べたように、墓壇の南西部は大きく外側に張り出しており、最も外にふくらんだ箇所では庇状に下部が削り込まれているが、これは意図して設けられたものではなく、斜面が湧水で崩壊し、その崩落土を取り除き上部を整えた形状と考えられる。発掘調査時にも、この箇所からの湧水が見られた。支水路は墓壇底の端に設けられており、先端は庇状部分の下に入る。全長は約1.8mで、主水路中ほどに接続する。箱形の構造はもたず、主水路側から先端に向かって石を配していき、さらに上に石を重ねており、2石程度が重なる厚さ20cm前後の石組みをなす。石組みの上面は先端が主水路接続部よりも20cm高い。

主水路から1.1mまでの間は地山を掘り込んだ溝を伴っており、下に置かれる石の下面が溝底との間に空間を作るように置かれており（G断面）、石材は素掘り溝の蓋として機能する。主水路との接続部では溝底は主水路の側石よりも10cm近く低くなっており、水は側石の間から主水路に流れ込むことになる。一方、先端側では墓壇底面に設けられた上記の埋土で肩を作り出し、それと墓壇下端の間に石を配する（F断面）。最も先の部分ではこの埋土で石を固定する（E断面）。支水路の先端よりもさらに先（北西）になる位置の断面（図126 D36層下面）では埋土で細い溝が形成されており、その付近の水を支水路にまわすようにしている。支水路は、墓壇の湧水に対応するため、ある意味、臨機応変に設けられた可能性がある。

支水路G断面の北側で直径27cm、深さ8cmのピットを検出した。浅いピットであり、地山の礫を抜き取った跡とみられる。

第5章 埋葬施設

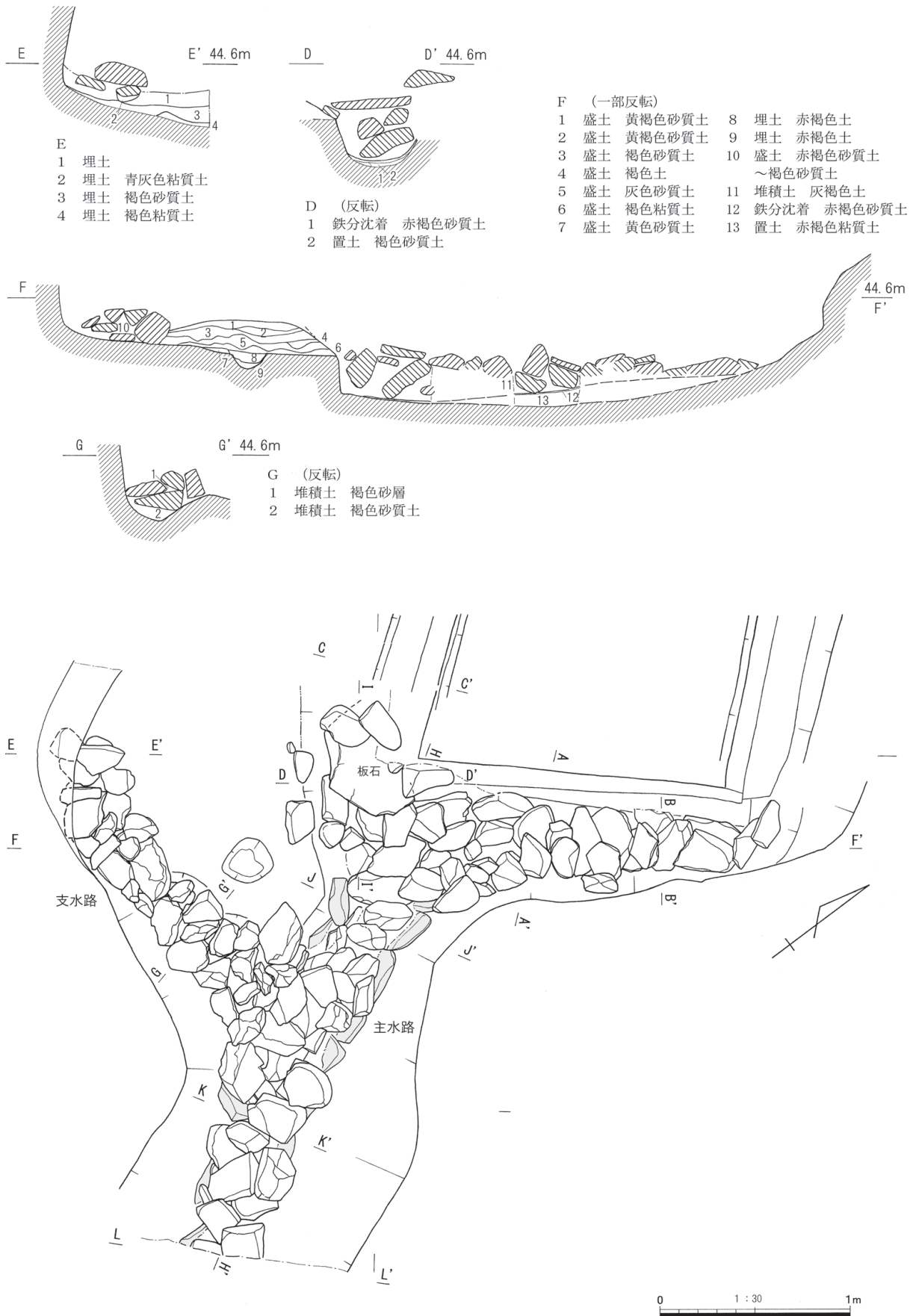


図141 排水溝平面・断面(1) 1:30

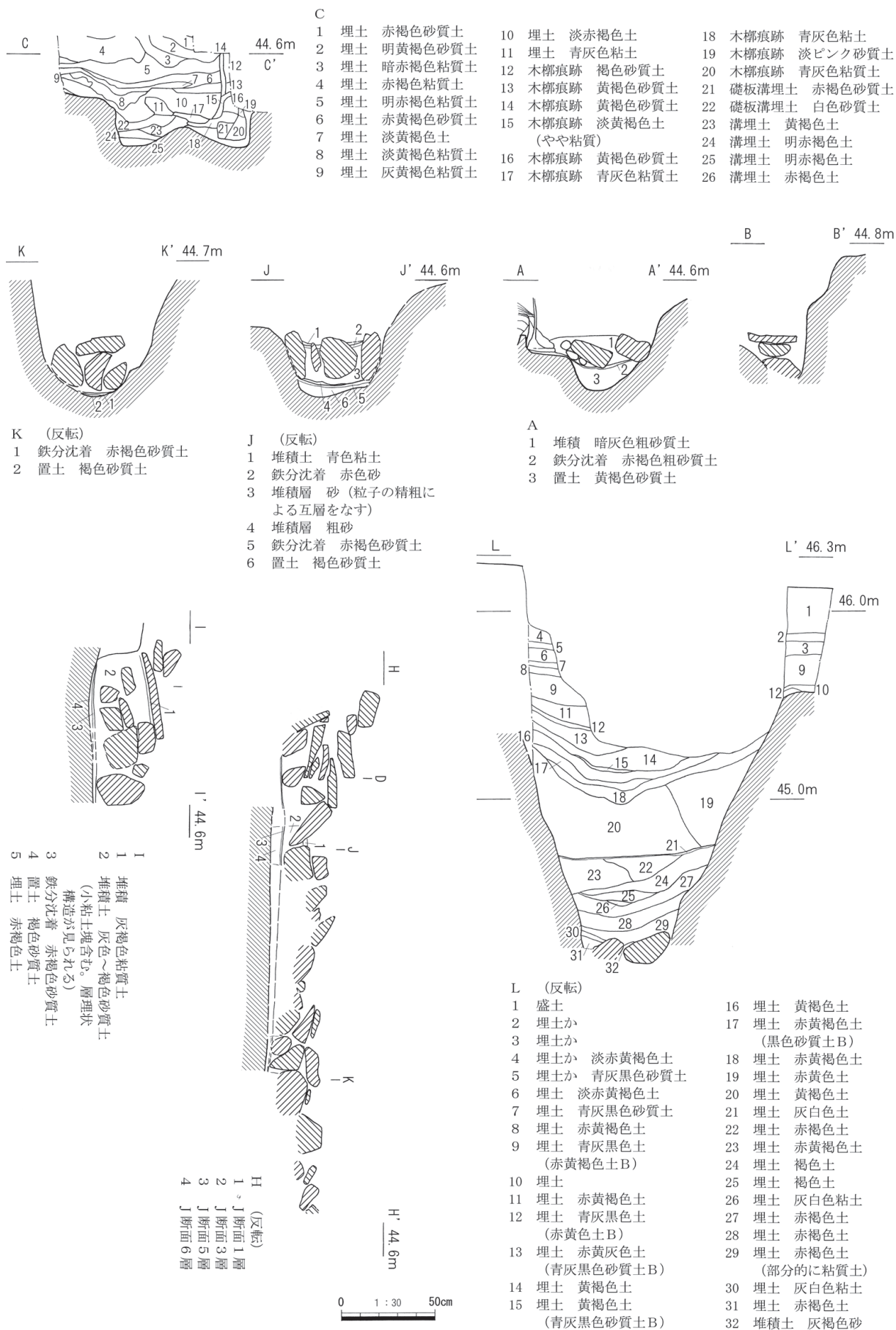


図142 排水溝断面(2) 1 : 30

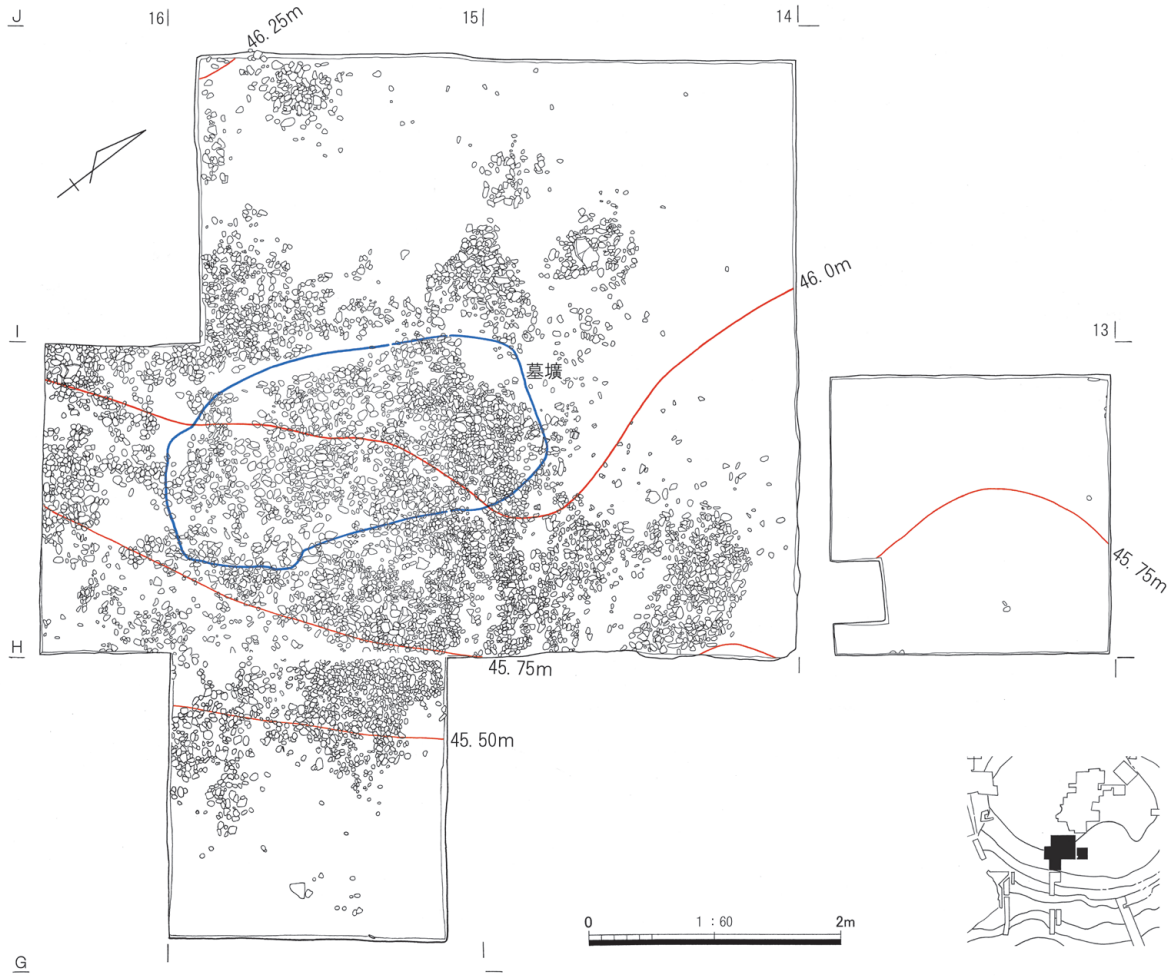


図143 第2主体付近円礫面 1 : 60

埋土 排水溝南東端の埋土をL断面に示した。この部分には立石5が所在しており、その掘方の調査等のため、埋土上部を欠損している。埋土は大きく1・12・13・20・22・25・26・31の4つに区分できる。このうち上から2つめとなるグループの下部、19・20層は厚い土層であり、最下部を丁寧に埋めた後、一気に埋め戻したようである。19・20層下の21層は灰白色土で、調査中もここから湧水が顕著であった。この層は後に地下水が通ることによって形成されたのかもしれない。

8 第2主体

墳頂平坦面の南東部、平坦面の端に近い位置で検出した。中心主体の南南東にあたり、約9m離れる。この埋葬施設は第2次調査のトレンチで存在が明らかになり、第3次調査で全面調査を行った。そのため、上面で約50cm、底面で約30cmの幅で埋葬の主軸に対してやや斜めに掘削が入る。検出位置の北西部は比較的平坦で、南東は徐々に下降し墳丘斜面に続く。

a 円礫面 (図143)

第2主体の上を中心に円礫面が広がる。調査範囲の北東部分は墳頂部の流出が顕著で円礫は遺存しておらず、第2主体よりも北側も円礫は部分的なまとまりが散見される状態である。そのため、円礫面は南西から北東方向へ伸びる舌状の広がりとなっている。表示していないが、円礫面には横に伸びる

図144 C断面

- 1 表土・流土
- 2 円礫層
- 3 墓域埋土 淡黄褐色砂質土
- 4 墓域埋土 灰黄褐色土
- 5 墓域埋土 黄褐色土
- 6 炭 木棺痕跡
- 7 粘土
- 8~10 墓域置土
- 11 円礫層
- 12 墳丘盛土 淡黄褐色土
- 13 墳丘盛土 黄褐色砂質土
- 14~16 墳丘盛土

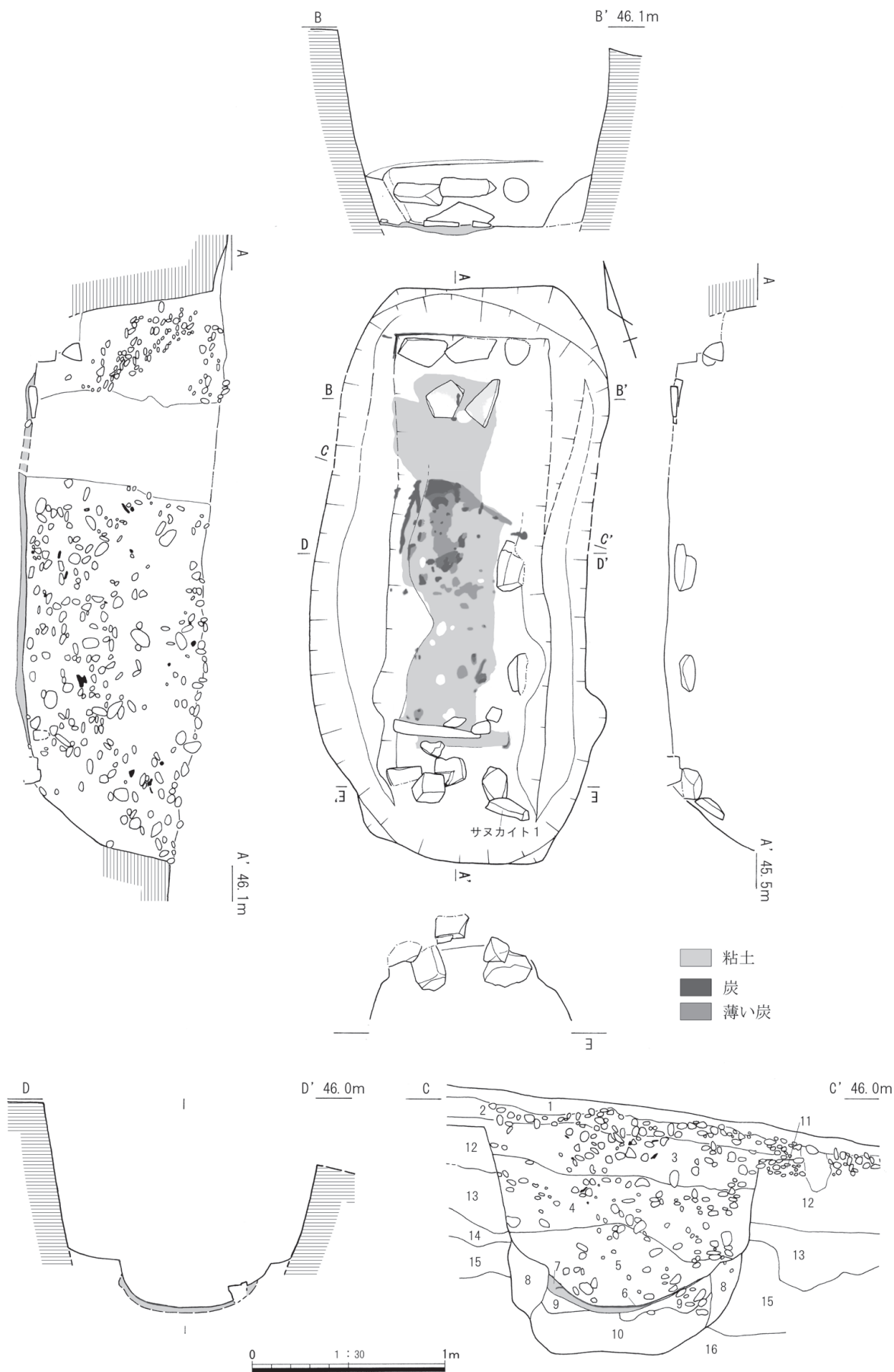


図144 第2主体 1:30

太い木根や株があり、そのため、帯状あるいは不整円形の欠落を生じている。円礫の重なりは厚い箇所では3石程度と薄く、他の箇所で見られるものよりも疎らである。円礫面上には近代の瓦片が多数見られた。

調査時にはC11層（円礫層）が墳丘構築当初の円礫敷であり、墓壇はそれを掘削して設けられ、埋葬後C2層（円礫層）で被覆されたと判断した。しかしながら、縦断面に見られるように墓壇埋土は木棺の腐朽に伴う沈下の状況を示すのに対し、墓壇上面の円礫層（C2層）は沈下した状況が見られず現墳丘上面と同じ傾斜であり、木棺の腐朽後に形成されたと判断できる。墓壇が平坦に埋め戻されたとすれば陥没部分に流入堆積土が形成されるが、墳丘上面の流出は考慮するとしても、そうした土層は見られない。これらのことから、第2主体上には若干の高まりが形成されていたものの流出し、付近の円礫敷も大半が流出した後に墳頂平坦面北西側の円礫敷から円礫が流出して再堆積したと考える。

墓壇東側の11層は円礫3～4石が重なった厚さ10cmの円礫層で、墓壇によって掘削されており、築造当初の円礫敷と判断できる。この層は45.80mで、墳頂の円礫敷はこの箇所が最も低くなる。第2主体墓壇東肩から墳裾側に約70cm水平に続くが、1.4m隔てて30cm高くなる墓壇西肩にはこれに対応するものは見られない。先に墳頂平坦面の端では円礫敷が若干下降するとみられることを述べたが、それと異なってこの付近は狭い平坦面を形成しそこからやや強い角度で上昇してのち平坦となる断面形に復元される。そうした箇所に第2主体が構築され、低い側の円礫敷は残存し、高い側は流出したと考える。このテラス状になる範囲は明確でないが、南に伸びることは考えにくく、墳頂部南東縁に形成されていた可能性を考えておく。H16調査区に見られる円礫面の外端（東端）部分については、判断材料が少ないが、円礫が小振りであることから2次堆積と考える。

b 墓壇と木棺（図144、図版34-1）

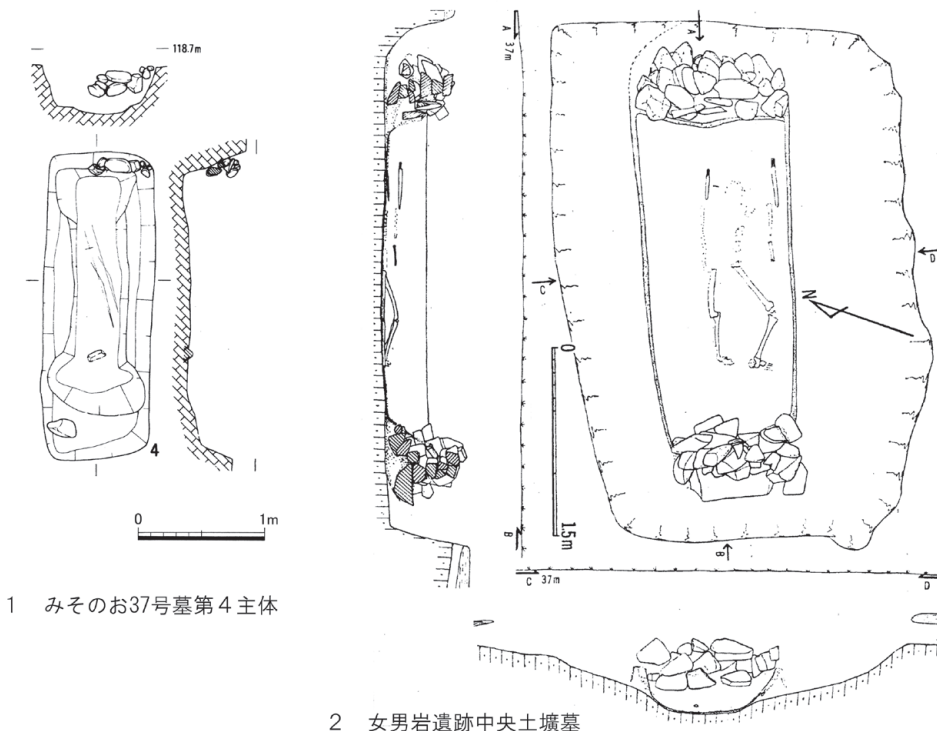
墓壇 墓壇の平面形は隅丸長方形で長さ2.97m、幅1.43mである。断面形はU字形をなし、上面から墓壇底までは1.17mと深い。墓壇埋土には円礫が多数含まれるほか、墓壇置土にも円礫が含まれており、墳丘が完成した後に墳頂の円礫層を掘削して墓壇を設け、掘削土で埋め戻したと判断できる。

墓壇置土・粘土棺床 墓壇の中央付近では底面には側壁にむかって高くなるように厚さ20～30cmの置土がなされ、その上面に厚さ4～2cmの灰色粘土が敷かれて断面が弧状をなす粘土棺床が設けられる。粘土棺床の横断面は中央付近の曲率がやや低く、側面でカーブがきつくなる。ただし、粘土棺床は、北の頭側では置土の上面中央がわずかに低くなって、その部分で粘土の厚さを増すものの、弧状の断面をなさず左右に平坦に広がる。墓壇底置土・粘土棺床の断面形の変化については、この間にトレンチが入ったことと、北小口付近の分層がむずかしかったため十分に把握できなかったが、木棺の東西両側の置土は北小口側までは設けられずC断面の北側でなくなると考えられる。したがって、棺設置前の墓壇に置土で形成される底面は小口側で広がる。こうした形状の墓壇はこの時期の吉備の埋葬でしばしば認められ、糸巻形と呼ばれている。そうした例に岡山市みそのお32号墓第25主体、同37号墳第4主体（図145-1）などがあり、これらでは小口板が割竹形木棺の棺身を挟むと推定されている（岡山県古代吉備センター1993）が、以下のようにそれらとは異なる小口構造である。

粘土棺床の縦断面は、緩い起伏をもちながら北から南に向かってわずかに下降していき、D断面の南45cm付近で7cm下がり、そこから南はやや高くなる。

木棺 粘土棺床の上にはC断面～D断面付近を中心に、遺存した木棺とみられる炭（炭化物）が最も良好な部分で1cm、端部で数mmの厚さで遺存していた。

棺の北端では、粘土棺床にめり込んだ状態で長さ20cmの板状の角礫2個を検出した。礫の上や間で朱の散布が認められたほか、朱を含む粘土が付近で認められ、これらは枕石と判断できる。この付近



1 みそのお37号墓第4主体

2 女男岩遺跡中央土壇墓

図145 木棺関連資料 1 : 60

を含めて副葬品はない。

枕石北側の小口部分にはほぼ高さをそろえて3石が並べて置かれており、中央の礫の下にはもう1石が置かれて2段になる。上段3石のうち東側は大形の円礫、他は角礫である。平面図に表示できていないが、上段の中央と東の礫は墓壇小口壁面にむかってさらに長い。これらの礫の上方、礫の上8cm、粘土棺床から30cmの高さで、幅1～2cm、長さ44cmのL字形をなす炭を検出した。その形状からこれが木棺の端の痕跡とみられるが、下にある礫のうち上段中央は炭の下を横切る平面関係となっているため炭が垂直に立ち上がる小口板の痕跡と考えることはできず、棺蓋の端と推定する。棺内側に面をなすように配された礫は、外側から小口板を押さえるものと考えられる。前述のように小口板が棺身を挟む例もあるが、配された礫は棺の幅に収まり棺蓋の端よりも内側に入ることから、棺身の小口内側に小口板を設ける構造と考える。同じ丘陵にある女男岩遺跡中央土壇墓木棺(図145-2)がこれと同様の構造である。

棺中ほどの東側面では角礫2つが粘土棺床に若干めり込んだ状態で所在する。この2石は棺側面の支えとみられるが、棺の横断面形が粘土棺床のそれと全く同じではなかったことを示している。

墓壇の南側で粘土棺床は終わるが、その付近から墓壇壁にかけて角礫が置かれている。配置は整ったものではなく、棺の足側小口板を押さえる土に礫をまじえたとみられる。南端の墓壇隅に配された礫はサヌカイトの板状石材(サヌカイト1)である。これらのうち最も北の細長い棒状の礫が足側小口板外側の位置を示すと考えておく。

第2主体は頭位を北にとる割竹形木棺である。推定となるが、法量を求めれば以下のとおりである。北の礫の上の炭を木棺の北端とし、足側は疎らに置かれた礫のうち最も北のもの付近とするなら、木棺の長さは220cm程度となる。上記のように、頭側の石積みから足側の棒状の石までの長さ約184cmが小口板外側の間隔となる。小口板の厚さは石枕と北側の石積みの間隔とすれば6cmである。木棺の幅は80cm程度であったとみられる。木棺の軸線はA断面よりも3°東にふれてN22°Eで、中心主体主軸

と斜交する。

c 出土土器 (図146)

上記のように副葬品はないが、サヌカイトの板状石材が棺小口に用いられていたほか、墓壇埋土中からサヌカイトの小塊と土器が出土している。A断面では土器を黒色で表示したが、土器は墓壇埋土の各所に散在しており、破片が墓壇を埋め戻す過程で入れられたとみられる。

土器は脚付直口壺、甕、装飾高杯、高杯からなる。中心主体円礫堆内出土土器にくらべて破片がやや大きく、接合するものが含まれる点異なる。

脚付直口壺 455から474までの破片は器形にあわせて口縁部と脚部を配置しているが、胎土にほとんど差がないため破片の対応関係を推定することが困難で、便宜的な配置である。偏球形の胴部とそこから立ち上がる口縁部からなる。個体差が大きく、胴部径に対して頸部径が小さい455・458・461・463・466・473・479と、大きい469・471、口縁部が外傾する456などがある。頸部が長く頸部径が大きい469の形状は、この器種の新しい様相である。下半部のうち459などは内底の調整がハケメで、これは高杯では用いない調整である。他は高杯の脚の可能性もあるが、それに見合う高杯杯部片が出土しておらず基本的に脚付直口壺の脚とみられる。457や462のように脚部の透かし孔は四方に配する。465は小孔を斜め3段、鋸歯状に配している。476は小さい円孔を多数配しその下側に鋸歯文を刻む。外面調整はヘラミガキを基本とするが、479はヨコハケののちにナデを加えている。

高杯杯部475は下部が小さく、上に大きく口縁部が伸びており、あまり見られない形態である。

これらの胎土は精良で微砂粒を少量含む。470はやや砂粒が多い。

装飾高杯 482は杯部下半から脚柱部にかけてを欠く。形態は円礫堆出土のものと同様である。櫛状工具による施文の多用がこの個体の特徴で、口縁部や脚部などには各所に列点文が、脚部上段には櫛描波状文が配される、外面は丹塗りである。

甕 この遺跡ではきわめて少ない器種であるが、480・481・483～485が出土している。口縁部480・483・484から3個体である。480は口縁端を上方につまみ上げて狭い面を形成し、483・484ではやや肥厚させる。いずれも、集落遺跡で通常見られる甕よりも格段に小さい。

脚付直口壺等では脚柱部小片2点を掲載していないが、それらを含めて脚部上端付近の数で算定すると15個体となる。遺構の下方、南斜面調査区出土の脚付直口壺112は土器全体の半分近くが遺存しており、第2主体付近から転落した可能性が強い。113も保存状態がよく、同じく第2主体埋土から流出した可能性が考えられる。15個体にそれらを加えた17個体程度が脚付直口壺・高杯の出土数となるが、上半部の組み合わせで実数はもう少し多くなる可能性がある。脚付直口壺が主体を占め、高杯が少数とみてよい。これに甕3、装飾高杯1個体加わる。

墓壇埋土上部が流出し、いくらかの破片はそのため失われた可能性があるものの、埋土は基本的に遺存した状態にある。しかしながら出土土器は破片の量が少なく接合復元は困難なことから、少なくとも墓壇の間近で破碎されてすべての破片が埋土に入れられたのではないと判断できる。これは中心主体円礫堆出土の高杯等の状況と共通する特徴であるが、それらよりは個体あたりの破片量が多い。112はそうした状態ではなく器形を保ったままで転落したと考えられ、壊して墓壇埋土に入れられるもの以外に、完形の状態で埋土上に置く、あるいは埋めたものがあつたと考えられる。

d サヌカイト片 (図147・148)

第2主体からはサヌカイト塊1・2・4・5が出土した。2は2点を接合した状態で実測しており、5点の出土である。1は棺外足側に花崗岩類の礫とともに置かれていた。2・4・5は墓壇埋土からの出土である。サヌカイト塊はこれら以外に墳丘各所から出土しており、あわせて記載する。

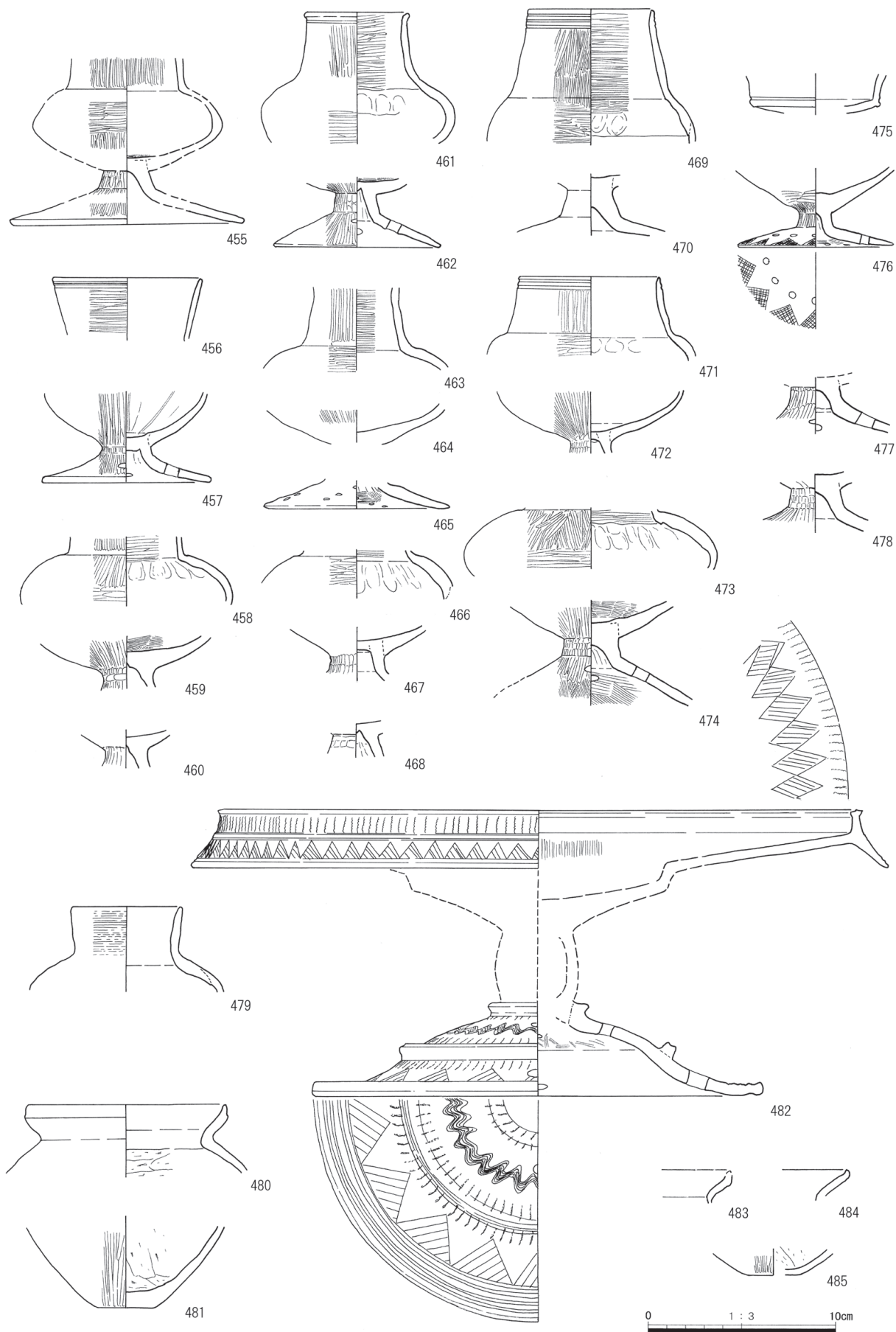


图146 第2主体出土土器 1:3

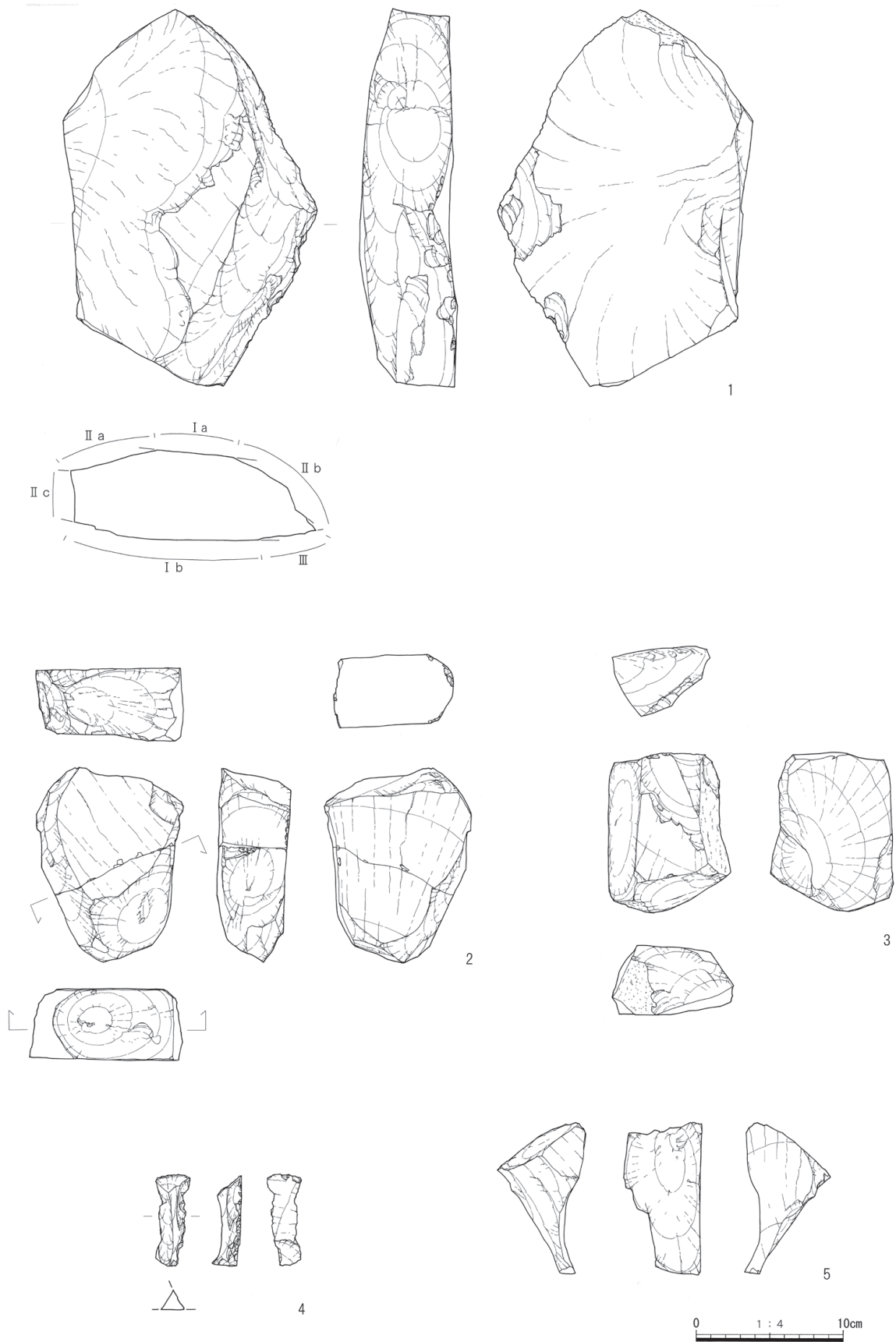


図147 サヌカイト 第2主体出土ほか 1 : 4

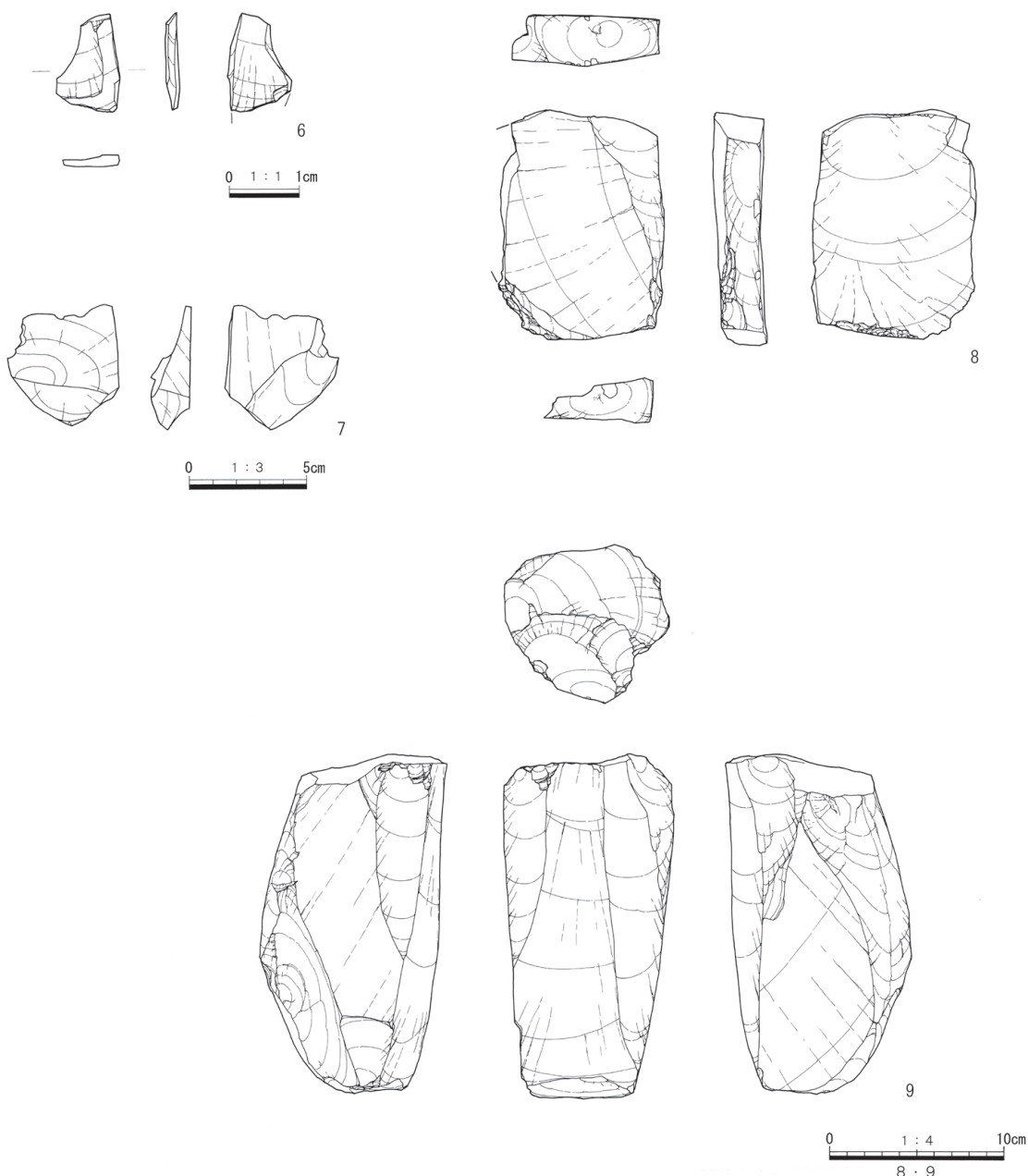


図148 サヌカイト 墳丘各地点出土 1 : 4他

1は長さ25.7cm、幅17.3cm、厚さ6.1cm板状石材である。以下の資料も共通するが、I～IIIの順に剥離面が形成されている。Iは上下の両面であり、広い平坦面をなす。節理にそった面であるが打撃による剥離かどうか明らかでない。全体に摩滅しており、下面のステップには著しいつぶれが見られる。IIは主要な剥離面を構成するもので、加熱による破碎面である。原石中の不純物（結晶）を起点として放射状の剥離面を形成しており、剥離面は不規則に変化する。表面を薄く剥離させるものと、石材を破断するものがある。IIIはIIによって形成された面などに見られる小さい剥離で、打点を有しており、敲打による剥離である。したがって、大きな板石の状態で何らかの使用がなされた後に焼いて割られ、その後若干の剥離がなされたという経過をもつことになる。

2はIIの熱破碎によって中央で横に破断しており、接合面は図の上部分がネガ、下部分がポジの面をなす。IIIの剥離は下側のポジ面に集中する。石材の厚さは4.9cmである。

4は下面がIの面である。IIによって剥離した小片で、一方の端からIIIの細かい剥離が加えられて

いる。5も2と同様で、厚さ5.5cmである。破片の状態はよく似ており、同一の板石から分離したとみられるが、接合はしない。

3は北東突出部(L6)円礫敷から出土した。2ヶ所に自然面が見られ、元の石材は角礫状を呈していたと判断できる。IIによる面が主体をなす点で第2主体出土の資料と共通するが、下面にもIIの面があるなどの点が異なっており、母岩が異なると判断できる。長さ10.8cm、厚さ4.6cmである。

6は中心主体木槨底の置土下部から出土した。長さ1.4cmの剥片である。熱破碎は見られない。

7は立石4南東の円礫敷上で採取した。IIで剥離した破片で、図右にIの面が残る。IIIの剥離はない。第2主体出土資料と一連の可能性が強い。このほかに、図示していないが、南くびれ部調査区流土からも1点が出土している。

8は発掘調査以前に採集された資料である。同時に採集された資料は中世の瓦であるので、円丘部の楯築神社祠付近から採集の可能性が考えられる。一部欠損しており、長さ13.2cm、幅9.4cmである。厚さ2.9cmと他の資料にくらべて薄い。平板なIの面とIIの破碎面からなる。

9は南西突出部西側面調査区の表土から出土した。長さ19.5cm、上面幅9.5cmの円錐形である。打面再生を行いながら縦長剥片を剥離した石核で、旧石器時代の資料である。この地域ではきわめて稀な資料である。他のサヌカイト資料と関連はないが、あわせてここに示した。

以上のように、サヌカイト塊は第2主体からまとめて出土しているが、墳丘の他地点からも出土している。9を除く8点のうち、6は小剥片で、木槨置土に混入したと考えられ、異なる時期の遺物か、IIIで形成された剥片で墳丘墓にかかわる遺物であるのかは不明といわざるをえない。第2主体からは5点が出土しているが、最も大きい1は木棺足側小口板を押さえる土にまじえた礫として用いられているのであって、第2主体の葬送において意味をもつ配置とは考えにくい。本来は中心埋葬の儀礼にかかわるものとする。

円礫堆からサヌカイトは出土しておらず、焼き割られたのは別の位置であったとみてよい。想定される板石の大きさからみて破碎によって生じた石塊や剥片はかなり多かったと考えられる。2・4・5は円礫敷に所在していたものが第2主体墓壇の掘削によって埋土に混入したと推定でき、第2主体付近にサヌカイト塊のまとまりがあったと考えられるが、一方で北東突出部や墳頂でも第2主体から離れた地点など広範な出土状況を示す。第2主体付近で破碎したサヌカイトの一部を墳丘各所に分けて置いた、あるいは破碎は早い段階になされ円礫に混ぜて円礫敷に配した、この2つが考えられるがいずれか判断しがたい。6.1~4.6cmという厚さは、かつて石器の素材として用いられた大形剥片よりも著しく厚く、破片の状況からみてIIで分割される前はかなり大きな板石の状態であったとみてよい。ここで用いるために新たに入手したのでないとするなら、集落で保有されていた特別な石材を儀礼に供したことになる。板石の状態で何らかの儀礼に用いられた後、焼いて割られたのであれば弧帯文石と同様の扱いとなるが、その後に剥離が加えられている。しかしながら、石器製作に足る剥片を取る、あるいは刃部を作り出して用いるといったことがなされたとも思いにくい状態である。IIIの剥離をたとえば儀礼的に行うことが目的であったのか、Iに見られる摩滅の成因が主要な用途であったのか、また、Iの状態での使用がどの時点であったのかといったことを推定することはむずかしい。いずれにせよ、すでに鉄器化し石器製作が過去のものとなったこの時点でサヌカイトを用いたこと自体が、用途が儀礼的なものであったことを示すのであろう。なお、発掘調査後にサヌカイト自然礫を用いて加熱実験を行い、剥離IIが発生することを確認した。

第6章 遺構に伴わない遺物と古墳時代以降の資料

1 表面採集遺物

発掘調査によって出土した遺物以外に、突出部が破壊された際に採集された土器と、現地調査などその他の機会に採集した土器がある。前者のうち主要なものは「古墳以前の墳丘墓」に掲載されており、これまで記載においても一部を示した。ここでは地元の方々によって採集され寄贈を受けた資料等を示す(図149)。円丘部墳頂平坦面で採集されたもの他、突出部削平時のものが含まれるようである。

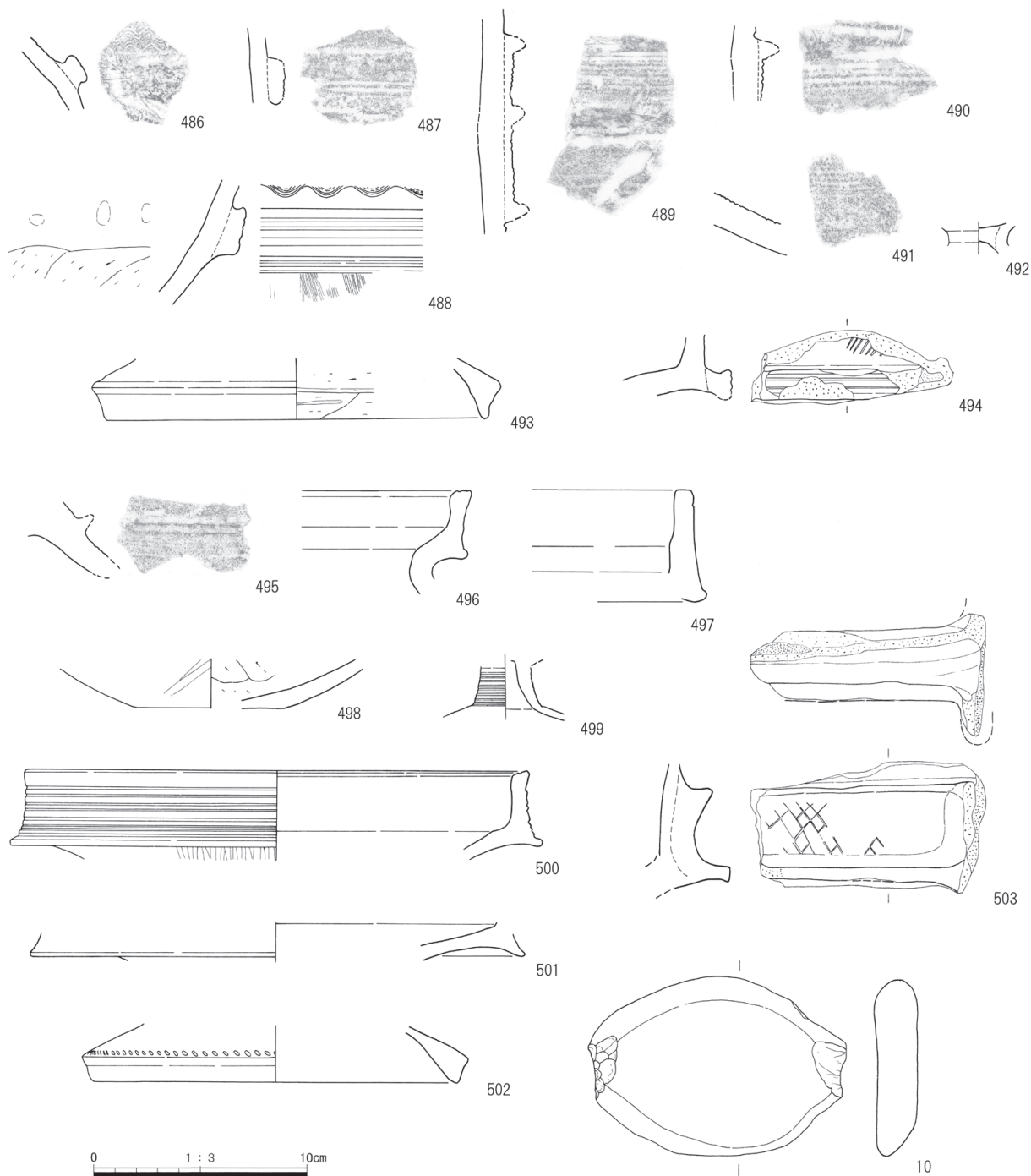


図149 表面採集遺物 1 : 3

486～494は円丘部墳頂平坦面の北側で採集された土器である。調査以前に立石2の据え直しがなされたとされるが、その際の出土であるのかもしれない。先に示した立石2周辺の土器328～354の構成と同様である。

486～488は特殊壺C類で、幅広で低い突帯の上面には486で1条、487・488は3条の沈線をめぐらせる。486と488の突帯上方には櫛描波状文が配され、488は突帯の下側基部にも4条の沈線が入る。これらは同一個体の可能性があるが、488は破片の上下が明確でなく逆とすれば2個体となる。内面調整は486・487がヨコナデ、488が突帯裏側が指頭押圧、下部がヘラケズリである。489・490は特殊器台A類の間帯、491はそれの脚部破片である。491の内面調整はナデかと思われる。

492は高杯あるいは脚付直口壺の脚柱部、493は小形器台、胎土Bである。

495は特殊器台C類の口縁部で、欠損している突帯の下側には櫛状工具による平行沈線がある。496は鉢の口縁部である。胎土Bで丹塗りがよく残る。500は器台の口縁部とみられる。胎土Bで、丹塗りが見られる。また、壺ないし器台の口縁部501、壺底部498がある。502は胎土Bの小形器台で、器表の剥落が著しい。497は小形特殊器台の口縁部で、残存範囲では外面に施文はない。胎土A。499は墳頂平坦面東側で表面採集した高杯等の脚部で、脚柱部には細い沈線を多数配する。

494と503はいずれも直線的な破片で、家形土器である。494は器台受け部の端に壁が接続する箇所、壁には斜線文の下端が見られる。壁を作った後に突帯を貼り付けてあり、接合部の一部が剥離面となっている。突帯の上面には3条の沈線が配される。突帯の左端には製作中に生じた亀裂を補修した粘土の貼り付けが見られる。503も家形土器の同じ部位とみられるが、器表の剥落で明確でないものの、破面の形状から、この部分全体が受け部から接合部分で剥離した可能性が考えられる。壁の下端となる位置には幅広の粘土が貼り付けられて厚くなり、上下の突帯間に斜格子文を刻む。破片右端が隅になるが、大きな突出が作り出されており、右側の壁あるいは部材が破片部分の壁よりも外に突き出る形状が表現されている。突出する部分の右側は粘土接合部で剥脱した面となっており、ある程度の厚さをもっていた可能性がある。内面調整は器表の荒れのため不明である。胎土A。粘土を幅広く貼り付け突帯を配する形状は、家形土器103・105と共通する。

なお、再掲載を行っていないが、「古墳以前の墳丘墓」図2掲載資料のうち9（図版36-3）は家形土器で、破片上部が垂直に立つ壁部分である。

10は墳頂平坦面で採集した長さ12.2cmの礫石錘である。築造時に異なる時期の石錘が円礫に混入して持ち込まれた可能性が強い。

2 楯築神社弧帯文石（図150～152、図版43・44）

長さ89.3cm、幅91.9cm、高さ36.2cmの大形の石製品である。重量は400kg⁸⁾と推定する。重要文化財に指定されており、指定名称は旋帯文石である。これ以外にいくつかの別名称があるが、それについては第2章第3節に記した。楯築神社弧帯文石とするが、煩雑を避けて、以下では神社弧帯文石と呼ぶ。

この弧帯文石が元どこに所在したかは不明である。中心主体上の円礫壇の上に据えられていたとの想定もあるが、その場合には著しい重量によって円礫堆の上面にめり込んだ状態が想定される。検出した円礫堆上面にはそうした状態の石材を取り出した痕跡（攪乱）は認められず、特殊器台片溜まりが遺存しており、その位置へ置かれた可能性はない。

欠損も図示すべきであるが、著しく煩雑になり一部では沈線が分かりにくくなる。沈線の接続を確認できる状態であるため、欠損箇所は示さず沈線を復元して示した。後述のように帯の側縁や中央に配置される沈線（側線・中心線）は他の沈線とは異なって幅広で深く、その肩部や下端も表示すべ

きではあるが、帯の構成がわかりにくくなるため単線で示した。縮尺の関係で段や稜線は沈線との区別のため破線で示しており、この点は円礫堆出土弧帯文石の図表現と異なる。

図150・151で上面平面図の左右に示した側面図は顔から左右斜めに続く面の図であり、縦断軸線での側面図ではない。また、図151上側の図は後方左隅側面の図であり、図150上側の後方側面の左に配置すべきであるが、紙幅の都合でここに置いた。

以下の記載では顔表現のある側を前、その反対側を後とする。側面は左右で呼び分ける。後方側面図は上下逆になるが、面に正対しての記載である。

a 形状

平面形は方形の1隅が丸みをもつ形で、扇形ともいえる。やや鋭角になる前側には浮彫で顔が表現される。顔を正面に据えた状態で図示しているが、右側が若干広くなる。

上面は前側がやや低く、後方で高くなる。中央の少し右側を縦に稜線が通り、そこから左右両側に緩い角度で面が下降する。広い左側の面は、中ほどやや後方で段をもち後側が厚みを増す。上面と側面の境は緩い稜をなすが、前側の顔付近では稜がなく、丸みをもって上面が前面に続く。

左側面は比較的平坦であるのに対し、右側面はやや湾曲しており前側は長軸方向にのびる浅い凹面、後側は凸面をなす。そうした凹凸はあるものの左右側面は全体としては垂直であるのに対し、後方側面は外傾した面である。後方からみて左側は平坦な面であるが、中央～右側は丸みがあり凹凸をもつ。各側面と底面の境は稜をなすが、後側の縦断面付近では稜は明瞭でない。

下面は右上の縁全体と左下側が低く、中央はそれら下端よりも2.0cm高くなっており、ごく浅い弓なりの面をなす。凹凸はなく平坦である。

石の節理が数ヶ所に見られる。その部分は細い亀裂となるため面が途切れ、それを挟んだ一方の面は平坦、もう一方の面が大きくふくらむ形になることが多い。上面の左中ほどは節理で形成された面で、これは後方の高くなる部分の下に入り込む形になり、後方が段をなして高くなる。これと平行する節理が後方側面の一部に現れており、それにそって後に欠損を生じている。右側面には縦方向の節理面があり、そのため側面後側がふくらむ。後方側面にも上記とは別の位置に縦の節理による面の歪みがある。

薄い灰色を帯びた白色を呈する。本来の色調が見える新しい欠損部分では白色である。表面は平滑に仕上げられ、施文がなされる。

b 顔

浮彫で顔が彫り出されている。縦18.0cm、横15.2cmの卵形の輪郭である。現在一見してそれとわかる目と口は後世の彫込みで、それが重複するため本来の目と口は毀損が大きい(図版44-3)。また、頭部も欠損が多い。

浮彫で鼻が表現され、沈線でアーモンド形の目が表示される。下まぶたの弧は浅く、残存がよくないが上まぶたの弧は深い。ややきつい表情といえるかもしれない。向かって左側の目尻近くから口元にかけて斜めに下がる直線がある。右側の頬には弧線があり、その外側にも残存がよくなく確定がむずかしいが、もう1本弧線がある。これらは入れ墨の表現と判断する。口は端の候補とも見える箇所はあるが、沈線の残存か剥離の傷かがはっきりせず、口の有無、形状については不明とせざるをえない。

顔下側の首にあたる位置には縦の幅広の帯を配している。他の箇所で見られない表現であり、首を意識したようである。その下側の帯も広く、この付近は左右対称の意匠となる。顔の周囲は帯が円く取り巻いており、渦心円と同様である。

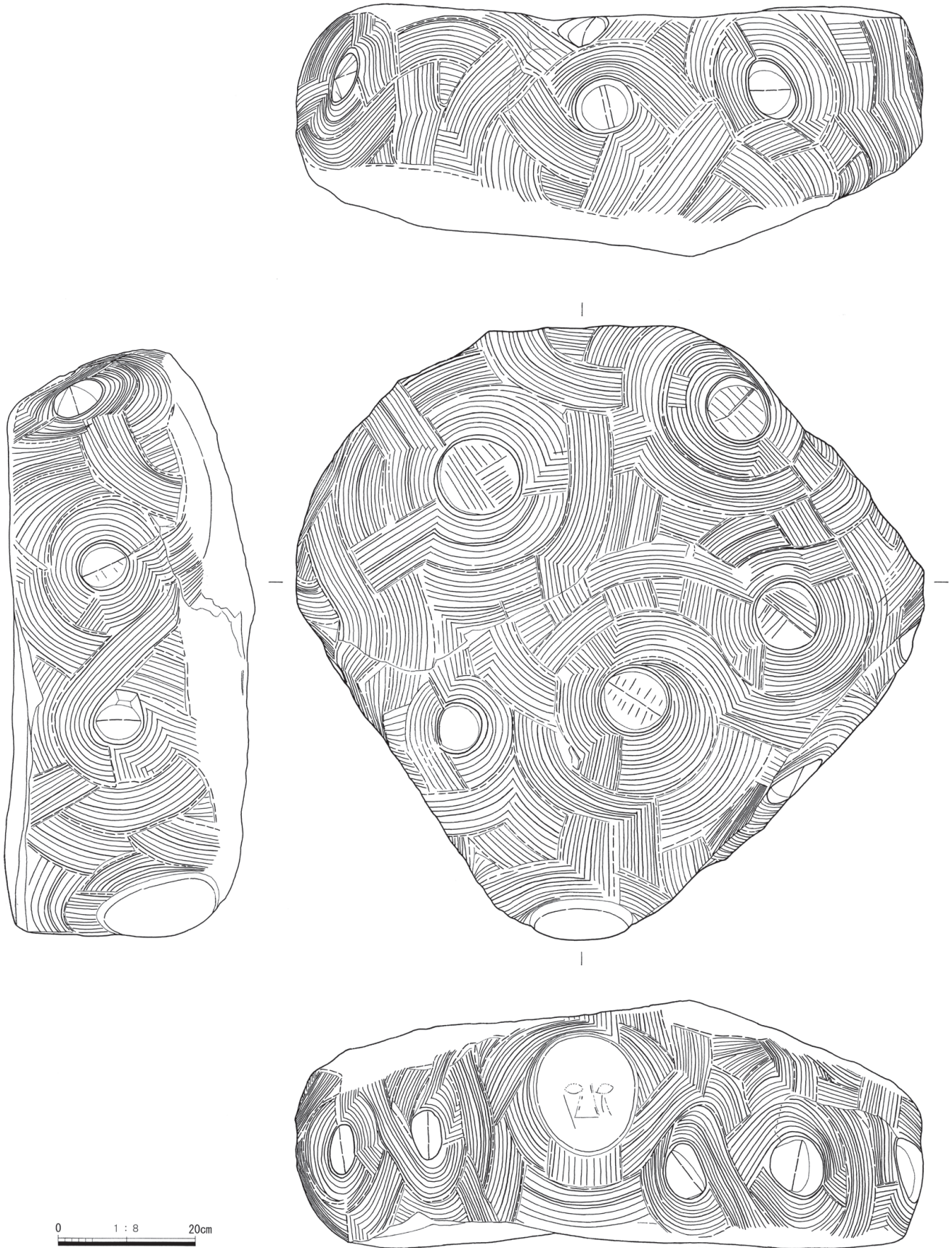


図150 楯築神社弧帯文石(1) 1 : 8

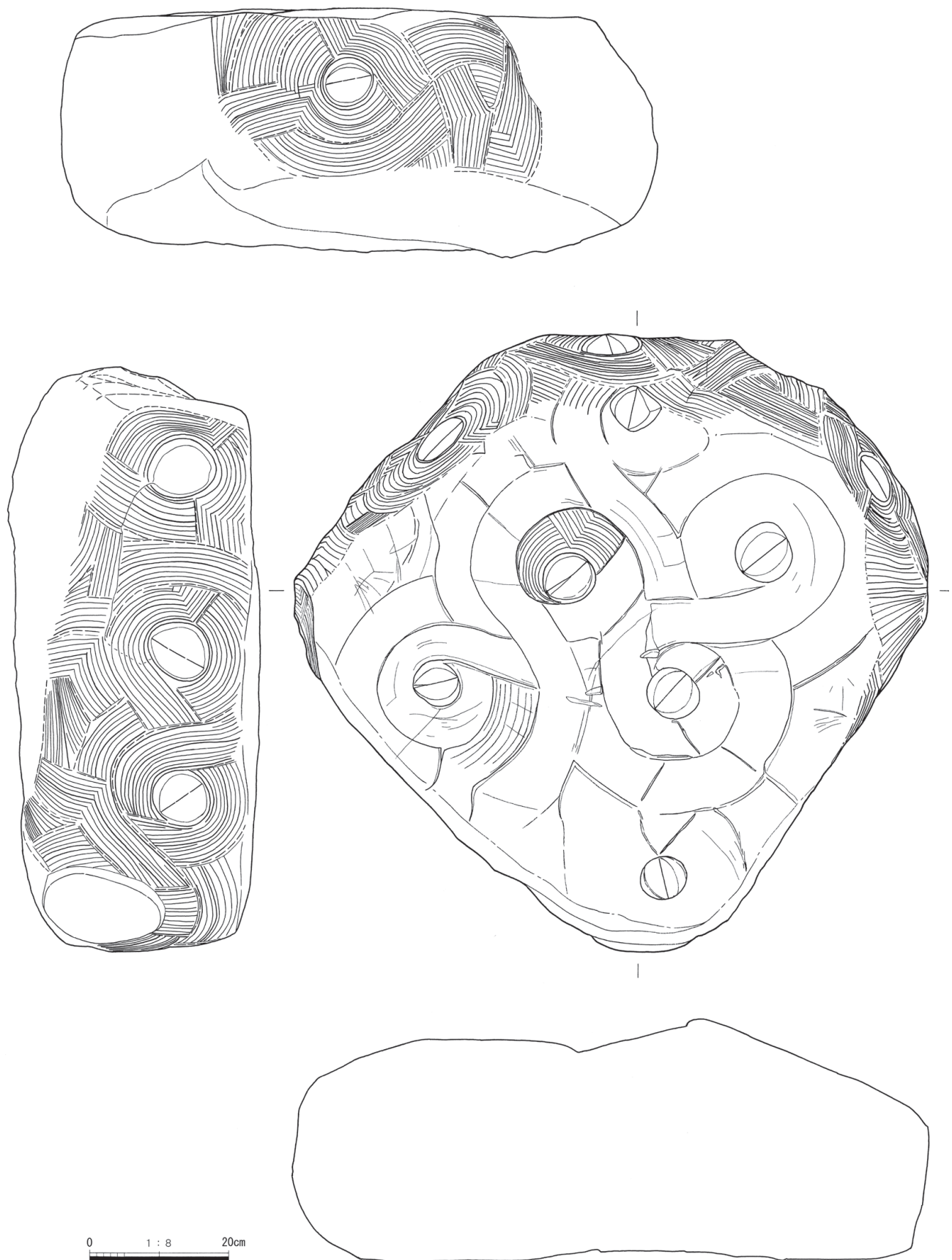


图151 楯築神社弧帯文石(2) 1 : 8

c 上面

顔の上方から上面前側にかけての部分と高くなる後方左斜面の保存状態はよくなく、表面の剥離や欠損が多く、渦心円の縁もかなり痛んでいる。特に顔の右上になる付近は沈線が見づらくなっている。保存状態のよい底面や側面と対照的であり、後世の取り扱いの影響もあろうが、上部が部分的に露出した状態で埋もれるなどの状態が長かった可能性はある。

上面および側面は面が平滑に整えられ、施文がなされる。上面には前側に斜め方向に3つ、後方には2つの渦心円を配する。後方左の渦心円が直径11.6cmとすべての渦心円のなかで最も大きく、前側左は直径7.3cmと小さい。前側左の渦心円は他と異なり、中に稜線が作り出されておらず平らな底面となる。そして、左外側の帯に面する箇所は内壁がなく底面と帯が同一面となっており、太い沈線2本を入れて渦心円の輪郭としている。渦心円底面は節理面で、加工の途中で稜線部分が剥離したため平底としたのではないかと思われる。残る4つの渦心円は稜線と斜面をもち、斜面に帯が表現される。そのうち2つでは稜線に直交する帯であるが、前側右では稜線に直交と平行の帯を、後側左では斜面片方を分割して平行と直交の帯を配している。渦心円の内壁は側面のものに斜めの面になるのに対し、これら上面では円筒形に近いものになる。前側3つでは内壁は平滑に整えられているが、後方の2つでは加工痕が残っており平滑とはいいいにくい状態である。

渦心円の外側はそれをめぐる帯で埋められる。帯はある箇所では他の帯の下になり、またいずれかの位置で別の帯の上を通る。すべての帯が接続し、1本の帯が切れ目なく全面にひろがる図形を意図しているように思われる。帯は幅が広く、基本は2重、部分によっては3重に渦心円をめぐっており、前側中央と後側左の大きな渦心円をとりまく帯が広い面積を占める。一方、前側左渦心円では帯は細くとりまく帯の数が少ない。

同心円状にめぐる帯は全周の2、3ヶ所で外側に折れて隣接する渦心円の帯に接続する。折れの位置や角度、形状は規則的なものではなく、基本図形の配置ではない。渦心円にそって帯がめぐるため帯の側線が渦心円の縁を回る。この箇所の側線は必ず太い沈線であり、渦心円を際立たせることに留意したように見える。なお、前側中央の渦心円では帯が幅を減じて巻き込まれる形になる。

帯は基本的に中央が低くなり横断面は浅い凹面となる(図152)。帯の両側端には側線、中央には中心線が配され、それらの間にあわせて6～8本程度の細い沈線が配される。側線は断面がレ字形で帯の両外側に広い斜面を作り出すことを基本とするが、太い沈線を用いる場合もあり、それは外側に面を彫りにくい帯の左側でしばしば見られる。また、途中から細沈線になったり強い稜線に変える箇所も見られる。中心線は側線と同様の形状で一方に広い斜面をもつものが多いが、太い沈線2本を配する箇所もある。

d 左側面

渦心円2つを配置し、上面から続く帯がめぐる。

後側に位置する渦心円の前側斜面だけに帯を表示する。沈線はかなり不明瞭で上面渦心円斜面の帯表現にくらべて雑な感がある。側面の渦心円で帯が表現されるのはこれのみである。2つの渦心円の斜面は平滑であるが、内壁は加工痕が残る軽い調整で、ノミ痕が残る箇所もある。

幅が狭い側面に渦心円を2重にめぐる帯を収めるためか、帯の幅がやや狭く、中心線のない帯が多い。この面に限らず各側面の文様は、それぞれの面の中である程度のまとまりをもつものとなっている。後側の渦心円をめぐる帯の下端では原石の形状に起因して帯の幅が部分的に変わり、沈線が食い違いを見せる。

e 右側面

前述のように、前半分と後半分の上端が節理面、後半分の大部分が節理面上側のふくらみ部分であり、節理による亀裂を境に面が大きく変化しており、それによって帯の接続が変則的になる箇所もある。

渦心円3つを配する。後側の渦心円は稜線・斜面がなく円筒形に近い形状で、底面は軽く調整されておおむね平滑になっている。渦心円の底面が節理面にあたっており、加工中に剥離したとみられる。この渦心円をとりまく帯のうち後方側は後方側面にかかる。前2つの渦心円の斜面は平滑で、内壁は3つとも平滑に仕上げられている。

前側2つの渦心円をとりまく帯の構成は比較的単純なS字の帯の重なりとなり、中央と後側の渦心円をめぐる帯は組み合いがやや弱い。この面に限ったことではないが、まれにごく細い沈線が帯を構成する沈線とは別に見られる。沈線と重ならなかった割付線とみられる。

f 後方側面

面の保存状態はきわめて良好である。渦心円3つを配し、さらに中央の下側にも渦心円が設けられている。側面3つの渦心円は帯の中心になるのに対し、中央下の渦心円をめぐる帯はほとんどない。中央の渦心円の稜線にあたる部分は狭い平面となっており、横断面形は台形である。向かって左の渦心円は斜面、内壁ともに加工痕が残る状態で、ほぼ未調整の状態である。中央および右の渦心円は斜面は平滑に調整されており、内壁も一応の調整がなされる。中央下側の渦心円は斜面、内壁ともに調整されている。

中央の渦心円の右側には弧状に縦の節理が入り、これにむかって面が左右から入り込む形となるため帯も湾曲する。また、図示していないが右の渦心円中央付近にほぼ水平の節理があって、完成後にかなり大きな欠損を生じている。

帯は横方向の接続が基軸となるようで、帯の延伸は比較的わかりやすい。この後方側面の左右両端では帯が下面に向かい、特に左の渦心円の左外側（下面右隅）では1本の帯と隣接する帯の半分とで下端に向かって広がるバチ形をなす。この箇所は後方であることに加えて面が大きく湾曲して下面に続く、ほとんど見えない箇所であり、バチ形図形を明示する出土弧帯文石とは対照的である。中央と右の渦心円の間では3本の帯に囲まれた三角形の面に短く帯が表示されており、他の箇所では見られない表現である。

以上のように、節理面のため渦心円斜面の欠落や図形の変形が生じている箇所はあるが、石の原形によって生じるそれぞれの面の形状に応じて帯の幅と円の範囲を調整し、途切れることなく帯をめぐるらせている。渦心円の調整を細かく記してきたが、大きくは、前側が丁寧、後方が粗雑という傾向にあり、あたりまえのことながら、前面から見ることを考えて製作されているといえる。しかし、帯の構成や仕上げに精粗はなく均一に仕上げられており、帯の展開が重要であったことがわかる。

g 下面 (図151・152)

帯が作り出されるが、出土弧帯文石と同様、製作が未完了の状態にある。

帯の構成と文様 渦心円は菱形の配置で中央に4つ、顔に近い前端に1つ、上記の後方側面の下端に半ばかかる位置に1つ、計6が配置される。渦心円は直径6.0~8.0cmと、側面や上面のものよりも小さい。なかでも前端側の渦心円は彫込みの肩が丸みをもっており、最も外側の輪郭では6.9cmの直径であるが、内壁が垂直に下がる位置では6.0cmと小さくなる。また、後端の渦心円は図示した後方からはほぼ円形に見えるが、彫込まれた面に対しては縦長の形状となっている。これを周回する帯は少なく、縁を通過するものもあり、他でのあり方とは異なる。

いずれの渦心円も中央の稜とそこから下降する斜面をもつ。斜面に沈線はない。平滑に調整される

斜面が多いが、中央右下の渦心円では一方の斜面と内壁が調整されていない。中央左上渦心円では斜面と内壁の両方が平滑に調整されている。また、前端近くの渦心円では、斜面と内壁下半が軽く調整されるが内壁上半が未調整であるなど、仕上げの差が大きいといえる。ただし、渦心円内壁については、前述のように側面でも未調整のものがあり、下面特有の特徴ではない。

渦心円の周囲にはこれを取りまく帯が表示される。帯の境は段や稜で表示されるが、太い沈線や面のわずかな変化で示される箇所もある。表示された弧帯文は中央4つの渦心円をめぐるものである。円礫堆出土弧帯文石の下面では接続する渦心円が1つであるのに対し、ここでは2つとなるため、構成はより複雑なものになっている。また、中央後側の渦心円と左の渦心円の間には帯が1条加わっており、この2つの渦心円は3重の帯が取りまくことになる。注意されるのは帯の重なり方で、出土の弧帯文石の場合とは逆に、渦心円をめぐる右からきた帯は、左からの帯と交差する際に下をくぐる。加工を続けた場合、完成する文様は同様なものになると思われるが、2つの弧帯文石は基本的な約束事が異なるものとして製作に着手したと考えることができる。

後側の中央では側面に向かって帯が出て行き後端の渦心円の横を通る帯に続く形となり側面と下面の文様が接続する。他に側面の帯に続くものはないが、縁辺の割付線や半ば作り出された帯の位置から、側面の帯に接続させることは可能であったとみられる。ただし、前述のように右隅では側面を下がる帯の先端がバチ形に開くため接続がむずかしくなっている。

出土弧帯文石の下面では割付線以外に沈線は見られなかったが、この資料では中央後側の渦心円の片側に帯が表示される。2つの帯が交差するが、両者は同じ平面にある。65mmの帯に10本と密に沈線を入れており、沈線は幅約0.5mm以下と細く、側線や中心線はないなど、側面や上面の帯の表現とは異なる。

加工痕と自然面 下面すべてで調整が終了しているわけではなく、自然面と、加工痕が明瞭に残る部分の2種が下面の前端付近に残る。図152では、面を平滑に仕上げ施文可能な状態にしている範囲に薄いグレーを入れ、加工痕が残る範囲を濃いグレー、自然面をドットで示した。いずれにも属さない部分は一応の削り調整がなされた範囲であるが、かなり平滑にしているが風化が深く入った部分があれば状に残るという状態から、軽く表面を整えた程度のものであり、一様な状態ではない。

自然面と判断したのは、前端側渦心円付近から右側縁にかけての範囲で、直径3～5mmの不整円形をなす浅い凹みが密集した状態をなす。凹みは加工痕の一種と見えなくもないが、これにやや似た状態が上面の遺存状態が最もよくない箇所に見られることから、風化で生じるものであり原石の自然面と判断した。

加工痕は、2種類である。

a：一定の幅で平坦に削っており、ノミによる削り加工と判断できる。ノミの刃幅は約10mmである(図版44-4中央)。

b：並行する沈線多数を形成する加工痕。並行する小さな稜を多数形成する加工痕ともいえる。沈線の長さは3cm前後、沈線(稜線間)の幅は広いもので4.5mm、多くは3mm前後で、断面はU字形、箇所によってはV字形である。刃幅3mmのノミを斜めに用い、順次横に移動させて削りを入れた跡である(図版44-4下端・右側、5右下)。

これらは前端側渦心円の左側に広がり、部分的に縁辺部で見られる。bののちにaが加えられており、刻みを入れておいてノミで平面的に削るという手順である。出土弧帯文石で見られた手順とは異なるが、加工する面が広いことに起因するのかもしれない。aの切削は長さ18mm前後が単位となる。自然面の一部にはaを直接行った箇所が見られるが、石がかなり硬いようで細かく波打ちながらノミ

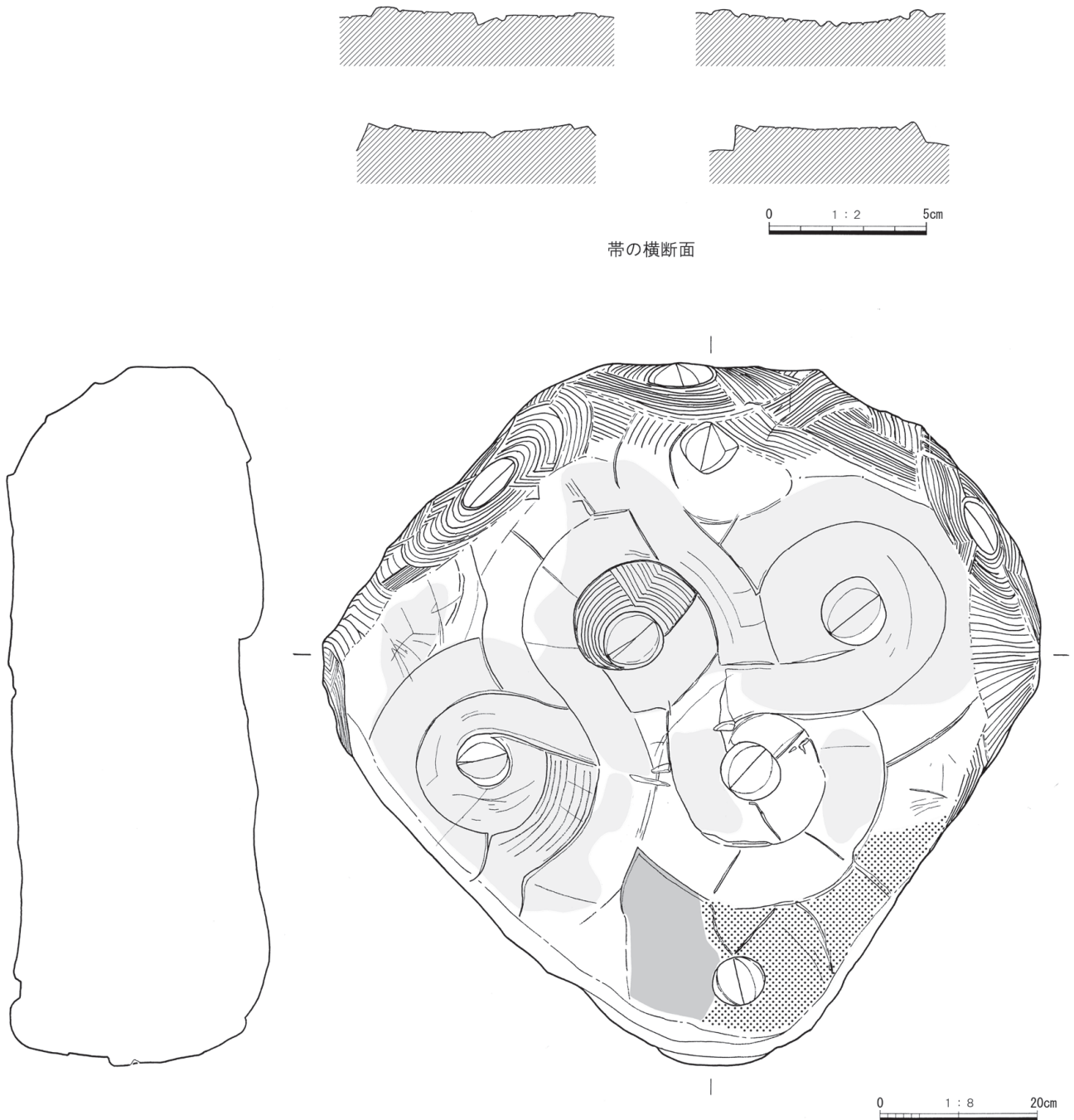


図152 楯築神社弧帯文石(3) 1:8、1:2

が進んだ痕跡が残る。このほか、前端渦心円右側の帯を形成する沈線は、刃幅7mmのノミを縦に用いた浅い打ち込みを横に連ねることによって形成されている。これらの痕跡から、弧帯文石の作成に用いた工具は多種類であったことがわかる。

割付線 帯の各所に文様の施文予定を示す細い沈線が刻まれている。沈線はきわめて細いものが大半である。沈線が多いのは中央左側の渦心円をとりまく帯で、平行沈線を丁寧に入れており、屈曲して外に出て行く帯を表示することが予定される。この部分は平滑に仕上げた面であるが、右側縁付近では自然面にも刻まれている。縁辺に刻まれたものはかなり雑な図形であるのに対し、上記のような沈線間隔がそろそろ丁寧なものが見られる。割付線には2種類があり、前者は今後の作業の覚え、後者は

施文の下書きと考えられる。

以上のように作業を途中で停止したかに見える状態であるが、前端側の渦心円の稜線の高さは現状の面に合っており、自然面の深い凹みが消えるまで面を下げた場合は、稜線が浮き出てしまう。また、これの内側になる中央前側渦心円の外周の帯や、後端（後側面下端）渦心円前側の帯では、自然面のくぼみのうち深いものが取り切れず残った状態であるが、完全に平滑な面にするためには、ほぼ完成した付近の帯を含めて面を下げることになる。したがって、製作を中断したのではなく、未完成な現状を最終的な形として製作したと考えてよい。

先に記したように、節理によって生じた段差を取り去って形を整えることまでは行っていない。目的の形状に合う石を捜し、その形状をほぼ活かして弧帯文石は製作されたとみられるが、顔付近から丸みをもつ上面前端にかけてはかなり加工して形状を作り出したと考えられる。

3 古墳時代以降の遺構と遺物

a 墳頂部の遺構と遺物（図153・154）

墳頂平坦面に所在する榑築神社の祠の西側には、神社にかかわる構造物がいくつか設けられていた。近代に立てたと伝えられる2基の立石は斜面立石等を転用して設けられたとみられ（列石52・53）、墳丘墓の立石とは異なり根石を密に配して立てられていた。また、その近くには木製や石製の神社の標柱が設けられていた。掘り込み底に礫を入れるP1は埋土が中世の遺構とは異なり、そうした施設に伴うもののようであり、直径62cm、深さ36cmと大きい土坑状のP2も同様の可能性がある。なお、祠の西側には、かつての榑築神社に用いられた方形の礎石も遊離した状態で見られた。

円丘部のほぼ全域から中世の土器片が出土している。斜面からの出土はいずれも小片で、それらは墳頂から流出したものとみてよい。遺構は墳頂平坦面に見られた。

土坑8 立石1と2の間となる位置で、大形の土坑を検出した。東側を1次、西側を2次で調査している。長さ2.3m、幅1.4m、深さ50cmと大形で、不整形な隅丸長方形の平面形をなす。立石2に接する部分で肩が不明瞭な箇所があるが、立石の立て直しの際に攪乱を受けたようである。

土坑内には土器片が多量に含まれていた。土師質高台付椀・杯・小皿などからなり（504～521）、白磁椀の小片も含まれる。他に、鉄器41・42がある。完形に復元できる土器はほとんどなく、破片が密集した状態である。土師質高台付椀504～507は口径15.4～15.8cm、器高4.9～5.4cmである。513・514・517～521は小杯、小型鉢等と呼ばれる器種で、津寺遺跡や高塚遺跡など足守川流域の古代末～中世の集落遺跡でも見られる。土師質高台付椀の特徴から、12世紀末の遺構と判断できる。

土坑9 土坑8の南側で検出した土坑で、深さ29cm。土坑8・9は一連の遺構であって、土坑8に接して掘り直しがなされたのかもしれない。

土坑10 長径46cm、深さ5cmの浅く不整形な土坑。中世の遺構である。

土坑11 深さ15cmの掘り込みであるが、攪乱としたほうがよいかもしれない。掘方は古い地表面から掘り込まれており、埋土には西の地山大石から玉葱状に剥離した石の破片とみられる角礫を含んでいて、大石を動かそうとしたかと思われる。中世以降に形成されたと思われる。

柱穴 中心主体の南側を中心に見られる。直径19～36cm、深さは検出面から9～42cmとばらつく。P7～10は連なるが間隔や深さは不ぞろいで、検出できていない柱穴と組み合うと考えられる。柱穴の密度が薄いことによるのかもしれないが、立石1の北側、墳頂平坦面北側では柱穴は認められず、中心主体付近に建物が設けられたようである。

522～527は墳頂円礫面の上、あるいは流土から出土した遺物である。鉄器43～54は多くが釘である。

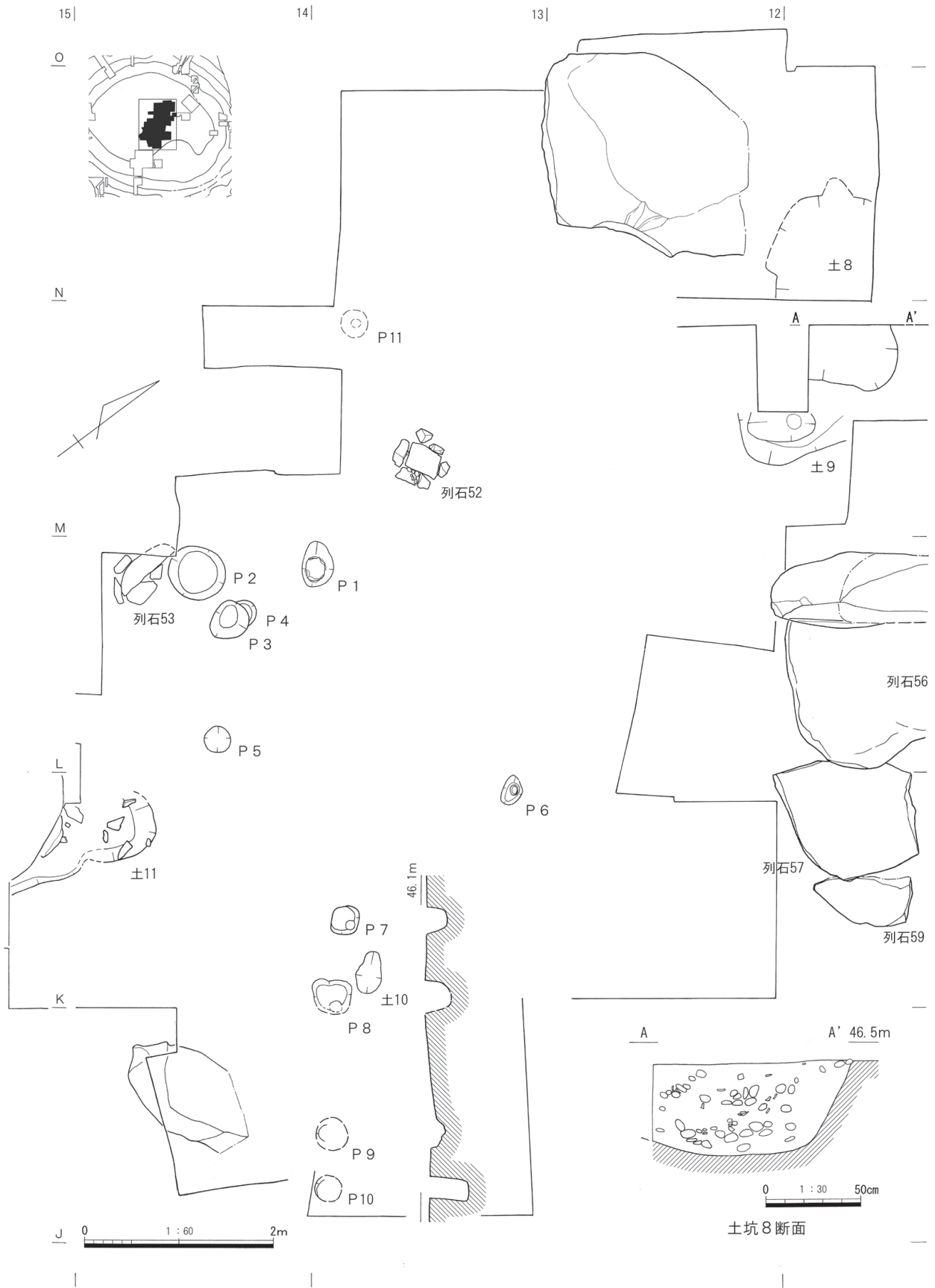


図153 中世以降の遺構 1:60、1:30

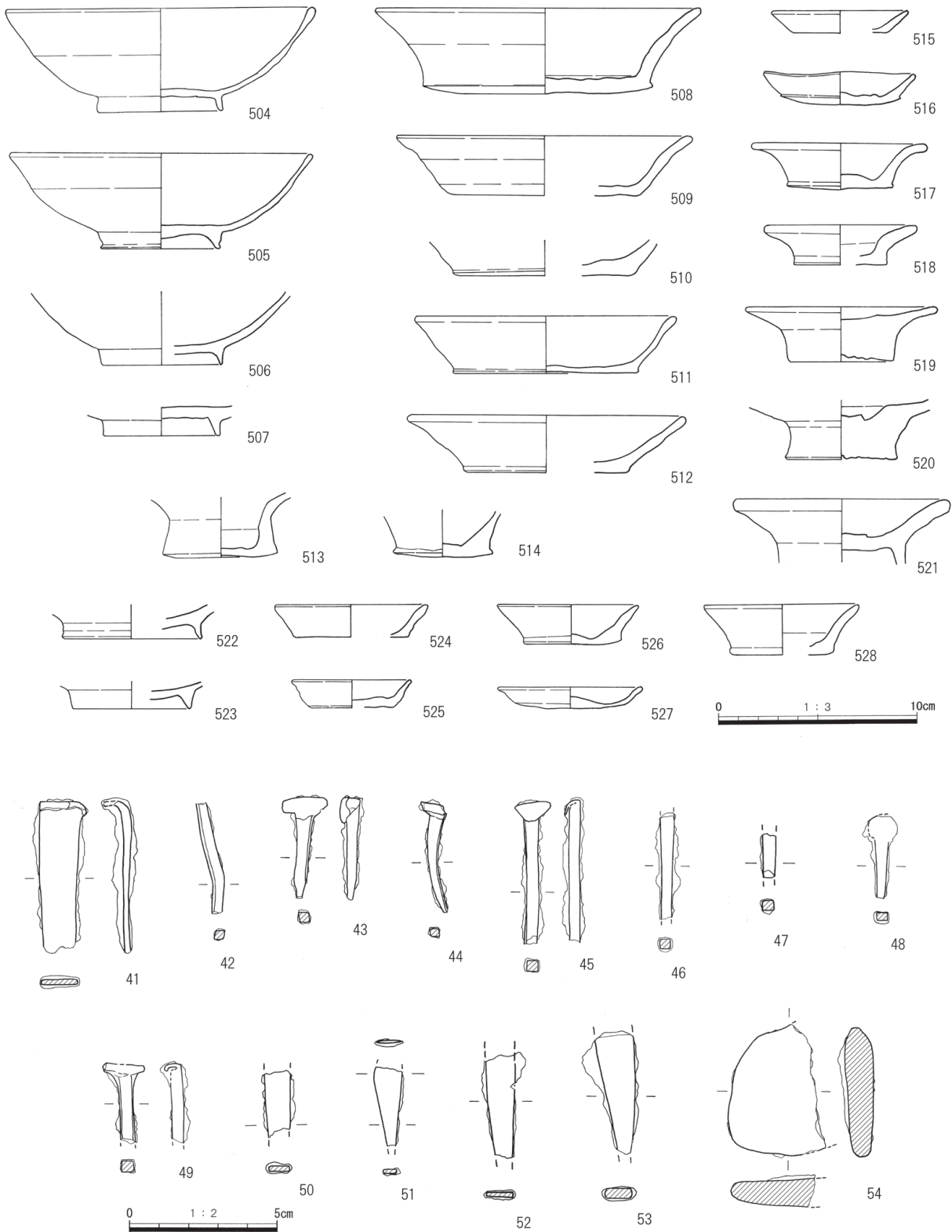


図154 中世他の遺物 墳頂 1 : 3、1 : 2

それらのうち50～53は墳頂部円礫堆上の表土等の出土で、遊離した円礫堆の鉄器の可能性はあるが、確定できないためここに示した。54は表面採集資料で、平たい鉄塊状をなす。器種・年代は不明である。このほか、円礫堆上面から熙寧元寶1点が出土した。検出できなかった柱穴に伴うものとみられる。

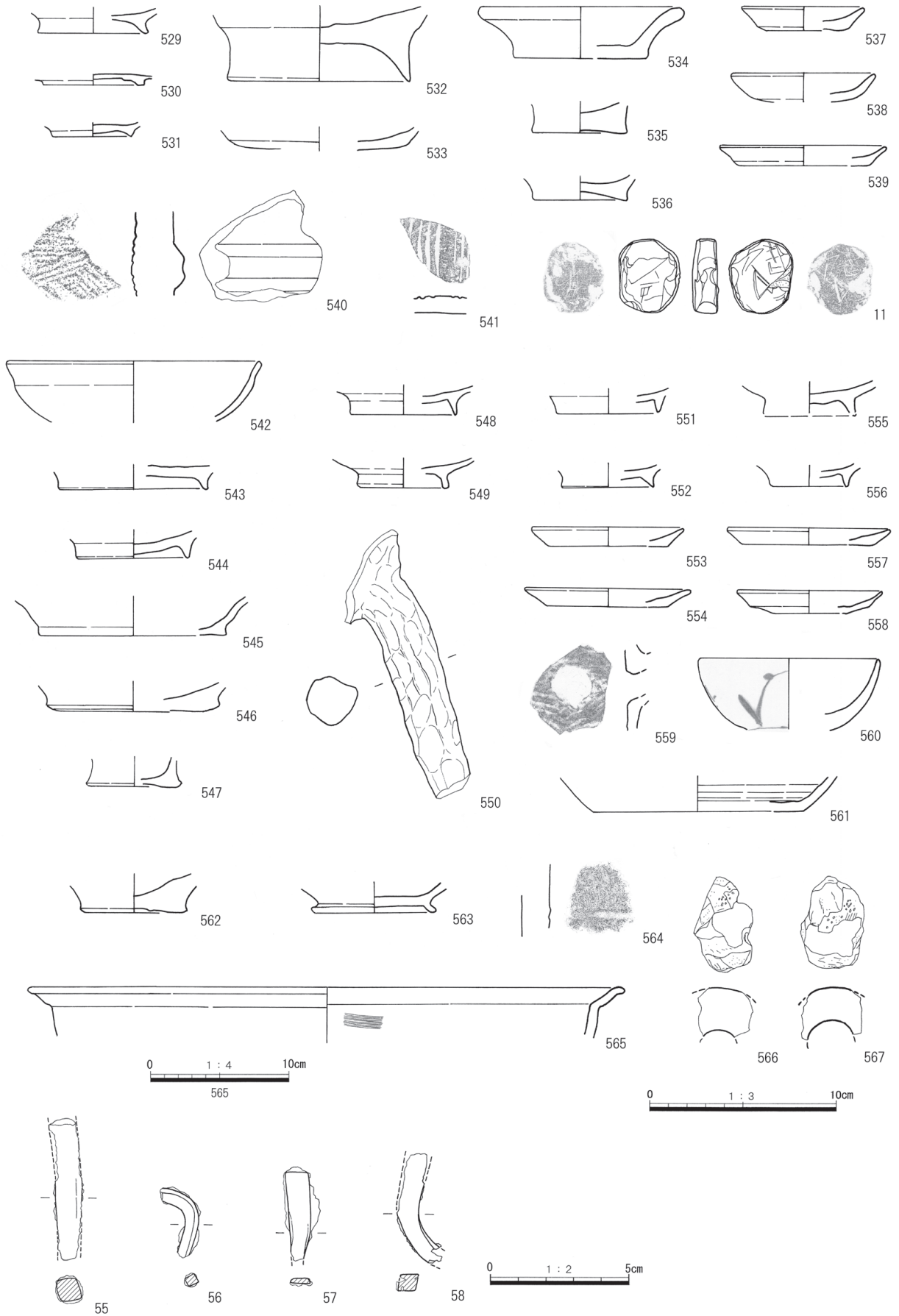


図155 中世他の遺物 墳丘斜面 1:3、1:4、1:2

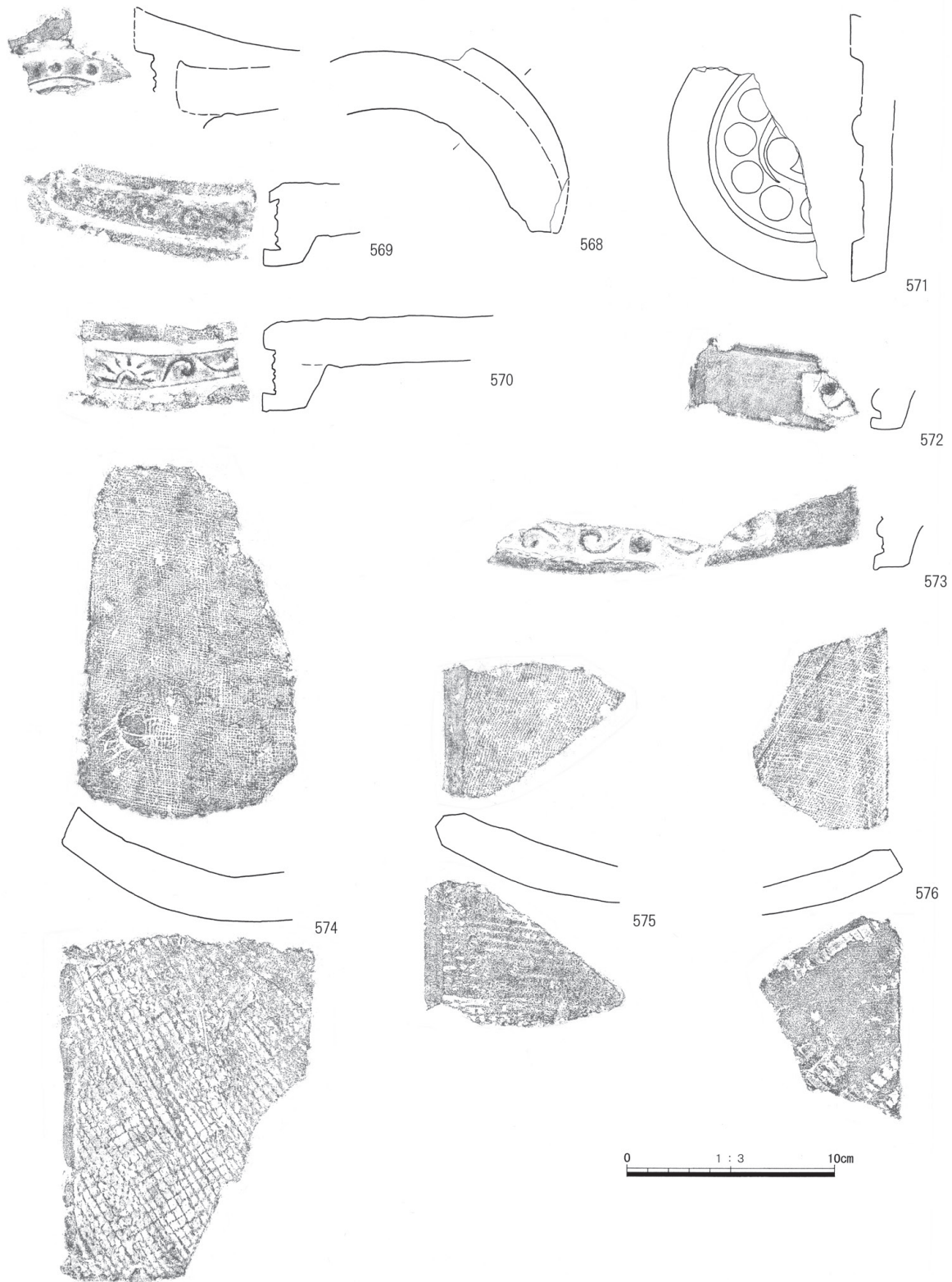


図156 瓦 1 : 3

b 墳丘斜面の遺物

図155には墳頂部以外から出土した中世以降の遺物を示した。基本的に小片からなり、墳頂平坦面から流出、落下したものとみてよい。529～541・11が円丘部北斜面、542～561が南東斜面、562～567が北東突出部からの出土である。基本的に椀や皿など中世の土器で、540、541、石製品11、559～

561、564、566、567以外がそれにあたる。円丘部斜面、北東突出部のいずれも出土量は多い。小片、細片は墳丘斜面の流土に必ず見られるとあってよく、ここに示したのはそのうち図化可能なものである。

中世の土器は529～531、542～544他の土師質高台付椀や杯、小皿、鍋などがある。土師質高台付椀の高台は直径や断面形が多様で、12世紀末から13世紀にかけて長期にわたってこの遺跡が利用されたことがわかる。532はあまり見られない大形の器種である。鍋565、鍋の脚550も出土しているが、煮炊具の破片は少ない。年代はやや異なるが、瓦の出土とあわせれば、これらの土器は仏教関係の祭祀に用いられたのであろう。

北斜面出土遺物のうち540は古墳時代後期の埴輪片かと思われる小片である。541は備前焼播鉢片で16世紀か。石製品11はいわゆるロウ石の小塊で、やや不整形な円板形である。表面には細かい傷が入る。弥生や中世といった古い時期のものとは考えにくい、年代を確定できないので念のため掲載しておく。南斜面出土遺物のうち559は須恵器の大形甕で、注口を作り出している。図示していないが、須恵器甕胴部小片も墳頂・墳丘斜面からわずかに出土している。560は伊万里椀、561は備前焼徳利の底部である。北東突出部の遺物のうち564は埴輪片かと思われる小片である。このほか2点の羽口566・567が出土しているが、年代は不明である。釘とみられる鉄器55～58も少量出土している。

c 瓦 (図156)

瓦は中世のものと同近世以降のものがある。前者は墳頂平坦面の中心主体および立石2調査区の表土・流土からの出土、あるいはその付近での表面採集によるものが多いが、北東突出部や南東斜面調査区の流土からも少量出土している。楯築神社祠西側に分布の中心があり、墳丘全体に散漫に分布するといえるが、総量はコンテナ1箱程度である。後者は南東斜面調査区の流土上層と第2主体付近の円礫層からの出土が多い。中心主体付近や北東突出部の表土・流土からも少量が出土した。

軒丸瓦568は巴文の一部と珠文が残る。珠文は小さく、多数が配される。軒平瓦569・570がこれに組み合うとみられる。軒平瓦569・570は、いずれも焼成はよくなく明黄褐色を呈する。569は状態がよくないが、中心飾りから外側へ唐草が3ないし4転するようである。570は半裁した菊文とみられる文様を中心飾りとする。これらは15～16世紀に位置づけられる。

近世以降の瓦は、軒丸瓦571、軒平瓦572・573がある。軒平瓦573は宝珠を中心飾りとし唐草が2転する。軒丸瓦571・軒平瓦572は幕末から昭和、573は18世紀とみられる。これらは江戸時代後葉から近代にかけての楯築神社の瓦で、社殿の取り壊し時に主に墳丘南側に廃棄されたのであろう。

以上2時期の軒瓦に伴う平瓦の破片以外に中世の平瓦574～576がある。一枚作りの平瓦で、凹面には細かい布目が見られる。凸面には小ぶりの格子目叩きがなされ、575、576ではそれにナデが加えられている。これらと同様の特徴をもつ平瓦は楯築墳丘墓と同地域の加茂政所遺跡から出土しており、伴出の軒瓦から14世紀と判断されている。

これらの瓦から、先に示した12世紀末以降の土器を用いた祭祀の後も、継続して墳頂平坦面が利用されたことを知ることができる。出土した瓦の総量が少なく近世の軒平瓦は小形であることから、祠あるいは小堂であったとみられる。古い段階には仏堂、後には神社が、特異な景観をもつ墳頂平坦面に営まれたことを示すようである。14世紀以降の土器類はほとんど出土していないが、13世紀までの祭祀・儀礼が椀・皿を大量に用いるものであったのに対し、以降は土器類を用いないものに変ったことを示すとみられる。

以上が弥生時代よりも後の遺物である。埴輪片かと思われる小片がわずかに出土しているが、混入というべき存在で、古墳時代に意図的に持ち込まれたのではないようである。南西突出部西側面出土の5世紀の遺物を別にすれば、遺物が出土しはじめるのは古代以降である。

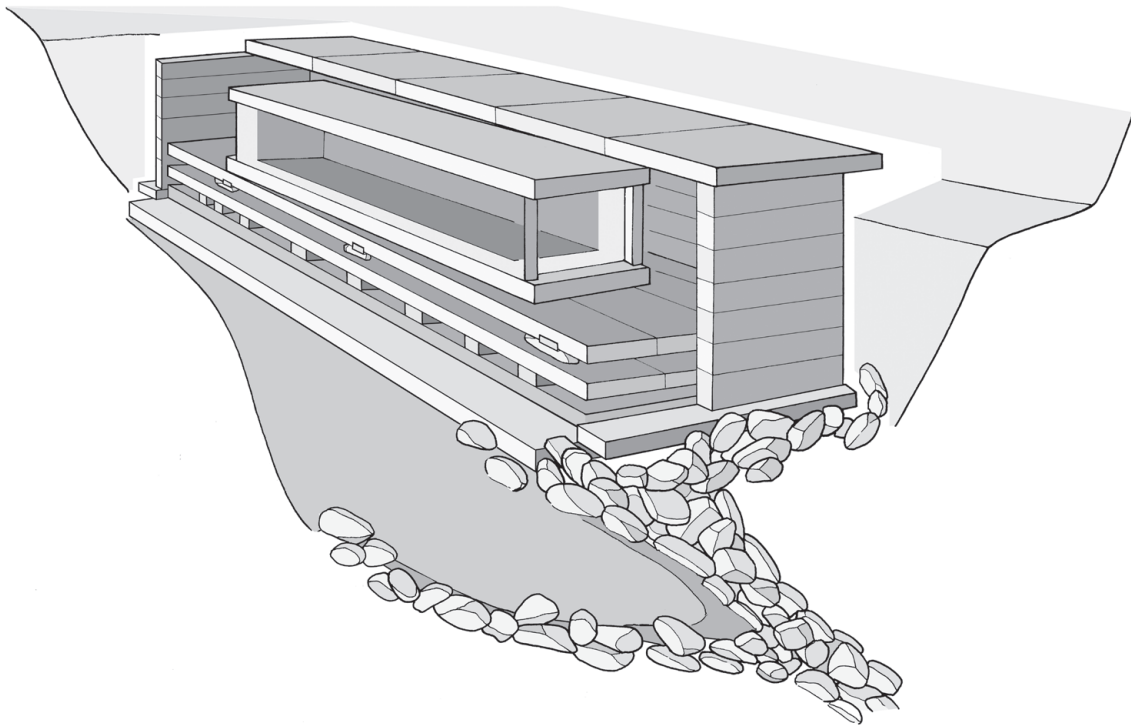


図157 中心主体復元案

第7章 考察

1 墳形と墳丘の諸要素

a 墳形・墳丘の総括

1) 墳形の復元

円丘部の2方向に突出部をもつ墳形であるが、突出部が失われたため全体の形状については不明確な点が残る。全長は主軸線上で83mと推定した。円丘部直径は主軸直交方向で49mである。

北東突出部 南西突出部は前端基部の列石が遺存しているため墳丘の端を確定できる。これに対して北東突出部については工事前の資料に依らざるをえない。北東突出部は円丘部東斜面に設けられた石段の下からはじまり尾根をこえて丘陵北西麓に至る山道に達することが、破壊以前の観察で確認されている。その箇所は切り通しとなるが、これは南西突出部前面の状況と同じである。この山道の位置を確定できれば突出部前端の位置を決めることができる。地形図は残存地形との正確な合成がむずかしいため丈量図を用いた(図158)。山道の尾根よりも北西側は赤線道であり、測量は当時として十分な精度でなされたと思われる。円丘部の土地境界線が屈曲する箇所のいくつかには残存する斜面立石が宛てられており、それらや旧地形から判断できる土地境界をもとに墳丘測量図と丈量図を重ねた。完全に図を合わせることはむずかしく若干の誤差があるが、墳丘復元は可能なレベルと判断した。

これによれば、山道は墳丘主軸と斜交しており北東突出部前端は斜めになる。通常山道の切り通しが尾根に対して斜めになることは少ないため、墳丘の形状と考えておく。墳丘主軸での墳丘長さは83mである。突出部北西側面の墳端位置を知る手がかりがないため北の隅角位置は確定できないが、道がやや西にふって下降をはじめめる箇所付近であるとすれば全長85mとすることもできる。これはあくまで山道の位置であり、見かけのうえでの墳端である。前端斜面の崩落あるいは道の拡幅などによって本来の墳端位置を示すとは限らないが、南西突出部で後に形成された傾斜変換と墳端がおおむね一致するように、基本的に墳丘規模を示すと考えてよいだろう。

北東突出部の北西側斜面の中ほどには上面と平行する幅数mの平坦面が観察されている(近藤1977)。円丘部の北斜面には畑が設けられていないことから、墳丘構造と思われる。

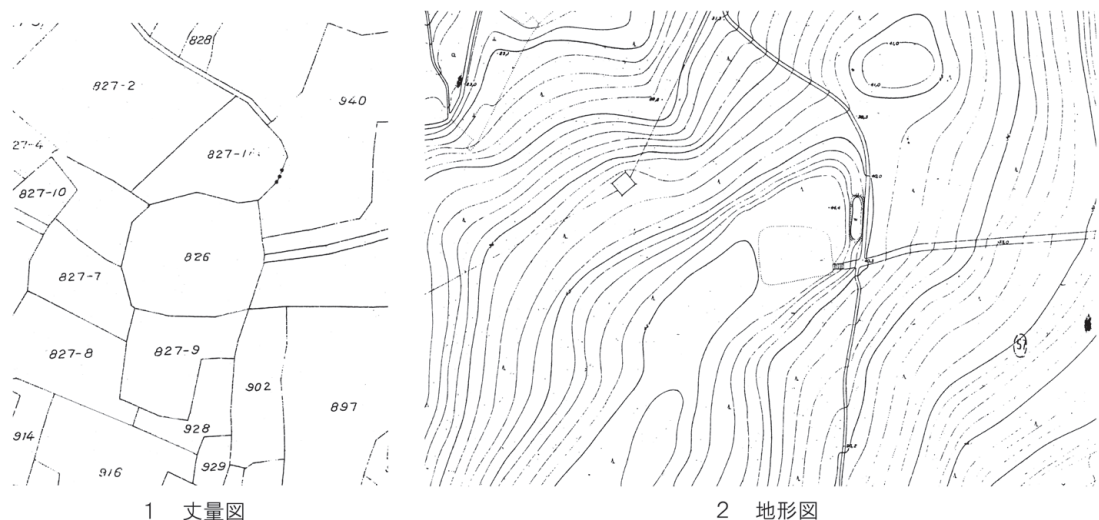


図158 山道の形状 1:2000

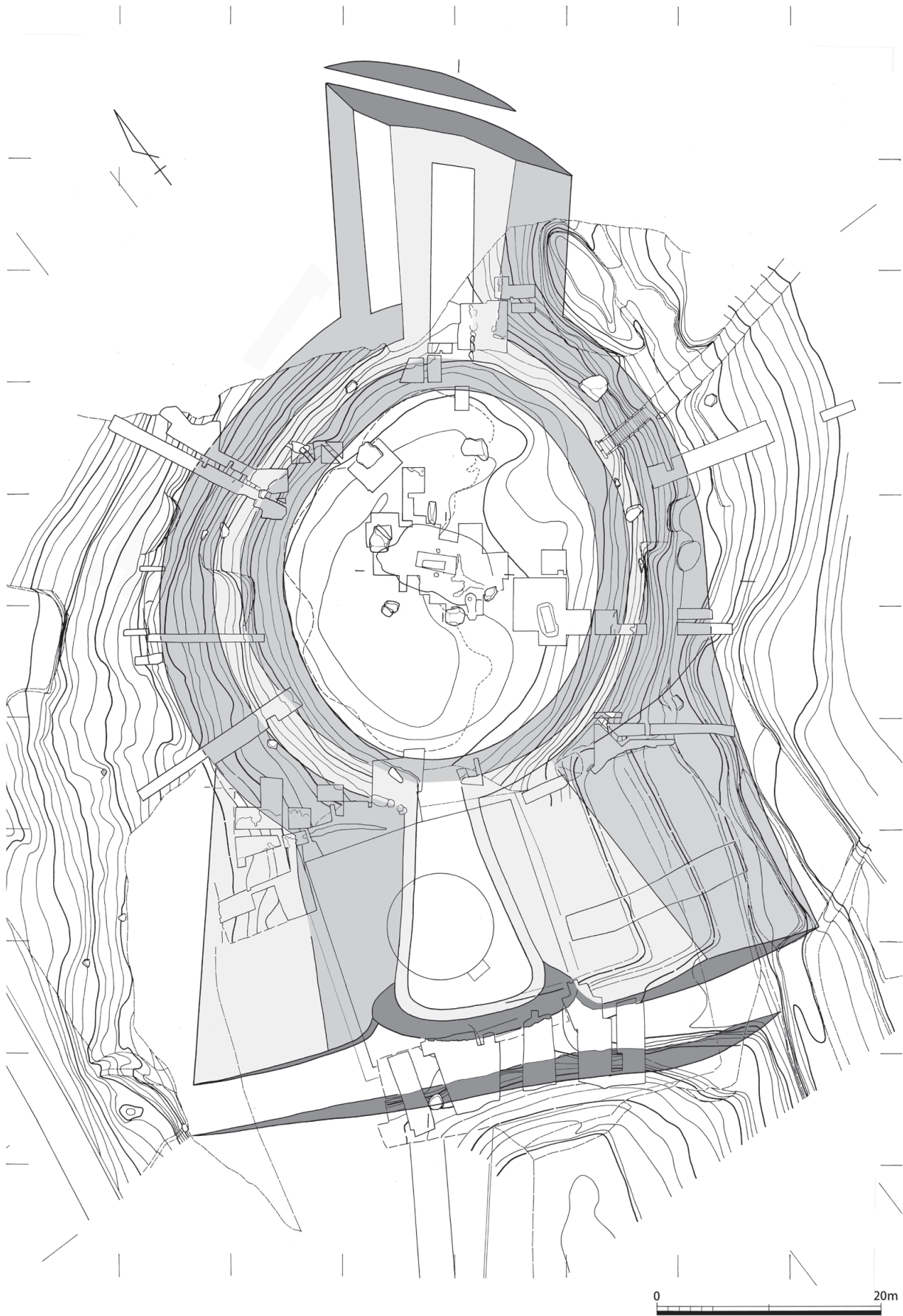
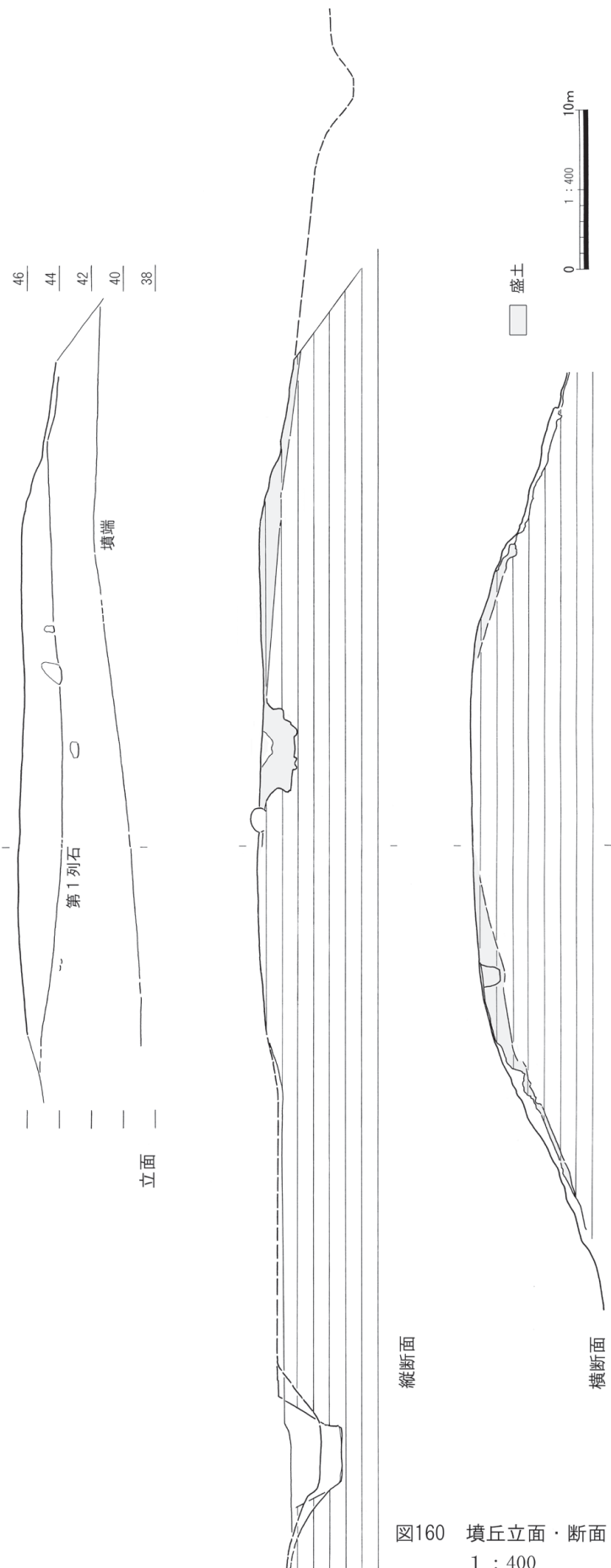


図159 墳丘復元図 1 : 500



円丘部 円丘部に限らず、墳丘には列石などの墳端施設は設けられていない。墳丘斜面の下端で明瞭な傾斜変換が見られるのは東斜面の石段基部付近である。東斜面トレンチでは畑の掘削が円丘部側に入り込んでいて墳丘の端は不明であるが、南東斜面トレンチでは盛土端の下方で旧表土を削りその外側に狭い緩斜面が形成されている。西斜面でも地山を削り出して狭いテラスが設けられる。これに隣接する北西トレンチでは畑石垣の構築のため状態がよくないが、石垣裏側で傾斜が変わっており、この石垣自体が傾斜変換の位置を示すともいえる。斜面の残存状況が良好な北斜面では、丘陵斜面が下降を続けるためわずかに傾斜が変化するとどまる。

北斜面以外では円丘部斜面の下端に幅1.3m程度の狭いテラスを作り出す。これが円丘部の墳端であり、丘陵を加工し斜面形状を整えた範囲とみることができる。

南くびれ部では谷地形を38.9mまで埋めて墳丘が形成されたことが明らかになっている。これの北東にあたる円丘部南東の墳端の高さは39.6m、東斜面のトレンチでは墳端は畑の造成で失われているが検出した地山の高さ40.15mよりも高い位置に還元される。墳丘南東側立面では墳端は北東にやや上昇する線をなすと判断できる(図160立面)。可能な限り墳端を下に設けているわけであるが、そのために尾根が広がる南西突出部の墳端は外に出て、突出部の平面形は著しく幅広となる。

墳端の高さが異なるため、墳丘高さは南東側からで7.1m、北西5.4m、西5.0mである。

円丘部の規模は墳丘主軸と直交で49.2mである。ただし、円丘部の形状は正円形ではなく楕円形であるため、主軸に斜交すれば直径51mともいえる。墳頂平坦面は長径33mの楕円形で、墳頂の中心点は木棺頭側左隅近くに求められる。図160縦断面に示すように、円丘部頂と突出部上面の高さの差は小さい。なお、墳丘主軸は北東-南西方向のグリッド軸に対して約2°東に振っているが、図160の墳丘縦断面にはグリッドL軸での断面を用いた。また、墳丘横断面図は16ラインであり、墳頂中心点直交よりも若干南西である。図は下が南東になる。なお、図159では斜面の勾配が強くなる順に濃い色を用いている。

南西突出部 突出部前面には堀切状大溝が設けられる。検出長さ23m、底面幅3.2~4.3m、丘陵側からの深さ4.3m、上面幅は推定7mである。この堀切状大溝の墳丘斜面下端に列石を設けて突出部前縁を形成する。堀切状大溝の底面は調査範囲で南東に下がるが、工事前地形の復元によってこれが埋没した地形は南東に下降しながら伸びることがわかる。堀切状大溝を反映した地形は40m等高線付近まで及んでおり、主軸にやや斜交して少なくとも40mの長さで推定できる。北西側については情報がなく、造成範囲よりも外側は幅が狭くなって完全に埋没しているのでないとするれば、現在の造成範囲の中に収まることになり、60m弱の全長とみられる。ただし、図159の墳丘測量図西端にその半ばまでを図化しているが、平面形が半円形をなす大きくえぐれた地形があり、これが後の掘削でないとするればここに達することも考えられる。

東側の墳端は南くびれ部になされる盛土の下端と堀切状大溝の下端をむすぶ低い位置に形成されるとみられるのに対し、西側の墳端は西くびれ部に近い調査区の端で厚い盛土のはじまりを確認しており、墳丘主軸にかなり近い位置に傾斜変換を想定できる。西くびれ部排水溝の末端はその延長よりもやや墳丘側となるが、この想定に齟齬をきたすほどではない。傾斜変換の外側には、外端は確認できていないが薄い造成土で緩斜面が形成される。これは円丘部の墳端外側のテラスに対応するものとみられるが、幅が広く緩斜面をなす。この部分については墳丘に含めることも無理ではない。

突出部上面の形状を推定する手がかりはない。突出部側から伸びる排水溝からここに埋葬施設が設けられたことは明らかであり、排水溝を伴うことから、中心主体を一回り小さくしたようなものと考えられる。突出部が円丘部に接続する箇所の上幅は推定4.2mであるが、その幅にそうした埋葬の墓壇が余裕をもって収まるとは考えにくいことと、狭長な上面を形成するには原地形かなり削り込む必要があることから、先端側で広がる形状を考えておく。

2) 築成

墳丘は地山の削り出しと盛土で形成される。原地形は南西突出部から円丘部の半ばまでが山頂、北東突出部は下降をはじめた尾根である。円丘部の南東側を盛土で形成し、北西側では第1列石から上を盛土とし墳頂平坦面の肩を作る。調査範囲では南東側の第2主体付近で盛土が1.5mと最も厚いが、原地形は南くびれ部に位置する谷地形にむかって下降するとみられ、第2主体の南西の墳頂肩部付近で盛土が最も厚くなると思われる。また、円丘部の北東側斜面も盛土が厚くなる。北東突出部の南東斜面は地山の整形、一方、北西側では第1列石付近が60cm以上の厚さの盛土となる。南西突出部は上記のように南くびれ付近は盛土で形成されるが、それ以外の東斜面は地山整形であり、西側に墳形を整えるための盛土が加えられる程度とみられる。

上記の墳形復元では、円丘部は正円ではなく主軸方向に長い楕円形となる。原因の1つは北斜面の張り出しの不足であり、もう1つは墳丘南東半も十分に張り出していないことである。墳丘の平面形について重視の度合いが低い点も一因かと思われるが、これらの原因は盛土の不足であった可能性が

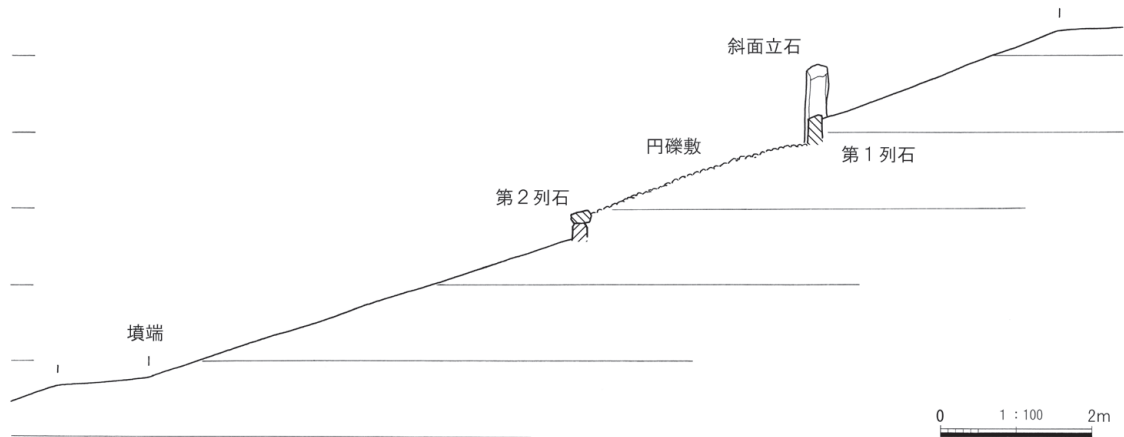


図161 斜面施設模式図 1 : 100

強い。第4章第1節で述べたが、墳頂平坦面も完全な水平にはならない。丘陵上に墳丘を形成する場合の盛土量の見積りは平地の場合よりも難しいと思われるが、それを含む設計や施工の技術が未熟であったことによると考えられる。奈良県纏向石塚墳丘墓の円丘部も歪みが大きな円形であり、正円形の墳丘は同ホケノ山古墳で達成されるとみられる。

墳丘の構築で注目されるのは北斜面で検出した墳丘内列石である。これの最古の例とみられ、木槨とともに導入された技術と考えられ、系譜を追う必要がある。

3) 墳丘の施設

墳頂 円丘部の墳頂平坦面には円礫が敷きつめられる。現在遺存する範囲は必ずしも広くはないが、築造時には円礫敷が広がり、そこに立石等がそびえ多数の土器が配置されるという景観を復元できる。

円丘部斜面 墳丘斜面には第1列石と第2列石によって列石線と2つの段が形成され、列石の間は円礫敷となる。2つの列石の間隔は2.7~2.9m、北東突出部の東側基部で2.5mである。

第1列石は墳頂肩から外側に3.2m、1.5~1.8m下の位置に設けられる。列石の高さは45cm前後で、板状の石を用い、それらの間に大形の石材を縦に用いた高さ1.1~1.8mの斜面立石が配置される。列石は大きな石材の場合は1石のみであるが、小さい場合は上に石を重ね、部分的に石垣状になる。いずれも下外側に傾斜しているが、元は垂直であったとみてよい。斜面立石の間隔は北斜面では5~7mと広いのに対し、南東斜面では3m前後と推定でき、平野に面する側に多くの斜面立石が配置されたようである(第3章第13節)。また、斜面立石13・15など幅が広く大きな石が配されるのもこの側である。

原位置をとどめる斜面立石のうち13・15・16は、発掘調査を実施していないため数値は目安でしかないが、石材下方基部の現状の高さは13が42.81m、15が43.87m、16が44.34mである。13は本来の位置から下がっている可能性が強いが、15は元の位置をほぼ示すとすれば、南東側では第1列石は南東から北東にむかって若干高くなる(図160 立面)。反対の北西斜面では3が44.36m、4、6がともに44.30mと、ほぼ水平である。

第2列石は南くびれ部の列石29・30が遺存石材の可能性はあるが、それ以外に残存する箇所がない。西くびれ部では深い掘方を伴っており、北東突出部東くびれ部でも大形の石材が用いられたとみられるのに対し、西斜面では浅い抜取跡だけが残っており、一様の構造ではなく、両くびれ部付近では第1列石に近い構造、それ以外の円丘部では石垣状であったと推定する。

突出部 北東突出部の第1列石は上縁にそって設けられる。斜面立石ほどではないが大形の3石が遺

存している。これらは墳丘から突出しており、これに加えてさらに大きな石を立石として配することはなかったのではないかと思われる。第2列石は3m間隔でやや大きめの石を縦置きに配し、その間を石垣でつなぐ。北東突出部南東側では第1列石と第2列石の間隔は突出部前端にむかって広がっており、前端付近ではかなり幅広になることが予想される。

南西突出部は前端の列石が遺存し、その上側にはすべての範囲ではないが石垣が形成される。前端の列石は石垣の基部であり墳丘に密着するが、その両端では上部が墳丘から突出する列石にかわる。この列石は突出部の隅角稜線を通して突出部上面前縁に至るとみられる。また、円礫や土器の崩落から突出部上面前縁には円丘部から続く円礫敷が設けられていたと判断できる。したがって、突出部前面に限って第1列石、円礫敷、第2列石に加えて突出部前端列石が設けられ、3重の列石となる。前述のように第1列石、第2列石は水平とはいいがたいものの、墳丘斜面におおむね一定の高さで設けられるが、それから分岐する南東突出部前端列石だけが大きく下降する。

b 墳形・墳丘の系譜と特徴

1) 墳形

墳端 楯築墳丘墓の場合、墳端には列石などの施設を設けていないが、岡山市みそのお墳墓群や同雲山鳥打墳丘墓群など、吉備の該期の墳墓も墳端施設はなく、それらと同様の墳丘形態である。総社市立坂墳丘墓など後述の斜面下方型では列石が墳端になる例があるが、それらでも列石は墳丘を全周しない。四隅突出型墳丘墓や前方後円墳では墳端は墳丘の平面形を明示する大きな役割をもつものに対して、吉備の墳丘墓では墳丘斜面の下側は墓を表示する要素とはするが、左右対称などに平面形を整えることはそれほど重視していないとみられ、著しく幅が広がる楯築の南西突出部の平面形はその代表といえることができる。

楯築墳丘墓では、墳端は平野に面した南東側が西側よりも2.1m低くなっており、この側からの景観を意識したと推定できる。深い堀切状大溝によって墳丘の長さが明示され、低い墳端によって墳丘の高さが際立つことになる。

円丘 さて、楯築の主丘の平面形は円形であるが、吉備南部でそれ以前に築かれた墳墓のうち、弥生時代中期前葉など年代が大きく離れるものを除外すれば円形を基調とするものはなく、すべて方形である(図162-1・2)。楯築墳丘墓以外で円形をとる例として雲山鳥打2号墳丘墓(5)、立坂墳丘墓(3)があるが、これらは楯築墳丘墓よりも後出するもので楯築墳丘墓の影響、模倣によって形成されたとみられる。円形の墳丘を用いるのは吉備の東、摂津・播磨地域の周溝墓である(岸本2009)。楯築墳丘墓は、この地域の従来の墳墓との差別化のため、それまでなかった異系統の墳形を他地域から採用したと考える。

前方後円墳との対比において、墳頂平坦面が広いことも楯築の特徴である。これについては儀礼の場として広さが求められたと考えることもできるが、多数の埋葬を設けることを念頭に置いて築かれてきた弥生墳墓は全般に墳頂平坦面が広く、それは埋葬が少数の場合も変わらない。墳頂平坦面の広さは弥生墳墓の伝統を引き継いだものであり、墳丘の高さを求めた前方後円墳では必然的に墳頂平坦面が狭くなると理解することができる。たとえば図9に示した矢部大塚古墳は楯築墳丘墓よりもはるかに急な斜面勾配であるものの、後円部径25.5mに対して高さ4.75mであるため、墳頂平坦面の直径は広くみても約10mとなる。

突出部 突出部もまた吉備には伝統がない。突出部をもつ墳丘墓として楯築とともに例示されるのは兵庫県西条52号墓と同養久山5号墓(図163)であるが、前者は楯築と同時期、後者は楯築よりも後

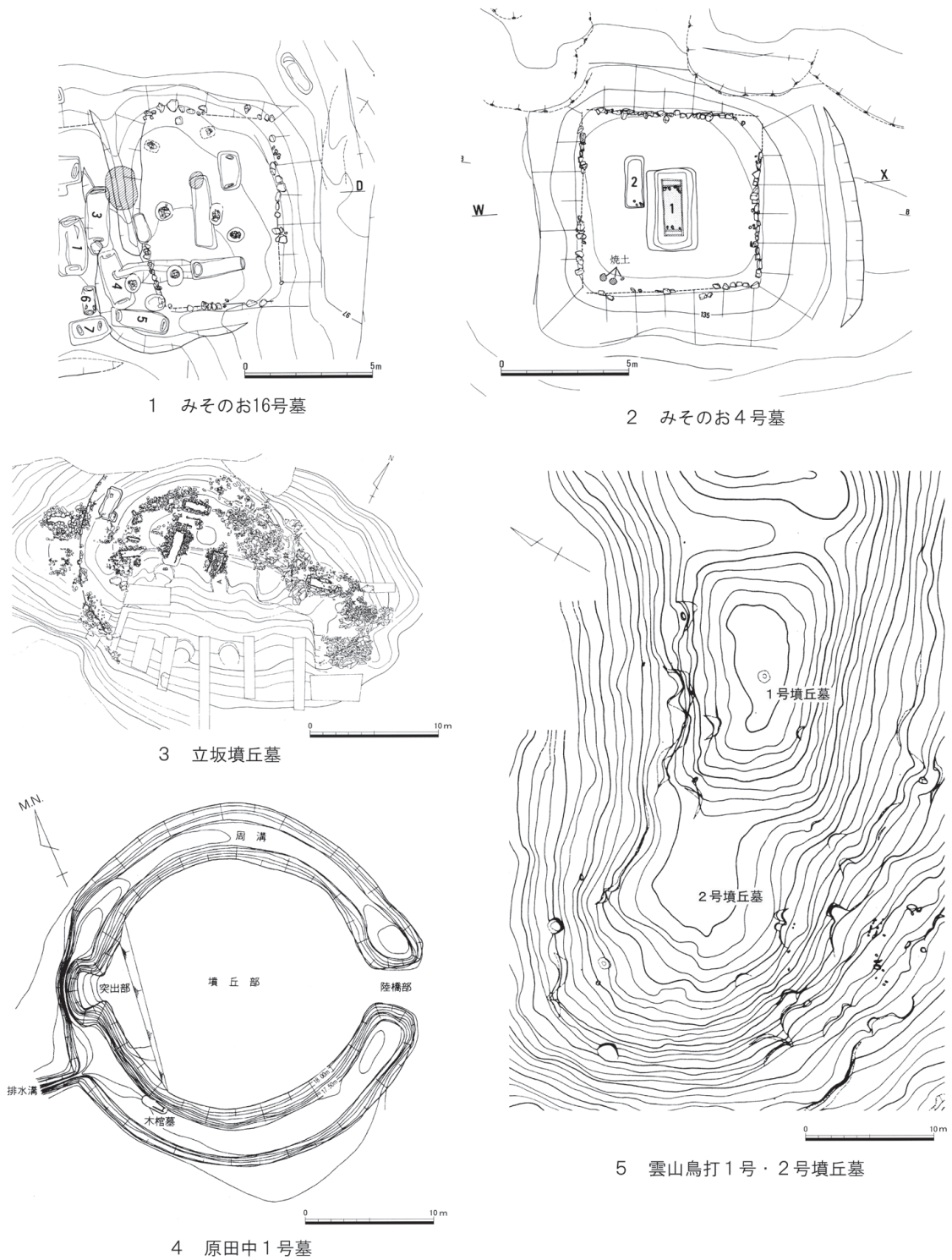


図162 円丘と方丘 1 : 250、1 : 500

出する。時期的に近い西条52号墓は楕築と同じく2重の列石を設けていることからすれば、後述の大柱遺構の場合と同様に楕築の墳形が他地域に影響を与え、播磨に同じ墳形が出現した可能性が考えられ、瀬戸内地域東半で多元的に突出部が出現したとは言い切れない。

兵庫県有年原田中1号墓(図162-4)がその例であるが、円形周溝墓の陸橋が突出部の原形となったとみられるものの、楕築の突出部と陸橋では円丘部に対する大きさが異なる。陸橋としての機能を伴ってではなく、張り出しをもつ円丘という形を導入したと考える。

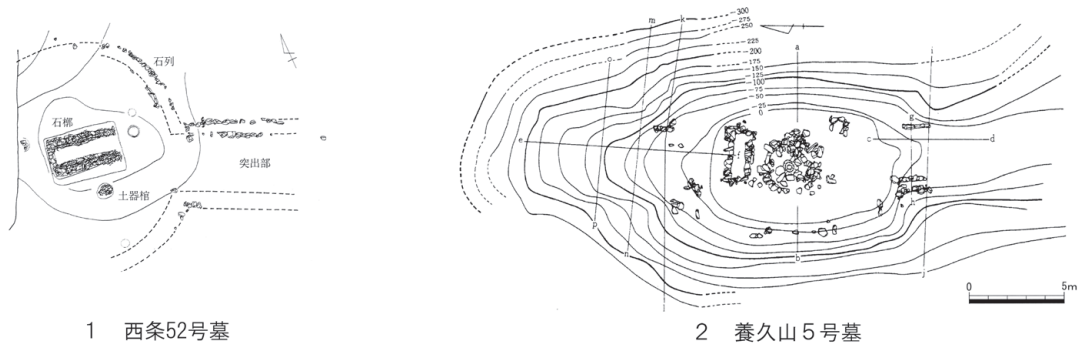


図163 突出部をもつ墳丘墓 1 : 400

楯築墳丘墓の突出部については不明な箇所も多いが、特徴的な2つの遺構が遺存する。1つは南西突出部前面の堀切状大溝と列石・石垣である。堀切状大溝は著しく深く、急角度の斜面をもち、前述のように突出部前端では列石線を3重とし最下の列石は石垣を伴って石壁を形成する。墳丘全体の中で外からの遮断、隔絶を最も強く表示しており、観念的であれ実用的であれ、突出部を円丘部への道とするには最もふさわしくない形状である。もう1つは南西突出部の埋葬施設である。埋葬施設そのものは失われていたが、突出部側から伸びる排水溝が設けられており、中心主体に次ぐ規模の施設、おそらく木槨が設けられていたことは確実である。排水溝は墳丘構築の過程で設けられることから、南西突出部主体は中心主体と同時埋葬の可能性がある。これらからすれば、突出部を道と見ることはむずかしく、円丘部とは別の埋葬の場とみなすのが適切である。これは南西突出部についての評価であり、北東突出部は埋葬施設の有無を含めて不明であるため、道としての機能を否定しきれないが、円丘に方形の張り出しが接続する形状を採用したと理解すれば、あえて突出部に道の機能を求める必要はない。

道や通路については突出部とは別に考えることができる。南西突出部前面の堀切状大溝は著しい深さに山を切り下げているため、墳端から上に向かう斜面のなかで最も緩やかな勾配となる。また、単に切り下げただけでなく底面には整地がなされる。ここを経由すれば西くびれ部まで難なく行き着くことができるわけであり、どの段階に用いたかは不明としても通路として用いられた可能性があり、南西突出部前端列石・石垣の構築はこれに対応したものと思われる。

突出部の性格にもどるが、以上の特徴から、円形周溝墓の陸橋部を参照し、円丘に接続させた方形部分として設けられたものであり、かつてなかった墓の形状とするために創出され、古墳の前方部の直接的な祖形になったと考える。

吉備では岡山市矢藤治山古墳、同七つ塚1号墳など初期の前方後円墳では前方部に埋葬が設けられる一方、大和の中山大塚古墳や下池山古墳では前方部埋葬はなくその出現は遅れる。吉備では突出部は埋葬の場であったことが継承され、大和にはまず形が伝わったと理解することができる。

2) 斜面施設

斜面施設の要素と特徴を整理すれば①2重の列石、②円礫敷、③斜面立石の配置、④石材の縦置き の4項目となる。

これらのうち、②については前期古墳のテラスに礫を敷く例をのぞいて以前も以後も類例はない。これは墳頂平坦面に設けられる円礫敷についてもいえることである。

①については、先にふれたように西条52号墓が例となるが、これは楯築の影響の可能性がある。また、四隅突出型墳丘墓墳裾の列石が2重あるいは3重になるものがあり、その代表は島根県西谷3号墓であるが、これらは楯築墳丘墓よりも後出するので、楯築が影響を与えた可能性はあっても逆はな

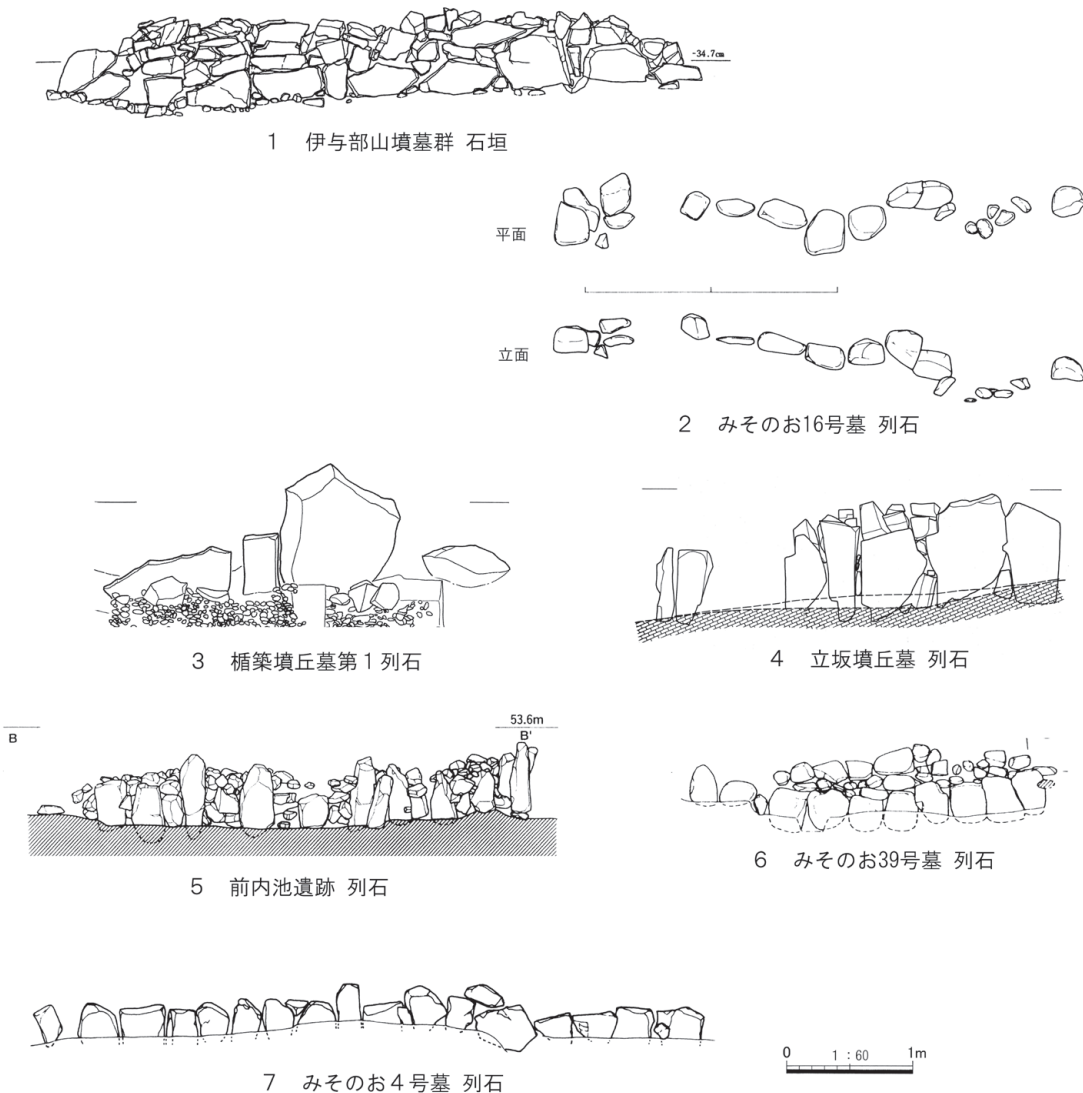


図164 吉備南部弥生墳墓の列石 1 : 60

1・2 後期前半、3～6 後期後葉、7 後期末葉

い。①・③は、それまでの吉備の墳墓に設けられた1重の列石を多重化し、それを可能な限り大形化したと理解することができる。

弥生時代後期、楯築以前に列石あるいは石を用いた区画施設を設ける例として、みそのお墳墓群と総社市伊与部山墳墓群がある。前者では列石、後者では石垣が検出されている。時期的変化を知ることができるみそのお墳墓群を見ると、列石は後期前葉からはじまり、後期前葉末～中葉の16号墓（図162-1・164-2）では平たい石を墳丘肩部に立てて設置する（墳丘の流出により基本的に横転）。中葉～後葉前半の23号墓・24号墓では石の大きさに大小はあるが、長方形気味の石を縦に設置している。以降、石の縦置きは継続し、末葉の4号墓（図162-2・164-7）や42号墓では大きさのそろった石による整った列石が形成される。

伊与部山墳墓群（図164-1）は後期前葉～後葉と時期幅が広いが、楯築墳丘墓よりも前に埋葬を終えるとみられる。この遺跡で最初に築かれた墳丘に伴う石垣は石を縦に用いておらず、後期の前半段階では吉備の中で石材の設置方法が地域ごとに異なっていた可能性があるが、後続して構築された墳丘に伴う列石は縦に据えられており（近藤1996 図版9下）、後期後葉の楯築墳丘墓の築造までには石材の縦置きが少なくとも吉備の南部で共有され、以後、総社市前山遺跡、赤磐市前内池墳墓群（5）、

津山市黒岩遺跡方形台状墓など広範な分布を示すことになる。

流出のため遺存することは少ないが、これらは単に列石として設けられるのではなく、高さをかせいでり上端をそろえるための石垣を伴うとみられ、みそのお39号墓（6）では列石の上に設けられたある程度の高さの石垣が遺存する。列石と部分的な石垣で形成される石の壁は墳丘の上端に設けられており、これの上端が墳丘の肩を形成する。

楯築墳丘墓に先行する墳墓での石材配置方法と列石のあり方を見てきたが、石の縦置きと列石はこの地域に先行する事例があり、楯築の列石はそれを踏襲しつつ著しく大形化している。ただし③斜面立石については先行する事例はなく、楯築で新たに生み出されたものと理解できる。また、それまでの列石は上端が墳頂平坦面の肩を形成するものであった（墳丘肩部型）のに対し、楯築では列石の位置が斜面の上部に下がる（斜面下方型）点が異なる。筆者は弥生時代後期の吉備の墳墓の列石をこの2種類に区分し、墳丘肩部型は墳丘に葬られるべき人すべての埋葬を終えた後に構築され、新たに生み出された斜面下方型は中心埋葬の形成に伴って構築されたと考えており（宇垣2013）、楯築例は斜面下方型の嚆矢となる。みそのお墳墓群など小規模な墳墓では墳丘肩部型の列石配置が続くが、立坂墳丘墓（4）や岡山市都月坂2号墓など大形の墳丘をもつものでは斜面下方型で列石を構築する。

列石は墳丘に石の壁で段差を設けるものであり、そこには遮蔽、死者の世界の明示といった機能があると思われるが、楯築の板状の斜面立石をまじえた第1列石の様相から、主となるのは遮蔽であったと考える。顕著な施設を設けない墳端に対して、列石から中が侵すべからざる範囲であったとみなすことができる。

2 後期後葉の木槨

a 研究の現状

中心主体は内法長さ3.6m、同幅1.6m、復元高さ88cmの木槨で、上下2枚の底板をもつ。下底板の下には棧を渡し、底板の間に礫を配して隙間をとる構造である。木槨の南東小口からは石組排水溝がはじまる。きわめて入念な他に例がない構造である。

木槨の構造材が残存する例はなく、いずれの調査においても墓壇埋土等に残された痕跡から復元せざるをえないが、蓋板等の腐朽による陥没や側面の崩落によって痕跡が遺存する範囲は限られる。そのため解釈の自由度は広くなり、復元案が複数示されるものや木槨か否かが議論される資料もある。

木槨とされる資料のうち、広島県佐田谷1号墓SK2と鳥取県布勢鶴指奥1号墓第1主体では、墓壇埋土に縦方向の境目が2本ずつ見られ、内側が木棺、外側が木槨とされる。通常の木槨であれば木棺は木槨空間に自立しているため、木棺の腐朽が進まないうちに木槨と木棺の蓋板が損壊して土が充填しない限り縦方向の痕跡が残ることはない。そうした例である雲山鳥打1号墳丘墓第3主体(図165-3)の状況とは異なるものであるため、これらでは木棺と木槨の間は土が充填されていたことになる。その場合、木槨・木棺の板材がある程度の厚さであったとすれば埋め土に挟まれる木槨材については板材の厚さを反映した痕跡が残るはずであるが、それは認められない。この2例は、木棺に著しく厚い材が用いられ、その内外の痕跡が確認できたと理解すべきである。布勢鶴指奥1号墓の場合は墓壇埋土の陥没が小さいことも指摘できる。これらは厚葬の1つのあり方を示すものであるが、木槨資料からは除外する。

木槨については岡林孝作氏の研究(岡林2018)があり、そこでは楯築例についても詳細な評価がなされており、改めて付け加えることは少ない。氏の研究にもとづいて木槨の変遷を概観すれば、以下のとおりである。弥生時代中期前半に木棺を2重化したような木槨状施設(木槨A類)が設けられるが、それらは北部九州を中心に分布し以降に継続しない。改めて出現するのは後期後葉の中部瀬戸内から山陰にかけて分布する木槨B類であり、これが古墳時代前期初頭の木槨C類に発展する。木槨C類は奈良県ホケノ山古墳の石囲い木槨を代表とし、長大化しており古墳時代の竪穴式石槨の祖型となる。

b 後期後葉の諸例

木槨B類を代表するのは楯築例であるが、これ以外に後期後葉の資料として立坂墳丘墓第2主体・第3主体、雲山鳥打1号墳丘墓第1主体・第2主体・第3主体、西谷3号墓第1主体・第4主体がある(図165)。雲山鳥打1号墳丘墓第2主体は石囲いと木棺の間に土を入れており木槨ではないが底板は石囲いに達する広さであり、木槨の要素を取り入れた埋葬施設である。これらのうち、たとえば立坂墳丘墓第3主体の木槨内法は長さ2.7m、幅90cmで、木棺よりも一回り大きい空間を形成して棺を収めるが、楯築が格段に大きいといえる。

立坂型特殊器台の変遷については黒宮大塚→楯築→立坂・雲山鳥打1号→西谷3号と考えており、楯築の木槨が最も古く位置付けられる。雲山鳥打1号墳丘墓第3主体は底板の有無が明らかでないが、立坂墳丘墓と西谷3号墓の木槨は底板をもたず棺を収める施設というよりも棺を囲う施設であるのに対し、楯築では2重の底板を設ける。こうした規模、構造の差異と先後関係から、まず楯築で一式を備えた木槨が登場し、その模倣、伝播によって簡易な構造の立坂以下の一群が出現したと考えるこ

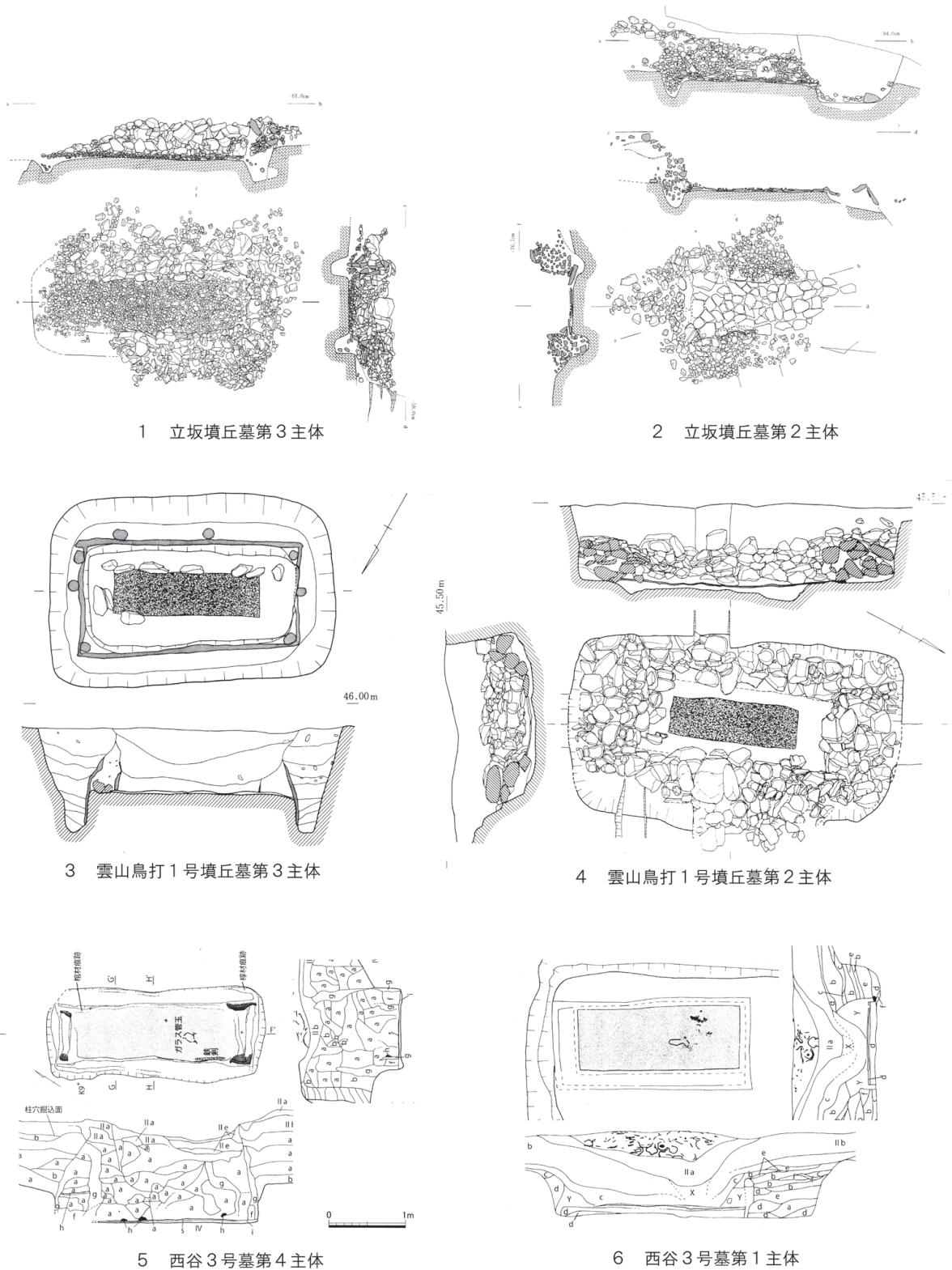
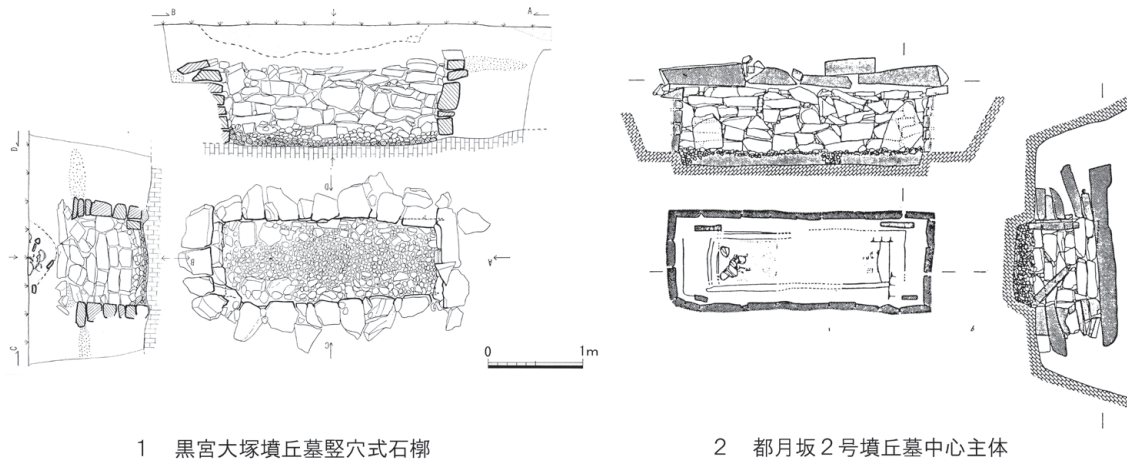


図165 後期後葉の木槨 1 : 80

とができる。

雲山鳥打1号墳丘墓は楕築と同じ地域に所在する方形の墳丘墓で長さ20m、立坂墳丘墓は別の地域に所在して墳丘径17mである。後の前方後円墳になぞらえれば、それぞれの地域の首長墓に相当するとみてよいだろう。地域内の首長間のネットワークを通じて木槨が伝播したとみられる。

後期後葉段階の吉備南部の埋葬施設を整理すれば、以下の階層をなすと考えることができる。



1 黒宮大塚墳丘墓竪穴式石槨

2 都月坂2号墳丘墓中心主体

図166 竪穴式石槨 1 : 80

- A 排水溝を伴う大形の木槨：楯築墳丘墓中心主体
 B 1 木槨：立坂墳丘墓第2主体・第3主体、雲山鳥打1号墳丘墓第3主体
 B 2 竪穴式石槨：黒宮大塚墳丘墓 木棺直葬：楯築墳丘墓第2主体
 C 木棺直葬：みそのお墳墓群など

最上位の埋葬Aでは入念な構造の木槨が構築される。それより下位の埋葬B 1 では構造が簡単な木槨が設けられるが、裏込めの構造は同一ではなく、木槨についての理解や投入労働力に応じた形で構築されたとみられる。B 2 は大形墳丘墓の副次的な埋葬である。楯築墳丘墓第2主体に示されるように最高位の被葬者・中心埋葬被葬者に連なる者であっても、通常の木棺よりはよほど入念な構造をとるとはいえ、木槨を構築して遺体を保持し祀る対象にはならない場合もあったことを示している。C は後に小規模な前方後方墳、多くは小方墳を築く階層である。

B 1 の立坂墳丘墓第3主体と雲山鳥打1号墳丘墓第3主体の木槨内法長さはともに2.7m、続く時期の都月坂2号墳丘墓中心主体と金敷寺墳丘墓中心主体、これらは竪穴式石槨であるが、2.6mである。B 2 の黒宮大塚墳丘墓竪穴式石槨が2.2m、遺跡全体の構造が不明ながら鋳物師谷2号墓F主体が同規模である。幅の数値は雲山鳥打1号墳丘墓第3主体が1.4mと広いが他は90cm前後でばらつきは少ない。幅は蓋材架構のこともあって幅は変化が少ないとみられるのに対し、長さは2.7mと2.2m前後に分かれている。埋葬の格付を埋葬施設の長さで表示することが後期後葉にはじまった可能性が強い。

なお、西谷3号墓第4主体は2.5m、第1主体が2.4mである。吉備の木槨は側板・小口板を設置する掘り込みを設けるのに対し、これらでは墓壇内に直接側板・小口板を立てる、より簡易な構造になっている。

排水・防湿 楯築の木槨は2重の底板を設けて棺の位置を墓壇底から離し、石組の排水溝を接続させる。木槨は大陸に起源を持つ厚葬の施設であるが、この構造からは、目的とした機能は排水、防湿であり、それは被葬者、遺体の保護をはかるものであったと判断できる。

立坂墳丘墓第2主体は床面を板石敷、第3主体は礫敷とし、木槨の周囲は石で充填する。木槨の出現と同時にこの地域に現れるのが竪穴式石槨であり、黒宮大塚墳丘墓、それに続く時期の金敷寺山墳丘墓、都月坂2号墳丘墓（図166）などが知られており、これらの床面は礫敷や石敷となっている。こうした礫や石を用いる床面は木棺を直接土に載せないこと、水の排除を意図したものと理解できる。木棺の周囲に空間を設け水分を遮断する点で竪穴式石槨は木槨と同じであり、木槨・竪穴式石槨の吉備南部各地での採用は、この地域の首長層で埋葬と埋葬施設についての考え方が共有されたことを示

している。

埋葬施設床面への石や礫の使用は、吉備にとどまらず播磨の西条52号墓や香川県奥11号墓の竪穴式石槨に見ることができ、時期が下って広島県西願寺墳墓群や梨ヶ谷墳墓群、香川県石塚山2号墳などがあり、梨ヶ谷2号墓a主体・b主体では床面に枕木状の列石も設けられる。西条52号墓や香川県奥10号墓では吉備系の土器が出土しており、吉備の葬送についての思想と埋葬施設についての考え方が伝わって構築されたと考えられる。

石材使用 特殊器台の編年から黒宮大塚墳丘墓が楯築墳丘墓に先行するが、黒宮大塚墳丘墓竪穴式石槨は中心埋葬ではないため年代が下がるとみられ、楯築墳丘墓中心主体と近似した年代になると考えている。上記のように後期後葉に防湿・排水を考慮した埋葬施設が出現するわけであるが、その段階から木槨と竪穴式石槨の2種類が存在することになる。竪穴式石槨の故地については論の及ぶところではないが、導入元の地域に2者が併存していたのではないだろうか。黒宮大塚例は木蓋と判断でき、後期末葉の都月坂2号墳丘墓は石蓋であり、末葉には石蓋が一般化する。ただし、鑄物師谷2号墓の竪穴式石槨F主体が出土の特殊器台と同時期とすれば石蓋は後期後葉にさかのぼる。

雲山鳥打1号墳丘墓第2主体も木槨の周囲に礫囲いを形成する。後期末葉段階のBクラスの埋葬では金敷寺裏山墳丘墓や都月坂2号墳丘墓など竪穴式石槨が主に用いられており木槨は見られなくなる。また、女男岩墳丘墓中央土壙のような木棺直葬であっても棺小口板の固定に多量の石が用いられており、一般の埋葬でも自然石を用いた石枕が一般化するなど、石材選択の傾向が顕著になる。吉備での楯築よりも後のAランクの埋葬施設の姿は不明というほかないが、竪穴式石槨か石囲い木槨といったものであることが予想される。

3 大柱遺構と木柱・立石

はじめに

第4章および第5章に示したが、楯築墳丘墓の墳頂平坦面には6基の立石と3基の木柱が所在し、さらに建物1棟が設けられたと判断した。これらは葬送儀礼のなかで、そしてそれが終わった後も機能することが観念されたと考えられ、墳丘墓築造の思想を具体的に示す遺構とよいが、それらの機能なり役割について推論することは容易ではない。それらのうち最も大きく中心的な機能を担ったとみられる大柱遺構については、遺構の系譜を北部九州に求めることができ、楯築以降それが各地に伝わる状況を見ることができる。吉備の葬送祭祀がどのように成立し、広がったかを知る手がかりとなる遺構である。ここではそれらの資料を提示することとし、あわせて大柱の機能についても考える。立石については分析の手がかりが少ないため、推論となることをあらかじめ断っておく。

a 北部九州の大柱遺構

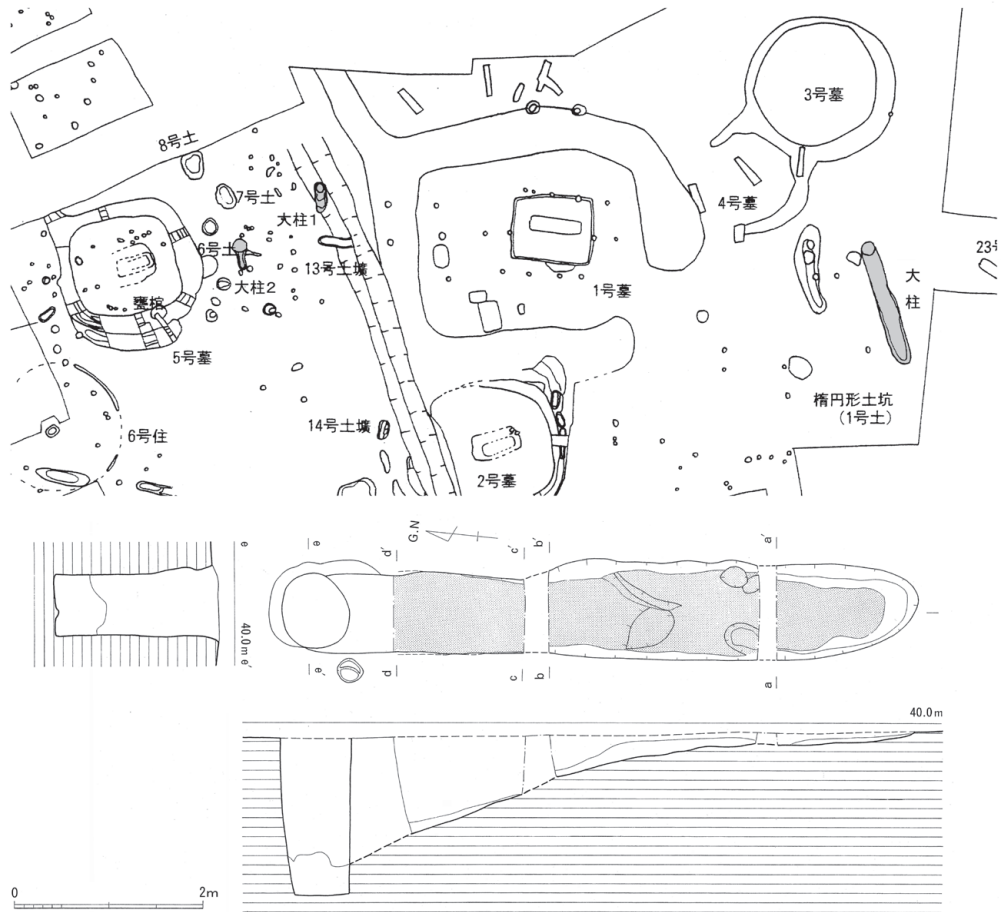
大柱遺構は長大な柱を立てる際に用いられた掘方の形態であり、柱を据える深い柱穴と、そこから外にのびて徐々に浅くなる溝で構成されており、縦断面の形状はレ字形となる(図167)。溝は柱を入れる斜路として用いられるほか、狭く深い柱穴を掘るための作業空間として機能したと考えられる。**研究史** 大柱遺構そのものは福岡県門田遺跡辻畑地区などいくつかの遺跡で検出されていたが、墳墓に伴う特殊な遺構であることが判明したのは、福岡県平原遺跡の確認調査である。よく知られるように平原遺跡は1965年に原田大六氏によって発掘調査が実施され、墳丘は小規模であるものの1号墓から40面という大量の鏡が出土したことで注目される弥生時代後期の墳墓である。1988年から1999年にかけて確認調査が実施され、以前の調査では井戸と認識されていた遺構が大柱遺構であり、隣接する5号墓の近くにも2基の大柱遺構が設けられていたことが判明した。1号墓東側の大柱遺構は深さ1.67m、長さ6.82mという規模で、太さ65cm、推定長さ15mの巨大な柱が立てられたと考えられている。平原遺跡は楯築墳丘墓よりもやや後出であるが、大柱遺構のほかに鳥居状の柱や独立柱など、墳丘上に多くの木柱が設けられており、参照がとりわけ必要となる遺跡である。

平原1号墓の大柱遺構については、柳田康雄氏が報告書の中でその機能についての考察を示した(柳田2000)。続いて2001年には、境靖紀氏が福岡県大石遺跡の調査成果を紹介するとともに、それまでに明らかになった資料を集成し分類を行うなど大柱遺構の全体的な検討を行った(境2001)。また、七田忠昭氏は、大柱遺構に分類される掘方の形状は示さないが、佐賀県吉野ヶ里遺跡北墳丘墓に伴う立柱が遺跡の軸線に位置すると述べる(七田2012)。さらに、2017年には北條芳隆氏が平原遺跡の大柱遺構を含む柱の機能について検討を行った(北條2017)。諸氏の論は整理して後に示す。このほかに日本の弥生時代にとどまらず立柱を俯瞰して検討した植田文雄氏の論(植田2005)がある。

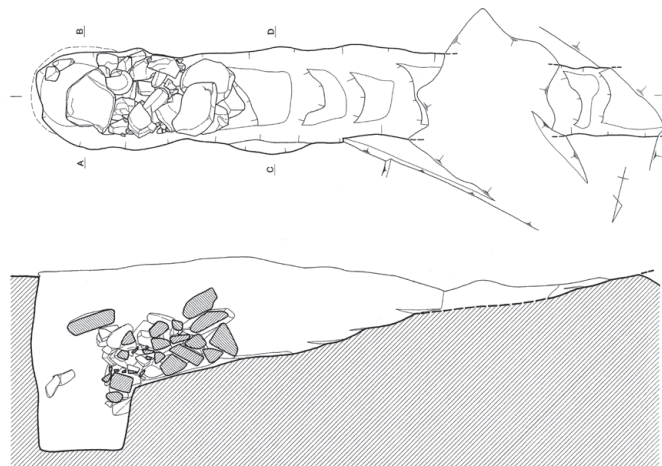
大柱遺構の諸要素 2001年に境氏が集成を行った段階では資料は6遺跡16例であったが、資料は若干増加しており、管見の範囲で約20例を数える。境氏が行った整理と重複するが、改めて大柱遺構の特徴を整理してみる。

弥生時代の墳墓に伴って検出されており、墓前祭祀に関わる遺構である。

この遺構は北部九州の玄界灘沿岸地域に分布しており、有明海沿岸地域にも広がりを見せる。また、南九州でもその可能性がある遺構が指摘されている(東2009)。弥生時代中期後半(福岡県須玖岡本



1 平原遺跡・1号墓大柱



2 大石遺跡2号大柱遺構

図167 北部九州の大柱遺構 1 : 80

遺跡第7次調査)に出現し、後期末(福岡県比恵遺跡36次調査)まで継続する。

設置された柱は太いもので直径60cmに及ぶが30~40cmのものも多く、細いものでは20cmである。遺跡が削平を受けている場合もあり一概に比較することはむずかしいが、柱穴の深さは1m以上、深いものは2mをこえる。根入れの深さから、長大な柱が立てられたとみられる。溝の長さは太い柱の場合長くなる傾向はあるが、10m近いものから2m以下まで様々である。実際の施工においてどの程度の長さの溝が必要であったか明確でないが、長さがかかなりばらつくことからすれば、遺構の形式とし

て溝を設けることが定まるが、その長さは適宜決められたと考えられる。

平原1号墓のような傑出した副葬品を伴う王墓、王墓に隣接する墳丘墓である須玖岡本遺跡第7次調査などが含まれることから、祭祀の対象は王や首長など集団内の最高位の被葬者であったと考えられている。

以上のようにまとめることができる一方、遺構の性格上、明確にしがたい点がいくつかある。通常の柱穴の場合、詳細な年代を判断できないことがしばしばあるが、この遺構の場合もそれ自体の出土遺物で年代を判断することがむずかしく、年代を埋葬あるいは墓群との関係で判断する例が多い。このことを典型的に示すのが平原遺跡5号墓大柱2で、報告書では後期初頭～前半の5号墓に伴うとするが、北條芳隆氏は後期末葉の1号墓に伴うと考えた。こうした見解の相違をもたらすもう一つの要因は、大柱遺構が墓群の端からかなり離れた位置に設けられるのが一般的なためである。須玖岡本遺跡第7次調査や福岡県高三潞遺跡のように墓群中で検出されたものもあるが、そうした例は少なく、福岡県門田遺跡辻畑地区では2号長方形土壇（大柱遺構）から近くの埋葬までは3mであるものの、最も外の3号（大柱遺構）からは17mであるし、平原遺跡1号墓では墓壇端から東の大柱まで14.8mである（図167-1）。大柱の設置は多人数でなされ埋葬との間に距離が必要になるためと思われるが、このことは、祭祀の対象を判断するうえで大きな障害となる。

このほか、木材が遺存したり明瞭な柱痕跡がある場合は問題ないが、一方の端が深くなる土壇との弁別がむずかしい場合がある。また、これとは逆の場合もある。長大な柱の場合は大柱遺構の形態をとることが合理的であるが、それほど長くない柱であったり周囲の掘削が困難な場合などでは、溝を伴わない大形の柱穴で柱を立てることは可能であり、福岡県那珂遺跡群第127次調査では溝を伴わないで柱を立てたと考えられる遺構が検出されている。このことからすれば、墳墓に立てられた柱はさらに多くなる可能性も生じるが、上記のように埋葬に必ずしも近接して設けられるものではないため集落域が近接するなどの場合は認定がむずかしくなってくる。

機能についての諸見解 大柱遺構の機能、性格については、平原遺跡についての検討を中心に、以下の3つの見解が示されている。

A 包括的な検討を行った境靖紀氏は、弥生時代以降の墓前祭祀の一種であり、神の依代として立てられた聖域の標章であるとした。また、常に墳墓に見られる遺構ではないことから、必ず実施された祭祀ではなく、その実施には何らかの制約があったと推定した（境2001）。

B 平原1号墓の東側で検出された大柱遺構については柳田康雄氏の検討がある。木棺の軸線ではなく、主体部を囲むように配された杭列のうち中軸を形成する4本を結ぶ線の延長上に大柱が所在し、さらにその線は遠くの峠に達する。そして、現在の10月20日にその峠から朝日が昇る（柳田2000）。このことについての考察は示されていないため判断がむずかしいが、大柱は方位を示すもので、いわば測量機器の視準線のような役割をもったことになる。

七田忠昭氏の、吉野ヶ里遺跡北墳丘墓南側で検出された柱が雲仙普賢岳に至る遺跡の軸線上にあるとの見解（七田2012）も、遠くの地形との関係を示すとする点で共通する。

C 一方、平原遺跡の大柱を分析した北條芳隆氏はこれとは異なる見解を示す。平原遺跡では3基の大柱遺構が検出されており、報告書では西に所在する2基は別の埋葬に対応すると述べるが、少なくとも西側の大柱2も1号墓に伴うと判断した。そして、重要であるのは柱の影であり、大柱だけでなく鳥居状遺構と呼ばれる2基1対の柱なども同様の機能を担い、日時計に似てそれらが落とす影が年間の節目となる日を示すとした（北條2017）。

以上のように、大柱がどのような機能をもったか判断することは容易ではなく、解釈は多様である。

BとCは現地での検証やシミュレーションも可能である。その反面、B・Cは平原1号墓の検討から導き出されており、他の事例でも同様の評価が可能か、大柱遺構の全体の機能とすることができるか明確でないように思われる。

b 楯築墳丘墓の大柱遺構

楯築墳丘墓の大柱遺構は分布域である北部九州よりも東の地域で唯一の検出例である。年代と分布の双方から、北部九州の墳墓儀礼の施設を導入したものであることが明らかである。北部九州の例をふまえて楯築例を見ると、深い柱穴とそこから延びる溝からなり、北部九州での形態を踏襲している。柱の太さは29cmと平原遺跡例などには及ばないが、須玖岡本遺跡第7次調査もその太さであり、特に細いわけではない。柱の根入れも1.7mで他の例とくらべて遜色はなく、長大な柱であったと思われる。

その一方、異なる点がいくつかある。その第1は埋葬施設との関係であり、墓壙の縁という被葬者にきわめて近接した位置に設けられている。そして、このことによって以下の変化を生じている。北部九州の諸例では、柱を地山で保持するため柱に合った幅で柱穴を掘削しており、壁面はほぼ垂直に下がり、柱穴の直径は柱の2倍程度までであることが多い。それに対して楯築例は検出面での柱穴直径99cm、溝の幅80cmと柱の太さに対して広く、柱穴の壁面は垂直にはならない。これは埋めたばかりの墓壙埋土を掘削することになるため、北部九州の通例に倣うなら墓壙から離して柱穴の壁面が地山となる位置に設けるべきである。楯築墳丘墓では、伝統的な位置と構造上の強さよりも埋葬および墳丘中心点に可能な限り近接することを優先してこの位置を選択したとみられる。なお、墓壙の南西部分は施工中に崩れて広げたと推定できるため、検出位置よりも北の、埋葬により近い位置に設置することが当初予定されていた可能性が高い。

もう一つの相違点は埋土中の礫の配置状態である。北部九州の諸例では、柱を固定する段階で礫を配するものが見られる。大石遺跡2号大柱遺構や比恵遺跡36次調査では溝が柱穴に接続する箇所に厚い奥行きをもって礫が置かれ(図167-2)、大石遺跡1号大柱遺構では柱の周囲に礫が配されている。配置の状況から、礫は柱の固定に用いられたり、溝が柱穴に接続する部分が最も弱くなるためその部分を強化することを目的としている。それに対して楯築例では朱を散布する儀礼の面として礫の配置がなされており、柱の固定には関わらない。

このように、大きく改変、付加された要素があるが、楯築例は大柱遺構の基本的な形態をよく保持している。

大柱遺構の性格については前記ように多様な見解が示されている。楯築墳丘墓でなされた改変は副次的な要素についてであり、基本的な機能は当然保持したと考える。つまり、大柱は埋葬に近接しても機能すると認識されていたとすることができる。中央に柱が1本の場合は、どこを視準するかという問題があり、また、平原1号墓では周溝を隔てて影なり日の出なりを見ることが可能としても、人に対するものではなかったと考えているが、嚴重な遮蔽をなし大量の土器が置かれた楯築墳丘墓の場合、中心埋葬の間近に行くことが可能かという問題もある。これらからすればB・Cはむしろかく、大柱は神の依代、神を招くための装置であったと考える。

c 木柱を配する埋葬

木柱の設置は楯築墳丘墓にとどまらず、吉備の内部、また、さらに遠隔地の墳墓で確認できるが、それらは楯築からの影響、祭祀の波及によって出現したと考える。以下に中国・近畿地方の弥生墳墓で柱を配置する例を示す(図168・169)。

1) 吉備

中山遺跡(図168-1) 備中北部に所在する。後期後葉から末葉にかけて形成されたひとまとまりの墓群がA調査区で検出されており、埋葬の総数は197基である。周溝によって区画される木棺群と群集する木棺からなるが、後者も本来は墳丘を伴い小規模な墳丘墓の群であったとみられる。墓域南端の墓群の間にはB空間と呼称された幅3mの隙間がある。特殊器台5個体をはじめとする多量の土器がこの箇所を取り巻くように出土しており、ここでそれらの土器が用いられたと判断できる。この場所では、両側の墓群に入り込む形で南北5.4mの間隔で設けられた2基の柱が検出されている。北側のものは崩れており、南側のものを図示した。掘方は直径47cm、深さ50cmで、礫を多用して直径15cm前後の柱を立てており、北側も同様の規模と推定できる。

出土の特殊器台は3つの型式からなり、祭祀が長期にわたって行われたことを示しており、2基の木柱が祭祀の場を形成したと考えられる。最も古い特殊器台も楯築墳丘墓より後出するものであり、木柱は楯築の後に設けられたものである。

墓群中に副葬品をもつものはないが、礫柳を伴う木棺が1基含まれている。墓群に首長の埋葬が含まれることをそれが示し、祭祀はそれを対象としたと考えることもできるが、祭祀が長期にわたることから墓群全体を対象としたとの理解が可能である。

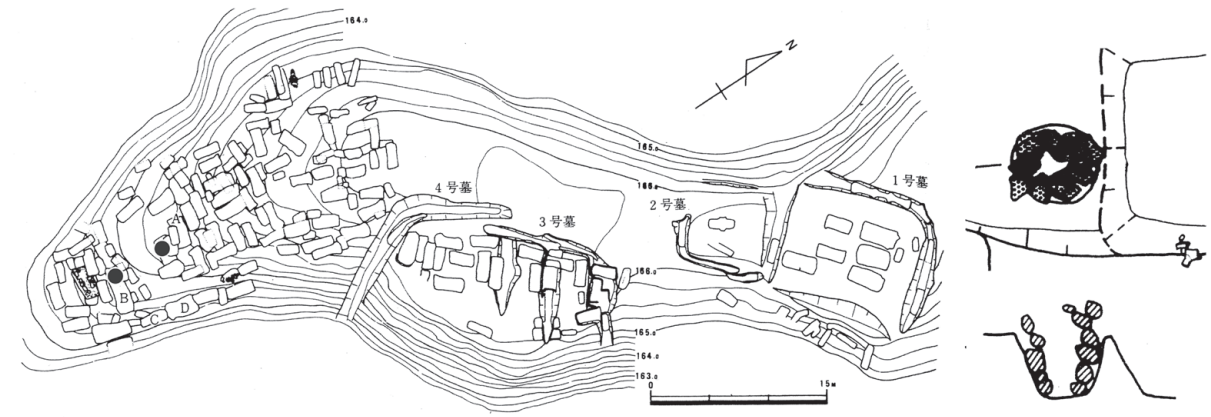
前内池遺跡(図168-2) 備前中部に所在する遺跡であり、シダガ鼻調査区で墓群が検出された。遺跡の形成は弥生後期前葉から末葉に及び、最終的に長さ60mの広がりとなる。木棺115基と多数の土器棺からなる墓群が形成される。墓群は南・北・中央の3つに大別でき、中央の墓群が埋葬の密度が最も高く中心的な墓域とみられる。中央の墓群では群形成の過程で墓域を画する杭列、後に列石(図164-5)が構築され、おそらくそれとともに盛土がなされて東西13m、南北15~17mの墳丘が形成される。

木柱はこの墳丘の中央に設けられており、掘方の直径50cm、検出面からの深さ30cmである。太さ15cmの柱を立てており、礫を詰めて柱を固定している。柱穴の時期を確定することはむずかしいが、柱穴を挟むように配された2基の埋葬のうち柱穴掘方の端を掘削する木棺は後期後葉の高杯を伴っており、柱は後期後葉に機能したと考える⁹⁾。

みそのお40号墓(図168-3) 備前北部に所在する。尾根上に小規模な墳墓が継続的に築かれており、墓群の形成は弥生時代後期前葉から古墳時代前期にわたる。そのうちの40号墓は後期末葉の築造で、2基の木棺が配される。この2基は墓壇の隅にそれぞれ2基の柱穴が設けられており、そのうち第1主体部の柱穴は形状から柱の立て替えがなされたかと判断されている。計4基の柱穴のうち3基は埋土に礫をまじえる。第1主体の柱穴は直径50cm前後、深さ45~58cmで、底面の大きさから柱の直径は20cm弱かと思われる。第2主体の柱穴はこれよりも直径が小さく浅い。

2) 西日本各地

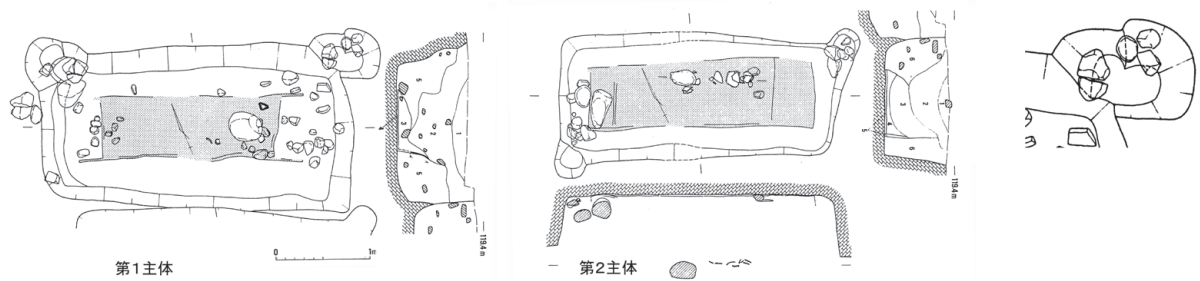
赤坂今井墳丘墓(図169-5) 京都府の北部、丹後半島最大の弥生墳墓として知られ、方形の墳丘は東西36m、南北39mの規模をもつ。後期末葉でも早い段階の築造である。墳頂平坦面には長さ14mの墓壇をもつ第1主体部が設けられるほか5基の埋葬がなされる。第1主体部は墳頂平坦面のやや西に偏って設けられる。墳丘のほぼ中央にあたる第1主体部墓壇東端には直径2m、深さ1.5m¹⁰⁾の柱穴が掘削され、太さ20cmの柱が立てられたことが明らかになっている。また、西側には、1基は後の墓壇で掘削されるが、5基からなる柱穴列が設けられている。延長16.4m、柱間は4mである。柱穴の直径は直径30~50cm、深さ40~50cmで、底面の直径からすれば15cm前後の太さの柱が据えられたかと思われる。これらは墓壇埋土を掘削して設けられており、墓壇埋め戻し後の構築である。



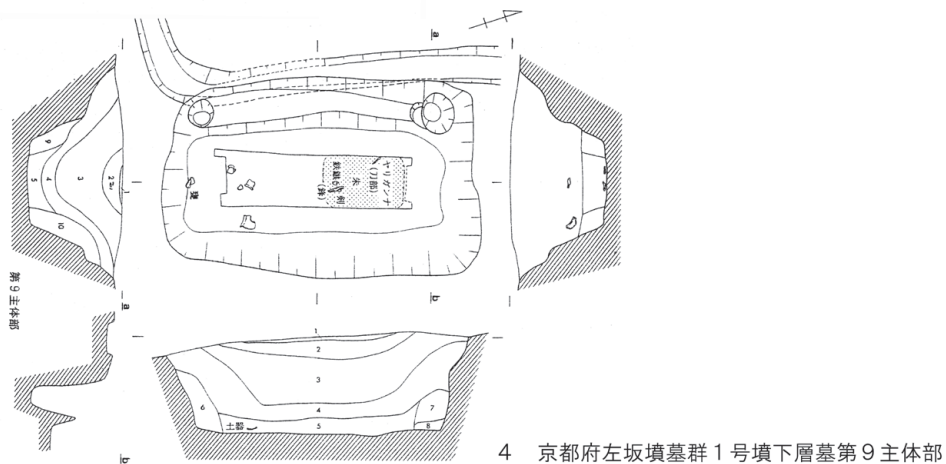
1 中山遺跡A調査区・南柱穴



2 前内池遺跡・柱穴

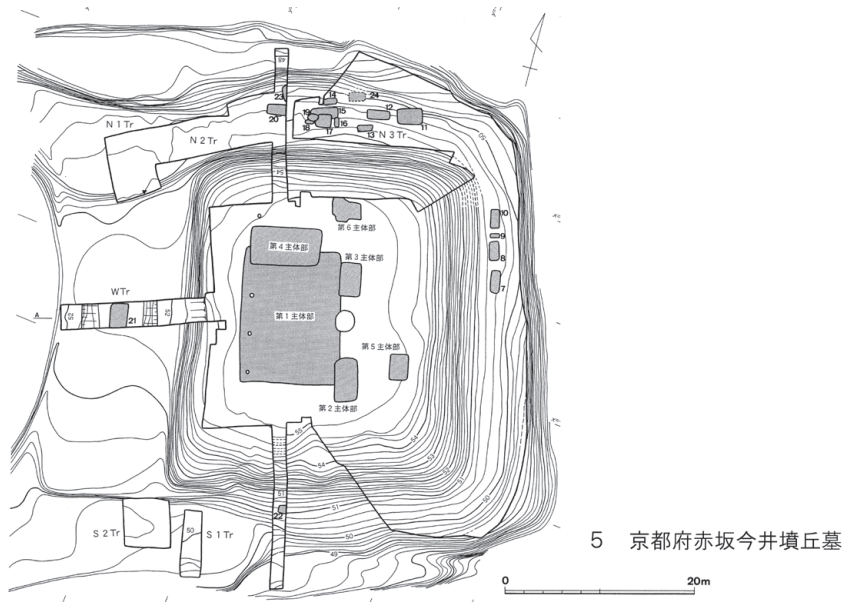


3 みそのお40号墓埋葬施設・第1主体柱穴

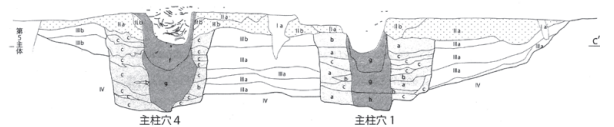
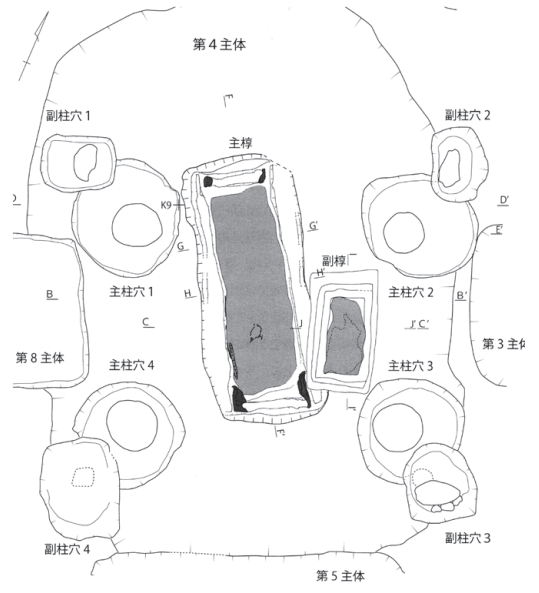
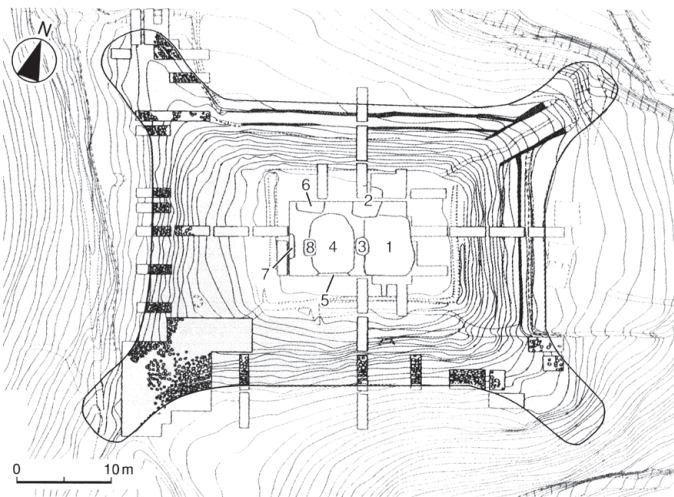


4 京都府左坂墳墓群1号墳下層墓第9主体部

図168 木柱の諸例(1) 埋葬施設1:80、柱穴1:40



5 京都府赤坂今井墳丘墓



6 島根県西谷3号墓・柱穴

図169 木柱の諸例(2) 墳丘1 : 800、柱穴1 : 80

左坂墳墓群1号墳下層墓(図168-4) 丹後半島に所在する墳墓群である。墳墓群は尾根状に長期にわたって形成され、標記の墳墓は後期前半に築かれる。14基の埋葬が密集して設けられており、そのうちの1つ、第9主体部は長さ3.3mの墓壇に木棺を収める埋葬であるが、墓壇側面に狭いテラスが設けられており、この箇所の両端2ヶ所でピットが検出されている。直径30~40cm、深さ35~45cmである。

金谷1号墓 上記と同様、丹後半島の墳墓である。東西15mの方形の墳丘墓で、墳頂平坦面のほか裾部にも埋葬が設けられる。墳丘西裾の埋葬の間で直径90cm、深さ60cmの土坑が検出されており、柱穴の可能性も考えられている。墳墓は後期末葉に位置付けられる。

西谷3号墓(図169-6) 出雲の四隅突出型墳丘墓を代表する墳墓で、突出部を含めた長さ55m、主

丘部の長さ40mである。墳頂部には複数の埋葬施設が設けられるが、第1主体、第4主体の墓壇が大きく、そのうちの墓壇が深い第4主体が中心埋葬であり、木槨・木棺を埋葬施設に用いる。墓壇が埋め戻された段階でこの埋葬の上方に複数の柱からなる施設が設けられる。建物になるかは明らかでないが、埋葬施設を囲む形で2.8×2.1mの方形をなして直径約50cmの主柱4本が配され、その外側にはそれよりも細い直径約20cmの柱が配置される。主柱4本の掘方は直径1.1～1.3m、深さ70～95cmである。墳墓の年代は楯築墳丘墓と同じ後期後葉であるが、特殊器台の特徴から楯築よりも後出する。

d 吉備内外への伝播

以上の資料のうち、金谷1号墓は柱を伴うことが明確でないため参考にとどめる。また、左坂墳墓群1号墳下層墓第9主体部は後期前半で他と年代が離れる。柱穴の平面位置からすると墓壇が埋め戻されて後に掘削される他とは異なる可能性があり別に扱うが、早くに導入された木柱の可能性もある。これらを除いた5例は後期後葉あるいは末葉と年代がまとまり、後葉の資料はいずれも楯築よりも年代が下る。これらでは大柱遺構の形状をとらず円筒形の柱穴である。

吉備は3例と資料が多い。備中でも北部の中山遺跡、備前の前内池遺跡などと分布域は広く、特殊器台を伴う中山遺跡のほか、それを持たない前内池遺跡、みそのお40号墓などと、木柱の構築は広い階層に波及する。これらの柱穴は、通常のものとは異なって礫を多量に用いて柱を固定している。建物と異なり他の材による保持がない状態で長い柱を固定するための造作であろうが、中山遺跡例と前内池遺跡例はよく似ており構築手法が共有された可能性もある。中山遺跡例は特殊器台を伴い祭祀の場に立てられたことがわかる資料で、ここでは楯築で行われたのと同じ祭祀が実施されたと考えることができる。柱は2基1対とみてよいが間隔が広く、2基からなる柱が必ずしも鳥居にはならないことを示している。

吉備の外の資料、赤坂今井墳丘墓と西谷3号墓はそれぞれの地域を代表する墳墓である。赤坂今井墳丘墓では墳丘の中央で被葬者に近接して柱を設けるが、これは楯築墳丘墓で成立した配置であり、年代も楯築に後出し、柱の系譜が北部九州ではなく楯築にあることを示している。前述のように左坂墳墓群1号墳下層墓第9主体部が先行する資料の可能性も残るが、それが地域内で発展したと考えることはむずかしいと思われる。赤坂今井墳丘墓の掘方は大柱遺構の形をとらず巨大な円筒形であるが、設置の手法までは伝わらず、柱を設けて儀礼を行うことのみが伝わったと考える。また、この墳墓ではこの柱と被葬者をはさんで対になる位置に5本の柱が直線をなして配置するが、受容した祭祀を独自に展開させたことを示している。

西谷3号墓の墓上施設については中期後葉の鳥取県梅田萱峯墳丘墓の上面で検出された掘立柱建物を祖型とするとの意見（鳥取県埋蔵文化財センター2009）もある。遺構の解釈についての検討は略して結論だけを述べれば、これと西谷3号墓の関連はないとすべきである。西谷3号墓の場合は、配置や埋葬施設との関係から、大柱遺構に楯築墳丘墓の墓壇上で検出した柱2・3、建物1の要素を加えたものとして設けられたと考えるべきであろう。

以上のように、楯築墳丘墓の大柱は吉備の内部に伝播するだけでなく、遠く隔たった地域の王墓とも称される中核的な墳墓に伝播する。楯築墳丘墓は情報の発信源というべき存在であるが、それは木柱に限ったことではない。これについては本章第9節でまとめる。

e 楯築墳丘墓の墳頂施設

楯築墳丘墓では、大柱遺構の他に木柱2・3、立石1～6、建物1と多彩な構造物が設けられる。

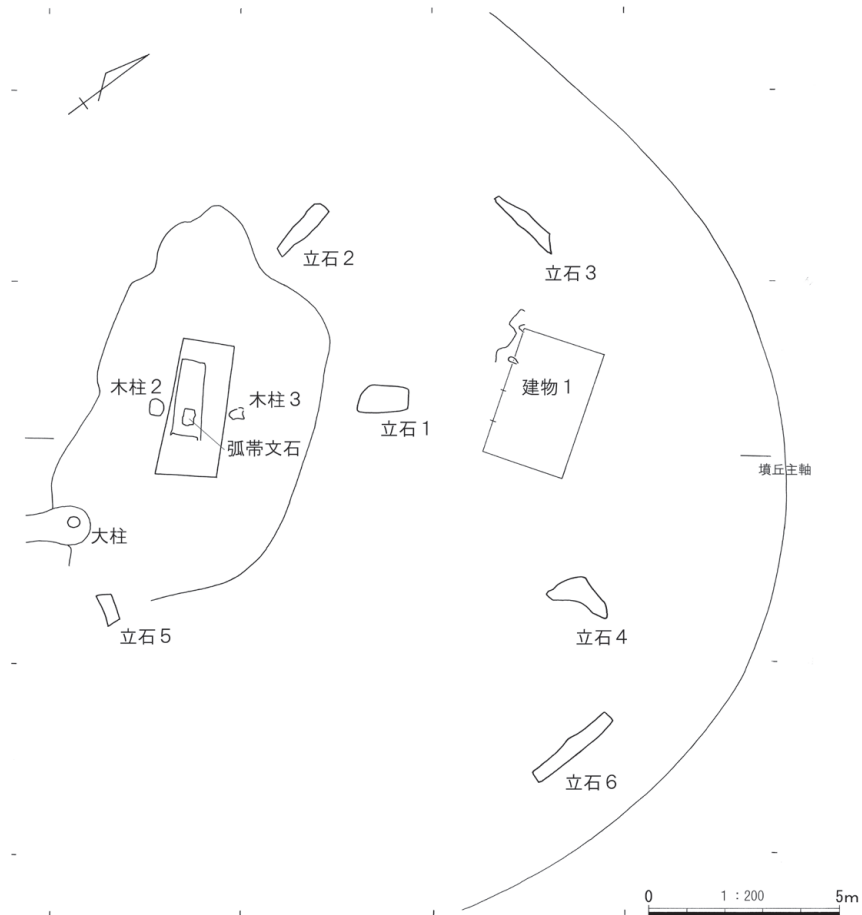


図170 墳頂諸施設の配置 1 : 200

これらが構築される段階であるが、大柱遺構は墓壇が肩まで埋め戻された後、立石5は排水溝が埋め戻された後、立石3は墳丘が上面よりも20~30cm下まで構築された段階、木柱2・3は木槨の蓋が設置された後である。

墳頂施設の設置段階 中心主体の墓壇南東端は盛土で形成されており、墓壇掘削完了時点で墓壇肩よりも低い箇所はおおむね構築されていたと考えることができ、立石1~4の設置はこの段階以降で可能となる。木槨が蓋板を残して構築を終えた段階で墓壇は肩まで埋め戻され(図127 埋土i・j・k・l)、排水溝もまた埋め戻されている。大柱の設置はこの段階である。棺の納置もこの段階になされたと考えた場合、木槨の納置までに主要な施設が設置を終えて機能したと考えても支障はない。大柱と立石1~4は墓壇を覆う墳頂盛土上層で完全な固定がなされる。

木柱2・3の設置はこれらより後となる。立石5については、墳頂盛土上層が流出した状態で立っていたわけであり、大柱と同じ段階の可能性もある一方、埋土に円礫を含むことから木柱2・3と同じく次の階等の可能性もあり確定がむずかしい。

木柱2・3は太さ36cm・35cm前後で70cm前後の根入れがある。大柱よりも太い柱であるが、墓壇埋土で固定されるまで支えておく必要があり、重量、つまり長さには一定の制約が考えられ、これは根入れの浅さとも符合する。これらは木槨・木棺を挟む形に配されており、一対の関係にある。平原遺跡でも一対になる柱穴(鳥居状遺構)があり、また、中山遺跡例も一対であり、配置はこれらと通じるのかもしれない。

立石の配置 榑築墳丘墓の復元イメージ図で墳頂部の南西側にも立石が描かれストーンサークル状を

なすものがあるが、中心主体よりも南西の石は地山の自然石である。現存する立石と同様の大きさであれば容易に動かせる重量ではないため、失われた立石は基本的になく、立石は墳頂の北東半にのみ配されたと考える。なお、図170の立石6・立石4の位置は推定である。

立石の配置が何を意味するのかは調査時から多くの調査参加者が考えてきたが、解釈はむずかしいといわざるをえない。形態のうえでは、板状で楯の名がふさわしい立石2・3・6と、幅が狭い1・5に区分できる。立石4はそれらとはやや異なるが、次節で述べるように形状の多少の不備を許容したと判断し、前者に含める。巨大な板状の立石2・3・4・6は斜面立石と共通する形状であり、眼下の平野側に対して遮蔽を表示すると同時に墓の威容を示すものでもあったと考える。

葬送の思想にかかわる遺構であるため、配置の意味については解釈というよりも想像の域に近くなるが、今後の研究のたたき台として配置についての見解を示しておく。まず最初に抽出できるのは墳頂平坦面の端近くに置かれるもので、立石3、それに立石6が加わる。立石3は東西方向に軸線を取り、北の辺をなす。立石6は復元であるが東辺になると推定する。とすれば形状が同じで南北方向の立石2が西辺をなし、これら3石で方形の配置を形成するとの理解が成り立つ。立石4については南辺と考えることができるが、東辺よりも内側になる。いずれにせよ立石4は設置方向が不明であるため解釈がむずかしい。以上のように考えた場合、立石2の位置が問題で、板状の立石は中心主体ではなく建物1を囲う可能性が出てくる。建物1については社殿としての機能を考えている。幅の狭い立石のうち5が細長い、大柱遺構に近接しており、他の立石と異なり設置の過程等で朱を撒く点もそれと共通する。木の柱とともに石の柱として設置されたと考えることができる。幅が狭くて高い立石1も同様に考えている。

大柱遺構を神を招くための主となる装置とすれば、2つの木柱と石柱はそれの補助的な機能をもつのであろう。木柱2は木柱4で位置を厳密に決めており、木柱4とともに被葬者の平面位置を示す機能をもったと判断した。しかし、そのために直径30cm以上の材が必要とは考えにくく、位置表示のみを目的とするものではなかったと考える。祭祀の柱と位置表示の2つの機能を担ったと推定する。

以上の解釈以外に、立石1と立石2は中心主体から放射状に配置されたと理解することもでき、立石2、木柱2、大柱が南北に連なるとみることにもできる。

推定し読み解くことはむずかしいが、墳頂部に設けられた各種の構造物には、それぞれに機能が割り振られて構築されたと考えられる。北部九州で長い歴史をもち、その間に思想が培われた大柱祭祀を導入、改変し、それに遮蔽の表示という要素を加えて創出したのが、この遺跡の墳丘施設である。続く古墳の築造は、後期後葉に吉備で成立したこうした葬送の思想に基づくものであり、立石は奈良県桜井茶臼山古墳で検出された埋葬施設を方形に囲む丸太垣に受け継がれると考える。

楯築に続いて築かれたとみられる総社市立坂2号墓では高さ3.4m、幅2.35m、厚さ30cmと高さでは立石1を上回る立石が設けられている(図175)、大柱遺構と同じく、楯築の要素が吉備南部地域に影響を与え模倣されたことを明瞭に示している。また、みそのお47号墓の長方形墳丘の隅で突出する列石も同様に考えることができる。このほか、広島県梨ヶ谷2号墓a主体では木蓋竪穴式石槨の上部に形成された円礫堆で長さ75cmの石を用いた石柱が検出されているが、立石あるいは木柱の波及とみてよい。

4 使用石材の採取と搬入

はじめに

弥生時代の墓としてかつてない規模と内容をもつ楯築墳丘墓の築造は、どの作業をとっても空前の大事業であったことは想像に難くない。そうした作業の1つに、墳丘に用いられた大小の石材の入手と運搬がある。

ここでは、これらの石はどこから得られたのか、運搬の距離はどれほどだったのか推定を試みる。ただし、長期間にわたって露出した立石等の表面は顕著に風化し、地衣類などの付着や汚れのため石材の観察がむずかしいものも少なくない。遺跡は国史跡に指定されており、石の新鮮な面を出したり分析用サンプルを得るといったことは不可能である。一方、現在の山中で見られる石の様相は、横穴式石室、後には家屋の礎石や石垣などに用いる石の採取を経た後の姿であろうし、大きく地形が改変された箇所もある。ここでは採取候補地の推定にとどまることを、あらかじめ述べておく。

a 遺跡周辺の地形と地質

遺跡が所在する西山丘陵は花崗閃緑岩からなるが、風化が進み表層はマサ土となっており、団地造成以前は緩斜面の多くは段々畑として利用されていたことが往時の写真や遺跡付近に残る微地形から明らかである。中心主体の墓壇や南西突出部前面の大溝など、深い掘削で形成された遺構では、マサ土の中にコアストーンが含まれる状況が見られる。コアストーンは直径が1～2mで、球形あるいは偏球形である。また、墳丘外側の斜面や工事掘削面にも、同様のコアストーンが点在する。

b 墳丘墓の石材

楯築墳丘墓には大量の石材が用いられている。墳頂平坦面に配された立石がその代表であるが、他に墳丘斜面に設けられた第1列石・第2列石、その間に敷き詰められた円礫、同じく墳頂平坦面に敷き詰められた円礫がある。

立石 墳頂に所在する立石1～5、斜面に転落した状態の立石6がある。立石の規模、形状はさまざまであるが、板状の立石2・3・6と細長い角柱状の立石1・5、幅が広く厚みもある立石4に区分できる。立石1や3は地表からの高さが3mをこえるきわめて大きな石である。幅は立石3が2.9mと最も広く、次いで立石6が2.5mである。

いずれの立石も立面形は不整形で、とりわけ断面形の変化が大きいため体積の計算がむずかしく概算となるが、表3に示すように立石3が6.4t、他も細長く棒状にちかい立石5をのぞいて4～6tの重量がある¹¹⁾。

列石 墳丘斜面には2つの列石を設け、その間に円礫を敷き詰める。上側の第1列石を構成する石材は遺構面から45cm前後の高さで、幅は26～100cm、厚さも5～17cmとばらつきがある。

これらの石材で構成される列石の間には斜面立石が配され、列石の上端線は斜面立石の部分で大きく上に突出する。斜面立石4はほぼ横転の状態となっていたため石材の大きさを知ることができ、長さ1.6m、厚さ25cmである。傾きながら立っている斜面立石6は高さ1.1m、厚さ25cmである。

重量の試算では斜面立石3点と列石を構成する石材2点を示した。斜面立石4と同6は800～600kgであるが、斜面立石を後世に墳頂部の祠に転用したとみられる石材には、これよりも小さいものも認

表3 使用石材の規模と重量

	高さ(m)	長さ(m)	推定長さ	幅(m)	厚さ(m)	重量(kg)
立石1	3.3		4.3	1.24	0.6	6,139
立石2	2.08	2.66		2.09	0.4	3,824
立石3	3.2	4.08		2.9	0.45	6,360
立石4		2.5		1.76	0.65	5,247
立石5	2.12	2.58		0.75	0.36	1,387
立石6			3.4	2.5	0.45	5,152
斜面立石4		1.63		0.93	0.25	803
斜面立石6	1.0		1.5	0.85	0.25	594
斜面立石16	0.55		0.8	0.4	0.37	308
列石21	0.4	0.62		1.0	0.05	82
列石22	0.45	0.65		0.26	0.17	76



形状Ⅰ (斜面立石13)



形状Ⅱ (立石4)



形状Ⅲ (斜面立石15)

図171 使用石材の形状

められ、東斜面に残存した斜面立石16は300kgにとどまる。列石を形成する石材は80kg程度と小さいが、内外で直径35~40mの円形をなして円丘部を2重に取り巻き、さらに突出部にも伸びるため、その総量は相当なものになると見込まれる。

使用石材の形状 これら立石・列石の石材は、稜線が明瞭な角礫といえるものから、風化のため稜線が不明瞭なものまでと多様である。大まかに分類すれば、

- I 明瞭な稜線をもつ。板状である。
- II 鈍い稜線からなり、表面はかなり風化している。板状が主。



図172 石材の使用状況 1 : 500

Ⅲ 一部の稜線はきわめて不明瞭である。表面はかなり風化しており、細かい亀裂が見られる。石の形状は不整形であることが多い。

Ⅳ コアストーン。球形気味の大形石材。

の4種となる(図171)。ただし、Ⅱといえるが一部の面がⅠといったものもある。

c 使用石材

1) 花崗閃緑岩

立石1・2・4・5・6、斜面立石4などは、有色鉱物が多く見られる石で、花崗閃緑岩である。立石のうちこれに属さないのは立石3のみで、列石を含めた観察可能な石材点数に占める花崗閃緑岩の割合は4分の3である(図172)。石の形状は基本的にⅡで、明瞭な稜は立石2の一部に見られるにすぎない。これ以外に形状Ⅲが若干あり、斜面立石15、北東突出部に遺存する第1列石などがこれにあたる。

花崗閃緑岩は墳丘墓が所在する西山丘陵を形成する岩石であり、足守川下流平野を隔てた吉備中山、西の日差山の東麓、北西の黒住山から三須丘陵にかけて広がっており(図173)、最も手近な石である。しかしながら、上記の丘陵の数カ所で採土がなされていることからわかるように基本的に厚いマサ土となっており、石が露出する箇所は少ない。

立石2や6に代表される板状のⅡは、遺跡付近で見られる球形のコアストーンとは全く異なる形状であり、これがこの丘陵で得られた可能性は低い。花崗岩等は通常球形に風化が進むが、河川や海浜などで急速な浸食を受けた場合、節理にそって割れ、板状の石になるとされる¹²⁾。花崗閃緑岩の範囲



図173 石材採取地の推定

のうち西の三須丘陵の端は足守川の支流、前川によって浸食を受けているが、深くまでマサ土で、石が露出する状況にはない。石の採取地の候補となるのは楯築遺跡の南900mに位置する岩倉神社境内である。

岩倉神社境内 岩倉神社は楯築墳丘墓が所在する西山丘陵から南にわずかに離れた水田中の微高地に所在している(図173-A・図174)。直径約70mで中央が小高くなる境内には巨大な石が重なっており、特異な景観を呈している。大石の多くは丸みが強い直方体気味の形状であるが、節理にそってそれらが割れて生じた板状の大石も少なからず見られる。

現地は丘陵の体をなしていないが、低く小さな丘陵が近接する河川の浸食を受けてマサ土部分が失われ、内部の岩が露呈し、その風化が進行したと考えられる。立石2・5・6をはじめとする形状IIの大形板石は、ここから得られた可能性が考えられる。

日差山東麓ほか 楯築墳丘墓の西1.0kmの山地地区に西から張り出した日差山の尾根には、大石が点在する(図173-B)。板状の石は見られないが、斜面が比較的急な箇所では表面が著しく風化した形状IIIの石も認められる。形状IIIはひび割れや亀裂が顕著であることから、きわめて長期間にわたって石が露出し、風化が進んで割れたり一部が減じた状態とみられる。この推定が妥当とすれば、日差山東麓だけでなく、西山丘陵にも形状IIIの石が所在した可能性がある。いずれかの地点からまとめて採取するのではなく、この地域一帯の山中を丹念に捜し、目的に合った形状・大きさの石を得たと考えられる。

したがって、使用石材の主体を占める花崗閃緑岩は、重量のある大形の板状石材が岩倉神社境内で採取され、一部が付近一帯から集められたと考える。なお、岩倉神社の微高地は西山丘陵に近接しているものの、両者の間は低湿地(河道)となっているため(岡山県古代吉備文化財センター編2010)



A 岩倉神社境内



C 砂川上流部



通常の露岩（日差山東斜面）

図174 各地点での石の産状

石の運搬は容易なものではなかったと思われる。

以上が持ち込まれた石材であるが、それ以外にごく少量コアストーンの利用がある。南西突出部前端的列石は基本的に板石で形成されるが、中央付近の列石43～45は形状IVで、長径0.8～1.4mと大形の石材である。これと同様の石が堀切状大溝壁面の流出に伴って落下しており、これらは大溝の掘削の際に掘り出された石材とみてよい。そうした石材の処分を兼ねて例外的に列石として用いたと推定する。

2) 花崗岩

立石や列石に使用される石材には花崗閃緑岩のほかに花崗岩があり、立石のうち最も幅が広い立石3がその代表となる。立石や斜面立石など、現在観察可能な石材に占める比率は約25%である。

第1列石を形成する石材は遺存するものが少ないが、現在観察可能な3点はいずれも花崗岩であり、小形の石材では花崗岩の比率が高くなる可能性がある。

石材の形状はIとIIで、III・IVは見られない。いずれも板状で、板石の名がふさわしい石が選択されたことが明らかである。以下に述べるように花崗閃緑岩よりも遠い場所から持ち込まれたと判断できるが、目的の形状をもつものだけが採取・運搬の対象になったと考えられる。

花崗岩は岡山県南部に広く分布しており、遺跡付近では花崗閃緑岩の範囲の外側一帯に広がるといえる。花崗閃緑岩と同じく多くの箇所はマサ土となっており、石が得られる場所は限られる。

砂川上流部 大形、中形の板石が多く見られる場所として、墳丘墓の北6.1kmに位置する砂川上流部

がある。流下する川が山間の狭隘部で溪谷となっており、長さ数mの花崗岩大石が折り重なった状態をなしている（図173-C・図174）。花崗岩の大石には板状をなすものも多く、その大きさはさまざまである。溪谷の斜面は急で、石や岩が現れており、露出した大きな岩が割れて板石や塊石に分かれたものも見られる。

この溪谷部分から下流2.0kmまでの間には、蛇行した川が山麓や尾根の先端を削る箇所がいくつかある。現在は川に沿って護岸を設けて道路が整備され、山側は掘削されているため、かつての状況をうかがうことはできないが、こうした箇所でも板石が得られた可能性はある。

花崗岩の運搬の距離は、花崗閃緑岩の場合よりも格段に長くなる。また、どのルートを用いても平野の中央に位置する中規模河川、足守川を越える必要が生じる。

3) 流紋岩等

量は少ないが流紋岩類も使用される。南西突出部の列石48は流紋岩と判断しており、西くびれ部流土出土石材にも流紋岩類が含まれる。また、列石材であったとみられる遊離石材のうち2点も流紋岩類とみられる。形状はいずれもIである。遺跡から最も近い流紋岩の産出地は西6.3kmに位置する福山の山頂部分であり、この石であるとすれば谷筋等に落下したものが得られたと考えることができるが、見かけの上では福山のものはやや異なるように思われる。流紋岩類の分布は広く、より遠隔の地から運ばれた可能性がある。このほか、斜面立石16は岩石種別を判断できないが（安山岩か）、また別の箇所から持ち込まれたことは確実である。

4) 円礫

採取場所は足守川の川岸とするのが妥当であるが、弥生時代当時の川がどの位置にあり、どこに円礫採取可能な河原があったか知ることはむずかしい。遺跡の北1.9kmに位置する津寺遺跡野上田調査区では微高地の核を形成する砂礫層が遺構面に現れている。このような箇所や、沖積地の基盤となる大形の円礫からなる層が川の浸食によって露呈したり再堆積した箇所が採取の位置と考えられる。下流にいくにしたがって砂などの堆積が厚くなるとすれば、遺跡の北方と考えるべきであろう。

円礫の総重量の計算までは行っていないが、相当な量を運び上げたとみてよい。

d 石材の選択と搬入

以上、石材の種類と産出地、推定重量を示した。楯築墳丘墓の使用石材は、主となるのが遺跡から近い位置で採取できる花崗閃緑岩、従がそれよりも遠い位置になる花崗岩であり、それらに流紋岩等が加わる。

遺跡で用いられた石の形状から、板状であることが石材の選択基準であったとみてよい。遺跡に近接する場所で採取が可能な石として、上記以外に砂質岩等がある。花崗閃緑岩の範囲の外側に分布しており距離としては花崗岩よりも近いが、遺跡への搬入はなされていない。これは、これらが塊状、直方体といった厚みのある形状で、板状を呈さないためと思われる。

とはいえ、花崗閃緑岩の大形石材には、板状というには難があるものを含んでいる。たとえば立石4は巨大な岩から玉葱状に剥離したものとみられ、横転した現状の上面は凹面をなし横断面形は三日月形に近い。また、斜面立石の一部でも斜面立石15のように幅に対して厚みが大きいものが見られ、大きいものほど形状についての許容範囲が広いという傾向がある。大形で板状が望ましいとはいえ、そうした石には限りがあり、形状と運搬できる重量を勘案して折り合いをつけたとみることができる。形状Ⅲは、形状Ⅱを補完するため搬入されたと考える。

一方、より遠い場所から持ち込まれた花崗岩では板状であることが貫徹されており、投下される労

力に見合うものが運ばれたといえる。墳頂の立石のうち最も幅の広い立石3が花崗岩であり、花崗岩は単に石材の不足を補うものであったとは考えにくい。形状の不備を許容すれば近場の花崗閃緑岩で事足りたとみられるが、立石・列石を整った形状にそろえるために石材の採取範囲を広げて対応したとするのが第1の解釈である。もう一つは、築造に複数の集団が参画しており、たとえば足守川東岸の集団が別に石材を搬入したとの理解である。いずれが妥当か判断がむずかしいが、石材が小さく、造営にさほどの利があったとは考えにくい流紋岩等が花崗岩とは別の方面から搬入されていることからすれば、第2の理解が適切と思われる。特殊器台などの出土土器は、形態や胎土の多様性から複数の集団が持ち寄ったと考えているが、石材も同様であったことになる。いずれにせよ、石材は偏ることなく配置されており、一貫した築造計画にしたがって搬入と設置がなされたとみてよい。

使用石材の大形化は楯築以降顕著となり、楯築に続いて築かれる立坂墳丘墓では長さ70cm前後と大きい石材を用いた列石を設ける。みそのお墳墓群の場合、後期前半では石は大きくても長さ40cm程度で、それ以下の小形石材が主であるのに対し、後期末葉には最大70cmと大きな石を用い石材の大きさをそろえるようになり、末葉にかけて使用石材が大形化していくといえる。同じく末葉の赤磐市谷の前墳丘墓も長さ40cm程度を主とし、65cmが最大の石材である。大形化するとはいえ、これが一般の墳墓で用いられる石材の大きさであり、最大の石材でも複数名で運搬、設置が可能である。楯築の石材はこれを大きく上回っており、比較的小さいものでも運搬には多人数の力が必要となる。大形石材の使用は、堅固な遮蔽の表示が第一義であったとしても、運搬、設置は地域の総力を用いての事業となり、石材の採取から葬送の後まで被葬者の権威を墓の威容に示すことになる。

後の古墳時代には普遍化するとしても、著しい重量の石を運搬することはそれまでになかったことであり、運搬の技術や人員編成なども未熟であったろうこの時期では、立石1・3の重量6t強が対応可能な最大の重さであったのであろう。

この使用石材の問題については、将来詳細な分析がなされることを期待する。なお、この節は第3次発掘調査参加者である吉留秀敏さんの追悼論文集掲載原稿と基本的に同じであるが、ここでは発掘調査成果に関わる部分を加えている。

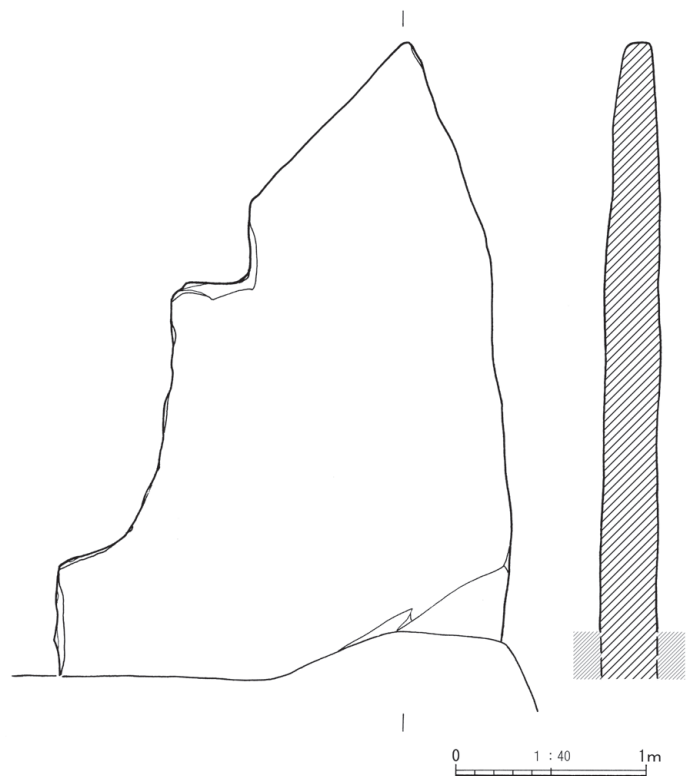


図175 立坂2号墳丘墓立石 1 : 40

5 特殊器台の様相と製作集団

はじめに

楯築墳丘墓からは葬送の祭祀に用いられた大量の土器が出土している。個別の記載でしばしば述べたが、同器種であっても形態、調整や胎土は変化に富み、多様性がこの遺跡の土器全体を通じての特徴といえることができる。出土土器の総括からすれば、まず全体を概観し、その後に特殊器台を論じるのが順序であるが、多様な土器の様相を示すには特殊器台が最もよい素材となる。まず、出土土器を代表し比較的情報が多い特殊器台の分析を示し、この遺跡の土器の特性を読み解く手がかりとし、あわせて特殊器台製作集団の消長にふれる。

特殊器台は暗褐色の胎土で丹塗りがなされるものが多い。集落から出土する土器と一見して異なるものであるため、踏査の際などで目についた破片が弥生墳墓確認の糸口となることもしばしばである。こうした特殊器台の特徴的な胎土については、いずれの地でもどのように製作されたかが研究の課題となってきた。なぜ共通の胎土が用いられており、それはこの地域での墳丘墓の展開とどのように関わるのかという問題にとどまらず、大和の初期の古墳に特殊器台が伴うことが明らかになったことで、吉備と大和の関係の考察にもつながるからである。

これまでの研究は、a 特殊器台の形態とその分布を手がかりとする考古学的手法、b 胎土中に含まれる岩石の観察によるもの（田中・奥田1985、清水1992、奥田1996）、また、c 蛍光X線による胎土分析（白石2006など、中園ほか2017）がある。b・cでは特殊器台は胎土の特徴がよくまとまること becoming 明らかになっている。具体的な製作地については楯築墳丘墓も所在する足守川下流域とみる見解（田中・奥田1985、白石2006、吉備特殊器台復刻実行委編2014）が多いが、他に候補地を想定することもできる（清水1992）。楯築墳丘墓資料はbを考慮しつつaで分類を行っており（近藤編1992）、清水1992はそれを受けてのものである。宇垣1997aなど¹³⁾でごく簡単にふれたことがあるが、資料を提示しつつ述べる必要があるためこの度の報告となった。

特殊器台の胎土は共通性と多様性という相反する2つの特徴をもつ。胎土は型式ごとにまとまり、型式変化に応じて明瞭に変化しており、これは白石・森1999で裏付けられた。製作集団の交代とまでいえるかは別として、粘土等の採取地が一貫して同じ場所であった可能性は低い。もう1点は以下に示す楯築墳丘墓資料が典型例であるが、1つの遺跡から出土する資料が複数の胎土に分かれることが珍しくないことである。

a 楯築墳丘墓の特殊器台

資料はA・B・C・Dの4つに大別できる。このうちC類は少なくとも2分できるが、ここでは一括する。図176・177は各群の大きさを示すために作成したが、A類をのぞいて推定が多く、特にD類は小破片からの作図である。掲載番号は作図の元とした資料の番号を用いた。

図示したのは標準的な大きさの個体である。これらよりも筒部径が小さく小形になるとみられる個体（B：425、C：85～95）が見られる。大小の作り分けがあり、基本サイズの特殊器台、一回り小さい特殊器台、小形特殊器台の3段階に器高が分かれる可能性があるが、一回り小さいものは個体数が少ない。

A類（83、84、188、189、190、226、227、327、352、355、356、西斜面、南くびれ部、西くびれ部）

遺跡を代表する特殊器台で、装飾が豊かである。器高は110cm前後と、この遺跡の特殊器台のなかで最も大きい。

筒部は間帯5段、文様帯4段の構成で、文様帯は分割型である。これは他のグループも同様とみられる。大きく拡張し突帯3段を配した口縁部、中ほどに1条、まれに2条の突帯を設ける間帯を特徴とする。間帯の沈線は櫛状の工具を用いて入れる。筒部の四方に方孔を設けてその区画は無文とし、2つの方孔区画の間の中間に無文区画を配置する。そして、それらの間に斜線文や複合斜線文を配する。鋸歯文は裾部に用いられることがある程度で、文様帯には基本的に用いない。櫛描波状文をよく用いており、口縁部の突帯間に配するほか、間帯に入れるものもある。裾部内面にはヘラケズリを用いるが、筒部内面はヨコハケの後ナデでそれを消す。透かし孔内側に面取りを施すなど丁寧な作りである。

赤褐色を呈し、石英・長石粒を含む。現状で丹塗りが見られるものはないが、同胎土の小形特殊器台274では丹が見られることから、塗布されたものの失われた可能性が強い。

この特殊器台に伴う特殊壺が出土していないが、このことについては第7節で述べる。

B類 (16～32、33、129、181、182、424)

特殊器台の土としてよく知られた胎土、色調である。復元案では器高1m弱である。脚部は傾斜が緩やかな32を用いたが、もう少し立ち上がるのが一般的な形態と思われる。A類にくらべて間帯が低いため筒部の凹凸が少ない印象を受け、文様帯の広さが目立つ。

口縁部は垂直に立ち上がっており、口縁拡張部下端には大きな突帯を配する。

間帯は上方に向かって肥厚する。間帯形成の際の粘土接合痕を確認することはむずかしく、接合面で剥離を生じるものはない。間帯下端の突帯は突出が大きく明瞭であるが、上端のものは小さく段に近いこともある。沈線はヘラを用いて配する。

斜線文、斜格子文、複合斜線文、複合斜線文の直線の帯を弧帯に置き換えた複合弧線文などと文様帯に配される文様の種類が多い。複合斜線文の帯はA類のものとは異なって斜線の両側に余白を設け、帯であることを明示しつつ交差させている。また、鋸歯文の多用がこのグループの大きな特色といえる。A類では無文であった方孔区画と無文区画には上下両端に鋸歯文を配し鋸歯文区画とする。2つの方孔の間、文様帯全周の1/4となる範囲に、鋸歯文区画を1あるいは2つ配することが基本のようである。鋸歯文あるいは無文区画が透かし孔区画に接することは避けているが、24・115では鋸歯文のみとすべき透かし孔区画に文様を配して整合させている。A類は丁寧に文様を配置するのに対し、このグループは文様配置の全体と考慮しないまま施文を行うようである。口縁部の上下両端に鋸歯文を対向させて配置し、斜線や平行線を充填する区画をまじえる(181・424)。

内面調整にはヘラケズリを用いており、筒部下部は縦方向、中ほどから上は横方向に削る。

暗褐色の胎土で角閃石、石英、長石を含む。丹塗りがよく残るのもこのグループの特徴で、全体の形成後に塗布するのではなく製作途中に丹塗りを繰り返し行う。

C類 (35～44、54、88、89、161、221、351)

器形や間帯形状のばらつきが大きい。図は35～44を元に作成したものである。復元高は91cmであるが、最大復元高を見積もるため作図の際に上になるにしたがって漸減する文様帯の幅をあまり小さくしておらず、実際の大きさは図よりも低いものとなる。文様帯幅が狭く器高が低いのが特徴である。なお、そうした図にしていけないが、筒部上方で若干くびれる可能性が強い。

図177-41では上下に広く拡張した口縁に突帯を波板状に配するが、突帯間隔を広く取りその間に施文するA類とほぼ同様の54もある。

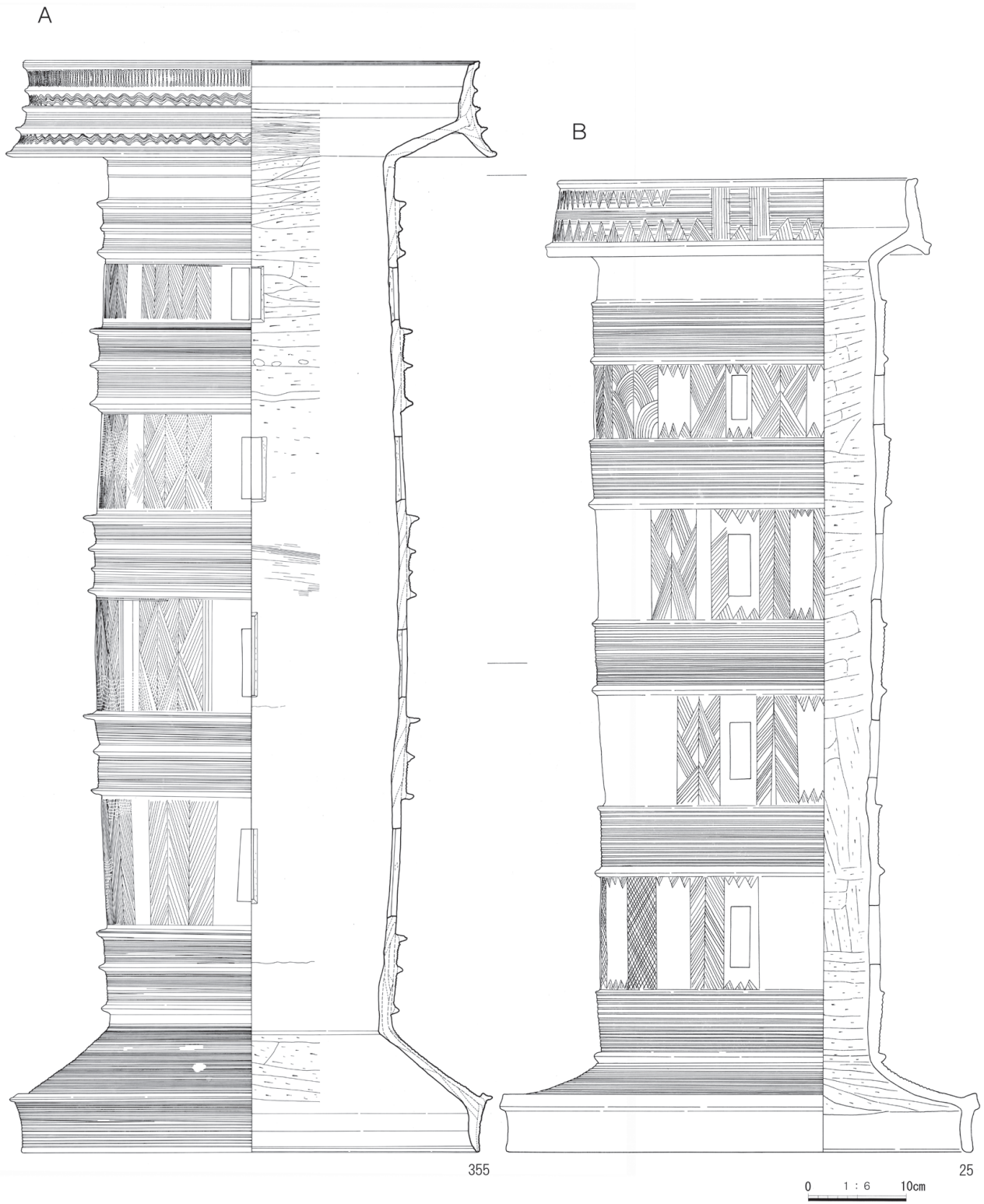


図176 特殊器台の構成(1) 1 : 6

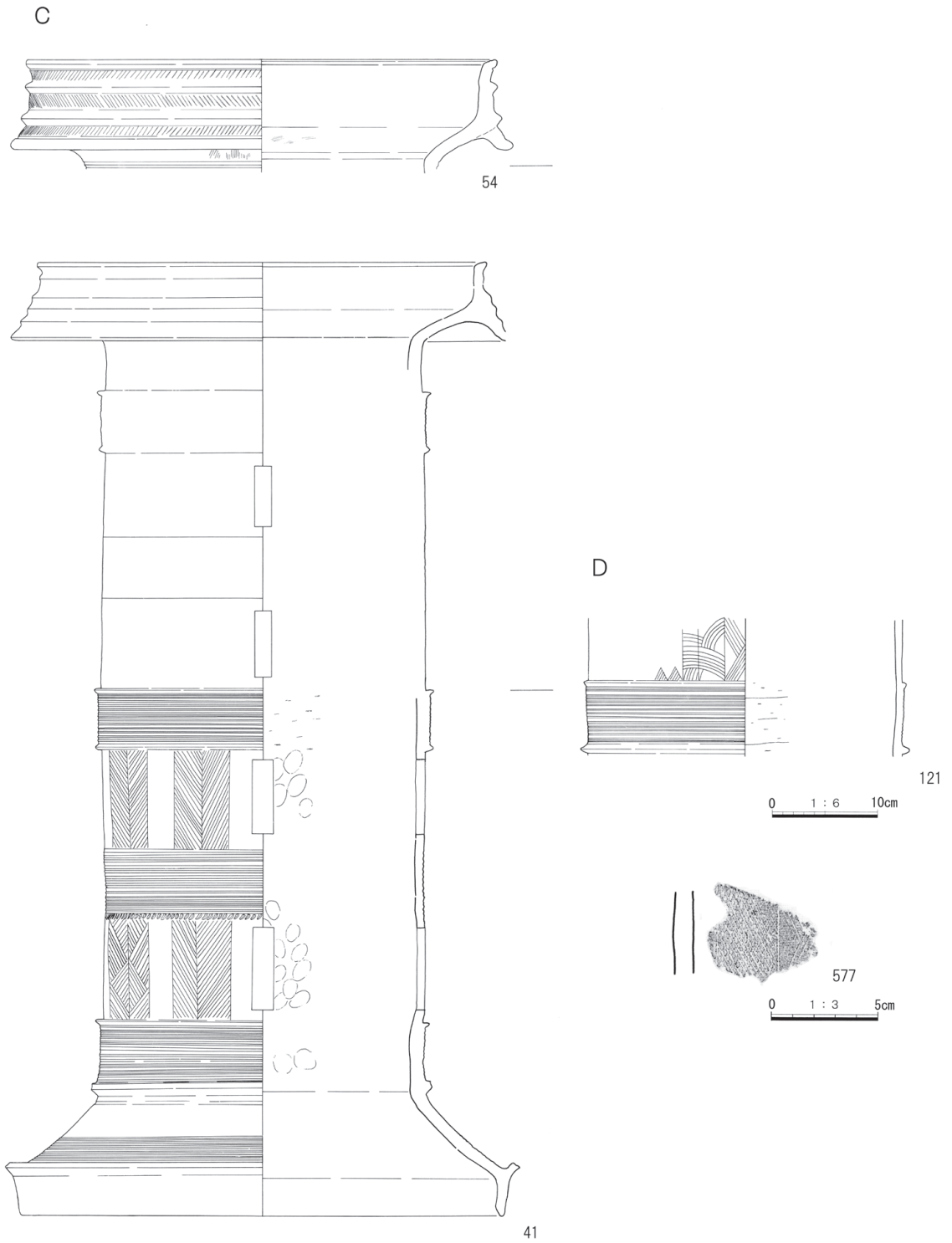


図177 特殊器台の構成(2) 1 : 6、1 : 3

間帯は幅が狭く均等に全体を肥厚させ、上下両端を突出させるのが基本であるが、41の第2間帯のように平行沈線とするものもある。56・57のように間帯が筒部から剥離する破片があるのもこの類の特徴である。間帯粘土下の筒部にはタテハケ調整は見られない。下から順次作り上げていくのがこの段階の特殊器台の特徴と考えている¹⁴⁾が、他の類では剥離を生じたものではなく、間帯貼り付けのタイミングがこのグループは他と若干異なるようである。文様帯には斜線文と複合斜線文を用いる。斜線の角度が緩やかなもの(36・43)があるが、文様帯幅が狭いことに合わせているのであろう。方孔が位置する区画は横幅が広く鋸歯文は用いず無文区画となる。図177-41では見られないが、87~94など櫛状工具による波状文・平行沈線の多用も特徴で、それを間帯・文様帯の区別なく配するものも多い。

41の内面調整はナデであるが、221のようにヘラケズリを用いるものもある。

黄褐色～明褐色を呈し、石英・長石粒を含む。丹塗りは基本的に見られないが、A類と同様、失われたとみられる。

D類 (119~128、577)

破片が少ないため全体の形状は不明である。121は薄く肥厚させた間帯をもち、上方はわずかに突出する程度であり、下方には突帯を配する。複合弧線文というよりも弧帯文¹⁵⁾の一種と呼ぶのがふさわしい文様のほかに鋸歯文がある。577は南くびれ部流土出土の文様帯片である。斜格子文の右に配される複合斜線文はB類と同様に余白をもつ。

ヘラケズリで器壁を削り込んでいる。上記各群の器厚がA：8~10mm、B：8~11mm、C：8~10mmであるのに対し、4~9mmと薄い。外面は丹塗りがなされる。やや明るい褐色で、石英、長石粒を含む。肉眼観察では角閃石は目立たず金色の雲母が多く見られる。

各類の比率

個体数の算出は口縁部、脚部等で行うべきであるが、トレンチ調査が主であるため筒部片がまとまるものもあって一律に把握することはむずかしく、脚部の数に出土位置と破片の量を勘案して推計した。C類の34のような破片1点の場合の取り扱いがむずかしいが、ここでは各群の量比を把握するためそうしたものは含めていない。したがって、以下の数は出土総個体数ではない。各類に示した掲載番号はここでの算出に用いた資料である。

それぞれの個体数を計上すれば、A：14、B：6、C：7、D：2で、計29である。A類が約半数を占めるが、墳丘各所での筒部片の出土量からすればさらに多く、特殊器台全体の6、7割というのが本来の比率であるように思われる。B類は特殊器台では比率がさほど高くないが、小形特殊器台や特殊壺ではこれが多く、土器群全体ではかなりの比重をもつ。

b 各群の関係と製作地

まず各群の関係であるが、A類とC類はきわめて近い関係にあることがわかる。口縁部の形状、全体を高く肥厚させる間帯、鋸歯文や斜格子文は文様帯には基本的に用いないこと、櫛描波状文の使用など、多くの共通点をもつ。

C類 これらのうち、C類については製作地の推定が可能である。楯築墳丘墓の北に位置する岡山市津寺遺跡竪穴住居195からは特殊壺の頸部から上を用いて作成された器台が5点出土しており、図178-3・4はそのうちの2点である。3点は床面で砕かれた状態、2点は柱穴に入れられた状態であった。形態的にもまとまっており、集落で特殊壺を祭祀に用いた後、頸部をはずして器台として用い、住居の廃絶時に2点が抜き取った柱の穴に収められ、他が壊されたという経過が考えられる。

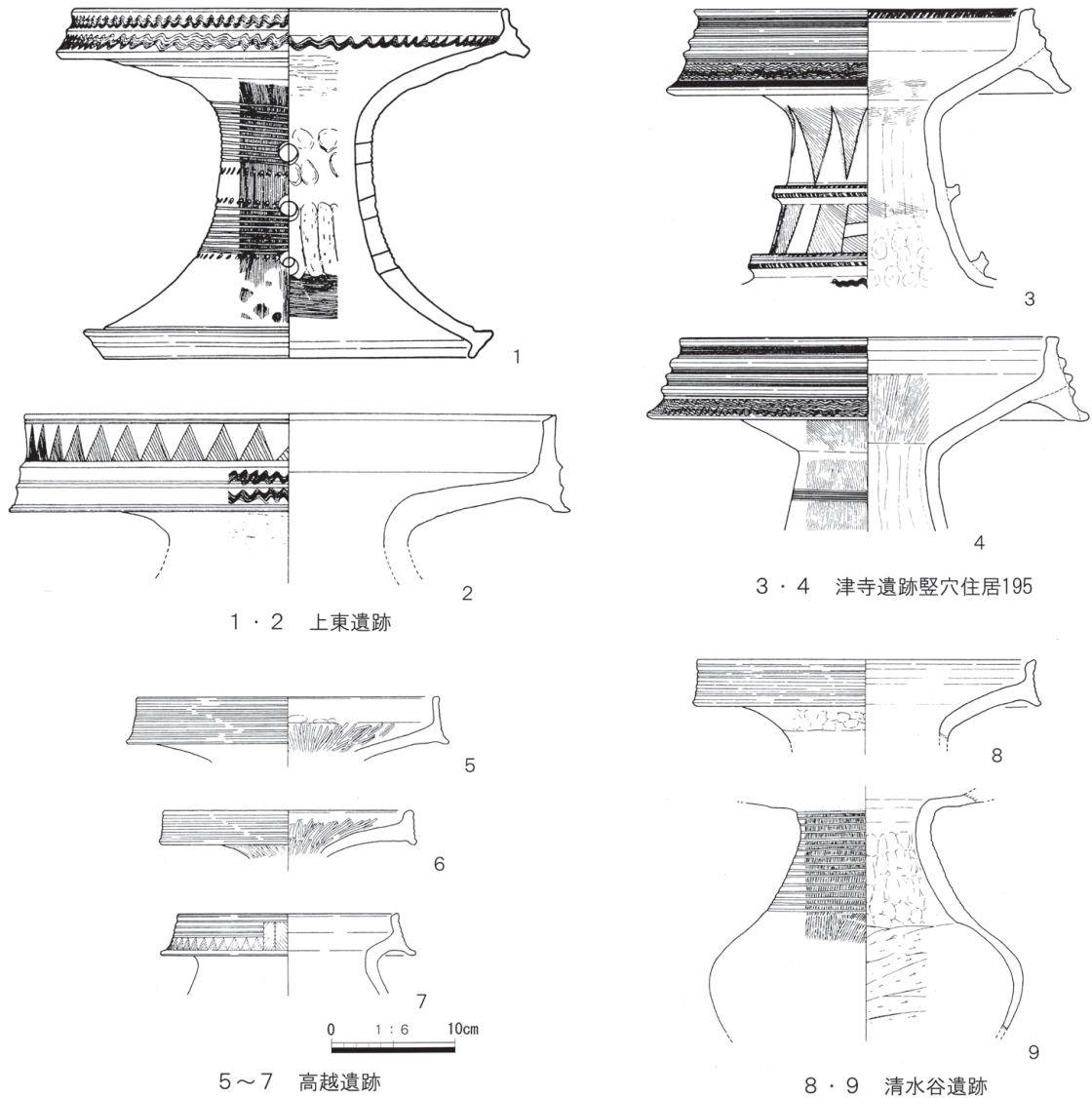


図178 特殊器台関連資料 1 : 6

また、この津寺遺跡に近接する丘陵の上には楯築墳丘墓よりもわずかに時期が下の雲山鳥打1号・2号墳丘墓が築かれるが、1号墓からはB・D類の破片に混じってC類の破片が出土している(宇垣1997a)。上下両端を含めて少なくとも4条の突帯を配置し波板状の断面をなす間帯片で、この形態の間帯は楯築墳丘墓のC類には見られず、図177-41の口縁部形状を間帯に用いたと考えている。

特殊器台C類の出土が知られるのは楯築墳丘墓、雲山鳥打1号墳丘墓、岡山市甬崎天神山遺跡、そして津寺遺跡の特殊壺の4例であり、楯築例を除く3者は楯築墳丘墓の北にまとまって分布する。後述のように特殊器台B・D類は広域の分布を示し個別の墳墓の地域性は表出しない。それらと異なるC類は、狭い分布から雲山鳥打1号墳丘墓や甬崎天神山遺跡の被葬者の出身集落で製作されたと考えるのが適切である。楯築墳丘墓北方の平野には津寺遺跡以下、数多くの集落遺跡が所在する。特殊器台C類のばらつき、多様性は、この地域での特殊器台の規範にもとづきながらも各集落が個性を発揮して製作した結果と考える。

A類 他よりも一回り大きく、出土の個体数、また、中心主体上に2個体が置かれるなど、この遺跡を代表する特殊器台であることは明らかである。



図179 特殊器台製作地の推定

C類と近い関係にある。共通の認識にもとづいて特殊器台を製作したとみられるが、それは集落間の距離の近さを示すものでもあるだろう。榎築墳丘墓の南に所在する大きな集落遺跡である倉敷市上東遺跡を想定する。図178-1は榎築墳丘墓に先行、2が同時期の上東遺跡出土器台である。弥生時代後期の吉備の器台のうち小形の製品では装飾高杯の口縁部と同様の細い突帯を口縁拡張部に配するものもあるが、ここに示したような大形の製品では口縁部の拡張は一般的であるものの、そこに突帯を配して面を水平に分割するものはきわめて少ない。さらに、鋸歯文の使用は器台で一般的に見られるが、櫛描波状文はほとんど見られない。器台のなかでも希少な口縁形態と施文をさらに拡張、重複させることによってA類の口縁部が生み出されたと考える。

各個体は口縁部の装飾などが酷似する反面、同一のものはない。あえて作り分けているようで、製作にあたった人員の数は少ないと思われる。なお、A類では小形特殊器台でも他よりも一回り大きい274が製作されており、大形品を作るという指向が明瞭である。

B・D類 低い間帯の形成、鋸歯文の多用、筒部内面のヘラケズリ、丹塗り、複合斜線文に余白を設けることなど、B類とD類は特徴がきわめて近似しており、両者はごく近い関係にあると考えてよい。

前述のように、榎築墳丘墓が所在する西山丘陵を含む足守川西岸の低丘陵は花崗閃緑岩あるいは石英閃緑岩で形成されることから、角閃石を含む粘土の産出地をこの付近に想定しB・D類の製作を考える意見は多いが、以上に示したA・C類の製作地推定はそれとは異なることになる。B・D類も足守川下流域で製作されたとすれば、同様の胎土をもつ通常の土器が存在することが考えられるが、そうしたものは認められず、一方、A・C類はこの地域の集落の土器と対比して違和感はない。

特殊器台の形状はこの器種特有のものであるが、口縁形態はそれぞれの地域の土器と無縁ではない。上記のようにA・C類の口縁部は類似した形状、施文を先行あるいは同時期の器台に見ることができる。B・D類の口縁部はこれらとは異なっており、類似した垂直に高い口縁拡張部をもつ壺等が見られるのは西の小田川流域である。

丹塗りの土器が数多く製作されるのもこの地域の特徴である。矢掛町白江遺跡の後期前葉の資料は褐色の胎土で丹塗りをもち、それは後期後葉の資料でも見られることから、後期を通じての様相とみ

てよい。壺や高杯だけでなく甕や鉢も丹塗りがなされる。そうした資料は白江遺跡のほか矢掛町清水谷遺跡(図178-8・9)、井原市高越遺跡(図178-5~7)や同五万原遺跡など小田川流域の諸集落、さらに南の山をこえた浅口市域の遺跡にも広がる。特殊器台B・D類の丹塗りは胎土の表面によくなじみ一体化している。B類は製作途上で丹を塗るが、これは胎土が乾く前に塗ることが必要であったことによると思われる。そうしたタイミングを含めて丹塗りの技術に長じていたのはこの地域である。また、足守川下流域と並んでこの地域が特殊器台の高い分布密度をもつことにも留意する必要がある。

この地域の土器すべてが胎土中に多量の角閃石を含むわけではなく、一定の割合でそうした資料が確認されている状況にあり、この地域のいずれかに所在する製作地から広い範囲に土器が供給され、各集落の土器とともに用いられたとみられる。小田川流域から山を越えた南の地域、浅口市森山遺跡のそうした資料は、立坂型特殊器台の領域に合致する成分組成をもつことが判明している(白石2008)。この種の胎土の土器の分布中心域を確認するには至っていないが、小田川流域にB・D類の製作地を想定することができる。図179での表示は仮に置いたものである。

c 特殊器台の製作と搬入

以上に示した特殊器台の製作と搬入の様相は、楯築墳丘墓造営の直接的な基盤となった集落を中心に、近隣、そして遠隔の集団が特殊器台を製作し持ち寄ったことを示している。通常の墳墓に伴う特殊器台の数は数個体、出土数量が多い立坂墳丘墓でも9個体であり(第7節表4)、圧倒的な数量、そして広域にわたる製作地は、備中南部の諸集団が結集してこの墳丘墓の造営にあたったことを示している。

文様帯の段数や分割型の文様を配し長方形の透かし孔を用いることなど、ごく大きい部分では各群は共通するものの、各類の口縁部や間帯の形態、文様の選択、文様の特徴などでは、それぞれのグループの個性が顕著である。なお、家形土器もA・C・D?によって製作されており、量は異なるとしてもそれぞれが一式を作るというものであった可能性がある。

d 楯築以降のB・D類

楯築墳丘墓の特殊器台の構成においてはB・D類はいわば少数派であった。しかし、これに続く雲山鳥打1号・2号墳丘墓ではB・D類が主体を占めており、それ以外が少数派に転じ、B・D類すなわち特殊器台の胎土という状況となる。ただし総社市鋳物師谷2号墓、新見市西江遺跡台状墓など、足守川流域以外の地域では楯築と同段階のB類資料が出土しており、早くから広域の分布、つまり他地域への搬入がなされていて様相は単純ではない。

楯築墳丘墓の問題にもどり、A類、C類の動向にふれておく。A類は楯築以外の出土例は岡山市百間川米田遺跡出土特殊壺があるにすぎず、以降の資料でこれを継承するものは知られていない。A類は楯築墳丘墓のためだけに製作されたといってもよいようである。一方、C類は前記のように雲山鳥打1号墳丘墓に見られ製作が継続したことがわかるが、出土特殊器台に占める比率はきわめて低いものとなる。

立坂型に後続する向木見型特殊器台は胎土に小粒の角閃石を含みやや明るい発色で、前段階の特殊器台とは異なる。この特殊器台の特徴の1つはヘラケズリで

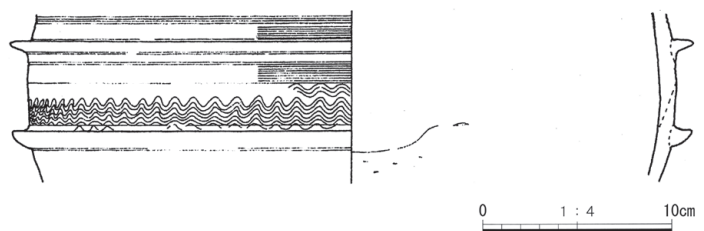


図180 百間川米田遺跡出土特殊壺 1 : 4

器壁をきわめて薄く仕上げることであり、同様に削り込むD類との関連を考えることもできる。この特殊器台のもう一つの大きな特徴は器形や文様にばらつきが少ない点である。広域の分布を示すが、たとえばあるものが津山盆地で製作され、また別に赤磐市域で製作されたといったことは考えにくく、製作技術と文様の双方を共有することからみて、ごく少数の限定された製作者が作り、製品が各地に持ち運ばれたとみることができる。これが特殊器台製作の1つの帰結であるとすれば、その前段階で見られるB・D類の卓越は製作集団が限定されていく過程と理解することができる。ただし、向木見型段階でも特殊器台の胎土が完全に斉一化するわけではなく、たとえば浅口市和田遺跡では出土した3個体の特殊器台は他の遺跡と共通する製品と、丹塗りがなくややバランスに欠けた文様をもつ製品とで構成されているし、鯉喰神社墳丘墓資料にも一般的な特殊器台とは異なる胎土のものが見られる。したがって、一部の遺跡においては、搬入した特殊器台に加えて被葬者の集団が製作した製品を用いるという以前のあり方が続いたとみられる。

このような製作の限定、集約化は、特殊器台に限って見られる特殊な変化ではない。集落遺跡における土器生産は後期の後葉と末葉の間で大きく変化する。後期後葉までは集落の土器溜まりなどで焼成に失敗した破損品を抽出することができ、土器焼成土坑の存在も明らかになっている。しかしながら末葉以降はそうした破片が見られなくなり、古墳時代初頭には規格性にきわめてすぐれ技術的にも卓越する吉備型甕が登場する。各集落で各世帯が土器を製作し共同で焼成するというあり方から、外部から土器の供給を受けるという状態に変化していく（宇垣1997b）。特殊器台製作の変化は、こうした集落での土器生産と軌を同じくするものである。特殊器台は甕や壺とは異なりそれが必要となる頻度は少なく恒常的な製作は必要ない一方、大形であり高い製作技術を必要とする。諸集団のなかで丹塗土器生産の長い歴史をもち、当初から特殊器台の製作を行ってきた小田川流域の集団がこれを手がけることになったと考える。

恒常的な製作ではなかったとみた場合、製作の依頼がどのようになされ、そこに首長がどう関与したのかなど不明な点が多い。その問題に迫るのは容易でないが、今後の詳細な胎土分析をもとに考えていくこととなる。なお、特殊器台の分布は祭祀の共有を示すものであり、そこに過度の政治性を見る必要はない¹⁶⁾と考えている。

6 出土土器の様相

出土した土器は特殊器台をはじめ様々な器種からなり、人形土製品や家形土器などきわめて稀なものも含む。前節で示した特殊器台と同様の検討を各器種にわたって行うことが望ましいが、高杯は残存状態がよくなく長頸壺は口縁部以外の情報が少ないなどのため、踏み込んだ検討がむずかしい。ここでは器種ごとの特徴をまとめる。

a 出土土器の型式

出土土器の時期についてまず述べておく。出土の土器は後期後葉、岡山県の編年で上東鬼川市3、弥生時代後期3などと呼ばれる時期である。高杯等の様相から、高橋護氏による編年ではⅧd期にあたりと判断でき、上東式最終末の段階となる。

特殊器台の編年においては立坂型にあたり、その古い段階である。文様帯4段で構成される筒部が成立した段階と考えている。

b 各器種の特徴

特殊壺・小形特殊器台 南西突出部前面からは、小形特殊器台とこれに伴う特殊壺がまとまって出土している。特殊器台と小形特殊器台では口径が異なるため、それぞれに伴う特殊壺は大きさと器形が若干異なる。小形特殊器台に伴う特殊壺はやや小さく口縁部径と胴部径の差が小さいのに対し、特殊器台に伴う特殊壺は一回り大きく胴部径が大きい。したがって、小形特殊壺と特殊壺に区分できることになるが、破片でその差を判断することはむずかしい。後方で全形がわかるものとしてC類の135があるが、B類では8や153など破片は多いものの良好な資料がない。

特殊壺では口縁拡張部に鋸歯文を上下に対向させて配するものがよく見られるが、253では複合弧線文を配しており、頸部を分割型文様帯とする。小形特殊器台では、274が口縁拡張部に分割型の文様帯をめぐらせている。筒部の平行沈線帯の間は無文とすることが一般的であるが、252などでは分割型の文様帯とする。文様の多さがこの遺跡の資料の特徴であり、文様が特殊器台に集約される前の、これらの器種の様相といえるようである。また、これらの点を含めて、施文や装飾の自由度が高い。器形や大きさといった大枠は共通するが、どのように飾るかは製作集団間、また、集団内それぞれの判断によるところが大きいように思われる。これも後には見られない特徴である。

特殊壺251では土器の成形を終えて乾燥する段階で口縁部に亀裂が入り、それを埋めるために粘土を貼り足している。同様な焼成前の補修は小形の特殊器台182、家形土器494でも見られる。こうした補修は集落の土器で全く見られないわけではないが、出土の土器量からすれば、3点は高い頻度での出現といえる。182は小形とはいえ特殊器台で土器としては大きい部類であるし、家形土器は通常の器種にくらべて製作の難度がはるかに高い。そうしたものを含むことが原因であるかもしれないが、特殊壺251は通常の壺と大きく変わるものではない。製作時期など、土器製作に適さない何らかの要因があった可能性が考えられる。また、土器を作り直すことが時間的にむずかしかった、あるいは、量をそろえることが必要であり多少の傷は許容したなども考えられる。

長頸壺 出土点数は多い。胴部の張りが強いものがほとんどである。胴部最大径31cm前後のものが多いが、これは該期の長頸壺のなかでも大形の製品である。口縁受け部外面の調整は、ナデ、ヘラミガキ、タテハケなどと多様で、頸部も内面をナデ調整とするもののほか、上端までヘラケズリを加える

ものがある。胎土は特殊器台B類に類似するものが多いが一様ではなく、それらとは異なるものが含まれる。製作集団なり製作者の数は特殊器台の場合よりも広いように思われるが、上記の小形特殊器台や特種壺と同様、口径や器高などの法量や形態は一定の範囲に収まっているようで、共通の認識のもとに製作にあたったと思われる。

長頸壺の多さは楯築墳丘墓出土土器の特色の1つである。楯築以外で長頸壺を伴うのは楯築に先行する伊与部山墳墓群が知られる程度で、後続する立坂墳丘墓では小形品の出土はあるが、大形の製品は見られない。楯築の後には継承されない器種となるが、後期後葉をもって集落の土器組成から長頸壺が欠落することに起因するとみられる。

壺 長頸壺以外の壺は個体数が少ない。円礫堆出土の358、362、363～365などがある。363～365は著しく大きい製品であるなど、器形や大きさに共通性はない。

器台 特殊器台や小形特殊器台が数多く配置され、小形の器台も少なくないのと対照的に、それまでの集落でよく用いられた中形以上の大きさの器台の個体数は少ない。196、420、422などがあるが、形態や透かし孔形状など個体間の共通性はほとんどない。上記の長頸壺の場合と同じく、この時期には器台も集落の土器組成から欠落していくが、それを反映した少なさとみられる。集落祭祀用器種の墳墓への流用の形をかるうじてとどめるといえる。

甕 出土点数が4点と著しく少ない。この時期に見られるようになる上方に高く拡張した形態の口縁部をもつものはなく、いずれも狭い口縁部である。第2主体埋土の3点はいずれも小形で、底部481・485にススの付着は見られず、煮炊の土器としては用いられていない。

鉢 これも出土点数が僅少な器種である。

高杯・脚付直口壺 円礫堆を中心に多数が出土している。高杯が小形化する時期の資料であり、いずれも小形で脚柱部は短い。脚柱部のヘラミガキは縦方向であるが、短くやや乱雑にミガキをかけるものも多い。脚柱部の形成手法と内面調整は、内面に粘土を絞った縦方向のしわが残るもの、内面にナデをかけるもの、また、円筒状に形成して上から小粘土塊を挿入して製作するものなど多様である。ほぼ脚柱部のみとなっているため資料の細別と個体差の判断がむずかしいが、13群に区分することが可能で、製作にあたった人員あるいは集団の多さがうかがわれる。通常の状態のもの以外に脚柱部に沈線を入れる369や脚端に鋸歯文を入れる476など特殊な形態を含んでおり、葬送に際して製作された可能性が強い。胎土は砂粒をほとんど含まないか、微砂をわずかに含む程度である。

脚端が断面三角形に肥厚し脚部内面にヘラケズリをかける高杯B(299・398～402など)が墳頂部等から出土している。杯部底面は円板充填で形成しており、後期前葉以来の伝統的な器形を保持する器種である。299などはこの特徴をよく示すが、402はヘラケズリがなされず形状だけを保持しており、ばらつきがある。この時期の足守川流域の集落ではほとんど見られない器形で、特殊な用途に残存した、あるいは、この器種を残存させた集団(高橋1992)からの持ち込みと思われる。上記の高杯Aとは異なり、胎土に砂粒を含む。

これら以外に405のような高杯Aにくらべると杯部の直径が倍以上の大きさと長い脚をもつ高杯が少量ある。これもこの時期には通常見られない器形である。

脚付直口壺は、円礫堆出土のものでは胴部径・頸部径の差が大きく口頸部が短いものが主体をなすのに対し、第2主体出土資料では径の差が小さく口頸部が長いものが含まれており、時期差を示す。

装飾高杯 個体によって形態差が大きいのが特徴である。脚柱部は短くなっており、そのため推定できる形状は、器高が低くやや寸詰まりな感があるものとなる。脚柱部は、418のようにエンタシス状にならず筒状になるものがある。杯部は中ほどで段をなして下がるが、この部分に突帯をめぐらすも

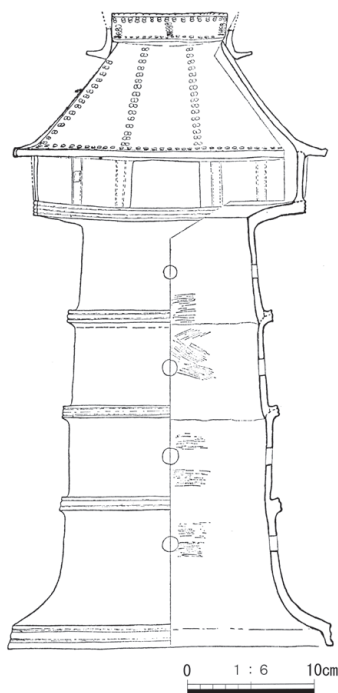


図181 女男岩遺跡出土
家形土器 1 : 6

のとないものがある。装飾が多く施される器種であり、口縁拡張部や脚部の鋸歯文以外に杯部上段外端に菱形文、杯部上段内端に鋸歯文などを配する。

小形器台・直口壺 小形器台は器壁が厚い脚端の破片が中心となる。直口壺283は列点文が配される。丸みのある胴部になるようであるが、続く立坂墳丘墓出土資料は扁平な胴部であり、胴部形状が急速に変化する可能性がある。

家形土器 全体の形状は不明ながら、倉敷市女男岩遺跡出土家形土器と同様にすべて脚が付くと判断できる。後出する女男岩遺跡例がある程度の写実性をもつものに対し、この遺跡の資料は50、103、326など屋根の施文からも明らかなように装飾性が著しく強い。女男岩遺跡例は建物の長辺が21cmであるが、103は破片長さ30cmで両端とも建物の隅に達しておらず、相当大きなものになることが予想される。その一方、173は著しく器壁が薄くかなり小さいとみてよく、大小の差が顕著である。屋根に水平に区画線を入れ、その間に向きを違えて斜線文を入れる点は各群にわたって共通するが、建物下端の器台部分先端の作りは51と494でかなり異なっている。

平らな壁をもち平面が四角形になるとみられるものが多いが、103・105は平面が各辺の中央がふくらむ四角形になるとみられ、竪穴建物と考えられる。また、428も家の一部と思われるが、家形埴輪のように窓等をもつものがあつたことになる。他の器種と異なり多くが小片であり、破片移動による個体数重複の危惧があるものの、10個体の出土と判断した。女男岩遺跡でも2個体が出土しており、複数で用いられるようである。家形土器を神の依代と考えれば、複数であることがどのような意味をもつのか考えていく必要がある。

家形土器の出土は楯築墳丘墓のほかではこの地域の雲山鳥打1号墳丘墓と女男岩遺跡が知られるのみであり、土製玉類も女男岩遺跡、辻山田遺跡から出土している。地域内で特殊な器種を用いた祭祀が受け継がれたとみてよい。

人形土製品 人形土器430は体部を斜線文で充填しており、写実的に作ることよりも文様を配することに重きを置く点は家形土器と共通する。430と431の2点は着装した勾玉が表現されており、土製玉類の出土とあわせ、祭祀のなかで玉が重要な位置を占めたことがわかる。430以外は部分的な破片で、形状の違いがわかりにくい、それぞれの姿勢は異なるようである。これに前後する時期の神あるいは人の表現は、顔だけの場合が多く、そうでなければ体全体を大まかに形成する程度であつて指までを表現する例はなく、この点も大きな特徴である。

この他、429は判断がつかねるが、何らかの器物を写したものと考えられる。

楯築墳丘墓からは出土していないが、わずかに時期が下る雲山鳥打1号墳丘墓、甫崎天神山遺跡からは鳥形土器が出土している。また、後期後半～古墳時代前期のこの地域の集落遺跡ではイノシシ、シカなどの動物形土製品が出土している。神あるいは人と、鳥や家、また動物とでは祭祀の対象や目的が異なるであろうが、土製品の製作という点では同じである。これらが同時期に製作されることになった理由、また、人の形の製品がどういった意味をもつのかなど課題は多い。

7 祭祀の過程と土器の配置

はじめに

楯築墳丘墓では、南西突出部前面に堆積したものを除けば土器は薄い流土中に包含され小片化したものが多く、遺存状態がよいものは少ない。その反面、墳丘の規模が大きいため土器の配置や取り扱いについての情報は多い。まず、土器とその他の出土遺物から想定できる祭祀の過程を示し、そののちに配置された土器の器種構成を整理する。

a 葬送儀礼の過程

特殊器台をはじめとする大量の土器や弧帯文石など、葬送の祭祀には多くの器材が用いられた。祭祀の全体像を知ることは不可能といわざるをえないが、円礫壇の形成過程などいくつかについては推定が可能である。

1 儀器・用具の製作

墳丘の築造に並行してさまざまな器財の製作がなされる。特殊器台をはじめとする大量の土器が製作され、弧帯文石石材の採取と加工が進められる。

2 集落での祭祀

当然のことながら、葬送にかかわる祭祀すべてが墓上で行われたわけではなく、被葬者の死亡直後から集落内、これは首長居館等を含むが、そこで祭祀がなされたと考えてよい。

A類特殊壺 集落での祭祀を示唆する資料の1つは特殊器台A類に伴うべき特殊壺の欠落である。

特殊器台と特殊壺がセットで用いられたことは改めて述べるまでもないが、たとえば円丘部北斜面調査区からは特殊器台B類の筒部片に混じって同胎土の特殊壺片が出土しており、南西突出部前面では小形特殊器台であるが、特殊壺を伴って出土している。特殊器台A類は個体数が最も多く、筒部破片が墳丘全域からと表現しても過言ではない出土状況であるが、それに対応する特殊壺は出土していない。特殊壺A類の破片159は突帯が細く特殊器台に伴うものと確定することはむずかしいし、それが伴うものであったとしても1個体にすぎない。特殊器台A類には長頸壺を載せたとも考えることも可能であるが、円礫堆上面出土の2個体にはそうしたものも伴っていない。

第5節で述べたが、津寺遺跡堅穴住居195からは特殊壺の頸部以上を用いた器台が5点出土している。特殊壺として用いた後に土器の一部分を器台として使用したものであり、こうした特殊壺頸部転用の器台は出土遺跡不明ながら他にも知られている（宇垣2019）。特殊器台・特殊壺を用いる祭祀は葬送に限らないため、それらが葬送祭祀の後に集落に残されたものと断定はできないが、特殊壺が特殊器台とは異なる扱いを受ける場合があることは明らかである。

特殊壺A類の墳丘上での欠落は、特殊壺と特殊壺がセットになる本来の状態で行われたのが墓ではなく集落であることを示しており、葬送の祀りののち特殊壺は集落に残されたと考える。なお、第5節で述べたように特殊壺A類は百間川米田遺跡から出土しており、A類では特殊壺を作らなかったわけではない。

円礫堆出土土器 論拠のもう1点は円礫堆出土土器の残存状況である。2次加熱がなされた一群（円礫堆土器A）はある程度の接合が可能であるのに対し、大多数を占める通常状態の土器（円礫堆土器B）は接合するものがほとんどなく、破片の不足が大きな特徴である。

円礫堆上面出土特殊器台等（円礫堆土器C）の破片の残存状況から、円礫壇の南東側はある程度が流出していると考えられる（第5章第2節h）。また、高杯など毀損しやすい土器では、著しく小さな破片となって接合が困難なものがあり、円礫の重量で粉末化した破片も認められた。そうした接合不能資料や失われた資料はある程度の量が見込まれ、円礫壇に包含された遺物のすべてが遺存したわけではないといえる。しかしながら、円礫壇に包含された遺物の大部分は陥没によって形成された円礫堆に遺存したことも確実であり、流出を受けて減じてはいてもCの特殊器台は接合復元が可能であったり図上で復元が可能な程度には破片が残存している。また、円礫堆全体に破片が広がる円礫堆土器Bは、円礫壇の局所的な流出によって破片の残存量が大きく変動するとは考えがたい。

これらのことから、円礫とともに積み上げられた円礫堆土器B：高杯・脚付直口壺などの飲食用小形器種は、元々土器の1個体分に満たない破片であったと判断できる。破片の不足の原因についてはいくつかの推定が可能であり、それは土器が破片となった場所がどこかという問題に関わる。破片となったのが円礫壇形成位置とした場合、破片の多くは墳頂等の別位置に置かれたとするのが1つの解釈である。調査は墳丘の一部にとどまるためその当否を調査成果から検証することはむずかしいが、Cの特殊器台は小片も円礫壇上に置かれている状況であり、それとは異なって土器全体の一部だけを円礫壇に収めたとすることはかなり考えにくい。また、破片を持ち帰ったと考えることもできるが、その意味を説明することはむずかしいように思われる。最も可能性があるのは、集落での祀りに用いた土器を砕き、そのうちの適当な量の破片を墓に持ってきたとすることである。

以上2点から、高杯、脚付直口壺をはじめとする全土器を用いた祀りが集落で行われたと考える。高杯と脚付直口壺が圧倒的に多いことからそれは飲食物を伴うものであったことは確実である。この2器種は脚柱部の形成手法が単一ではなく胎土中の砂粒の含有量にも差があることから、複数の集団によって製作されたと判断できるが、内容物を伴っていた、容器のみが供された、そのいずれかは判断しがたい。

これらが大人数が一同に会して飲食を共にする共飲共食に用いられたのか、殯期間など長期にわたって行われた祀りに用いたものの累積であるのかを判断することはむずかしい。

3 埋葬施設の構築と墓壇の埋め戻し

- 墓壇掘削の後、木槨を構築する。
- 墓壇を埋め戻す。墓壇がほぼ埋まった段階で大柱を設置する。
- 木棺を納める。
- 木槨の蓋が設置された後に墓壇上部を埋め戻し、それに合わせて木柱2・3を設置する。木槨上では埋め戻しの過程で朱を撒く。
- 墳頂部上層盛土を敷設し円礫を敷く。これで墳丘が完成する。
- 大柱、木柱の根元に朱を撒く。

4 埋葬施設上の儀式

- 木柱2・3の位置をもとに被葬者の頭部位置を判断して弧帯文石を置く。高杯等5点ほど（円礫堆土器A）を穿孔ののち配置する。割った土製勾玉・管玉をその周囲に置く。
- 燃料を持ち込み、弧帯文石と上記の土器・土製品を囲んで火を焚く。やがて弧帯文石が割れる。

弧帯文石が壊れる過程にも意味があった可能性はあるが、この行為は弧帯文石が役割を終えたことを示すとすれば（本章第8節）、弧帯文石や土製玉類、高杯等を用いた祭祀の中核となる儀式はこれよりも前、おそらくは3の段階となる。

- 火が落ちた後に弧帯文石上部の破片を払い落とす。

- 高杯の1つを近くに埋める。残りの高杯は破碎する。

5 円礫壇の形成

割れた弧帯文石の上に、集落での祀りに用いた高杯をはじめとする土器類（円礫堆土器B）、モモ等の果実、鉄器などを円礫とともに積み上げる。円礫堆はかなりの量の朱を含むが、円礫壇構築の過程で撒かれた可能性とともに、集落での祀りに用いたものが入った可能性も考えられる。

これらの器材のうち鉄器は、小形のノミ状の工具である。出土弧帯文石と神社弧帯文石の製作にはさまざまな刃幅のノミが用いられたことが加工痕からわかるが、それと同じ刃幅をもつ個体が含まれている。弧帯文石の製作においては、帯の彫出しだけでなく面の調整や沈線の彫り込みなどに多様な工具が用いられたと考えることができ、出土鉄器のさまざまな形状も理解が可能である。出土鉄器のすべてがそれに用いられたとは限らず、別に木製品も製作された可能性があるが、少なくとも一部は弧帯文石の加工具と考える。なお、同様の鉄器39が大柱遺構の柱痕跡内から出土しているが、円礫壇からは距離があり、大柱に何らかの彫込みがなされたことを示すのかもしれない。

この推定を妥当とすれば、円礫堆出土遺物は集落での祀りに用いたものだけでなく、それに至るまでに用いられた道具を含むことになる。葬送に関わる器材は多岐にわたると思われるが、それらから特に葬送に関わるものを選んで主体部の上に納めたと考える。

6 特殊器台等の納置

- 円礫壇の上面に大きめの円礫を敷く。
- 特殊器台、壺、器台等の大形器種を中心に割り砕き円礫壇上に置く（円礫堆土器C）。

調査によって得られた情報をもとに記載できるのは以上である。なお、棺設置と大柱構築の先後関係は確定できず、ここでの順序は推定である。円礫堆出土の高杯以下の土器は祭祀に用いた器物を墓上に納めるという性格のものであるが、そこから、墳頂で多人数が会して行った祭祀に用いた土器を片付けたといった行為を読み取ることはむずかしい。墓上で共飲共食儀礼がなされたことを前提として資料を解釈することも可能ではあるが、それを論証できる資料ではない。むしろ、埋葬施設での儀礼の最終段階で用いられた円礫堆土器Aの数に留意すべきである。

b 墳丘上の土器

以上は中心主体付近での推移であるが、この部分の外側になる墳頂平坦面と墳丘斜面に土器が配置される。前章までの記載で明らかなように土器は常に円礫とともに出土しており、土器配置の場として円礫敷が設けられたと判断できる。

墳頂平坦面 高杯A、高杯B、小形器台、直口壺、装飾高杯などが置かれる。これらのうち、小形器台と直口壺は他の箇所では見られない器種である。

中形・小形の土器で構成されており、鋸歯文で飾られたものが多い。これらが砕かれた状態であったのか完形であったのかは、地表にごく近い位置からの出土であり、多くが小片となっているため判断がむずかしい。破片が大きくある程度の接合が可能な高杯299や、破片の大きさにばらつきが少ない直口壺283から、砕かれない状態であったと推定する。

これらの他に、まとまった出土は示さないが、特殊器台片がある。遺存状態がよくない破片が主であるが、大形で良好な状態の破片327もある。調査範囲内では脚部や裾部が出土しておらず配置の密度は低いとみられるが、ある程度数が墳頂に配置されていたとみられる。

墳頂平坦面北側の調査で判明したのが以上の土器群であるが、これが中心埋葬をとりまく環状になるのか、立石や建物1などが所在するこの付近の様相であるのかは、他の箇所を調査していないため

確定しがたい。南東斜面裾の堆積土は斜面施設の流出と後の攪乱、墳頂平坦面の流出によって形成されたと思われるが、装飾高杯や高杯Bなど墳頂平坦面に見られる器種の小片も含まれている。このことや推定される円礫敷の機能から、粗密はあったとしても、墳頂平坦面全域に土器が配されたと考える。**斜面円礫敷** 円丘部・突出部の調査では墳丘斜面に設けられた円礫敷の下方から円礫とともに大量の土器が出土している。西くびれ部と北東突出部では円礫敷の上に土器が散在する状況が認められ、土器の多くは円礫敷上に置かれ、後に転落、流下したと判断できる。

斜面の円礫敷に置かれるのは、特殊器台、小形特殊器台、特殊壺、長頸壺、家形土器で、いずれも大形の製品である。北東突出部ではこの構成ながら長頸壺の比率が高く、一方、南西突出部前端は小形特殊器台と特殊壺が主体でそれに長頸壺が少量加わっており、地点により器種構成に差がある。西くびれ部では特殊器台以下の器種に加えて小形器種である脚付直口壺や小形器台が出土している。これらは墳頂平坦面に見られる器種であり、この箇所は墳頂平坦面との距離が短いため、そこからの転落もありうるが、破片の状態から本来ここに置かれたと考えられる。また、北東突出部でも量は少ないが高杯等が出土している。北東突出部調査区の東側は東くびれ部調査区と呼んでもよい範囲であり、くびれ部に限って上記に小形の飲食器種が少量加わる構成となる。

斜面円礫敷出土の土器のうち、設置状態がわかるのは円丘部北側の長頸壺6と北東突出部の長頸壺底部154で、前者は土器を横向きにして胴部を円礫層中に埋め込んだ状態で検出した。円礫層上部の流出を考慮すれば、横にした土器の半分近くまで埋め込まれたとみてよい。後者は土器の底部付近のみの状態で遺存しており、正位の状態で埋め込まれた下部が遺存したとみられる。長頸壺6と154は設置状態に差があるが、北斜面の円礫敷は広い緩斜面をなさないため土器を正位の状態で置くことよりも転落しないことを優先したと考える。この置き方に準じるなら、高さがある特殊器台は脚部全体を埋め込むか、横にして下側を埋め込むかが必要になってくる。この2例のほか、北東突出部第2列石に接して出土した長頸壺130は円礫敷の上から転落したのか、本来ここに横向きで置かれたのか確定できないが、かなり早い時点で検出の状態となっていたようであることや、長頸壺154のように設置されたものが簡単には転落しがたいことから、本来ここに横向きで置かれた可能性を考えておく。

北東突出部と西くびれ部での特殊壺と特殊器台の関係は、個体数のうえではおおむね対応する。しかし、特殊器台はA類が主体となるのに対して特殊壺はB類が主体となっており、製作時のセット関係は保持していない。一方、南西突出部では特殊壺の数よりも小形特殊器台の数が多くなるようである。特殊壺A類の不在を本来小形特殊器台に伴う特殊壺を含めた他の特殊壺で補ったため、組み合わせが崩れたり、一部で不足を生じることになった可能性がある。

c 土器の構成と配置

以上に述べた土器のあり方を出土個体数で整理したのが表4である。破片化した土器から個体数を割り出すのはかなりむずかしく、破片がどの程度に散乱、移動しているのかという問題もある。他に、口縁部形態が類似する器種間の判断も簡単ではなく一部が入れ違っている可能性は否定できない。出土個体の総数を左に記し、右に()でトレンチ付近に配されたであろう個体の数を記した。破片の流入によって個体数を重複して計上するおそれがあるが、墳丘斜面の各トレンチはある程度離れているのでその可能性は少ないと考えており、実際、判断を必要とする資料は少数である。なお、南東斜面調査区資料のうち第2主体からの流出と考えたものは後者に含めた。一方、墳頂平坦面については調査域が近接し、後世の土地利用もあるため重複の危険はある。小形器種は問題ないが大形品については若干割り引いて考える必要があるかもしれない。

表4 出土土器の構成

	埋葬		墳頂			円丘部斜面						突出部		計	立坂墳丘墓					
	円礫堆	第2主体	立石2周辺	立石1北側	立石3周辺	西くびれ部	南くびれ部	北斜面 (主要個体)	北西斜面 (主要個体)	西斜面 (主要個体)	南東斜面 (主要個体)	東斜面	北東突出部			南西突出部	その他			
特殊壺			1	2		3	1	1	(1)		3		4	7	1	23	7			
特殊器台	3		2	1		4	2	4	(3)	2	(1)	2	5	(2)	3	6	34	9		
小形特殊器台			1			1										3	14	2	21	2
長頸壺						2		6	(5)		1	4	(1)	2		9	5		29	
壺	4				1												1		6	9
器台	3					2		1	(1)			2		1					9	3
家形土器	2		2	1						1		2	(2)				2		10	
鉢												1					1		2	2
甕	1	3																	4	12
直口壺					1														1	6
小形壺			2	3	4														9	
小形器台			2	3	5	3													13	9
装飾高杯	11	1	1	2	1	3						1							20	4
中・大形高杯	4		1	1															6	
高杯B	4		3	3	2			1				1							14	
高杯A・脚付直口壺	93	17	2	6	1	2										5	1		127	20
計	125	21	17	22	15	20		13	3	3	19	6	27	28	6				328	83

土器の配置 土器群は円礫堆、墳頂平坦面、円礫敷の3ヶ所3グループに区分できることは表からも明らかである。円礫堆と墳頂平坦面は比較的似た器種構成を示すが、それぞれの場を特徴付ける器種が見られ、一方で特殊器台のように重複する器種もある。家形土器と人形土製品以外は吉備の弥生墳墓で通常見られる器種であるが、埋葬施設上から出土するものを除けばそれらの配置についての情報が得られることはほとんどない。元は置き分けてあったとしても墳丘の流出等で原位置をとどめず、土坑等からの出土は片付けられた状態の可能性もある。それに対して楯築墳丘墓は格段の広さがあり墳丘の遺存状態も良好であるため、それらではわからない土器ごとの配置が明瞭に残されたとみてよい。土器の構成をⅠ 円礫堆、Ⅱ 墳頂平坦面、Ⅲ 斜面円礫敷とし、それを代表する器種で示せばⅠ 高杯A・脚付直口壺、Ⅱ 小形器台・直口壺ほかの小形壺、Ⅲ 特殊器台・長頸壺とすることができる。墳墓出土の上記各器種は一連のものとして扱われることが多いが、高杯等と特殊器台は配置の上では関連が弱いとすることができる。なお、円礫堆出土土器のうちA・CはBとは取り扱いが異なっており、ⅠはBの円礫堆内出土土器を指している。

中心主体上のⅠが高杯・脚付直口壺の出土総個体数93からAの4個体を引いた数で目を引くのに対し、Ⅱはそれほど量がないという感がある。しかしⅡの検出範囲は全体の一部であって広い配置をもつとすれば、これが墳丘完成段階、つまり棺納置後の祀りに用いられた土器の本体であったと考えられる。

一方、墳丘斜面の円礫敷へ配置される特殊器台以下の土器Ⅲは、配置が当初からのものであるのか祀りの後の最終的な片付けとしてなされたのかは不明といわざるをえず、祀りの際は墳頂にあって後にこの場所に置かれたと推定することも不可能ではない。しかし、片付けの場所として円礫敷が設けられたとはみなし難く、土器は初めからここに配置されたと考えてよい。帯状に墳丘を取り巻く円礫

敷に特殊器台や長頸壺などが高い密度で配されて土器の列を形成したとみられ、土器による圍繞という表現がふさわしい。土器と列石とで一種の境界を設けたと考えることができる。斜面施設の完成が墳頂と同時であった可能性は否定できないが、墳丘斜面の第1列石は墳丘構築の過程で設けられており、下側から順次墳丘を作り上げたとすれば早い時点で完成していたと考えても支障はない。棺を収める時点での祭祀に対応するのは墳丘斜面の土器群であったと考えられる。

土器の総量 土器量の多さが、この遺跡の最大の特徴である。表4右に立坂墳丘墓の土器構成と個体数を示した。立坂墳丘墓は開墾による掘削箇所を除外しての全面調査であるためここに示した数が本来の土器総数ではないとしても、大きく増加することは考えにくく、格段の差がある。楯築墳丘墓から出土した土器のうち集計できて表4に示した総量は328個体であるが、4次～6次調査の一部調査区は未集計個体がある。また、北東突出部では個体数を細かく算定し相当な数の壺の存在を示したが、出土土器の多くが2次調査で斜面下方に伸ばしたトレンチからの出土であり、調査面積を勘案すればその数がこの箇所に配置された土器のすべてとは考えにくい。それは斜面下方の堆積が根こそぎ失われている西くびれ部についてもいえることである。

工事で失われた範囲や墳頂平坦面の広さを考慮するなら、用いられた土器の個体数はごく控えめにしてもこの数の倍、おそらくはそれ以上であっただろう。空前の規模の祀りがなされており、それは飲食物供献の形をとる。

底部穿孔 土器個別の扱いとして、底部穿孔がある。底部穿孔が見られる器種は壺・特殊壺、高杯A・脚付直口壺であり、高杯のうち装飾高杯と高杯Bでは認められない。出土土器に見られる穿孔は、すべて焼成後穿孔である。底部穿孔は先行する伊与部山墳墓群出土脚付直口壺に見られ楯築が初現ではないが、穿孔が底部に定まり墓の土器の基本要素となる段階の様相をよく示す。

底部穿孔の有無は大きな底部破片、あるいはある程度の大きさに接合できたものでなければ判断がむずかしいが、壺類では報告した資料のうち底部の残存状態がよいものでは基本的に底部穿孔が認められ、壺・特殊壺はすべてに穿孔がなされたと判断できる。

楯築の資料では、器台に載せられる、あるいは下部を埋め込んで設置されることが想定される壺類では下半の丹塗りが省略されるものが含まれる可能性が強いが、器表の保存状態がよいものばかりではなく確定はむずかしい。葬送用の土器が成立当初から仮器としての性格をもっていたことを示す可能性があり、今後、この種の資料については丹塗り範囲について詳細な観察が必要である。

高杯・脚付直口壺に穿孔を行うのは円礫堆土器Aで、366・383がある。円礫堆土器Bの高杯等が破片になる前に穿孔がなされたのかどうかは良好な資料が少なく判断がむずかしいが、杯部がある程度遺存する資料で穿孔がなされるものは認められず、これらでは穿孔がなされていない可能性が強い。一方、第2主体出土の土器は脚付直口壺が主体をなし、墓壇埋土から破片が散在して出土した一群と、元は完形の状態で主体部に置かれたと推定される脚付直口壺112に区分できる。前者は破片が大幅に不足し墓上で用いた土器を砕いて埋めたという状況ではない。円礫堆土器Bに相当し、これらでは穿孔はなされない。後者は砕かれていない点で円礫堆土器Aの一部と同じであり、これには穿孔がなされる。したがって、楯築では壺類は必ず穿孔、飲食器である高杯や脚付直口壺は必要な場合にのみ穿孔がなされ、通常は破碎とした可能性が強い。第2主体では土器の多くは墓壇埋土に入れられ円礫堆の状態をなさないが、中心主体での手法を継承しつつ簡略化した形と思われる。

こうした楯築の土器の取り扱いに対し、黒宮大塚墳丘墓の竪穴式石槨上から出土した高杯や脚付直口壺はほぼすべてに穿孔がなされており、立坂墳丘墓出土資料も破碎はしておらずある程度の個体に穿孔しているようである。小形飲食器種は後期後半の墳墓の基本器種であるが、土器の取り扱いは

墳墓ごとに異なっていたといえる。

祭祀の多様性 楯築に近接した時期の遺跡と比較した場合、よく似た配置と構成を示すのは黒宮大塚墳丘墓である。特殊器台は墳丘斜面からまとまって出土しており楯築と同じである。また、墳頂の竪穴式石槨上の土器溜まり、これは楯築の円礫堆に相当するものであるが、高杯・脚付直口壺を主体としつつ小形器台等も含まれており、IとIIを合わせた構成である。竪穴式石槨上土器溜まりの土器は基本的に破碎せず穿孔するという取り扱いの違いはあるが、土器の出土個体数は90数点であり、それに限れば著しい差はないことが注意される。

みそのお墳墓群では後期前葉から末葉まで土器は埋葬施設上に置かれるようである。小片となっていて元が完形であったのかどうか不明なものも多いが、破片かかなりそろそろものが含まれており、完形で供献されたとみられる。したがって、破碎しない黒宮大塚例が後期を通じての一般的な取り扱い方であり、楯築墳丘墓中心主体、第2主体がそれからはずれるといえる。楯築墳丘墓中心主体の場合、祭祀の内容に応じて穿孔、破碎と土器の取り扱いを変えており、それが第2主体にも継承されたと理解しておく。

楯築以降の墳墓の土器構成は遺跡ごとに個性があり、女男岩遺跡のように多量の高杯等を伴う遺跡がある一方、西江遺跡のように特殊器台・特殊壺のみが出土する例もある。これは祭祀の対象や墓の階層に起因すると考えられるが、大勢としては器種I・IIの減少、IIIの継続と捉えることができる。後期末葉・向木見型段階の特殊壺は焼成前に穿孔がなされることから明らかなように、特殊器台・特殊壺は葬送を象徴する儀器として発展し、中小の器種を用いての飲食物供献は規模を縮小していく。

8 出土弧帯文石と神社弧帯文石

はじめに

第2章で示したように、楯築神社弧帯文石（以下、神社弧帯文石）は江戸時代に掘り出されたとの記録をもつ。本来の所在位置の推定はむずかしいが、この墳丘墓に伴う遺物と考えてよい。一方、円礫堆出土弧帯文石（以下、出土弧帯文石）は中心埋葬の上でなされた祭祀の後に、あるいは祭祀の一部として、焼き割られている。大きさや特異な造形、特殊な取り扱いなどから、これらはこの遺跡でなされた葬送儀礼において大きな比重をもつものであったと考えられる。しかし、葬送の思想や儀式に関わる遺物であるうえに類例もわずかなため、それらの機能、どのように用いられたかを考えることは容易ではない。2つの弧帯文石はよく似た特徴をもつが、細部では異なる点も見受けられる。以下ではこれらの対比を行い、両者がどのような関係にあり、それぞれがどのような性格をもつのか検討を試みる。

a 諸要素の対比

両者の特徴は、以下のように整理することができる。

共通点

- 1 上面、側面、小口に弧帯文を浮彫で刻む。
- 2 下面は帯の輪郭を彫り出すが、以後の工程を止め未完成とする。
- 3 帯の横断面形は凹面が基本である。
- 4 aとbの2種の切削方法を用いる。
- 5 原石を反映した形状である。石材は同一とみられる。

出土弧帯文石の特徴

- 6 焼き割られる。
- 7 小さい。復元重さ49kg。
- 8 帯は細い沈線で表現され、中心線や側線はない。
- 9 帯の端をバチ形にひろげ、帯の終わりを表現した箇所が多数見られる。
- 10 渦心円の斜面・内壁は平滑に仕上げ、側面の渦心円の中にも帯を表現する。
- 11 下面の渦心円には稜線・斜面を設けない。

神社弧帯文石の特徴

- 12 完形で遺存する。
- 13 大きい。重さ400kg。
- 14 顔を表現する。
- 15 帯には太い沈線で中心線と側線を表示する。
- 16 側面の渦心円には基本的に帯を表現しない。内壁を十分整えないものが見られる。

b 諸説の検討

これらのうち大きな相違点となるのは帯の表現（8・9・15）である。中心線・側線をもたない出土弧帯文石が古く、神社弧帯文石が新しいとする見解（平野・岸本2000）がある一方、9のバチ形表現を新しい要素とみる意見（櫻井2013）が示されている。課題は、2つの弧帯文石が製作時期に差を

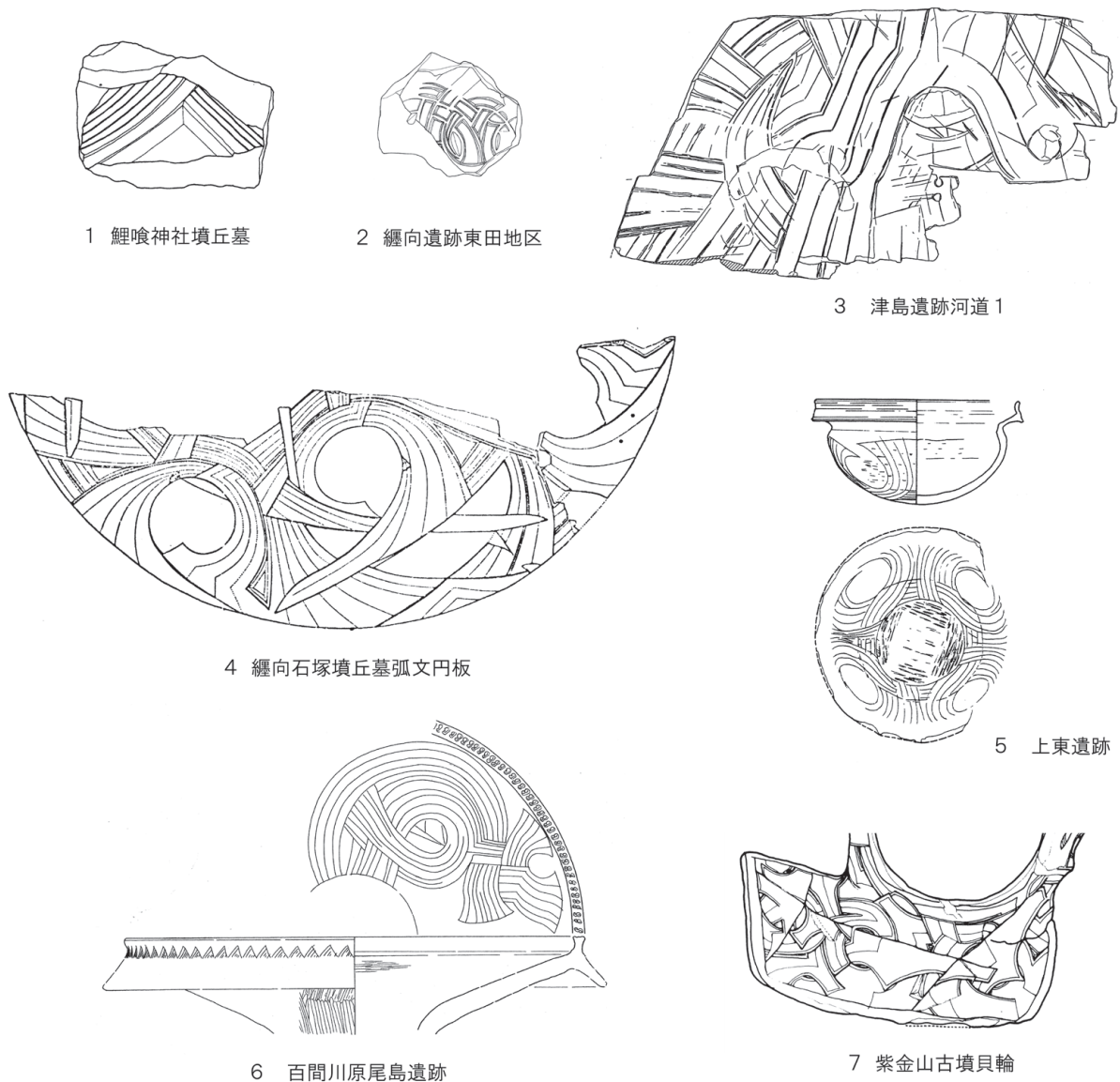


図182 浮彫表現の弧帯文・関連資料（縮尺不同）

もつのかどうかである。

弧帯文が刻まれる資料¹⁷⁾は石材・木材と土器に分けることができるが、浮彫で立体的に刻まれるのは石材と木材の場合であり、2つの弧帯文石のほかに1 倉敷市鯉喰神社墳丘墓弧帯文石、2 奈良県纏向遺跡東田地区弧帯石、3 岡山市津島遺跡裝飾板、4 纏向石塚墳丘墓弧文円板がある（図182）。神社弧帯文石とこれら1～4ではいずれも側線が表現されており、とりわけ鯉喰神社墳丘墓弧帯文石の側線は幅の広い斜面をもつ。中心線があるのは津島遺跡裝飾板で、纏向石塚墳丘墓弧文円板では一部の帯に設けられる。鯉喰神社墳丘墓弧帯文石は残存部位の関係で中心線の有無は不明、纏向遺跡東田地区弧帯石では設けない。これらから、側線は帯の基本要素であり、中心線は可能なら配するというのが弧帯文の約束事とみられる。後の直弧文では側線と中心線という構成が定型化する。したがって、出土弧帯文石のみがそれから逸脱することになる。

側線・中心線を用いない帯の表現は土器¹⁸⁾の弧帯文に見られる。土器の弧帯文は精粗の差が著しいが、6 岡山市百間川原尾島遺跡器台や5 倉敷市上東遺跡鉢のような精製品であっても側線や中心線は見られない。器壁が薄い土器の場合、器壁の厚さを局部的に変えることになるため深く刻んだ沈

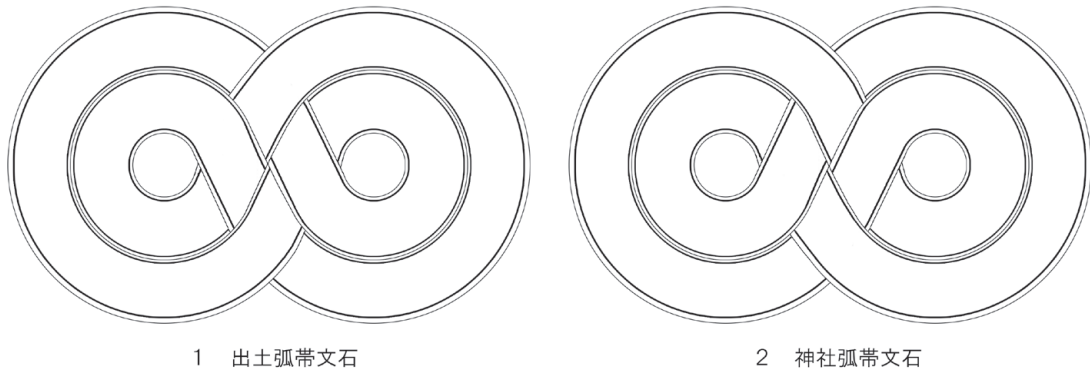


図183 弧帯文基本図形の相違

線で中心線や側線を表示することはむずかしいとみられるが、沈線の間隔や複数の線でそれら表現することは容易にできると思われる。しかし、土器の弧帯文ではそうした表現が用いられることはない。製作の途中で比較的簡単に弧帯文を入れることができる土器と、製作に時間を要する石・木の製品とでは、同じ儀器であったとしてもその重要度には軽重があり、土器の弧帯文は簡略に表示された弧帯文と判断するが(宇垣2018)、それと共通する出土弧帯文石の文様は、略式の弧帯文と考える。出土弧帯文石と神社弧帯文石は石材が共通するとみられ、下面に残る切削の手法も同一である。神社弧帯文石と出土弧帯文石は、同時期に製作されたものであり、文様の差は両者の質的な差を示すと考える。

9のバチ形表現が出土弧帯文石側面下部に特徴的に見られるのは確かであるが、神社弧帯文石の後側面にもそうした表現があり、出土弧帯文石に限って見られる表現ではない。帯の連続を旨とする早い段階の弧帯文では帯の端部を表現することが少ないものの、その場合にはこの形をとることが定まっていたとみることができ、やがてこの特徴的な図形が弧帯文を代表するものとなって原単位文の確立に至ると考える。

c 両者の相違

記載で述べたように、下面にデザインされる弧帯文の帯の組み方は出土弧帯文石と神社弧帯文石とで逆になる(図183)。文様を完成していく過程で帯を加えたり接続を変更するなどの改変を行っていくため、工程を止める下面以外では基本図形を読み取ることはできなくなり、最終的に出土弧帯文石と神社弧帯文石はほぼ同様の意匠となるが、基本となる帯の構成は表裏の関係にある。また、帯の方向にも若干の相違が見られる。渦心円は内部に帯が配置されることから結び目のような意味をもつと考えてもよいが、それをとりまく帯は平面上で旋回しており、実際の帯を写したとは考えにくく渦のようなものでもよいだろう。渦心円をめぐる帯はそこから出て行くのか入るのかも明らかにしたいが、検討の都合上、渦心円は渦であり、外から渦心円に近接してくる帯は巻き込まれているものであり、渦心円にそって先端が狭まる帯の方向は渦の回転方向を示すと仮定した場合、神社弧帯文石の渦心円はいずれも左回りの渦とすることができる。一方、出土弧帯文石では左回りが多いものの足側小口では右回りが見られる。

このほか、側面の帯と下面の未完成の帯の関係も異なる。神社弧帯文石では上記のように側面下端でバチ形に開いて終わる帯もあるものの、後方側面の帯が下面の帯に接続する意匠となっており、帯は下面にも続いているがそれを完成していないという形になる。一方、出土弧帯文石下面では側面・小口の帯はその面の下端で収まるようにデザインされ、下面への帯の接続がうかがわれる箇所はない。



図184 弥生時代後期の顔表現（縮尺不同）

側面の下端各所にバチ形の帯端表現が配されるのは帯が下にのびないことを明示するためとみられる。したがって、出土弧帯文石では上面～小口・側面に展開する帯と下面の完成しない帯は別のものとなる。また、11の下面の渦心円に稜線を設けないことは、帯の巻き込み方なり組み方が他とは異なることを示すのではないかと思われる。

こうした相違から、出土弧帯文石は神社弧帯文石のミニサイズ版としてではなく、わずかに異なるものとして作り分けられたとみることができる。略式としての性格をもつと考えるが、製作そのものには略されたところはなく、渦心円内壁の調整や渦心円斜面の帯表示（10・16）などは神社弧帯文石よりもむしろ入念である。

d 弧帯文石の性格

この作り分けの意味を考える手がかりとなるのが神社弧帯文石に作り出された顔である。図184にこの地域の顔が表現された資料を示した。神社弧帯文石の顔は、卵形の輪郭にまっすぐな鼻筋、丸い目と入れ墨が表現され、はっきりした眉を特徴とする後期前半の1～3とは異なる容貌である。こうした特徴をもった顔の表現は、資料は少ないものの吉備南部、讃岐、東海以東に分布する。論が多岐にわたるのを避けて吉備と讃岐に限るが、5 岡山市鹿田遺跡、6 倉敷市上東遺跡、8 総社市一倉遺跡、9 同津寺（加茂小）遺跡、10 香川県善通寺市仙遊遺跡資料があり、楯築特有のものではないことがわかる。7 岡山市伊福定国前遺跡と11 総社市宮山遺跡は描画できる面積がごく小さいため十分

に特徴を表現しきれなかったと判断している。資料は吉備南部に集中しており、6 上東遺跡例と9 津寺（加茂小）遺跡例は年代を確定しがたいが¹⁹⁾、それ以外の資料から、後期後葉から末葉にかけて年代がまとまるとみてよい。類似した表現が複数の遺跡わたって分布することから、これは人面ではなく、神の顔と考える。この理解を妥当とすれば、神社弧帯文石は神が宿る場所、神の依代であったとすることができる。図184の資料でも、多くは顔だけが表現され体部の存在は想定されていない構図である。神社弧帯文石の場合、首を意識したと思われる帯の配置はあるが、これはあくまで帯であり顔と同等の表現ではなく、後方に体部を想定し体部分を帯で巻いたといった理解は適切ではない。神の依代に、そこに宿る神の顔を表示したと考えるべきである。

このことは、弧帯文がどういった性格の文様かを考える手がかりにもなる。神社弧帯文石については帯によって首長の霊を封じたもの、また、弧帯は竜や蛇を表現したなどの解釈もある。しかし、弧帯文は弧帯文石だけでなく特殊器台や土器にも描かれる文様であり、弧帯文の最も精巧な資料であるからといって、この資料から得られる印象や顔表現との関連だけで考えるのは適切ではない。弧帯文を全面に表示するこの石が神が宿るものであったとの評価から、弧帯文は、悪しきものを防ぐものであり、聖性を表示するものであったと考えており、弧帯文石だけでなく特殊器台などの弧帯文も当然同じ性格であったと考える。

繰り返し述べたように、2つの弧帯文石はともに下面が未完成状態にある。見えない箇所であれば最初から手をつけず、あるいは完全に作ってしまうという考え方もある。しかし、こうした未完成状態はこの2例に限ったことではなく、先にふれた資料のうちの2例、3 津島遺跡装飾板、2 纏向遺跡東田地区弧帯石にも見られる。前者では板の左半分に完成した弧帯文、右半分には下書き状態の弧帯文が彫られている。また、纏向遺跡東田地区弧帯石の場合は割付の沈線はあるものの帯の彫出しがなされていない箇所がある。これらから、部分的な製作の停止は榑築墳丘墓の資料に限ったものではないことがわかる。また、記載で述べたが、神社弧帯文石は未完成の状態とすることを前提として加工を進めている。

完全に文様を形成しない、文様を完周させないのが、本格的な弧帯文の約束事であったと考えることができる。弧帯文の思想にかかわる部分とみられ、それがどのような意味をもつのかを推定することは困難である。あえて記すなら、弧帯文は神を護る文様であり外からのものを防ぐ機能が強い、神のための通路をあけておくといった解釈も一考の余地があるかもしれない。

神社弧帯文石は、その重量から一度設置すれば動かすことはむずかしい。それに対して小形に作られた出土弧帯文石の特徴は可搬性にある。軽くはないが一人でも移動が可能であり、葬送儀礼の進行に応じて位置を変えることが考慮されたとみることができる。これが儀礼のなかでどのように用いられたか考えることは容易ではないが、神の依代である神社弧帯文石に準じる存在であり、最終的に破砕されることを勘案すれば、一時的な依代と理解でき、亡き首長の霊を一時的に保持するといった機能を担ったと考えてよいのかもしれない。神に通じる道具であり、二度と用いることのないものであるため、焼き割るという石の処置としては最も特殊な方法を用いたのであり、すべてを細片化して消し去ることを目指し、それをほぼ達成したのではないかと考える。

先に記したように弧帯文を刻む対象となるのは石材、木材、土器である。これらのうち製作に時間と労力を要する浮彫の素材となるのは石材と木材で、浮彫とすることによって弧帯文は陰影をもち、より印象的なものとなる。石材、木材で弧帯文を刻む製品が高位の、祭祀の中心となる器財であったとみられるが、入手と加工が容易な木材が基本的な素材であったと予想される。石材は大形製品の製作が可能で、用材入手と加工の困難さを容易に想像できる点で他との差別化をはかることができる。

しかしながら、当時の技術で加工の対象にできる石材はごくわずかであるため、石材の入手は著しく困難で、さらに加工に長時間を要することになり、ごく限られた場合にのみ選択されたと考えられる。弧帯文石は線刻を別にすれば最古の石彫品であるが、この地の最高位の首長の葬送のために製作されたきわめて特殊な儀器であったとすることができる。

e 石材の入手

遺跡が所在する岡山県南部では、素材となった紅柱石質蠟石の産出地は岡山県南西部に位置する浅口市と、中部に位置する岡山市北区建部町の2ヶ所である（逸見1992）。楯築墳丘墓からの距離は前者で25km、後者で24kmと差はなく、いずれもかなり遠隔の場所である。特殊器台の分布等から推定できる地域間関係の濃さからすれば、石材の採取と搬入がなされたのは前者の可能性が高いと思われる。

浅口市小坂東の産出地は深い谷を谷の出口から約1.3km入った位置になる。露頭の確認までは行っていないが、この種の石材が谷に大量に所在したり、谷の出口まで転石として流下している状況にはない。神社弧帯文石の大きさの石材は、露頭に近接した支谷などで大きさと形状、表面の状態などを考慮して採取したと思われる。重量があるだけに、谷を伝って搬出するだけでもかなりの労力を要したことが想像される。特殊な石材の存在を把握し使用しており、当時の人たちの資源についての知識の豊富さ、そして、楯築墳丘墓の成立基盤がきわめて広範であったことを示すといえる。

なお、ここでは弧帯文石についての検討に限り、それに必要な資料を提示した。弧帯文の変遷や土器の弧帯文については宇垣2018で考えを示した。

9 楯築墳丘墓築造の歴史的意義

a 墳丘墓の諸元

遺跡の主要な項目を以下に示す。

築造時期 弥生時代後期後葉

墳丘規模 全長推定83m、円丘部径49m、同高さ7m

墳形 円丘部の2方向に突出部を配する

中心埋葬 石組排水溝を伴う木槨・木棺

木槨内法長さ3.6m、幅1.6m、高さ88cm

木棺内法長さ1.95m、幅78cm

副葬品 首飾り2連と小形玉類一括、鉄剣1点

出土遺物

土器 特殊器台、特殊壺、小形特殊器台、器台、長頸壺、壺、甕、鉢、高杯、脚付直口壺、装飾高杯、直口壺、小形器台、家形土器

土製品 人形土製品、土製玉類

鉄器 ノミ状製品

石製品 弧帯文石2点、サヌカイト片

b 祭祀の形成と伝播

楯築墳丘墓の構成要素 前節までの検討においてしばしば述べたように、楯築墳丘墓ではそれまでの弥生墳墓に見られなかった特徴が数多く認められる。それらは、吉備以外の地域から導入された要素、吉備に起源をもつもの、そして、この墳丘墓の築造に際して新たに創出された要素に区分することができる。

円丘と突出部からなる墳形、これは東の地域、播磨あるいは摂津に原形となる意匠があり、ここから導入された要素である。西の地域から導入した要素は多い。副葬行為そのものが後期前半の吉備地域では明瞭でなく、まれに玉類や鉄鏃1点を伴うものが見られる程度であったが、楯築墳丘墓では棺内、棺外それぞれに玉類が副葬される。副葬された玉類の代表となる棺内副葬のB群の勾玉は北部九州で盛行した丁字頭定形勾玉であり(米田2009)、鉄剣も北部九州製と推定されている。副葬行為と副葬品の故地は北部九州としてよい。楯築での副葬の後、吉備地域の埋葬において副葬品の出土例は飛躍的に増加していく。北部九州では副葬をはじめとする葬送の思想、儀礼が長くつちかわれてきた。導入された大柱もそこでの長い歴史をもつ構造物であり、朱の使用もここが故地となる。また、甕棺の合わせ目に施される粘土の目張りの検討によって、被葬者遺体保護の思想は弥生時代前期末にさかのぼることが明らかになっている(禰宜田2019)。

北部九州にとどまらず、さらに西の地域、朝鮮半島から導入したのが木槨であるが、それだけでなく、石組排水溝も国内に事例が見られない以上ここに求めるべきであろう。石組みを設けて盛土を行う墳丘内列石の構築についても同様に考える。

このように、多くの要素が外の地域に求められるが、すべてが外からではなく、吉備地域の中に起源をもつものがある。まず、立地である。後期前葉以来この地域では墓は山の上に築かれており、それを踏襲する。2重の列石は例がないが、列石を設けること、特に石材の配置手法は吉備地域の先行

する墳墓で系譜を追うことができる。特殊器台・特殊壺や弧帯文は、いうまでもなく吉備地域で成立、展開した器種、文様であり、いずれもこの地域の祭祀を表象するものといえる。特殊器台については先行する型式があるが、楯築の段階で一回り大形化しそれが以降の標準の大きさになるとみられる。

一方、新たに創出された要素がいくつかある。大きく立体的な墳丘を築き、それを見せるということは、それまでの墳墓には認められない要素である。突出部は前記のように元になる意匠はあるとしても、新たな機能と形状を備えて作り出されたものである。遺構では円礫敷と立石は類例がなく、これも新たに作り出されたと考えられる。弧帯文石の設置位置や副葬品の配置から読み取ることができる被葬者頭部の重視はそれ以前からの思想であるかもしれないが、墳丘と被葬者頭位を関係づけることはここにはじまるとみられる。このほか、大量の土器を用いた圍繞もそうであるし、起伏に富んだ地形のなかでの大石の運搬や大量の円礫の搬入はそれまでの手法や技術の延長ではむずかしかつたと思われる。これらは他から導入されたのでないとすれば、新たに編み出されたものとなる。

また、地域の内外にそれぞれの祖型はあるが、それを著しく大規模化しているのもこの遺跡の特性であり、朱の大量使用や2重の斜面列石の構築、特殊器台をはじめとする土器の大量使用など、随所に見ることができる。

諸要素の統合 瀬戸内海沿岸から北部九州、朝鮮半島に至る範囲から多様な要素を取り込み、必要に応じて改変、拡大し、かつてなかった形状、構造をもつ墓として築かれたのが楯築墳丘墓である。これの築造にあたって留意されたのは、1つは墓を見せるということで、平野側からの景観を意識した墳端や斜面立石の配置からそれをうかがうことができる。もう1つは、被葬者の遺体保護で、木槨と排水溝でなされる防湿、排水といういわば技術的な部分とともに、斜面立石や列石で表示される遮蔽の観念からなる。これらで達成される遺体保護の目的は被葬者をいつまでも墳丘にとどめることであり、神と一体になった被葬者を祀ることであったと考える。

大柱の導入に象徴されるように、大陸の葬送思想の影響を受けつつ北部九州で形成された葬送の思想にかなりの部分を依拠する。しかし、思想や祭祀の単なる移植でなかったことは、特殊器台に代表される吉備の思想がもう一つの柱となっていることや、新たな要素が付加されることから明らかである。吉備地域では武器崇拜の思想が発達せず、その一方で、農耕に関わる祭祀を大きく発展させており、それは器台の盛行や器台をはじめとする土器での鋸歯文の多用などで示される。これを受け皿として西の地域の思想や祭祀を受容したと考えることができる。中期末にはじまる製塩の急速な拡大は、鉄をはじめとする物資の対価を生産するものであろうし、広域にわたる交易は岡山市高塚遺跡での貨泉の一括出土などで裏付けることができる。そうした外部地域との頻繁な接触が他地域の思想の移入を容易なものとしたとみられる。

楯築墳丘墓の諸要素とそれらの波及状況を概観すれば、各要素が徐々に吉備地域に蓄積され、その集大成として楯築墳丘墓が成立したのではなく、要素全体を備えた王墓楯築がまず出現し、それが地域の内外に作用するという形をとることがわかる。ただし、朱の使用についてはみそのお墳墓群に先行する事例があり、黒住山遺跡資料も楯築に先立つとみられる。

前方後円墳の成立をめぐる議論において、それを構成する要素を保持する各地域なり集団が前方後円墳の創出に参画したとの見解がある。楯築墳丘墓の場合もここで述べたように構成要素の故地は広範囲にわたるが、要素の改変が自在になされており、それを保持していた集団が関与した形跡は見出しがたい。他地域の要素すなわち他地域の関与とみなす必要はないと考える。

楯築墳丘墓の副葬品は玉を主体としており、玉を中心的なアイテムとしたことが明らかであり、これは地域内の立坂墳丘墓、あるいは西谷3号墓や赤坂今井墳丘墓なども同じである。北部九州で長く

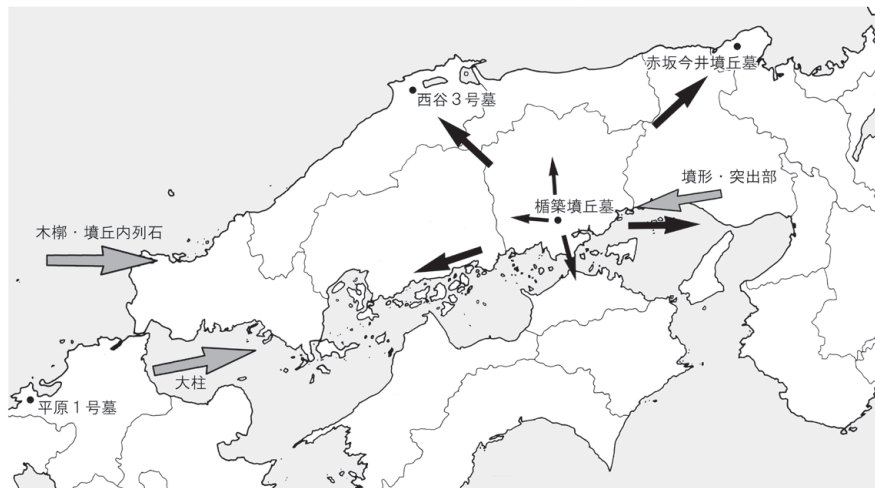


図185 諸要素の導入と祭祀の伝播

重視されてきた鏡ではなく玉を採用した理由について考察が必要となる。なお、平原1号墓も鏡は棺外足側に破碎して置かれており、棺内に副葬されるのは玉類である。

祭祀の伝播 こうして形成された葬送の思想、これは一種の宗教といえるものと考えている。物的な構成要素は、大きく立体的な墳丘、木柱、防湿機能をもつ埋葬施設、特殊器台、弧帯文などであるが、そうした要素が広域に波及することを前節までに整理してきた。これらの要素は、単体で役割を果たすものではなく、祭祀のなかではじめて機能するものであることから、楯築の祭祀なり思想が伝わったと理解すべきである。波及の形は大きくは2つある。1つは首長間のネットワークを通じて伝わったとみられるものであり、北近畿の赤坂今井墳丘墓への木柱の伝播がその代表となり、西条52号墓の墳形、列石についての評価が妥当とすれば、それらも含まれる。もう1つは地域内への面的な波及である。当然のことながら楯築墳丘墓築造の母体となった備中南部地域では木槨や立石を伴う墳丘墓が出現し、備中北部をはじめ備前でも木柱が採用される。特殊器台は楯築成立以前に一定の広がりをもつが、楯築墳丘墓築造を契機に備前へ広がる可能性がある。

興味深いのは出雲の様相である。西谷3号墓には特殊器台・特殊壺が持ち込まれていることが明らかになっているが、特殊器台等の搬入はこの墳墓に限った葬儀への参会といった個別の事柄ではなく、後期後葉の出雲地域全体の様相である。後期後葉の出雲では、四隅突出形というそれまでの墳形は維持しながら、それまで集落域と同一の面に築かれていた墳墓を丘陵上に築くようになり、飛躍的に大形かつ立体的な墳丘が出現する（宇垣2016）。木柱なり木槨といった個別の要素が部分的に伝播したのではなく、吉備の墳墓の要素が総体として伝わっている。出雲の特殊器台資料のなかで西谷3号墓が最も早く位置付けられるのではないことに留意すれば、まず特殊器台祭祀が波及したのちにいわゆる王墓が形成されるわけであり、地域全体への祭祀の波及に加えて、首長間のネットワークを介しての伝播があったと考えられる。

吉備で後期後葉に生み出された祭祀は葬送儀礼を中心とするが、特殊器台の使い方、あるいは弧帯文の使用、それが墳墓と集落の双方にまたがることからわかるように、葬送儀礼に特化したものではなく農耕儀礼を含むものである。葬送以外の吉備の祭祀の構成要素が、瀬戸内海を経由して東西の広範な地域に波及する状況が見られる。たとえば愛媛県新谷古新谷遺跡からは弧帯文を詳細に描いた壺が出土しており、佐賀県吉野ヶ里遺跡では特殊壺を模倣した土器が出土している。また、奈良県唐古・鍵遺跡などで弧帯文を刻む土器が多数出土しているが、この場合は一方的な影響ではなく情報が行き

来している可能性がある。

前方後円墳成立の基盤 楯築の築造に際して形成された墳墓祭祀を中核とする吉備の祭祀は、吉備の縁辺部のみならず、中四国を中心に西日本各地に波及する。後期後半の西日本各地域のシンボルとして突線鈕式銅鐸や広形銅矛などが取り上げられる（松木1998）。これは各地域での農耕祭祀がそれぞれの形をとることを示すが、吉備で生成された祭祀はそうした地域性をこえた共通性をもたらすことになる。死した首長のためにそれまでになかった巨大な墳丘を人々が仰ぎ見る箇所に築き、神を招いて祀るという葬送の考え方が、最高首長間のネットワークを通じ、また、地域間の交流のなかで伝播し共有される。後期後葉における大形墳丘墓の築造は、各地で首長権が伸張し傑出した首長が誕生して王墓が叢生するのではなく、それを行うことによってそれぞれの地域社会に益をもたらすと観念された思想、宗教が波及したことを示すと考えるべきである。北部九州は思想の淵源の地としてこれに連なるが、いわばバージョンアップした祭祀の里帰りがあったことを前記の吉野ヶ里遺跡例や福岡県雀居遺跡木製短甲の弧帯文が示している。

葬送の思想が広範囲で共有されたからこそ、墓の形や棺の形式、副葬品などの斉一も可能となる。短期間のうちに西日本各地に前期古墳の築造がなされた理由はここにある。

後期後葉の吉備地域の墳丘墓は、一定の約束事はあるとはいえ墳形や外表施設の自由度が高く、斉一性のなかでの差異によって首長間関係を表示する前方後円墳のあり方との差は大きい。また、墳丘の規模をはじめとして、正円形の墳丘を形成する土木技術や巨大な墓を代々築く思想など多くの点で墳丘墓と前方後円墳の差は明らかである。しかし、墓の威容を見せるという楯築墳丘墓の築造の考え方は、続く前方後円墳のそれと同じである。圧倒的な大きさを築造工程を含めて示すことは既に政治性の発露といえるし、木槨の規模に一定の格差を見ることもできる。前方後円墳が墳丘の規模と形で首長間関係を表示し、王権の在り処を示すものであるとすれば、そうした思想の原形は楯築墳丘墓ですべて用意されたということができ、それには突出部など個別の要素とともに祭祀そのものが含まれる。楯築墳丘墓は後に展開する古墳の起点となる存在であり、前方後円墳の祖型となる王墓である。楯築墳丘墓の築造は、長い墳墓の歴史のなかで大きな画期となる。

註 文献一覧 図出典

註

- 1) 丘陵について細かく記述した永山1921による。王墓山丘陵と呼ばれることが多いが、同文献や図6 国土基本図などから、王墓山は丘陵中央の山の名であり丘陵全体の名称ではないことがわかる。
- 2) 『吉備国史』では命が矢を射た際の足形とする。幕末の書籍では「足形」と、遺跡外に所在する大石の「手形」を混同しているようである。
- 3) 立石に朱が塗られたと記したのは誤りであり、本報告書の記載で訂正する。
- 4) 図6では46.7mと記されるが、現在は46.6mとされている。
- 5) 地山の礫は花崗閃緑岩と判断したが、特に必要がない場合は花崗岩類と記す。
- 6) 高杯Bとの区別のため、この時期の一般的な形態の高杯を高杯Aとするが、特に必要がない場合は高杯と記す。
- 7) 玉類の計測は最小読取値0.05mmのノギス、最小読取値0.01gの秤を用いて行った。
- 8) 同種石材の計測で得られた比重は2.69である。平面もさることながら上面形状の変化が大きいため、平均厚さの見積りで重量は変わってくる。ここでは厚さ29cmで計算し、399.88kgの値が得られた。
- 9) 遺構の重複関係は、木柱(柱穴)→木棺(土壙墓76)→土器棺墓37の順である。柱穴を挟むように木棺2基が設けられ、木棺の1つ(土壙墓76)は木柱掘方の端を掘削するものの損壊しておらず、柱が機能している時点で掘削されたと考える。この木棺には後期後葉の高杯が伴う。墓壙底を掘り込んで小口板を固定する古い型式の木棺であるが、後期後葉まで見られることがみそのお遺跡の調査成果で明らかになっている。重複関係のうえで最も新しくなる土器棺墓37が後期中葉とされるが、棺蓋に用いられた鉢は一般的な形態とやや異なり年代を確定しにくい。棺身に用いられた壺は底面が上げ底で底が厚く胴部が丸くふくらむなど後期中葉とは考えにくい特徴をもっており、後期後葉と考える。

木柱の年代、ひいては墳丘が設けられ列石が配された年代は後期後葉と考える。宇垣2009では報告書にもとづいて後期前半とし、それによる評価を考えたが、修正する。
- 10) 深さ1.9mとの記載もある(京都府埋蔵文化財調査研究センター2000)。
- 11) 花崗閃緑岩等の比重は2.65を用いた。各法量の平均値を乗じたものと、法量で計算したうえで0.7等と不定形の度合いから見込んだ数値を乗じたものとの2つの方法で重量を算出し、小さい方の値を示した。やや控えめな数値となった可能性がある。
- 12) 岡山大学理学部 鈴木茂之氏から教示を得た。
- 13) 考古学研究会岡山例会1980年1月報告で概要を示した。
- 14) 立坂型の新しい段階の資料では間帯が剥離しハケメやナデで調整された筒部が現れる例が見られる。筒部を形成した後に間帯を形成しており、間帯形成手法の差が立坂型を新古に区分する指標の1つとなる。
- 15) 狭い意味での弧帯文を指す。複合斜線文なども帯の組み合わせを意匠としており弧帯文に含まれる文様である。
- 16) 弥生時代の資料についてである。
- 17) ここでは原単位文に区分されるものも弧帯文に含めている。また、古墳時代以降の木製品・貝製品は論に関わらないため扱っていない。
- 18) 小論での土器は集落出土の土器を指しており、特殊器台は含めていない。特殊器台の弧帯文でも側線や中心線は表現されないのが基本であるが、総社市立坂墳丘墓出土資料に帯の中央で沈線間隔を大きく広げるものがあり、これは中心線の表示とみてよい。
- 19) 津寺(加茂小)遺跡例は後期中葉～古墳時代前期の溝からの出土であり、年代の限定はむずかしいようである。
- 20) 本報告書は、数多くの仲間たちとともに取り組み、明らかにすることができた調査の成果を記載し、公開するために作成した。発掘調査から長い歳月を経ての刊行となったことに思いはあるが、諸事情と言う他ない。多少とも考古学に関わる者として、この重要な遺跡に取り組み考えることができたのは幸せなことであ

ったが、時間を作って少しずつであったため、作業は長期間にわたることになった。

ここに示した資料が、今後の研究の一助になれば幸いである。

本報告書作成に際して、新納泉さん、清家章さん、松本直子さんから多大な支援、協力をいただいた。心からお礼を申し上げたい。

参考文献

- 秋山浩三2007「弥生時代の被熱変形土器類と試考実験」『考古学論究』小笠原好彦先生退任記念論集刊行会編 真陽社（『弥生時代のモノとムラ』新泉社 2017年 所収）
- 有馬伸2003「3世紀以前の木槨・石槨」『古代日韓交流の考古学的研究－葬制の比較研究－』平成11年度～平成13年度科学研究費補助金（基板研究（B）（1））研究成果報告書
- 石井了節1757『備中集成志』（活字版：1943 吉備文化研究会 吉田書店、269頁）
- 石崎善久「丹後地方弥生墳墓における祭祀行為について－墳墓祭祀からみた赤坂今井墳丘墓－」『京都府埋蔵文化財情報』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター、1-12頁
- 植田文雄2005「立柱祭祀の史的研究－立柱遺構と神樹信仰の淵源をさぐる－」『日本考古学』第19号、95-113頁
- 宇垣武治1932「楯築山古墳」『吉備めぐり』細謹舎書店、41-42頁
- 宇垣匡雅1981「特殊器台形土器・特殊壺形土器に関する型式学的研究」『考古学研究』第27巻第4号、55-72頁
- 宇垣匡雅1997a「岡山市甫崎・黒住丘陵の遺跡分布調査 黒住山遺跡と雲山鳥打弥生墳丘墓群の遺物について」『古代吉備』第19集、87-97頁
- 宇垣匡雅1997b「弥生土器の焼成坑－百間川原尾島遺跡検出例について－」『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会編 真陽社、331-340頁
- 宇垣匡雅1999「吉備弥生社会の諸問題」『論争吉備』考古学研究会岡山例会シンポジウム記録1、81-102頁
- 宇垣匡雅2009「墓と階層 中国・四国」『弥生社会のハードウェア』弥生時代の考古学6 同成社、141-154頁
- 宇垣匡雅2013「吉備南部の弥生墳丘墓の斜面施設」『古代吉備』第25集、22-33頁
- 宇垣匡雅2016「特殊器台祭祀の性格とその波及」『古代吉備』第27集、36-57頁
- 宇垣匡雅2018「弧帯文の特性」『古代吉備』第29集、12-31頁
- 宇垣匡雅2019「器台に転用された特殊壺」『岡山県立博物館研究報告』第39号、59-61頁
- 宇垣匡雅2020「楯築墳丘墓使用石材の採取と搬入」『遺跡学研究的地平－吉留秀敏氏追悼論文集－』同刊行会、453-460頁
- 宇佐晋一・斎藤和夫1976「纏向石塚古墳周濠から出土した弧文円板の文様について」『纏向』、519-544頁
- 大賀克彦2010「ルリを纏った貴人－連鎖なき遠距離交易と「首長」の誕生－」『小羽山墳墓群の研究－研究編－』福井市立郷土歴史博物館、231-254頁
- 岡林孝作2018『古墳時代棺槨の構造と系譜』同成社
- 岡山大学考古学研究部編1984『倉敷市矢部遺跡分布調査報告書』
- 奥田 尚1996「土製品の砂礫」『中山大塚古墳』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第82冊、149-156頁
- 加原耕作1987「中国兵乱記」『新釈備中兵乱記』山陽新聞社
- 亀山行雄1997「遺跡をとりまく環境」『津寺遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告116 岡山県教育委員会
- 岸本一宏2009「周溝墓を中心とした播磨地域の様相」『弥生墓からみた播磨』第9回播磨考古学研究会実行委員会、1-78頁
- 岸本道昭2011「弥生墳丘墓と前方後円墳」『古墳時代の考古学』3 墳墓構造と葬送祭祀 同成社、7-17頁
- 吉備特殊器台復刻プロジェクト実行委員会編2014『平成24年度平成25年度吉備特殊器台復刻プロジェクト報告書』
- 河本 清1992「集成5 絵画土器、人形・鳥形スタンプ文土器」『吉備の考古学的研究』上 山陽新聞社、553-564頁

- 小早川秀雄 幕末『吉備国史』(1897刊行)(『新編吉備叢書1』 歴史図書社 1976年)
- 近藤義郎1983『前方後円墳の時代』 岩波書店
- 近藤義郎1984「巻頭図版 吉備の弥生墳丘墓」『えとのす』第25号 新日本教育図書株式会社
- 近藤義郎1995「弥生墳丘墓における埋葬祭祀」『前方後円墳と弥生墳丘墓』 青木書店、179-205頁
- 境 靖紀2001「弥生時代大柱祭祀の一例－春日市立石遺跡の検討－」『古文化談叢』第47集、29-42頁
- 櫻井久之2013「直弧文と文様のモチーフ」『人々の暮らしと社会』古墳時代の考古学6 同成社、197-211頁
- 七田忠昭2012「邪馬台国－九州説の一例 佐賀県吉野ヶ里遺跡の発掘成果から」『邪馬台国をめぐる国々』季刊考古学別冊18 雄山閣、127-140頁
- 白石 純・森 宏之1999『陣山遺跡 本郷遺跡』高梁市埋蔵文化財発掘調査報告第2集
- 白石 純2004「高越遺跡出土土器の胎土分析－土壇60・61出土土器について－」『高越遺跡』井原市埋蔵文化財発掘調査報告2、118-121頁
- 白石 純2006「西谷2号墓・4号墓出土土器の胎土分析」『西谷墳墓群－平成14年～16年度発掘調査報告書－』出雲市教育委員会、161-170頁
- 白石 純2008「森山遺跡出土土器の胎土分析」『森山遺跡』浅口市埋蔵文化財発掘調査報告1、86-89頁
- 清水芳裕1992「楯築弥生墳丘墓出土の特殊壺・特殊器台等の胎土分析」『楯築弥生墳丘墓の研究』楯築刊行会、171-177頁・図版69
- 高橋 護1986「上東式土器の細分編年基準」『岡山県立博物館研究報告』第7号 岡山県立博物館
- 高橋 護1992「弥生後期の地域性」『吉備の考古学的研究』(上) 山陽新聞社、183-205頁
- 高久健二2011「楽浪・帯方郡との関係」『弥生時代の考古学』4 古墳時代への胎動 同成社、39-53頁
- 田中英夫・奥田尚1985「奈良県中山大塚古墳の特殊器台形土器」『古代学研究』109、51-53頁
- 都窪郡教育会(編)1923『都窪郡誌』、674-675頁
- 椿 真治1993「墳墓群の編年案」『みそのお遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告87、311-340頁
- 中園 聡・平川ひろみ・太郎良真妃・若松花帆・春成秀爾2017「宮山墳丘墓特殊器台の産地分析」『岡山県立博物館研究報告』第37号、29-34頁
- 中村大介2017「楯築墳丘墓出土玉類の産地同定」『埼玉大学紀要(教養学部)』第53巻第1号、113-132頁
- 中山 薫2013『温羅伝説－史料を読み解く－』岡山文庫284 日本文教出版株式会社
- 『鬼城縁起』(1936『吉備津彦神社史料 文書篇』 国幣小社吉備津彦神社社務所)
- 『備中吉備津宮縁起』(1986『神道体系神社編38 美作・備前・備中・備後国』 神道体系編纂会)は、本書による。
- 永山卯三郎1921「片岡山古墳址」『岡山県史蹟名勝天然記念物調査報告』第1冊 岡山県史蹟名勝天然記念物調査会、8-12頁
- 禰宜田佳男2019『農耕文化の形成と近畿弥生社会』 同成社
- 東 徹志「南九州の“弥生の鳥”が語るもの－「スロープ付土坑から出土した鳥形石製品について－」『南の縄文・地域文化論考』新東晃一代表還暦記念論文集、105-117頁
- 平野泰司・岸本道昭2000「鯉喰神社弥生墳丘墓の弧帯石と特殊器台・壺」『古代吉備』第22集、69-84頁
- 広瀬和雄2003『前方後円墳国家』角川選書355 角川書店
- 逸見吉之助1992「楯築弥生墳丘墓出土の弧帯石のX線回折」『楯築弥生墳丘墓の研究』近藤義郎編 楯築刊行会、181頁
- 藤井 駿・水野恭一郎1955『岡山県古文書集』第2輯 山陽図書出版株式会社、35-37頁(1981年復刻)
- 藤田憲司・間壁葎子1974「楯築神社の立石と神体の石」『倉敷考古館研究集報』第10号、216-219頁
- 不明 1857頃『備中誌』
- 北條芳隆2017『古墳の方位と太陽』ものが語る歴史36 同成社
- 間壁忠彦・間壁葎子1970(初版～1977年第8版)「楯築神社」『岡山の遺跡めぐり』岡山文庫31 日本文教出版

株式会社、112-113頁

松木武彦1998「[戦い]から[戦争]へ」『古代国家はこうして生まれた』角川書店、163-216頁

村上恭通2000「鉄器生産・流通と社会変革」『古墳時代像を見なおす』青木書店、137-200頁

光野千春2009『岡山県内地質図 説明書』西部技術コンサルタント株式会社

御嶽貞義2010「北陸地方の弥生墳丘墓における木槨について－小羽山26号墓第1埋葬の構造から－」『小羽山墳墓群の研究－研究編－』福井市立郷土歴史博物館、33-53頁

光本 順2016「鹿田遺跡出土線刻人面土器の歴史的位置」『吉備の弥生時代』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター編 吉備人出版、76-84頁

柳田康雄2000「平原1号墓」『平原遺跡』前原市文化財調査報告書第70集 前原市教育委員会

吉田謙三1951「矢部楯築神社」『都窪郡庄村史蹟解説』中備史談会、26-27頁

米田克彦2009「勾玉祭祀の波及－弥生時代の中国地方を中心に－」『考古学と地域文化』一山典還暦記念論集同刊行会、103-122頁

米田克彦2013「環瀬戸内海の勾玉祭祀」『吉備弥生社会の新実像・吉備弥生時代のマツリ・弥生墓が語る吉備』考古学研究会シンポジウム記録9 考古学研究会、129-155頁

渡辺貞幸2018『出雲王と四隅突出型墳丘墓 西谷墳墓群』シリーズ「遺跡を学ぶ」123 新泉社

遺跡文献

【岡山県】

一倉遺跡：高田明人1987「一倉遺跡」『総社市史』考古資料編 総社市、88-99頁

伊福定国前遺跡：岡山県古代吉備文化財センター編1998a『伊福定国前遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告125

鋳物師谷2号墓：小野一臣・間壁忠彦・間壁菫子1977「岡山県清音村鋳物師谷2号墳出土の土器」『倉敷考古館研究集報』第13号

伊与部山墳墓群：近藤義郎1996a『伊与部山墳墓群』総社市文化振興財団

金敷寺裏山墳丘墓：間壁忠彦・間壁菫子1968「岡山県井原市金敷寺裏山古墳」『倉敷考古館研究集報』第5号

加茂A遺跡・加茂B遺跡：岡山県教育委員会編1995「加茂A遺跡」・「足守川加茂B遺跡」『足守川河川改修工事に伴う発掘調査』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告94

加茂政所遺跡：岡山県古代吉備文化財センター編1999『加茂政所遺跡 高松原古才遺跡 立田遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告138

黒岩遺跡：津山市教育委員会編2015『畔田遺跡 追坊師A遺跡 黒岩遺跡 追坊師B遺跡 城山遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第84集

黒住山遺跡：宇垣1997a（旧岡山大学考古学研究部1997「岡山市甫崎・黒住山丘陵の遺跡分布調査－雲山鳥打遺跡・49基の古墳群などの踏査－」『古代吉備』第19集 80-117頁）

雲山鳥打墳丘墓群：同上

黒宮大塚墳丘墓：間壁忠彦・間壁菫子・藤田憲司1977「岡山県真備町黒宮大塚古墳」『倉敷考古館研究集報』第13号、1-55頁

鯉喰神社墳丘墓：近藤義郎1980「矢喰・鯉喰・楯築」『鬼ノ城』鬼ノ城学術調査委員会、101-106頁
平野・岸本2000

郷境墳墓群ほか：岡山県古代吉備文化財センター編1994『郷境墳墓群 前池内遺跡 後池内遺跡 黒住雲山遺跡甫崎天神山遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告89

鹿田遺跡：岡山大学埋蔵文化財調査研究センター編1988『鹿田遺跡1』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊

清水谷遺跡：矢掛町教育委員会編2001『清水谷遺跡<一本木地区>』矢掛町埋蔵文化財発掘調査報告1

上東遺跡：岡山県教育委員会編1974「上東遺跡の調査」『山陽新幹線建設に伴う調査II』岡山県埋蔵文化財発

掘調査報告2
岡山県教育委員会編1977『川入・上東』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16
岡山県古代吉備文化財センター編2001a『下庄遺跡 上東遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告157
岡山県古代吉備文化財センター編2001b『上東遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告158
上東中嶋遺跡：岡山県古代吉備文化財センター編2010『上東中嶋遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告226
白江遺跡：間壁忠彦1966「岡山県矢掛町白江遺跡」『倉敷考古館研究報告』第1号、1-19頁
高越遺跡：井原市教育委員会編2004『高越遺跡』井原市埋蔵文化財発掘調査報告2
高塚遺跡：岡山県古代吉備文化財センター編2000『高塚遺跡 三手遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告150
立坂墳丘墓：近藤義郎1996b『新本立坂－立坂型特殊器台名粗遺跡の発掘－』総社市文化振興財団
楯築墳丘墓：近藤義郎1977「古墳以前の墳丘墓－楯築遺跡をめぐって－」『岡山大学法文学部学術紀要』第37号1-15頁・図版
近藤義郎著・編1992『楯築弥生墳丘墓の研究』楯築刊行会
近藤義郎編1987「倉敷市楯築弥生墳丘墓第V次（昭和60年度）・第VI次（昭和61年度）発掘調査概要報告」倉敷市教育委員会
津島遺跡：岡山県古代吉備文化財センター編2003a『津島遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告173
辻山田遺跡：間壁忠彦・間壁菫子1974「辻山田遺跡」『倉敷考古館研究集報』第10号
津寺遺跡：岡山県古代吉備文化財センター編1994『津寺遺跡1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告90、1995『同2』同98、1996『同3』同104、1997『同4』同116、1998b『同5』同127
岡山市教育委員会文化財課編2009『津寺（加茂小・体育館）遺跡』
都月坂2号墓：近藤義郎1986「都月坂2号弥生墳丘墓」『岡山県史』第18巻考古資料
近藤義郎・大橋雅也・扇崎由1992「集成1 弥生墳丘墓」『吉備の考古学的研究』上山陽新聞社
中池ノ内遺跡：岡山県古代吉備文化財センター編1996『中池ノ内遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告108
中山遺跡：落合木材流通センター文化財調査委員会編1978『中山遺跡』落合町教育委員会
中山茶臼山古墳：宮内庁書陵部調査室2009「大吉備津彦命墓の墳丘外形調査報告」『書陵部紀要』第61号 宮内庁書陵部、21-31頁
七つ坵1号墳：近藤義郎・高井健司編1987『七つ坵古墳群』七つ坵古墳群発掘調査団
西江遺跡：岡山県教育委員会編1977『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査10』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告20
百間川兼基遺跡：岡山県古代吉備文化財センター編1996『百間川兼基遺跡2 百間川今谷遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告114
百間川原尾島遺跡：岡山県教育委員会編1980『旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査I』百間川原尾島遺跡1 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39
百間川米田遺跡：岡山県古代吉備文化財センター編2002『百間川米田遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告164
甫崎天神山遺跡：岡山県古代吉備文化財センター編1994『郷境墳墓群 前池内遺跡 後池内遺跡 黒住雲山遺跡 甫崎天神山遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告89
前内池遺跡：岡山県古代吉備文化財センター編2003b『前内池遺跡 前内池古墳群 砂古遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告174
前山遺跡：岡山県古代吉備文化財センター編1997『前山遺跡 鎌戸原遺跡』国道429号線改良に伴う発掘調査I 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告115
みそのお遺跡（墳墓群）：岡山県古代吉備文化財センター編1993『みそのお遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告87

三手遺跡：岡山県古代吉備文化財センター編1994『山陽自動車道建設に伴う発掘調査 9 三手遺跡 津寺遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告90

女男岩墳丘墓：間壁忠彦・間壁葎子1974「女男岩遺跡」『倉敷考古館研究集報』第10号

森山遺跡：浅口市教育委員会編2008『森山遺跡』浅口市埋蔵文化財発掘調査報告 1

矢藤治山古墳：近藤義郎編1995『矢藤治山弥生墳丘墓』矢藤治山弥生墳丘墓発掘調査団

矢部古墳群ほか：岡山県古代吉備文化財センター編1993『矢部古墳群A 矢部古墳群B 矢部奥田遺跡 矢部堀越遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告82

矢部南向遺跡：岡山県教育委員会編1995「矢部南向遺跡」『足守川河川改修工事に伴う発掘調査』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告94

和田遺跡：岡山県教育委員会編1981「和田遺跡の調査」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査 2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告42

【広島県】

佐田谷 1 号墓：財団法人広島県埋蔵文化財調査センター編1987『佐田谷墳墓群』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第63集

梨ヶ谷遺跡：財団法人広島市歴史科学教育事業団編1998『梨ヶ谷遺跡発掘調査報告書』（財）広島市歴史科学教育事業団調査報告書第22集

【鳥取県】

梅田萱峯遺跡：鳥取県埋蔵文化財センター編2009『梅田萱峯遺跡V』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書 XXIV

布勢鶴指奥 1 号墓：財団法人鳥取県教育文化財団編1992『東桂見遺跡・布勢鶴指奥墳墓群』（財）鳥取県教育文化財団調査報告書29

【島根県】

西谷 3 号墓：渡辺貞幸・坂本豊治編2015『西谷 3 号墓発掘調査報告書』島根大学考古学研究室調査報告第14集・出雲弥生の森博物館研究紀要第 5 集

【香川県】

奥10号墓・11号墓：古瀬清秀1985「雨滝山遺跡群」『寒川町史』寒川町史編纂委員会編

仙遊遺跡：善通寺市教育委員会編1986『仙遊遺跡発掘調査報告書』旧練兵場遺跡仙遊 I 地区

【愛媛県】

新谷古新谷遺跡：公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター編2018『新谷古新谷遺跡 2 次現地説明会資料』

【兵庫県】

綾部山39号墓：兵庫県御津町教育委員会編2005『綾部山39号墓発掘調査報告書』

有年原・田中遺跡：赤穂市教育委員会編1991『有年原・田中遺跡』

西条52号墓：西条古墳群発掘調査団2009「西条52号墓発掘調査の記録」『弥生墓からみた播磨』第 9 回播磨考古学研究集会実行委員会、139-208頁

養久山 5 号墓：近藤義郎編1985『養久山墳墓群』揖保川町教育委員会

【京都府】

赤坂今井墳丘墓：財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター編2000「赤坂今井墳丘墓・今井城跡・今井古墳」『京都府遺跡調査概報』第92冊

峰山町教育委員会編2004『赤坂今井墳丘墓発掘調査報告書』京都府峰山町文化財調査報告第24集

左坂墳墓群：大宮町教育委員会編2001『左坂古墳（墳墓）群G支群』大宮町文化財調査報告書第20集

紫金山古墳：上原真人ほか2005『紫金山古墳の研究－古墳時代前期における対外交渉の考古学的研究－』平成 14～16年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（2））研究成果報告書 京都大学大学院文学研究科

金谷古墳群：財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター編1995「金谷古墳群（1号墓）」『京都府遺跡調査概

報』第66冊

【奈良県】

桜井茶白山古墳：寺沢薫ほか『東アジアにおける初期宮都および王墓の考古学的研究』平成19年度～平成22年度科学研究費補助金基板研究（A）『東アジアにおける初期宮都および王墓の考古学的研究』研究成果報告書

唐古・鍵遺跡：田原本町教育委員会編2015『唐古・鍵遺跡考古資料目録Ⅰ－土器編1（絵画・記号・文様）－』

下池山古墳：奈良県立橿原考古学研究所編2008『下池山古墳の研究』橿原考古学研究所成果第9冊

中山大塚古墳：奈良県立橿原考古学研究所編1996『中山大塚古墳』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第82冊

ホケノ山古墳：奈良県立橿原考古学研究所編2008『ホケノ山古墳の研究』橿原考古学研究所成果第10冊

纏向石塚墳丘墓：石野博信ほか1976『纏向』奈良県立橿原考古学研究所編 桜井市教育委員会

桜井市教育委員会編2012『奈良県桜井市史跡纏向古墳群纏向石塚古墳発掘調査報告書』桜井市埋蔵文化財発掘調査報告書第38集

寺沢薫2012「纏向石塚古墳の築造時期について」『奈良県桜井市史跡纏向古墳群纏向石塚古墳発掘調査報告書』桜井市埋蔵文化財発掘調査報告書第38集、373-380頁

纏向遺跡東田地区：桜井市教育委員会編2006『東田大塚古墳』奈良盆地東南部における纏向型前方後円墳の調査桜井市内埋蔵文化財1998年度発掘調査報告書

【福岡県】

大石遺跡：春日市教育委員会編2002『立石遺跡』春日市文化財調査報告書第34集

雀居遺跡：福岡市教育委員会編1995『雀居遺跡3』福岡市埋蔵文化財発掘調査報告第407集

須玖岡本遺跡：春日市教育委員会編1995『須玖岡本遺跡』春日市文化財調査報告書第23集

那珂遺跡群：福岡市教育委員会編2011『那珂58 那珂遺跡群第127次調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1121集

比恵遺跡：福岡市教育委員会編1992『比恵遺跡（11）』福岡市埋蔵文化財調査報告書第289集

平原遺跡：前原市教育委員会編2000『平原遺跡』前原市文化財調査報告書第70集

門田遺跡：福岡県教育委員会編1978『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第7集

【佐賀県】

吉野ヶ里遺跡：佐賀県教育委員会編2018『吉野ヶ里遺跡 弥生時代の墳丘墓』佐賀県文化財調査報告書219集

佐賀県教育委員会1997編『吉野ヶ里遺跡 平成2年度～7年度の発掘調査の概要』佐賀県文化財調査報告書132集

図出典

図145 1 岡山県古代吉備文化財センター編1993 2 間壁・間壁1974

図158 倉敷市教育委員会提供

図162 1・2 岡山県古代吉備文化財センター編1993 3 近藤1996 4 赤穂市教育委員会編1991 5 岡山大学考古学研究室

図163 1 岸本2011 2 近藤編1985

図164 1 近藤1996a 2・6・7 岡山県古代吉備文化財センター編1993 4 近藤1996b 5 岡山県古代吉備文化財センター編2003

図165 1・2 近藤1996b 3・4 岡山大学考古学研究室 5・6 渡辺・坂本編2015

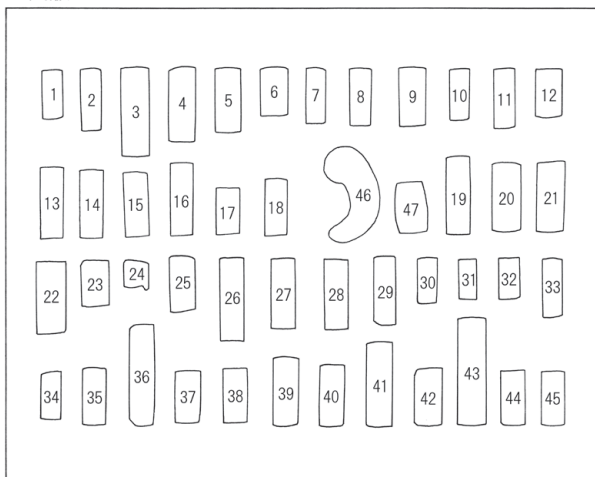
図166 1 間壁・間壁・藤田1977 2 近藤・大橋・扇崎1992

図167 1 前原市教育委員会編2000 2 春日市教育委員会編2002

図168 1 落合町材木流通センター文化財調査委員会編1978 2 岡山県古代吉備文化財センター編2003b 3 岡山県古代吉備文化財センター編1993 4 大宮町教育委員会編2001

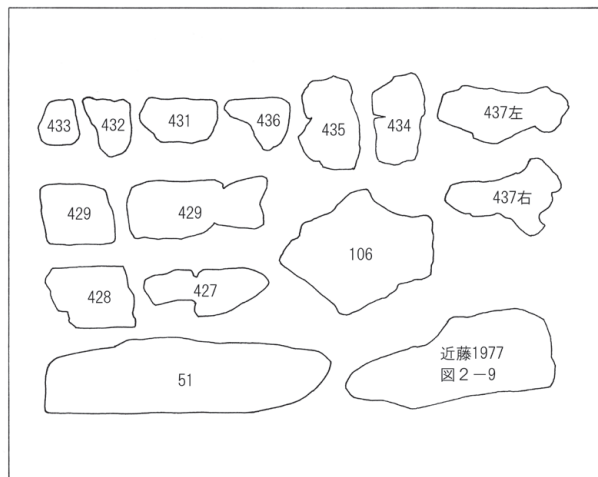
- 図169 5 峰山町教育委員会編2004 6 渡辺・坂本編2015
 図171・174 宇垣撮影
 図178 1 岡山県教育委員会編1974 2 岡山県教育委員会編1977 3・4 岡山県古代吉備文化財センター編
 1998b 5～7 井原市教育委員会編2004 8・9 矢掛町教育委員会編2001
 図180 岡山県古代吉備文化財センター編2002
 図181 間壁・間壁1974
 図182 1 平野・岸本2000 2 桜井市教育委員会編2006 3 岡山県古代吉備文化財センター編2003a 4 石
 野博信ほか1976 5 岡山県古代吉備文化財センター編2001a 6 岡山県教育委員会編1980 7 上原真人ほ
 か2005
 図184 1 岡山県古代吉備文化財センター編1999 2 岡山県古代吉備文化財センター編2001b 3 岡山県古代
 吉備文化財センター編1996 5 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター編1988 6 岡山県古代吉備文化財セ
 ンター編2001a 7 岡山県古代吉備文化財センター編1998a 8 高田1987 9 岡山市教育委員会文化財課編
 2009 10 善通寺市教育委員会編1986 11 河本1992・光本2016
 図4・173・179 カシミール3Dを使用

図版35-1



1～18：玉A群、19～47：玉B群

図版36-3



図版35-2

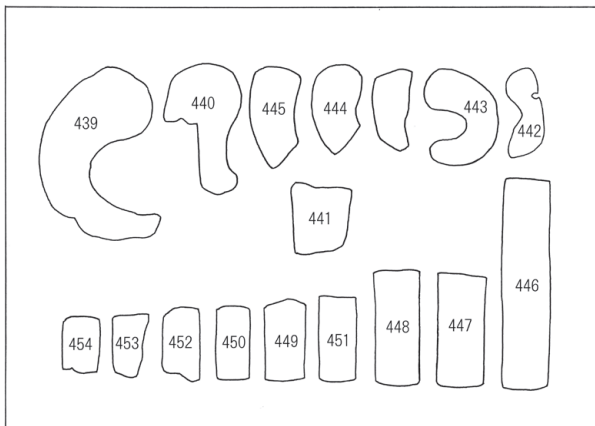


図186 図版掲載遺物番号

図 版

図版 1



楯築墳丘墓全景（東から 1972年10月）

図版2 遠景



1 遺跡遠景（西から）



2 遺跡遠景（北西から）



3 楯築墳丘墓全景（上空から 上が北）



1 墳頂（南西から）
2 墳頂の立石（南から）
3 立石 2（北西から）

図版 4 北斜面



1 第1列石と円礫敷（東から）



2 第1列石と円礫敷（北から）



1 斜面立石 4 (西から)



2 土器・円礫出土状態
Aトレンチ (南から) 1次



3 円礫の堆積状況
Bトレンチ拡張区 (西から)
5次

図版6 北斜面



1 調査区全景（北から） 5次



2 墳丘内列石と円礫敷（北から）



3 墳丘内列石（北から）



4 斜面下方検出の礫（北から）



1 調査区上側（西から）



2 円礫の堆積状況（西から）



3 第1列石根石（西から）



4 第2列石抜取跡（西から）

図版 8 北東突出部



1 突出部南東側面 列石と円礫敷（南東から）



2 突出部南東側面 列石と円礫敷（北東から）



1 突出部南東側面
(南から)



2 長頸壺130出土
状況 (東から)



3 第2列石と円礫の
堆積 (南東から)
2次

図版10 北東突出部・西くびれ部



1 北東突出部
北西列石抜取跡
(南東から)



2 西くびれ部
円礫敷・列石31
(西上方から)



3 西くびれ部
円礫敷・列石31
(西から)



1 排水溝と集石（南上方から）



2 集石と排水溝（北から）

図版12 西くびれ部



1 第2列石抜取跡
1～4 (西から)



2 排水溝 (北から)



3 排水溝 (西上から)



1 南西突出部（上が円丘部側） 6次



2 突出部前面 列石と堀切状大溝（西上から） 5次



1 堀切状大溝（北上方から）



2 堀切状大溝（北西から）



1 堀切状大溝と列石
1区（南から）



2 列石 1区
（上が西）



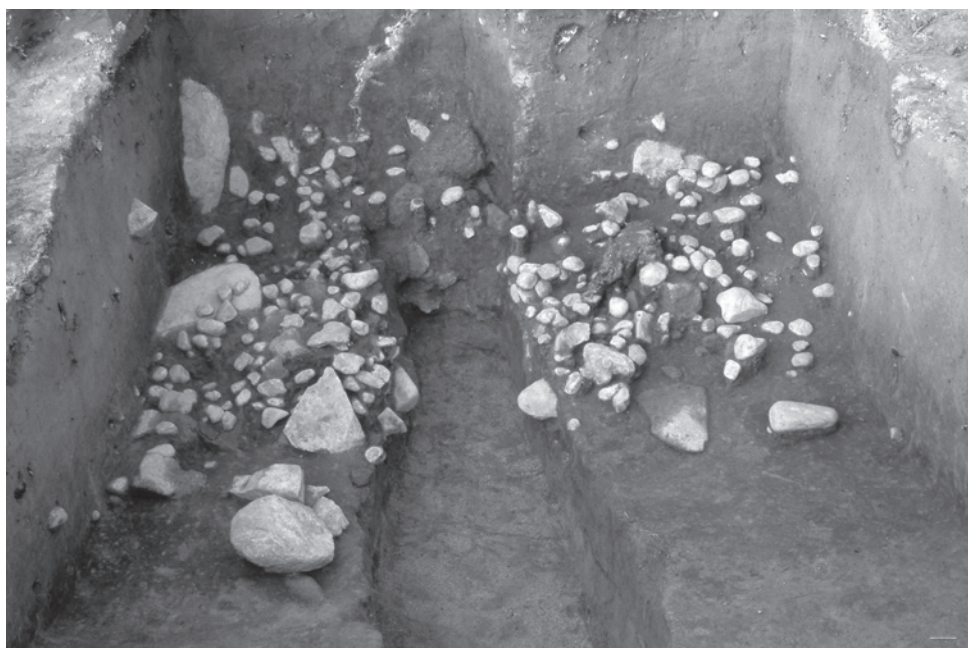
3 列石 1区
（南西から）



1 列石 2区
(南西から)



2 列石前側の堆積
2区 (南西から)



3 列石前側の堆積
2区 (南西から)



1 列石東端(東から)



2 列石東端(南から)



4 列石前の掘込み断面(東から)

3 列石東端(上が北東)



1 崩落石材・円礫の
堆積 1区
(南西から)



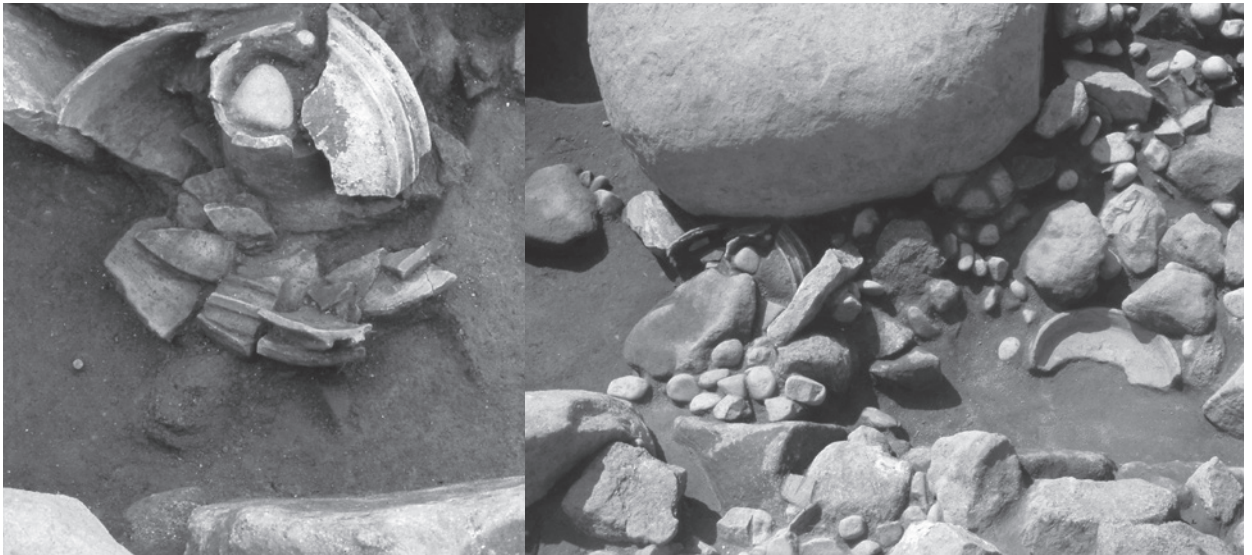
2 崩落石材・円礫の
堆積 1区
(東上から)



3 崩落石材・円礫の
堆積 1区
(南から)



1 土器の出土状況 1区（西から）



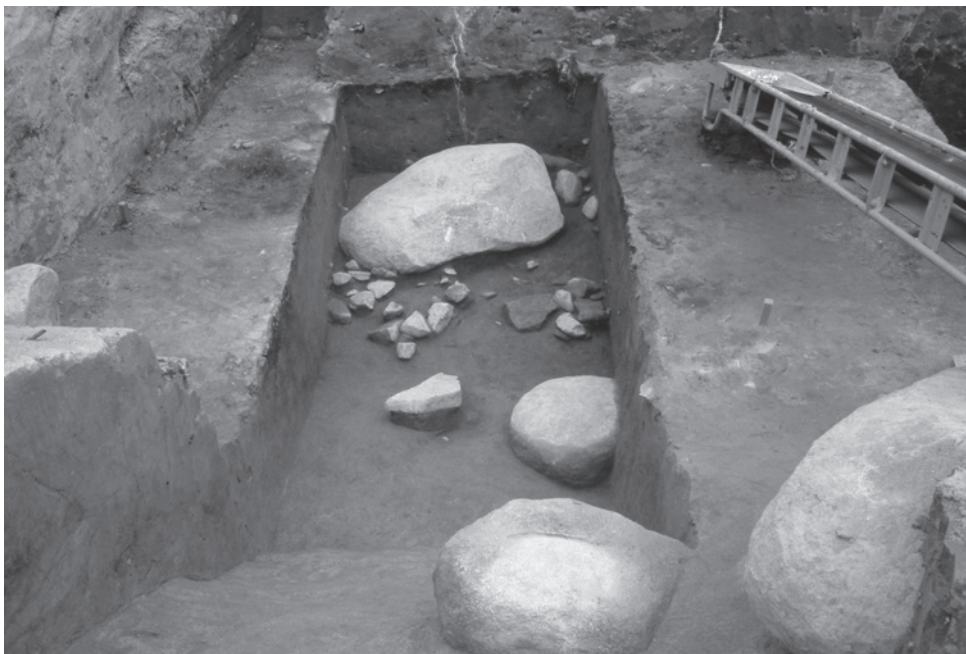
2 特殊壺251出土状況（東上から）



3 土器・円礫出土状況 3区（東から）



1 列石と崩落石材
1区（南西から）



2 大石・石材の崩落
5区（南西から）



3 列石 3区
（南から）



1 墳頂全景（南西から）



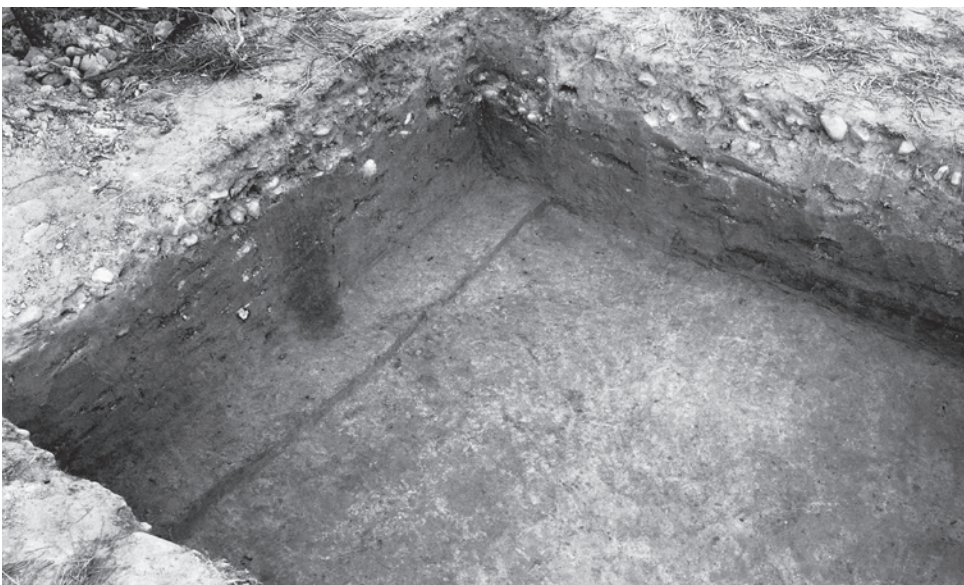
2 円礫堆上面（南西から）



1 立石 2 基部・
掘方 1 (東から)



2 墳頂円礫敷 N11
(北西から)



3 建物 1 平・断面
(西から)



1 円礫堆上面特殊器台溜まり（北東から）

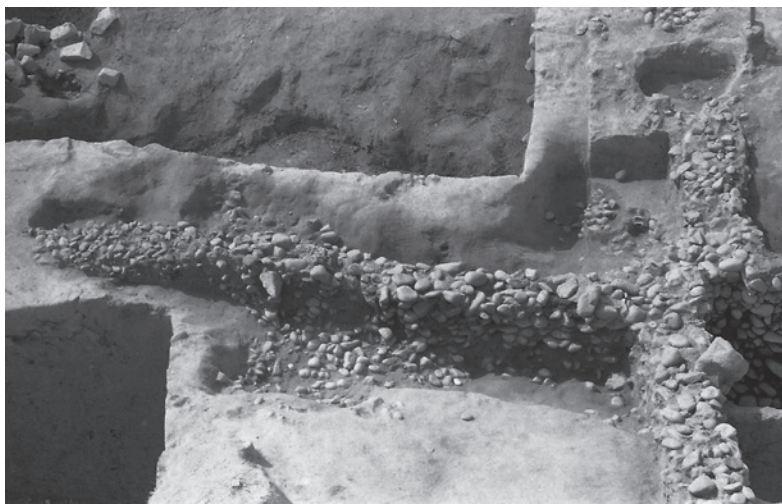


2 円礫堆（北から）



3 円礫堆断面（北から）

図版24 木柱・大柱遺構



1 円礫堆南東部と木柱2
(北東から)



2 木柱2 (南東から)



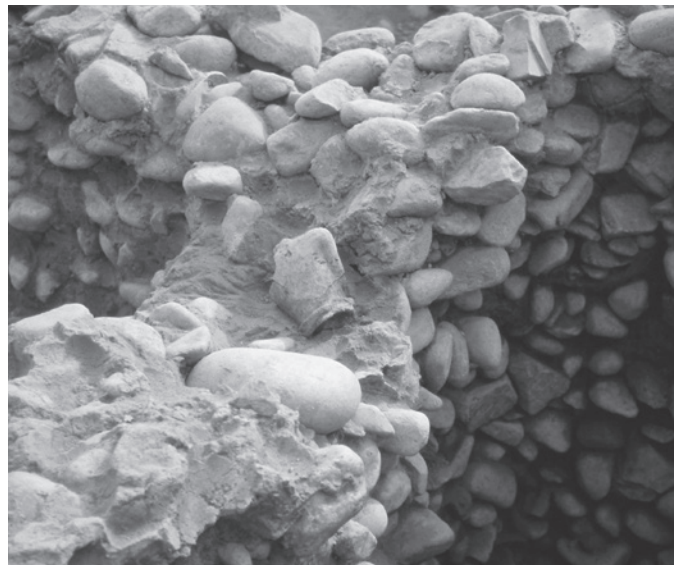
3 木柱2 (上が北西)



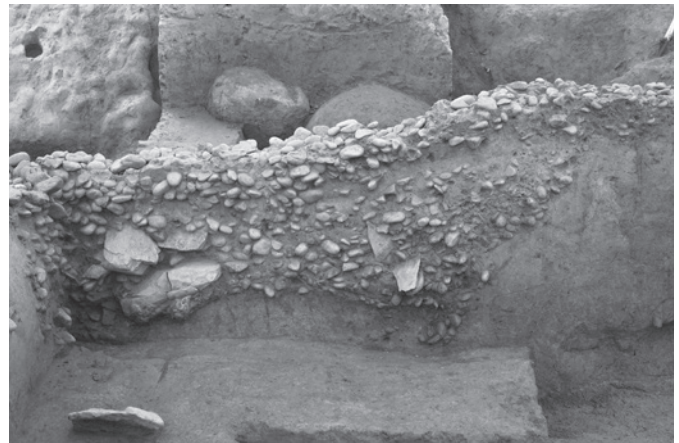
4 大柱遺構 (北東から)



1 木柱3断面(北から)



2 人形土製品430出土状況(北から)



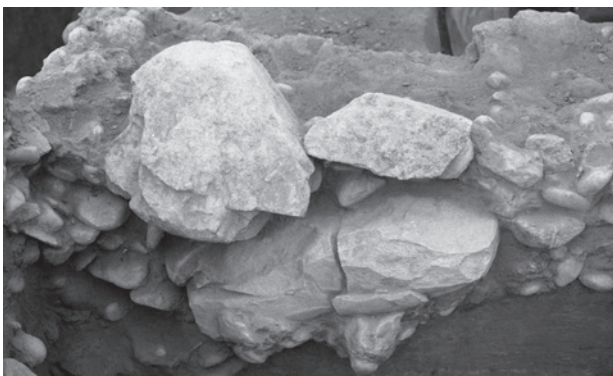
3 円礫堆断面(西から)



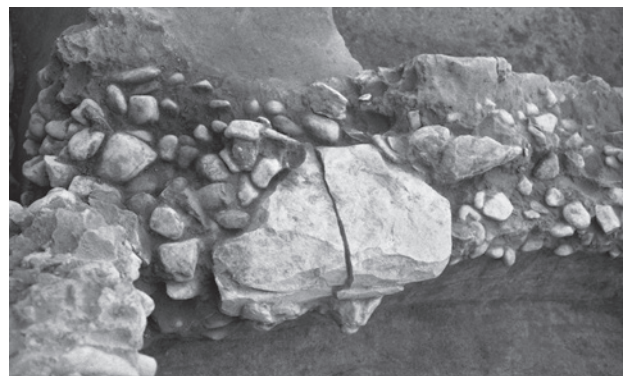
4 弧帯文石検出状況(西から)



5 調査風景



6 弧帯文石上の礫(西から)



7 弧帯文石(西上から)



1 円礫堆・大柱遺構（北から）



2 弧帯文石出土状況（南西から）



1 木槲概形の検出（北から）



2 木槲平面および蓋（西から）



1 中心主体全景（南から）



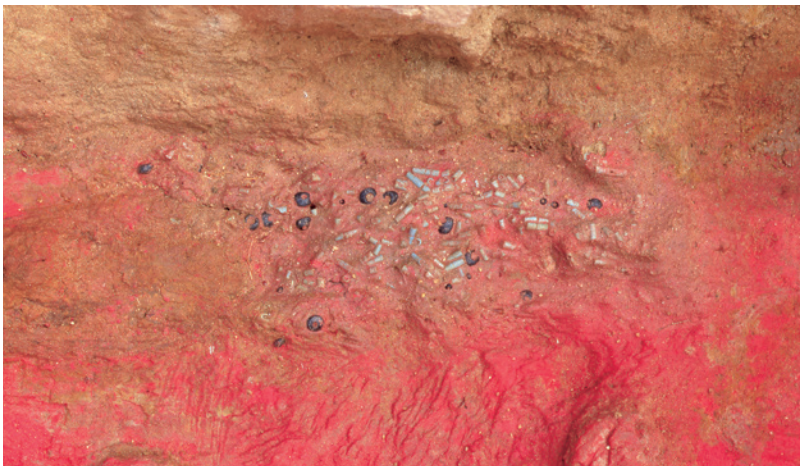
2 木棺・木槨（南東から）



3 木棺・木槨（北西から）



1 棺内副葬品出土状況
(上が南東)



2 棺内副葬品玉C群出土状況
(上が北東)



3 木槨蓋 (上が北東)



4 棺外副葬品出土状況 (上が南東)



1 木槨E断面（南東から）



2 木槨B2断面（東から）



3 木槨・台石1（北西から）



1 木槨B2断面下部・木柱4（南東から）



2 木槨B1断面（北西から）



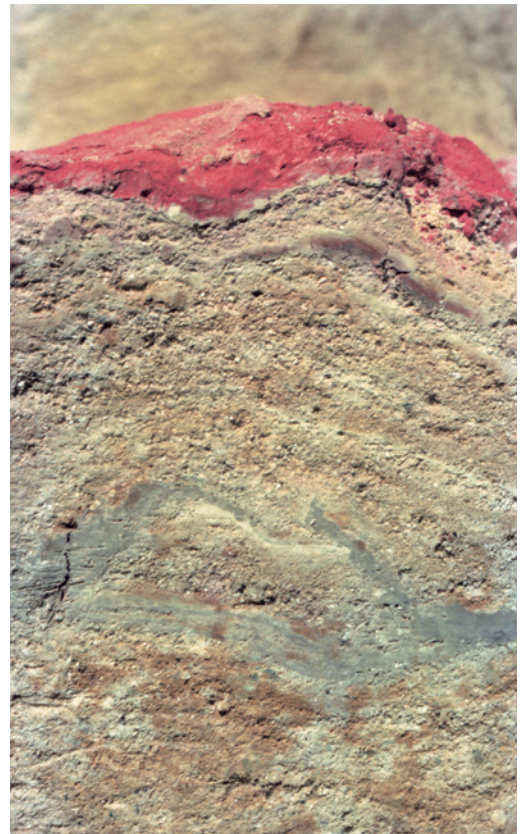
3 木槨A1断面～縦断面(棺と頭側小口の間)(南西から)



4 木槨縦断面（木棺頭部付近 図134）（南西から）



5 木槨縦断面（AB断面交点の頭側）（南西から）



6 棧断面（南西から）

図版32 中心主体



1 排水溝（東から）



2 調査風景（南から）



1 排水溝（北から）



2 主水路（南から）



3 支水路（北から）



4 木槨小口外側（南東上方から）



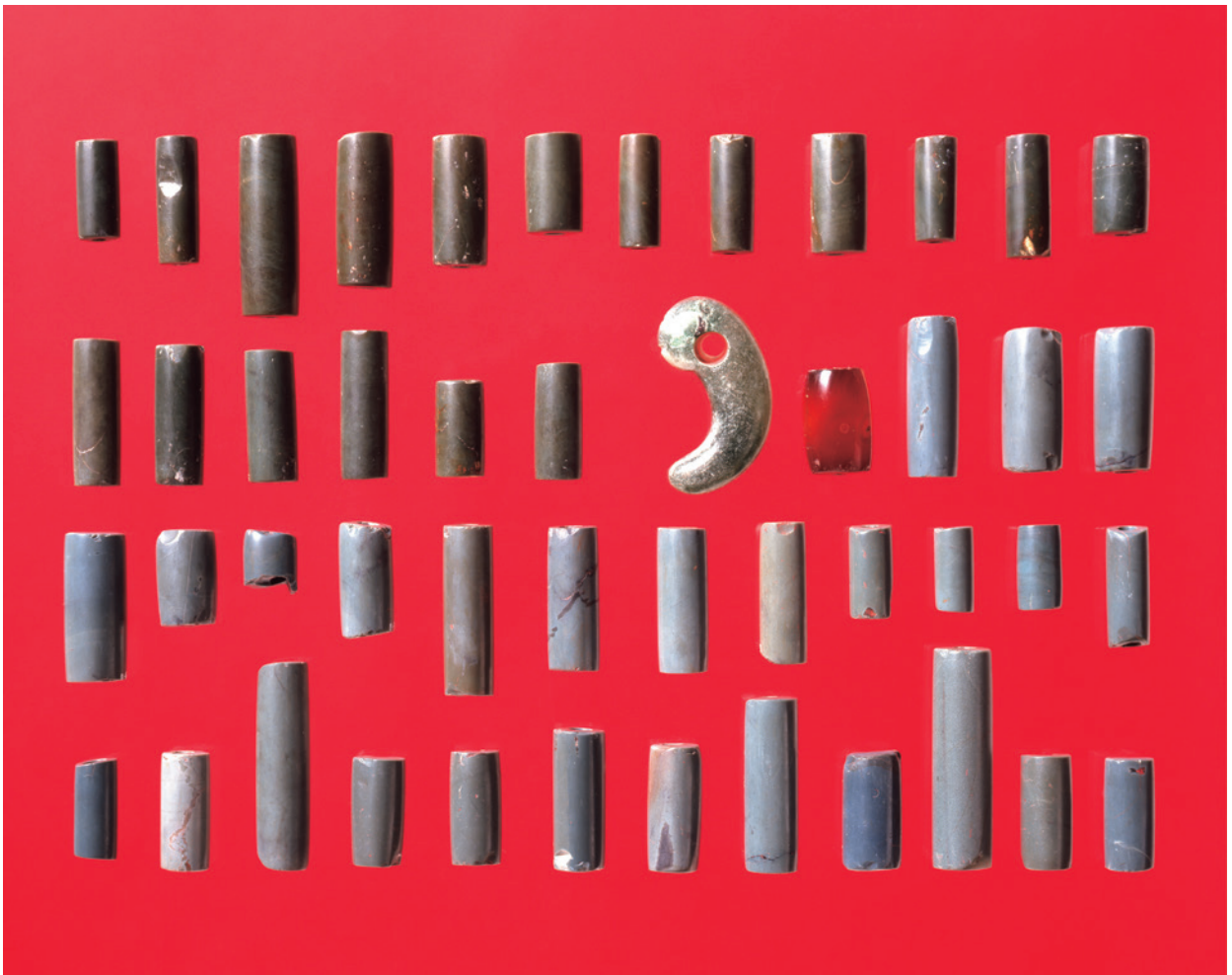
1 第2主体（西から）



2 立石3掘方と旧表土（南から）



3 立石3掘方断面（西から）



1 玉A群・B群



2 土製玉類



1 人形土製品430 前面



2 人形土製品430 背面



3 人形土製品・家形土器ほか



1 鐵劍



2 特殊壺 南西
突出部前面出土



3 特殊壺251・
小形特殊器台252



4 高杯371



5 脚付直口壺112・器台422



1 特殊壺257



2 特殊壺253



3 特殊壺255



4 小形特殊器台256



1 特殊壺251



2 長頸壺130



3 小形特殊器台252



4 特殊器台356



特殊器台355



出土弧帶文石 各面



1 左側面～上面



2 足側～左側面



3 下面



1 上面



2 下面



3 前面



4 背面



5 左側面



6 右側面

图版44 弧带文石・楯筑神社弧带文石



1 出土弧带文石 左側面



3 神社弧带文石 顔(複製品)



2 神社弧带文石 左側面



4 神社弧带文石 下面(複製品) 加工痕と自然面



5 神社弧带文石 下面(複製品)

報告書抄録

ふりがな	たてつきふんきゅうぼ													
書名	楯築墳丘墓													
副書名														
巻次														
シリーズ名														
シリーズ番号														
編著者名	宇垣匡雅													
編集機関														
所在地														
発行機関	岡山大学文明動態学研究所・岡山大学考古学研究室													
所在地	〒700-8530 岡山県岡山市北区津島中 3-1-1													
発行年月日	2021年12月1日													
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因						
		市町村	遺跡番号											
たてつきふんきゅうぼ 楯築墳丘墓	岡山県倉敷市 矢部字向山 826 ほか	33202	8-412	34° 39' 44.02"	133° 49' 31.2"	19760715 ～ 19760801	82	学術目的調査						
						19780717 ～ 19780807	47							
						19790224 ～ 19790513	93							
												19830820 ～ 19830923	145	範囲確認調査
												19850930 ～ 19851026	109	
												19860930 ～ 19861031	87	
												19890823 ～ 19890905	10	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項									
楯築墳丘墓	墓	弥生時代 後期	墳丘、突出部、木槨、木棺、排水溝、墳丘内列石、列石、立石、大柱遺構、木柱	特殊器台、特殊壺、家形土器、人形土製品、土製玉類、勾玉、管玉、鉄剣、弧帯文石	埋葬施設、出土遺物ともに類例がほとんどないものを含む。葬送儀礼の過程が明らかになった。									
要約	<p>史跡。弥生時代後期後葉に築かれた大形の墳丘墓。直径 49 m の円丘部の両端に突出部を設ける墳形で、推定全長 83 m である。墳丘の斜面には 2 重の列石を構築し、その間には円礫を敷く。墳頂部には 6 基の立石と大柱遺構、木柱、建物を設ける。また、墳頂全体に円礫を敷く。円丘部の中央に設けられる中心埋葬は石組排水溝を伴う木槨・木棺で、玉類、鉄剣を副葬する。中心埋葬上に形成された円礫堆からは弧帯文石や土製玉類、人形土製品、特殊器台をはじめとする多量の土器など葬送の祭祀に用いられた多量の遺物が出土した。土器類は特殊器台のほか特殊壺、長頸壺、家形土器、高杯などからなり、墳頂平坦面や墳丘斜面にも配置される。埋葬施設は中心主体以外に墳頂部に設けられた第 2 主体があるほか、南西突出部にも設けられたと判断できた。発掘調査によって、墳丘墓の構造、また、そこでなされた祭祀の一端を明らかにすることができた。前方後円墳の成立を考えるうえで、きわめて重要な遺跡である。</p>													

楯築墳丘墓

2021年12月発行

発行：岡山大学文明動態学研究所

岡山大学考古学研究室

〒700-8530 岡山市北区津島3丁目1番1号

印刷：株式会社中野コロタイプ

〒701-2142 岡山県岡山市北区玉柏390



